
鉄の調律者

鐘ノ音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鉄の調律者

【コード】

N7266M

【作者名】

鐘ノ音

【あらすじ】

俺達はデュエルアカデミアを卒業した。

そして十代との旅の途中で知った日本での神隠し事件。

調査を始めようとした時に現われた謎の女、八雲紫。

俺は在学時に発現した能力のせいで、その女に『幻想郷』と呼ばれる世界に無理矢理連れ去られる事に。

*この作品は作者の書いている遊戯王GXの鉄の意地っの設定で本編終了後、もしもの未来の話として書いています。
初投稿ではないですが見守ってください。
不定期更新です。

序章（前書き）

向こうで書いたのを新規でちまちまと書いていきます。
デュエル有り、ご都合主義あり、キャラ崩壊有り、日常メイン。

序章

俺達は様々な、毎年起こる恒例行事の世界の危機を乗り越えてアカデミアを卒業した。

そして何故か過去の遊戯さんと十代のデュエルに巻き込まれたりもした。

神のカードを拝むことが出来たのはよかったなあ。

みんなにしばらくは俺の家にいる事を伝え、十代と共に一足先にアカデミアから去った。

半年後。

「いらつしゃいませー！って恭司か」

笑顔で出迎えたが恭司だと分かり拍子抜けしていた。

十代は現在喫茶店でアルバイトをしている。

先立つものは金、旅に出るのにも資金は必要だと話し合った結果だったりする。

鉄家で居候をしつつ、二人で手分けして資金稼ぎをしていた。

「なんだってなんだよ。今日も優勝出来たから賞金もたんまりだ」
恭司はアマプロ問わずの大会に出場し賞金稼ぎと魅せるデュエルを繰り広げている。

お陰でかなり有名な凄腕アマチュアデュエリストとしてファンもそれなりにいたりする。

他にも日雇いのバイトもしているので働いていないわけではない。

「プロへのスカウトがたくさん来たんじゃないか？ 翔が話も聞いてもらえないッス！ って嘆いてたぜ」

十代がコーヒーを淹れながら話しかけてくる。

最近はお茶店のマスターも十代に任せて仕入れに飛び回っている事が多い。

「スカウトは鬱陶しかったな。翔に関しては単に面倒だから避けている。そろそろ旅する資金も余裕が出来るくらいに貯まったんじゃないか？」

通帳を見てみると、既にかなりの額が確認できる。

「来週でこのバイト終わりだからちよっどいいな。アカデミアを卒業してから大体半年くらいかー」

十代がしみじみと頷いている。

「何日前の大会か忘れたけど、エドが参加してたぜ。決勝で俺と当たってかなり動揺してたけど」

コーヒーを受け取り、思い出したように教えている。

相手のターンにバトルマニアを発動し、さらにDragon D
- ENDの効果のエフェクト・ヴェーラーで無効化。

スクラップ・ツイン・ドラゴンとDragon D - ENDを相
討ちにさせた。

そしてスクラップ・ゴーレムを蘇生させ、次のターンでさらなるシンク口召喚を行い決着を着けている。

エドも久々の恭司とのデュエルが楽しかったのか負けても晴れやかな笑顔だった。

「楽しかったか？」

コーヒーを恭司の前に置いた。

十代と恭司は毎日デュエルをして腕を磨いているので、並のプロジェクトの二人には勝てない。

「ああ。久々に楽しかったな」

コーヒーを飲んで楽しく語っている。

そしてお金も貯まり、国内の旅に出る二人。

「清水の舞台から飛び降りるとか言うが、高すぎるなこれ」
そーっと覗き込んでいるが、目が眩むような高さだった。

「何だか恭司なら落ちても平気な気がするぜ」
清水寺にて。

「よつしや5連勝だ！ 無料だよな？」
デュエルディスクを待機状態に戻している。

「ちくしょー！ 強いな兄ちゃん達！ 食べ食べ！」
海辺の定食屋でのデュエル。

「モヤモヤスポット、てかここ東京だぞ」
東京に戻ってきている。

「北赤羽に来てみたかったんだよな」
二人でわくわくしながら散策し始めた。

そして新しい旅先

「この町は温泉あるんだな。おっと甘味処があるじゃないか。入ろうぜ十代」

急に甘い物を摂取したくなって急かしている。

「いいな。あんみつか」
十代も乗り気だった。

わいわいと楽しそうに二人で入っていた。

観光に近い国内の旅の途中、旅先で増えていると気づいた神隠しの事件についての調査。

この話は、昔に発現した外の世界では強力な能力のせいで帰れなくなった一人の決闘者の話である。

続く。

序章（後書き）

気分転換に書いていた幻想入りもの。

向こうでは出来ないから、まったりとハーレムチックに書いていきます。

卒業後、旅の途中。（前書き）

あつちで書いたのを加筆修正しました。

気分転換に書いていく。

キャラ崩壊等々。

これ以降、遊戯王キャラは多分出ないです。

卒業後、旅の途中。

俺、鉄恭司は絶賛逃亡中である。
何故なら

「ヒサシブリノニンゲン！ ゴチソウ！」

喋れる怪物に追い掛けられているからである。
事の発端はこんな事があつたからだ。

ある旅先の甘味処。

「なあ、十代。最近ニュースでやってる神隠しってさ、もしかしたら精霊界へ迷い込んでるんじゃないか？」
気分伊達眼鏡を掛け、新聞を読んでいる。

あんみつを頼み、ここ最近多発している神隠し事件について十代の意見を聞いてみた。

「確かにその可能性はありそうだな。恭司、少し調べてみようぜ」
頼杖について待っていた十代が生き生きと答えてくる。

注文したあんみつを食べ、支払いを済ませてから店を出た。

店の外

「さて、恭司どう調べるんだ？」
町を散策しながらどうするかと尋ねてくる。

周囲の目を惹く容姿の二人。
加えて恭司はそこらのプロ以上の強さを誇るアマチュアデュエリス
トとして最近少し有名になっている。

「図書館のパソコン使わせてもらおうぜ。まずはネットで神隠し事
件について詳しく調べて対策を考えないといけない」
町の地図を探して歩き始めた。

途中親切なおばさんに図書館の場所を教えてもらい、礼を言ってそ
のまま向かった。

図書館。

「……ダメだ全部状況がバラバラだ。ただ不思議なのはカードを所
持してない人、密室で靴に携帯に部屋の鍵もそのまま消えてる人
がいることだな」
許可を得て、パソコンを借りて調べている。
神隠しに凄い違和感があった。

「消えた状況が全部バラバラってのがおかしいよな。うーん、実際
に確認しに行かないと分からないか……恭司、行くのか？」
同じようにディスプレイを覗き込み悩んでいた。

エンシエント・フェアリーに力を借りれば、恭司は精霊界を行き来できる。

ちやっかりと専用の家まで建ててもらっていたりするから侮れない。

「ああ、そうする。ここらの旅館は安く泊まれるみたいだし、早めに宿決めて迷い込んでいないか見てくるわ」
職員に礼を言い、近場の旅館を教えてもらって立ち去った。

旅館

「いやー、露天風呂はよかったな十代。アカデミアを思い出さずぜ」
ホカホカでニコニコしている。

思っていたよりも安く、いい部屋に泊まれて大満足なようだ。

「飯も旨かったなー」
十代も満足したようで、腹を撫でている。

フアラオは体調不良で今は恭司の家で療養中。
おいしいご飯を貰い、さらに丸くなっていそうだった。

「さて、そろそろ……って、何だあれ？」
荷物を手に持ち精霊界に行こうと思った時、窓の外に妙な物を見つけてしまった。

なんだ？と十代も一緒になって見ている。

「空間が裂けてるのか？ リボンが付いてるな」

十代の言う通りで、裂けた空間にリボンが付いている。その空間からたくさん目の見えて気持ち悪かった。

「あれはスキマですわ」

いつのまにか裂けていた空間が消え、二人の背後から女性の美しい声が聞こえてきた。

ゾクツとした感覚に十代は横に飛び込むように避け、恭司は振り向き様に裏拳を放った。

「あら、いきなり酷い殿方ですわ。お迎えに上がりました、鉄恭司様」

しかし確かに存在していたはずの者が背後にはおらず、さらにその背後から声が聞こえ勢い良く振り向いた。

その振り向いた先には胡散臭い笑顔をした金髪の美女が裂けた空間から身を乗り出していた。

「お前は誰だ」

かなり警戒しているが、こちらが補食される側だと思える存在に冷や汗が背を伝う。

「ふふふ、私は八雲紫ですわ」
胡散臭い笑顔と恭司に送るやけに熱い視線が気に掛かる。

「ネオス！」

恭司の意図を読み、隙を窺っていた十代がネオスを実体化させて紫に襲い掛かった。

攻撃力ならネオスが勝っているはずだが……。

「まあ、野蛮な殿方。鉄恭司、貴方のような能力を持った方は『幻想郷』へ連れて行きます」
当たる瞬間にスキマに隠れ、また違うスキマから現われる。

どうやら相手の不思議な能力の前には力の強さはあまり意味がなかった。

十代とネオスが翻弄されていると、スツと恭司の足元にスキマが開いた。

「なっ!？」

急な浮遊感。

予想外の事に何も出来ない。

「恭司！」

十代が手を掴もうとしたが手遅れでスキマに消えていってしまった。

「ふふふ、面白い事になるかもしれないわね」

嬉しそうにニヤニヤしている。

ずっと狙っていた者をこんなにもうまく手に入れられたので上機嫌。そして目の前で雰囲気を変えた十代をチラッと見た。

「早く恭司を返せ！ 神隠しの原因はお前か！」

目の色が左右で変わっていて、いつのまにかネオスがフレアネオスになっている。

「返す……？ 貴方は愚かね。貴方達が過ごした三年間で彼は私達側の存在になっちゃった。だから拒否しますわ」

そう言いフレアネオスの攻撃を避けてスキマに消えていった。

我に返った十代はすぐに携帯で恭司の家族と連絡を取り始めた。

謎の場所

「くっ！ あの女、次会ったら容赦しないからな！」

微妙な高さから落とされたが、着地成功。

本能的に勝てないと分かっているにもかかわらず吐いてしまう。

「あら、酷い。あの女、じゃなくてゆかりんって呼んで？」

そして当人が少し高めの位置にスキマを開き現われた。

何故か分からないが胡散臭さのない笑顔を恭司に向けていて、恭司は少しドキッとしている。

「……ゆかりん。ここはどこなんだ」
あえて言われた通りに呼んでいるが、いきなり拉致されてピリピリしている。

「幻想郷はすべてを受け入れるのよ。それはそれは残酷な話ですわ」
その後詳しく説明され、もう帰れないし返す事は出来ないと言われ
反発。
必死に制止する声を無視し恭司は行ってしまった。

これが今に到る状況だった。

「くっ！ とにかく今は逃げ切らないと！」
荷物は絶対に手放せない、と抱えて全力疾走。

人間離れた身体能力があっても進んで戦おうとしないのは、本能的に嫌な予感しかしないから。

「ニゲルナニンゲン！ クワセロ！」
嬉々として追ってきている。

溢れ出る涎と久しぶりの餌に目が爛々と輝き、その牙の鋭さは軽く肉を貫けそうだった。

「食われてたまるかあ！」
付かず離れずの距離で逃げ続けている。

「……………神社か！」

しばらく逃げていていると神社の裏手が見え、その敷地内に駆け込んだ。

建物を使い、止むを得ず戦うつもりで身構えた。

だが境界があつて入ってこれないのかしばらくうろついて残念そうに去っていった。

「後は帰る方法だけだな……」

賽銭箱の前で荷物をおろして座り込み、ペットボトルのお茶を取出して飲んでいる。

「貴方、参拝者？」

お茶を飲んでいると、いきなり背後から面倒そうな感じの声が聞こえてきた。

「……………」

ゆっくりと振り返っている。

「あら、その服って……………外来人かしら？　すぐに外に送り返してあげるから少し待ってなさい」

そこには腋が見えている巫女服の少女がいた。

きつとりボン萌えな恭司は頭のリボンに目を奪われる……

「ほ、本当か！」

事はなく帰還の方法が見つかってテンションが上がっていた。

慌てて立ち上がり、手を掴んで確認している。

相手が驚いていても気にしていられない。

「ど、どうしたのよ。とりあえず落ち着いて」

掴まれた手を放させて落ち着かせようとしている。

「霊夢、ダメよ。彼も能力を持っているの。彼の能力は危険だし、外に戻すわけにはいかないわ。ほら、ちょうどいいからやってみて」
紫がまたスキマから出てきて、蝶が飛んでいるのを見て能力を使えと言ってくる。

「……………これでいいか？」

いつのまにか持っていたカードに飛んでいた蝶を封印。

「まだよ」

知ってるんだからという態度で恭司を見ている。

「……………これでいいだろ」

蝶を封印から解き放つと、蝶は困惑したように右往左往しながら飛んでいった。

「……………確かにそんな能力を持っている人を外に送り返すわけにはいかないわね」

あらゆるものをカードに封印、解放する程度の能力。
この世界でならまだまだ能力を成長させる要素が多々ある。

「で、何で今なんだよ。あの能力が発現したのって、かなり前だぞ」
縁側に腰掛け、霊夢が入れてくれたお茶を飲みながら冷静に話を聞いている。

「……それはもういいでしょ。貴方はもう幻想郷の一員なの」
同じくお茶を飲みながら妙に嬉しそうに言っている。
何かやたら距離が近い。

「貴方も災難だったわね」
お茶を飲んでいる腋巫女。
可哀想にと興味なさそうに言っている。

「異世界は精霊界だけで満腹だ。……そういえば賽銭って外の金で
もいいのか？」
財布を取り出して霊夢に尋ねてみると、突然霊夢の動きが止まった。

「あ、お煎餅食べる？ 今持ってくるわね」
そして急につきつきとし、煎餅を取りに行った。

「ふふふふ、これからどんな事が起こるのかしらね」
嬉しそうに距離を縮めてきている。

綺麗な女性でいい匂いがするからか、恭司に若干の心の乱れが感じられる。

よく見ると超美人だったのも影響しているかも。

基本女性には弱いし。

「……十代、早く助けに来てくれないかな
なんてこったいと頭を抱えている。」

「まあ、日も暮れるし今日は泊まっていきなさい。明日は人里に連れていってあげるから」

煎餅を持って帰ってきた霊夢にそう言われた。

「博麗さん、出来ればたまにデュエルがしたいんだが
デュエルディスクを持ち上げて見せている。」

「霊夢でいいわ。その前にでゅえるって何よ」
不思議そうな顔をしており、色々説明しているがなかなか理解してもらえない。

「それなら私がお相手するわ。これでも自信があるのよ」
いつのまにかぴったりくつついていた紫がようやく発言した。

くつつかれても無視していたのが効いたのかもしれない。

「それはそれで嫌な予感しかしないんだが」
とりあえず霊夢に何枚かカードを見せ、その間に煎餅をいただいている。

「早速やりましょう？ 相手が藍しかいなくてつまらなかったのよ」

いつのまにかデュエルディスクを付けていた。

サイズを合わせていないのか少し大きめですれたりしている。

「ちょっと紫、神社を壊さないでよね」

デュエルが何か分からないから不安そうだった。

「霊夢、大丈夫だ。まずちゃんと稼働するかが問題だから
そう言い、境内の広い場所で紫と対峙した。」

「うわ、普通に動いてる。どうなってるんだよ」

びっくりしながらデュエルディスクを確かめている。
ソリッドヴィジョンもしっかりと。

「私、がんばったのよ」

えっへんと胸を反らし、大きな胸を揺らした。

「……いいものをお持ちで」

ちよつど見てしまい顔が赤くなっている。

「ウブね」

ニヤニヤして反応を楽しんでいた。

どうやら計算済みの行動だったらしい。

「うっさい！ さっさと始めるぞー！」

まだ顔が赤く、目が泳いでいる。

「うふふふ」

凄くいいオモチャを見つけたような笑顔で微笑んでいる。

「デュエル！」

「私からね、ドロ！。手札からガーディアン・エアトスを特殊召喚」

ATK2500

「エアトス……」

精霊の宿っていないエアトス。

「さらにもう一枚エアトスを特殊召喚。永続魔法、次元の裂け目を発動。カードを二枚セットしてターンエンドよ」

ガーディアン・エアトス×2

ATK2500

「俺のターン、ドロ！ 手札から魔法カード、大嵐を発動。場の魔法・罫を全て破壊させてもらう」
暴風が場に存在する魔法と罫を全て吹き飛ばそうと紫の場に吹き荒れ始めた。

「いやん、ダメよ。カウンター罫オープン、魔宮の賄賂。大嵐を無効にする代わりに、一枚ドロしてもらうわ」

しかし読めていたとばかりに無効化されてしまった。

「くっ……。サイクロンを発動、さらにサイクロンの発動にチェー
ンしてダブル・サイクロンを発動！ サイクロンで次元の裂け目、
ダブル・サイクロンで俺の場のサイクロンとそちらの場の伏せカ
ードを破壊させてもらう！」

三つの竜巻がそれぞれ指定されたカードを破壊していった。

「きゃあっ！」

伏せられていた奈落の落とし穴と次元の裂け目を破壊。

サイクロンの衝撃でスカートがひらっとしている。

「ま、魔法カード調律を発動。デッキからクイック・シンクロンを
手札に加え、デッキトップから一枚墓地に送る」
それを見て少し動揺していた。

デッキトップから落ちたのはお馴染みのチューニング・サポーター。

「……………」

何か品定めをするような目で見ている。

「手札からジャンク・シンクロンを召喚し、墓地のチューニング・
サポーターを特殊召喚。そして速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動！」
場に三体のチューニング・サポーターが揃った。

「エアトスをデッキから攻撃表示で特殊召喚ね」

ガーディアン・エアトス×3

ATK2500

「手札のボルト・ヘッジホッグを捨てクイック・シンクロンを特殊召喚する。レベル1チューニング・サポーターとレベル2チューニング・サポーターにレベル5クイック・シンクロンをチューニング！」
五つの光の輪が2体のモンスターを星に変えていく。

「集いし希望が新たな地平へ誘う。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 駆け抜ける、ロード・ウォリアー！」
カツ！と星が輝き、ロード・ウォリアーが姿を現わした。

ATK3000

「攻撃力3000ね…」
観察している。

「チューニング・サポーターの効果によりカードを二枚ドロ。さらにレベル1チューニング・サポーターにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！ シンクロ召喚！ 来い、アームズ・エイド！」

ATK1800

「またドローするのね」

「ああ、そしてアームズ・エイドをロード・ウォリアーに装備。アームズ・エイドを装備したモンスターの攻撃力は1000ポイントアップする!」

ロード・ウォリアーの腕にアームズ・エイドが装着した。

ATK3000 ATK4000

「ふふふ」

凄じ楽しそうにデュエルをする恭司に胡散臭さのない笑顔を向けている。

「ロード・ウォリアーでガーディアン・エアトスを攻撃! ライトニング・クロー!」

「くうっ!」

LP4000 LP2500

「にアームズ・エイドを装備したモンスターがモンスターを破壊し、墓地に送った時さらにそのモンスターの攻撃力分のダメージを与える」

フィニッシュの宣言をした。

「えっ、嘘!? きゃああああっ!?!」
光の腕が動揺している紫を叩き潰した。

LP2500 LPO

「楽しいデュエルだったぜ!」
凄く楽しそうだった。

「あー、びっくりしたわ」
叩き潰された衝撃に怯み、座り込んでいる。

「恭司さんって凄いのね」
勝つとは思っていなかったのか、びっくりした顔で霊夢が近づいてきた。

「呼び捨てでいいよ。これでも外じゃプロに誘われてたくらいだからな」
エドとか翔に凄く誘われていた。

紫に手を差し出して立ち上がらせている。

「ありがとう、恭司。それじゃあ、私は帰るわね。後は任せるわよ」
スキマに入っていこうとしたが、恭司が紫の腕を掴んで引き止めた。

「待った。それちょっと貸してみな」
デュエルディスクを指差している。

「え？いいけど……」

手渡してくれたので、縁側に向かいまた三人で腰掛けた。

「ちよつと失礼。遊星よりは劣るけど」

この時代で整備等様々な事をかなり学んだ為、互角くらいの腕前にはなっている。

「あ……」

紫の腕に触れて大体のサイズを測り、デュエルディスクを専用にかスタマイズしていく。

紫もウブなようで腕に触れられて頬が赤くなっていた。

そして恭司の手際の良さに二人は目を丸くして見ている。

「ほい、出来た。ゆかりん専用のデュエルディスクだ」

サイズを合わせ、汚れも拭き取りぴかぴかになったデュエルディスクを手渡した。

「……ありがとう、凄く嬉しいわ」

目がキラキラしている。

その紫を見て霊夢がドン引き。

ニコニコしたままスキマに入り帰っていった。

霊夢はそんな恭司に一目置く事にしたようだ。

深夜。

「夜は妖怪が跋扈するから神社から出ないように、か」
借りた部屋で荷物を確認している。
着替えはたくさん入っているようだ。

「しかし十代は来てくれるんだろうか」
確認を終え、デュエルディスクのメンテナンスをしている。

十代は、外の世界でかつての仲間達に協力を要請して必死に探してくれている。

しばらくして布団を敷き、横になった。
疲れていたからすぐに深い眠りに誘われた。

翌日の朝。

「今日は人里に連れていくから」
朝食を二人で食べながら話をしている。

たまに恭司が目を離すと、食べていたおかずがスキマから出てきた手によって消えていく。

「人里でどうすればいいんだ？ おっ、うまいな。霊夢はいい嫁さんになるぜ」
味噌汁を飲み、霊夢に尋ねた。
さらっと褒める事も忘れない。

「ありがと。とにかく行けば分かるわ」
説明が面倒になったのかスルー。

今日はおかずが取られないわ、とやけにご機嫌だった。

境内

「うおっ！ これ、どうなってるんだ！」

霊夢に掴まれ浮いている。

空を飛んでいる事にパニック状態。

「騒がしいわね。とにかく行くわよ」

そのまま人里まで飛んでいく。

騒ぎすぎてかなりの高さに連れていかれ静かになっていたりする。

「霊夢！ あれってトト じゃないか！？ 実在してたのかよ！」

連れてきてもらってよかったー！」

隠せていないような気もするが、でかいのを見かけて興奮。

いつか会いたいと思っていたから感動している。

「帰りがついていたのが嘘みたいだわ」

子供みたいに騒ぐ恭司に呆れているが、自分達の幻想郷を気に入ってもらえて悪い気はしなかった。

人里。

昔の日本に来たような物珍しさも手伝い、うきうきと散策している。途中で霊夢と別れ散策を始めたようだ。

「今のは三沢か!？」

ここにいたからアカデミアで見かけなかったのではないかと思いい掛けた。

実際はあの時ヘルカイザー達と一緒に帰ってきている。

「ダメだ、見失った……」

そして散策に戻っていたら

「はあ……。いや、でもですね」

妙な帽子を頭に乗せた女性に捕まっていた。

「君は外人だろう？ 住む家を探していると見たから知っているぞ」

何故知っているのか不思議で仕方ない。

「まあ、そうですね。だからって上白沢さんの所で世話になるのは悪いというか」

既に挨拶は済ませている。

今日行う家探しの事や恭司の写真が文々。新聞に掲載されていて広

まっていたりする。

デュエルは写真があってもよくわかっていないので掲載できていない。

「恭司は家を借りれるまでは住む場所がないだろう？ それにただ居候させるわけじゃない。寺子屋の仕事を手伝ってもらいたいんだ」
ギブアンドテイク。
既に呼び捨てにされている。

「……確かにそうですね。わかりました、お世話になります」
納得して了承した。

卒業後の恭司のステータス。

勇気 豪傑

根気 タフガイ

知識 生き字引

寛容さ オカン級

伝達力 言霊使い

「そう、助かるよ！ それと同僚になるのだから私の事は上白沢で

はなく、慧音と呼んでほしい」
手を握りぶんぶん振っている。

「分かりました、分かりましたけど、そのですね慧音さん
されるがまま手が上下に。」

周りの人達も何事かと見ている。

恭司のしばらくの拠点が決まった。

その姿をどこからか見ている黒い羽の少女。
遭遇する日も近い。

次回に続く。

卒業後、旅の途中。(後書き)

今はこっちのが楽しく書ける。

今のところデュエルが出来る相手を考えると紫、藍様、輝夜の三人だけです。

決闘者、外来人と決闘（前書き）

本編でちよくちよく力を貸し与えられたり、借りたりした副作用。

決闘者、外来人と決闘

あの後、霊夢を探し一時的に住む場所を見つけたことを伝え、慧音さんの家に向かう事になった。隣を歩きながら色々と説明してくれている慧音さん。頭の上の帽子が気になって仕方ないです。

「ここが私の家だ。部屋には空きがあるからそこを使ってくれ」
大きく立派な家の前でそう言われた。

「お、お邪魔します…」
そう言い、上がるうとしたらとおせんぼされてしまった。

「違うだろうか？ ただいま、だ。今日からしばらくはここが恭司の家になるんだぞ？」
とても優しく接してくれている。
不安にならないように配慮してくれているようだ。

「あー、うん。ただいま、慧音さん」
優しさに嬉しくなっている。
恥ずかしそうに微笑みながら、ただいまと言った。

「ああ、おかえり恭司」
慧音自身、ここまで世話を焼きたくなる恭司の存在を不思議に感じている。

今後彼女も恭司の紡ぎ続ける大切な絆の一つになる。

「優しくて厳しい、乙女姉さんみたいな人だな慧音さんって」
部屋に荷物を置き、色々と並べている。

置かれていたテーブルの上にアカデミアの卒業式の時にみんなで撮った写真を飾っている。

肩を組んだ恭司と十代を真ん中に皆が囲むように映っている。

懐かしさに浸っていると、不意に背後に気配を感じて振り返った。

「あやや、驚かせようとしたんですがバレちゃいましたか」
黒い羽を持ち山伏のような格好の女の子がいた。
カメラを持っている。

「B F」

思わず口走った。

「ブラックフェザー？」
不思議そうにしている。

「あ、いや。ところで君は？」
いきなり現われた女の子に聞いている。

「あっ、申し遅れました！ 私は射命丸文と申します！ こう見え

ても新聞記者なんですよ」
そう言い、今日の新聞も渡してきた。

「ああ、これはどうも」
普通に受け取った。

「それですね、外人で能力者の貴方の事を取材させて欲しいのですが」
手帳とペンを取り出ししている。

なんだか拒否できない空気だった。

「まあ、いいですけど」
文も慧音の許可をとってここまで来ている。
別にいいかと取材を受ける事に。

「それじゃあ早速」
好きな食物、ここに来た原因は、何故居候するのか、このカードは何なのか、外の世界について等々根掘り葉掘り聞かれた。

「それじゃあ、能力を見せてください！」
カメラを構えて期待した目でこちらを見ている。

「対象がないから使えないよ。だから今度……って何するんだよ！」
説明されてはいたが、室内での通常弾幕に焦り間髪入れずに封印した。

「あややや！凄いですね、本当に出来るんですか！」
普通に驚いている。

「くっ、外だったら！」
目が真っ赤になっている。

「能力を使う時に目が赤くなるんですね」
何回か赤き竜の力を借りている内に何故かこうなってしまった。
それからも質問に答え続けた。

「ありがとうございました！ 新聞が出来たらすぐにお届けします
ね！」
あっという間に去っていった。

「新聞って……これは」
さつき貰ったのを見ている。

取材を受けていないのに自分の記事が載っていて驚いた。

「慧音さん、さつき来た射命丸さんって」
整理を終えてから聞きに向かった。

「明日の一面は恭司にすると書いていたな。まあ、これも新参者の

運命だと思つて我慢するんだ」
夕飯を作っている。

「すつごい嫌な予感がするんですが……」
隣に並び自然に手伝い始めた。

深夜

「……………」
デュエルディスクを一度バラしている。

「……………」
何故か慧音が部屋に来ていてその姿をじっと見ている。

「あ、あのどうかしました？」
あまりに見られすぎて集中力が途切れた。
綺麗な人と二人きりなのも集中できない原因の一つ。

「いや、恭司が持っているこれに興味があつてね」
カードを見ている。

「あ、それじゃあ今度やつてみますか？」
デュエルに興味を持ってもらい嬉しそう。

「そうだな……それより、もう寝た方がいいぞ。明日は早いからな」
立ち上がり部屋から出ていった。

そして布団を敷き横になった。
今日も疲れていたのでぐっすり眠れたようだ。

翌朝

届けられていた新聞を見て、昨日に続いてまた驚いた。

『新たな外来人、謎の能力に迫る』

先日、八雲紫氏により連れられてきた外来人にインタビューを行った。

彼の話聞いた所、彼は外の世界で神隠しについて調べ精霊界と呼ばれる場所に行こうとした時に連れ去られて来たそうだ。

彼の名前は鉄恭司。

能力は札に封印、解放する程度の能力。

記者が突然放った弾幕をあっさりと封印した時は驚愕を隠せなかった。

性格は明るくお人好しで、記者の突然のインタビューにも快く応じてくれた。

しばらくは人里の上白沢宅に居候し寺子屋の手伝いをするらしく、興味のある方は行ってみるといいだろう。

彼は常に40枚以上の札を持ち歩き、デュエルと言う行為で勝敗を決めるらしい。

先日の記事には載せられなかったが八雲紫氏とのデュエルで完勝した写真も存在する。

文「外から来て寂しくないですか？」

恭「寂しいですよ。デュエルも出来ないし、仲間もいないんですから」

文「デュエルとはなんですか？」

恭「デュエルとは四十枚以上のカードをデッキとし、モンスター・魔法・罫等を駆使して勝負をすることです。外の世界じゃデュエルをする人の事をデュエリストと呼びます」

文「そうなんですか。何故、上白沢さんの家に居候されてるんですか？」

恭「家を借りるまで、寺子屋の手伝いをする代わりに居候させてもらうことになったんですよ」

文「若い男女が一つ屋根の下ですか」

恭「慧音さんは姉みたいで頼りにしてます」

文「ずれてますねえ。もしこの記事を見て誰か訪ねてきたらどうしますか？」

恭「持て成したいですけど、居候だから大したことは出来ないかな。お茶のストックにも限りがあるし。はい」

文「あやや！凄く便利ですね、いただきます」

恭「便利な分疲れるんですよ。使いすぎると意識なくなりますし」

「…………あの会話に写真までしっかり載せるのかよ」「頭を抱えた。

「まあ、大丈夫だろう。能力持ちの外来人なら稀に来るから珍しくはないさ」

朝ご飯の準備をしている。

「で、そちらの方は？」

「…………」

めっちゃ警戒している頭等にリボンを付けたもんぺ姿の女性。新聞を見て慧音が心配になり来ている。

「ああ、気にしないでくれ。もう少し慣れたら紹介しよう」料理を続けている。

「いや、凄く気まずいんですが……。めっちゃ見られてますって」凄く見られている。

気まずいまま朝食を終わらせ、三人で家を出た。

「…………じゃあ、慧音また今夜」途中で別れていった。

「俺、なんかしました？」かなり気まずかった。

「いや」

仲良くなるには時間がかかる。

寺子屋

「恭司センサー！ここ解らないです」
あっさりと馴染み、子供達から質問の嵐。

「ああ、そこは」
生き字引で言霊使いの恭司の教え方は、慧音も驚くくらいに解りやすい。

時々入る経験談も面白く、子供達も楽しく学べている。

昼。

今日は昼までで終わりらしく、生徒が帰ってから二人で帰っていく。

「まさかここまで教え方が上手いとは嬉しい誤算だな」
若いのに凄いと感心している。

「自分でも不気味なくらいです」
そんな会話をしながら歩いている。
すれ違う人にチラチラと見られている。

「……新聞見た人でしょうか」
やたら見られて落ち着かない。

「きっとそうだろう。ほら」
慧音の家の前に最近迷い込み、人里まで来て滞在している外来人が何人かいる。

「あつ！ 鉄さんよ！」

何人か恭司に気づいた。

「すげえ！ 本物だよ！」

「さ、サインを！」

「ええっ！ あのエド・フェニックスにも勝ってるの！？」

「あれが調律者……」

デュエリスト数名とレアなファン数名。

「男女問わず人気があるんだな」

「喜ぶべきなんじゃないかね」

他のデュエリストがシンクロを扱えるのはまだまだ先の話。

「お、お願いします！ 私とデュエルしてください！ 帰る前の記念に是非！」

一人の女性が近づいてきた。

数日後に外に帰れるらしく、記念にどうしてもデュエルがしたいらしい。

「おつ、いいのか？ やるやる！」
デュエルと聞いてやる気が溢れだした。

「一気にギヤラリーが増えたな」
外人人が何かすると人里の人達も集まっている。

「よ、よろしくお願いします！」
デュエルディスクを構えた。

「楽しいデュエルにしようぜ！」
デュエルディスクを構えた。

「デュエル！」

「私が先行をもらいます！ ドロー！ モンスターをセットしてターンエンドです！」

「俺のターン、ドロー！ こちらの場にモンスターが存在せず、相手の場にモンスターが存在する時手札のサイバー・ドラゴンを特殊召喚する事が出来る。さらに手札のシンクロ・フュージョニストを墓地に送りクイック・シンクロンを特殊召喚」

サイバー・ドラゴン

ATK2100

クイック・シンクロン

ATK700

「2、2枚もモンスターを……」
その展開力に驚いている。

「いや、まだだぜ。手札のジャンク・シンクロンを召喚、ジャンク・シンクロンの効果により墓地のシンクロ・フュージョニストを守備表示で自分フィールド上に特殊召喚する。レベル2シンクロ・フュージョニストとレベル5クイック・シンクロンをチューニング!」
クイック・シンクロンが五つの光の輪となりシンクロ・フュージョニストを包み込んだ。

「テレビで見るのとは迫力が段違いだ……」

「私、あの前口上全部覚えてるわ」

「俺も」

「集いし思いがここに新たな力となる。光差す道となれ! シンクロ召喚! 燃え上げれ、二トロ・ウォリアー!」

ATK2800

悪魔のような見た目のモンスターに里の人は驚いている。

「わわわ……」

対戦相手も強力なシンクロモンスターに驚いている。

「シンクロ・フュージョニストの効果によりデッキからミラクルシンクロフュージョンを手札に加える。レベル5サイバー・ドラゴンにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」
三つの輪がサイバー・ドラゴンを包み五つの星に変えていく。

「ま、またシンクロ召喚!？」

「すげえ……。こんな特等席で見れるなんて」

「ミラクルシンクロフュージョン……?」

「集いし願いが新たに輝く星となる。光差す道となれ! シンクロ召喚! 飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン!」

ATK2500

美しい白銀のドラゴンが現われ、里の人達もそれに見惚れ落ち着いてきた。

「魔法カード、ミラクルシンクロフュージョンを発動。自分フィールド上のドラゴン族のシンクロモンスターであるスターダスト・ド

ラゴンと墓地の戦士族であるジャンク・シンクロンを除外し、融合召喚！ 現われる！ 波動竜騎士ドラゴエクイテス！」

ATK3200

スターダスト・ドラゴンとジャンク・シンクロンが混ざり合い、ジャベリンを構えた竜騎士がその姿を現わした。

「えええっ！ 融合モンスターも使うなんて私聞いてない！」

「ドラゴエクイテスでセットモンスターを攻撃！ スパイラル・ジャベリン！」

竜騎士がセットモンスターにジャベリンを投げつけた。

「きゃあっ！ でもジャイアントウィルスが戦闘によって墓地へ送られた時、相手に500ポイントのダメージを与えます！ さらにデッキからジャイアントウィルスをフィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができ、その後デッキをシャッフルします！」

ATK1000×2

「波動竜騎士ドラゴエクイテスの効果発動！ このカードがフィールド上に表側攻撃表示で存在する限り、相手のカードの効果によって発生する自分への効果ダメージは代わりに相手を受ける！ ウェーブ・フォース！」

両手から放たれる波動で相手にダメージを跳ね返している。

「きゃあぁっ！」

LP4000 LP3500

「手札からエネミーコントローラーを発動し、ジャイアントウィルス1体を守備表示に変更。ニトロ・ウォリアーで攻撃表示のジャイアントウィルスを攻撃する！ このターン、魔法カードを発動したことによりニトロ・ウォリアーの攻撃力は一度の戦闘分のみ1000ポイントアップする！ 行け、ニトロ・ウォリアー！ ダイナマイト・ナツクル！」

ATK2800 ATK3800

「いやあぁっ！」

LP3500 LP700

「さらにジャイアントウィルスによるダメージを再びドラゴエクイテスの効果により弾き返す！ ウェーブ・フォース！」
容赦なんて一切する気がなかった。

「きゃあぁぁっ！！」

LP700 LP200

「やっぱり俺達とはレベルっていうか次元が違うな」

「彼女は次のターンに挽回できるのかな？」

「いや、待て。まだ調律者のターンは続いている」

「二トロ・ウォリアーの効果発動。このカードの攻撃によって相手モンスターを破壊した場合、相手フィールド上に表側守備表示で存在するモンスター1体を攻撃表示にしてそのモンスターを続けて攻撃することができる。守備表示のジャイアントウィルスを変更！ダイナマイト・インパクト！」

「え？ え？」

ATK1000

「二トロ・ウォリアーで攻撃！ダイナマイト・ナックル！」
二トロ・ウォリアーがジャイアントウィルスを殴り壊した。

「きゃあああああつー！」

LP200 LPO

「うううっ、凄く強い。手も足も出なかった……」
座り込んでいる。

「これが今の俺の全力だ。はい、握手」
ディスクを待機状態に戻し、手を差し出して立たせてあげてから握手をした。

「やっぱりサインを！」

「あ、俺も！」

外来人はわいわいと騒いでいる。

サインした事がないので握手で満足してもらい、どうにか解散してもらった。

「……凄かったな」

「慧音さん？」

家に入ってからどこかうわの空。

それから昼食を取り、里長への挨拶を済ませ帰宅。

夕方に風呂を沸かす作業を教わり、四苦八苦しながら風呂を沸かした。

慧音に先に入ってもらい、ちょうどいい湯加減を模索。
その後に自分も風呂に入り、色々と考え事をしていた。

夕飯の時間。

「……………」

もんぺの女性が相も変わらずじーっと見てくる。

「うう……………」

それが気まずくて落ち着かない。

「まったく、二人で何をやっているんだ」

慧音が呆れながら料理を運んできている。

「は、初めまして」

恭司が覚悟を決め、思い切って挨拶をしている。

「……………」

しかしじーっと見てくるだけで反応してくれない。

「……………」

後ろを見たが何も無い。

「……………遊んでいるのなら手伝ってほしいんだが」

ジト目で慧音が見ていた。

「す、すいません」

手伝い始めた。

結局夜も気まずいままだった。
仲良くなるには何か切っ掛けが必要なのかもしれない。

部屋

「さて、明日は休みらしいけどどこかに出かけてみるべきかな。デユエルディスクのメンテナンスは完璧、これでD・ホイールがあれば楽なだけだ」
悩んでいる。
候補が頭に浮かんできた。

- 1、話に聞いた紅いお屋敷を見に行く。
- 2、魔法の森にある店に行ってみる。
- 3、博麗神社に礼を言いに行く。
- 4、竹林の焼鳥屋を探してみる。
- 5、山の上にある神社に里長さんに、時間がある時に行くよつと言われた参拝に行く。
- 6、慧音フラグを強化する為に自宅待機。

続く。

決闘者、外来人と決闘（後書き）

さてとサイコロ買ってきて振ろう。

もしくは要望次第で行き先決めて書きます。

ENDING No1 けーねともこたん(前書き)

紅魔館の話がうまく書けずに逃避して書いた。

こんな終わり方もありかな。

キヤラ崩壊は基本装備。

幻想郷に来てから数年後の話なのでデュエルはしなないです。

ENDING No1 けーねともこたん

恭司が幻想郷に来て数年。

様々な事があつたが今は平和に暮らしている。

デュエルも流行り、大会も開かれるようになってる。

「恭司、珍しい食べ物をもたらってきたぞ。生レバーの刺身だ」

慧音が夕食に奇妙なものを出してきた。

「それ、前に妹紅のところで食べたな。ところで妹紅は？」

敬語もなくなり、妹紅とも親しくなっている。

いつも食べに来ているのに今日はいないから不思議に思っで尋ねていた。

「……なんだ必要なかったのか。妹紅は風邪をひいているらしいからな」

「蓬莱人でも風邪をひくのか？」

慧音が妙に緊張しているのが気になったが、夕食をおいしくいただいた。

深夜。

恭司が部屋でまったりしていると、話し声が聞こえてきたので耳を

すまして聞いてみている。

『やっぱり慧音もだっただ』

『妹紅もそうだったんだ』

『うん……。これでずっと一緒にいられるから』

『ふふふ、楽しみだな』

「何かよくわからないが嫌な予感がする……」
二人分の足音が近づいてくる。

咄嗟に気配を消し、押し入れに隠れた。

その直後、何の断りもなく部屋に入ってくる慧音と妹紅。

「……感付かれたか？」

ハクタク化した慧音が部屋を見回して呟いている。

「ううん、まだ恭司の匂いは強いからいるよ。……そこだ」
押し入れを指を差し、殺すつもりで弾幕を放った。

「ぐあっ！……ぐっ……ごぼっ……」
避け切れず腹に大きく穴が空き、押し入れの襖ごと倒れこんで出てきた。

口からも血を吐きだし呼吸が出来ず、どう見ても助からない。

「恭司、心配しなくても大丈夫。恭司は私と同じになってるんだから」

妹紅が愛しそくに頭を抱え、虚ろになってきた恭司の目を見て話している。

「……恭司、すまない」

そう言いつつも嬉しそくに手を握り、もう片方の手で傷口に触れている。

「あぐっ！……っ……っ」

ちよっとした怪我がすぐ治ったりと不思議に思っていた事が理解できた。

永遠の命に絶望と、その決断をさせてしまった事を悲しく思いながら瞼をゆっくりと閉じた。

「恭司は初めて死ぬからちよっと時間が必要かも。えへへ、これで永遠に一緒に居られるんだね」
「リザレクシオンするのに時間がかかる。」

血が付いても関係ないと恭司の身体を抱き締めている。

「幸いにも今日は満月だ。私の能力で少し歴史を創らせてもらう」
恭司にその姿も可愛いと言われてからハクタク化する満月の日も家にいるようになっていた。

数週間後。

いつもと変わらない毎日。

ただ今までと違うのは……

「なあ、慧音。俺達っていつ結婚したんだっけ？」
左手の薬指にリングが光っている。

「恭司、まだ寝呆けているのか？ しっかりしてもらわないとな」
妹紅はしばらく慧音に譲って、来るべき日に備えて準備をしている。

「でも何かおかしい気がするんだよ……。それに俺みたいな蓬莱人と一緒にやってよかったのか？ 当時は慧音にもあんなに辛く当たったり、その、乱暴したりも……」
思い出せそうに思い出せない。

恭司には来てすぐ蓬莱の薬を誤って飲んでしまった記憶がある。
絶望し塞ぎ込み慧音に八つ当たりしたり、自棄になって押し倒した記憶もある。

全て作られた偽りの記憶。

「私は永遠を生きる決意をし、前向きになったお前をさらに好きになった。それにな、その、実は私はお前に一目惚れをしていたんだ。だからあれは双方の同意があった行為で……」
恥ずかしくなり、ぎゅっと抱きついている。

「……そうだったんだ。こんな俺を見捨てないでくれてありがとう、大好きだよ慧音」
抱きついている慧音の背に手を回して抱き締めた。

彼はもう人間ではない。

二人の女性に愛された末路。

記憶を捏造され、永遠を生きていく蓬萊の人の形。
でもこれはこれで幸せなのかもしれない。

おしまい。

ENDING No1 けーねともこたん（後書き）

BAD? END。

二人に色々と誤解させるような行動を取り続けた結果がこれ。

いつか思い出してしまっても、思い出していないフリをするでしょうね。

とりあえず紅魔館の話はがんばって書きます。

紅魔館、主人と従者と決闘者（前書き）

なんとか完成。

最初に渡されたからこんな感じ。

後々それぞれちゃんとしたデツキを。

キャラ崩壊。

紅魔館、主人と従者と決闘者

「明日は紅い館を見に行こうかな。紅いらしいが本当なのかも気になるし」

寝る前に持っていく物を選別している。

カード、デュエルディスクくらいしかなかった。

そして寝る準備をして早めに就寝。

翌日

「書き置きはしたけど帰ってきたら怒られる気がする」
デュエルディスクを付けて人里から離れ紅魔館へ。

途中黒い闇の塊がふよふよと浮いて移動していたがスルーして歩いていく。

「さっきの何だったんだろう。紅い館はもう少しかな」
わくわくしながら歩いていく。

青年移動中……。

霧の湖

「おお、見えてきた」

お菓子あげた対価に、少し大人びたサイドポニーの妖精に教えてもらった湖に到着した。

紅魔館は霧の湖の畔に建っているらしい。

「あ！ 知らない人間がいる！」

青い服装に氷の羽根を持った妖精が飛んできた。

「おお、何かよくわからない妖精だ！ 精霊との差はなんだろう」
じっと見ている。

人間の子供くらいのサイズで、よく観察している。

「人間があたいのナワバリに何のようだ！」

やたら好戦的で、その可愛らしい見た目からは想像できなかった。

「そうだな、君にはこのアメをあげよう。ヨーグルト味だ」
だが焦らずに餌付けしている。

未来のポケモンマスターを夢見た恭司には他愛もない事。

「もらっけど……。あんだ変な人間ね！ みんな、あたいを見ると逃げたりするのに」

アメを受け取り、袋から取り出して頬張っている。

「まあ、君は賢そうだったからな」
完全な勘違いである。

ゴミは受け取りカバンにいれた。

「初めて会う人間にも賢く見られるなんて、あたいったらさいきよーね！」

嬉しそうな笑顔を見せている。

その可愛い笑顔を見て恭司は和んでいる。

「ところで君の名前は何か？」
ふと名前を聞いてみた。

「あたいはチルノ！　さいきよーの妖精よ！」
飴玉一つですっかり懐いている。

「さいきよーなのか。俺は鉄恭司、よろしくなチルノ」
自己紹介をして名前を教えた。

「くろまめきよーじ？」

「あー……恭司でいいよ」
何かを悟った。

「きよーじね！　ねえ、きよーじ。それなに？」
デュエルディスクに興味津々。

「そうだな。これは」
優しく詳しく説明している。

言霊使いの恭司の説明でチルノにもすっかりと伝わっているらしく、嬉しそうに頷いていた。

「あたかもデュエルやりたい！　お願いきょーじ、あたいにもカード頂戴！」

袖を引つ張りおねだりしている。
少し袖が凍り始めた。

「ん……。わかった、ほら」
カバンからカードを取り出し、手渡した。

基本女の子と子供には激甘。

「やったー！」
そのまま持つていってしまった。

「ああ、まだ説明が……。つてもういない。でもこのカバンはマジで不思議だな。何枚のカードが入ってるんだろう」
一枚のカードだけでも何百枚単位で入っている。

そのまま歩いて目に優しくない館の門の前まで向かっていった。

門の前

「綺麗な中国風のお召物のお嬢さんがシエスタしてらっしゃる
観察している。」

座って気持ち良さそうにすやすやと眠っている。

「……………」

隣に座ってみたが全然起きない。

寝息に誘われるように目を閉じた。

数時間後

夕焼けで辺りが暗くなり始めている。

「……………はっ！ いかんいかん、これが門番とは恐ろしい。なんて
畏だ」

互いに寄り添って寝ていた。

次の瞬間、中国風な女性がナイフのたくさん刺さった姿に変わって
いた。

「……………今日の夕飯は俺が作るか。慧音さんに悪いしな」
見なかった事にして帰ろうとしている。

スターダスト・ドラゴンを実体化させようとした時

「お待ちください。鉄恭司様ですね、お嬢様がお茶に招待したいと
いうことなので中にどうぞ……………」

銀色の髪にメイド服の少女がいつものまにか腕を掴んでいた。

「……いつのまに」
普段なら触れられればすぐに気づくのに、今回気づけなかった事に
驚愕。

嫌な予感が180くらいしていたが、折角なので紅い館の中に入る
ことにした。

門番の件は見なかった事にしたらしい。

紅魔館内部

外見以上にやたら広い。

何も言わずただ付いていく。

窓が少ないな等と考えているとある部屋の前で止まった。

「お嬢様、お客様をお連れしました」
ノックをして声をかけている。

『咲夜、中に入ってもらいなさい』
カリスマ溢れるプレッシャーを感じる。

「どうぞ、中にお入りください」
咲夜と呼ばれた少女に入るように促された。

室内。

やはりここも紅かった。

「ようこそ、鉄恭司。私はレミリア・スカーレット。貴方が今日ここに来るのは分かっていたわ」
背に羽根を持った水色に近い髪の幼い女の子が座っていた。
威圧するようにこちらを見ている。

「そうなんですか？」
世界の危機を何度も救ってきた恭司はこれ以上のプレッシャーに慣れていて無意味だった。

「座ったらどうかしら？」
プレッシャーを霧消させ、向かいの椅子を指差した。

「これはどうも」
荷物を置き、椅子に座った。

いつものまにかお茶が用意されている。

「今日は貴方の持っている、そのカードについて話が聞きたいから招いたのよ」
「全てお見通し。」
やるな幼女と内心思っている。

「……まあ、いいですよ。このカードは」
説明しようとした時

「貴方、普段そんな堅苦しい話し方じゃないでしょう？ 許可するから普通に話しなさい」
「こちらもお見通しだった。」

「……ああ、こっちのが説明しやすい。このカードはな」
説明している。

「なるほどね。恭司、それなら私にもカードを提供しなさい。その対価として今晚は泊めてあげるわ」
カードに触りたくてうずうずそわそわしている。

「ああ、構わないよ。これで好きにデッキを組んでみてくれ」
何千種類とあるカードを何千枚も出していく。

シグナーの五竜やシンクロモンスター等は出していない。
コピー品扱いでD・HEROや宝玉獣等はほとんど入っている。

「こ、こんなにあるの?」
凄くわくわくしているのが見ているだけでわかる。

「じっくり選んでいいから」
紅茶をいただいている。

「咲夜、貴方も選ばせてもらいなさい。私の相手をしてもらうんだから」
最初の威圧して見せていたのが嘘のように、今はきちゃっきちゃっ言いながら見た目相応にカードを選んでいる。

「あー、えっと」

突然現われたメイドの少女の名前が分からず困っている。

「十六夜咲夜です。鉄様、選んでもよろしいですか？」

「構わないよ。出来れば様付けはやめてほしいんだが……」

同年代と思われる少女に様付けで呼ばれるのは何か落ち着かない。

「お客様ですから」

「咲夜、いいじゃないの。恭司がやめてくれって言ってるんだし
夢中になってカードを見ながら援護してくれている。」

「ああ、頼むよ」

「わかりました。鉄さん、選ばせてもらいます」
選ぶ作業に入ったが少しして戻ってきた。

「十六夜さん、どうかした？」
もじもじしているから話し掛けた。

「その、ですね。ルール等を教えてもらいたいのですが」
詳しく聞いていなかったのか恥ずかしそうに聞いてきた。

「ああ、どんどん聞いてくれ。まずは」
レミリアと同じように教えて、模範的なコンボを教えたりしている。

二人が選んでいる間に予備のデュエルディスクをカスタマイズしたり、メンテナンスをしている。

「出来たわ！ 私に相応しいデッキ！」
目がキラキラしている。

「私も出来ました」
少し恥ずかしそうにデッキを持っている。

「こつちも出来た」
予備のデュエルディスクを二つ使えるようにしてある。

「恭司、早速貴方と咲夜でデュエルをしてもらおうわ！」
まずは見てみたいらしい。

「いいぜ。だけでももう少し広い場所のがいいんじゃないか？」
衝撃とかの心配をしている。

「それなら庭に出しましょう。既に日は沈んでいるからちよつどいいわ」

庭。

花が咲き誇っている。

「十六夜さん、楽しいデュエルにしよう」
ガシャツとディスクを展開させた。

「よろしく願います」
デュエルディスクに四苦八苦している。

「デュエル！……って教えてなかったか」
一人だけで言っている。

咲夜は不思議そうにこちらを見ているだけだった。

「十六夜さん、デュエルを始める時の決まり事の一つでね」
詳しく説明している。

「よし、それじゃあ」

「わかりました」

「デュエル！」
咲夜は少し照れながら言っている。

「私のターンからです。ドロー、エヴォルテクター シュバリエを
攻撃表示で召喚して黒いペンダントを装備。強者の苦痛を発動、カ
ードを一枚伏せてターンエンドです」

ATK1900 ATK2400

慌てず、しっかりプレイしている。

「俺のターン、ドロー。相手の場にモンスターが存在し、こちらの場にモンスターが存在しないから手札のサイバー・ドラゴンを特殊召喚する」

ATK2100 ATK1600

強者の苦痛により攻撃力がダウンしている。

「畏カード発動、サンダー・ブレイク。手札を一枚捨て、サイバー・ドラゴンを破壊させてもらいます」

「くっ、だがまだだ。手札からバイスドラゴンを特殊召喚し、ダーク・リゾネーターを召喚。サイクロンで強者の苦痛を破壊する」

バイス・ドラゴン

ATK1000

ダーク・リゾネーター

ATK1300

「……！ 衝撃が」

巻き起こり驚いている。

「レベル5バイス・ドラゴンにレベル3ダーク・リゾネーターをチ
ューニング！」
三つの輪となったダーク・リゾネーターがバイス・ドラゴンを包ん
でいる。

「早い……！」

シンクロ召喚の説明は受けている。

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！
シンクロ召喚！ 我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」
禍禍しくも美しい竜がその姿を紅魔館の庭に現わした。

ATK3000

「レッド・デーモンズ……」
じっと見ている。

「エヴォルテクター シュヴァリエを攻撃！ アブソリュート・パ
ワーフォース！」

「くっ！ 黒いペンダントが墓地に送られた時、相手ライフに50
0のダメージを与えます！」

LP4000 LP3400

「……カードを二枚伏せてターンエンド」

LP4000 LP3500

「私のターン、ドロ。炎妖蝶ウィルプスを召喚し、装備魔法スー
ペルヴィスを装備。炎妖蝶ウィルプスの効果を発動、生け贄に捧げ
墓地のダーク・ヴァルキリアを蘇生。この効果で蘇生させたデュア
ルモンスターは再召喚された状態になります」

ATK1800

「フェニックス・ギア・フリードじゃなかったのか」
サンダー・ブレイクのコストで捨てたのが。

「さらにスーパーヴィスが墓地に送られた時、墓地の通常モンス
ターを蘇生させます」

エヴォルテクター シュヴァリエ

ATK1900

「ダーク・ヴァルキリアの効果で魔力カウンターを乗せ、その魔力
カウンターを除外してレッド・デーモンズ・ドラゴンを破壊させて
もらいます」

「我が魂が！」
あっさりと破壊された。

「ダーク・ヴァルキリアで攻撃します！」

「罨カードオープン、リビングデッドの呼び声。墓地の我が魂を蘇生する！ 蘇れ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」
再び舞い戻り、威圧している。

ATK3000

「……ターンエンドです」
結局攻撃は出来ずに終了した。

「俺のターン、ドロ。罨カードオープン、バスター・モード！
レッド・デーモンズ・ドラゴンをリリースし、デッキからレッド・デーモンズ・ドラゴンノバスターを特殊召喚！」
虚空より現われた鎧がレッド・デーモンズに装着されていく。

ATK3500

「ノバスター…？」

「ダーク・ヴァルキリアを攻撃！ エクストリーム・クリムゾン・

「フォース！」

「きゃああっ！」

LP3400 LP1700

「この時、レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスターの効果発動！
レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター以外のモンスターを全
てを破壊する！ クリムゾン・ジ・エンド！」

「そんな！」

「カードを一枚セットしてターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！……モンスターをセットしてターンエンド」

「俺のターン、ドロー。レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター
で攻撃！」

「戦闘により破壊され墓地に送られたフェデライザーの効果で、デ
ツキからギガプラントを墓地に送って一枚ドローします」

「畏発動、サンダー・ブレイク」

「え…？ 場にはレッド・デーモンズ・ドラゴンノバスターしかないのに何故？」
不思議そうな顔をしている。

「レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスターが破壊された時、墓地に存在するレッド・デーモンズ・ドラゴンを特殊召喚できる！ それはまだバトルフェイズは続いている。行け、レッド・デーモンズ・ドラゴン！ 灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」
鎧が砕かれその身を三度現わしたレッド・デーモンズ・ドラゴン。

ATK3000

「まさか……！ きゃああああっ！…！」

LP1700 LPO

「……負けると悔しいわね。やっぱり習った通りのデッキじゃ読まれちゃうのね」
砕けた喋り方になっている。

「いいセンスだったぜ十六夜さん」
ディスクを待機状態に戻した。

「ありがとう。だけど面白いわね、これ」

「つ、次は私とよ！」

興奮が隠せないレミリアが走り寄ってきた。

サイズが合うようにカスタマイズしたデュエルディスクを付けている。

「連戦だな。よし、やるうか」

デュエルが出来るのが嬉しくて仕方ない。

「ほら早くやりましょう！」

既にカリスマなんてなかった。

羽根がぱたぱたしてる。

「それじゃあ、やるか」

ディスクを起動させた。

「デュエル！」

「私からね、ドロー！ モンスターをセット、カードを一枚伏せて
ターンエンド！」

「俺のターン、ドロ！……手札断殺を発動。互いに手札二枚を捨て、二枚ドロする。相手の場にモンスターが存在し、こちらの場にモンスターが存在しない場合バイス・ドラゴンは手札から特殊召喚できる。この効果で特殊召喚した場合、元々の攻守が半分になるがな」

ATK2000 ATK1000
DEF2400 ATK1200

「さらにダーク・リゾネーターを召喚！ レベル5バイス・ドラゴンにレベル3ダーク・リゾネーターをチューニング！ 王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！ シンクロ召喚！

我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」
お得意のバイスリゾネーターにより速攻召喚されている。

ATK3000

「出てくるのが早すぎるわ！ でもあのドラゴン……」
レッド・デーモンズが気になって仕方がない。

「レッド・デーモンズ・ドラゴンでセットモンスターを攻撃！ ア
ブソリユート・パワーフォース！」

「破壊されたのはクリッターよ。墓地に送られたクリッターの効果発動！ デッキからキラートマトを手札に加えるわ」

「カードを二枚セットしてターンエンドだ」

「そちらのターンのエンドフェイズにセットしていた速攻魔法、終焉の焔の効果でトークンを二つ場に出すわ」

DEF0×2

「そして私のターン、ドロー！ トークンを一つ生け贄に捧げ邪帝ガイウスを召喚！ 生け贄召喚に成功したからレッド・デーモンズ・ドラゴンを除外させてもらうわ！」

ATK2400

「罨カードオープン、亜空間物質転送装置。このターンの終了時までレッド・デーモンズ・ドラゴンを除外する！」

「かかったわね。魔法カード、二重召喚を発動！ そして終焉の焔トークンを生け贄に捧げヴァンパイア・ロードを召喚！ さらにヴァンパイア・ロードを除外してヴァンパイア・ジェネシスを特殊召喚！」

ATK3000

「……除外するのを読まれていたのか？」

「邪帝ガイウスで攻撃するわ！」

「だが、手札からバトルフェーダーを特殊召喚。このカードは相手の直接攻撃宣言時に発動、手札から特殊召喚しバトルフェイズを終了させる」

DEF0

「うー。ターンエンド」

うーうー唸っている姿が微笑ましい。

「そして我が魂が戻ってくる。そして俺のターン！ ドロー！……赤き竜はシグナーを介さなくても俺に力を与えるようになっていくのか？」

救世竜セイヴァー・ドラゴンを引いている。

「辿る運命が変わったというの？」

さっきまで分かっていた相手の運命が変わっているのに驚いている。本来なら互角の勝負で長引くはずだった。

「使つてやるさ、引いたんだからな。手札から救世竜セイヴァー・ドラゴンを召喚！ レッド・デーモンズ・ドラゴンとバトルフェーダーに救世竜セイヴァー・ドラゴンをチューニング！」
空に飛び上がった3体のモンスターが一つの光の輪により姿を変えていく。

「……………」
見上げている。

「研磨されし孤高の光、真の覇者となりて大地を照らす。光輝け！ シンクロ召喚！ 大いなる魂、セイヴァー・デーモン・ドラゴン！」

ATK4000

「攻撃力が高い！」

「セイヴァー・デーモン・ドラゴンの効果発動。1ターンに1度、エンドフェイズ時まで相手の表側表示モンスター1体の効果を無効にし、そのモンスターの攻撃力分このカードの攻撃力をアップする事が出来る。ヴァンパイア・ジェネシスの効果を無効にし、そのモンスターは攻撃力を加える！ パワー・ゲイン！」

ATK4000 ATK7000

「攻撃力7000!?!？」

「セイヴァー・デモン・ドラゴンでヴァンパイア・ジェネシスを攻撃！ アルティメット・パワーフォー스！」

「わああああっ！！」

LP4000 LPO

「びつくりしたわ……。恭司、貴方は一体何者？
運命を軽く変える存在が不思議で仕方ない。」

「通りすがりの決闘者だ」
デュエルディスクを待機状態に戻した。

「変な人間ね。しばらく泊まっていきなさい、デュエルもしたいし
気に入ったわ。咲夜、部屋に案内して上げなさい」
デュエルディスクを付けたまま行ってしまった。

「それではお部屋に案内します」

「……ちょっと待ってくれ、明日には帰らないといけないんだが」
しばらく、って言葉に引っ掛かっている。

「……こちらです」

無視した。

部屋。

既に荷物も運び込まれている。

「御用がありましたら、このベルを鳴らしてください。それでは」
「ゆっくり……」
消えた。

「え？ 俺どうなったの？ しかも何か嫌な予感も……」
どこを気に入られたのかはわからないが、帰れなくなった。
人里に帰ったら確実に頭突きが待っている。

続く。

紅魔館、主人と従者と決闘者（後書き）

シグナー達の為に赤き竜は恭司に力を貸しています。
超ご都合主義。

運命を越えるドローは赤き竜の力。

紅魔館、魔女と決闘者（前書き）

説明ばかりだけど、これであっているか足りているかわからなくな
った。

サイバー流チート。

紅魔館、魔女と決闘者

あれから数日が経った。
未だに帰してもらえず、紅魔館で生活している。

「美鈴、今日も頼む」
朝食を食べ終わってから門の前に向かい、手合せを頼んでいる。

「恭司さん、本当に人間なんですか？ 昨日あれだけバウンドしたり、頭とか地面に打ち付けていたのに元気ですし……」
かなり強めに打ったりしているのにすぐ立ち上がってきたりするから不思議に思われている。

ただし弾幕にはやたら弱い。

「失礼なチャイナ娘だな」
あの次の日、紹介され互いに挨拶をしてすぐに仲良くなっていた。

普通に名前を呼んだら泣いて喜ばれ、熱烈なハグをされたりもしている。
役得と思った次の瞬間には、美鈴がナイフでハリネズミのようになっ
つていてさすがの恭司も顔を引きつらせていたが。

「言っとくが、俺は最初からクライマックスだぜ！」
準備運動をしてから言い放った。

「あ、その前口上いいですね」

互いに距離を取って構えた。

「さ、さすがに痛い……」

何故か地面に埋まっている。

調子に乗って高く飛び上がり、空中戦をした結果がこれ。最後に思い切り地面に向かって殴られて漫画のように埋まっていた。

「本当に妖怪じゃないんですね？」

打撃にはやたら強く、美鈴は手が痛いのか手を振っている。

「……………つとと！ ありがとな美鈴。それじゃあ、また後でなー」
服を引つ張ってもらい、なんとか抜け出てきた。

痛がっていたのに元気に歩いていく姿は人間とは思えない。

恭司が去っていく姿を見て、美鈴は人体の不思議に思いを馳せていた。

廊下。

「図書館で貴方を呼んでいる私の親友に会いに行つて、とは。レミ

リアは自由だな」
廊下をスタスタ歩いていく。

夕方になりレミリアと遭遇。
問答無用にデュエルを挑まれてからその事を知らされ、仕方なく迷いながら地下の図書館に向かっている。

図書館

「ただいま普通に可愛い小悪魔さんに案内してもらっております」
何故か説明口調で話している。

何とか到着したが凄惨な数の本棚と本で右往左往していた。
するととても可愛い女性が声をかけてくれて、レミリアの親友と呼ばれる者の元に案内してくれていた。

「恭司さんって変な人間ですね。普通はこの屋敷の話の聞いたら見に来ようとはしませんよ?」
くすくす笑っている。

「そう言われると照れるな。……何か胸がドキドキする。これは恋? それとも風邪?」
デレデレしながら会話を楽しみ向かっている。

「パチユリー様、恭司さんをお連れしました」
そう言つてパジャマのような服を着た女の子に声を掛ける小悪魔。

それを見た恭司は

「……サーヴァント・サマナー。召喚に応じて馳せ参じました。ご命令をマスター」
片膝をついて頭を下げてみせた。

「……？」
本から顔を上げ、不思議そうにこちらを見た。

「初めまして。趣味はデュエル、得意な事はチューニング、好きな事はシンクロ召喚です」
デュエル大好き。

「そう。今日は貴方にデュエルの事を詳しく聞きたくて呼んだの」
本を閉じこちらを見てくる。

「習うより慣れろって言うよな。こちらも頼みたいことを思い出したんだ」
予備のデッキともう一つデッキを取り出し、テーブルを挟んで向かいに座った。

そして持ち歩いているプレイマットをテーブルに広げた。

「頼みたいこと？」
興味津々にプレイマットを見ながら聞き返している。

「赤き竜。シグナーを率いて地縛神と戦う竜の伝承についての本はないかと思って」

調べようとずっと考えていたからタイミングがよかった。

「わかったわ。小悪魔」

傍らに居た小悪魔に指示している。

細かく指定して、奥の方を探すようにと。

「それじゃあ早速教えてもらおうわよ」

小悪魔に本を取りに行かせてから、こちらを見た。

本で得た知識の実践をしようとしているのか、凄いわくわくしているのが分かる。

「まずこうやってデッキをシャッフルするんだ」
綺麗にシャッフルしている。

慣れているからうまく混ぜる。

「じつ?」

ゆっくりシャッフルしている。

うまく混ぜておらず、時々カードが散らばったりしている。

「うん、今はそれでいいよ。慣れたらうまくいくから。そしてデッキの上から五枚カードを引く」
上から五枚引いてみせた。

「こうね」

五枚引いた。

「そして始める前に互いにデュエル！って宣言をするんだ。形式的な事だから」

やらないで始めるとモヤモヤする。

「わかったわ」

頷いている。

「デュエル！」

「そうしたら自分のターンの最初はデッキの上から一枚引くんだ、ドローって言いながら」

カードを一枚引いてみせた。

「そしてメインフェイズ。ここではモンスターの召喚、魔法カードの使用・セット、罠カードのセットが可能だ。モンスターの召喚、これは三種類ある。通常召喚、反転召喚、特殊召喚。さらに通常召喚にも三種類あって、表側攻撃表示・表側守備表示・裏側守備表示」
手札のスピード・ウォリアーで三種類の通常召喚を教えている。

「そういう事だったのね」

基本すぎて本でも省かれていた内容を教えている。

ビギナー用の本をスルーしてしまったただけかもしれない。

「そして反転召喚はただ裏側守備表示モンスターを表側攻撃表示に変えるだけだ。ただしセットした次のターンまでは反転できない。後、通常召喚に生け贄召喚と言うものがあるんだ。レベル5、6までのモンスターは特殊な条件がなければ、自分の場のモンスター1体を生け贄に捧げる事で通常召喚が出来るようになる。レベルが7以上は特殊な条件がなければ2体の生け贄で出せる」
邪帝とダイダロスを見せながら説明している。

「強力なモンスターを呼び出すには生け贄が必要なのね」

「ああ。特殊召喚はこの二つに属さない全ての召喚を総合してそう呼ぶ。通常召喚権を失わずに呼ぶ事が出来るんだ。効果モンスターの特殊召喚は色々あるから割愛させてもらう。後は俺のシンクロ召喚、十代……俺の友人が使う融合召喚、尊敬し敬愛している決闘者が儀式召喚。まずは儀式召喚からだ」
ローの祈りとロー・ガーディアンを取り出し、よく見せて説明している。

「この儀式魔法と儀式モンスターが手札にあり、尚且つこの儀式に必要なコストを支払わなければ呼ぶ事が出来ない。上級者向けだし、あまり使われないけどな」
二枚のカードを脇に置いた。

「確かにリスクが高そうね」

「次に融合召喚だ。これは儀式より扱いやすく、強力なモンスター

が出せる。手札で融合、場で融合、手札と場で融合、墓地から除外して融合等がある。例えば……E・HEROエッジマンとE・HEROスパークマン。この2体を融合のカードで融合させる事でE・HEROプラズマ・ヴァイスマンが呼び出せる。ただ融合召喚は強力だけど最低でも三枚のカードを使用するから手札の消費が激しい」
ネオスはないから省き、三枚のカードを脇に置いた。

「わかったわ。最後のシンクロ召喚って言うのは？」
本にも載っていない謎の召喚方法に身を乗り出してくる。

「俺が最も得意とする召喚方法だ。チューナーモンスターとそれ以外のモンスターのレベルの合計で特殊召喚できるモンスターが変わる。レベル3のチューナーにレベル2のモンスターでレベル5のシンクロモンスターって感じでな」
凄く生き生きと説明している姿が眩しい。

ジャンク・シンクロン、ボルト・ヘッジホッグ、ジャンク・ウオリアーを見せて嬉しそうに説明している。

「それは初めて知ったわ。どの本にも載ってなかったけど、どうして？」

不思議そうに恭司を見つめている。
そのせいか少し恭司が赤くなっているが。

「……まあ、今は俺しか持っていないからな。次に魔法カードの種類だ。通常魔法、速攻魔法、儀式魔法、永続魔法、フィールド魔法、装備魔法がある。通常魔法はメインフェイズにのみ使えるカード。速攻魔法は自分のターンならバトルフェイズにも手札から使えるカードで、前のターンにセットしてあった場合も自分のターンに使用

が可能だ。まあ、セットした場合は大体相手のターンに使うことになるけど」
詳しく説明している。

「そして儀式魔法はさっきしたから省くとして、次は永続魔法だ。これは発動後、場に残り様々な効果を発揮してくれる。装備魔法は文字通りモンスターに装備するカードだ。攻撃力を上げたり様々な効果がある。そして最後はフィールド魔法。これは専用のフィールドカードゾーンに置かれ、発動後も場に残り続け互いに影響を与えらるカードなんだ。新しいフィールド魔法が発動されたら古い方が破壊される」
それぞれの種類の魔法を見せて細かく説明。

「種類も多いのね」
それを手に取り見比べている。

「モンスターの説明は大雑把に行くぞ。まずこの黄色に近いこれがバニラとも呼ばれる通常モンスターだ。次にこのオレンジ色が効果モンスター、紫色が融合モンスターで青色が儀式モンスターだ。シンクロモンスターは白い」
全て並べて説明している。

「色が違うのね」

「そして罨カードだ。罨には通常罨、永続罨、カウンター罨の三種類がある。通常罨には様々な効果があり、タイミングもそれぞれだ。永続罨は永続魔法と似てるけど、効果はこっちのが強いものが多い。最後のカウンター罨だが、モンスターの召喚やモンスター効果・魔法・罨の発動を無効にしたりと強力な効果が多い。ただし手札を一

枚捨てたり、LPを半分支払ったりとそれなりのコストも必要なんだ」

「畏もそれぞれの種類を全て見せている。」

「大体理解できたわ。後は実践したいのよ」

「ちょっと待ってくれ、スペルスピードの説明がまだだ。スペルスピードとはカードの効果スピードの事なんだが、これはチェーンに関係している。カードのスペルスピードが遅いとチェーン発動が来ない」

「それも詳しく教えてもらえるかしら」
集中して聞き始めた。

「まずスペルスピード1。これは一番遅く、通常魔法、装備魔法、フィールド魔法、永続魔法、効果モンスターの事だ。次にスペルスピード2。速攻魔法、通常畏、永続畏、誘発即時効果の効果モンスターがこれだ。そしてスペルスピード3。カウンター畏。一番早くこれを使われたら同じカウンター畏でしか対処ができない」
全てのカードを見せて説明をした。
チェーンの組み方も教えている。

「そして一気に説明するぞ。バトルフェイズ、ここで戦闘を行うんだ。そしてメインフェイズ2、ここはさっきと変わらない。この時にモンスターを召喚してもいいし、カードをセットしてもいい。そして全てが終わったらエンドフェイズ。これで相手のターンになる」

「ようやく実践ね」

借りたデッキに一度引いた五枚を戻している。

「一度デッキをシャッフルする所からだ」

説明に使用したカードをしまい、再びデッキをシャッフルしている。

「ところで貴方、自己紹介はしないの？ サマナーって呼んでほしいのかしら」

レミリアから名前を聞いてはいるが、自己紹介をしてもらいたくないのだ。

「失礼、俺は鉄恭司。通りすがりの決闘者だ」

カードをシャッフルするのをやめて挨拶をした。

通りすがりのくが気に入ったらしい。

「そう。恭司、私はパチュリー・ノーレッジよ」

最初から呼び捨てにしてくる。

一生懸命デッキをシャッフルする姿が可愛い。

「よろしくな、ノーレッジさん」

五枚引き、デッキを置いてから改めて挨拶をした。

「パチュリーでいいわ」

まだデッキをシャッフルしている。

「わかった、パチュリーだな」

シャッフルが終わるのを待っている。

「それじゃあ、やりましょっ」

「よし、やるか」

「デュエル！」

「私のターンから、ドロー。手札から終末の騎士を召喚。デッキからダーク・ホルスを墓地に送ってエンドするわ」

ATK1400

「俺のターン、ドロー。これがサイバー流、引きの強さがものを言う。魔法カード、パワー・ボンドを発動。手札のサイバー・ドラゴン2体を融合し、サイバー・ツイン・ドラゴンを融合召喚。パワー・ボンドで融合召喚されたモンスターの攻撃力は2倍になり、エンド時にそのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける」

ATK2800 ATK5600

「……物凄い引きの良さね」

呆れられるくらいに引きがいい。

「デッキが答えてくれるんだよ」

100%の力を引き出している。

「デッキが答えてくれる？」

不思議な言葉を聞き返してきた。

「一生懸命作ったデッキは信じれば必ず答えてくれるんだ」
凄い嬉しそうな笑顔を見せている。

サイバー・ツインでヘルカイザーを思い出したりしている。

「信じる……」

色々と考えているようだ。

「とりあえず今回は俺の勝ちだな。カードはレミリアの所にあるから、色々組んでみるといい」

ご都合主義の塊なカバンからたくさん出してそのままにしてある。

「パチユリー様、ありがとうございました」

ちょうどいいタイミングで小悪魔が戻ってきた。

「ありがとう、小悪魔。恭司、これよ」
あるシグナーの伝承の本を手渡してきた。

「えーっと……」

紅蓮の悪魔を倒したバーニング・ソウルを持った伝説のシグナーの話が書かれている。

「バーニング・ソウル……か。ジャックが何か言っていたな」
パチュリーの隣に座り、二人で見ている。
字が読めないのでパチュリーに頼んで読んでもらっていた。

パチュリーに礼を言い、小悪魔に出口まで案内してもらい図書館から出ていった。
バーニング・ソウルが頭から離れず、考えながら歩いているので迷子になるのも時間の問題である。

続く。

紅魔館、魔女と決闘者（後書き）

モチベーションが上がらず、エクストラをやったりしてた。
エクストラのセイバー、予想以上にいいな。

紅魔館、悪魔の妹と燃える魂（前書き）

デュエルなし。

名前が違っただけでまるっきり同じ能力のモンスター。

能力をフル活用しての結末。

先日後攻1ターンで流星竜を出して満足しました。

紅魔館、悪魔の妹と燃える魂

「しまった、ここはどこだ」

図書館を後にし、バーニング・ソウルについて考えて歩いていたら迷ってしまった。

似た光景が続いていて、今どこを歩いているのかわからない。

「あれ？ あなた誰？」

しばらく歩いていると、綺麗な飾りのような羽根を付けた金色の髪の女の子がいた。

こちらに気づき声をかけ、ぱたぱたと近づいて来ている。

「あー、うん。サーヴァント・サマナー召喚に応じて馳せ参じました」

さっきパチュリーにやった事を繰り返して誤魔化そうとしている。

迷子なのを知られるのが嫌だったようだ。

「へえ、サマナーって言うのね」

だがこの女の子にはそのまま信じられてしまった。

「いや、ちが」

否定しようと口を開いたが。

「ねえ、私の部屋でお話しよう？」
腕を掴まれ強引に連れていかれた。

予想以上に強い力で振りほどけず、見た目からは信じられない力を持っているのだと驚いている。

地下の部屋。

「……なるほど。フランは今まではこの部屋に幽閉されていたのか」
椅子に座り、フランの名前を聞いてから互いに詳しく話をしている。

話に聞いていた悪魔の妹が予想より大人しく、可愛い子だったので
ホッとしていた。

「うん。でも最近は館の中だけは自由にしてもいいんだよ」
ベッドに腰掛け、足をパタパタさせている。

「……」
羽根がなかったら普通の女の子にしか見えないと考えている。

「ねえ、サマナーはどこから来たの？」
もう好きに呼ばせることにしていた。

基本的な質問を今更している。

「俺は外の世界から無理矢理連れて来られたんだ。ゆかりんに」
遠い目をしながら語っている。

あの日以来姿を見ておらず、外に帰してくれと頼めないままだった。

「へえ、外から来たんだ。ねえサマナー、貴方は私と遊んでくれる？」

唐突にそんなことを言い出した。

俯いて足をぶらぶらさせているので表情が見えない。

「ああ、構わないよ」

見た目だけじゃなくて精神も幼いんだなと考えながら頷いた。

「やった！じゃあ、早く遊ぼう？」

ベッドから離れ、椅子に座っている恭司の服を引っ張った。

「うわつとと、でも何して遊ぶんだ？」

引っ張られて転びそうになりながら立ち上がり、何をするのか聞いている。

「弾幕ごっこ。……サマナー、貴方はすぐに壊れないよね？」

ふっと顔を上げると、急に狂気を孕んだ笑みを浮かべた。

恭司に会ってから様子がおかしくなっていた。

それに気づけたのは彼女の姉やこの館に長くいる者だけだった。

「ッ！」
地縛神を前にした時と同じような悪寒が走り、腕を振りほどき思いっきり飛び退いた。

直後凄まじい破碎音が館に響く。

「始まったわね……。恭司、貴方はこのままだと死んでしまう運命。この運命を変えられるかしら」
レミリアが月を見上げ、何かを期待するような目で呟いている。

「ぐっ……。！なんつー破壊力だ！」
部屋から飛び出し、外に向かって逃げている。

かすって頭から血を流しているが、咄嗟にかわして出来たかすり傷。あの時かわせなければ頭が西瓜のようになっていたかもしれない。

「あははははっ！ ねえ、待ってよ！ もっと遊ぼうよ！ さっきのよく避けられたね！」
嬉しそうに飛んで追ってきている。

追いつけるように弾をばらまき、恭司を追い詰めている。

「くっ……。来い！ スピード・ウォリアー！」

能力を活用し、走りながらモンスターを実体化させてフランに攻撃を仕掛けた。

「わぁ！ 凄い凄い！ でも脆いね」

しかし、現われた瞬間に弾幕に飲まれカードに戻ってしまった。

「やっぱりダメか！」

ようやく地下から外に飛び出した。

「レミイ、そろそろ助けないと彼本当に死んでしまうかもしれないわよ」

どこかでパチュリー達が水晶を使って見ている。

「そうね……。でも彼なら、もしかしたらフランの事を……」
変な人間に何か期待をしている。
過大評価だった。

中庭

「あああああつ！！ ぐううううつ！！」

外に飛び出したがフランの容赦ない弾幕を避けきれず、左腕の肘から下が千切れ飛んだ。

常人だったら間違いなく意識を失う程の激痛に膝をついた。

死なない程度に加減の出来る人妖の弾幕とは違う破壊力が高く速い弾幕で、今までかわせたりかすっていた程度で済んだのが本当に奇

跡的だった。

歯を食い縛り、痛みを堪えフランを睨みつけている。

「……なんか飽きちゃった。ばいばい、サマナー。『禁忌レーヴァ
テイン』」

やはり人間は脆くつまらないと、スペルカードを発動させてとどめ
を刺しにかかった。

骨ごと燃やし尽くせそうな程の炎を纏った杖を持っている。

「ここでは死ねない、絶対に！……ジャック、これがバーニン
グ・ソウルか！ 今なら理解できる、レッド・デーモンズ・ドラゴ
ンが俺の魂に火をつける！！」
失った左腕からの出血が酷く、ポタポタと滴り落ちている。

何かを理解し、誰かに憑かれたのか急に荒々しくなっている。
そして痛みを堪えて立ち上がり左胸に右手を当てると、その当てて
いる部分が赤い輝きを放ち始めた。

その恭司を守るようにレッド・デーモンズ・ドラゴンが実体化し、
フランの前に立ちふさがり攻撃を全て防ぎきっていた。

「ずるい！ 何そのドラゴンー！」
見た目が禍禍しいドラゴンが急に現われ、さらに攻撃を全て止めら
れて驚いている。

「感じるぞ！ 魂の鼓動を！！」

右手が炎に包まれ、自分の意思とは別に口が勝手に動いている。

「な、なにそれ……！ 怖い……！」

赤き竜の力が恐ろしいのか震えて動けなくなってる。

「『荒ぶる！俺の魂が！！』」

誰かと同調しているのか声が重なって聞こえてきた。

体から紅いオーラのようなものが浮かび上がり、異様な雰囲気を纏ってフランを威圧している。

バーニング・ソウルを持つ者は赤き竜の力を得て奇跡を起こす。

シグナーではないが赤き竜との繋がりは完全に出来ている。

「……恭司が迎えるはずだった死の運命が変わったわ。いえ、恭司が望んだから運命が彼に味方をしているのかもしれない。これはもしかしたら……」

運命を覆し続けている事への驚愕、フランに対しての期待をしている。

「あれはさっき一緒に本で見た……バーニング・ソウルなのかしら？ でもシグナーじゃないのに何故？」

パチュリーは不思議そうに見ている。

咲夜と美鈴も呼ばれていて、静かに見ていたがいきなり変わった恭司を見て呆然として言葉も出ない。

「クリエイト・リゾネーターとアタック・ゲイナーを実体化、そしてその2体をレッド・デーモンズ・ドラゴンにダブルチューニング
！！」
四つの炎の輪に包まれたレッド・デーモンズ・ドラゴンが姿を変えていく。

しかしそれを妨害しようとフランが自身の能力を行使してくる。

「きゅっとして、どかーん！………な、なんで？　なんで壊れないの！」

破壊しようとしたが何故か能力が使えない。

握る瞬間に目玉がロストしている。

「無駄だ！　エフェクト・ヴェーラーの効果によりフラン、お前の能力は数分の間だが無効にさせてもらう！！　荒ぶる魂よ、その力によりて彼の者の狂気を封印せよ！！」
目が真っ赤に輝いて、手に新しいカードが握られている。

「ひっ！」

得体の知れない人間、感じた事のない恐ろしさに後退りしている。

「破壊の悪魔よ！　お前の狂気を全て根こそぎ奪い尽くしてやる！
！　王者と悪魔、今ここに交わる！　荒ぶる魂よ！　天地創造の叫

びをあげよ！ シンクロ召喚！ 出でよ！ スカーレット・デビル・ドラゴンー！！」
名前がスカーレット・ノヴァ・ドラゴンではないが、効果等は全て同じ。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンと違うのは翼に綺麗な七色の水晶のような物が埋め込まれているくらい。

フランの心に巢食う狂気を全て奪い尽くして現われたモンスター。緋を越え、赤を越え、現われた究極の紅い悪魔の竜。

「あ……あ……」
恐怖で震えている。

能力を封じられ、目の前にいる自分よりも遙か上位の存在が怖くて仕方がない。

「……行け！ スカーレット・デビル・ドラゴン！ バーニング・ソウル！！」
フランを見て空気を震わせる程の咆哮を上げ、加速して突撃している。

「いや……いやあああつー！！」
頭を抱え、地に座り込んで泣き叫んでいる。

「……くっ」
実体化を維持するのをやめて、フランに攻撃が当たる前に消した。

未来のサテライトに居た時の恭司と違い、今の恭司は自分の命を狙

った敵に対して甘すぎる。

ただし仲間や親しい者を傷つけたりした者には一切の容赦をしない。

座り込んで泣いているフランに近づいて行った。

「フラン、もう大丈夫だ……。一時的なものかもしれないけど……」
真っ青な顔で泣いているフランの頭を撫で、あやしている。

激痛と血の流しすぎで意識を保っているのが不思議な程。

最後まで言えずに前のめりに倒れていく。

「……………！」

気づいたフランが恭司を抱き留めたが、恭司は意識が朦朧として何かを言っているのか聞き取れない。

「……………寒いな……………」

力の入らない右手からこぼれ落ちたのは、自分に使っていたドーピングとスカーレット・デビル・ドラゴンのカード。

心音がどんどん弱まっていく。

スカーレット・デビルの召喚を呆然と見ていたレミアア達が慌てて駆け付けてきた。

必死に何かをして恭司に呼び掛けているが、眠くて仕方がないのかぼんやりとして反応が返ってこない。

「フラン……明日……」
寒さと眠気に耐えられず、何かを言い掛けている途中で目をゆっくりと閉じた。

「フラン……明日……」

「やだよ、サマナー！ 起きて！ ねえ、起きてよ！ 私にもデューエル教えてくれるんでしょ！」
ぼろぼろ涙を流しながらフランが必死に揺すっている。

地下の部屋で色んな会話をしている時にした約束。

狂気で不安定だった心が今は落ち着いていて、こんな事をしてしまった自分を悔やんでいる。

「フラン、揺すったらダメよ。私が死なせないわ」
死の運命を自分で覆した人間の、さらなる死の運命を能力で変えている。

ただの人間に肩入れする自分に驚きつつも、失いたくない思いもあって真剣になっている。

「パチユリー様、ありがとうございました」

咲夜が千切れ飛んだ腕を布で包み探してきた。

「……これなら繋げる事が出来るわね」

魔法で腕を繋げる為に千切れた腕を探してもらっていたようだ。

血がこれ以上流れないように、咲夜がしっかりと止血している。

「……………ギリギリです。これ以上血を流していたら既に死んでいたかも」

美鈴が頭部の治療をし、流れた血の量が地味に多いのも確認している。

怪我を魔法で治し終え、館に運びベッドに寝かせた。

永遠亭に連れていくにも、体力が保たない可能性が高く、後は恭司の生命力に賭けるしかなかった。

翌日の昼過ぎ。

「う……………肉……………血が足りん……………」
凄まじい生命力で目を覚まし、肉を要求。

しかし顔はまだ真っ青で、辺りを見回している。
窓がない部屋だった。

「サマナー……………死んじゃダメだよ……………」
フランが椅子に座ってスヤスヤと寝ていた。

ずっと恭司についていて、いつのまにか眠ってしまったようだ。

「フラン……。あれ、左腕がある」

違和感なく動かせているのに気づいた。

服を着替える為にベッドから出て、服を探し始めた。

「失礼します……。つて、鉄さん!？」

既に起きて動いている恭司に驚いた咲夜。

意地で動いているだけで凄くフラフラしている。

「よう、十六夜さん……。つてなんでまた寝てるんだ俺は」
いつのまにかベッドに寝かされていた。

「絶対安静。死にかけたのに何でもう動けるのよ」
呆れて敬語もなくなっている。

「いや、肉やレバーを食って血をだな」
肉等を食べて力を付けるつもりだった。

「……はあ、持ってくるから待ってなさい」
呆れたように言いながら、いきなり目の前で消えた。

そしていきなり現われたと思ったら、肉やレバーをたくさん盛った皿を持ってきていた。

がつつ食べている内に恭司の顔色もよくなっていく。

回復力が某海賊の船長並に人間離れしている。

「ご馳走様。十六夜、俺はもう少し眠らせてもらっよ……」
本調子ではないので眠ることにしたようだった。

咲夜の名字を呼び捨てにしている。

「おやすみなさい」

フランにタオルケットをかけて、そつと部屋から出ていった。

夜。

「ん……よく寝た」

ほとんど回復して元気になっている。

妖怪と言われても違和感がないくらいおかしい回復速度。
もしかしたら治療の神ディアン・ケトに見守られているのかもしれない。

「サマナー……？ サマナー！？ サマナー……！」
すっかりサマナーで定着してしまった。

起きたのに気づき、ぎゅっと抱きついている。

「おう、フラン。おはよう」
殺されかけたのにあまり気にしておらず、帽子の上から頭を撫でている。

「ごめんなさい……」
嫌われる事を恐れ、ぶるぶる震えている。

「……ああ、ちゃんと謝れるフランはいい子だな」
優しく抱き締めてあげている。

「私、急に貴方を壊したくなったの……。自分でも分からなくって、でもそうしたいって……」
様々な繋がりを持つ恭司が眩しく見え、自分でも分からない破壊衝動に駆られ狂気に飲まれてした行動だった。

「……もう大丈夫だ。でも能力の制御は出来るようにならないとな」
優しく諭している。

「うん……」
紡いだ絆がさらなる力を呼び覚ます。

「しかし、ジャックから聞いていたスカーレット・ノヴァ・ドラゴンじゃないなこれ。スカーレット・ノヴァじゃないのは仕方ないとはいえ……さつきはジャックが無理矢理同調してきたからバーニング・ソウルの境地に到れたと思うんだが、これは俺が到った事になるのか？ それと今後これ使えるのか？」
スカーレット・デビル・ドラゴンのカードを手にして疑問をたくさん呟いている。

フランは腕の中でじっとしており、心地好い暖かさと温もりに眠く

なっつうとつとしていた。

「……しかも実体化させられないな」
強力なモンスターを時間を置かずにたくさん実体化させた事でリミッターが強制的にかけられている。

今実体化出来るのはレベル2までのモンスターで、魔法・畏の効果を実際に使うことも出来ない。

しばらくすればまた戻るが、それまではただやたら丈夫な人間。

諸々の確認をし、そのままフランと一緒に眠った。

妹が出来たようで嬉しい恭司。

バーニング・ソウルの境地に到り、悪魔の妹を圧倒した件が新聞になり広範囲に配られるとは夢にも思っていない。

続く。

紅魔館、悪魔の妹と燃える魂（後書き）

フランちゃんに懐かれました。

実は服が変わっているけど、誰に着替えさせられたかは考えていない。

スカーレット・デビルはノヴァが出せないから代替として。

後2、3話で人里に戻ると思う。

ではまた。

紅魔館、空を飛びたい決闘者（前書き）

お風呂。

まだ体調不全。

リフボード。

デュエル。

次で人里に。

紅魔館、空を飛びたい決闘者

深夜

「重い荷物をー、枕にしたらー」

あの後すぐに起床し、フランを一人で寝かせてから風呂を借りて暖まっていた。

使用人が使う広い湯槽のある風呂で、間違って妖精メイド達が入らないように脱衣場の入り口に男人浴中の紙を張ってから入っている。銭湯のような感じで屋敷の見た目からかなり違和感があるが、気にせずご機嫌に歌を歌ってのんびり浸かっている。

「深呼吸、青空になるーっと。あー、気持ち良い」

髪も体も洗い終え、湯槽で暖まっている。

死にかけた人間とは思えないくらい風呂を満喫。

目を閉じうとうとしていると戸をカラカラと開ける音が聞こえてきた。

「んあ……？ 誰か入ってきたのか……？」

目を開き見渡したが、湯気でよく見えなくなっている。

「サマナー、私も一緒に入る」

湯気の向こうからタオルで隠さず、すっぱんぼんなフランが現われた。

「フランちゃんや、吸血鬼って流水はダメなんじゃないの？」
もっともな疑問だが、裸を見てもまったく動じていない。

「ううん。平気だよ、お湯だもん」
そのまま胡坐の上に座ってきた。

今回の件でフランにかなり懐かれたようだ。

「なんつーご都合主義だ。お湯も水だと思っけど……まあ、いいか。
ほら、フラン」

自分の頭に乗せていたタオルを、フランの頭に乗せている。

「サマナー、あったかいね」
羽根が邪魔にならないようにしながら恭司に寄り掛かっている。

「暖かいな。そうだフラン、何か歌でも歌おうか」
今度は二人で歌うみたいだった。

「昨日より弱くてー」

「でも今日より強くてー」
歌を教えて仲良く歌っている。

見目が幼女な吸血鬼と人間の青年の入浴。
何か犯罪の匂いがしそうだった。

「シャンプーハットを瞬着。フラン、覚悟完了かな？」
湯槽から上がり、フランにシャンプーハットを付けて髪を優しく洗
ってあげている。

「うんー……」

されるがまま洗われている。

その後もキャツキャツと長い時間風呂で遊んでいた。

「ねえ、この傷はどうしたの？」

再び湯槽に入って暖まっていると、フランは恭司の体に付いている
傷について興味を示して聞いていた。

「これは従姉と山に籠もった時の……」

昔の事を語ると、フランも心配したり楽しそうに聞いてくれたので
たくさん話をしていた。

そしてしばらく暖まってから風呂からあがり、一緒に脱衣場に。

「ほら、よく拭かないとダメだぞフラン」

自分を手早く拭き、着替えてからフランの髪や背をよく拭いている。

「ねえサマナー、明日も一緒に入ってくれる？」

髪を拭かれながら聞いている。

一緒に入るのが楽しかったらしい。

「そうだな、レミリアが許したらいいよ。今回はいきなりだったから仕方なくだから。次があれば泳ぐウルトラマン人形を持ってこよう」

拭き終わり、着替えさせながら話していた。

レミリアの許可がないと色んな意味で誤解を生みかねない。

「じゃあお姉様に聞いてみるね」

着替えさせてもらい、嬉しそうにしていた。

完全に妹や子供扱いだが気にしていない。

あんな事をしてしまった自分を恐れず、嫌わずに優しく接してくれる恭司に心を許している。

「ああ、それがいい。いい子なフランには特別サービス。どれがいい？」

フルーツ牛乳、コーヒー牛乳、牛乳をどこから取り出した。

「……フルーツ牛乳がいいな」

じーっと見て、悩んで決めていた。

「はい、どうぞ」

蓋を開けて渡した。

「んっ……あ、おいしい」

コキユコキユ飲んでいる。

「日本の銭湯だとこれが大体売ってるんだ」
牛乳の蓋を開けて飲んでる。

そんな銭湯も幻想入り間近かもしれない。

「あはは、サマナー白い髭できてるー」
フランもフルーツ牛乳の髭ができてる。

「何でも外の世界には髭で戦闘力が上がる人がいるらしいぞ」
某エレガントな執事が言っていた。

フランの口元をタオルで優しく拭い、自分のも拭っている。
そしていい気分のまま手を繋いで部屋に戻り、ベッドに入った。

「サマナー、貴方はあんな事をした私が怖くないの？」
横にいるフランがそう尋ねてきた。

「怖くないよ。どっちかと言えばナイフが全身に刺さってる時の美
鈴のが怖い」

そんな美鈴の姿を想像して顔が赤くなったり青くなったりしている。

「……よかった」
ぎゅっとくっつき、自分を怖がらない存在の鼓動を聞いている。

「おやすみ、フラン」
そう言いながら優しく頭を撫で、寝かしつけていた。

恭司は人間離れした回復力や能力を持っている自分のが怖かったりする。

翌朝

「で、だ。空を飛びたい」

朝になり美鈴が見に来たので一緒に朝食を摂りに向かった。

血を作る為にと朝から肉を食っている。

何故かトマトジュースもあるがカノソじゃないんだから無意味。

そして一緒に朝食を摂っていた美鈴に唐突に発言していた。

「えっと、これで？」

手をグーにして見せている。

「拳で空を飛びたくねえよ。フランや霊夢みたいに空を飛べたら気持ち良さそうだと思うてさ。魔法使いにならないと無理だとしても、魔法使いになる自信はあるし……ちくしょう」
現実を直視して絶望している。

未来の肉体は19歳、こちらの肉体も19歳。

合わせて38歳もピュアなままなので魔法使いになる条件は軽くクリアしている。

「げ、元気出してくださいよ」

そんな負のオーラを纏った恭司を慰める美鈴、マジ天使。

「あー、俺もイチャイチャしたいなあ。それでもっとそれを愛とか呼びたいなあ」

ズーンと暗くなり、フカヒレみたいな事を言っている。

「え、えっと私とイチャイチャしてみますか？」

あまりに憐れで見えいられなくなっている。

好意を持っているからこそその発言だと気づかないだろうが。

「いい。イチャイチャはしたいけど、それはいつかまだ見ぬ運命の人とするから我慢する」

優しい美鈴のお陰で復活した。

俗に言う赤い糸を視覚化したら、やたら凄い事になっている可能性はある。

「それよりも今は空を飛びたいんだ」
目がキラキラしている。

「うーん……。体調が完全に良くなったらコツを教えてあげますから、今は体を休めてください」
咲夜にも無茶しようとしたら止めるように言われている。

「美鈴、もう俺は完全に良くなった。だから……。つとと」
立ち上がり跳ねたりして見せたが、まだ完全には良くなっていないからふらついて倒れそうになった。

やはり回復するにも限度があるらしい。

「もう、ダメですよ。大人しくしていないと」
美鈴が慌てて抱き留めてくれている。

顔が近く互いに頬が赤いのが初々しい。

「すまん。でもこうされると落ち着くな……」
ずっと頼られるばかりで、あまり頼ることがなかった。

抱き締められている状態が凄く落ち着けて、安心した笑顔を見せている。

「……でもここだと凄く恥ずかしいですね」
照れているが何故か離さない。

妖精メイド達に注目されていて、第三者から見たらイチャイチャしているようにも見える。

「ん、美鈴みたいな嫁さんがいたら毎日楽しそうだな。デュエルも強いし」

下心なしで純粹に思ったことを口に出している。

この館で唯一デュエルで負けたのが美鈴。
あっさりとキィーイーされていたりする。

「なっ……も、もう冗談ばかり言ってますから。部屋まで送りますよ」
かなり動揺している。

抱き締めるのをやめ、肩を貸し歩き始めた。

「いや、冗談のつもりじゃなかったんだが……まあ、いいか」
肩を借り歩いていく。

恋だの愛だのが未だよくわかっていない。
分かっていたら外の世界でたくさんイヤイヤ出来ていただろうけど。

他にも色々と話しながら部屋の前まで送ってもらい、礼を言って部屋に入った。

「……………出来た。これが理想だ」
部屋で空を飛ぶ為に自分が使うアイテムを描いていたらしい。
ぶっちゃけエウレカセブンのリフボードだった。
飛行するイメージの媒体にするにはちょうどいい。

その描いている姿をスキマからこっそりと見ている妖怪がいる。
割と気に入っているからか、好感度を上げようと何か考えながら接

触せずにスキマを閉じた。

「後でパチュリーに礼を言いに行くついでに、空を飛ぶ方法を聞いてみよう」

腕を繋いでくれたのがパチュリーだったのをさつき美鈴に聞いていた。

地下図書館。

「また小悪魔さんに送ってきてもらいました」

パチュリーの前に座っている。

今日は本の代わりに大量のカードが積み重ねられていたりする。

「それで今日はどうしたの？」

デッキを一生懸命試行錯誤しながら組んでいる。

一枚一枚効果などを確かめているのか、まだ組み上がっていない。

「まずは腕を繋げてくれてありがとう。本当に感謝してる」
頭をさげて礼を言っている。

「でも腕が残っていないなかったら繋げられなかったわ。一応医者に見てもらった方がいいわよ」

医者ではないので繋げただけで、後から痛みがくるかもしれない。

「人里に戻ったらそうするよ。後さ、空が飛びたいんだがどうしたらいい？」

凄いきらきらした目をしていた。

パチュリーは子供みたいな恭司の目をじっと見て考えている。

「……そうね、何か空を飛ぶイメージがしやすい物を用意して特訓しなさい。貴方ならそれだけで飛べるはずよ。あの門番に習つていわ」

案外簡単な方法だった。

早くカードに集中したくてそわそわしている。

「ありがとう。それじゃ、がんばってデッキを組んでな」
小悪魔に連れられ出口に向かった。

「あの、恭司さん。門番の方にデュエルで負けたって本当ですか？」
小悪魔が歩きながら聞いてきた。

本棚がたくさんあり、きよろきよろしている。

「ああ、本当だよ。あの戦い方は予想外だった。さすが門番」
負けて悔しくはあったが、参考になって戦術が広がった。

そして小悪魔にその時の事を話始めた。

数日前。

門の前。

「デュエルを？」

「はい、私もデッキを作らせてもらいましたから。ルールもちゃんと覚えしました。是非、私とデュエルしてください！」
美鈴がデュエルディスクを付けて待っていた。

咲夜に渡したのを借りて付けているらしい。

「わかった。じゃあ、早速やろうぜ」
デュエルディスクを付けて展開させた。

「はい！」
展開させた。

「デュエル！」

「私のターンからです！ ドロー！ モンスターをセットして、カードを二枚伏せてエンドです！」
いい笑顔を見せている。

「俺のターン、ドロー！ スピード・ウォリアーを召喚。セットモンスターを攻撃する！ スピード・ウォリアーが召喚されたターン、スピード・ウォリアーの攻撃力は元々の攻撃力の二倍になる！ ソ

ニック・エッジ！」

ATK900 ATK1800

裏側守備モンスターがオープンされ、スピード・ウォリアーが加速して接近していく。

「アステカの石像です。この時、畏カードD2シールドを発動して元々の守備力を二倍にします」

DEF2000 DEF4000

「うあつ、しまった！」
アステカが二枚のシールドを持ちスピード・ウォリアーを弾き返した。

「アステカの石像を攻撃した時に相手プレイヤーが受けるダメージは倍になるんですね？」
にっこり笑っている。

「うわあああああつ！！」
弾き返されたスピード・ウォリアーが恭司にぶつかり、その衝撃で吹き飛ばされた。

LP4000 LPO

「わあ、私が勝っちゃいました！」
駆け寄ってきて起こし、汚れを払ってくれている。

「くっ、まさかアステカの石像を使ってくるとは思わなかった……。
やるな、美鈴」

もう一枚の伏せはバトルマニア。

負けて悔しいけど、短時間でこのコンボに気づいた美鈴を素直に称賛している。

「えへへ、褒められちゃいました」
照れている。

その後、色々話をして盛り上がっていると美鈴がナイフに刺された
り。

「って感じだったな」
話を終えた。

油断からのカウンターをくらい、一撃で倒されている。

「あ、あのですね。私にもその……」
もじもじと可愛らしく袖を掴んできた。

何か言い掛けてはやめてを繰り返している。

「何かな？ おじちゃんに言っくらん？」

もう小動物のように可愛くて、ぎゅっとしたくなるのを耐えて聞いている。

「私にもその、カードを……」
どうしてもやってみたくなくなっていたらしい。

恭司の許可が貰えたらいいとパチュリーに言われているらしい。
袖をぎゅっと掴んでいる。

「うわ、可愛い……。遠慮なくていいよ。だからデッキを組んだら今度デュエルしよう」
可愛い小悪魔がデュエリストになるのが嬉しいようだ。

「あ、ありがとうございます！」
ぺこぺこしている。

嬉しそうな笑顔を見て満足するしかねえ！

「今、鬼柳がいなかったか？」
思わず辺りを見回したが、本棚ばかりで誰もいない。

「さあ、早く行きましょう」
もう今にも歌を歌いそうなくらいご機嫌な小悪魔に連れられて出口に向かった。

そして出口まで送ってもらった事に礼を言い、部屋に戻った。

「こ、これは！」
部屋に入るとラッピングされた何かがベッドの上に置いてあり、手紙も添えてあった。

「なになに……」
手紙を読み始めた。

『この手紙を読んで振り返ったら』
自分の指で続きが隠れていて見えない。

「じくじく……」
ゆっくりと指をどかしていく。

『私がいる』
思わず振り返った。

スキマから上半身を出してこちらをじーっと見ている紫がいた。
見られていた事に驚いて心臓が大暴れしている。

「や、八雲紫」
フルネームで呼んだら不機嫌そうな顔になった。

恭司は厄介な奴が来たと内心思っている。

「……………」
ジト目で無言の圧力をかけてくる。

「……………」
ああ、もうわかってるよ。こつ呼べばいいんだろこつ呼べば。

ゆ、ゆかりん」

改めて言うとは恥ずかしくなってくる。

いい笑顔になってスキマから出てきた。

「恭司、それは貴方へのプレゼントよ。いいの、何も言わなくても欲しい物はわかっていているから」
言葉を挟ませずに言い切った。

盗み見ていたから分かっているだけで、紫が用意したわけでもない。藍様が数十分でやってくれました。

「……おおっ！ 美しいお嬢さん、どうもありがとうございます。お礼に今度お茶でもいかがですか？」
開けてみたら描いたリフボードと同じ物が包まれていて歓喜。

思わず柄でもない事を口走っている。

「ふふ、喜んでお受けしますわ」
夢中になってリフボードを見ている恭司に返事をしている。

「これでは特訓すればI can fly!」
レントンのように叫んでみたかったらしい。

凄いが機嫌な恭司は紫を見直して、紫に対する好感度が鰻登り。
紫の計画通りになっている。

しばらく楽しく会話をして、帰っていくのを見送った。

そして人里を離れてそろそろ一週間が経つ事に気づき、飛行できる
ようになったら帰ろうと改めて決意した。

続く。

紅魔館、空を飛びたい決闘者（後書き）

太陽龍と月影龍が好きだけど、月影龍がアニメでダークシンクロだったから使えなくて困る。

チーム太陽のカードはノーマルで収録してほしい。
またレアカード…！って言いたい。

空と頭突きと決闘者（前書き）

飛行。

人里に帰還。

頭突き。

空と頭突きと決闘者

リフボードを貰ってから数日。
紅魔館に来て既に八日目。

あの後必死に特訓を繰り返して、無事に飛べるようになった。
特訓の様子はカットするが、やたら地面にめりこんだ事だけは言える。

ちなみにフランが恭司と一緒に風呂に入りたいとレミリアに言ったが、許しが貰えず大喧嘩になっていた。

室内で起こる両者の激しい弾幕に悲鳴をあげて逃げ惑う恭司。

荒れた部屋を見て今までにないくらい激怒する咲夜。
涙目で恭司を盾にしてそんな咲夜から隠れる息の合った吸血鬼姉妹。
迫ってくる咲夜の怖さに顔を引きつらせる恭司。

何故か恭司までげんこつをもらい、しょぼんとしたまま風呂に入っていた。

そしてフランが突入、それを止めようとしたレミリアだったがそのまま仲良く入浴。

フラン以上にはしゃぐレミリアを微笑ましく見ながら楽しい時間を過ごした。

「そろそろ帰らないと死んだと思われてそうだな」
優雅に紅茶をいただきながら話をしている。

実際は新聞によって生存は確認されているが、本人だけは知る由もない。

「そうね。明日咲夜が人里に買い物をしに行くみたいだから、一緒に行ったほうが安全よ」

ようやく帰してくれるみたいだった。

能力が使えないのを知っているからか、やけに優しい。

「そうするよ。それにリフボードも使いたいし」

風に乗っているように飛行する姿はとても楽しそうだった。

「フランも貴方に懐いてるからたまには来なさいな。サーヴァント・サマナー？」

にやにやしてからかってくる。

「誰から聞いた。風呂でキャツキャツ騒いで、フランに生暖かい目で見られてたレミリアちゃんめ」

動揺しているがしっかり仕返しもしている。

顔が赤く、今更あんな事言わなければよかったと後悔している。

ブラックヒストリーである。

「う、うるさいわね」

こっちも赤くなり、誤魔化すように紅茶を飲んでいる。

「ま、また死ぬかと思った……」
帰ることをフランに告げると、四人に分身してやだやだと体中を引っ張られてヘンガーパーツみたいになるところだった。

ちよくちよく遊びに来ることを条件になんとか引つ張るのはやめてもらえたらしい。

それから咲夜、パチユリー、小悪魔、美鈴にも明日帰ることを告げてそれぞれに名残惜しまれていた。
一週間で色々な出来事を中心に居たから、それぞれの印象に強く残っている。

「やばい、いつのまにかこっちの生活を満喫してる俺がいる」
明日帰るため荷物をまとめている時に気づいた。

外の世界では過去に旅先で出会ったとある二人の大学生と十代が接触、詳しく話を聞いたりと探してくれているのに。

翌朝。

「さあ、十六夜を待つている間に……ってネオスのカードか？ 来てくれたのか十代！」
チラッと見た窓の外にネオス一式があつて急いで窓を開け、辺りを見回したが十代の姿はなかった。

ガツカリしながらカードを回収して窓を閉じている。

「これ精霊が宿ってないコピーみたいなカードか……。戦わなければ生き残れない」
ネオスを加えたHEROデッキを組み始めた。

「恭司、準備は出来ているのかしら？」
完全に呼び捨てで敬語なしになった咲夜がノックをしてから入ってきた。

「おう、行こうぜ」
リフボードを持って荷物を背負い部屋から出て外に向かっている。

青年、少女移動中。

「風に乗っているみたいでやっぱり気持ちいいな」
二人で空を進んでいる。

リフボードの使い方もうまい。
ただリフボードは空を飛ぶイメージに使っているだけなので、あの作品のとは一切関係ありません。

「規格外の人間よね、貴方って」
流石に数日で飛べるようになった事に呆れている。

徒歩と違いかなり早く人里に着けるのはいいが、妖精達に弾幕を張られたりする恐れもある。

「それは誉めてるのか？」実体化は出来ないが、カードの精霊達が一緒に飛んでいる。

ガスタ・イグル、ガスタ・ガルド、BF等の鳥獣族ばかり。

人里。

特に何も起こらず無事に到着。

咲夜に礼を言いすぐに慧音の家に向かった。

途中何人か人里の女の子に黄色い声をあげられたり、熱い視線を送られたりしたが何でかよくわかっていない。

「うわぁ……凄い怒気が伝わってくる……」

慧音が玄関で仁王立ちしていた。

毎日毎日寺子屋が終わると家の前で仁王立ちをして待っていたらしい。

こちらに気づくと凄くいい笑顔で手招きを始めた。拒否は出来ない、魔王からは逃げられないのと一緒に。

「た、ただいま戻りました……」

あまりの怒気に怯えながら答えている。

人里の人達も遠巻きに見ているが、恭司に向かって手を合わせている者が多数いた。

「ようやく帰ってきたか」頭を両手で掴み、強い力でギリギリと締め付けてきて痛い。

「いたたたたた！」
逃げられないが必死にじたばたしている。

「そうか、痛いか。だがこれは私に心配をさせた罰だ」
ギリギリとさらに力を込めている。

「ひいひいひいっ！！」
激痛で涙目になり、慧音の手を外そうと掴むがびくともしない。

遠巻きに見ている人達もリアルに痛そうな悲鳴をあげる恭司を見て頭を押さえている。

「ふっ！」

そして強烈な頭突きを繰り返し、凄い音を人里に響かせた。

だがまだ手を放していない。

「の、脳が！ 脳が揺れてるっ！ 俺のライフは0ですっ！」
少し余裕があるように見えるが、かなり足にきている。

「反省、しろっ！」

一回目より音が響く頭突き。

体が丈夫な恭司でも気絶するくらいの威力。

恭司の頭から手をゆっくりと離れた。

「……………」

地面に崩れ落ち、俯せに倒れこんでいる。

「堅い頭をしているな……………」

慧音も頭がズキズキしている。

倒れている恭司を背負い家に入っていった。

慧音宅

「んんっ……………はっ、ここは」

目を覚まし、ズキズキする頭を押さえて見回した。

寝かされていたのは借りている恭司の部屋で、きちんと掃除もされている。

「ようやく目を覚ましたか、馬鹿者め」

呆れた慧音が座って見ていたようだ。

紅魔館に行くという手紙を見てからずっと心配してくれていたらし

い。

「いや、本当にごめんなさい」
正座をして真剣に謝っている。

「まったく……。怪我は平気なのか？」
新聞に載っていた千切れた左腕の件で、くっついているのは見ればわかるけれど心配している。

「帰ったら医者に見てもらおうと言われ……」
その時床がガタガタ動き始めた。

「オイスー。もこたんインしたお！」
床をパカッと開けてモンペ姿の女性が姿を現わした。

慧音を元気づける為にちよっとしたサプライズ感覚だったらしい。
時が停まったような静寂が部屋を支配している。

「……えっと、もこたん？」
恭司が思わず聞きなおした。

「け、慧音……」
ちよつと恭司と目があって顔が真っ赤。

パカッと開けたままの状態から動けなくなっている。
恭司は居ないと思い、慧音を元気づける為にやった事だった。

「妹紅、よかつたな。これで打ち解けられるぞ」
妹紅の肩をぽんつと叩いた。

「うむ、可愛かったから百点」
恭司が腕を組んで頷いている。

パカッと開けている姿が可愛かったのか気に入ったようだ。

「う……わああああつ！」
素早く閉じて、逃げ去っていった。

かなり恥ずかしかったらしく、顔を真っ赤にしたまま飛ぶことも忘れて走っていった。

「もこたんか……」
本当の名前がわからない。

そのまま昼食を軽く済ませ寺子屋で使う資料をまとめるのを手伝った。
大体の作業が終わる頃には夕方になっており、夕飯の準備をするのを手伝いながら紅魔館で起きた出来事を話している。

「え、それまで新聞に？」
慧音が何故バーニング・ソウルの境地について知っているのかが不思議で聞いてみたら、またも新聞と答えられた。

「悪魔の妹を圧倒したらしいじゃないか、人里でも騒ぎになってい
たぞ。みんな死んだと思っていたお前が、まさかそんな事をしてい
るとは思ってもよらなかった」
号外として配られた新聞によってほとんどの人が知っている。

稗田家のある人物と恭司が出会うのも時間の問題。里長は新しく人
間の強い味方が出来たと喜び、寺子屋の子供達も早く教わりたいと
毎日そわそわしていたらしい。

「かなり恥ずかしい事になっていて正直困る」
野菜を切りながら照れていた。

その後、からかわれながら準備を済ませ二人で夕食を摂った。
夕食後、部屋に戻り今後について考えている。

「しばらくは慧音さんの仕事を手伝って、しばらくしたら次はどこ
に行ってみようか」
幻想郷を満喫している。

- 1、妖怪の山の神社に挨拶かな。
- 2、腕の調子が心配だから医者を探そう。
- 3、そろそろ霊夢に会いに行ってみようか。

- 4、魔法の森にある店、もしかしたら何かあるかも。
- 5、無理はしないで人里で過ごすか。

続く。

空と頭突きと決闘者（後書き）

次はどこに行かせよう。

DT10が絶版になるってマジなんでしょうか。
後、九月からの新・禁止制限を見てびっくりしました。

竹林、不死の少女と決闘者（前書き）

LP4000だとバーンデッキは危険。

TF仕様のカード有り。

能力完全回復。

竹林、不死の少女と決闘者

紅魔館から人里に帰還して一カ月程経った。

能力は完全に元に戻り、さらに前回より無茶が効くようになっていく。限界を超えて能力を行使した事で許容量が増えたようだ。

教師生活は順風満帆だったが、デュエルの普及は芳しくなかった。

そして左腕がたまに痛むのが不安になり慧音に相談した結果、迷いの竹林の奥の屋敷にいる薬師が人里の技術を越えた治療もできると言うので竹林に向かうことになった。

出かけに手紙を預かり、妹紅と呼ばれる人物に渡し案内してもらったように言われていた。

迷いの竹林入り口。

「で、妹紅って誰なんだろう」
リュックを背負い、手紙を持ってうろうろしている。

インしたお事件から、人里でちよくちよく会って仲良くなっている人物が妹紅だという事に全く気づいていない。

「あ、恭司だ。何やってるの？」
妹紅が竹林から歩いてきた。

何回も会って話している内に悪い奴じゃないと気づき、心を許してかなりフレンドリーになっている。

「おお、もこたんじゃないか。いやな、腕が痛くて慧音さんに相談したんだよ。そうしたら妹紅って人にこの手紙を渡して薬師の所に案内してもらえって言われてさ」
手紙を見せて妹紅が誰かを尋ねている。

もこたん呼びで定着しており、本名を知らなかったりする。

「あー、そうだった。自己紹介がまだだったね。私が妹紅だよ、藤原妹紅」

もこたん呼びに慣れてしまい自己紹介をしていなかったのを思い出し、改めて自己紹介をしてくれた。

「なるほど、だからもこたんだったのか。それで、今後どう呼んだらいい？」

本名を知った以上呼び方を変えるべきか、と思っている。

「いいよ、慣れちゃったし今まで通りの呼び方でちよつと照れている。」

恭司に普通に呼ばれたら逆に違和感を覚えるように。

「わかった。それで案内を頼みたいんだけど、今は平気？」
手紙を渡して案内を頼んでいる。

背負ったリュックが重たそうだった。

「平気だよ。……あ、そうだ。この前貰ったカードでデッキ組んでみたから相手になってくれない？ そうしたらすぐに案内してあげるからさ」

手紙を受け取り、そう提案してきた。

慧音と一緒に恭司が居ない時にデッキを組んでいたらしい。

「いいぜ、久々のデュエルだから楽しみだな」
リュックからデュエルディスクを取り出して渡した。

たまに現われる外来人に決闘者もいるらしく、壊れて動かなくなつたデュエルディスクを置いていくらしい。

かなりの量の壊れたデュエルディスクが人里にあり、引き取ってもらうように頼まれていた。

その処理に困っていたデュエルディスクを全て回収し、それをバラし使えるパーツを集めて組み直した事で回収した半分近くのデュエルディスクが使えるようになっていた。

使えなくなつたパーツも保存して何かに使つつもりのようなのだ。

「へえ、これが」

腕に付けて動かし、デッキをセットして眺めたりしている。

「さあ、やるうぜ」

恭司のデュエルディスクは起動すると七色の光を発する他のとは性

能が段違い。

未来で使っていたデュエルディスクをオシリスレッド仕様に変えた物で、モーメントで動いている。

「デュエル！」

「私のターン、ドロー！ 永続魔法、ヴォルカニック・ウォールを発動！ 1ターンに1度だけ自分のデッキの上から三枚墓地に送る事ができ、この効果で墓地へ送った炎族モンスター1体につき500ポイントのダメージを与える。この効果を発動するターン、私のモンスターは攻撃することが出来ないけど今は関係ないよね」
ヴォルカニック・バックショット、ヴォルカニック・カウンター、ヴォルカニック・バレットと三枚の炎族モンスターが墓地に送られた。

さらにヴォルカニック・バックショットが墓地に送られた事でLPに500のダメージが追加される。

「うあああつー！」

LP4000 LP2000

「手札からヴォルカニック・エッジを召喚、そして効果で相手に500ポイントのダメージを与える！ この効果を使うとこのカードは攻撃する事が出来ないけど」

ATK1800

「くっ！」

いきなり半分以上のLPを削られてしまい少々ピンチ。

LP2000 LP1500

「ターンエンド」

にまーっとこちらを見て笑っている。

「俺のターン、ドロー！ 手札から永続魔法、黒い旋風を発動！

そして相手フィールド上にモンスターが存在する時、レベル5のBF - 暁のシロッコはリリースなしで通常召喚する事が出来る！ さらに黒い旋風はBFと付くモンスターが通常召喚された時、デッキから召喚されたモンスターの攻撃力より低いBFと付くモンスターを手札に加える事が出来る。俺はデッキからBF - 月影のカルートを手札に加える」

暁のシロッコ

ATK2000

相手に見せてからカルートを手札に加えている。

ヴォルカニックバーン相手は厄介なので一気に片をつけるつもりらしい。

「さらに手札のD・D・クロウの効果を発動。D・D・クロウを墓地に捨て、妹紅の墓地にあるヴォルカニック・カウンターを除外さ

せてもらおう」

ニツと笑って除外を宣言。

デュエル中はしっかり名前で呼んでいる。

「ああっ、恭司ずるい！」

除外されたカードを見て焦っている。

カウンター狙いのカードだったらしい。

「ふふん。自分の場にBFと付くモンスターが存在する時、手札からBF - 疾風のゲイルを特殊召喚する事が出来る。さらにBF - 黒槍のブラストも同様に特殊召喚する事が出来る」

疾風のゲイル

ATK1300

黒槍のブラスト

ATK1700

「何そのインチキカード！ 一気に三体も出てきて！」
黒羽の宝札もアニメ初登場仕様なので一番厄介なデッキだったりする。

「さらに疾風のゲイルの効果でヴォルカニック・エッジの攻守を半分にさせてもらおう」

ヴォルカニック・エッジ

ATK 1800 ATK 900

DEF 1200 DEF 600

「ううう」

計算が狂って困っている。

「さらに永続魔法、一族の結束を発動。このカードは自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が一種類の場合、自分フィールド上その種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする」
墓地に存在するのは鳥獣族であり、全てのBFの攻撃力が上がっていく。

暁のシロツコ

ATK 2000 ATK 2800

疾風のゲイル

ATK 1300 ATK 2100

黒槍のブラスト

ATK 1700 ATK 2500

「やっぱりずるい……」

妹紅のデッキにも結束は入っているが展開力の差でこんな事になっていた。

「シロツコでヴォルカニツク・エッジを攻撃、そしてプラストでダイレクトアタック！」
シロツコがヴォルカニツク・エッジを撃破、その横をプラストが駆け抜け妹紅を槍で貫いた。

「きゃあああつ!!」
刺さった槍がかなり痛そうに見える。

LP4000 LP0

「いや、すまんかった。だからいい加減に機嫌をなおしてくれよ」
デュエル後に妹紅が拗ねてしまい、延々BFについて文句を言われている。

妹紅がヴォルカニツクデツキを作ってきたのも予想外で、オブライエンを思い出したりもしていた。

「……今度人里でお団子奢ってもらおうからね」
しっかりと甘い物が好きで女の子らしかった。

「わかったよ。だからそろそろ行くこうぜ？」
自分のデュエルディスクをしまい、さっきのデュエルディスクを妹紅にプレゼント。

立ち上がり、二人で竹林に入っていた。

迷いの竹林。

「あ、そうそう。恭司、輝夜には気をつけるんだよ」
竹林を歩きながら忠告している。

「輝夜？」

誰だそれ？って不思議そうに聞き返しているが、視線はおいしそうな筈に向いている。

「……知らないのなら仕方ないか。輝夜はね」
様々な悪い話を聞かせてくれた。

曰く、男を騙して貢がせる。

曰く、年中ぐーたらしている。

曰く、千年間引きこもり。

等々。

「なんかよくわからんが気をつけるよ」
延々愚痴を聞かされながら歩いている。

殺し合う仲と聞いてかなり驚いたが、すぐに違う愚痴を言い始めて詳しくは聞けなかった。

まだ蓬萊人については知らないのだからかなり心配している。

「だから……きゃっ！」

下を見ていなかった妹紅が筍につまずいて転びそうになり、咄嗟に腕を掴んで引き寄せた。

「もこたん、下も見ないと危ないぞ」

引き寄せて抱き留めたことで密着している。

筍を見て、帰りに拾おうと考えているので密着している妹紅の様子が分かっていない。

「あ、う、うん……」

中々離れようとしめない。

「あの筍で煮物を作ったら……ってどうした？」

既に腕は離しているのに、中々離れない妹紅を訝しげに見ている。

服に何か付いていたのか確認したりしている。

「あ、いや。恭司は太陽の香りだなーってね」

顔が赤く、酷く慌てて離れた。

太陽の香りと言われて不思議そうに妹紅を見ている。

「ありがとう？」

一応礼を言っておいたがよくわかっていない。

そして気まずい空気のまま歩いていると誰かに見られているのに気づいた。

集中して相手の位置を探っているが、迷いの竹林だけあって動きながらこちらを見ている存在を見つけることは出来なかった。

「無理か……」

立ち止まり周りを見渡していた恭司を妹紅が不思議そうに見ている。

「恭司、妖怪でも見た？」

警戒して炎を見せながら囁いてくる。

「いや、大丈夫だ。誰かに見られていた気がしただけだから」
妹紅が炎を使えるのは知っているので驚かずに答えた。

今も見られているが、気にしている間に接近されたら困るので先を急ぐことに。

急ぎ歩いていく二人。

そしてそんな二人を遠くから見る一つの影。

ウサウサと悪巧みをしながら観察しているその影の正体とは。

続く。

おまけ。

「ところで恭司さ、慧音の裸見て顔面に全力で膝蹴りくらったって本当？」

前を歩く妹紅が唐突に言い放った。

その妹紅の後ろ姿がとても怖く見える。

「あれは事故だったんだ。てか俺が入っていた風呂に入ってくるなんて夢にも思わなかったわけで」
不穏な空気を感じ取り、自分は悪くないと遠回しに言っている。

慧音の裸をバツチリと見てしまい、次の瞬間には膝が顔面にめりこんで気絶。

気絶から目覚めると服を着て部屋で寝かされていた。
枕元に座って心配そうにしていた慧音に謝られ、恭司も謝ったがその日から慧音が頬を染めチラチラとこちらを見ることが増えて落ち着かない毎日だったりする。

「ふーん」

振り向いた妹紅の手からは炎がメラメラと。

どう弁解してもこうなる運命だった。

「あ、あの、妹紅さん……?」
ジリジリと後退り。

「まあ、不注意な慧音も悪かったよね」
ニコツと惚れてしまいそうなくらい可愛く笑っている。

そんな笑みを浮かべながらじりじりと迫ってくるのは恐怖以外の何物でもない。

「い、いや、少しは俺も悪かったかなーって……」
後退りしながらこの後の展開を予期している。

「そうだよな？ だからこれは悪いことをした恭司に対する罰だから、ね！」

軽く火傷するくらいに制御された炎を投げつけてきた。

「な、なにをするだアーツ！」
思い切り避けて非難の声をあげた。

カードは燃えないように実体化させたスピード・ウォリアーに持たせてジョースター家に代々伝わる戦い方を始めた。

そのまま一時間ほど鬼ごっこ。

所々服が焼けた所で許してもらえ、ロスした時間を取り戻すように永遠亭へと急いだ。

荷物を持ったスピード・ウォリアーも二人に付いていつている。

おしまい。

竹林、不死の少女と決闘者（後書き）

妹紅はヴォルカニックデッキ。

大体のカードはコピー扱いでカバンに入ってます。

グランエルとワイゼルは強いのに、スキエルと機皇城がガツカリ効果すぎる。

竹林、不死と兎と決闘者（前書き）

混ざった魂は二人分。

雑用係スピード・ウォリアー！。

竹林、不死と兎と決闘者

追い掛けっこの後、妹紅の後を付いていくと落とし穴があり誰かが落ちていた。

「ウサギの耳を付けてブレザーを着た女の子が落ちてる……。こ、これは良い子な俺に神様からのプレゼント？ ……まさか助けて抱きつかれたりしてたら実は美人局で、怖いおっさんに脅されるんじゃない」

少女は気絶しているようで動かない。

一応怖いおっさんを警戒して周りをキョロキョロ見ている。付いてこなくなった恭司に気づいて妹紅が戻ってきた。

「恭司、何見てるの？ ……なんだ輝夜のこの兎じゃない。罨に掛かって落下して気絶したみたいだけど」
恭司の隣で穴を覗き込んでいる。

誰かの罨にかかり、深い落とし穴に落ちたらしい。

「え、なにそれこわい。とりあえず助けるしかないな」
縄を投げ縄にしてなんとか胴体を挟み、ゆっくり引っ張りあげている。

「くっ、軽そうに見えて意外と重……ひいっ！」
顔ギリギリを弾が通り過ぎていった。

気絶しているはずなのに重いという単語にぴくっと反応し弾を放ったようだ。

「馬鹿だねえ。女の子にそんな事言っつから隣で妹紅が愉快そうに笑っていた。」

恭司が顔を赤らめながら黙々と引き上げているのに気づいた。何かぶつぶつ呟いている。

「……うん、これは事故事故。俺は悪くないし、どっちかと言えば助けてるし」

引き上げていく内に縄で胸が強調され、それに目が行きデレデレして言い訳をしていたらしい。

人並みに異性に興味があるお年頃だから仕方ない。

しかも引き上げているのが可愛い女の子だから余計に仕方ない。

「変態」

そんな恭司を見る妹紅の目が冷たかった。

イラッとしたらしく背中をぎゅーっとなっている。

「痛たたたたっ！　ク、クマ吉大先生が言っていた……。仮に変態だとしても、変態という名の紳士だと……って痛い！　マジ痛いって！　小さくつねるのは反則だろ！」

つねられた痛みで涙目になりながら引き上げている。

ねんがんの ウサみみブレザーしようじょ をてにいれたぞ！

そう かんけないね。

「ころしてもうばいとる。

ゆずってくれ たのむ。

「とりあえず連れていくなら自分でなんとかしてよね。私は背負うなんて絶対嫌だからね」
つねるのをやめて妹紅が歩き始めた。

「まったく、もこたん酷いぜ。よっと、失礼」
縄を外してウサ耳ブレザー少女を背負った。

忘れられがちだが、スピード・ウォリアーもちゃんと付いてきている。

青年、少女＋ 移動中…

「……そんなわけでフランに懐かれたんだよ」
歩きながら紅魔館での出来事を妹紅に詳しく話をしていた。

人里では普通の話ばかりで紅魔館での事は話していない。
いい機会だったようだ。

「はぁー、恭司は外人でも飛び抜けた馬鹿かもね」
紅い屋敷が見たいという理由だけで向かった事を呆れている。

一番呆れたのは幻想郷縁起に載っている危険度が極高、人間友好度が極低の悪魔の妹を退けた挙げ句に仲良くなっている事だったりするが。

「馬鹿で結構だ。俺はその馬鹿を極める」
キリツとした顔で言い切った。

ウサ耳少女が背中でもぞもぞ動き、顔をすりすりと擦り付けられている。

マーキングしてるようにも見えた。

「ん……」

心地良いのかウサ耳少女がぎゅっとくっついて擦り擦りしている。

「こ、これは……。こんな可愛らしい行動をする女の子がいるなんて。明日香は殴るわ蹴るわ酷かったし、鈴先輩は妙に怖かったし」
ウサ耳少女の行動の可愛らしさに感動している。

そんな恭司を妹紅がジト目で見ている。

「……まあ、こんな恭司と生活してるから慧音も気になってるのかな」

あまり自分を着飾らずデュエルが大好きで子供みたいな大人、おにぎりマイスター。

「何か言ったか？」
いつもの恭司に戻っている。

気力は十分、今なら三幻神を全て実体化できそうだった。

「別にー。ほら急がないと日が暮れるよ」
再び歩き始めると、装着したままのデュエルディスクがカチャカチャと音を立てる。

「割と遠いな」
話し込んでいたせいで何回か道を誤っている。

しばらく歩いていると妹紅が疑問を口に出してきた。

「ねえ、その兎を背負ってるけど左腕痛くないの？」
少しだけ心配そうな声で聞いてくる。

「痛くないよ。急に痛みが起きて、それが続く時があるから診てもらいに行くわけだし」
ずっと痛かったら泣いてる、と冗談で返していた。

いつも痛むわけではなくたまに痛む。
その痛みが一日は続くので眠れない日もあり、何より寺子屋での授業中に左腕が痛くなって押さえるのが邪気眼みたいで嫌だったようだ。

静まれ、俺の邪気眼……！

「とか言ってるけど本音は？」
やせ我慢をして背負っているんだと考えている。

「な、なんだよ。可愛い子を背負ってるから我慢してるとかじゃないんだからな！」
動揺しているのがバレバレだったが、痛くないのは本当。

二人の会話は続いている。

「そういえば恭司って外から来たんだよね？ デュエル以外はどんな事してたの？」

「主に世界を救う戦いに巻き込まれたり、異世界に連れていかれて世界を救ったりしてたな」
世界を救う以外は遊んでばかりだったが。

三幻魔、破滅の光、精霊界、ダークネス等。
ダークネスの時は十代の護衛として色々立ち回り、決着まで見届け
ていた。

「え？」

何言ってるのこいつって目で見られ、恭司は少し傷ついていた。

普通だったら信じられない事だが、十代や愉快な仲間達と世界を救っているのは事実。

「ふつ、詳しくは寺子屋に来れば聞かせてやるよ」
子供達は信じてくれるのに、とぶつぶつ言っている。

毎回早めに授業を終わらせて子供達にアカデミアでの事等を話して聞かせている。

子供達もそれが聞きたいから真面目に授業を受ける事で、その日の範囲を早めに終わらせるようにがんばって成績も上がる。
幸せスパイラルだった。

そんなこんなで永遠亭付近に到着。

「私はここら辺で待ってるから、終わったらすぐにここに来るんだよ？ 輝夜に捕まったら呼んでくれれば助けに行くからね」
凄い心配されている。

それだけ心配されると怖くなるのが人間。

「怖いこと言うなよ。捕まったら何されるんだよ……。この子も見てもらわないといけないから行くけどさ」
入り口に向かっておっかなびっくり歩いていく。

永遠亭。

「門か？ 昔の日本みたいな感じだな。オープンセサミ！……
…無理か。スピード・ウォリアー代わりにノックをしてくれ」
門や鍵の掛かった扉では何故か言ってしまう言葉を堂々と言っている。

しかし開く訳がなく、背負っていて手が塞がっているのでスピード・ウォリアーにノックを頼んだ。

スピード・ウォリアーが門に近づいてノックしようとした時

「えっと……運んでくれてありがとう。全部聞いてたから、ここからは私が案内するね。私、ここに住んでるの」

背負っていた少女が耳元で囁くように言い、恭司の背から降りて自分の足で立った。

背負われていたのが恥ずかしかったのか顔が赤い。

「あ、ああ、どういたしまして。スピード・ウォリアー、お疲れ様」
耳元で囁かれてドキドキしている。

スピード・ウォリアーから荷物を受け取り、カードに戻した。
そして改めて少女を見て心の中で可愛いと頷いている。
そして妹紅との会話をどこから聞かれていたのか不安になった。

「こつちよ」

門を開けて中に連れられていく。

接しやすいのか敬語じゃなく、助けられた事で信用されているのか
優しかった。

「……まあ、なんとかなるか」

そのまま連れられていったが、輝夜とやらの事が不安で仕方ない。

ようやく着いた永遠亭、何故か優しいウサ耳少女に連れられて内部に。

輝夜とやらの存在が不安で仕方のない恭司。

次回、薬師の魔の手が迫る！……多分。

続く。

おまけ。

あるウサ耳少女が意識を取り戻した時の話。

「（ん……そうだ私は確かてゐの罨にかかって落とし穴に……）」
体が揺られ、話し声が聞こえてようやく目が覚めたようだ。

そして誰かに背負われているのに気付いた。

「……そんなわけでフランに懐かれたんだよ」
聞いた事のない男の声が聞こえてくる。

フランという単語で先日の号外で配られていた新聞の記事が頭を過った。

とんでもない人間が現われたものだと思ったのを思い出していた。

「はあー、恭司は外人でも飛び抜けた馬鹿かもね」
聞き覚えのある声も聞こえてくる。

いつも姫と殺しあいをしている人間の声だった。

「馬鹿で結構だ。俺はその馬鹿を極める」

何やら背中がかなり心地良く、思わず顔をすりすりと擦り付けてしまっている自分に気づいたが止められなかった。

無意識の内にマーキングのような行動を取っている。

「ん……」

魂ごと包まれるような安心感に思わずぎゅっとくっつくついている。

「こ、これは……。こんな可愛らしい行動をする女の子がいるなんて。明日香は殴る蹴るわ酷かったし、鈴先輩は妙に怖かったし」
目は閉じているが、可愛いという単語で顔が真っ赤になっているのが分かる。

二人の掛け合いも耳に入らず、太陽の匂いのする背中に顔を埋めている。

挨拶も自己紹介もしていない人間に心を許している自分に驚きを隠せない。

包み込まれるような心地良さが重要だった。

人間の枠を超えた存在を虜にする何かがあるのかもしれない。
これが優しく接してくれた理由。

この心地良さに気づいているのが自分だけの内に好感度を稼ごうと
していたのかもしれない。
それも無意識でそんな事をしている。

おしまい。

竹林、不死と兎と決闘者（後書き）

特殊なオーラでも出てるのかも。

世界を救う戦いとか当事者達以外が聞くと絶対こっなる。

永遠亭、兎と薬師と決闘者（前書き）

考えなしに書き連ねた結果がこんな感じ。
来週出るTF5が今から凄い楽しみ。

永遠亭、兎と薬師と決闘者

二人で永遠亭の中を歩いている。

恭司が少し距離を開けて付いていくが、その開けた距離が気に入らないのか急に手を掴まれて連れていかれることに。

互いに手を繋いだけで顔を赤くし、とても初々しい。

「そついえば君の名前は？」

ようやく名前が分からない事に気づいた。

中は広く、昔の日本の屋敷のようだった。

「あ、そ、そうだよ。私は鈴仙。鈴仙・優曇華院・イナバ」

手を放してから向き直り、自分の目を恭司が見ないようにして自己紹介をしてくれた。

もじもじしている姿が可愛らしく、恭司のドキドキも止まらない。

「これはご丁寧にも……。俺は鉄恭司、スキマのお嬢さんに連れてこられた外来人の決闘者。恭司って呼んでもらえるとその、なんだ、嬉しい」

それでも真面目に自己紹介。

男と接する機会が少ないから相手は照れているだけで好意を向けられていないわけではない、とネガティブに捉えて多少冷静になった。

「き、恭司？」
いきなり呼び捨てと相手のレベルは予想以上に高い。

また勘違いしそうになったがネガティブに考えて落ち着いた。

「ああ、恭司だ。えーっと優曇華院、でいいのか？」
どこを呼べばいいかわからなかった。

そしていつのまにかまた手を掴まれている。

「鈴仙、でいいよ？」
相手は照れながらも慣れてきたのか親しげに接してくれている。

恭司は割と単純だから誤解してしまいそうになる。

「（ときめくな俺の心。揺れるな俺の心。恋は覚悟を鈍らせる）」
ぐっと目を閉じてある言葉を思い浮かべた。

「どうかしたの？」
心配そうに恭司を見ている。

名前で呼んでもらうのをドキドキしながら待っている。

「いや、なんでもない。鈴仙、そろそろ行こう。痛みの原因が早く

知りたいしな……っでどうした？」

さり気なく名前で呼んで、薬師の元に急ごうとしていた。

しかし、ぽけーっとしてにやけている鈴仙を見てギョツとしてしまった。

「……はっ！ な、なんでもないの！ 早く行こう！」
名前で呼ばれ意識が別の世界に行っていた。

この短時間で未来の二人の間に子供が何人か産まれる所まで考えていたり、完全に虜になっている。

「あ、ああ」

流石に可愛くても少し引いてしまう。

腕を強く握られたまま歩いていく。

診察室の外。

「師匠、患者の方をお連れしました」
襖の外で声をかけている。

『ウドンゲ？ 入ってもらいなさい』
中から落ち着いた女性の美しい声が聞こえてきた。

しかし恭司は嫌な予感が凄くしている。

例えるなら、こちらを責める口実を見付け嬉々として向かってくる明日香。

「な、なんだこのプレッシャーは……。いいぜ、立ち向かってやるよ」

鈴仙が襖をゆっくり開けていく。

ちよつと格好いい事を言っているが、恭司の手には強制脱出装置と強制転移が握られている。

いざとなったら逃げる気満々だった。

診察室。

中に入ると青と赤が交差した血管のようなイメージの服を着た綺麗な女性が椅子に座りこちらを見ていた。

こちらを観察するような眼が妙に爛々としているように見える。

その眼を見て恭司は確信した。

こいつは明日香と同類だ、と。

「あら、やっぱり来たのね。いつ来るのかと思っていたけれど。じやあ、ここに座って？」

まるで来ることがわかっていたような口振りだった。

触診の為に自分の前の椅子を指差し、弟子らしい鈴仙は薬師の後方に待機している。

「……よろしくお願ひします」
椅子に座った。

何故か診察室の隅に置いてあるデュエルディスクに目がいく。

「私は八意永琳。永琳でいいわ」

突然自己紹介をされて視線を目の前の薬師に戻した。

「永琳さんですか。俺……自分は鉄恭司です」
自己紹介は目を見てしっかりとしている。

何故か自然と右腕を振り上げておろしたくなる。
助けてと言えば助けてくれそうな薬師だった。

「それじゃあ早速」
左腕の触診を始めた。

途中何度か鈴仙に何かを伝えたりしながら診ている。

「いつ！……たかないです」
ある場所を触られた瞬間に激しい痛みが襲い、思わず叫びかけて涙目になっている。

目の前の薬師が凄じそうに嬉しそうな顔をしているのが気になって仕方がない。

「……」

痛む場所を重点的にぐりぐりと触れられている。

痛む場所を探す為には仕方ない事だと分かっているても痛くて仕方がない。

「そ、そこです……」

鈴仙もいるから痛くても痩せ我慢して答えている。

「そう。わかったわ、少し待ってなさい」

何かを取りに部屋を出ていった。

見送ってから置いてあるデュエルディスクに近づいて観察している。

「鈴仙、これはどうしたんだ？」

しゃがんでデュエルディスクに触れているが壊れているのか起動しない。

「姫様が欲しがっていて、人里から貰ってきたんだけど動かなくて。師匠も直せないからそのままなの。他の三つは動いたんだけど、姫様はこれがいいって……」

恭司の隣に来て教え、どうして？って顔で見ている。

「あ、そうだ。これみんなでどうぞ。手作りだが自信はある」

鈴仙達も決闘者と分かったが今は壊れているデュエルディスクが気になって仕方ない。

人払いも兼ねて、人里で買った素材と紅魔館で買った素材で作ったクッキーを詰めた袋を手渡した。

他の洋菓子を作るには素材不足だが、クッキーもいい香りがしてすぐに食べたくなる完成度だった。

「わぁ……ありがとう。後で戴くね」

嬉しそうに受け取って、それをどこかに置きに行った。

計画通り一人になれて、悪い顔をしている。

「んじゃま」

直そうか、と手を付けた時

「大人しく待てないのなら大人しくさせましょうか？ それにそれは姫の物。貴方が触れていい物ではないわ」
薬を持った永琳が戻ってきていた。

しやがみこんだ恭司の背を見ている。

「悪かったよ。だけど直せる物は直したいんだが」
立ち上がって振り向き、そう言った。

「貴方に直せるのかしら？」
値踏みするようにこちらを見ってくる。

「……じゃあ、デュエルで決めよう。俺が勝ったらこのデュエルディスクを直させてもらう」
デュエルディスクを付け、デッキをセットした。

起動するとこの時代のデュエルディスクにはない不思議な光を放つ。

「そう、じゃあ私が勝ったら貴方にはちょっとした薬を飲んでもらうわね」

ハイリスク・ローリターンだった。

デュエルディスクを付けてこちらを嬉しそうに見ている。薬を飲ませる口実が出来たからだろうけど。

「うわあ、なんか一気に雰囲気変わってる。……勝たないとやばい事になるんじゃないかこれ」

さっきまでのがこちらを騙す為だった事を知り、顔が引きつっている。

部屋を移し、距離を取って対峙した。

戻ってきた鈴仙がおろおろしながら二人を見ている。

摘み食いをしたのか口元にクッキーの欠片がついているのが激ぶりちー。

「楽しみだな、薬師さんはどんなデッキなのか」

楽しむことに決めたらしくわくわくした目で見ている。

「ふふふ、楽しみだわ」

勝った後に飲ませる薬の効果を見るのが楽しみで仕方ない。

「デュエル！」

「私のターンから、ドロ！。墮天使ナース・レフィキュルを召喚、そしてカードを二枚セットしてターンエンドよ」

ATK1400

「凄い嫌な予感がする。鮎川先生的な意味で……ドロ！」
身震いしてカードを引いた。

「永続罫、ダーク・キュアを発動。貴方がモンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、そのモンスターの攻撃力の半分だけLPを回復する効果よ」
ニッコリしている。

「なん……だと……？」

「さらに罫カード、サディステック・ポーションを発動。発動後、このカードは装備カードとなるからレフィキュルに装備。カードの効果によって相手にダメージを与えた時、そのターンのエンドフェイズ時まで装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップするわ」
「
凄く嬉しそうにしている。」

「あんたに必要なソイル……カードは決まった。光の英雄、E・HEROスパークマン。大地の英雄、E・HEROクレイマン。そして、その二体を融合させるダーク・フュージョン！」
三枚のカードを永琳に見せて発動させた。
E・HEROはあの世界の後から恭司が使っようになっている。

「ダーク・フュージョン……？」
どうなるのかを真剣に見ている。

「現われる！ E・HEROライトニング・ゴーレム！ くっ、レ
フィキュルの効果を忘れてた……！」
本来回復するはずだが、回復がダメージになり顔を顰めている。

ATK2400

LP4000 LP2800

「アンチキュア。レフィキュルがいる限り、貴方のLPを回復する効果は貴方のLPにダメージを与える効果になる。そして効果によりダメージを与えた事でサディスティック・ポーションの効果が発動、レフィキュルの攻撃力はこのターンのエンド時まで1000ポイントアップするわ」

ATK1400 ATK2400

回復をダメージに変えるキュアバーンデッキだった。
バーンデッキが苦手な恭司は妹紅戦と同じように、このターンで決

めるつもりようだ。

「ライトニングゴーレムの効果発動。1ターンに一度だけフィールド上に存在するモンスターを破壊することが出来る。墮天使ナース・レフィキュルを破壊させてもらうぞ。ボルテック・ボム！」

問答無用でレフィキュルを破壊した。
本人は気づいていないが口角を上げて嘲笑っている。

「くっ！……笑っているの？」
レフィキュルが破壊され、サディスティック・ポーションも破壊された。

笑っている様子を見て永琳はメンタルケアもしないとダメかしら？と考えている。

「さらに魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動！ 墓地のスパークマンとクレイマンを除外し、来い！ E・HEROサンダー・ジャイアント！ そしてダーク・キュアの効果でサンダー・ジャイアントの攻撃力の半分、LPを回復させてもらう」
今度は自然な笑顔を浮かべて嬉しそうにしている。

ATK2400

LP2800 LP4000

「やっぱりメンタルケアは必要ね」

そう呟いて恭司を見ている。
精神的に不安定と思われるようだった。

「ライトニング・ゴレムでダイレクトアタック！ ヘル・ライト
ニング！」

「くっっ！」

LP4000 LP1600

「サンダー・ジャイアントで攻撃！ ボルティック・サンダー！」
容赦のない連撃。
放たれた電撃が永琳に襲い掛かる。

「きゃあっ！」

二度目の直接攻撃を受けて膝をつき、可愛らしい悲鳴をあげて座り
込んだ。

LP1600 LP0

「HERO最高！ デュエル最高！ ガツチャ！ 楽しいデュエル
だったぜ！」

HEROを使用したので十代の決め台詞とポーズを拝借。

速攻で決めておいて楽しかったかどうかは疑問だが。座り込んだ永琳に近付き、手を差し伸べた。

「ありがとう。それとこれを一週間しっかり飲めば左腕の痛みは治るはずだから、しっかり飲むように」

手を取って立ち上がり、どこからか薬を入れた袋を取り出して渡してきた。

「永琳さん、ありがとうございます。えっと、幾らですか？」

慧音から貰ってきたお金を財布から出そうとしている。

デュエルが終わったら敬語になっても気持ち悪い。

「敬語はやめて。後、貴方にさんを付けられるのも何か寒気がするのよ」

少し酷い言われようだった。

鈴仙はまた別世界に旅立っている。

たまに「まだダメよ、恭司……」とか「お母さんがんばるからね」とか聞こえてきて、とんでもない妄想をしているのがよくわかる。どうせなら歪まぬ愛を貰ってほしい。

「寒気って……わかったよ永琳。これでいいんだろ？ それで薬の代金は幾らなんだ？」

財布を持ったまま受け答えしている。

「そうね大体……」

電卓を取り出して見せている。

何故電卓があるのかは聞かないことにした。

「これで足りる？」

財布の中を見せて確認してもらっている。

寺子屋の手伝いをしてお給料を貰っているが、慧音が管理しているのであまり持たせてもらえない。

だから人里にある空き家を借りれないでいる。

たまたま出会った里長が無料で貸してくれると言っていたが、夜に青い顔をして無理になったすまないと謝りに来た事も。

にっこり笑っていた慧音を見て怯えていたのが印象的だった。

「これとこれで足りるわ。それと恭司、貴方ウドンゲに何かした？」

貴方を物凄く気に入っているみたいだけど」

代金を受け取り、別世界に旅立っている鈴仙を見て呆れている。

旅立った原因を見て聞いてきた。

「わからないっす」

別世界に旅立っている鈴仙を見て、女の子に対する幻想をぶち殺されている。

だけど可愛いからいいか、と単純に考えている。

鈴仙はそっとしておき、壊れたデュエルディスクを直しに戻った。

「ああ、なるほど……だから動かなかったのか……これをこう……」
バラバラにして使えないパーツを外し、余っていた使えるパーツを
組み込んでいく。

手際の良さに隣に座って見ていた永琳も感心している。
たまに道具を手渡したりと助手みたいだが。

こうして大した事のなかった危機は去った。

鈴仙はもう戻れないラインを越えてしまっている。

恭司はネガティブに考えているので向けられている好意に気づかないフリ。

そして手際良く直している恭司と隣で見ている永琳に永遠亭のお姫様が迫る。

続く。

永遠亭、兎と薬師と決闘者（後書き）

鈴仙を受け入れれば鈴仙エンドになります。
多分。

月影龍と太陽龍が今後どうしても使いたいのので月影はOCG仕様のシンクロモンスター、太陽は効果をOCG仕様にして使いたいと思います。

永遠亭、姫と薬師と決闘者（前書き）

この作品の姫様はこんな感じ。

早くポケモン黒白がやりたくて仕方ない。

永遠亭、姫と薬師と決闘者

手際良く直しているとドタバタ走る音が聞こえてきた。こちらに向かってきているようだがまだ距離がある。

「よし、これで直ったはずだ」
使えなくなったパーツを片付けて、外装を軽く研いでいる。

とても綺麗になり見違えるようになった。

「凄いわね……」
永琳が手に取って見ている。

「一応、永琳のも見ようか？ メンテナンスくらいなら時間もかからないし」
そう話していると襖がスパーン！と言い音を立てて開かれた。

「えーりん！ 私のデュエルディスクを貸して！ 直してもらってくるわ！」
綺麗な黒髪のお嬢さんが入ってきた。

かなりの美人だが高嶺の花すぎて興味がないのか、恭司は永琳のデュエルディスクをチェックしている。

「姫、デュエルディスクならこの者が直してくれました」
チェックをしている恭司を紹介した。

紹介されたので、顔を上げて姫と呼ばれた人を見ている。

「え？ ……あ、あーっ！ 調律者の鉄恭司じゃない！ 握手してください！」

何故か凄い興奮している美人さん。

びっくりした恭司の手を掴み両手で堅く握っている。

「な、何で外で呼ばれてる恥ずかしい呼び名を知ってるんだよ！ 調律者はかなり恥ずかしくてやめてほしいと思っている。」

エドが大会で恭司をそう呼んだせいで定着してしまい、ジャッジの紹介等でそう呼ばれるようになってしまった。

「姫、お知り合いでしたか？」
いきなりの行動に永琳も驚いている。

「サインとかは……？」

姫と呼ばれた人は永琳を無視し、上目遣いで恭司にサインのおねだりをしている。

恭司は困った顔をして自分の頭を掻き、握られた手にドキドキ。

「サインとか書いたことないんだが……」

いつも逃げるようにして帰っていたので、珍しいファンにもサインはしていなかった。

「え？　じゃあ、私が一番最初？　名前！　普通に名前でもいいから書いてください！」

興奮するあまりに敬語と普段通りの言葉遣いが混ざっている。

握っていた手を離し、直したばかりのデュエルディスクとマジックを差し出してきた。

「いや、あのな」

永琳に目を向けて助けを求めている。

「姫、彼が困ってますよ。サインなら今度貰いましょう？」
なんとなく伝わったのか宥めてくれている。

「……そうね。あ、それなら私とデュエルして」
ようやく落ち着いたらしく、デュエルを申し込まれた。

かなりの実力を持った相手とのデュエルが楽しみで仕方がない、そんな様子が伝わってくる。

「ああ、それならいいよ。その前にちゃんと自己紹介。知っていると
思うけど、俺は鉄恭司。外人だ」
よろしくと礼をした。

これから行くデュエルが楽しみで仕方ないのはこちらも同じだった。
何となくだが相手のデュエリストレベルが高いのは理解できている。

「私は蓬萊山輝夜よ」
輝夜と聞いて恭司の動きが止まった。

恭司が自分の事に気づいたと思い、満足気な輝夜がこちらを見ている。

「あ、ああ。それじゃあ、どこでデュエルしようか」
目の前の姫さんが妹紅から聞いていた人物だとは思っても見なかったらしく動揺している。

竹取物語を知らないから、かぐや姫も知らない。
捕まったら何されるか分からないからちよつとびくびくしている。

「庭にしましょう?」
そんな恭司の態度を気にせず、うきつきとデュエルディスクを手に行ってしまった。

「恭司。姫は強いわよ?」
永琳に肩をぽんと叩かれた。

「あの姫さんのデッキ、何か嫌な予感がする。ところであの姫さんは有名な人なのか?」
姫って呼ばれてるし有名な人なのかな、と不思議に思い聞いている。

呆れた顔の永琳に悪い事をした気分になった。

何となく一緒になって姫と呼びたくなる高貴さはあったが、それが誰か分かっていなかった。

「……まあ、恭司なら知らなくても当然かもしれないわね」
デュエルバカなだけと思われ始めていた。

そのまま庭まで案内してもらっている。

庭。

塀の向こうに竹林が見えており、デュエルディスクを起動させた輝夜が待っていた。

「デュエルよ！」
待ちきれないといった感じで言ってきた。

デッキはまだセットしていなかったらしく、軽くシャッフルして今セットしている。

「楽しいデュエルにしようぜ」
輝夜と対峙し、デッキをセットすると自動でシャッフルしてくれている。

「デュエル！」

「私のターンからね、ドロー！ 手札から高等儀式術を発動！ 手札の終焉の王デミスを選択して、デッキから甲虫装甲騎士二体を墓地に送りデミスを儀式召喚するわ！」

ATK2400

「相手が先行で助かったなこれ」
冷や汗をかきながら呟いた。

後攻だったら間違いなく1killerされていたらと考えている。

「さらに墓地の昆虫族モンスター2体を除外して、デビルドージャーを特殊召喚。そしてザ・カリキュレーターを召喚してターンエンドよ！」

デビルドージャー

ATK2800

ザ・カリキュレーター

ATK? ATK5400

「俺のターン、ドロー！ 手札から未来融合・フューチャー・フュージョンを発動！ F・G・Dを指定し、デッキから伝説の白石

三枚とサファイアドラゴン二枚を墓地に送る。そして伝説の白石三枚が墓地に送られた事でデッキから三枚の青眼の白龍を手札に加える！」

青眼の白龍はオリジナルではない。

以前社長に見せてもらった時に登録されていたのかカバンに入っていたカード。

「青眼の白龍！？ あの海馬瀬人のエースモンスターじゃない！」それを聞いて輝夜はかなり驚いている。

恭司は輝夜が社長を知っていた事に驚きはしなかった。きつとエドとかも知ってるんだろうな、とだけ。

「魔法カード融合を発動、手札の青眼の白龍三枚を融合！ 現われる、青眼の究極竜！」

三体の青眼の白龍が融合、三つ首になり全体的に鋭くなっている。食物連鎖の頂点に君臨するドラゴンの究極の姿。

ATK4500

「凄い……」

とても美しい姿の究極竜に見惚れている。

「青眼の究極竜で終焉の王デミスを攻撃！ アルティメット・バースト！」

三つの口が開きデミスに強烈な閃光が放たれた。

デミスは何の抵抗も出来ず閃光に飲まれ消えていった。

「きゃあああつ!! ……でもまだやられた訳じゃないわ!」

LP4000 LP1900

ザ・カリキュレーター

ATK5400 ATK3000

衝撃に耐えた輝夜がそう言っただけで恭司を見ていた。

だが恭司はそんな輝夜を見てフィニッシュ宣言。

「残念だけどこのターンで終わりだ、姫さん。速攻魔法、融合解除を發動! 青眼の究極竜を三体の青眼の白龍に戻させてもらう!」
究極竜がまばゆい光を放ち三体の青眼の白龍に分離した。

青眼の白龍×3

ATK3000

「えっ……?」

場に揃った三体の青眼の白龍を信じられないって顔で見ている。

「すごいぞー! かつこいいぞー! ……って何言ってるんだ俺は。

とにかく、デビルドージャーを青眼の白龍で攻撃！ 滅びのバースト ストリーム！！」
一瞬髪の色がキャベツな社長が脳裏を過ったが気にせず攻撃に移った。

1体の青眼の白龍が口を開き、デビルドージャーを爆裂疾風弾で消し飛ばす。

「きゃあああっ！」

LP1900 LP1700

ザ・カリキュレーター

ATK3000 ATK6000

「無駄遣いかもしれないが社長もこんな事やってたし、やらないといけない気がする……速攻魔法発動、超融合！ 手札を一枚捨て、場の三体の青眼の白龍を融合し再び青眼の究極竜を召喚！」

ATK4500

超融合は旅の途中に十代から預かっていたカード。

そのまま紫に連れられてきてしまったので所持しており、折角だからと使わせてもらっている。

「やっぱり凄い……」

外での評価は知っていたが、いざ目の前で見ると段違いだった。

シンクロデツキじゃないのが少し残念そうだった。

「ザ・カリキュレーターを攻撃！ アルティメット・バーストオツ
！！」

やけにノリノリで容赦のないとどめの一撃を叩き込んでいる。

「……………！！！」

カリキュレーターを飲み込んだ閃光が輝夜すらも飲み込んでいった。

LP1700 LPO

「強靱ッ！ 無敵ッ！ 最強オツ！！！」

誰かが乗り移ったようによく響く声で発している。

背後に正義の味方の精霊がうつすらと見えて……。

「……………」

永琳が離れた位置で可哀想な子を見るような目で見ている。

その視線に気づいていないのは幸せかもしれない。

「粉碎ッ！ 玉砕ッ！ 大喝采ッ！！ フハハハハハ！ ハハハハ

ハ！」

こんな姿を社長に見られたら大変な事になりそうだった。

大満足だったらしく、こちらをブーツと見ていた輝夜に近づき手を差し出している。

「あ、ありがとう……」
手を握った時に少し頬が赤くなったが気づいていない。

「いやー、びつくりした。デミスドーザーを使ってくるなんて思わなかったよ。姫さんが後攻だったら間違いなく負けてたな」
凶悪なコンボが使われた事で焦り全力で戦っていた。

「井の中の蛙だったわ。家の三人相手なら先行でも勝っていたから……」
手を握ったまましょんぼりしている。

恭司は握られたままで少し困っている。

「デュエルは勝っても負けても楽しいものだけ？ どっちにしても満足出来るんだからな」
美人がしょんぼりしている姿は似合わないと思っており、それと同じデュエリストとして励ましてやる気を出させようとしている。

「……励ましてくれてありがとう。ちょっと私の部屋で話を……あつ、今日は火曜じゃない！ カーネルの日だわ！」
恭司の手を握ったまま何かに気づいて連れ去っていった。

永琳がこちらに手を振っている姿がどんどん遠ざかる。

輝夜の部屋。

恭司は一瞬外の世界に帰ってきたのかと思っただけで見回している。

何故かゲーム機やPCがあり、月刊で出されているデュエリストの本等も置いてあった。

「確かに今日はカーネルの日だったな」

目の前でDSを使っている輝夜を座って見ている。

自分もDSを取り出して起動させていた。

「ねえ、恭司。貴方、イトマル持ってない？」

輝夜がカーネル狩りをしながら聞いてきた。

「なんだ姫さんはソウルシルバーか。レディバとなら交換してもいいぞ」

どうやらHGとSSで互いに違うようだ。

話が盛り上がり、凄く仲良くなっていた。

隣に座って互いに欲しいモンスターを交換したり、対戦したりと楽しい時間を過ごしている。

「姫さん、メタグロスはやめて！」

メタグロスを出されて絶望している。

「ふふん。勝てばよかるうなのだ！」
嬉しそうに言ってきた。

「次にお前は『やめてそれだけは！』と言う。ラグラージ、じしんだ」

「やめてそれだけは！ ……はっ」
ノリが良い姫様だった。

時間を忘れて楽しんでいたがそろそろ辺りが暗くなってきたので帰る事に。

「もうこんな時間か……それじゃあ次の機会にデュエルの話をしよう。そろそろ帰らないといけないしさ」
妹紅を待たせており、早く戻らないといけないことを思い出してDSをしまった。

「……え？ もう帰っちゃうの？ まだ居ていいのよ？ あ、なんなら泊まっていくな？」
DSを置いて恭司を引き止め始めた。

この二人だけで遊んだ時間がとても楽しかったので帰らせたくないらしい。

「ここまで案内してくれた人が待つてるんだよ。だからまた今度な
何となく妹紅の名前を出すと大変な事になる気がして言わなかった。」

「永琳」

輝夜が永琳の名前を呼ぶと恭司の荷物を持って部屋に入ってきた。

「失礼します。恭司、一週間したらもう一度左腕を見せに来なさい
治ったかどうか確認するために来いと言われた。」

確認以外にも輝夜の為に呼んでいるのかもしれない。

永琳からカバンを手渡された。

「わかったよ。じゃあ、また来週に来る」

二人に玄関まで案内され、見送られて永遠亭を後にした。

鈴仙は永琳に指示された作業をしているようで姿を見かけなかった。

そして恭司は妹紅の所に向かう途中で兔の少女に出会う。

しかし幸せをもたらす兔との出会いは特に何もなく終わるが。

続く。

永遠亭、姫と薬師と決闘者（後書き）

書いた中身は行き当たりばったり。

TF5はインフェルニティ組めるようになるまで頑張りたい。

加速、結構鍛えた決闘者（前書き）

何だか絶不調。

書きたいように書けずこんな事に。

TF5、トリシューラは三枚あるのにブリユーナクが全く出ない。
ポケモン、とりあえずクイックボールの性能が凄い。

加速、結構鍛えた決闘者

永遠亭を後にして歩いてみると、兎の耳が付いた可愛らしい小さな女の子が嬉しそうにこちらに近づいてきた。何故か小さな賽銭箱を持っている。

「お賽銭の集金に参りました」
そう言ってニッコリ笑い、賽銭箱を差し出してきた。

「あ、ああ」
少しだけお賽銭を入れた。

嬉しそうにしている少女を見てると心が和む。
注意しよう、これが噂の賽銭詐欺の手口だ。
そして女の子を見送ってから妹紅と合流した。

「輝夜に何かされなかった!? 大丈夫!？」
予想より時間がかかっていたらしく、妹紅に体をべたべた触られている。

「大丈夫だった。もこたん、あの姫さんもデュエリストだったぞ」
触られてくすぐったそうにしながら答えている。

「え? ……ふふふふ、デュエルで負ける気がしないよ」
凄く嬉しそうだった。

殺し合いから決闘にシフトする日も近いかもしれない。

「薬も貰ってきたしさっさと帰ろうぜ」

そのまま帰ろうとした時、さっきの兎耳の女の子が二人を追い越していった。

そしてそれを追うように竹を倒しながら進んでくる嫌な音がどんどん近づいてくる。

「恭司、早く帰ろう。面倒ごととは嫌だし、慧音がご飯作ってるだろうから」

でかい何かが竹を倒しながらどんどん近づいてきている。

「『逃げる』と心の中で思ったなら！ その時ステに行動は終わっているんだッ！ 『逃げた』なら使ってもいいッ！」
ある兄貴の名台詞が凄く情けなくなっている。

言葉通り妹紅と既に逃げ出していた。

「うわっ！ あれ蛇の妖怪か？ 凄く大きいです……」
何気なく振り向いたら巨大な蛇の妖怪らしきものがこちらに向かって進んできていた。

びっくりしてさらに加速して逃げていると、賽銭箱を持った女の子がこちらに気づいて驚いた顔で逃げ始めた。
どうやら恭司達を囿に逃げていたようだ。

「あの蛇速いぞ！ 地味に怖い！」
最初は冗談を言いながら逃げていたが、徐々に追い付かれ始めて焦り始めた。

妹紅と女の子は思い出したように空に逃げたが、恭司はアイテムなしでは飛べないので蛇の尾で思いつきり雑払われた。

「ぐっ！ ごほっ！ げほっげほっ！」
背を強く打たれて吹き飛ばされていた。

体勢を整えて着地したが、思ったより強く打たれたので咳き込んでいる。

そんな恭司に巨大な蛇が巻き付こうと飛び掛かってきた。

「恭司、なんで飛べないの！ 早く！」
何故か飛べない恭司に妹紅が驚いて急かしている。

リフボードを使わないと飛べないことは知らないらしい。

「飛べないんじゃない？
一緒にあって見ていた女の子がそう呟いた。

「まさか……恭司！」

助けに向かおうとしたが恭司の様子がおかしいのに気付き止まった。

巻き込んでしまうから迂闊に弾幕で追い払うことも出来ない。

最初から弾幕で追い払っておけばよかったと思っている。

「START UP……ってな」

人間の脳が体にかけているリミッターをほんの少しの間なら無理矢理外す事が出来る。

自分以外の動きが遅くなるように感じ、555のアクセルフォームみたいで気に入っているが相応のデメリットもある。

飛び掛かってきた蛇をその場から消えるような速度で回避、そして姿を見失い辺りを見回している大蛇。

その蛇の顔の真横から急に現われて回し蹴りをぶちかました。

ただでさえ人間離れしている身体能力を100%引き出している状態での蹴撃。

蛇はその一撃の重さと速さに耐えられず、そのまま吹っ飛んでいき竹を幾つも押し折りながら地面に崩れ落ちた。

「5……4……3……」

いつのまにか倒れ伏した蛇の場所に移動しており、蹴り上げて自分の限界時間をカウントしながら拳撃と蹴撃の乱打。

漫画やゲームのように宙に浮いたままやられ続けているのが可哀想に思えてくる。

意識を失っているのか蛇は一切の抵抗をしない。

「2……1……TIME OUT。9.8秒……それがお前の絶望

までのタイムだ」
最後に思い切り蹴り飛ばした。

並の妖怪ならなんとか相手が出来ることがわかった。
最後はアクセル違いの決め台詞で締めていた。

決め台詞の後に疲れたのか座り込むと心臓を押さえて呼吸を整えている。

それを見て唾然としていた妹紅が慌てて降りてきた。
女の子は既に居なくなっている。

「恭司、大丈夫？ それとさっきの初手は何をしたの？ 避ける瞬間から見えなかったけど……」
妹紅が降りてきてすぐに質問をしてきた。

弾幕で素早い動きを見慣れていても、あの回避から最初の攻撃までは目で追えなかったらしい。
身体能力の高さも予想以上だったらしく少し驚いている。

「……………ふう、落ち着いた。なんて言ったらいいんだろうな。鍛えてますから！ ……超加速かな？ ただ心臓がやばい事になる」
ちよっと和ませようとしたら冷たい目で見られたので焦って答えた。

周りがスローな空間に突入する感じ。
555アクセル、CLOCK UP、トライアルいずれかを想像してもらえれば分かりやすいかもしれない。

人間の心臓が刻める鼓動には限りがある。
無理矢理リミッターを外し、高速戦闘を行えば鼓動が大変な速さで刻まれ寿命が短くなってしまう。

さらにそんな状態で戦えば追いつけるはずのない全身の骨や筋肉を痛めてしまう。

そんなデメリットを理解しているので多用できない。

「超加速って……。あ、立てる？」

手を差し出して確認してきた。

その手を掴んで立ち上がろうとした時、恭司は何かに気づいた。

「うん。……ありゃ？ こんなカードいつのまに」

手の下に裏側になったカードが三枚あった。

なんだろうと手に取り、それを見て固まって動かなくなっている。

「恭司？ どうしたの？」

冷や汗をだらだらと流しながら動かない恭司を見て声をかけた。

「ゆ、紫ー！ 何でこれがあるんだよー！！」

その手にあるのは三枚の邪神だった。

邪神アバター、邪神イレイザー、邪神ドレッド・ルート。

厄介なカードを見つけてパニックになり、思わず紫の名を呼び説明させようとしたが現われない。

「恭司、落ち着いて！」

パニックになつた恭司を暴れないように地面に押さえ付けている。

「はあはあ……。これ、絶対にダメなんだよ。放っておいたら絶対誰かが飲まれる」

押さえ付けられてようやく冷静になった。

三邪神を捨てるわけにもいかず、嫌々ながらカバンに入れて後日誰かになんとかしてもらおうと考えている。
そして妹紅に押し倒されている状況に気づいた。

「落ち着いた？」

ぎゅっと押さえ付けている。

第三者から見たら押し倒しているように見える。

「あの、そろそろ立ち上がりたい」

妹紅に密着された状態にそわそわし始めた。

近くで見るといつもより可愛かったのか目が合わせられず赤くなっている。

「よかった。急におかしくなって慌てたんだよ？ ほら」
心配させるなど少し怒っている。

二人して立ち上がったから妹紅が手を差し出してきた。

「え？ 握手？」

差し出された手を握って軽く力を入れた。

「こうしておけばまた何か来ても空に逃げられるでしょ」
握られた手を握り返してそのまま歩いていく。

歩きながら永遠亭で何があったのか話をしたり、輝夜と楽しく遊んでた事がバシバシと繋いだ手から燃やされそうになったり。

人里

「「ただいまー」」

冗談半分で恋人繋ぎにして慧音の家に帰ってきた。

慧音の反応が見たいと言う妹紅の意見を聞いてこうなっている。

「ああ、おかえり。……恭司、その手は？」

嬉しそうに出迎えてくれた顔が、指を絡めるようにして繋いだ手を見て一転した。

ムツとした顔になり、繋いだ手を睨むように見ている。

「もこたんがどうしても繋ぎたいって」

慧音の秀囲気が怖くなって妹紅を生け贄に捧げて逃げようとしてい

る。

「恭司がどうしても繋ぎたいって」
妹紅も怖くなったらしく、恭司を生け贄に捧げて逃げようとしている。

「よし、妹紅。私が代わろう、だから恭司こっちに来なさい」
ちよいちよいと手招きしている。

満月の夜にハクタク化した姿を見られて嘆いていたがその姿を可愛
いと言われたり、風呂で遭遇したりで吹っ切れたのか慧音がやたら
積極的になっている。

里の人達が見たらぎよつとするんじゃないかと思えるくらいに二人
きりだとくつついてきたりする。

「あ、じゃあ後は任せだから。またね慧音、恭司」
これ幸いと妹紅は手を離して逃げるように去っていく。

「ま、待ってくれえ！」
一人でどうしたらいいのか分からなく、逃げていった妹紅を引き止
めようとしていた。

積極的な慧音をどうしたらいいのか分からなくて最近気まずい。
基本、家だとべたべた接してくるので色々持て余している。

「まったく、手くらいなら私がいつでも……」
顔を赤らめながら呟いている。

いつのまにか慧音は惹かれていたようで、お給金から何から完全に握って恭司が家を借りれないようにして同棲生活を満喫している。これが権力？

「あの、その……」

手を握られて嬉しくないわけがなく、美人に手を握られるのはかなり嬉しい。

ただ慧音のような才色兼備な人が自分のような欠点だらけの男に分かりやすく好意を寄せているのが不思議でしょうがない。もしかしくなくても姉としての好意だろうなと考えている。

「うん、これはいいな。明日からこうやって寺子屋にいらおう」
物凄くご機嫌なようで笑顔がとても美しい。

指もすっかり絡めて離すまいとしている。

「え、それはちょっと……。綺麗なお姉さんにこんな事されてるとか昔の俺だったら……。」「
リア充爆発しろ！って罵っていたに違いない。

ようやく帰ってきた人里。

爆発してほしい恭司は手に入れてしまった邪神の扱いを悩む事に。厄介ことが当たり前のように舞い込んでくる恭司は確かにこの隔絶された世界のがいいのかもしれない。

続く。

加速、結構鍛えた決闘者（後書き）

幸せ兎はまたいつか。

とりあえず書いておいてなんだけど三邪神をどうしよう。

真祖オベリスクじゃないとアバターは倒せないイメージが強い。

休日、人形使いと決闘者（前書き）

一応言っておくと星蓮船は未プレイ、未鑑賞なのでどうしようもないです。

自由に書きたいように書けた。

どうするか決まるまでしばらく邪神は放置。

休日、人形使いと決闘者

快晴。

雲一つない天気の下、恭司は里をぶらぶらと散策していた。今日は寺子屋も休みの日、何か目を引く物はないかと朝も早くから歩き回っている。

「恭司先生、おはようございます！」
ある家の前に子供が集まっていた。

皆、出掛けようの服なのかいつもより綺麗にしている。暇そうに歩き回っている恭司に気づいて元気に挨拶をしてきた。

「おう、おはようさん。お前達どこか行くのか？」
挨拶を返し、子供達に尋ねた。

休みの日は大体前日の夜から紅魔館に連れて行かれているので、休日に子供達に会うのが珍しい事だった。
今回は慧音が何か話をしたのか、迎えに来た咲夜が渋々帰っていたのでゆっくり休んで早起きする事が出来たようだ。

「人形劇を見せてくれるお姉さんが今日来るの！」
一番年が低い女の子が嬉しそうに答えてくれた。

恭司の腕にしがみついて期待した目で見てくる。

「ほいっと。ああ、だから女の子ばかりなのか」
腕を上げてぶら下がれるようにした。

きやあきやあ言いながら嬉しそうにしがみついている。

二、三人男の子もいるが、大体の子は違う場所で遊んでいるのか居ない。

「先生も一緒に行くの？」

女の子ばかりで肩身の狭い男の子の内の一人が縋るように聞いてきた。

人形劇は見たいけどやはり男子が少ないと不安なようだった。

233

「でもさ、大人が見に行ってもいいのかな」

そこが不安なのか子供達が悩んでいる。

悩んでいると一番年上の女の子が笑いながらこう言ってきた。

「あはは！ 大丈夫、大人でも見れるって。お父さん達もたまに見てるでしょ？ それに先生は子供みたいなものだから平気だよ！」
悪意の一切ない純粹な言葉が恭司の心を抉る。

慧音に対してイタズラをしたり、生徒が持ってきた剣玉やらお手玉を没収せずに一緒になって遊んでしまい頭突きをされたりと親しみやすいが子供っぽかった。

「なんだろう、心にグサツと来た。少年の心をいつまでも忘れない素敵な大人って事だよな、お前達？ そうだよな？」

十代が大人になっても前と変わらない所が多いのは恭司が原因。

最近ショックだったのが母性本能に目覚めた九歳の少女に手のかかる弟扱いされた事だったりする。

里ではおばさまやお婆ちゃんに人気があり、よくお茶やお菓子を子供達と戴いたりしている。

しばらく話をしていると何人か子供達の親が来たので挨拶をした。どうやら人形劇を見に行くのに付いていく予定だったらしい。

「そうだ、先生。私達の代わりに引率してもらえませんか？ 実はまだ仕事が……」
そう父兄の人達に頼まれている。

秋、収穫の時期で色々忙しいらしい。

「構いませんよ。皆さんには世話になっていきますから」
主に食材面で。

ちゃんと敬語のようなものは使っらしい。

しばし談笑していると、まだ19の恭司に見合いやら結婚やらをす

るように勧めてくるのを笑顔で回避。
外とは違い19で未婚は少し遅いのかもれない。

その後何度も礼を言って皆去っていった。
子供達も親が帰ってしまい少し寂しそうにしていたが、恭司が一緒に行ってくれるので嬉しそうにまとわりついてきた。

「よし、それじゃ行くか」

子供達を落ち着かせて目的地に向かった。

青年、少年少女移動中……

「……それで母ちゃんが酷いんだ」

「それはお前が悪いな。俺なら……」

子供達にイタズラを教えたり、悩みを相談されたり、楽しく外の世界の歌を教えて歌ったりして向かっている。

歌のチョイスがベリーメロン♪私の心をつかんだ良いメロン♪なのはV様が好きだから。

しばらく歩いていると人形劇の準備をしている少女がいた。

人形達も一生懸命準備をしていて、恭司は凄い子だなと思いつながり近づいていく。

もはや人形が勝手に動いていようが動じなくなっていた。

「とりあえずまだみただから待つてような」
子供達に自家製の飴を与えた。

幻想郷に来てから料理全般にとんでもない能力を発揮している。
全員に飴を与え終わるくらいに1体の人形がこちらにふよふよ飛んできていた。

「ん？ どうしたんだ？ ……あつちで、手招き？」
袖を引つ張られたので見てみると飛んでいた人形がいた。

ジエスチャーで何か伝えようとしているがうまく伝わっていない。
ぐいぐいと袖を引つ張るので子供達に待つているように伝えて付いていく事に。

「君の言いたいことを言葉ではなく心で理解したッ！」
最近五部を読み直したらしい。

ブチャラティのような格好良い男になりたいといつも思っている。
SBRのツエペリ家の回転を我が物に出来ないかと密かに特訓中だ
ったりもする。

「貴方、何言ってるの？」
人形使いの少女が呆れたようにこちらを見ている。

金色の髪、白い肌で本人も人形のようにだった。

「失敬。ところで何か御用で？」
雑用がよく似合う男。

きつと何かをさせるのに丁度よくて呼ばれただけだろう。

「ええ。ちよつとこれを……」
やっぱり雑用だった。

言われるままに手伝っているのは子供達に早く見せてあげたいと思
っているからだ。

決して幻想郷の女性に逆らうのが怖いわけではない。

「たかが石ころ一つ、ガンダムで押し返してやる！」
そして最後に、何で人形劇にこの場所を選んだのかと言いたくなる
くらいの大きな岩を動かさないといけなかった。

どこかから降ってきたのか里の人も迷惑に思っている岩。
人形総動員でも動かないものを一人の人間を加えて動かそうとする
のは無謀としか思えないが、規格外の人間をチョイスした少女は運
が良い。

「がんだむって何よ。……へえ、貴方が鉄恭司だったのね」
子供達が岩に挑む恭司の名前を呼んだりしていたので気がついてい
た。

里の新参者、自称封札師、悪魔の妹を泣かせた男。

最後のだけはフランを知らない人が聞いたら凄く酷い男にしか思え

ない。

「おう、俺が鉄恭司だ。……ドリルロイドに砕かせるのが早いが、そんな事したら飛び散るんだよな。仕方ない動かない相手には馬鹿力で」

岩を抱きつくように抱えると力を入れ始めた。

ゆっくりと岩が地面から浮き上がっていく。

「……えっ?」

少女はその光景が信じられないのか啞然としている。

この大きさの岩って人間が一人で持ち上げられる重さじゃないのにと。

子供達は大はしゃぎで応援しており、ヒーロー扱いだった。

「ふうっ……光になれええええ!!」

なんとなく某勇者のH H & a m p ; Hの台詞を言いながら、里の外の絶妙な位置に投げ飛ばした。

後のデスメテオである。

手をパンパンと払って少女に振り向いた。

「えっと……人間よね?」

馬鹿力だけで済む問題じゃないと思っている。

実は妖怪の類じゃないのかと内心疑っていたりも。

「最近人間だつて言える自信がなくなってきたるが人間だ。レディ、お名前を伺ってもよろしいですか？」
エセ紳士。

「ああ、まだ名乗ってなかったわね。私はアリス、アリス・マーガトロイド。貴方の頭の上に座っているのが上海人形」
よろしくと握手をしてくれた。

恭司はいつのまにか頭に乗っていた上海人形とも挨拶をし、下ろしてあげようと両手で優しく掴んだ。

「接着剤か何かですか？ いたたた」
髪の毛をぎゅっと掴んで降りようとしない。

ここでも人間以外に好かれる何かが起きている。

「上海？」
アリスが何度か呼んでようやく渋々降りた。

半自律とは思えないくらい執着しているのでアリスも驚いている。

「ドールが動く……アリス……なんだ薔薇乙女か」
恭司は水銀党员だった。

銀様が現実存在したらいいのにと本気で思っている。

「恭司、何言ってるの？そろそろ始めるから戻っていいわ」
話がしやすく接しやすいくからから即呼び捨てにされていた。

「なんかアリスと会話するの楽しいな。一度会ったら友達だ、何か困った事があつたらまた呼んでくれ。出来る範囲で力になるから」
毎日会ったら兄弟です。

世界で一番サムズアップが似合う男をリスペクトしているのでサムズアップをしている。

「わかったわ。って上海、何してるの？降りてきなさい」
上海が当たり前のように恭司の肩に座っている。

油断も隙もなかった。

「ほら、お前さんのマスターが呼んでるぞ」
促してアリスの元に戻らせ、恭司も子供達の所に戻った。

「凄かった」
恭司は子供達より目がキラキラしている

アリスの人形劇はとても素晴らしいもので、恭司も魅入り、子供のように楽しんでいた。

子供達も同じように楽しみ、その楽しい時間も終わりを告げている。

「貴方が一番子供みたいだったわよ」

片付けを手伝っている時にアリスに言われた。

少し嬉しそうにからかうように言っているのがわかる。

「なん……だと……？」

ガーン！って文字が見えそうなくらい驚いている。

本人はクールに見ていたつもりだったらしい。

「今度男性の人形を作ってみようと思ってたのよ。恭司に協力してもらおうかしら」

容姿もいいし、と呟いている。

「俺でいいなら。よし、片付け終わった。それじゃアリス、またな」
子供達の元に戻っていった。

「なかなか面白い人間ね。あ、戻ってきたわ」
何かを持って戻ってきた。

「アリス、これやるよ。これはお前に合ってると思うんだ」
そう言ってデッキを差し出した。

昨夜急に組まないといけない気がして組んだデッキだった。

「いいの？ これって大切にしている物でしょ？」
興味はあるが遠慮しようか迷っている。

「いいよ、また作れるから。それとこれも」
大体のルールが載っているノートを手渡した。

「ありがとう。これはルールブックね……そうだ、どうせなら今実際に教えてもらえないかしら？ あの子ども見たいでしょうし」
子供達は期待した目でこちらを見ていた。

恭司の過去の話を聞いてから一度は見たいと思っているので目がキラキラしている。

「……しょうがないな。わかったよ。ほら、デュエルディスク。それと少しルールや使い方を把握してもらおうぞ」
背負っていたリュックからデュエルディスクを取り出して渡した。

自分も腕に装着している。

数分後

「……大体のルールは理解したわ。このデッキの使い方だね」
ノートを読み、軽くデッキを見ただけに既に理解したようだ。

「デュエル！」

「私のターンから。ドロー！……宝玉獣サファイア・ペガサスを召喚。デッキから宝玉獣ルビー・カーバンクルを魔法・罨ゾーンに置くわ、サファイア・コーリング。そして虹の古代都市・レインボ
ー・ルインを発動！」

サファイア・ペガサス

ATK1800

周りの風景が鮮やかになり、二人は古代都市に立っていた。

「カードを一枚セットしてターンエンドよ」

「俺のターン、ドロー！手札からE・HEROアナザー・ネオスを召喚。そしてサファイア・ペガサスを攻撃！」

ATK1900

「くっ！……破壊されたサファイア・ペガサスを魔法・罨ゾーンに永続魔法扱いで置くわ」

LP4000 LP3900

「カードを一枚セットしてターンエンドだ」

「私のターン、ドロ―！ 魔法カード、宝玉の導きを発動！ デッキから宝玉獣トパーズ・タイガーを特殊召喚！」

ATK1600

「全てが初めてなのに中々のタクティクスだな
アリスを見ながら呟いている。」

「さらに魔法カード、レア・ヴァリユ―を発動するわ。どちらを墓地に送つたらいいかしら？」
「そう尋ねてきた。」

「ルビー・カーバンクルを墓地に送ってもらおう」
「選択するのはこちら側。」

「二枚ドロ―するわね。魔法カード、宝玉の契約を発動。魔法・畏ゾーンのサファイア・ペガサスを特殊召喚して効果発動。デッキから宝玉獣コバルト・イーグルを魔法・畏ゾーンにセットするわ、サファイア・コーリング」
「着々と集まっていく宝玉獣。」

「四種類」
「そう呟いた。」

「トパーズ・タイガーでアナザー・ネオスを攻撃！ トパーズ・タイガーは相手モンスターを攻撃する時攻撃力が400ポイントアップする！ トパーズ・バイト！」
少し熱くなってきたアリスが攻撃宣言をしている。

ATK1600 ATK2000

「手札のオネストを墓地に送り、相手モンスターの攻撃力をアナザー・ネオスに加える！」

ATK1900 ATK3900

「嘘！？ 罨カードオープン、宝玉の双壁！ 宝玉獣と名の付いたモンスターが破壊され墓地に送られた時に発動できる！ デッキから宝玉獣エメラルド・タートルを魔法・罨ゾーンに置き、このターン私が受けるダメージは0になる」
「返り討ちにされてしまったが、なんとかLPを減らすことはなかった。」

「五種類」

恭司はカウントしている。

「手札断殺を発動、互いに手札を二枚捨てて二枚ドローよ」
恭司の目はアリスの捨てた二枚を見ている。

「アンバー・マンモス、アメジスト・キャット……七種類揃ったか揃ったのに何故か余裕な態度で見ている。」

何も切り札は相手だけが持っている訳ではない。

「カードを一枚セットしてターンエンドよ」

今は二枚の宝玉獣が魔法・畏ゾーンに存在している。

レインボー・ルインの効果で一度だけ戦闘ダメージを半減する事が可能。

「俺のターン、ドロ！ リバースカードオープン、古のルール。」

手札のレベル5以上の通常モンスターを特殊召喚する。来い！ E・HEROネオス！」

十代のエース、ネオスペースから来たHEROが現われた。

ATK2500

「……」

こちらを黙ってみている。

「アナザー・ネオスでサファイア・ペガサスを攻撃！」

容赦なく攻めてアレが呼ばれてしまう前に倒そうとしている。

「レインボー・ルインの効果でダメージを半減、サファイア・ペガ

サスは魔法・罨ゾーンにセットするわね」
LP3900 LP3850

「ネオスでダイレクトアタック！」
飛び上がりチョップを繰り返している。

「罨カードオープン、虹の行方。サファイア・ペガサスを墓地に送り攻撃を無効にするわ。そしてデッキから究極宝玉神レインボー・ドラゴンを手札に加える」
切り札を手札に加えられてしまった。

「うわ、やっちゃった。カードを一枚セットし、アナザー・ネオスを再召喚してネオスとして扱う。ターンエンドだ」
こっちのHEROの扱いは苦手なようだった。

「これがラストターンになるわ、ドロー！ サファイア・ペガサス、アンバー・マンモス、アメジスト・キャット、トパーズ・タイガー、エメラルド・タートル、コバルト・イーグル、ルビー・カーバンクル。七種類の宝玉獣が場と墓地に存在する時、手札からこのカードを特殊召喚出来る。来なさい！ 究極宝玉神レインボー・ドラゴン！」
巨大で美しく、七色の宝玉を身に宿しているドラゴンが虹の古代都市に降臨した。

ATK4000

「それがそのデッキの切り札だ」
アリスにそう言い身構えた。

「アナザー・ネオスに攻撃！ オーバー・ザ・レインボー！」
七つの宝玉が全て輝き、口を開いたレインボー・ドラゴンがアナザー・ネオスを飲む込むような閃光を放とうとしている。

「……………ところがギッチョン！ リバースカードオープン！ 手札を一枚捨て、速攻魔法・超融合を発動！」
切り札は恭司も握っていた。

「超融合？ あっ、レインボー・ドラゴンが……………」
ネオスとレインボー・ドラゴンが融合していく。

「超融合はフィールド上のモンスターを融合させる事が出来る。これがレインボー・ネオスだ」

ATK4500

「……………ターンエンドよ」
恭司のが一枚上手だった。

ドロー運、テクニック、実践経験。
全てが突き抜けている歴戦のデュエリスト。

「俺のターン、ドロー！ 永続魔法、連合軍を発動。そしてレインボー・ネオスの効果を発動する。俺のフィールド上の魔法または罫を一枚墓地に送る事で、アリスの場の魔法・罫カードを全てデッキに戻すことが出来る。連合軍を墓地に送り、全てデッキに戻してもらうぞ」

フィールド魔法が戻された事により、周りの景色も元に戻った。

「これがデュエル、そしてあれが本物のデュエリスト……」
人形劇を見ていた時とは雰囲気等がまるで別人。

「レインボー・ネオスでダイレクトアタック！ レインボー・フレア・ストリーム！」

「きゃあああつー！！」

LP3850 LP0

「ガツチャ！ 楽しいデュエルだったぜ！」
HEROを使った時のお約束は変わらない。

座り込んだアリスに近づき手を差し出した。

「ありがと。……あら、もうこんな時間なのね。私はもう帰るわ」
立ち上がり時計で時間を確認している。

「俺も子供達送り届けないといけないや。それじゃアリス、またな
ー！」
手を振りながら子供達の所に走って行ってしまった。

「これ貰っていいのかしら」
デュエルディスクを撫でて子供達に囲まれている恭司を見た。

視線に気づいた恭司がアリスに向かって口を動かしている。

「き・ね・ん・に・ど・う・ぞ……聞こえてたのかしら」
読唇術で読取り、苦笑しながら荷物を持って帰っていった。

帰り道。

「さて、お前さんで最後だ」
一人一人送り届け、最後に残った子と里の中を歩いている。

父兄の方々には感謝され、楽しい一日だった。

「ねえ、先生」
10才の少女で、よく質問に来るので仲がいい子を送っている。

「どうした？ お腹でも空いたか？」
デリカシーとか皆無だった。

「違うよ。私、先生がいつまでも結婚出来なかったらお嫁さんにな
ってあげる」

年上への憧れを恋と勘違いするお年頃だが、慧音とかに負けないと
日々思っている。

「そうかー、凄い美人になってたら先生はとても嬉しいな。でもよ、
俺は君が結婚できる年齢になる頃にはおっさんだぞ？」

見た目は絶対に今と殆ど変わらないと思う。

「えー、それだったら嫌だなー」

わいわいと騒ぎながら歩いていくとその子の家に着いた。

「でかい家だなー。そんじゃ、また寺子屋でな」
里でも裕福な家の子だったらしい。

「先生、さようなら！」
元気に駆けていった。

慧音宅。

「ただいまー……」

玄関を開けたら慧音と妹紅が仁王立ちをして待っていた。

怖くなったので一度玄関を閉め、逃げようとしたら玄関が開き襟首

を掴まれて中に引きずり込まれた。

「今日はお前の服を作りに行くって言うっておいたはずなんだが」
満月でもないのに慧音に角が見える気がする。

恭司を正座させて見下ろしている。

「私はあの時約束したお団子を奢ってもらう為に待っていたんだけど」
楽しみにしてたのにと怒っている。

「いや、その……。いい天気だったもので……」
二人をチラッと見上げた。

慧音には山が、妹紅には平野が広がっていると思わず考えた。
直後二人の拳が頭を捉え、いい打撃音が響いた。

「妙な事を考えられていた気がした」

「失礼な事を考えられていた気がした」
やたら鋭い二人だった。

「何という言い掛かり。酷いぜ慧音にもこたん」
初めて慧音を呼び捨てにしている。

それを耳にした慧音が動きを止めていた。

頬を朱に染め、呼び捨てにされた自分の名前を反芻している。

「まあ、仕方ないな。うん、今度は作りに行くからな？」
そして動きだすと急に機嫌が良くなっていた。

さん付けじゃなくなったのが嬉しかったらしい。

「それともこたん、俺の記憶が確かならば既に何回か甘味処に行つて奢ってるはずなんだが」
おかしいなと思いつししながら話している。

「男の子なんだから細かいことは気にしないの。こんな綺麗なお姉さんで行けるんだから嬉しいでしょ」
ウインクをしながら言っていた。

最近妹紅が緩くなってきた。
恭司の影響を受けまくっている証拠だった。

「それならまずはそのむ……ごめんなさい」
気にしているのかぶつ殺した！と言われそうなくらいに睨まれている。

なんてことのない休日は終わった。
明日からはまた忙しい週が始まる。
どこに行くかは分からないが。

続く。

休日、人形使いと決闘者（後書き）

柔道ポケモン ナゲキ
空手ポケモン ダゲキ

こつきたら次は第五世代二作目にプロレスポケモン イノキを追加するしかない。

犬耳、少し壊れた決闘者（前書き）

書きたいように書いていたらこんなに長くなった。

色々なものをリスペクトしています。

次回くらいで新しい場所に。

SBR、22巻はいつ出るんだろう。

犬耳、少し壊れた決闘者

「……夢だ夢夢。邪神なんて拾ったからだ」
朝起きて鏡を見て現実逃避をし、ごろんと横になり布団を被りなおした。

犬の耳が頭部から生えていて、それが柴犬の耳で凜々しさより可愛らしさがあった。

数十分後

「おかしい、いつもなら恭司はもう起きている時間なのに……ハッ」
慧音が朝食の準備を終えても恭司が起きてこない。
寝顔を見るチャンスだと部屋にいそいそと向かっていった。

257

「や、やめて……明日香…それはfrisbeeじゃなくてデュエルデイスク……」
うなされ、犬耳がペタンと器用に倒れている。

「……」
こっそりと部屋に入って、正座でうなされている寝顔をじっと見ている。

「おいすー。もこたんインしたお！って慧音？」

最近毎朝床下から来る妹紅が今日もイン。

何故かいる慧音に驚き声をかけたが反応しないので、そっと覗き込んでみた。

「ああ、いいな。うん、もういいだろう。そう、我慢はここま……も、妹紅。来ていたのか」
顔を赤らめぶつぶつ眩き、何かをしようとした時に妹紅に気づいた。

「慧音、流石に寝込みを襲うのは……って恭司の耳が！」
今更犬耳に気づき驚いている。

枕元に先日新しく貰ってきた薬があり、原因はすぐに分かった。
布団を捲ると案の定少しフサフサした尻尾が存在していた。

「あはははは！ わんこだわんこ！ あははははは！」
大人の男に耳と尻尾があるのが面白いのか、ツボに入った妹紅は犬恭司を見て大笑い。

「しかしこれだと寺子屋の手伝いは無理だな」
耳に触れようとすると嫌なのかぺたんと倒して触らせないようにしている。

「何だよ騒がしいな……。あ、またここから来たのかよもこたん。
それに何で慧音までいるの？」
二人とは仲が良いから尻尾がパタパタと嬉しそうに動いている。

その光景に耐えられず妹紅が床を転がり回っている。

「慧音ーお腹痛いよー」
笑いすぎて腹筋が痛くなっている。

最近妹紅はよく笑うようになっていた。
蓬莱人である事をカミングアウトした時、恭司にこう言われてから
少しずつ変わり始めている。

『へー、そうなんだ。ならその永遠の中で出会った俺の事を忘れられないように、色んな事をして記憶に刻み付けてやんよ』

不老不死を不気味がるどころか自分の事をその身に刻めと言われ、
鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしてしまった。

直後、もっと驚いたり不気味がったりしろと逆ギレしたりもした。

その後も恭司と行動を共にしていく内にあれだけ悩んでいたのが馬鹿らしく思っていた。

妖精を手懐けようとして失敗し近距離の弾幕にピチュったり、子供との剣玉勝負で負けて里を逆立ちで一周したりと毎日が面白おかしい。

永遠を生きる自分には短い人の一生、別れの時は辛いかもしれないが恭司のいる今を全力で楽しもうと決めていた。

「何か知らないが笑いすぎだろうよ。………夢だけど、夢じゃないかなかった！」

手鏡で犬耳を見て叫んでしまった。

まあ、最初から夢じゃないけど。

「まあ、その、永遠亭に行つてなんとかしてもらつてきた方がいいな。それとこれ、なんとか直したぞ」

慧音が何かポケットから取出し、首に触れて何かを付けた。

「……………！」

それを見た妹紅は床をバンバン叩いてびくびくしている。
笑いすぎで腹筋が大変な事に。

「何でこのタイミングでチョーカーを」

首輪みたいに見えて凄く嫌そうな顔をしている。

慧音に直してもらつていた旅の道中のお土産がこのタイミングで戻つてきてしまった。

「朝ご飯を食べたら行つてくるんだぞ？」

疑問を無視して部屋から出ていった。

「おらおら、いつまで笑つてんじやいじやいじやーいー！」
ぶるぶるしている妹紅をくすぐり始めた。

立派なセクハラである。

「きゃはははは！ や、やめ！ きゃははははは！」
くすぐりで悶え苦しみ始めた。

仲良く布団の上で戯れ合っている。

「ホント、くすぐりは地獄だぜえ！ フウハハハハハ！」
容赦なく脇腹をくすぐっている。

犬耳が生えた事で自棄になっているようだ。

「死ぬ、死んじゃうう！きゃははははは！！」
涙目でじたばた藻掻いている。

五分くらい戯れていたなら、なかなか来ない二人を呼びに戻ってきた慧音に頭突きをくらい鎮圧。

仲間外れが嫌だったのか、はたまた嫉妬したのかわからないが朝食の間ずっと不機嫌だった。

しかも二人で並んで座ったせいか珍しいジト目の慧音が見れたりも。

「どうせなら狼の耳とかだったらよかったのに」

帽子を被り、荷物から取り出したヘルカイザーが羽織っていたようなコートの色違いの赤を羽織っている。

卒業前にヘルカイザーに教えてもらい、わざわざ買いに行ったくらい欲しかったらしい。

「あー、もう早く戻してもらった方がいいね。里であんなに大変だったしさ。一度私の家に寄っていい？着替えたんだよ……」

妹紅は顔や手が涎まみれで少し疲れている。

耳と尾を隠し慧音宅から出たはいいが、出てすぐの所に里の犬達が

勢揃い。

仲間だと思われているのか、やたら懐いてきて逃げても全力で追い掛けてきて大変な目に遭っていた。
これが謎のワンワン大行進である。

途中手を繋いで逃げていた妹紅が転び、たくさんの犬に顔や手を舐められまくって犬の山になってしまっていた。

一瞬見捨てて逃げようかとも考えたが、そんな事は出来ないと勇気を振り絞って犬の山を掻き分けて妹紅を助けだす勇者。

「うう、恭司い。汚されちゃったよお……へぶっ！」
助けだした時の妹紅の真似を試してみたら間髪入れずに顔を赤くした妹紅に殴られていた。

「忘れろっ！」
真っ赤な顔で何度も叩いてくる。

「痛い痛い。あー、大変だったなー。ほら、早く行こうぜ」
叩かれながら歩いていく。

まずは犬に舐められてべったべたになってしまった妹紅の家に。

もこたん家

「覗かないですよ？ 絶対に覗かないですよ？」
どこかの芸人みただった。

「ああ、期待に応えて全力で覗いてやんよ！……………ですよねー」
そう宣言したら目隠しをされ縄で柱に縛り付けられた。
冗談だったのに冗談と気づいてもらえない。

「この布一枚先で……………」

最近変態紳士としてのレベルが上がっている気がする。

ちなみに別室で着替えているので布一枚先ではない。

「あー、さっぱりしたー」

ついでに顔と手も洗ってシャツとしてている。

「それじゃ、警戒しつつ永遠亭に行くぞ」
縄と目隠しを外され、キリッとした顔で言っている。

先日、腕が治っているかを見せに行く道中にある兎耳少女の罨にかかっていた。

鈴仙を罨に掛けるつもりだったらしく、その兎耳少女に平謝りされ自己紹介をされた。

彼女の名前は因幡てゐ。

親切にも近道を教えてくれるというので、妹紅の忠告も聞かずに付いていったら盥が降ってきて直撃。

ふらふらと歩いた先にあったシーソーのような物に座り込むと、そのシーソーの反対側に岩が落ちた。

そのままこの原理で叫びながら永遠亭まで吹っ飛ばされていった。

「前回見た時から鈴仙以上に悪戯したくなる相手だった、今も後悔はしていない」
全速力で戻ってきた恭司から逃げられず、襟首を掴まれ犯人はこう供述していた。

「あの兎はライバルだ」
出し抜くか出し抜かれるか。

腕は治っていたがあの悪戯のせいで新たな怪我を負い、新しい薬を処方されて今に至る。

「また恭司が痛い目を見る気がするよ」
妹紅はやれやれと呆れている。

「嗅覚が上がってるのかな。もこたんのいい匂いが……や、やめてえっ！ 嘘だから！ 嘘だつてば！」
手から炎を出して威嚇され、耳がぺたんと倒れて尻尾が内側に入り込んでいる。

必死に嘘だと言っているが本当だった。
ついでに聴覚も上がっている。

デメリットはたまねぎ、チョコ等が食べられない。
聞こえすぎるので巨大な音に耐えられない。
強烈な匂いに耐えられない。

竹林

「さあ、心のオアシスに会いに行こう……アッー！」
心のオアシスとは鈴仙の事である。
しかし竹林に踏み込み五秒で逆さ吊りになっている。

「あーあ、言わんこつちやない」
やれやれと恭司を降ろしている。

「パターンが読まれているだと……？」
鈴仙よりも遥かに単純で見えていて面白い。

それから恭司だけ綺麗に全ての畏にかかり、その度に妹紅に助けられていた。

に永遠亭の前で待っていたてゐるも流石に呆れている。

「直情的短絡思考馬鹿？」
指を差されている。

「うつさい！ 死ぬわ！」
妹紅がいなかったら危なかったところが多々あった。

「そんな怒らないでよ。はい、お手」
ニヤニヤしながら手の平を差し出した。

「わふ！ ……じゃねえ！」
尻尾を振りながら嬉しそうに右手を乗せてしまった。
よく訓練された犬みたい。

爆笑しながら逃げ出したてゐる追いついて永遠亭の中に入。
追い掛け回している途中で見失い、うろろろしていたら鈴仙と遭遇
した。

「あ、恭司。わあ、それ可愛いよ？ よしよし」
心にグサツとくるような事を言われた。

背伸びして頭を撫で撫でしながら犬耳を触っている。
くちやくちやくってしたくなる柔らかい犬耳だった。

「あー、なんだろう。わふっ……………」
尻尾がぱったぱったと全力で振られ、心地良さそうにしている。
本体は何だかふにやふにや。

その時唐突に視線を感じ振り向いた。

永琳が

「（・・・）」
な顔で襖を開けてこちらを見ていた。

「さあ、治してもらおうか永琳……………アウチ！」
永琳に素早く近づこうとしたら鈴仙に尻尾を握られていたらしく、
ピンツ！と千切れそうな痛みを感じた。

「あ、ご、ごめんね？ 触り心地よくって……………」
すまなそうに謝っているが手を放さずに触りまくっていた。

「ウドンゲは気に入ったみたいね。うーん、治してもいいけど……………」。

そうね、デュエルで貴方が勝ったら治してあげるわ。負けたら二日くらいそのままですらに、これを付けて貰うわ」
リベンジがどうしてもしたかったらしく、条件としてどこからか首輪を取り出した。

「「うわぁ……………」」

恭司と鈴仙はドン引きである。

「そして姫に引き渡します」

その言葉に恭司が固まった。

二日間も遊びにつき合わされたら死ぬかもしれん、しかもこんな新しい玩具みたいな俺を手放すわけがない、と焦っていた。

「い、いいよ。負けなきゃいいんだ。勝てば官軍」

持ってきた荷物からデュエルディスクを取り出した。

「「デュエル！」」

「俺のターン、ドロー！ モンスターをセット、二枚カードを伏せてターンエンドだ」

うまく行けば勝てるなど考えてターンを終了させた。

「私のターン、ドロー。カードを三枚伏せ、モンスターをセットし

「ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」
した瞬間。

「永続畏発動、シモツチによる副作用。これで貴方への回復はダメ
ージになる」

ニコニコと嬉しそうに発動する永琳に恭司は一気に青冷めた。

「まさか……」

運が悪くサイクロンもダブルサイクロンも手札にない。

「畏発動、ギフトカード。恭司のLPを3000回復する。だけど、
それがダメージに変わるわね」
嬉しそうに美しく微笑んでいる。

「うわああああっ！」

LP4000 LP1000

「さらにもう一枚のギフトカードも発動させるわね」
躊躇いなくオープンさせた。

「オーバークイルなんてDSすぎるだろ……わああああっ!!」

何も出来ず瞬殺されてしまった。
伏せたカードは呪われた棺。

「ふふふふふ！」
シヨックで打ち拉がれている恭司を見てご満悦。
首輪を手近づいてくる。

「う、う、うわぁーん！ 訴えてやる訴えてやる！ 法律相談所とは名ばかりの最近方向性のおかしいあの番組に訴えてやる！」
近づいてくる永琳を見て荷物を持って逃げ出した。

鈴仙の制止する声も届かない。

妖怪なのか人間なのか分からないが、大人の男が涙目で歩いているのがあまりに情けなくて可哀想だったのか、悪戯しようとしていた三体の妖精に心配され慰められていた。
彼女達の名前はサニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイア。負けた事と治らない事で思わず涙目になっていた割合は1：9。
今度慰めてくれたお礼をする約束し、三月精と別れた。
ヘル化しないだけマシだったかもしれない。

妹紅を置いてきてしまったのに気づいたのは霧の湖に差し掛かった時。
パチュリーならなんとかしてくれるかもしれないと紅魔館に急いで

いたからすっかり忘れていたようだ。

紅魔館・門前

「止まってください。ここから先には通しません」
美鈴がしっかり門を守っていた。

深く帽子を被っているからか恭司に気づいていない。

「美鈴、俺だよ俺俺」
詐欺の手口みたいだった。

「俺？」
首を傾げている。
その仕草が可愛らしい。

「そつだよ俺だよ俺」
まだ俺で通している。

「あ、その声。もしかして恭司さんですか？」
相手が名乗る前に名前を言ってしまった。

「そつだよ、恭司だよ。中に入ってもいい？」
違う人だったらどうするんだろうと考えながら聞いている。

「はい、いいですよ」
顔を見せていないのに、いい笑顔であっさりと通してくれた。

「……はあ、何やってるのよ。完璧に詐欺の手口にかかってるじゃない」

通ろうとしたら美鈴にナイフがサクッと刺さった。

「あ、十六夜。俺だよ俺俺」

こちらはまだ懲りてない。

「……おすわり」

時を止めて帽子を取っていた。

犬耳に一瞬驚いたが、妙に嬉しそうな顔で時を動かしてすかさず命令。

「わふっ……はっ！」

それはもう嬉しそうにおすわりした。

野性の犬ではなく座敷犬のようだった。

「よーしよしよしよし。ごほーびをあげる。おすわり出来たごほーび。二個でいい？ 三個？ 甘いのも三つ欲しいの？ 三個……イヤしんぼね」

角砂糖を三つ取り出している。

咲夜も恭司に影響されて立派なジョジョ好きになっている。もちろんDIEO様好きの同士。

それにしてもこの咲夜、ノリノリである。

「いらな……むぐっ」

口に三つ無理矢理押し込まれ、口の中がひたすら甘かった。

「で、どうしたのそれ？」

犬耳を指差した。

柴犬の耳なのがアンマッチすぎて奇妙。

「永遠……」

「わかったわ」

全部言う前に理解した。

「で、パチユリーならなんとかしてくれと思って来たんだ」
立ち上がってパチユリーに会いに来た事を伝えた。

「お嬢様も今はパチユリー様の所にいるから案内するわ」
案内してもらえるので素直に付いていく事にした。

大図書館

「中から凄い音してるが」
帽子を被っている。

コートは妹紅に預けているのでカバンしか手元になかった。

「デュエルしてるんじゃないかしら」

二人で中に入ると外に出たんじゃないかと思える景色が広がって

た。

魔法都市エンディミオン。

「レミイ、私の勝ちよ」

LP600

ブラック・マジシャン

ATK2500

神聖魔導王エンディミオン

ATK2700

魔法都市エンディミオン

魔4

「まだよ、まだ負けてないわ。恭司ならこの状態でも諦めない。信じればデッキは必ず答えてくれるのよパチエ。私のターン、ドロ―
！」

LP500

永続魔法

ミイラの呼び声

手札三枚

「確かに彼なら諦めないでしょうね。手札一枚から逆転された時は悔しかったわ」

オーバーロード・フュージョンで攻撃力8000越えのキメラテック・オーバーを呼び出して一撃必殺。

「ふふふふつ、来たわ。ミイラの呼び声でヴァンパイア・ロードを特殊召喚。さらにヴァンパイア・ロードを除外して手札からヴァンパイア・ジェネシスを特殊召喚！」

ATK3000

「攻撃力3000、でもまだ勝機はあるはず……」
手札の死者蘇生を見ている。

「いいえ、このターンで終わりよ。魔法カード、生者の書・禁断の呪術-を発動！私は墓地の闇より出でし絶望を特殊召喚し、パチエの墓地にある魔導戦士ブレイカーを除外するわ！」

ATK2800

「あつ」

魔法都市エンディミオン
魔5

「闇より出でし絶望でエンディミオンを攻撃！」

「きゃあっ!」

LP600 LP500

「とどめよ! ヴァンパイア・ジェネシスでブラック・マジシャンを攻撃! ヘルビシャス・ブラッド!」

「きゃあああっ!」

LP500 LPO

フツとソリッドヴィジョンが消えた。

「レミリア、なかなかやるようになったな。パチュリーも」

二人のデュエルをそっと眺めていた。

血が騒ぐが、今は頭の耳と尻尾をどうにかしないといけないので堪えた。

「お嬢様、パチュリー様、お客様をお連れしました」

帽子を深く被った男を連れている。

「パチュリー、助けてくれ! もう君しかいないんだ!」

帽子を取って縋りついた。

椅子に座り冷めた紅茶を飲み始めていた二人は恭司の犬耳を見て紅茶を吹き出していた。

「けほっ、こほっ……。恭司、貴方卑怯よ。紅茶を口に含んだ時に

「見せるなんて」
パチュリーに睨まれている。

「こほつ、はあ、ふう……ふふふふふ、似合わないわ!」
すっごい嬉しそうなレミリア。

恭司の顔面は二人の吹き出した紅茶でびっしょり。
その手の人にはご褒美なのかもしれない。

「……治してくださいパチュリー様」
袖で顔を拭ってからそれはもう必死に懇願している。

もう少し中性的な顔立ちだったら似合っていたかもしれないが、キリッとした顔立ちなのでアンマッチすぎる。

「仕方がないわね……。交換条件としてホムンクルスを作りたいから、恭司の」

「いや、マジでそれはダメだろ常識的に考えて」
パチュリーの言葉を遮り冷静に切り返した。

「常識に囚われてはダメ。ここは幻想郷なのよ」
肩に手を置き真面目な顔をして言うものだから妙に説得力があった。

「この話はもうやめよう。十六夜が赤い」
咲夜の目が泳いでいて顔が赤くなっている。

完全に瀟洒な従者をおろおろさせてしまった。

「……小悪魔に頼んでもダメかしら」
まだ諦めきれず小悪魔の名前を出している。

「だ、ダメに決まってるだろ」
何か考えたのか耳が赤い。

「残念ね。妹様とレミイの距離を縮めてくれているし、特別に対価なしでなんとかしてあげる」
本気だったのか冗談だったのかわからない。

しばらく時間が欲しいとパチュリーは行ってしまった。
そして残された何かを期待するようなレミアと目があった。
しかし見なかったことにして本棚を眺めている。

「咲夜ー、恭司が特別に血を吸ってもいいってー」
棒読みで宣言し、肩くらいの高さまで浮いて迫ってきた。

「言っでねえよ！ ちょ、くんな！ くんな！……十六夜、謀ったな！？」
気づいたら咲夜に捕まっており、悟空に捕まったラディッツのようになっている。

「ふふん、血がおいしい自分の体を呪いなさい。いただきますー」
落ちないように抱きつき、かぶつと首筋に噛み付いた。
吸われる感覚が心地良く感じる。

「震えるぞハート！ 燃え尽きるほどビート！ おおおおっ！
刻むぞ血液のビート！ …… つてもし出来たらレミリア大変な事にな
ってたな」
ただ言ってみただけだった。

「ぶはっ、ご馳走様。今日もおいしかったわ」
それはもうご満悦だった。

「そりやどうも。あ、すまない十六夜」
噛まれた跡の止血をしてくれている。

「お嬢様、いつもより飲まれて……。おいしいのかしら」
咲夜が唐突にぺろつと首筋に残っていた血を舐めた。

「ひあっ！ な、何するんだよ」
思わず変な声が出た。

お腹ぼんぼりんなレミリアは椅子に座ってこちらを見ている。

「本当、貴方がいると退屈しないわね。ゆるーくなって、悩みなん
てなさそうね」
フランとの仲も少しずつ改善されてきており、感謝している。

強いんだが弱いんだかよく分からない面白い男。

「悩みならあるさ。晩ご飯何作ろうとか、おやつ何作ろうとか、邪

神をどうしようとか」

夕飯の献立「おやつ」邪神。

重要なのが横並びになっていた。

自分は邪神に飲まれない自信があるからか。

「食べ物の事ばかりじゃない」

レミリアは恭司の作ったプリンがとてもおいしかったのを思い出していた。

「おばあちゃんが言っていた。食事は一期一会、毎回毎回を大事にしろってな」

だから献立は真剣に取り組んでいる。

咲夜に紅茶を煎れてもらい、ひたすら二人で雑談をしている。

あのお菓子はおいしい、弾幕ごっこは楽しい、新しいコンボを見つけた等々。

主にレミリアが喋り恭司が聞く。

聞き上手なのかレミリアも楽しく話をしている。

「ふう……。楽しかったわ、それじゃあまた後で」

レミリアはそう言って去っていった。

こつこつとこちらに誰かが近づいてくる。

「あの薬師には劣るけど、これで治るはずよ」
それはパチュリーだった。

手伝っていたのか今まで姿を見かけなかった小悪魔もいる。
犬恭司を見てくすくす笑っている姿も可愛い。

「パチユリー超愛してる」

薬を受け取り冗談半分で感謝の言葉を送った。
尻尾をぶんぶん振っている。

「30点ね。もっとインパクトがないと」

だがストレートな言い方に凄くドキドキして顔が赤くなっている。

「しかし凄い色……ええい、ままよ！」

液体の薬、よく見るとなんかよくわからない色をしている。
悩むと飲む気がなくなるからと一気に飲み干した。

「お、おい、これ大丈夫なのか？ 人の体から煙は出ないだろ普通」
体から煙が発生し、煙が恭司の姿を見えなくさせていく。

何も答えない二人に焦っている。

カツ！と輝き煙が吹き飛ぶと元通りになった恭司がいた。

「成功みたいね」

何故か隠れていたパチユリーにそう言われた。

「ンツン」

実にスガスガしい気分だ。歌でもひとつ歌いたいよ

うなイイ気分だ〜」
最高にハイ！ってやつだ。

「今回の件は間違えて薬を入れてしまったんじゃないかしら。本当に変化させたままにしたいなら自分以外じゃ治せないようにするでしょう?」

椅子に座り、パチユリーに説明されている。

「そうかもしれないな。もう怖くて迂闊に薬飲めないけど。あんな薬何に使うつもりだったんだらう」

しばらく休んでから礼を言い図書館から出た。

小悪魔とパチユリーの何かを期待するような目は見なかったフリをした。

惜しい事をしたかも、と後ろ髪をひかれている。

「あつ、サマナーだ!」

出た所でうろろうろしていたフランが恭司に気づいて飛び付いてきた。

「おー、フラン。一週間と少しぶりだな。元気だったか?」
抱き締めてクルクルと回っている。

「うん! あ、私もデツキ作ったんだよ?」
ほら!と器用に回りながら見せてくれた。

「お、じゃあ早速デュエルするか?」
回るのをやめてフランを降ろした。

さっきのパチユリーとレミアアのデュエルで火が点いている。

「うん！ お部屋に行こう？」

手を繋ぎ仲良く部屋に向かった。

歩きながらこの一週間で何があったかを詳しく話してくれている。

フランの部屋

「そうだ、これ渡そうと思ってたんだ。俺からのプレゼント」

綺麗に包装した箱の描かれたカードをカバンから取り出し、封じていた箱をカードから解き放ってフランに渡した。

有効活用出来る便利な能力で羨ましい。

「わあ、なんだろう。……ありがとう、サマナー！」

わくわくしながら、びりびりと開けていくフラン。

中の物を見つけ、笑顔に変わったのを見て安心した。

フラン用にカスタマイズした専用デュエルディスク。

オシリスレッド仕様と似たカラーリングにしてある。

「それじゃ、フラン。早速やろうか」

デッキをセットして起動させた。

「うん！」

腕に付けてデッキをセットして見よう見真似で起動させた。

「デュエル！」

「俺のターン、ドロー！……モンスターをセット、カードを一枚伏せてターンエンドだ」
まずは様子見。
セットして相手の出方を見る。

「私のターン、ドロー！ 手札からダーク・グレファアを召喚！
手札のダーク・ネフティスを墓地に送って、デッキからダーク・ホルスを墓地に送るよ！」
ATK1700

恭司が使うデッキの一つに似ている。

「ダーク・モンスターデッキか？」
何故特殊召喚しなかったのか不思議に思っている。

「ダーク・グレファアでセットモンスターに攻撃！」
伏せを気にせず攻撃してきた。

「リバーズカードオープン、くず鉄のかかし」
ダーク・グレファアがかかしを攻撃し、戻っていった。

「うー、ターンエンド」
悔しそうにしている。

「俺のターン、ドロー！……モンスターをセットしてターンエンドだ」

チューナーを引けず、調律も引けない。

チューナー以外のモンスターばかりが手札に来ている。

「私のターン、ドロー！ 終末の騎士を召喚してデッキからネクロ・ガードナーを墓地に送るわ。サマナー、私の勝ちよ。墓地に闇属性モンスターが三体存在する時、このカードは手札から特殊召喚する事が出来る。来て！ ダーク・アームド・ドラゴン！」
黒く巨大な竜がフランを守るように現われた。

シンクロモンスターが使用可能になる前までの恭司のエースモンスター。

それが立ちはだかっている。

終末の騎士

ATK1400

ダーク・アームド・ドラゴン

ATK2800

「ダーク・アームド・ドラゴンの効果発動、自分の墓地の闇属性モンスターを一枚除外する事でフィールド上のカード一枚を選択して

破壊する！ まず一枚目はくず鉄のかかし！」
モンスターを一枚除外し、くず鉄のかかしを破壊した。

「くっ、かかしが破壊されたか」
守りの要が破壊された。

「さらに除外してセットモンスターを一枚破壊！」
ガンガン破壊してくる。

「やばい、場が空に……！」
チューニング・サポーターが破壊されて墓地に送られていく。

「これで最後！ 除外してもう一枚のセットモンスターを破壊だよ！」

「くっ！」
シールド・ウイングが破壊された。

「バトル！ ダーク・アームド・ドラゴンでダイレクトアタック！」
巨大な尾で尻ぎ払ってきた。

「だが甘い、手札から速攻のかかしを墓地に捨てて攻撃を無効にしバトルフェイズを終了させる！」

その尻尾をかかしが防いだ。
握っていたかかしてなんとか切り抜けられた。

「やっぱりサマナーは運がいいね。ターンエンド」
一切の伏せを使用しない。
使っていて面白く、何も考えずに殴れるフルモンスターデッキ。

「俺のターン、ドロー！……来たか。手札からジャンク・シンク
ロンを召喚、効果で墓地のチューニング・サポーターを特殊召喚す
る」
だが運がいいのはここまでだった。

「ごめんね、手札のD・D・クローを墓地に捨ててチューニング・
サポーターを除外するよ」
この手順も読まれていた。
何度か見ていたから対策を練られている。

「マジか……。しまったなあ。ターンエンドだ」
フランに対策されたのは予想外だったらしい。

「私のターン、ドロー！ 終末の騎士を生け贄に捧げて邪帝ガイウ
スを召喚！ そしてガイウスの効果でジャンク・シンクロンを除外
して、サマナーのLPに1000のダメージよ」
レミリア以上に容赦なかった。

「うあっ！」

LP4000 LP3000

「邪帝ガイウスでダイレクトアタック！」

「うぐっ！」

LP3000 LP600

「ダーク・アームド・ドラゴンでダイレクトアタック！」
ダーク・アームド・ドラゴンが迫ってきて、その拳を叩きつけてきた。

「うわあっ！！」

LP600 LP0

衝撃に吹っ飛ばされている。
迫ってきたダーク・アームド・ドラゴンはかなりの迫力だった。

「えへへ、サマナーに勝っちゃった！」

そのまま立ち上がった恭司の懐に飛び込んできた。

「おっと、まだまだ甘えん坊だなフランは」

飛び込んできたフランを抱き留めた。
ぐりぐりと胸に顔を擦りつけている。

「えへへ、いただきまーす」

一度離れたかと思ったら、無邪気な顔で再びぴょんと跳ねて飛び付いてきた。

「フランもか、零さないようにね」

フランにはもう何回も吸われていて慣れている。

先程レミリアが吸った跡を見つけ、反対側にかぶつと噛み付いた。
ベッドに腰掛けて吸血中のフランの頭を優しく撫でている。

「んー」

幸せそうに吸っている。

おいしいと言うのは本当らしい。

「サマナーの血って本当においしいね。お姉様に話しちゃってごめんね？」

満足したのか吸うのをやめて離れ、同じようにベッドに腰掛けた。

初めて吸血した時にレミリアに話した事で、その次からはレミリアにも吸われるようになっていた。

「ああ、別にいいよ。一人も二人も変わらないだろ多分。フラン、包帯とかないか？」

噛まれた跡を包帯で隠す為に聞いている。

「ちゃんと妖精メイドに頼んで持ってきてもらったからあるよ。お礼もちゃんと言ったわ」

誉めて誉めてと言いたそうな目で見てくる。

頼まれた妖精メイドはお礼を言われてびっくりしていそぐだなど考えていた。

「いい子だなフランは。そんないい子には」

首に包帯を巻き終わると一枚のカードを取り出し、封じていたぬいぐるみを解放して手渡した。

「わあ、今回はお姉様なのね」

フランの部屋にはフランと恭司のデフォルメされた人形が置かれている。

毎回フランから素材を貰って紅魔館の住人を作成。

最初はフランのぬいぐるみ、次に恭司のぬいぐるみが欲しいとリクエストされていた。

そして今回は恭司の気分がなんとなくレミリアだった。

2000の技を持つ男に憧れて様々な事を習い、必死に習得した技の一つ。

主夫にしたら無敵かもしれない。

しばらく話をしているとドアをノックする音が聞こえてきた。

「妹様、お夕飯の準備が出来ました。それと恭司、夕飯を食べていきなさい。帰りはちゃんと送るから」

ドア越しに咲夜が声をかけて去っていった。

「気づかなかったな。もうこんな時間なのか」
腕時計を見ると既に六時を過ぎていた。

「サマナー、行こう？」

手を繋ぎ部屋から出て、皆が待っている部屋に急いだ。

夕飯は恭司だけ肉やらレバーやらがこんもりと盛られていた。
血を作れと言わんばかりの量である。

フランにあーんってされたり、あーんってしたり。
仲のいい兄妹みたいで微笑ましかった。

楽しい食事も終わり、食休みをしてから咲夜に送ってもらう事に。

「うむ、何でバレたんだろう」

毛糸や布、ボタンやリボンが詰まった袋をフランではなくレミリア
に渡されていた。

「貴方が来た日に妹様の部屋の人形が増えれば誰でも気がつくわよ」
手を掴んで飛んでいる。

綺麗な星空の下、空を飛んでいる同年代の男女。

「その、皆引いてた？」

男なのにぬいぐるみ等が作れる事が。
あみぐるみも勿論作れる。

「純粹に褒めてたわよ。次に誰を作ってくるのか楽しみにしてるくらいだもの」

本当に不思議な男、と改めて思っている。

「何か照れるな。よし、パパ気合い入れてたくさん作っちゃおうぞー」

照れ隠しに顔を背けてふざけている。

そんな照れている恭司を見て思わず笑ってしまった。

「ふふっ、まだ一カ月と少しなのに貴方が居ないと皆暇そうにするのよ」
ずっと前から一緒にいるような気がする。

大怪我はしたがフランから生き残り、狂気を奪い尽くした。

フランとレミリアの距離が急に縮まったのも、緩衝材のように間に恭司が入っているからだと思っっている。

291

「そりゃ嬉しいな。誰かに必要とされるってのは幸せな事だ」

人里

「十六夜、送ってくれてありがとな」

礼を言い頭を下げた。

「咲夜でいいわ。みんな名前で呼んでるのに一人だけは名字は仲間外れみたいだし」

照れながら名前で呼ぶように言っている。

「ああ、わかったよ。それじゃあ、またな咲夜」
手を振り家路へと急いだ。

慧音宅

「た、ただいまー……」

玄関を開けると膝を抱えてすすん泣いている鈴仙がいた。

びっくりして固まっていると奥からどたばた妹紅が駆けしてきた。

「心配……させるなあー!!」

走ってきた勢いでドロップキック。

「うおおおっ!!」

敵怪人のように開いたままの玄関から吹き飛び地面にぐしゃっと叩きつけられた。

「来い!」

怒り心頭の妹紅に首根っ子掴まれて居間に連れていかれた。

「ええつと……その」

どこかへ行つてしまい消息不明扱い。

日暮れまで鈴仙、永琳、てゐ、妹紅、慧音が必死に探してくれてい

た。

永琳とてゐはもしかしたら戻ってくるかもしれないので永遠亭に戻っている。

からかいすぎたと永琳も反省するくらい心配させていたようだ。

「恭司、正座」

妹紅が死ぬほど怖かった。

座布団ではなく畳の上を指差している。

「は、はい！」

素直に従った。

「よし、まずは慧音と鈴仙に謝りな」

怒られて年上なんだと気づきたくはなかった。

「心配かけてごめんなさい」

綺麗な土下座。

プライドなんて目を赤くしている二人の前では木っ端微塵だった。

「……明日から一人で遠出するのはダメだぞ」

心を占める割合が多くなりすぎている。

普段かなりべたべたしてくるが、まさか半日消息不明で泣くとは思っていなかった。

「すん……。でも無事でよかった。あ、首怪我してるの？ 診せて最初から赤い目がより赤くなっているように思える。」

「いや、これは怪我じゃなくて」

そっと診てもらおうのを辞退した。

ややこしい事になりかねない。

「そ、そうだよね……。師匠の弟子だから信用できないよね……」
落ち込んでしまった。

「そうじゃなくて……。ああ、もう。こうなってるんだよ」

妹紅に睨まれて包帯を外した。

吸血痕が左右に残っている。

「なつ、恭司！ あの屋敷に行っていたのか！ 痛くないのか？ よし、私が懲らしめに」

慧音が心配そうに吸われた跡を見て、今にも紅魔館に乗り込みそうな事を言っている。

「慧音、合意の上だから大丈夫だってくつきり残っているから余計に痛そう。」

「ぬ、塗り薬を」

薬箱から取り出して塗ってくれている。

一段落してから改めて話をし始めた。

とりあえず要約して紅魔館に居たとだけ。

「明日から一人で遠出は絶対にダメだ」

なんか過保護になってきた慧音。

色んな感情に翻弄されて出した結論。

「今度から永遠亭に来る時は、私が人里に来る時に予め言っておい

てもらえれば迎えに行くから」

鈴仙のは嬉しい提案だった。

これで妹紅の負担を減らす事が出来るし、鈴仙と二人きりというおいしい状態に。

「私はお目付け役。遠出する時はちゃんと付いていくからね」
妹紅はそう言っつて肩をばんばん叩いてきた。

なんだかんだで輝夜に執着するよりも、恭司と一緒に遊んでいた方が楽しいのに気づいてから殺し合いはしていない。

「うん」

しかし脱走はロマン。

— 先ず長い一日は終わった。

ほとぼりが冷めるまでは一人での遠出が出来なくなってしまうた。
能力以外弱いと思われているからかもしれない。

続く。

犬耳、少し壊れた決闘者（後書き）

フランはフルモンデッキ。

恭司は100前後の技を持つ男。

行ける範囲。

1、妖怪の山の神社

2、魔法の森入り口の店

3、博麗神社

冥界、マヨヒガはゆかりんに連れていかれるイベントが発生しないと行けません。

基本人里中心に活動しているし、実力を弁えているので無駄に妖怪のいる場所には出向かない。

訪問、阿礼乙女と決闘者（前書き）

次に繋げる為の話。

今更ですが、この作品では世界を揺るがすような大変な事が起こったりはしません。

日常で少し里から出かけると妖怪に襲われて死にかけたりはします、人間なもの。

訪問、阿礼乙女と決闘者

「zzz……」

用意してもらったテーブルに突っ伏してぐっすりと寝ている。

あの失踪疑惑事件から数日。

毎日せつせとぬいぐるみを作っていた。

今回はパチユリーを作成しているらしく、細かく本も再現している。素材で散らかっているがいつもの事。

「恭司、また布団で寝ないで……」

慧音が入ってきて軽く部屋を片付け、そっと布団に寝かせた。

開いたカバンからアルバムが出ていて、悪いと思いつつも手に取ってページを捲っていく。

十代と肩を組み二人ともいい笑顔で写っている写真。

レイが腕に抱きついて、困った顔で写っている写真。

他の写真も皆、一人ずつと撮っているようでみんな笑顔で写っている。

オブライエンやヨハン、ジムにエド、校長にクロノス、影丸理事に斎王と三年間が詰まったかなり濃いアルバムだった。

「ここに来る前から人妖問わず惹きつける男だったんだな」
購買でトメさん、セイコさんと三人で映りピースしている。

「よく寝た……。んーっ！」
しばらくすると目を覚ましたらしく、伸びをして起き上がった。

布団で寝ているのを不思議に思いながら畳んでいる。
慧音は既に立ち去った後だった。

居間

「おはよう、恭司。今日は家でのんびりしているといい
今日は担当教料がないので寺子屋には行かない日らしい。

「うん」

朝食の準備を手伝い始めた。

「絶対に遠出するんじゃないぞ」
釘を刺してから寺子屋に向かっていった。

「分かってるよー。……さて」
洗濯に掃除と手際良くこなしていく。

最初の頃は互いの服や下着で困っていたが今は普通に対処出来る。
る。

「……………」
慣れた作業をさっさと終わらせてぬいぐるみを作り始めた。

同時進行でパチュリー以上に気合いを入れた小悪魔も作っているの
でペースがゆっくり。

しばらく集中して作っていると外から声が聞こえてきた。

「はいはい、どちら様ですか？」

玄関を開けると和服の少女が立っていた。

「あ、居ました。初めまして、稗田阿求と申します」
丁寧に挨拶をされた。

この年の子にしてはしっかりしているなど考えている。
稗田家の話は慧音に聞いていたが何故来たのか見当もつかない。

「これはどうも、自分は鉄恭司です。それでご用件は？ 慧音なら
寺子屋ですが」
挨拶を返し、用件を聞いている。

興味津々に見られているのが少し不思議だった。

「いえ、今日は貴方のお話を聞きに来ました」
幻想郷縁起の英雄伝に追記して載せる価値があるかどうかの確認で
もある。

「とりあえず中にどうぞ。お茶を用意しますから」
居間に案内して、お茶を用意しに向かい自作の羊羹をお茶請けに阿求の元に戻ってきた。

「粗茶ですが。それで聞きたい事とは？」
作製途中のぬいぐるみを端に寄せた。

「それではまず……」

そこからはひたすら長かった。

根掘り葉掘り聞かれ、素直に答え続ける事二時間と少し。
デュエルの事、究極の紅い悪魔の竜の事、過去にどんな事をしていたのか、幻想郷に来た理由などを聞かれていた。

一番驚かれたのはやはりフランの事。
幻想郷縁起を見せられ、どれだけ危険なのかを教えられても気にしない大物っぷり。

「うーん……でも最初以外は凄いい甘えてくるだけで特に危険だとは思わないけどなあ」
茶を飲みながら話している。

かなりズレた思考で阿求が呆れていた。

「でもよく生き残れましたね。左腕が千切れたと聞きました」
あの時の新聞を取り出して見せてきた。

羊羹を食べて驚き、幸せそうな顔をしている。

「パチユリーがくつつけてくれたからな。今はもう完全復活だ」
左腕で自分の羊羹が乗った皿を阿求の前にそっと置いた。

「ありがとうございます。後、あの薬を売りに来る兎が貴方を見つけて嬉しそうに駆け寄っていく姿が目撃されていますが」
礼を言い、さらに聞いてくる。

普段は薬を売りに来ても里の人間を避ける様に竹林に帰っていつてしまふ兎との交流に興味があるらしい。

「ああ、鈴仙か。いい子だよな、挨拶だけの為に走ってきてくれてさ。おっちゃん、あんな子を嫁さんに貰える奴は幸せだと思つよ」
他の人間相手にはそんな事をしないのを知らない。

無償の愛を与えられて幸せなのはこいつだった。

「……そうなんですか。それと恭司さん、両手の二本の指で逆立ちして里の中を走ってませんか？」
偶然目撃していたがかなり素早く、皆振り返って見ていたらしい。

罰ゲームだったのか、一緒に居た子供達の全力疾走より速かったのが奇妙だった。

「ああ、罰ゲームでな。剣玉で負けたんだよ。それに指先は鍛えてるから、俺の指は岩をも貫くぜ？」
ニツと笑って指を見せている。

「ふふ、冗談が上手いですね」
流石に岩を貫くのは信じてくれなかった。

「冗談じゃないんだが。……あつきゅん、羊羹好きなんだな」
お茶を飲んでいる時に妙な呼び方で呼んだ。

「ぶっ！ ……けほっ、けほっ。な、なんですかあつきゅんって！」
飲んでいた茶を吹き出しむせている。

最近よく顔に飲料を吹き出されるなど考えながら顔を拭った。

「いや、阿求だろ？ あつきゅんじゃないか。嫌だったか？」
既に友達だと思っっているからとてもフレンドリー。

「嫌というか、いきなりそんな呼ばれ方をされて驚いただけです」
フレンドリーすぎて照れているのかもじもじしている。

「ならいいな。で、羊羹好きなのか？」
あつきゅん呼びが固定になったようだ。

「はい。でもこれはどこで買ったんですか？ 里でここまで美味しい羊羹を食べた事ないですよ。あ、外の世界の羊羹ですか？」
阿求の褒め言葉に満面の笑みを浮かべている。

「いや、自作だ」

そう言うと阿求が目を丸くしていた。

「え？」

信じられないって表情で恭司を見ている。

「ふふん、ただのデュエル馬鹿じゃないんだぜ？ こう見えても炊事に洗濯、裁縫や掃除だって出来る。和菓子、洋菓子は習っていた時の副産物だけだな」

胸を張り、どや顔で言っている

一家に一人鉄恭司。

家事に関してはパーフェクト。

洗濯機がない幻想郷でも洗濯は得意だった。

「予想外すぎます。……超人ですか？」

変人を見るような目で見られている。

「デュエリストと呼んでくれ。従兄と従姉には偶にスポンジとか言われていたが」

何でもすぐに吸収して自分の武器にするからスポンジのようだった。

天が二物以上を与えている証拠の塊である。

「……うん、決めました。それではそろそろ帰ります」
いそいそと帰りの支度を始めている。

こんな色々な意味で面白い人物は載せておいた方がいいだろうと書き加えるのを決めたようだ。

「ん？ もう帰るのか。ちょっと待ってて立ち上がり何かを取りに行ってしまった。」

「あの、これは？」

細長い箱を持って戻ってきた。

箱を持ってきた意図が分からないようで戸惑っている。

「羊羹だ。さつき好きだって言ってたろ？ 慧音は体重を気にしているのか作っても少ししか食べないから持って行ってくれ」
もう少し足腰に肉があった方がいいのにな、と頭突きからのピンタをされそうな事を呟いている。

好意には好意で返す人間。

知り合いや友人になった相手にはとことん甘い。

玄関

「お話を聞かせていただいて、本当にありがとうございます。お土産まで戴いてしまって。完成したら必ず見せに来ますね」
予想以上のお人好し、里の人間に気に入られている理由がよく分かった。

「何かよくわからんが頑張ってくれ、あつきゅん」
玄関から出て、稗田家までエスコートしている。

恭司くん、マジ紳士。

まさか自分がああ幻想郷縁起に載るとは夢にも思っていない。

阿求を送り終え、寄り道してから家に帰る事にした。

「八百屋のおやっさんに会っていかか」
豪快な親父で気に入っている。

いい野菜をピンポイントで選ぶ恭司も向こうから気に入られていた
りする。

八百屋

「兄ちゃん、らっしやい！それじゃあ今回は女をメロメロにする方
法を教えてやるう。俺が母ちゃんを……」

野菜や果物を見る前に親父が店から出てきた。

気に入られてからは毎回こんな感じで強制レッスンが繰り広げられ
るのが玉に瑕。

「やだよ、お前さん！」

おばさんもノリがよく面白い八百屋である。

何だか薫という息子がいそう。

「いや、おやつさん達よ。何で慧音…さん、限定になってるんだよ」
内容が途中から、どうすれば恭司が慧音を娶れるかに変わっていた。
畑仕事を終わらせた近所の親父におばさん達も集まってワイワイ騒いでいる。

「だって……なあ？」

何か知らないが皆頷いている。

「あんな目をした先生見たことがな……っっていない！」
何か聞きたくない事を言われそうだったので恭司は逃げ出していた。

一度お見合いさせられそうになり、慧音の名を使って回避してからはこんな事ばかり言われて参っている。

「酷い目にあつた」
毎回の事とはいえ、未来予想されるのがリアルすぎて怖くなり逃げた。
ていた。

「恭司、いい所に来たわね。迎えに行く手間が省けたわ。ちょっと私の家に来てもらえない？」
逃げた先にはアリスが居た。

恭司に頼みがあつて里に来たらしく、いきなり遭遇してちょっと驚いた顔をしている。

「アリスか。でも結局家に来てもらわないといけないんだ」
黙って行ったらまた大変な事になる。

主にあの三人が。

「何かあるの？」
隣に並び一緒に歩きながら聞いてきた。

「ああ。居候先の人が心配性だから置き手紙をしないと」
アリスとはいい友人関係を築いている。

切っ掛け次第で相手は友人以上になりたいと思うようになるかもしれないが。

308

慧音宅

「アリスに誘われたのでアリスの家に行ってきます。おやつは戸棚に羊羹が入っています、と」
おやつの場所もしっかり書いている。

ふとアリスを見ると、作りかけのぬいぐるみを見ているのに気づき慌てて隠した。

あまり知られなくなかった事なので目が泳いでいる。

「なかなか上手ね。あれパチュリーでしょ？」
完成度が高く褒めてくれた。

ぬいぐるみだが人形を作る者として親近感が湧いたのか少し雰囲気
が柔らかくなったように思える。

「うう、何だろう凄く恥ずかしい。俺のじゃないからな？ フラン
のなんだからな？」
ぬいぐるみを袋にしまい部屋に置きに行った。

耳まで赤くした後ろ姿を見てアリスはくすくす笑っていた。

「それじゃあ、行きましようか」
荷物を持った恭司を見て家から出た。

「ああ、行くう」
予備として受け取っていた鍵で、家の鍵を閉めてアリスの後に続い
た。

阿礼乙女との出会い。

アリスに連れられて向かうのは魔法の森。

その森で最初に出会うのはある店の店主だった。

続く。

訪問、阿礼乙女と決闘者（後書き）

ゴッド・イーター・バーストは買う。

今日の〇〇〇、メダルのコンボが凄かったなあ。

交換、店主とアリスとレインボー（前書き）

好き勝手書いた。

レプリカ。

再現。

お泊り。

交換、店主とアリスとレインボ―

妖怪に襲われつつ歩いていくと、魔法の森の入り口になんだかよく分らない奇妙な建物があった。
懐かしい外の世界の物が置かれている。

「香霖堂？」

立ち止まり看板の文字を口にした。

「見てきたら？ 懐かしいって顔してるわよ」
アリスにそう言われて中に入ってみる事にした。

店内

「……………ん？ いらっしやい」
眼鏡を掛けた男が本を読んでいた。

どうやら店主のようだ。

「あ、どうも」

頭を下げてから店内を見て回っている。

動かなくなった携帯やバーチャルボーイ等があり、他にも見て回っている馴染みのカードを見つけた。

「封印されしエクゾディア……だと？」

何故ここにと辺りを見回すと全てのパーツが揃っていた。

手持ちがないからどうしても欲しく、五枚手に取り店主の元に。

「これが欲しいのかい？」

カードを渡し、店主が確認している。

「ええ。幾らですか？」

ちよつと待つてくれと考え始めた。

悩んでいる間さらに見回している。

懐かしいポケベル等忘れられたアイテムが多々置かれている。

「そうだね……。これならこれくらいかな」

提示された額はちよつと手持ちじゃ足りなかった。

「うーん、ちよつと足りないですね……」

お給料は慧音が管理しているのでお小遣い制。

ガツカリしていると店主が恭司の手元を見ていた。

「その腕時計と交換でもいいよ」正確に外の世界の時を刻んでいる。

一定期間内に太陽光を当てれば止まる事のない特別な時計。

「……わかりました。交渉成立です」
大会の商品として貰った時計で特に思い入れがあるわけではないので外して渡し、封印されしエクゾディアとエクゾディアパーツを受け取っていた。

「交渉成立だ。……君は外来人だね。新聞で見た覚えがある」
腕時計を付けて改めて恭司を見た。

「ええ。鉄恭司です」
自己紹介をした。

「僕は森近霖乃助。今後ともご贔屓に」
そう言つてまた本を読み始めた。

邪魔するのも悪いのでそのまま外に出る事に。

店外。

「アリス、待たせたか？」
嬉しそうに出てきた。

「いい物が見つかったみたいね。……時計、どうしたの？」
左腕の時計がなくなっているのに気づいた。

「物々交換してきた」
五枚のカードを腰のデッキケースにしまっている。

「そうなの。それじゃあ、行きましよう？ 私から離れないでね」

魔法の森は化け物茸の胞子が宙を舞い、『普通』の人間は息するだけで体調を壊してしまう。

アリスはちょっとした魔法で恭司に影響が出ないようにしてくれているようだが、明らかに『普通』ではない恭司には必要かもしれない。

青年、少女移動中……

「怪しい茸が多々あるな」
「食べようとは思えない色をしている。」

「お昼が近いわね。何かリクエストはある？」
「茸を眺めているとアリスがそう尋ねてきた。」

「出来るならパスタかな。無性に食べたくなる時がある」
「おにぎりは流石に頼むのが躊躇われた。」

「それなら大丈夫。さあ、もうすぐ着くわ」
「里からずっと頭に上海が乗っている。」

「アリスも恭司も諦めているのかずっとそのままだった。ただ里の人達にいらぬ誤解を招いていそうではある。」

アリス宅内

「おお、たくさん人形が居るな。可愛い」

不気味とかじゃなく可愛いと言える恭司は多者と感覚がズレているのかもしれない。

何故か頭上の上海が照れている。

「やっぱり変な人間ね。迷い込んだ外来人を泊めた時は不気味そうにしていたわよ」

人形を操り昼食を作らせ始めた。

恭司は思い出したようにカバンをぐそぐそやっている。

「あつたあつた。アリスこのパンを見てくれ、こいつをどう思う？」
目当ての物を見つけ、パンをカードから解放した。

七色に染まったどう見ても怪しいパン。

あのレインボーパンをどうやったのか再現している。
食欲をなくすカラーだった。

「凄く……虹色ね……」

興味があるのか手に取って見ている。

恭司を見てパンを見てを繰り返している。

「食べたいなら食べていいぞ。ただし、その前に」
キリツとした顔になった。

「その前に？」

何を言うのか待っている。

「お前に……レインボー」

どうしても言いたかったらしく、かなり満足している。

「いただきます」

そんな恭司をスルーして一口齧った。

表現できないくらいとんでもない味がして身動きが取れない。

「……アリス？」

固まって動かないアリスに声をかけた。

「……」

無言でそつと恭司にパンを返し、家のどこかに走っていった。

間違いなくトイレだろう。

「うわぁ、どうしようこれ。そんなに不味いのか」

小さく齧られているが中までレインボーで、こんな物どうやって処理しようと思んでいる。

五分後。

「口の中がああ味だわ……」

相当強烈だったらしく、涙目なアリスが戻ってきた。

「お前にレインボー」

まだパンを持っていて、見ていただけで味が鮮明に蘇ってくる。
某パン屋のより破壊力は上のようだった。

「……ふふっ、そうね。貴方にレインボー」
アリス　が　おそいかかってきた　！

「な、何をするだアッ！」
回避したがパンを奪い取られている。

そしていつのまにか人形に包囲され逃げ道を塞がれてしまった。

「大丈夫、痛くないわ。貴方にレインボー」
レインボーパンを口に押しつけてくる。

苦しみを分かち合う仲間を作ろうと必死。

「おい、待てっつてその向きだと間接キ……ムグッ！」
齧ったところを押しつけて来たので動揺して口を開いてしまった。

「おいしい？」
首を傾げ可愛らしく言っているが目が笑っていない。

しっかり齧って飲み込んだからか、恭司の頭がふらふらしている。

「不味い……。アリス、お前は俺の……！」

「ほら、こつちよ」

仲間を慈しむように手を引いてトイレに導いている。

その姿は女神のようだと思ったが、原因がアリスなので悪魔だと思
い直した。

五分後。

「ドジャアアア〜ン」

トイレの扉を開けて元気に出てきた。

「不毛な争いだったわ……」

待っていたアリスにレインボーパンを渡され、嚴重に封印しカバン
にしまった。

昼食の時間。

「カルボナーラとはありがたい。口の中が幸せだ」

戯れ合っているうちに食事の準備が整い、アリスと仲良く食事をし
ている。

「お気に召してもらえて嬉しいわ」

一緒に大変な目に合った事で仲が深まっている。

「こ馳走様。それで用件は何だったか」

皿を運び、自然に洗い物も済ませてからアリスに尋ねた。

「前にも言ったけど、恭司には人形のモデルをお願いしたいの。男性の人形も作ってみようと思って」
食後の紅茶を飲みながら話をしている。

人形のモデルとして申し分ない男で、友達として頼める最適な人物。

「まあ、それはいいけどさ」

何度か上海を降ろそうとしているが髪の毛を掴んで抵抗するので困っている。

「それじゃあ、何泊かしてもらおうね」

さすがに一日、二日で出来る物ではないらしい。

それに恭司がびっくりしてアリスを見ている。

「泊まる……だと……？ 見た目若い男女が一つ屋根の下に？ 許せるっ！」

里に帰れば毎日一つ屋根の下に男女である。

ハッとしたアリスの顔が赤くなっていく。

「な、何言ってるのよ！ そんな誤解を招かれそんな事言わないで！」

そんな事を言われたせいで意識してしまい、ケロツとした顔の恭司が腹立たしく座ったまま軽く蹴りを入れてくる。

「アリス、誤解をされると考えるから誤解されてしまうんだ。逆に考えるんだ。誤解されちゃってもいいさ、と考えるんだ」
考えなしに言ってる馬鹿がここにいる。

アリスの顔がさらに赤くなり蹴りも激しくなった。

「いい訳ないでしょ！ まだ恋仲でもないのに！」
まだって事は将来的に可能性はあるという事に。

「ジョースター卿の台詞で納得しない……だと？」
だが恭司は違う事で衝撃を受けているので気づいていない。

スタンドも月までぶっ飛ぶ衝撃。

「ジョースター卿って誰よ。とにかく空いてる部屋に案内するから付いてきて」

ぷりぷりと怒ってズンズン歩いていった。

アリスはからかうと楽しい奴だと認識した。

「戦場カメラマンの渡部さんが言ってたけど、妖怪とかは居ると思えば居るんだな」

唐突に夏に見た番組を思い出している。

居ると思えば、居ると思います。

空き部屋。

「荷物はそこに。まずは服を脱いで」
いきなり大胆な事を言われて目を丸くしている。

「……アリスさんのえっち！」
自分の体を抱き締めてアリスから距離をとった。

頭上の上海も恭司と同じようなポーズをして可愛い。

「違うわよ！ 上着を脱いでって事！」
また顔が赤くなった。

やりたい放題な恭司ゾーンに引き込まれて完全にペースが乱されている。

「ジョーダンだよジョーダン。男の裸見て喜ぶ女の子なんて……まあ、居るだろうけどアリスは違うって分かるし」
上着を脱ぎ、ベッドに置いた。

「平均的な男性、恭司のデータを取ってから作る人形のサイズを決めるから動かないで」
メジャーを持って近づき、胸回り等、体全体を性格に測り始めた。

「……」
余計な事を言わないように黙っている。

ただ密着する度に頬を赤らめ照れるのをやめてほしいと考えていた。

しばらくして採寸が終わり動くお許しが出た。

「メガマンみたいに格好良い人形を頼む。ダメならメタビーかサイカチス、それかガンノウズがいい」
全て男性型つてだけで男性ではない。

「メガマンとかメタビーとか知らないわ」
何言ってるの？つて顔で見てる。

「リクエスト不可か……」
等身大の恭司そっくりな人形だったらラヴオスと戦う時に使えるかもしれない。

あんなのが居たら今度こそ世界はおしまいだが。

「たまに呼ぶから呼ばれたら来る事。わかったわね？」
色んなサイズを書いた紙を持っている。

一度作り出すと止まらないから呼ばれる事は少ない。

「分かった、任せろ」

アリスの目に映った自分の目を見れないかなと、くだらない事をやっている。

「それじゃあ、ごゆっくり」

アリスが部屋から出ていき、上海と二人つきり。

「とりあえず細部まで掃除等々しておこう」

人形達がやっているようだが、さらに綺麗にするお掃除の匠。

散らかった物を分かりやすく整頓し、箒を使い埃を掃き雑巾で隅々まで磨いていく。

時間を掛け、外が暗くなる頃にアリスの部屋以外はピッカピカになっていた。

「やりすぎた感が否めない」

他にやる事がなかったので、壊れてしまわれていた椅子を直したりと色々やり部屋に戻った。

部屋

「へっへっへっ、里の爺様婆様達から教わったよく飛ぶ竹とんぼ作って子供達に自慢してやろう」

迷いの竹林から切り取ってきた竹の一部をテーブルに乗せた。

ナイフを取出し削ったり加工したりしていく。

「バンブードラゴンフライRX。……これは大空の子、バンブードラゴンフライRX!」

黒いボデイに赤い羽根。

寂しいのか独り言ばかり呟いている。

「む、虚しすぎる……」

そのままアリスが呼びに来るまで上海相手に色々と言ったり、吹雪に習った口説くテクニクを使って照れさせたりとそれなりに満喫していた。

そんなこんなでアリス宅での一日目は終わった。
寂しくなって独り言が増えた恭司は翌日大変な事になるがそれはまた次回。

続く。

交換、店主とアリスとレインボー（後書き）

クロウ編にヴァーユ、カルート、シロツコが入らないらしいですね。
これは酷い。

Mの訪問／持て成す恭司（前書き）

GCCXは安定した面白さがあって見ていて安心する。
作者は有野課長を応援しています。

本編はいつも通りやりたい放題だけど絶不調。

Mの訪問／持て成す恭司

「エリック、上だ！……ぐう……」

朝っぱらからとんでもない夢を見ているようで寝言で叫んでいる。

『お邪魔するぜ！』

何やら玄関から誰かが入ってきたようで、どたばたと騒がしい。

『ちよつと、朝からいきなり来てどうしたのよ』

アリスが応対しているようで話し声が届いている。

「警部補……矢部謙三……」

精神的に図太いからか全く起きる様子がなく、起こそうとした上海を掴んでいい感じに抱っこしている。

抱き枕ならぬ抱き人形である。

じたばた抵抗していたが諦めたようで大人しくなった。

『……でお前のところにいるって聞いて来たんだ。で、噂の外来人は？』

凄く興味津々な訪問者。

見回している様子が見なくても分かる。

『まだ寝てるわ。里の獣人が惰眠を許してくれないからたまにはもつと寝かせてくれて言ってね』

一度起きたみたいだが二度寝している。

二度寝の心地よさは異常。

『それなら私が起こしてやるぜ。さあ、案内してくれ』

「十代、それは俺の唐揚げ……」
見ている夢がころころ変わっている。

バタバタバタって足音が近づいて来て、バンツ！と乱暴にドアが開け放たれた。

「あっちの方から来たぜ！」
白黒で魔法使いみたいな少女が入ってきて、その手には箒が握られている。

「ちょっと魔理沙、乱暴に開けないでよ！ 少し壊れかけてるんだから！」
追い掛けてきたアリスが抗議している。

ドアは昨日匠の手により修復されています。

「おっ、こいつか。だけど今ので起きないなんて凶太い奴だぜ」
まずは身体を揺すっている。

揺れた事で拘束が解け、上海が腕から抜け出てきた。

「うーん……後86400秒……」
寝返りをうち、すやすやと惰眠を貪っている。

「よしよし、それじゃあ」
箒を振りかぶり軽く叩きつけた。

アリスは止めようとした体勢で固まっている。

「三万年早い……」
人差し指と中指で挟んで止めているが眠っている。

魔理沙と呼ばれていた少女も驚いて目を見開いていた。

「何者なんだぜ……」
何回やつても止められてしまう努力マンみたいな男だった。

「……いい事思いついたわ」
アリスは嬉しそうに何かを取りに行った。

嫌な予感しかしない。

「な、なあ、流石にやりすぎじゃないか？」
何故か無抵抗だったので、手足をベッドに縛り付け口を開かせている。

アリスの手には水がたくさん入ったヤカンがある。

「ふふふふ、あのパンの恨みはまだ返しきってないわ」
無視をして開いた口に水を流し込み始めたが、その水をごくごく
飲んでいる。

数分後

「信じられないぜ……」

「こいつどうなってんのよ……」

そこにはヤカンの水を飲み干した恭司の姿がある。

まさか飲み干すとは思っても見なかった。

「ふぁ……よく寝た。おはよう、何か腹の中がパンパンなんだが。
てかなんで縛られてんだよ。それと君は誰だ」
起きたら縛られていて、何故か腹が一杯、さらに知らない少女まで
いた。

コナンでも解けない謎である。

ベッドを壊しかねないので無理矢理引き千切れない。

「貴方、本当に人間のカテゴリー内にいるの？」

疑いの眼差しを向けながら拘束していた縄を解いている。

「面白い奴だぜ」
笑って見ている。

「で、君は？」
立ち上がり軽く髪を整えて尋ねた。

絵本などの魔法使いみたいだなと考えている。

「霧雨魔理沙」

昨晚調整して放置していたデッキを手に取りながら答えている。

いつのまにか興味がカードに移っていたみたいだった。

「霧雨だな。俺は鉄恭司。アリスと誤解されるような関係ではないからな、絶対違うんだからな！……痛い」
必死に否定して誤解されないようにしていたらアリスに蹴られていた。

「そつちのが余計怪しまれるでしょ！ このこの！」
蹴っているが魔法使い程度の筋力じゃたいしたダメージは出ない。

「アリス、それは我々の業界ではご褒美です。それと霧雨、それ欲しいならやるよ」

死ぬまで借りていこうと考えていたので驚いた顔をしている。

まだアリスにあんよをふみふみされている。

「いいのか？ それと魔理沙でいいぜ」

そして当たり前のようにポケットにカードをしまっていた。

三沢のように調整用のデッキだからあげても被害はない。

「応。俺の事も恭司でいい。しかし魔理沙は俺が小さい時に見た絵本の魔法使いのイメージにぴったりだし少し離れて全身を見ている。」

ねるねるねの魔法使いのおばあさんのイメージも強い。

「そうなのか？ ちょっと照れるぜ」

少し恥ずかしそうに笑っている。

「アカデミアでの三年間で植え付けられた魔法使いとは違うけどな今は返却し、カバンにはレプリカしか存在しないBMG。」

彼女は懐かしいなと思いつけている。

「それよりも朝食はどうするの？」

仲間外れ気味だったアリスが尋ねてきた。

「俺が作る。なんかやる事がないと暇死しちゃう」
「急げ急げとキッチンに向かっていた。」

キッチン

「魔法って便利でいいよな。俺もメラの魔法とケアル的な魔法が使いたい」

茹でたパスタに油を絡め、それに魔理沙が持ってきていた食べられる茸を使って和風パスタを作っている。

上海に調味料を取ってもらったりとかなり仲良し。

「簡単な魔法くらいなら教えてもいいぜ。ただし私の家で働いてもらうけどな」

掃除や修繕、料理が出来ると知ってから仕切りに誘ってくる。

アリスの家の不調だった部分のほとんどが直されているのに気づいて羨ましくなったのかもしれない。

「ダメよ、まだ人形が全然出来てないんだから。でもこの椅子直せたのね……」

アリスが連れていかれないように釘を刺す。

気に入っていた椅子だったのか嬉しそうにしてくれている。

「ふふん。今まで色々がむしやらにやって来てたからな」
可愛い猫と犬が描かれたエプロンが何故か似合っている。

料理を作り始めてすぐ二人はエプロンを見て爆笑、今はもう見慣れたのか平気なようだった。

「アリスが羨ましいぜ」

心底羨ましいですって顔をしている。

何故かアリスが勝ち誇ったような顔をしていた。

「もし慧音に見捨てられたら家事代行を仕事にしようかな
まず見捨てられる事はないと思われる。

一人で独占したいとすら想われているし。

「安心していいぜ。その時は私が雇ってやる」
何だか魔理沙が頼もしく見えている。

まさか早速雇い主が見つかるのは予想外だったらしくこう呟いた。

「ありがとな。だが俺はレアだぜ？」

紅魔館や永遠亭からしたら喉から手が出る程欲しい人材。

様々な技術を持っているので里でも重宝されている。

「関係ないぜ。早く慧音に見捨てられるといいな」
爽やかに見捨てられるといいな、とか言われてしまった。

とりあえず再就職は容易かもしれない。

「まあ、でも本当にそうだったら私が恭司を買い取るうかしら。スポンジみたいに吸収するから教えるのも面白そうだし」
昨夜人形の手入れを教えてすぐに出来るようになり驚愕したばかりだった。

魔法使いにしまえば使用人としても使えるしと考えている。

「まあ、俺がレミリアや輝夜に頼っていく前に気づけたらいいな」
両勢力から誘いは来ているが人に教える教師が楽しいので断った。

パスタを皿に盛り、三人分テーブルに運んでいく。

「くっ……負けた……」

アリスが物凄く悔しそうな顔でパスタを食べている。

料理で男に負けたのがショックだったようだ。

「うまいぜ！ 恭司、お前いい嫁さんになれるな」

魔理沙は食べながら賞賛の声を上げている。

「まあ、貰い手があればいいんだけどな」
軽口をたたきあいながらの食事。

上海は所定のポジションでちょこんと座って落ち着いている。

「魔理沙、あんなに食べて平気なの？」

椅子に座りお茶を飲んでいる魔理沙を見て、アリスが心配している。

何回もおかわりしてお腹が苦しそうだった。

「お腹ぼんぼりんだな魔理沙」

皿を洗いながら話し掛けている。

すっかり昔からの友人のような関係だった。

「ちょっと食べ過ぎたぜ……」

恥ずかしそうにお腹を撫でていた。

お茶はしっかり飲んでいる辺り、まだ余裕はあるのかもしれない。

「食を楽しむのはいい事だ。俺は二人がおいしそうに食べてくれたのが凄く嬉しい」

純粹に嬉しく笑っていると、二人が目を丸くしてこちらを見ていた。

「そうなの……。おいしい料理だったわ、ありがとう」

アリスの言葉により嬉しそうに笑っている。

「よし、アリスの家にいる間は毎回来る事に決めませ」

おいしいご飯に惹かれており、しばらくは騒がしい食卓になりそうだった。

食休みをして落ち着いた魔理沙が、アリスに紅茶の手順をならつていた恭司の腕をいきなり掴んでいた。

「キノコ狩りに行って晩ご飯はキノコづくしにしてもらおうぜ！」
アリスが慌てて止めようとしたが、そのまま行ってしまい溜め息をつきながら追い掛けていった。

アリスの家外

「魔理沙、俺のキノ……」
とても危ない事をアリスが追い掛けて出てきそうなタイミングで言ってみた。

「言わせないわよ！」
ばっちりのタイミングでアリスが出てきてカットイン。

お約束が分かかっていらっしやる。

「よし、三人でキノコ狩りだぜ！」
固まって散策を始めた。

青年 & amp · 少女、キノコ狩り中……

「魔理沙、これは食える？　なんか配管工の親父がでかくなりそうな色してるが」

でかくて食欲がなくなりそうな色のキノコを持ってきた。

「それは平気だぜ」

魔理沙は小さくおいしいキノコを集めているようで忙しそうだった。

「み、緑の悪魔……だと？　冷や汗が止まらねえ……」

1UPキノコそっくりなキノコを見つけたが、某幕末志士に影響されているから不安で仕方ない。

「それも食べられるぜ。ただもう一人の自分がどこかに待機してる気分になる」

食べても1UPキノコ風だった。

ある程度集まり三人でおしゃべりをしながら休憩している。
色んなキノコがあるな、と観察。

「これだけあると凄いな」

里以外では付けていないと落ち着かないのか、いつのまにかデュエルディスクを付けている。

「魔理沙もいつのまにか付けてるじゃない……」
気づかれて何度も催促され渡していた。

アリスだけ付けていないのが仲間外れみたいで寂しそう。

「へへっ、早速相手をしてもらっぜー！」
色んな物が貰えてとてもご機嫌。

デッキのコンセプトが分かっていないのにいきなりは無謀だと思っ
が。

「半端な気持ちで入ってくるなよな。デュエルの世界によオツ！」
ノリノリだった。

「デュエル！」

「えーっと、ドロー！ ゴブリン突撃部隊を召喚、カードを二枚伏
せてターンエンドだぜ！」
渡したデッキは高攻撃モンスターで攻撃を繰り返すデッキ。

「俺のターン、ドロー！ 手札から高等儀式術を発動。手札の仮面
魔獣マスクド・ヘルレイザーを儀式召喚するのにデッキから封印さ
れし者の右腕、封印されし者の左腕、封印されし者の右足、封印さ
れし者の左足、ダンシングエルフ二枚、ガード・オブ・フレムベル
二枚を墓地に送る」
何を考えているのかエクゾディアパーツを殆ど墓地に送った。

「うわっ！ いきなりそんなの出すなんてずるいぜ！」

「カードを一枚伏せる。そして魔法カード、ダーク・バーストを発動。墓地の封印されし者の右足を手札に加えてターンエンドだ」
攻撃はせずにあれを狙っている。

「私のターン、ドローだぜ！」
ニヤツと恭司が笑い宣言した。

「魔理沙、お前の負けだ。罠カードオープン、補充要員。このカードは自分の墓地にモンスターが5体以上存在する場合に発動する事ができる。自分の墓地に存在する効果モンスター以外の攻撃力1500以下のモンスターを3体まで手札に加える。俺が加えるのは封印されし者の右腕、封印されし者の左腕、封印されし者の左足」
三枚のカードが手札に加わると魔理沙のデュエルディスクがロックされ動かなくなった。

「え？」

見ていたアリスも不思議そうにしている。

「手札に封印されしエクゾディア、封印されし者の右腕、封印されし者の左腕、封印されし者の右足、封印されし者の左足の全てが揃った時デュエルに勝利する。……怒りの業火エクゾード・フレイム」
「！」

突如空中に現われた五芒星からエクゾディアが現われ、魔理沙に向けて強力な一撃を放った。

「わああああっ!!」

初めてのデュエルでエクゾディアの一撃はトラウマになるかもしれない。

座り込んで茫然としている魔理沙に近づいた。

「大丈夫か？」

そして手を差し伸べて立たせた。

「す、凄いぜ！ あれなんなんだ!？」

エクゾディアに大興奮し、服を掴み揺さ振ってくる。

「エ、エクゾディアだ」

あの後カバンに入れたら増えていたりする。

「エクゾディア……」

魔理沙は何か考えながら、ちらちらとこちらを見ている。

「そっちと交換してもらえないか？」

デュエルディスクからデッキを外し、魔理沙に差し出した。

欲しいんだろうなと考えて差し出しているが、そういう事をするのが恥ずかしいのでそっぽを向いて渡している。

「え？ あ、ありがとう……」

デッキを受け取り、最初に受け取ったデッキを返した。

何だかしおらしくなっている。

「よし帰ろうぜ。待たせてごめんよマイハニー！」
そう言いながらアリスの元に駆け寄り、カウンター気味に蹴られている。

「パチュリーの言ってた通り、面白い奴だぜ」
ニツと笑って二人の元に駆け寄って行った。

「ハニーって何よ！ あんたが何か言う度にドキドキするのよ！」
悪い意味で。

冗談が通じず、ひたすら脛を蹴ってくる。

「それが愛だ！ それは痛い！」
流石に脛は痛かった。

クールなアリスはどこかに行ってしまったようだ。

「愛を越えれば憎しみにもなるわよ！ ……ッ！」
耳元で吹雪氏にならった最高の口説き文句を囁いたら、真っ赤になり口をぱくぱくさせている。

「騙された……。吹雪さん、キヤーステキー！ってならないじゃないですか！」

吹雪さんの取り巻きが羨ましかったらしい。

そんな二人の傍で魔理沙が笑っていた。

「漫才ってやつか？ 面白かったぜ。でもそろそろ帰らないと恭司が危ないな」

暗くなってきたのでキノコをまとめて袋に包んでいる。

アリスはまだ口をぱくぱくさせて鯉みたいだった。

「ほい」

そんなアリスの開いた口に飴を入れている。

「ハッ。今とんでもない事になっていた気が……」
飴のお陰で冷静になって戻ってきた。

何を言われたのか不思議で仕方ない。

「うわあ！ 魔理沙、超速じゃないか！ 振り切るぜ！」
アリスの家まで魔理沙に乗せてもらう事になり、目をキラキラさせている。

「……っと待ちなさ……！」
何かを言っているアリスを振り切ってるぜ！

後がとても怖い。

「ははっ！ いいなそれ！ 振り切るぜ！」
二人してハイテンションだった。

アリス宅

「絶望が俺のゴールだ……」
乗り物酔い初体験で蹲っている。

「よしよし」
魔理沙が背中を擦ってくれていた。

ようやくアリスが到着した時には元気に復活していたが。

「貴方達、覚悟はいいかしら？」
アリスさんの怒っているが美しい笑顔、それがとても怖かった。

「あー……。用事を思いついたぜ！ じゃあな！」
すたこらさっさだぜ！と聞こえてきそうな感じで飛んで逃げた。

恭司はあっさりと見捨てられている。

「くっ、霧雨さん！ 本当に裏切ったんですか！ 俺とあんたは仲間だったんじゃない……ひいっ！」

魔理沙が飛び去った方を見て叫んでいたら肩に手を乗せられた。

綺麗な手のアリスさん。

「さあ、貴方の罪を数えなさい」
蓬萊！ 上海！

「何でWを知って……ぬわーっ！っ！」

普通の魔法使いと出会い友人になった。
七色の魔法使いは確実に影響を受けて変わっている。
次回も振り切るぜ！

続く。

Mの訪問／持て成す恭司（後書き）

DP遊星編3を5パック購入。

当たったレア以上がスタロ、円舞、ビッグ1、ジャスティスプリン
ガー、ドリル。

スーパ―以上のカードがハズレにしか思えない。

次のSTORも三極神と言う名のどう考えてもハズレ軍団がかなりの
枠埋めてるから期待できないんだよなあ……。……。

Aの力作／働く決闘者（前書き）

絶不調。

本編中にあの人はい出てきません。

Aの力作／働く決闘者

あれから二日。

「この世界、散らばった強さの歴史をこの手に掴んで特別になって
ー」
起床後食事の準備をし、歌いながら人形達一体一体の手入れをして
いる。

最近びびったのが首吊り蓬萊人形を夜中に借りている部屋で見た事。

「おはよう。今日はトーストなのね」
洗濯含め家事全てを任せている。

恭司がしている人形達の手入れも完璧になってきているので満足な
ようだ。

「おはようアリス。そろそろ人形完成する?」
流石に慧音の使いとして妹紅が迎えに来そうだった。

正直帰るのがとても怖いらしく現実逃避して上海達と楽しく過ごし
ている。

「今日中には完成するわ。明日はちゃんと人里まで送るから」
不敵な笑みを浮かべており、相当自信があるらしい。

朝食を共にし、互いにそれぞれやるべき事を始めた。

「俺は風呂に呪われているのかもしれないな」
風呂掃除しながら呟いている。

昨日入浴中に寝呆け眼のアリスが入ってきて大変な事になっていた。啞然としてみると気づかずに浴槽にまで入ってこようとしたので、きゃーっ！と自分から叫んでみたら人形達にぼっこぼこにされて文字通り踏んだり蹴ったりの結果に。

「上海、お前もあの時混ざってた？」
必死に首を横に振っている。

どうやら混ざっていたが誤魔化しているみたいだ。

「そうか、やはり上海は俺の味方だったか。アリスは俺の裸を見た癖にすっごい容赦なかったし」
簡単に上海を信じている。

目潰しからの蹴りやら弾幕やらで風呂が大変な事になっていた。片付け修復はなんとか出来たが、それ以後アリスが恭司の顔を見る度に頬を赤く染めるようになっていた。

「……ああ、もう上海可愛いよ上海」
手伝ってくれていた上海を見て口に出し、バツと腕を広げてみたら

胸に飛び込んできた。

コンビネーションは抜群だ。

部屋

「魔法やら罫のメリットだけを自分にフィードバック出来ないものか」

家事が終わり自分の能力についての研究をしていた。

モンスターの力を自分に宿せたら超強化出来るかもしれないが、体がおかしくなる可能性も高いので出来ない。

ディケイドライバーやディエンドライバーのようなアイテムがあれば今よりも遥かに有利に戦えるが無いものねだり。

ノートに実験した事を色々と書いている。

死者蘇生などのこの世の理を無視する魔法は自らの命を全て差し出しても使用することが出来ないのが分かった。

これはエンシエント・フェアリーの忠告がなかったら命を持っていかれていたかもしれない。

団結の力は自分を味方だと思ってくれている人の数だけ自分自身の身体能力がバカみたいに上がるチートカードだった。

これedyouやく並以上の妖怪と戦う時に使える現状での最高の切り札が出来た。

シンクロモンスターは直接呼び出すよりも、リアルでシンクロ召喚した方が負担が少ない。

「こんな所か」
書き留めた。

リミッター解除等はデメリットが恐ろしくて試していない。

お昼は愛情をこめておにぎりを作っている。
部屋まで持っていく、ノックをしてからドアの前に置いて戻ってきた。

「さあ、シエスタの時間だ。上海、おいで」
上海も嬉しそうに飛び付いてくる。

第三者が見たら人形とイチャついてる危ない人。
いつかアリスに銀様を作ってもらおうと考えているから危ない人だった。

夜

誰かに揺すられて意識がゆっくり覚醒していく。

「……だ、誰だ？」
上海より大きめで、帽子を被りフォーマルな服を着た少し恭司に似

た人形がいた。

「完成したのよ。どうかしら、紳士でしょ？」
アリスが扉から見ていた。

男性型を初めて製作したようだが、なかなかの出来である。

「おー。俺に似て紳士だな」

こっちはどちらかと言えば紳士の前に変態と付きそつだが。

「主な役目は守護なの」

恭司に似て紳士という部分は聞き流した。

でかい盾を軽がると持ち、アリスが自分の身を守る位置に立たせている。

354

「ますます俺に似てるじゃないか。……ハッ。まさかアリス、そんなに俺のこ……痛えよ！ 世界樹じゃねーんだから盾で殴るな！」
その男性型人形に思いつき頭を殴られ、ゴガンツ！て音がした。

「名前はどうぞしようかしら」
まだ考えていなかったらしい。

もう自棄になって言い放った。

「パラディンでいいじゃん。超痛えよ」

たんこぶが出来て涙目である。

「パラディン……いいわね。人形とイチャついてる自称紳士に付けられたのは癪だけど」

現在進行形で上海を抱っこしているから白い目で見られている。

上海とは違い、アリスが全て動かさないとパラディンは動かない。

「……ああ、なんだそういう事か。僕の胸の中に飛び込んでおいで、マイハニー。……ふっ、キング・オブ・ハートに二度同じ技は効か……」

盾による初撃をかわし調子に乗っていたら違う人形に奇襲されてダウンした。

アリスとのコミュニケーションは命懸けである。

「……これは」

意識が覚醒し起き上がると服が新品のようになっていた。

それをアリスがニヤニヤしながら見ている。

「貰ってばかりじゃ悪いと思って前もって作っておいたのよ」

古い方は何度も繕ってはいたが、これ以上の修復は見栄えも悪くなるので出来ない状態だった。

「うん、すっごい嬉しい……。アリス、ありがとう」

おふざけなしで感謝している。

ちよつと素材は違うが見た目は完璧にオシリスレッドのジャケットが再現されていた。

「……晩ご飯にしましょ。今日は最後の夜だし私が作るわ」
照れているのか早足で部屋から出ていった。

上海達も付いていつて今は一人。

「前の服はどこ行つたんだ？ てかシャツまで変わってる」
上は全て取り替えられていおり、部屋を探しても見当たらなかった。

キッチン

「なあ、俺の前の服は……お、おい、やめろつて。上海、蓬萊」
調理中のアリスに尋ねてみようとしたが、上海と蓬萊にテーブルに追いやられた。

大人しくしているようにと見張られている。

「……まあ、いいか。パラディンレヴィはアリスの部屋で待機中みたいだな」
操らない時は待機している。

上海のほつぺたに触れて照れさせたりしながら出来るのを待ってい

る。

仕草が愛らしく、ついちょっかきを出してしまう。

「待てよ？ 上海が可愛い。アリスが可愛いって事になるのか？

……アリス可愛いよアリス。グフツ！」

キッチンの方からヤカンが飛んできて直撃した。

どうやら聞こえていたらしい。

「馬鹿な事言っていないで静かに待ってなさい」
頑丈さに手加減をやめている。

数日で扱いに慣れたようだった。

夕食

「そついやさ、昨日アリスが引き籠もってる時にお客さん来てたぞ。丁重に持て成して待っててもらったんだが夕方頃に帰っていったけど」

食事の準備が終わり、席に着いたアリスに報告した。

いくつか無かった食材はその時に使っていたらしい。

「それは悪い事をしたわね。それで誰が来てたの？」
来てくれた人を持て成していた事に感謝している。

誰がわざわざ来たのか不思議だった。

「アリスのお母さんって言ってたな。アホ毛がこうなってて小さい」
魔界の神様である神綺様だった。

母親という件は信じていない。

「……え？ な、何か余計な事言っただけじゃないでしょうか？」

啞然とした顔をし、そして焦って何を話したのか聞いてきた。

「いや、特には。お若いし美人ですねとか、求婚したいくらいですよとか本音と冗談を織り交ぜたトークはした」

最初は持たれていた警戒心もすぐになくなり楽しく会話をしていたりする。

「……まあ、それならいいわ。だけど人の母親を口説かないでちょうだい」

先日の魔理沙にしたような弁解をしていないならいいかと安心して
いる。

「八割くらい冗談だから心配すんなって。嬉しそうに照れて、上機嫌で帰っていったから持て成しは完璧だろ。後はお土産に焼いたクッキーも渡しておいた」

気づかなかったアリスもアリスだったが、それだけ集中していたからだった。

「今度貴方が何を言ったのか聞いてみるわ。さあ、冷める前に食べましょっ？」

色々疑いの眼差しを向けながらも、冷める前に食事を始めた。

「……………ふう」

食事を終えて、紅茶を戴きながらまつたりとした時間を過ごしている。

黙っていれば二枚目でクールな男に見える。

「でも喋るとガツカリなのよね。ガツカリ王子」
アリスが普通に酷かった。

ジュネスの彼と同じ称号、ガツカリ王子を手に入れた！

「お前は俺のピュアな心を決して楽しいのか？ でもいいさ、俺には癒してくれる上海がいる」
ねー、と肩に座っている上海に話し掛けると嬉しそうに頷いてくれた。

四六時中一緒にいる一人と一体の仲良し度はランク7くらいになっている。

「あら、私じゃ癒されないうって言うのかしら？」
隣に座ってじーっと目を見つめてくる。

「……………」

それを黙って見つめ返している。

黙って真面目な顔を見ると本当にいい男だった。

「な、なによ」

先日の風呂の事を思い出して目が泳ぎ始めた。

その様子を見てフツと笑っている。

「目を逸らさなかった俺の勝ち！。おお、上海ありがとう」
いつのまにか頭の上で寝そべっていた上海が撫で撫でしてくれた。

道を踏み外してしまいかねない。

「くっ、このロリコン！」

アリスが言っではいけない事を言い放った。

上海に負けているのがちょっと悔しかったらしい。

「俺はロリコンじゃねーよ！ 断固否定する！」
ぎゃーぎゃー騒がしかった。

何という事でしょう。

数日前までは静かだったアリス宅が今じゃ騒がしい家に様変わり。

「そんじゃ、おやすみ。いい夢見るよ？」
ひらひらと手を振って部屋に戻っていく。

明日からは見れないその背中にアリスが少しだけ寂しそうだった。

翌日

朝も早くから魔法の森を歩いているが、何だかアリスの元気がない。

「どうかしたのか？」

上海はお留守番で今は二人きり。

「何でもないわ」

最初に会った時のようなアリスだが、時々ちらちらと見てくるのが不思議だった。

そして特に何事もなく里に到着。

「送ってくれてありがとな。そうだ、今度はアリスが遊びに来てくれ」
手を握ってお別れの挨拶。

元気づけようとその内に遊びに来るように言っている。

「いいの？」

少し不安そうに聞いてきた。

恭司が握った手を激しく上下に動かしている。

「友達なんだから当然だろ？ またな、アリス！」
手を離し、手を振りながら走っていった。

よそ見をしていたせいで凄いい音を出して転び、近隣の人が出てきたがまたかって顔で家に入ってしまった。

それを見て微笑み、遊びに行く日を楽しみにしてアリスは帰っていた。

「じ、地味に痛い……」

立ち上がり慧音の家に向かって歩いていく。

足取りは重く、寄り道をしてあっちにふらふら、こっちにふらふらと。

慧音宅

「あのですね、今回の事は本当に」

道端で偶然遭遇した妹紅に首根っ子掴まれて連れてこられていた。

凄く嬉しそうに追い掛けられ、隠れたりしながらしばらく逃げ惑っ

ていたが結局は捕まっつてしまい今に到る。

「よしよし、とりあえず言い訳は聞かないよ」

幻想郷の女性は強く、特にこの二人には頭が上がらない。

「恭司、あまり心配させないでくれ。いい妖怪達ばかりじゃないんだぞ？」

近づき頬に手を当ててきた。

その優しさにドキドキしている。

「うん……」

勝手な事をしたのを悔いて反省していると、慧音が目の前でニヤーっと笑った。

今まで見た事がない笑みで動揺している。

「反省したな？ ……というわけで恭司には一ヶ月間家事をやってもらう事にする」

これが今回の罰で割と良心的だった。

「それは遠回しに里から出るなって事なんじゃ……」
朝から晩まで慧音といっしょ。

外の世界は既に十月も終わりに近い。

徐々にここも冬に変わっていく。
そして外に帰るといふ目的を完全に忘れ、
幻想郷を満喫している恭
司。

続く

Aの力作／働く決闘者（後書き）

GEBが楽しみ。

アノマロとホールルド武器でヴァジュラがすぐに沈む。

偏愛のS / 燃え盛る魂 (前書き)

この作品の彼女はあんな感じでおかしくなっています。
あれをデュエルでは初使用。
のびのび書いたらこうなった。

ライダースイングでKホッパー、Pホッパーが欲しくて5回やった
ら全部アクセルトライアルで運命を感じずにはいられなかった。

偏愛のS / 燃え盛る魂

あれから数週間、最近よく宗教の勧誘のようなものを見かける。いや、宗教じゃないのかもしれないが……。遠目に見てると可愛いがお近付きにはなりたくない。

「よし、今日は美代ちゃんところで茶をご馳走にならねば」
慧音よりも一足先に寺子屋から帰宅してみれば2Pカラーの巫女さんが慧音の家の前をうろろしていた。

問題の勧誘のような事をしている人物であり、お近付きになりたくなくて逃げに入った。

将来のお嫁さん候補（仮）の裕福な所のお嬢さん、美代ちゃんの家
にダッシュで向かっていく。

数時間後。

「いえいえ、悪いですよ！ 夕飯は自宅で食べますんで！」
美代ちゃんは遊びに行っているのか居らず、代わりにご両親に招かれていた。

噂に聞いていた面白く不思議な先生との会話が満足だったらしく物凄く気に入られている。
何人かのお手伝いの人もここにこしているのは好青年の皮を被って接していたからに他ならない。

「いやー、それは残念です。しかし先生みたいな外来人は貴重ですな。もし寺子屋を辞めるような事があつたら私の店に来てください、即戦力ですよ！」

わっはっはっ！と笑いながらバシバシと背中を叩いている。

甘味処の経営をしているらしく、裕福だが嫌味がない人だった。

「そうだわ。あなた、美代のお婿さ」

「失礼しましたー！」

まずい単語を聞きダツシユで帰っていった。

ロリコンじゃないと言っていたがそれすら怪しく思えてくる。

慧音宅付近

「げっ、まだいる。………これを使う日が幻想郷で来るとはな」

巫女さんは何故か慧音の家の前でじっとしている。

そして状況を打破する為にいつの日かスニーキングミッションをす
るかもしれないと確保していたアレを取り出した。

「はあ………来ないなあ」

幻想郷に来る前に偶々テレビで見て、憧れたシンクロナ召喚を扱う青
年。

その青年が里にいると知り、信仰心を得るついでに来ていた。さながら恋人を待つ女性のようだった。

「……………」

道の隅にダンボールが置いてある。

珍しくはないなと思ったが、ここは幻想郷。

テレビのダンボールなんてあるはずがなく、かなり怪しかった。

「……………」。あつ、風で動いたんですね

そつと視界からはずし目を向けるとダンボールが移動していた。

「……………」そろそろ帰ろうかなあ？」

ダンボールに聞こえるように言い、背を向けてゆっくり去っていく。

「……………」捕まえた！」

それを聞いてチャンスとばかりに、家に入ろうとダッシュしたダンボールの上に乗れ動けないようにした。

簡単な嘘に引つ掛かった間抜けである。

「せーの！」

ダンボールを取り上げると体育座りの恭司がいた。

「！！」

お約束である。

見つかってしまったので仕方なく部屋に案内し、お茶を運んで持ってきた。

「君も外から来たのか？」
話を聞くと外から来た仲間でびっくりしている。

「はい、私は東風谷早苗といいます。さっきもお話したように二柱の神様に付いて幻想郷に……あの、どこ見てるんですか？」
じーっと全体を見ている。

主に胸なのは男の子だからだが、この後すぐに後悔する事になる。

370

「いや、巫女さんって腋を出さないといけないのかと思って。東風谷は俺と同じ年くらいなんだっけ？」
腋にも目がいくので、とりあえず誤魔化すように聞いている。

「はい！ それで私、貴方をテレビで見た時から憧れていて！」
興奮しているのか距離が凄く近く、手をぎゅっと握ってきて頬を赤く染めている。

「あ、ああ、そうなの……」
今までされた事がなくらい積極的すぎて引いている。

「わあ、本物だ……」
握っていた手を離し、顔に触れてくる。

物凄い顔が近く、目がとろんとしているのがとても嫌な予感を搔き立てる。

「ち、近すぎるって東風谷。ちょっと離れてくれ……うひゃあ！
お、お前はいつたいたいなんなんだ！？」
いきなり頬をぺろりと舐められた。

巫女と言うのは妄言で痴女か！？と本気で怯えている。

「あ、ごめんなさい。でもこの味は嘘を吐いている味です。近づかれて嬉しい、もっとしてくれって味ですよ」
汗を舐め取られていた。

悪気はなかった、とでも言うのだろうか。
都合のいいように解釈している。

「くっ、あんたはいつたいたいなんなんだ！ ブチャラティみたいなことして！」
頬に手を当てて物凄い混乱している。

今までこんなタイプの相手をした事がなくペースが激しく乱される。

「現人神です。えっと、貴方は人間なんですよね？」 平然と聞いてくるがやはりさっきので照れているのか頬が赤い。

「ああ……」
こっちはテンションがめっちゃ下がっている。

見た目が同年代以上のスキンシップには激しく弱く、出会ったばかりの娘に頬を舐められたのがかなりシヨッキングだったらしい。さらに変なのに目を付けられたという絶望感もある。

「あの、まだ自己紹介してもらってなかったの忘れてました」
てへって感じでこっちを見ている。

警戒しながら嫌々自己紹介を始めた。

「鉄恭司。鉄と呼んでくれ」
かなり苦手になっている。

初めてすぐには名前で呼んで欲しくない相手だったようだ。
可愛いと美人が同居してスタイルもいいが行動が色んな意味で凄すぎて付いていけない。

「わかりました！ 恭司さんですね！」
凄じ嬉しそうな顔で名前を呼んできた。

何を聞いていたんだって顔で恭司が見ている。

「東風谷はあれか。常識をすべて振り切ったのか？ ……ひいつ！
や、やめてくれ！ いやあっ！」

辛抱できないとばかりに抱きつかれ、さらに体をまさぐられて悲鳴をあげている。

何だか男としてとても情けなかった。

早苗が憧れたのがこの男。

あの生き生きとして楽しそうな姿が忘れられず、それが何年分か積もって徐々に憧れから偏愛に変わっていたようだ。

そしてそれが当人に会った事で爆発している。

さらに当人は常識を既に振り切っているから洒落にならない。

「いいじゃないですか。さあ、私と一緒にめくるめく愛の世界に！」
ハアハア言つてて目が怖い。

何もかも振り切つて色んな意味のゴールへ向かおうとしている。

「い、いい加減にしないと怒るぞ！　こういうのは愛し合っている人間がする事だ！」
必死に抵抗するが基本女性に優しいので突き飛ばしたり出来ず、腕で接近を拒む程度。

「なら大丈夫じゃないですか。私達は愛し合ってます。始点はラブで終点もラブです。だから！　……はうっ！」

早苗が服を剥ごうとした時、誰かが入ってきて助けてくれた。

早苗は気絶してそのまま倒れこんでくる。

「け、慧音！」

それを優しく押し退けて立ち上がった。

どうやら慧音が一発で気絶させたようだ。

「大丈夫だったか？」

その姿はとても格好良かった。

「危なかった……。紳士だから手をあげられないし、何かやたら力強いし」

貞操の危機にゾツとしている。

慧音が縛り上げているが何かいけない世界に目覚めそうだ。

「……はっ、ここは」

ようやく目覚めたようだ。

自分の現状よりも、慧音の後ろに隠れている恭司を見つけ嬉しそうな笑顔を見せている。

「君は一応神様なんだろう？ ただの人間相手に何をやっているんだ」

慧音のお説教が始まったが右から左に受け流し、視線は恭司に固定している。

「これは、この気持ちが愛なんですよ！」
まったく話を聞いておらず、このタイプの人間を一人思い出して溜め息をついた。

「付いて回ってるのか武士仮面の呪いが……」
アカデミア時代三年間どこからでも湧いて出てきた変態。

その違う種類のが出てきたと落ち込んだが、女の子だからまだマシかと持ち直している。

その後、一時間ほどお説教は続いた。

「……わかりました、今日はここまでにします。いきなりですが恭司さん、明日デュエルしてください。負けたら私のお嬢さんになつてもらいます。貴方となら次代の風祝が歴代最高の力を持って産まれると思いますから。あ、ちゃんと説得はしますから安心してくださいね！」
頬を赤く染めながら宣言している。

誰を説得するのか聞くと長くなりそうだったので放置。
だがこの偏愛を打ち砕く機会が出来たとやる気になってきた。

「そつちが負けたら頼むから普通に接してくれ」
女の子に迫られるのは嫌ではないが見ず知らずでまだ仲も良くなく、宗教に勧誘していそうな子に迫られるのは怖かった。

ヤッちゃんとか出てくるかもしれないし。

「……分かりました。約束します」
真面目な顔で頷いている。

恭司に笑顔で挨拶をし、慧音をキツと睨み出ていった。
負けじと慧音も睨んでいたが恭司は見ていなかった。

「負けられない決闘がここにはある」
使うデツキは既に決まっている。

シンクロを多用して確実に勝ちに行くつもりのようにだ。
負けた時のデメリットがでかすぎる。

「ちなみにだ、彼女の能力は奇跡を起こす程度の能力。どう対処するんだ？」

慧音が心配そうに聞いてくるが、それを聞いた恭司はニツと笑い宣言した。

「俺のドローだって奇跡を呼ぶぜ？ 能力使っても勝てなくてレミアをうーうー唸らせた事だってある。それにお婆ちゃんが言っていた、俺が望めば運命は絶えず俺に味方をするってな」
デュエルに関してのポテンシャルは高く、運命を操られても気づけばそれを捻曲げているくらいに。

「そうか、それなら心配はないな。それよりだな、その」
俯いて何かもじもじしている。

普段は凜々しい慧音の可愛らしい仕草に目が離せない。

「う、褒美を、だな」
恥ずかしそうに上目遣いで言ってきた、それがたまらない仕草だった。

「う、うん。世話になってるし何でも聞くよ」
内心ギャップに萌えている。

「も、妹紅にしていたように私の事もぎゅっとしてくれないか！
あっ」

顔を赤くしながら大胆にお願いされ、間髪入れず抱き締めている。

「ああ、もう可愛い」
ぎゅっと抱き締めて口走った単語に慧音が赤くなっている。

「か、可愛い……」
腕の中でもじもじしている。

その仕草を見て、もうこのまま添い遂げてもいいと考えていたら後頭部に強烈な衝撃が走り意識が飛んだ。

「き、恭司？　そ、そういうのはまだ早い、段階を踏んでゆっくりとだな……」

倒れこみ、押し倒される形となって焦っている。

「危なかった。急いで来て正解だったよ」
入り口には妹紅が立っていた。

嫌な予感がして急いで来て奇襲したらしい。

しばらくは今のままで居たいし、恭司が誰かとそうなるのが面白くなかったのもあるようだ。

「も、妹紅……」

顔を赤くしてわたわたしでいて、里の人が見たらぎよっとするんじゃないかってくらい乙女。

「くっ……。妹紅、お前は俺の……！」

慧音から離れて立ち上がった。

最近慣れたのか気絶からのリカバリーが早くなっている。

「まあまあ。それより三人でまた甘味処に行こうよ。勿論恭司の奢りで」

最近人付き合いが多くなってきたので慧音から貰えるお小遣いが増えていた。

が、増えた分妹紅に集られるのであまり意味がなかった。

「俺の財布ポイントがどんどん減っていく……」

絶妙に空き家が借りれない金額のお小遣い。

色んな意味で慧音はしっかり者だった。

「ほら、慧音も早く行こうよ！ まだ晩ご飯には早いんだから！」
二人の手を掴んで急かしている。

「最近寒くなってきたからお汁粉とかいいな。自作するより楽だしもう行く気になっている。」

この二人といるのは心地よく楽しかった。

甘味処

「おい、どこの馬鹿が余計な事教えて帰ったんだ」

ドラマとかで恋人達がやるような、一つの大きな飲み物にストロークが二つ付いたのが流行っていた。

「うわあ、外だとあんなのが流行ってるの？」

恋人達だらけで店内がもう凄く桃色空間。

両手に華の恭司だけ異端のように見える。

「いや、あんなのあまりないぞ。恋に恋する乙女辺りが教えてそのまま外に送り返されたパターンだろ。前にスカート捲りを教えた奴は俺が半殺しにしてみたが」

思い出して凄く怖い顔をしている。

前にお茶の約束をした紫と甘味処に来た時、紫はドロワーズではなく何故か普通の下着を付けて来ていた。

そして命知らずの子供が紫のスカートを捲ったせいでモロに見てしまった。見られた事で涙目で真っ赤になった紫にビンタされ、さらに日傘でぶん殴られて吹っ飛ばされていた。

帰宅途中の慧音でも似たような事があり、教えた外来人が外の世界に帰る時には神社で君が泣くまで殴るのをやめない！とばかりにぼっこぼこにしてから蹴り帰っていた。

霊夢や見に来ていた魔理沙が顔を引きつらせるくらい凄かった。

「あの時は止める間もなく走っていったから大変だったよ」
妹紅が飛んで追い掛けていたから怒られなかった。

ただあの時の憤怒の表情は忘れられないと語っている。

「子供達に泣きながらやめてくれと説得していたな。右と左のなかなか消えないもみじを見せていたみたいだが」

右は紫、左は慧音。

一日以上経っても消えない強さのピンタだったらしい。

「それで次の日に里長から頼まれて雛さんに供え物届けに行ったんだよ。それで俺の厄を取ってくださいって必死で頼んだら凄く綺麗な笑顔でうん、それ無理はって言われた。女難がどうのこうの言っただけど」

それだけ渦巻く厄は対処できないと言われもした。

「あ、私はお汁粉とお団子」

「私はお汁粉を」

嘆く恭司を無視をして二人は注文している。

「俺はお汁粉だけでいい」

仕方なく口を挟み注文した。

「イチヤイチャしてんなあ……」
自分達だけの世界に入っている人達を見てリア充爆発しろ！と心で
念じている。

お前が爆発しろ。

「……でね？」

「それは妹紅が……」
二人も喋っているので暇で仕方ない。

仕方がないので特別製のノートPCを開き、作りかけのD・ホイールのプログラムを四苦八苦しながら構築していく。
よく分かっていないが遊星粒子を根幹にしている永久エネルギー機
関モジュールを使用しているので使えなくなる事はない。
何度か戻った時にデータ入りのディスクを貰っている。この時代
で唯一その技術を手に行っている。

「お待たせしました」
しばらくするとお汁粉や団子が運ばれてきた。

「あー、わっかんねえ」
頭をガシガシ搔いて四苦八苦している。

どの道この時代ではただデュエルが出来るだけのバイクしか作れない。
い。

漫画の疾走決闘は出来る。

ノートPCをしまい、お汁粉をいただくこと二人に目を向けたらじつところちらを見ていた。

「な、なんだよ」

普段の適当なイメージが強く、真面目な恭司が珍しかったらしい。

「いや、ねえ？」

「うん、まあ、な」

何か照れていた。

「ご馳走様、と」

口元を軽く拭い箸を置き、目の前の妹紅を見つめてみた。

嬉しそうに団子を頬張っている。

見つめているこちらに気づき目を背け、しばらくするとこちらを見て目が合う。

頬を赤く染めながら、ちまちま団子を食べている。

反応が面白くさらに見つめようとしたら太ももに痛みが走った。

「……………」

隣に座っていた慧音が無言でつねっていた。

帰り道

「さてと、夕飯は分けてもらったチーズとホワイトソースの缶とマカロニでグラタンを作ろうかな」
「確か玉葱やほうれん草はあったよな、と考えながら三人で帰っている。」

「あつ、それってこの前のやつ？」

「あれはおいしかったな……」

恭司の要望でオーブンが作られており、初めて使用した時の料理がグラタンだった。

「とりあえず分けてくれたレミリアと咲夜に感謝」

代わりに家で漬けている漬物と交換しており、他にも色々と交換したりしている。

慧音宅

「うん、あの天狗はいつか泣かす」

どこから撮ったのか押し倒されて涙目な恭司の写真が載った新聞が届けられていた。

内容は明日、里で山の上の風祝と恭司がデュエルで婚約するかどうか決めるという半分くらい合ってる記事だった。

どちらが勝つかで賭けまでしているらしく、現段階で早苗がダントツ人気で落ち込んだ。

「明日の俺は阿修羅すら凌駕する存在だ」
そう言つて夕飯の準備を始めた。

負けず嫌いで自分の人気が低かつたから賭けた奴を損させてやろう
としている。

そのまま夕飯を食べ、風呂に入り部屋に戻っている。
恭司が新聞の事に対してぴりぴりしているからか皆静かに食事を取
る事になっていた。

「よし」

デッキの調整も終わり、布団を敷いている。

デッキを枕元に置き、ジャックに力を貸してくれと祈りながら布団
に入り目を閉じた。

翌日

今日は元々寺子屋も休みの日。

イベントが少ない幻想郷、たくさんの人や妖怪が見に来ている。
出店まで出ているくらい人が多い。

里で一番大きな広場。

赤いコートに赤いデュエルディスクを付け腕を組んで待っている。

日傘を差したレミリア達や鈴仙もいる。

アリスが上海を連れてきてくれた事でテンションが最初からクライマックス。

「ん、来たみたいだな」

知らない二人と一緒に飛んで来た。

降りてきた二人に品定めされるように見られている。

うん、合格とばかりに頷かれた。

「流石、早苗だ。確かにあの子はいいよ。後は性格とかが問題だ」
注連縄の女の人がそう早苗にだけ聞こえるように言っている。
どことなく神々しい感じがした。

「私はいいと思うよ。何か居心地よさそうだし、あの子は絶対いい血筋だよ」

目の付いた帽子の女の子がそう言っている。

偶々聞こえてきた言葉に恭司は頬を引きつらせた。

懐かれたらまたアリスからロリコン扱いされそうで困る。

「見てもらえれば必ず認めてくれると思ってました！ さあ、勝負です！」

嬉しそうな笑顔を見せながらデュエルディスクを起動させて向き合った。

「さあ……振り切るぜ！」

照井さんから勇気を貰い起動させた。

「デュエル！」

「私のターン、ドロー！ 手札からドラゴンフライを攻撃表示で召喚してターンエンドです」

ATK1400

「俺のターン、ドロー！ 魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動。手札のモンスターを一枚墓地に送りデッキからレベル1チューニング・サポーターを特殊召喚する」

ATK100

「チューニング・サポーター……」

弱そうなモンスターの登場にくすくす笑う人もいる。

レミリアは何か思い出し苦い顔をしていた。

「チューニング・サポーターの特殊召喚に成功したこの時に速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動。俺はデッキから残り二枚のチューニング・サポーターを場に攻撃表示で特殊召喚する。東風谷はドラゴン

「フライを特殊召喚しないといけない」

ATK100×3

「私のモンスターまで揃えさせて何を狙ってるんですか」
手札とデッキから一枚ずつ特殊召喚している。

ATK1400×3

「そしてジャンク・シンクロンを召喚。……レベル1チューニング・サポーターとレベル2チューニング・サポーター2体にレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」
完璧に勝てる流れだった。

「あれがシンクロ召喚……」

早苗は目をキラキラさせて見ている。

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

四本の腕を持ったスパーロボットみたいな戦士が現われた。

ATK2600

「まずはシンクロ召喚に使用されたチューニング・サポーターの効果で三枚ドロースる。そしてジャンク・デストロイヤーはシンクロ召喚成功時に使用したチューナー以外のモンスターの数まで場の力

ードを破壊する事ができる。俺は東風谷の場のドラゴンフライを三枚破壊する。ダイダルエナジー！」
容赦なく破壊し、圧倒的な展開力を見せてついている。

「ダイレクトアタックされてもまだ大丈夫です」
早苗の呟きにニヤツと笑った。

「シンクロキャンセルを発動。エクストラデッキにジャンク・デストロイヤーを戻し、シンクロ召喚に使用した墓地のモンスター四体を場に特殊召喚する」

チューニング・サポーター×3

ATK100

ジャンク・シンクロン

ATK1300

「恭司は運命も奇跡も乗り越えていくのね……デュエルだけは」
試しにデュエルじゃない時に運命をいじってみたら大変な事になっていた。

小悪魔的な意味で。

「レベル1チューニング・サポーターとレベル2チューニング・サポーター2体にレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」

三つの輪が3体のモンスターを包んでいく。
本日二度目のシンクロ召喚で絶好調。

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！
シンクロ召喚！ 我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」
赤い悪魔の竜がその雄々しき姿を現わした。

しかし恭司は今使える最高の切り札を使うようで、再び三枚ドロ―
してからさらなる魔法カードを発動させた。

「魔法カード、二重召喚を発動。このターンもう一度だけ通常召喚
が可能になる。手札からジャンク・シンクロンを召喚し、墓地のレ
ベル1エフェクト・ヴェーラーを守備表示で特殊召喚する。そして
レッド・デーモンズ・ドラゴンにジャンク・シンクロンとエフェク
ト・ヴェーラーをダブルチューニング！」
赤き竜が背に浮かび上がり、目が真っ赤に染まっていく。

自然と魂は燃え上がっていたらしい。
炎の輪がレッド・デーモンズ・ドラゴンを包んでいく。

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあ
げよ！ シンクロ召喚！ 出でよ、スカーレッド・デビル・ドラゴ
ン！」
フランとの絆、ここに究極の紅い悪魔の竜が降臨した。

ATK3500

「す、凄いです……」
そう呟くしかなく、防ぐ手段がない。

「スカーレット・デビル・ドラゴンは自分の墓地に存在するチューナーの数だけ攻撃力が500ポイントアップする。俺の墓地には三枚のチューナーが存在している」

ATK3500 ATK5000

「攻撃力5000……」
現在の早苗のデッキには対処できるカードがない。

「これが俺の切り札だ。スカーレット・デビル・ドラゴンでダイレクトアタック！ バーニング・ソウル！」
攻撃を宣言すると咆哮を上げ、突撃していく。

「ひっ、きゃあああああっ！！」
襲い掛かったスカーレット・デビルの衝撃で吹っ飛ばされ、倒れこんでしまった。

LP4000 LP0

「俺の勝ちだ」
後攻キール。

恭司の辞書の手加減という文字は塗り潰されているに違いない。

恭司に賭けていたのは紅魔館組、永遠亭組と妹紅。

早苗に賭けていた人や妖怪は信じられない物を見たという顔をしており、皆いい物を見たところぞろ帰っていく。

座り込んで俯いている早苗に近づき手を差し出した。

「東風谷、これで約束通り普通に接してもらうからな。一人の友人として、デュエリストとしてこれからよろしく」

一度でもデュエルすれば友達だし、基本女の子と子供には甘い。

落ち込んでいるのかなと顔を覗き込もうとしたら、手を握り勢い良く立ち上がった。

「はい、よろしく願います。私なりの普通に接しますから」
そう言っ腕を絡めてこようとしたので思わず距離を取った。

「お、お前は聞いてたのかよ！ いてっ！」
石につまづき尻餅を着いている。

上海がいつのまにか嬉しそうに頭に乗っかかりマーキングするようにすりすり頬摺りしている。
すっかり定位置になっていた。

皆が近づいてくる中、よいしょと座り込んだ恭司の胡坐の上に乗っかってくる女の子。

「あの、おかしくないか？ 君は誰？」

注連縄の女性はすぐに帰っていったようだが、この子はずっと残っていたみたいだった。

「す、諏訪子様！ そこは私の指定席です！」

どうやら諏訪子という名前らしい。

「いや、それはないわ」

素で否定する恭司。

あーうーと謎の声を発しながら嬉しそうに膝に乗っている。

「この子凄い落ち着くよ。なんだろう、不思議なパワースポットみたい」

反応に困る事を言っている。

膝の上から見上げてきて、目が合うとにこりと微笑まれて照れてしまふ。

それを見ていた上海が髪を引っ張っていた。

「痛たたた、とにかく一度降りてくれ」

女の子をなんとか降ろして立ち上がった。

レミリア達が何か言いたそうに待っている。

「じゃあ早苗、私は先に戻るからね。出来ればその子連れてきてねー」
「ばいばーいと飛んでいってしまった。」

下を向いて見ないようにするのも大人のマナー。

「恭司さん、諏訪子様が許可くれましたよ！ 早く行きましょう！
……あれ？」
早苗が振り向くと既にその場には居なかった。

少し離れた場所でレミリア達に挨拶をしている。
また遊びに行く旨を告げると去っていった。

鈴仙はもじもじしながら何か紙袋を押しつけてダッシュで逃げるように去って行ってしまった。
紙袋を開けるとなんと赤いマフラー。
寒くなってきたのと、色がとても気に入って嬉々として装着している。

アリスは上海を引き離すと2、3会話をして帰っていった。
上海ー、戻ってきてー！上海カムバックー！と切実に叫んでいる声が聞こえてくる。

「恭司、あっさり片付きすぎだな。まだお昼にも早すぎる時間だぞ？」
ホッとした表情の慧音が恭司の隣に立っていた。

絶対に勝つだろうと信じていたが少しだけ不安だった。

「ムツ、慧音さんは恭司さんにこれ以上近づかないでください。ただでさえ一つ屋根の下で二人きりなんですから」

早苗が二人の間に割って入ってきた。

「断る。私は恭司の同僚であり、家主と居候の関係であり、裸の付き合いだってした関係だ。スキンシップ過多で怯えられた君とは違う。あの後、私は優しく抱擁までしてもらった」
はっちゃけて勝ち誇っている。

恋する乙女には不可能はないの、ってレイが言ってたなとぼんやり思い出している。

「なっ……。ふふん、私なんて胸とかに興味もたれてますし。熱い視線をそれはもう向けられているんです！」
なんかもう色々とバレていた。

恭司はいつのまにか逃げ出していたようで言い合いをする二人しか居ない。

「好意を向けられてもどうしたらいいか分からないよ。助けて吹雪先生！俺もおでこをくつつけて、顔が赤いな風邪か？とかやりてえよ」

今はのらりくらりと気づかないフリをするしかなかった。

まだデュエルをたくさんしたいし、色んな人と出会いたい気持ちの強い。

「あ、いたいた。あの二人長くなりそうだから先に帰ろうよ」
妹紅が隠れていた恭司を見つけだし誘ってくれた。

「友達に噂されると恥ずかしいし……」
お前は詩織か。

そう言いながらも妹紅と帰っていく。

「今はまだこのままがいいのに」
自然に腕を絡めてきた。

最近やたらくつついてくる妹紅。
きつと人恋しいんだろうとされるがままになっている。

「この前永遠亭でも似たような事を輝夜に言われたな」
色々と構っていたら永遠亭のどこに行くにも付いてくるようになっていた。

妹紅と一緒に来てすぐに帰ってしまうのが不満だったようで、一人で迷わずに永遠亭まで来れるアイテムを戴いたりも。

「ふふん、あいつにだけは絶対に渡さないけどね」
体を押しつけて見上げてくる。

「やっぱもこたん全然胸がな……あちちちち！ 嘘だってば！」

セクハラ大魔王の腕が熱く燃やされかけていた。

背後の二人の騒ぐ声をBGMに恭司達は帰っていく。

とんでもない人物に好意をもたれた恭司。

冬が近くなり紫の冬眠も近い。

続く。

偏愛のS / 燃え盛る魂 (後書き)

GEBはやっぱり楽しい。

仲間がアラガミを引き連れてくる無印とは多違いだ。

今月末のダンガンロンパも楽しみだ。

Yの境界／宴の前座（前書き）

書きたいように書いた。

魂の結び付きを強化。

多分今回限りの分離。

知らない人達は以後会う人達なので今はまだ出しません。

来週のモヤモヤさまあゝず2はハワイ。

又シカンさんが楽しみすぎる。

Yの境界／宴の前座

「えっ？マジでそんな事出来んの？」

朝食が終わり、慧音とお茶を飲んでいたらもうすぐ冬眠する紫が現われた。

「ええ、その混ざった魂を二つにね。肉体も一緒に別れると思うわ。貴方と私の能力でね、と付け加えて隣に座った。」

混ざった魂の話はアカデミアでしたのが最後だから、どうやらかなり前から見ていたようだ。

「融合解除で完全な分離は出来なかった。ただその境界は作れたから、それを紫がなんとかするわけか。勿論分かれても一人に戻るんだよな？」

納得すると同時に確認。

今の状態がベストだから戻れなくなるのは困る。

「ええ、それなら大丈夫。だから未来のもう一人の貴方の姿も見てみたいのよ」

慧音は話に付いていけないのか考え込んでいる。

恭司はそれなら頼むと頭を下げていた。

夜になり紅魔館組、鈴仙に慧音に妹紅、アリスに魔理沙に霊夢に早苗と知り合って仲の良くなった人妖が集まっていた。他にも知らない人達が結構いるが、今はそわそわしているのでそれ所ではない。

霊夢に関してはお賽銭箱をちらちら見ていたので、仕方なく多めにお賽銭を入れてみると目をキラキラさせて喜んでいた。

上客と思われているようでそわそわしている恭司にやたら親切だった。

「それじゃ始めるわよ。恐がらなくても一瞬で終わるから平気よ」
紫が心配はいらないと言ってくれている。

「んじゃ……融合解除」
そう言っただカードを発動させると魂に境界が生まれたが、完全に別れないまま再び繋がるうとしている。

「はい、おしまい」
紫が何をしたのか分からないが、皆啞然としてこちらを見ている。

「何だろう、心に穴が開いているような気分だな。遊星達に裏切られたと思い込んでいた時に似ている」
若干大人びていて、皺だらけのワイシャツにジーンズとラフな格好の恭司。

この時代に飛ばされる前の格好だった。

「うわ、やっぱり怖いかも。何か喪失感もあるし……」

今までの恭司よりも鋭さや陽気さが下がっている代わりに守ってあげたくなるようなオーラが出ている。

双子と言われても違和感がないくらいに似ている。

未来の恭司のが落ち着きがあり、実際の年齢より上に見えるのは色々な出来事を経験した結果かもしれない。

周りを気にせずに互いに向き合った。

「肉体を持った状態では初めましてだな、俺」
ククツと嬉しそうに笑っている。

いざ二人に分かれて対してみると変な感じがしている。

「初めまして、未来の俺。んじゃ、早速やろうぜ。俺は俺とデュエルしてみたかったんだ」
デュエルディスクを投げ渡している。

一緒に育ったもう一人の自分と全力でデュエルするのが夢だった。

「あいつらはいいのか？」

まさかの展開に動けないのか皆、二人を見ているだけ。

紫だけはニヤニヤしながら見ているが。

「放っておけばいいんだよ。ほら、こっちは未来の俺のデッキだろ。」

俺のはこつちだ」

シンクロ含めたデッキケースを投げ渡している。

同い年でも精神的な年齢差がはっきり出ている。

「じゃあ、やるか」

「うん、早く戻りたいしな」

「デュエル！」

「俺のターン、ドロー！ 手札断殺を発動、互いに手札二枚を墓地に送り二枚ドローする。そして俺はモンスターをセットし、カードを二枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！ 手札らサイバー・ドラゴン・ツヴァイを召喚。そして手札の魔法カード、融合を見せてツヴァイをサイバー・ドラゴンとして扱わせてもらう。そして手札のサイバー・ドラゴンとツヴァイを融合！ サイバー・ツイン・ドラゴンを融合召喚する！ 来い、サイバー・ツイン・ドラゴン！」

巨大な二つの首を持った機械の竜が現われた。

ATK2800

「エヴォリユーション・ツイン・バースト！」
そして伏せられたモンスターに攻撃を仕掛けた。

「スクラップ・ゴブリンは戦闘では破壊されない。表側守備表示の時に攻撃対象に選択された場合バトルフェイズ終了時に破壊されるがな」

セットされていたのはスクラップ・ゴブリンだった。

来いよ坊主と言うような顔で見ている。

「二連打アツ！」

キメラではないが真似したかったらしい。

「あながとよ。バトルフェイズ終了時の自壊効果、これもスクラップと付くカードによる破壊になる。墓地からスクラップ・キマイラを手札に加えさせてもらう」
しまった！って顔をしているのを見てフツと笑い返した。

「くっ、キマイラ捨ててたのかよ……。カードを二枚セットしてターンエンド」

迂闊だったと悔やんでいる。

「ドロー。スクラップ・キマイラを召喚し、墓地のスクラップ・ソルジャーを蘇生させる。レベル4スクラップ・キマイラにレベル5スクラップ・ソルジャーをチューニング！」

五つの輪がキマイラを囲んでいく。

「安らぎを振り解き、さらなる幻想に到れ！ シンクロ召喚！ 具現せよ、スクラップ・ツイン・ドラゴン！」
対抗するように二つの首を持ち、様々な鉄屑で構築されたドラゴンが現われた。

ATK3000

「こちらの場のセットしたカード一枚を破壊し、そっちの二枚のセットカードを手札に戻してもらおう」

「……」

リミッター解除とサイバネティック・ヒドウン・テクノロジー。

「サイバー・ツイン・ドラゴンに攻撃。スクラップ・ツイン・バーストってな」

光線が吐き出されサイバー・ツインに襲い掛かる。

だが相手もただやられるわけはなかった。

「手札からオネストを墓地に送り相手モンスターの攻撃力を加え……なっ！」

未来の恭司が手を上げリバースカードをオープンさせている。

「カウンタートラップ、威风堂々。バトルフェイズ中に発動する効果モンスターの効果を無効」
攻撃は続行される。

予め読んでいたのか伏せていたらしい。

オネストを使わせる事を優先したからツインを戻さなかったようだ。

「くっ……！」

互いに放ち拮抗していた光線が一気にサイバー・ツインを飲み込み消えていった。

LP4000 LP3800

「カードを一枚伏せてターンエンドだ」

「ドロー！……未来融合・フューチャー・フュージョンを発動、デッキからサイバー・ドラゴンを含めた全ての機械族を墓地に送る」
サイバー・ドラゴン1、ツヴァイ2、プロト2、リフレクト・バウンダー3、サイバーダーク各3。

「自棄になったか？」

「モンスターをセット、それとカードを二枚セットしてターンエン

「ドだ」

あれが引けるまで耐えるしかないが、それを引くまで耐えられるかは分からない。

「俺のターン、ドロー。そのセットモンスターを攻撃する」

「伏せていたのはシャインエンジェルだ。戦闘破壊されて墓地に送られた時デッキから攻撃力1500以下の光属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚する。俺はオネストを呼ぶ」

ATK1100

「ちっ、ミスったか？ ターンエンドだ」

厄介なのを手札に加えさせてしまうと舌打ちしている。

「ドロー！ オネストの効果でオネストを手札に戻し、サイバー・ドラゴンを特殊召喚する。そしてスクラップ・ツイン・ドラゴンを攻撃する！ さっき伏せた速攻魔法、リミッター解除を発動！ こちらの機械族モンスターの攻撃力は二倍になりターン終了時に破壊される」

ATK2100 ATK4200

これでオネストを手札から切れば勝てると考えているが、相手のが一枚上手なのを忘れている。

「リバーズカードオープン、月の書を発動。サイバー・ドラゴンを裏側守備表示にさせてもらう」
チエック。

「うあつ、ちくしょう！ ターンエンドだ！」
悔しそうだが予想以上に相手が強く嬉しそうでもある。

「俺のターン、ドロー。カードを一枚伏せる。そしてこの伏せたカードを破壊し、裏守備のサイバー・ドラゴンとセットしたカードを手札に戻して貰うぞ。さらに速攻魔法、スクラップ・フュージョンを発動。お前の墓地に存在するサイバー・ドラゴン2体と墓地に存在する時にサイバー・ドラゴンとして扱うサイバー・ドラゴン・ツヴァイ1体を除外する。そしてお前のエクストラデッキからサイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚する。これでチエックメイトだ」
ATK4000

鉄屑の双竜と機械の三つ首竜が並んだ姿は壮観。
2体のモンスターを従える姿はとても似合っていた。

「うわぁ……」
五つの口が開きこちらに向いているのは、立ち向かう側からしたら
凄い恐怖。

「まあ、相手が悪かったな。ダイレクトアタック！」
指を差して宣言すると五つの口から光線が吐き出され、相手を飲み

込んでいった。

「……………」

あまりの衝撃に言葉も出ず、ふらふらと膝を着いた。

LP3800 LPO

そしてデュエルが終わると皆に取り囲まれた。

どうということなのかと言う質問にもちゃんと答えている。

地縛神、魂の融合、未来の世界と突拍子もない話だがそれをびっくりしながらもあっさり受け入れてくれた。

すべてを受け入れる幻想郷に感謝を。

「そろそろ時間だな。いくら紫でも地縛神の贄として魂だけにされた俺をいつまでもこのままには出来ないだろうし」

シグナーに助けられておらず、魂のまま消えた事で肉体が戻っていない。

自ら融合する事でこれ以後は完全に境界もなくなるはずなので、これが最初で最後の分離になる。

あのまま地縛神に取り込まれていればシグナーに助けだされ、あの時代をシグナーに囲まれて生きていたに違いない。

「そうね。そろそろ戻さないと貴方の魂だけ霧消してしまうわ」

厄介な事だ、と恭司は呟き溜息を吐いている。

「俺とお前は二人で一人。これからも一緒に戦っていこう」

「俺一人じゃ色々無理だしな。これからも一緒に進んでいこう」
互いに堅く右手を握り、未来の恭司の左手には超融合のカード。

「超融合を発動！ 対象は俺と俺だ」
閃光が放たれ、目を開くと分離とは違い簡単に混ざり合いあっさり
と一人に戻った恭司の姿があった。

「……やっぱこの状態が一番いいな」
見た目も性格も皆の知っているいつもの恭司。

一人一人じゃ欠けている部分が混ざり合う事で埋まっている。
スペックがかなり高いのは肉体や血筋だけでなく、魂からして二人
分だからかもしれない。

「あら、私は未来の恭司がよかったわ。まあ、でもやっぱり今のが
……」
ツンツンしているアリスがそう言っているが、見慣れた恭司に戻っ
てホッとしている。

小声で何か呟いているがそれは聞き取れなかった。

「私はどちらにも取り合われる展開が良かったです。……ああ、ダ
メです。私は一人しか居ないんです、どちらか一人としか……」
早苗はどっちもよかつたらしい。

どうせなら二人に取り合われたかったようで、妄そ……物事がうまくいく世界に旅立ったようだ。

「私は今の恭司もさっきの二人も優しそうでよかったよ?」
真面目に答えてくれた鈴仙を見て照れている。

慧音達大人組も頷いているのには気づいていないが。

「だけどさ、これは夜にやるもんじゃないだろ。宴会じゃあるまいし。……なんか知らないが自分のスペックが上がっている気がする」
強制的な融合よりも、自ら望んで混ぜた今のが基礎値が遥かに上がっている。

「あら、言っただけでなかったかしら? これから宴会よ」
紫がいそいそと酒をたくさん出している。

他の人達も準備を手伝ったり、持ってきた料理を並べたりと急に忙しそうにしていた。

「まあ、いいけどさ……。おおっ、フラン! 屋敷から出してもらえたのか?」

今まで自分の事に必死で周りが見えておらず気づいていなかった。

「あっ、サマナー! やつと気づいてくれたのね。お姉様がサマナーが居ればいい子にするからいいわって」
「ようやく気づいてもらえて嬉しそうに抱きついてくる。」

よしよしと片手で抱っこしている。

フランの心に巢食っていた狂気は恭司の切り札が存在する限り再発しない。

このままずっと心を癒し続ければ切り札が消えても狂気に負ける事もなくなるはずだ、とレミリアには話してある。

「ほほう、レミリアおぜうさまはこの前の失態をバラされないように必死ですなー。……うあっ、フラン吸うなら言ってくれびっくりするから」

恭司はニヤニヤしながら偉そうに座っているレミリアを見ている。

いきなりフランに首筋をかぶつと噛みつかれて驚いていた。

「ん……お姉様何かやったの？」

フランが首筋から顔を上げて聞いてきた。

「それはだな」

フランに教えてしまおうとしたら焦って飛んできた。

「だ、ダメよ！ フラン、恭司は嘘を吐いているの。だから聞いても意味がないわ」

めっちゃ焦ってしどろもどろになっている。

その様子を見てニヤニヤが止まらない。

「ふーん。あまり興味ないからいいけど。いただきます」
かぶつと吸血の続きを始め、幸せそうに吸っている。

「あ、それなら私も。ほら、私を抱っこをする許可をあげるわ。喜びにむせび泣きながら抱っこしなさい」
最近やたら偉そうだった。

「フラン、あっち行こうか」
なのでスルー！。

「さ、咲夜ー」練習したのが無駄になって従者を呼んでいる涙目なおせうさま。

「恭司、待ちなさい。ほら、見てみなさいこのお嬢様を。エリートロリコンな貴方ならたまらないでしょう？」
急に現われた咲夜がどちらに対しても凄く失礼な事を言っている。

「ロリコンじゃねーよ！ しかもエリートってなんだよ！ アリスか！？ あいつが言ってるのか！？」
もうロリコンの否定に必死である。

そんな恭司を見て、分かっているわと言いたげにふふつと笑う咲夜。

「そつよね、よく私の胸見てるものね。お姉さんのがいいわよね、美鈴のより見てるし」
貴重な満面の笑顔。

噂に聞いた偽乳疑惑が本当なのか見ていましたとは絶対に言えない。
結局真偽は分からないまま。

「ま、まあな。俺も立派なオトコノコだから……」
バレたらハリネズミになるかもしれないと冷や汗だらだら。

「あむ」

その隙にレミリアが飛ばすによじ登り、かぶつと首筋に噛み付いてきた。

条件反射で片手で支えてしまっている。

「二人に同時に吸われるとかこんなExperienceしたくなかった。だんだん血を吸われるのに慣れてきて、逆に心地よくなってきているのが腹立たしい。よっしゃあああああ！！」
ゾクゾクしている。

両手に合法ロリを抱えている姿はどう見ても立派なロリコンです、本当にありがとうございます。

何となく吠えているのは唐突によっしゃあ漢唄を思い出したからだろう。

決して二人を抱えて嬉しいからではない。

「今日はこれくらいにしておくわ。これから他にも食べたりするか。でもこの前よりもおいしくなってるのが不思議ね」

「ご馳走様ー」

二人して首筋から顔を離れた。

フランが慣れたように首に包帯を巻いていく。

「強いデュエリストの血はうまいって聞いた事がある。俺が日夜成長してるからかもしれないな」
前にカミューラから聞いていた。

今の恭司の血でも吸血鬼からしたら最上級なのに、これ以上になったらどうなってしまうのか。

そして準備も終わり宴会が始まった。

恭司はアルコールに弱く、未成年だからと酒を吞まずにおつまみをひたすら食べている。

呑んで妙な事になっても困る。

「咲夜……好き好き大好き超愛してる」

咲夜がぶどうジュースの入ったグラスを持ってきてくれた。

この中だと一人だけ吞めないお子様だから持ってきてくれたみたいだ。

「はいはい。早く吞めるようになりなさい」

吸血をされた流れでレミリア達と一緒にいる。

ロリコ……恭司の両膝にはスカーレット姉妹がいた。

「うん、わかったよお姉ちゃん……待った、今のなし」

姉みたいに対応されてつい言ってしまった。

シーンと静まり返ったのに気づき、恥ずかしさで顔が赤くなっている。

「お、お姉ちゃん？」

まさか恭司にそう呼ばれるとは思っておらず、その甘美な響きに咲夜は動揺していた。

「すまん、失言だった。頼むから忘れて！」

姉妹が膝の上でニヤニヤして見ている。

嫌な予感しかしない。

「あらあら、フラン。今の聞いていたかしら？」

「ええ、お姉様。私達の事もそう呼んでほしいな」

フランはキラキラした目で見てくるが、レミリアはニヤニヤした目で見てくる。

「……………」

フランから目を逸らした。

耳まで赤くなるくらい恥ずかしかったようだ。

「ねー、一回だけでいいからお願い」かなりの甘えん坊になっているフラン。

そしてそんなフランに一番甘い恭司は折れた。

「ふ、フランお姉ちゃん……こ、これでいいだろ？」
そう言って再び真っ赤な顔を背けた。

「えへへ、よしよし。お姉ちゃんが撫でてあげる」
いつもとは逆に頭を撫でている。

フランの危険度を知っている参加者は驚愕の表情でこちらを見ている。

「あら、恭司。私の事は呼んでくれないのかしら？」くすくす笑っている。

いつか絶対に泣かす、と心に誓いレミリアを見た。

「わーい、プリン摘み食いたレミリアおねえちゃん」
少し離れた位置にいる咲夜がこちらを振り返り、レミリアが焦りだした。

「ちょ、ちょっと！それを咲夜がいる所で言ったらダメって言ったでしょ！」
おやつ抜きにされてしまうからか、かなり焦っている。

「咲夜の分だけ俺が作ってなんとかバレなかったんじゃないか」
バレバレだったがなんだかんだで得をした咲夜は気づかなかったフ

リをしてくれているだけ。

「一つだけクオリティが高すぎるのに気づかれないと思っている二人は幸せな脳みそをしている。」

「う、それを言われると弱いわ」

何故か怯んでおり、それをチャンスとばかりに畳み掛けていく。

「ふふふふふ、何ならいつもみたいに甘えるか？」

そう耳元で囁くとレミリアの顔が一気に真っ赤に染まった。

レミリアは誰にも秘密で二人きりの時に恭司に甘えている。

フランが甘えているのを見て羨ましくなり、試しに甘えてみたら抜け出せなくなっていた。

「なっ、い、今はいい……」

俯き顔を見られないようにしている。

人間なのに不思議な男。

咲夜のように手元に置きたいが、本人が首を縦に振らないのでどうしようもない。

いつか従者にしてやろうと着々と準備を整えている。

「ふふ、可愛いな。しかし俺は何か忘れてる気がする」

何とかして帰るといふ目標が頭から消え去っていた。

既に立派な幻想郷の一員であり、大切な人達も出来た。
そしてこの世界で強く結び直された魂。
きっとこの宴会でも新しい出会いがあるだろう。

続く。

Yの境界／宴の前座（後書き）

逃げるなあっ！！！！

…生きる事から、逃げるな！

これは…命令だ！

GEBで主人公がやっと主人公やってたなあ。

いつかうちの主人公にも言わせよう。

蒼穹の新月をクリア出来た自分が信じられない。

二度とやりたくないわ。

10万PV特別編 異世界のB/闇の誘惑(前書き)

本編とはまったく関係のない話。

平行世界とかそんな感じ。

だから特別編。

キャラ崩壊等はデフォ。

ダーク・フリット・トッププロCG化おめでとう。

10万PV特別編 異世界のB/闇の誘惑

「霖乃助はよーっす」

すっかり馴れ親しみ、下の名前で呼び合うようになってる。

「ああ、おはよう。恭司は最近よく来るね」
本から顔を上げてこちらを見ていた。

色々な話をしたり、聞いたりする内に友情的な意味で仲が深まっている。

薔薇エンドは絶対にならない、絶対だ。

「雪が降る前にな。また店内見させてもらっぞ」
そう言っって色々見始めた。

「あはは、これ見た事あるわ。確かりリカルの作品に出てた闇の書ってやつだ。誰かがコスプレするのに作ったのかな」
手に取ると妙な不快感を感じてすぐに手を放した。

体の中に根を張られたような気持ち悪さで、少し気分が悪くなっている。

「うーん、リアルすぎて気分が悪くなったか？ってシャベル探さない」と

本を棚に戻しシャベルを探し始めている。

そこまで興味がある作品ではなかったらしく、闇の書については簡単な事しか知らなかった。

「雪掻き用のはあつたな。後は……いいか」
カウンターに持っていった。

「……でいいよ。サービスでこの本も付けようか？」
シャベルの代金を支払って霖乃助を見るとさっきの本を持っていた。持っけていても気持ち悪くないのか平然としているので不思議そうに見える。

「なあ、それ持つと気持ち悪くないか？ 体に根を張られるよ
うなさ」
手を離している今でも気持ち悪い。

「魔導書みたいだからね。さっき恭司が手に取るのが見えたから欲しいのかと思っただけだ。……サービスするからいらなら捨ててもいいよ」
厄介払いの意味でサービスしている。

シャベルと一緒に渡してきたので渋々受け取った。

「いらないしパチュリーにでもあげるか」

本を受け取り、しばし雑談してから店を出た。

本物の魔導書だなんて信じていないし、不要な物を受け取ってしまったと考えている。

帰り道。

「本物、ねえ。だとしたらパチュリーは喜ぶかもしれんな。そうしたら小悪魔さんの好感度も上がるかもしれん」
割と打算的で、そう考えるとこの本も悪くないかと考えながら帰っている。

慧音宅

「ただいまー」

玄関にシャベルを置いてみると、ぱたぱたと誰かが駆け寄ってくる。

「恭司、おかえり。……ん？ その本は？」
エプロンを付けた慧音が嬉しそうに出てきた。

そして恭司が妙な本を手にしているのに気づいたようだ。

「サービスだとき。今度紅魔館に置いてくるつもり」
靴を脱ぎながら答えている。

鎖に縛られた本なんて喜びそうだろう？なんて言いながら靴を脱いで

いた。

「嫌な予感がする……」

恭司の持った本を見て嫌そうな顔をしている。

「それよりも今日の昼は慧音だろ？ 楽しみにして帰ってきたんだ」
女性の手料理ならどんなのでも喜んで食べる男だが、ちゃんとダメな所は指摘する。

「ふふ、楽しみに待っていてくれ」

何かいい雰囲気である。

だが期待するな。

「私も居るんだけど……」

一緒に出迎えていたのに二人にハブられて妹紅が空気だった。

夜

あの後、いじける妹紅の機嫌をなんとか回復させ、楽しい昼食を過ごした。

ただ、妹紅も本を見て嫌な予感がすると言っていたのが気にかかった。

「やっぱり気味悪いな。さっさと寝よう」

本を部屋の隅に置き、布団を敷いて横になった。

明日早起きしてパチュリーにでも見てもらおうと考え、すぐに眠り始めた。

すると夢の中に銀色の髪に赤い瞳の女性が現われ、何かを言いながら恭司を見ている。

何を言っているのか聞き取れず、見た事があるような気がする女性だな、と思ったが夢だと割り切つて観察。

必死に何かを語り掛けてくるが聞こえないまま朝に。

朝

「ふあーあ、変な夢見たな。あんな本を手にしたせいかな」
ちらつと部屋の隅にあるはずの本を見ると、相も変わらず鎖に縛られている。

「鎖で縛られてるとかドMな本だな。もしかして、こうしたら鎖が取れたりして」

魔力の生み出し方をアリスと魔理沙に習っていたので、試しにと本に魔力を流してみた。

すると

「おっ、おおっ。ええっ、マジかよ！ ば、パチュリー！」

鎖を引きちぎり、発光した本が宙に浮き勝手にページを開き始めた。

何か本から声が聞こえていた気がしたがそれ所ではなく、思わずここには居ないパチュリーに助けを求めている。

困った時はとりあえずパチュリーに頼るのがこの男。

本がページを捲り終わると四つの光の球体が現われていたが、恭司はそんなのを無視して飛び散った鎖の破片を集めている。掃除したばかりなのにと憤慨しながら集めている姿は非常にシユールな光景だった。

「闇の書の起動を確認しました」

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にごぞいます」

「夜天の主に集いし雲……」

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を」
ピンクに近い髪の色をしたポニーテールの女性、金髪の女性、茜色の髪に三つ編みの女の子、獣耳を付けた銀髪で褐色の肌の男。

どこから来たのかそんな四人組が跪いていた。

「色々言いたいけど、かなり寒そうだからとりあえず服を着てくれないならその棚に俺の服の予備があるから、それを着てから片付けを手伝うように」
チラッと見て、黒いアンダーウェアのみで見ているだけで寒そうなの四人にそう言った。

こんな馬鹿な事が起こるはずないと思いつながら、飛び散った鎖の破片集めに四苦八苦している。

俺はどちらかと言えば村人Aとかのポジションなのにありえないだ

るJK、とバリバリ主人公属性な奴が呟いていた。

十数分後

四人は恭司の服を着て破片集めを手伝ってくれていた。もう現実を受け入れるしかなかった。

「で、君達はこの本の中に居たと」
四人から聞いた事を大雑把に解釈して言っているが間違っていない。

互いに自己紹介も済んでいて、彼女等の目的等も聞き終わっている。

「はい。それで先程言われた蒐集の必要がないとはいったい……」
ピンクに近い髪をした女性、シグナムが困惑した表情をしている。

「いや、なんかさデメリットがあると思うんだよ。それにあまり誰かに迷惑をかけるのが好きじゃないっていうのもあるし」
確か何かデメリットがあったはずだと思いついて出そうとしているが全然浮かんでこない。

すっかりアニメを見ておけばよかったと後悔しているが、まさか現実に遭遇すると誰も想像出来ないから仕方ない。

「デメリット、ですか？」

座布団に座った金髪の女性、シャルが聞き返してきた。

「ああ。俺がその本に初めて触れた時に感じた不快感、それと俺の体に何か根を張っているようなこの感覚も気になる」
「なんか妙に怠くて気持ち悪いし、と言うとシヤマルが近づいてきて恭司の体を調べ始めた。」

「え……。こ、これって」
調べていくうちに言っている事が本当だと分かったらしい。

この世界の人間にはリンカーコアはなく、体内を巡る魔力が魔法を行使する元となっている。
その体を巡る魔力に乗り闇の書がゆっくりと侵食しており、今は平気でも後々体の自由が奪われていく事は明白だった。

「この本に侵食されている、か？」
恭司が何となく言った言葉にビクツと反応するシヤマルを見れば一目瞭然だった。

そんな機能あるはずがないと思いつつも、実際に起きている事に啞然としているシグナム達。
それを尻目に恭司は簡単な解決策を思いついていた。

「そんな状態で蒐集したらどんな事になるか分からない。それとさつきまでの話を聞くと本は特定のプログラムで成り立ってるみたいだし、それなら本の中のプログラムを直せば解決するだろ」
自己完結し、四枚のカードを取り出している。
送り込む気満々だった。

「でも恭司、どうやって直すんだよ。あたし達でも直す事は出来ねーぞ」

敬語もいらん、呼び捨てでいいと言ってから呼び捨てになったヴェイ
ータが聞いてきた。

ロリっ娘に縁があるのはきつとエリートだから。

「頼りになるこいつらを送り込む。んで本を正常にする」

コザッキー、魔導サイエンティストと何かあった時の護衛にスカイ
レッド・デビル・ドラゴンとマリシヤス・デビル。

まさに最強の布陣だった。

「……………」

恭司の能力を知らないから、念話をしながら可哀想な人を見る目で
恭司を見ている。

「俺の体を侵食するなんて……ゆゑざんざん!!」
戸惑っているシャマルに頼んで、本にカードを取り込ませた。

時間差で実体化出来るようにしてあるから、後は彼らに任せれば時
間はかかるだろうが確実に直ると思う。

だけど知らない皆は可哀想な（ry

そして慧音襲来。

「恭司、この方達は？ お前の服を着ているようだが」
鋭い目がとても怖く、特に恭司に近いシャマルを見る目が怖い。

「この本から出てきたんだ。……アウチ！」
正直に答えたのに、きつい頭突きをくらった。

流石に信じてくれなかったようだ。

「人は本から出てこない」
騎士達も慣れた動作の頭突きに一瞬動けなくなっていた。

「しよ、正直に答えたのに！」
ごろごろ転がって悶えている。

シャマルが慌てて回復魔法で癒してくれている。

「恭司ではなく君達に聞くべきだったな」
シグナムに向き直った。

少女達説明中……。

「申し訳ないが流石に信じられないな……」
不可思議だらけの幻想郷、それでも信じられなかった。

「慧音、でもマジなんだよ。あの本から出てきたんだ」
痛みも治まり、立ち上がった恭司がシャマルが持っている本を指差

している。

すると一瞬昨日の事を思い出して顔を顰めていた。

「これがあの嫌な予感だったのか……。とりあえず皆で朝食を食べ
てから話そう」

そう言って部屋から出ていった。

「シグナム、とりあえず飯にしよう。この世界についても飯の後に
話すから」

妹紅に燃やされませんように、と祈りながら部屋から皆を連れて出
た。

案の定、朝食の場で嫉妬した妹紅に燃やされかけるがシグナムが間
に入り睨み合い。

炎を使う者同士、相容れないのかもしれない。

慧音の頭突きがそんな二人に炸裂。

恭司は蹲る二人を指差しながらヴィータ達に、慧音は絶対に怒らせ
てはいけないと説明していた。

何の因果か夜天の主。

余計な事をしたせいで大変な事になってしまった。

彼らの冒険はこれからだ！

おしまい。

10万PV特別編 異世界のB/闇の誘惑（後書き）

コザッキーと魔導サイエンティストが居れば絶対なんとかなると思う。

作者はシャマルが一番好きです。

鬼娘のS / 古流武術（前書き）

今回は能力なしでどれくらい生身で闘えるか。
力を与えてもらえる理由。
異常な回復力。

鬼娘のS / 古流武術

「本気で行くよ。さっきまでは何となくだったけど、今は本当にお前が欲しくなったからね。しっかし奇妙な戦い方だよ」
まだまだ余裕だが肩が痛そうな二本の角を持った鬼。

それに対峙するボロボロな恭司。

宴会に参加した者は皆、静まり返っている。

ちよつとした能力を持っただけの人間が弾幕ごっこではなく格闘で鬼に挑み、そこそこ闘えているからだった。

「すつげえ痛いぜ……」

両手の人差し指と中指を伸ばして構えており、知らない者から見ればかなり奇妙な構え方だった。

武術もスポンジのように吸収するくらい才能がある。

闘うのがあまり好きじゃなかった恭司だが、この流派の技だけは好きなのでよく鍛えている。

指先を鍛えているから両手の人差し指と中指で逆立ちしながら走る事が可能。

この世界では使用する者は既におらず、誰にも師事出来なかった。この流派の技を再現する為に指を鍛え始めたのは過去に魂の融合を無理やりされてから。

一人で大勢の敵を倒す為の間接破壊を追求した流派、破傀拳。

まるで操り人形の吊り糸を断ち切るように、殺陣を交わすことに相手の体が動きを失っていく様からそう名付けられた。

何故こんなことになっているのかというと。

「ん？ ああ、確かにそれやったのは俺だが」

あの後、とりあえず紅魔館のメンバーと騒いでいるといつのまにか参加していた二つの角がある少女に話し掛けられた。

そこの悪魔の妹を倒したのはお前なのか、と。

「やっぱりそうだったんだ。ねえ、私と勝負しようよ、酒か戦いでさ。私が勝ったら人間、お前を攫っていく。私が負けたら何でも言うことを聞いてあげるからさ」

負けない自信があるから条件も破格。

どうしようか悩んでいると、レミリアとフランが口を挟んできた。

「恭司、受ける必要なんてないわ」

ワインを飲みながらキリツとした顔で言っている。

恭司の膝に座って支えられていなければ凜々しく見えただろうに。

「お姉様の言う通りよ。サマナーは私と居るんだからフランも膝に座っている。」

相も変わらず外の世界だったら職質されそつな状態だった。

「うーん、酒は無理だ。……でもなんか受けないといけない気がする。戦闘の方でだけど」
戦いたくてうずうずしている。

外で鍛えてはいたが既に限界だと思っていた。

だが様々な出会いでまだまだ成長できる事に気づき、多少成長した今の自分を試してみたくなっている。

それにさっさくしただけ上がったスペック、その力を試してみたいとも考えての決断。

やはり人の子、愚かだが血筋が血筋だから仕方がないのかもしれない。

説得を諦めたレミリアとフランが膝から退き、恭司は立ち上がった。

「私の名前は伊吹萃香。お前を攫う事になる鬼だよ？」
最初から負けるつもりはないと言っている。

攫う理由はなんとなく。

「俺の名前は鉄恭司。幻想郷に連れてこられたしがたがない決闘者さ」
ハーフボイルドな探偵のように名乗っている。

他の宴会の参加者は酒のつまみにいいと煽っている者が多数。
慧音は明日にでも説教しよう決めていた。

二人は一定の距離を保って対峙している。

「最初は加減するから……ねっ！」
萃香が一気に詰め寄り拳を振るってきた。

咄嗟にガードはしたがそのまま止まらず振りぬかれる。

「速いし重いとかずるいな。流石鬼だ」
余裕そうに見えるが内心かなり焦っている。

予想よりも重くて何度も受けていられず、避ける以外の選択肢が消えた。

「ほらほらほら！」
最初の一撃を防いだのを見て、さっきとは比較できない程の速さで拳を打ってくる。

ギャラリーの歓声も凄い。
鈴仙は焦りながら治療の準備をしている。

「うわっ！ ……鞍突っ！！」
ただ避けていたが、拳が頬を擦った瞬間に構えが変わった。
折り曲げた人差し指と中指、竜頭拳の手形で拳を払って的確に手首の間接を狙っている。

「痛っ！ 今のは……」

手首に痛みを感じ距離を取った。

相手が間接を狙っている事が理解出来たらしく、一撃で決めようと距離を取って構えた。

「なんつー丈夫な体だよ」

かなり力を入れて間接を狙っているのに間接が外れない。

鬼の丈夫さに驚いているのと同時に冷や汗が背を伝っていく。

勝ち筋が全く見えない。

「これで寝てほしいな！」

萃香が急加速し接近、まだ速くなるのかと驚愕し目を見開いている恭司の顎を拳で強打した。

少し浮いた所を狙い、服を掴んで地に強く叩きつける。

今ので口内を切ったのか血が出ていた。

「……球突！」

顎に強烈な一撃を入れてダウンさせたはずの恭司が目を開き、両肩の間接に伸ばした人差し指と中指を突き刺すように突いた。その手形は剣訣指。

「痛いっ！さつきから何なの……」

ズキズキする両肩に思わず離れた。

悪魔の妹を倒したと言っても絡め手を使ったからだろうし、それさ

え使わせなければ余裕だと思っていた。
まさか油断していたとしても、今を生きる人間に多少でも押される
とは思っていなかったようだ。

「それで終わりか？」

立ち上がって構えたが、既にボロボロでふらふらしている。

まだ立てるのは美鈴に丹田法を習い必死に会得し防御力を上げてい
たから。

しかし美鈴にあまり会えず、習っていても未熟なので今のボロボロ
の状態では集中出来ず使えない。

東洋経絡（ツボ、または急所）理論で言う気海（へその少し下にあ
るという経絡）に気を溜め増幅、武術形（拳法の型やその流れ）と
呼吸法とを同調させる事で全身にくまなく気血をめぐる。場
合によっては一ヶ所に集中させる事も可能。

簡単に言えば体全体や一部を強化して攻撃力や防御力を上げる技。

西洋体育学、解剖生理学が未だ実体として捉える事が出来ない観念
で古武術の極意。

それが丹田法。

これが冒頭に繋がる

「本気で行くよ。さっきまでは何となくだったけど、今は本当にお
前が欲しくなったからね。しっかり奇妙な戦い方だよ」

ドキッとするような目で見てきた事で改めて年の差を感じた。

「すっげえ痛いぜ……」
多少加減されているとはいえ、鬼の攻撃をまともに受けて立っているだけでも凄い。

しかし立っているだけで集中力が途切れ、ボロボロな状態。
丹田法を使えない今、一撃でも貰えば確実に負けると冷や汗が首筋を伝った。

「行くよ」

次の瞬間には萃香の姿が消えていた。

恭司にはそう見えており、焦ってリミッターを外そうとした時には遅く強烈な一撃が右脇腹に直撃。
骨が何本か折れ砕ける音が聞こえた。

「がっ！ ……！ っ！」

その一撃で宙に浮かされ、痛みに耐えて体勢を整えようとしたが左脇腹にも強烈な一撃をくらい地面に叩きつけられた。

また骨が折れ砕ける音が聞こえ、地面を数回バウンドして止まった。
血を吐き両脇腹を押さえてダウンしていて、もう立てないだろうと誰もが思える状態だった。

「決着はついたよね？」

まだまだ余裕そうな萃香がこちらを見ていた。

鈴仙が焦って駆け寄り状態を診ている。
痛みと苦しさとで呻いていて、いつもの余裕が微塵もなかった。

「恭司、しっかりして！　すぐに師匠の所に連れていくから！」
すぐに体を診ていたが思ったよりも酷く、早く連れていかなければと焦っている。

肩を貸して永遠亭まで連れていこうとしたが、恭司はフラフラと自ら立ち上がった。

まだ戦うつもりなんだと理解した鈴仙は泣きそうになっていた。

「動いちゃダメだよサマナー！　死んじやうよ！」
フランも一緒に駆け寄ってきていたらしい。

痛みで呼吸が激しく乱れていても立ち上がっている。

兄のように慕い、優しくとても暖かい自分を受け入れてくれた人が死ぬと考えるだけで震えが止まらない。

フランが今まで感じた事のない恐怖の一つだった。

「だ、大丈夫か！？　ああ、もう心配させないでくれ！」
慧音も駆け寄り寝かせようとしている。

恭司が自分から受けた勝負故に文句は言えず、ただこれ以上怪我をする事がないように止めようとしていた。

「動いちゃダメですよ！　今の、しかもただの人間が鬼に正攻法で

勝てるわけないんです!」
早苗も必死に寝かせようとしている。

「かはっ……はっ……はっ……ごほっ……はっ……」
血を吐きながら無理矢理呼吸を整えている。

死にたくない、負けたくない、このままだと殺されるかもしれない。
それなら倒さないといけない、殺される前に相手を……。

そう考えていると目が真っ赤に染まり、背には赤き竜が浮かび上がってきた。

意識が朦朧として、ただあの鬼を倒す事だけしか考えられなくなっている。

痛みを感じていないのか、皆の制止を聞かず萃香に向かって全力で駆け出した。

その頃少し離れた位置で萃香はやりすぎだと紫達に怒られていた。
その紫達が急に黙り驚いた顔をしているので振り向くと、血を吐いてダウンしていたはずの恭司が真っ赤な瞳に殺意を漲らせてこちらに向かって全力で駆けてきていた。

「……………」
離れていてもひゅーひゅー聞こえてくる呼吸音。

さっきまではあった無駄な動きが一切なく、その速度もただの人間、しかも怪我人が出すには異常な程の速さ。

「何でまだ動け……うあぁっ!! くっ! この!」
駆けてきた勢いのまま恭司の人差し指、金剛指が萃香の左肩を軽く貫き間接を外した。

その繰り出された一撃は鬼の丈夫な肉体すらも貫き、その指を引き抜く時には血が飛び散る。

萃香が振るってきた拳を避け、続けて右膝の間接を剣訣指で貫き外した。

「ぐっ、うっつ!?! 急に強く……!! うあぁっ!」

さらに振るわれて直撃するはずの拳を指先で軽く逸らし、手首の間接を外す。

萃香が本気で対処しようとした時には既に手遅れになっていた。

奇妙な技、だがその一撃一撃は確実に鬼を追い詰めていく。

「破傀拳奥義、百花繚乱」

ぼそりと呟く声と共に一撃一撃の速さが上がっていく。

鬼に手出しを一切させず、一方的な展開。

皆、何も言えず鬼が一人の人間に蹂躪されていくのを見ている事しか出来ない。

現代のしかも外来人である人間が、油断していたとはいえ鬼を打ち倒すこの光景は信じられない。

萃香の血を花びらの如く舞い散らせ、戦場を朱に染め、空間を恐怖

で塗り潰していく。

突きは刺しに変わり、肉を裂き骨を外す。

力を解放し、常人の域ばかりでなく超人の領域をも凌駕した者にのみ許された禁断の技。

繰り返される一つ一つの刺しが体の自由を奪い、かつ致命傷を与え、相手が地にその身を沈めるまで、その攻撃が止むことはない。

禁じ手であり、既に使用者がいない古流武術の技を現代に蘇らせる才能が恐ろしい。

萃香が地に沈み、動かなくなつたのを確認し恭司も倒れこんだ。

限界はとつくに迎えている。

すぐに宴会もお開きになり急いで永遠亭に運ばれていく。

二人を心配し、何人かは付いて来てくれている。

幸いにも相手が鬼であったからか、体中の間接を外されても萃香はそんな大怪我にはならなかった。

一週間後

「完治……ね。ありえないわ」

永琳が恭司に向かってそう言った。

どういう身体をしているのかと、ちょっとした化け物扱いである。

「失礼だな。萃香なんて二日だったんだろ？」

心外だ、という顔で言い返している。

鬼と人の差。

全ての間接を入れて手当てをすれば鬼の回復力であつと言う間だったらしい。

「あの娘は鬼なのよ？ それに間接を外されたのと裂かれた肉だけ。貴方はただの人間なのに、あんな酷く砕かれていた骨を一週間で治したのよ。本当に異常だわ」

変な物を見る目で見られており、悔しくなつてその目を見つめてこう呟いた。

「永琳の愛の力かもな……嘘です、そんなリアルなでかさの注射器やめてくれ」

ちよつと言つてみたかつた台詞を言つてみたら中途半端にリアルなサイズの注射器を出された。

「貴方が馬鹿なこと言うからよ」

少し照れている素直になれない年齢不詳の美女。

「しかし意識がほとんどない状態でよく萃香を倒せたな俺」

圧倒的な力だったが、無意識に技を行使して倒していたらしく覚えていない。

次に闘つたら間違いなく勝てない和理解している。

運と奇襲、知られていない流派に赤き竜が与えた活力がうまく勝利へと導いてくれただけ。

永琳はよく動いている相手の間接を外せたものだと感じていた。

「えーっ、私を倒したの無意識でやってたの？」

いつのまに潜り込んでいたのか鬼っ娘が布団の中にいた。

エリートレベルになると幼女が布団に自然に入ってくるようになるらしい。

何ともうらやまけしからん。

決着がついて四日後の朝、まだ少し苦しんでいる所に現れ、約束を果たしに来たと告げられた。

引き分けだからあれは無効だろと言っても萃香は自分の負けと言つて聞かず、仕方ないので聞いてもらった事は

「私と友達になりたいって……それでいいの？」

もつと無理難題を言われると思つていたので拍子抜けしている。

「ああ。出来ればもう闘いたくない」

布団に横になって話をしている。

これ以上怪我をする前に丹田法を完璧にしなればと決意していた。美鈴から手取り足取り教えてもらえるから幸せなのかもしれない。

「うん、私も恭司を気に入ったしいよ。今度私の仲間も紹介するからね」

嬉しそうに酒を飲み始めた。

ロリっ娘を引き寄せる程度の能力も保持しているんじゃないかといつくらいに見た目幼女を引き寄せている。

「いや、今は酒飲む所じゃないだろ……いたたつ。それに戦闘狂とかじゃないよな、その仲間って」
萃香の仲間に関して少し不安になった。

毎日誰かしら見舞いに来てくれている。

特に鈴仙は手伝いが無い時は一日いて相手をしてくれて暇にならず助かっていた。

輝夜は嬉々として毎日遊びに来るが、最初の数日は苦しむ恭司の周りを心配そうにうろうろしているだけだったりする。

「そんな事があって、萃香と仲良くなれたんだよな。……だけど今回の事で分かったが、赤き竜はただ力を貸してくれている訳じゃない。俺が死なないように生かす為だけに俺に力を与えてるみたいだ」
遊星達の為に力を貸しているから、必要なくなれば切り捨てられる可能性がある。

若しくは何らかのアクシデントでこの時代に地縛神が蘇ってしまった時の駒。

繋がりがシグナーを越えているから善意で力を貸してくれている可能性もある。

頼りにもなるが恐ろしくもあった。

「とりあえず明日までは安静にしてなさい。それと貴女、ここでお酒はダメよ」
そう言い永琳は去っていった。

途端に待ってましたとばかりに妖怪兎達がたくさん部屋に突入して

くる。

「わわっ、恭司。この兎達なんなの？」

我先にと膝に飛び乗ろうとしていて、とても和む光景だった。

「動物が好きなんだ。で、たまたま居た兎に構ってたら増えに増えて」

人型になれるのもいるはずだがそれは知らない。

一羽を抱っこし、膝に乗った兎を撫で撫でしている。

幸せすぎて死にそうだった。

「そうなんだ。元気になったみたいだし私はそろそろ帰るね。今度は楽しくお酒呑もうね」

そう言っつて兎達を踏まないように帰っていった。

「萃香、またな。あー、これは幸せだ」

たくさんの兎に癒されている。

たまに他の兎に構いすぎて鈴仙が嫉妬したりするのも可愛い。

しばらくたくさんの兎をモフモフしていると鈴仙が入ってきた。

「わっ、また？」

二日くらい前から続いているこの光景、またなのかと尋ねながら恭司の布団に近づいて座った。

「うん。可愛いよ」

腕の中で眠ろうとしている兎を見てにこにこ。

本当に動物が大好きで仕方ないようで夢中になっている。

「…………ひゃ」

そーっと膝の上の兎を降ろし、自分の頭を膝の上に乗せてみた。

するとその頭を躊躇なく撫で撫でし始めた。

「んー？　さらさらな毛並みの子だな。…………OH」

撫でているのがふにやふにやで嬉しそうな鈴仙なのに気づいた。

セクハラとか言われたらどうしようとして13人の恭司が脳内で激しく会議をしているが、それでも撫でるのをやめない。

これが　にんげんの　サガか…………。

「えへへ。恭司とは目と目が合っても平気なんだよね？」

目が合ったら狂気の瞳で心が乱されたり狂ったりするはずなのにまったく影響がなく、これまた永琳に人外扱いされていた。

その事を聞き鈴仙は歓喜、その日は一日じーっと見つめられて恥ずかしかったらしい。

常人では耐えられない事にも耐えられるのは、元々未来で全て奪われて狂っていたからかもしれない。

「理由はよく分からないけどな。流石に能力使われたらダメだけど」
膝の上から見つめてくる鈴仙の赤く綺麗な瞳。

その瞳を見つめ返しても特に違和感はないがかなり照れる。

最初に目を見た時に感じた心を乱される感覚も今はなく、鈴仙もそれが嬉しいのか目をよく見てくるので恥ずかしさの大きい。

「んっ、んんっ！ お前達、何をしているんだ？」

額に青筋が浮かんだふつくしいけーね先生が立っていた。

二人が見つめ合いを始めてから居たようだ。

「な、何もしてません！」

鈴仙が慌てて離れた。

一号、二号と何かよく分からない話を二人でしている姿を見る事がある。

この二人が仲良くなったのが不思議だった。

「バーバリアンかな」

一号と二号的な意味で。

部屋に入り近づいてきて、大胆にも慧音が膝に頭を乗せてきた。

満月の夜、一カ月分の仕事を終わらせた後にしか催促しないからびつくりしている。

「やはり以前よりも心地いいな。纏っている空気が変わったという
か」

腕を組んで不思議そうに見上げている。

腕を組む事で強調される慧音の胸をじーっとデレデレしながら凝視、
それが鈴仙にバレて頬を引っ張られている。

「えっちなのはいけないと思います」

思わずまほろさんを幻視した。

まだ頬を引っ張っている。

「ふあい」

近くで見ても可愛いなと思いつつながらさらされるがまま。

そして見舞いに来た慧音と鈴仙が去ってから五分もしない内に輝夜
が遊びに来た。

見舞いではなく遊びにである。

「あの、とても美しいお嬢さん。今日くらいは安静にしていると
言われたんですが」

手を引かれて輝夜の部屋に連れていかれている。

「いいからいいから、輝夜を信じて」

何か不安になる言い方だった。

テリドリのな意味で。

輝夜の部屋

「ふう、寒くなつてくると炬燵は最高だな」
又ク又クしている。

冬場に炬燵の魔力から抜け出せる者は勇者。

「ねえ、あの話の続きをして？」
向かいに座った輝夜がそわそわしながら言ってくる。

「仮面ライダー剣だな。確か……そうそう。橘さんはそれで恐怖を乗り越え、見事バーニング・サヨコでアンデットを倒すんだ」
ギヤレンが大好きな恭司の話にも熱が入る。

色々と間違えている所もあるが。

二人で楽しくこたつで雑談。

「あー、暖まる。……おいおい姫さん何すんだよ」
しばらくすると何やらしつこく足を絡めてくる。

炬燵の中の戦争が開幕。

「ふふん、どうよ。こんな美人に足を絡めてもらえて」
何故か自分の容姿だけで虜に出来ない不思議な男。

スキンシップをして意地でも意識させようとしている。最近になってデュエルをするようになった妹紅がよく腕を組むと自慢してきて悔しかったわけではない、多分。

「痛たたたた。姫さん、四の字になってて痛い！」
高嶺の花すぎて逆に友人レベルが丁度いいと考えている。

スキンシップにドキドキしても顔には出さない。

「あ、ごめん。でも貴方も変な人間よねー。毎回てみの罨を真正面から全部突破してくるし。今回は宴会で大怪我したみたいだし」
行動パターンが単純であっさり見極められ、毎回全部の罨にかかっているだけ。

鈴仙だけ宴会に行かせないで自分も行けばよかったと考えている。

「てみを捕獲してくすぐりまくってやったら酷くなっただんだよね」
見た目が幼く、小さいからってナチュラルにくすぐれるとか凄い。

てみはライバル。

たまに休戦して妹紅を罨に掛けたりするが、逃げる時に互いに足を引っ張り合って捕まる事が多々。

そして二人とも袁虫にされて燃やされかけている。

「流石エリートロリコンは違うわね」

冷たい目で見てくる。

「俺はロリコンじゃない。理想を言わせてもらえれば慧音とか美鈴とか時に厳しく、時に甘えさせてくれる女性がいい」
ロリコンである事をしっかり否定した。

恭司もそれなりにしっかりしているが、基本甘えられるよりも甘えたいタイプ。

どちらからも好意を寄せられているのに気づいているが弟のような存在に対する好意だと、勘違いして自分が傷つかないような解釈をしている。

混ざってもネガティブな部分は治らない。

「なら私もじゃない」

どの口が言うんだって顔で見られているのに輝夜は気づいていない。

「そーですね」

炬燵に備えてあつたみかんを剥いている。

「妹紅にはない母性本能溢れる私に甘えなさい」
胸を張って自信満々に宣言している。

「怒られるぞ妹紅に。てか胸は五十歩百歩……嘘です。輝夜のが大きいからやめてください」
みかんを剥きながら答えていた。

ふと顔を上げたら、超エキサイティン！な中身の入った箱を持ち上げて構えていて即謝っている。
セクハラ大魔王は健在。

「次言つたら永琳の実験室に連れていくからね」
なんという死の宣告。

実験室に付いて前に鈴仙に聞いたら、ぶるぶる震えてしがみついて来た事があり怖い場所と認識している。

「それは嫌でござる。でも永琳って絶対Sだよな。この前も俺が注射嫌いなもの知ってる癖に採血とか嬉々としてやってたし」
怯える恭司を見て凄くいい笑顔をしていた。

「でも貴方の体に触れて顔赤くしてる時のが多いわよ」
姫様はそんな永琳を見て驚き、採血されている恭司を見てニマニマしていたようだ。

「ご高齢の方達の反応が乙女というギャップ萌え。」

「別に診てくれてるんだから照れなくてもいいのにな。ほい、姫さんあーんしろ」
器用にみかんをつるつるにし終えた。

白い部分も食べられるが口に残るのが嫌なようだ。

「あーん」

素直に開けたので口の中にみかんを入れた。

何だか鳥の雛に餌付けをしている気分。

ナチュラルにこんな事が出来るとか爆発してもらいたい。

「これは甘いな」

そして自分も食べているが、何か輝夜のお世話係みたいになっていた。

「甘いわね。今日は何して遊ぶ？ あーん」

話しながらもみかんを要求してくるので、さっきと同じように口に入れた。

「そうだなー。しばらくまったりしてようか」
みかんを食べながら答えている。

だらだらするのが好きな二人だった。

怪我の治りも人外レベル。

鬼と仲良くなり姫様とイチャついて過ごす決闘者。
間もなく本格的な冬が到来する。

続く。

鬼娘のS / 古流武術（後書き）

ウルトラレッドを知ってる人いるのかな。

あの漫画大好きだったのにすぐに連載終わってガツカリ。

この世界ではかつてあった古流武術の流派として恭司が使ってます。

STOR、六武組む人以外は微妙なパックかもしれぬ。

パック買ってもらったらキザン当たって、昔から六武組んでる友人に渡したら凄い喜んでた。

代わりに三極神に係るの全部くれたのがあるがたい。

アトミック・スクラップが買う度に出てウルトラ3、アルティメツ

ト1と流石にもういらぬよ。

雪掻きのKノ赤いマフラー（前書き）

冬になりました。

しばらくは新しい出会いもなぐつろつろと。

今年度レティには会えません。

雪掻きのK / 赤いマフラー

「毎日毎日飽きもせず積もるな」
「やれやれと香霖堂で購入したスコップで玄関の前の雪を退かしている。」

あの翌日に退院、冬に備え香霖堂でスコップを買っておいたらしい。その買い物から数週間して毎日雪が降り積もるようになっていた。鈴仙から貰った、赤く少し長めのマフラーが風になびいている。

「毎日来る東風谷の姿が寒そうなんだよな……」
何かしているようで、あの巫女服でも平気らしいが見ているこっちが寒かった。

雪掻きが終わり、自室に戻ってガタガタ震えている。

「し、死ぬ……」
集めた雪を妹紅に溶かしてもらった所まではよかった。

その後すぐに妖精のイタズラで雪に埋もれ、その雪を溶かして助けてくれたのはいいがびしょ濡れになってしまっていた。

「水も滴るいい男、だね」
ガタガタ震えながら妹紅が出している炎に手を翳して暖まっている。

慧音が風呂を湧かしてくれているのでそれまでの繋ぎとして。

「……………」
濡れた服は着ていられず上下共に室内に干され、風呂に入らなければ新しい服を着るわけにもいかず今はパンツだけである。

鍛えられた肉体に視線が行き、妹紅の頬が若干赤くなっていた。ちよっとのお金と明日のパンツがあればいい。

「恭司、その、湧いたぞ」
ちらちらとこちらを見ながら慧音が部屋に入ってきた。

「あ、あり、がとう」
着替えを持ってガタガタ震えながら歩いていった。

寒さと暑さにとても弱い現代っ子。
サテライト時代も夏と冬は嫌いだったらしい。

「あー、気持ちいい……………」
暖まってようやく回復したみたいだ。

負ける気しーないはーずーとか歌えるくらいに元気。

風呂から上がり、居間に向かっていく。
たまたま香霖堂で心惹かれて買っておいたオーバーオール姿が新鮮。
ただ赤い服を着ているので某配管工みたいになっているのがシユール。

「東風谷、今日も来たのか。なんかやつぱり寒そうだな」
何回見ても寒そうな格好だった。

一度どうしても腋をくすぐってみたくなくて、許可を貰ってからくすぐった事があった。そしてくすぐっているとそのままハアハアしだして、押し倒された経験がある。
今後くすぐるのは絶対やめようと誓った事件。
まず許可を出した早苗を怪しまなかった事が敗因である。

普通に考えてセクハラだが、当人達が気にしないならいいのだろう。
爆発しろ。

「大丈夫です。愛が燃え上がっていますから」
寒そうに二の腕を擦っている。

対策はしていても寒いものは寒いようだ。

「……ああ、もう。これやるから今度からこれ着てこい。見てられん」

外に居た時に色違いで作っておいた黒いコートを手渡した。

お気に入りには赤だから手放してもいいかと考えて渡している。

「い、いいんですか！？ ああつ、諏訪子様、神奈子様！ プレゼントを貰っちゃいました！」

目をキラキラさせながら受け取っている。

早苗は物凄く喜んでいますが慧音と妹紅の機嫌は凄く下がっていく。

「勘違いするなよな！ 別にお前の為に渡したんじゃないんだからな！ 俺が見ているから寒くなるから渡したんだからな！」
予想以上に喜ばれたので照れている。

ネタではなくマジでツンデレっぽくなっていた。

「えへへへへ」

早速コートを着ている。

「恭司、私にはないの？」

「私にもだ」

妹紅と慧音に詰め寄られている。

「まずは落ち着いてくれ」

後ろに下がって距離を取っている。

迫ってくる二人はとても怖かった。

「予備のコートなくなっちゃったんですけど」
慧音と妹紅のオネガイを断れなかった。

赤と黒のコートの予備が一気になくなり、大切に着ないといけなくなってしまうた。

「これ凄く暖かいよ」

「もっと早く貰えばよかったな」

最近凶々しさが増している感が否めないもこけーね。

間違いなく恭司の影響である。

「くっ、オーダーメイドで高かったのに……」

ヘルカイザーに紹介されたからそれでも多少安かった。

炬燵に入ってしまったりとしている。

しばらくするとある問題が

「さあ、負けた奴が寒い廊下のみかんを取りに行くんだ」
みかんが入っていた籠にはもう何もなかった。

「1対1対1対1でデュエルだね」
妹紅がテーブルにカードを乗せた。

それに続くように慧音、早苗とカードを出した。

「取りに行くの最初に負けた奴な」

恭司も乗せたが嫌な予感しかしない。

「ちよつ、お前等っ！」

案の定集中砲火されている。

厄介な奴を倒すに限るとばかりに狙われていた。

「耐えるねー」

ヴォルカニック・デビル

ATK3000

「まさか耐えきるとはな」

ゴギガ・ガガギゴ

ATK2950

「予想外です」

アームド・ドラゴンLv10

ATK3000

なんか大変な事になっていた。

幸いなのはセットカードがない事くらい。

「嫌だ……俺は!! 負けたくないいいいい!!」

何故かこんな事でヘル化しそうになり、未来融合でサイバー・ドラゴンと全ての機械族を墓地に送った。

「ま、まさか」

「くっ、持っていたのか」

「うっつ、ずるいです」

三人とも気づいたようだ。

自分達の負けフラグに。

「お前等の懐にある勝利を奪い取ってでも！！ 俺は！ 勝アアアアッ！！」

オーバーロード・フュージョンを手札から切った。

墓地に存在するサイバー・ドラゴンを含んだ機械族を全て除外している。

サイバー・ドラゴン 3

サイバー・ダーク各 3

サイドラ・ツヴァイ 3

プロト・サイバー 3

リフレクト・バウンダー 2

計 20 枚。

「エヴォリユーション・レザルト・バーストオ！！」

キメラテック・オーバー・ドラゴン
ATK16000

まずは妹紅に攻撃した。

「何で一番が私!?!」

寒いのにー!とじたばたしてる。

「エヴォリユーション・レザルト・バースト! 二連打ア!!!」
次に慧音を攻撃。

「まあ、二番目ならいいだろう」
妹紅が一番だし、と納得している。

「エヴォリユーション・レザルト・バースト! 三連打ア!!!」
最後に早苗を狙った。

「うう、それ強すぎます………」
切り札だから仕方ない。

「さあ、行ってこい」
素に戻って妹紅に指示している。

「一緒に行かない？ ほら、二人ならあったかいよ？」
ススつとくつついてくる。
道連れが欲しいようだ。

「嫌でござる。この距離なら我慢できるだろ？」
まず炬燵から離れる気がない。

「恭司の意地悪ー。慧」

「嫌だ」

全部言う前に拒否している。
流石の慧音も嫌だったらしい。

「じゃあ……やっぱりいいや」

「ああ、恭司さんの足の間に勝手に足が！」

「痛たたたた！ 早苗、何すんだ！ そこは大事な所なんだよ！」
地味にセクハラしている早苗を見て諦めた。

この二人は意外とお似合いなのかもしれない。

「取ってきたよ」

渋々みかんを取りに行った妹紅が寒い寒いと炬燵に戻ってきた。

「ご苦労さん。そっぴや雪降る前に会ったチルノが嬉しそうにしてたなー」

雪が降ったら遊びに来てほしいと何度も言われていたが寒くて行けない。

「最近聞く赤いマフラーを付けて仲間を率いて雪掻きをする男って恭司だよな？」

里内の雪掻きをする時には必ず装着しているから間違いない。

「ああ、多分な。で、それがどうした？」
能力行使しまくってるからかなり目立っている。

「雪掻きに使ってるモンスターでかなり目立ってるみたいだから。カオスソルジャーだっけ？」
開闢の方です。

「他にも使ってるぞ。切り込み隊長、ダイグレファーに六武衆とかな」

特に六武衆ではシエンに紫炎とBlackとRXな二人と仲が良いから、積極的に手伝ってくれたりする。

スコップを持つ六武衆とかシールドだった。

「戦士族だからよかったのかもね」
里の人もすっかり見慣れた光景になりつつある。

暖まりいい気持ちになり、皆ぼんやりしている中で恭司だけは作業をしている。

「……………」

カチャカチャとキーボードをタイピングする音が部屋に響いている。

珍しく眼鏡をかけて作業中。

三人は物珍しさに真剣な表情の恭司を見ている。

普段の軽い感じがしない。

「……………レールから外れた過去なんだろうな」

恭司がこの幻想郷に来たことで外の世界でのシンクロに関する技術の喪失。

次にシンクロが生み出されるには不動博士がモーメントを開発研究するしかない。

既に正史から大きく外れている。

頭をがしがしと掻き、眼鏡を外してノートパソコンを閉じた。

「ちよつと輝夜とマリカーしてく……………ぶべっ！ な、何すんだよ！

妹紅！」

炬燵から出て遊びにいこうとしたら、オーバーオールを掴まれ強く引つ張られて転び顔を打ち付けた。

最近妹紅を普通に呼ぶようになってる。

「あんな奴のとこ行かないでいい」

二人きりになるのが気に入くない。

「俺は64のマリオカートをやるんだい！ H A N A S E !」

必死に玄關に向かおうとしているが炬燵に引き摺り戻される。

「そんなの別にいいじゃん。四人でまったりしてようよ」

炬燵内部で三人の足が逃がすまいと恭司の足に絡み付いてくる。

「う、動け俺の足！俺の足、何故動かん！」

何か木星帰りの男みたいだった。

必死に這いずっている。

「分からないでしょ。ただ輝夜の元に行こうとする恭司には、炬燵の中で起こっているこの出来事に」

がんじがらめにされているが、早苗の足だけ太ももの辺りを擦っている。

「くっ、間違いなく早苗はセクハラ女王。エロさに定評のある早苗とか言われればいいんだ」

それでもじたばたして諦めが凄く悪かった。

「ふふん、革命だ！」

6を4枚出している。

「このタイミングで革命してくるとは」

仕方ないので行くのを諦めて仲良くトランプで遊んでいる。

カードゲーム全般での運の良さは運命や奇跡を凌駕するチート。

「UNO上がり」
スキップ多用して綺麗に上がっている。

「強すぎます!」
ドロー2やらドロー4やらで直撃をくらった早苗の手札はとんでもない枚数。

「じゃあなー、早苗。諏訪子さんと神奈子さんによろしく言っておいてくれ」
楽しく遊んでいるとすぐに夕方になってしまい、山の上に帰る早苗を見送っている。

あの早苗暴走事件から少しして二柱の神が謝りに来た事で仲良くなっている。
特に気にしていなかったので快く許し、丁重に持て成した事で気に入ってもらえたようだった。
しかしまだ山の上の神社には一度も行っていない。
ぶっちゃけ妖怪の山にびびっている。

「わかりました。また明日来ますねー」
それが当然のように言っただけで飛んでいった。

恭司は何だかんだ言っているが早苗を友人的な意味で気に入っている。

「見えた！ …… ノン！」

家の中から出てきた弾が恭司の後頭部に綺麗にヒットした。

何が見えたのかはご想像にお任せする。

だらだら過ぎる冬の一幕。

寒さのせいで引き籠もった決闘者は出かけようとしなない。

その内に氷精が迎えに来るかもしれない。

続く。

雪掻きのKノ赤いマフラー（後書き）

外から来た二人がだんだんレベルアップしている気がする。

DT6が並んでいたので団結欲しさに10回カード購入。

デイサイシブのシクとフアランクスが出ました。

団結は当たりませんでした。

デュエルディスク、電卓とカードだけであの値段は高すぎる。

紅い館のR / オーバーキル (前書き)

ある意味禁じ手。

こつこつ稼いだ好感度の成果。

オーバーヒート。

紅い館のRノオーバーキル

はい、現在は紅魔館近くの湖に来ております。
正式にはチルノに連れてこられました。

「チルノは元気だねえ」

黒のダボダボなコートを身に纏い、赤いマフラーに手袋を装着している。

マフラー以外は香霖堂で購入した物。

「おい、キョージー！ 見ててねー！」

楽しそうに手を振ってくるので、手を振り返してあげたりしている。

氷で何かを一生懸命作っている。

「で、君は行かないの？」

一緒に見ていたサイドポニーで緑の髪の妖精に聞いてみた。

「は、はい」

もじもじしている。

どこかで見た覚えがあつたが思い出せない。

「ただこうしてるだけだと寒いな……。かまくらでも作るか」
今は降っていないが雪なら腐る程ある。

雪を集めて女の子と一緒に作り始めた。

「……で、俺はこう言ったんだ。『9・8秒……それがお前の絶望までのタイムだ』ってな」

サイドポニーの妖精……大妖精と一緒に作りながら話をしている。

リスペクトしている照井さんの真似をした事があるらしい。

「ふふつ、恭司さんってやっぱりいい人ですね。チルノちゃんも気に入ってるみたいですし」

大人びてるなあ、と思いながら見ている。

「大ちゃんも優しいし可愛いよ。初対面の俺の事手伝ってくれてるしさ」

一緒に作った事で半分くらい完成している。

土が混じらない綺麗なかまくらが出来上がっていく。

「か、可愛い……。あれ？ 私達、結構前ですけど会ってますよ？」
最初は照れていたが、初対面と聞いて不思議そうにしている。

「あ、あー。あれだお菓子あげた娘か」

「違います」

かなり失礼だった。

若干ムツとしているのがわかる。

「すまん、突き抜けた連中ばかりで君のようなおしとやかで可愛い娘と会っても忘れちゃう」

鬼とか吸血鬼とか蓬萊人とか。

色んな妖精にお菓子を配布してイタズラを回避しまくっているのも原因の一つ。

「もう……。秋に私が気絶していた時に手当てしてくれたじゃないですか」

妖精にはあまり必要のないものだと思ったのは少ししてから。

来てすぐの頃にお菓子を与えて紅魔館への行き方も聞いていたはずだが互いに忘れてる。

「あー……。あつ！ あの子か！ いやー、そうだったのかー」
弾幕ごっこに巻き込まれたのかと軽く手当てをしてあげたのを思い出したようだ。

最近妖精からお菓子をくれる人間と認識され始めている。

悪戯しそうな妖精にはクツキーを、目的地まで付いてくるだけの妖精には飴を与えているからかもしれない。

色んな妖精を見すぎて訳が分からなくなっている感も否めない。
ちなみに恭司はいつか銀河の妖精に会いたいと呟いていた。

「あの時はありがとうございました」

ぺこりとお辞儀をする姿は可愛らしいが、やはりというか妖精だけあってチルノと大きさはあまり変わらない。

「俺は女の子の味方だから」

男には厳しいけどな、と笑いながら言っている。

何だかんだ喋りながら、かまくらを完成させた。

中に入ると外に居るよりは暖かく、持ってきておいたタオルを二人分敷いて仲良く座った。

「今日はいい天気だからあの本に書いてあった妖怪出てこないかな」
レティ・ホワイトロックについてしっかり見ていたので警戒している。

寒さにも弱いから間違いなく恭司の天敵だった。

「あの、恭司さん。お菓子って貰えないですか？」

恭司の服の裾を掴んでもじもじしていて可愛らしい妖精だった。

「じゃあ、チルノも呼んでおやつにするか。おい、チルノ」

何かしているチルノを大声で呼ぶと、こちらを振り向き目をキラキラさせて飛んでくる。

「そうだ、キョージ！ あたい、デュエルの事がんばったよ！」

見て見て！とデッキの束を渡してきた。

あれこれ詰め込んだ現実で言う紙束状態。

「そうか。ようやく見せてもらえるんだ」
今まで何回も会っていたが、今回ようやく見せてもらえる。

デッキを一通り見てそして最初に出来なかった説明をしつかりしてから、デッキの組み方を手取り足取り教えている。
まだシンクロモンスターは渡す事が出来ない。
どうしても渡すことに躊躇いがある。

「春になったらデュエルしような」
雪の降る中だとカードが濡れてしまっし、落としたら大変な事になってしまう。

「うん！」
嬉しそうに笑っている。

手袋を外して頭を撫で撫ですると手が冷たくなってきた。

「じゃあ、お菓子食べようか。もう少し素材があれば色々作れるんだけど」
チルノにタオルを渡し、真ん中にもタオルを敷いた。

そのタオルの上にチョコチップクッキーや購入した煎餅、固まりかけているプリンを乗せた。

そのまま楽しく話をしたり、三人で出来るちよっとしたゲームをし

たりと楽しんでる。
そしてある話題が出た。

「里では今、野菜で作ったお菓子が人気なんだよ」
色々な物で作る恭司のお菓子は珍しく、子供経由で大人達にも広まっている。

南瓜を使って作ったお菓子が特に人気。

「野菜で、ですか？」
訝しげに見てくる。

野菜のお菓子が想像できないのか可愛らしく考え始めた。

「ああ、そうだよ。今度持ってきてあげるから」
考えている姿を穏やかに微笑みながら見ている。

その姿は優しいお兄さんに見える。

「わあ、嬉しいです。約束ですよ？」
小指を出してきたので指切りを試みたが、とても懐かしかった。

「指切りしたから忘れないよ。しかし大ちゃんはいいい子だよね」
遊び疲れたのか寝てしまったチルノに膝を貸している姿を見て言った。

「チルノちゃん、いつもより張り切っていましたから」

氷が何個も湖に浮かんでいる。

「そうか。……よっと、そろそろ行くよ。また今度な？」
カバンを持ち、大妖精の頭をぐりぐり撫でてかまくらから出ていった。

「さあ、俺の時代が来たようだ。ハイパー二人羽織タイム」
紅魔館の門前で寒いのに寝ている美鈴に近づいた。

サイズが普通に大きすぎるダボダボなコートの前を開けて美鈴を包み、自分はフードをかぶる。

「……………」
そしてコートのポケットからクッキーを取り出して口に近づけてみた。

「おいしいです……………」
寝ているのに器用に食べている。

何か楽しくなって何回もやっているとはんぱんと肩を叩かれた。
そのまま美鈴ごと振り向くとにこやかで素敵な笑顔の十六夜さんが居られた。

「美鈴、素敵なコートね。その中身を戴こうかしら」
ビクッとコートの後ろ側が反応している。

美鈴は流石に起きたようだが咲夜を見て顔面蒼白。

「ね、寝てませんよ！ ……な、何か動きにくいですけどあったかいです！」

わたわたしている姿が可愛らしい。

そして自分の状態に気づいて驚いている。

「ふふふふ……。美鈴、寝ている間に取り込ませてもらったぞ」
耳元から聞き覚えのある声で暴露される寝ていた事。

「恭司さん！ 私、寝てないですよ！」
焦りながらコートの前を外そうとするが、手がコートの中でうまくいかない。

「まあまあ、落ち着いて」
またクッキーを口元に持っていく。

「あつ、ありがとうございます……じゃないですよ！ 早く離れてください！」
クッキーを食べ、改めて密着しているのに気づいて顔が赤くなっている。

「貴方達、私がいるの忘れてない？」
二人がイチャイチャしているのを咲夜がジト目で見ていた。

「美しいお嬢さんもお一つどうぞ」

クッキーを咲夜の口元に運んだ。

開き直っているのか、美鈴を盾にしているからなのか大胆になっている。

「あ、あーん」

思わず口を開けてしまう。

咲夜のペースを乱すことに定評のある恭司。

「十六夜さん、それは俺の指です」

クッキーごとはむはむされてくすぐりたい。

うらやまけしからん。

「あ、ごめんなさい……じゃないわよ！」

恭司フィールドに囚われていた自分に気づいて顔が赤くなっている。

「ふふふ、二人羽織って楽しいな。美鈴が前だから何言っても怖くないぜ！」

何か凄い最低だった。

「あ、それはずるいですよ！ それなら私が後ろに！」
当初の目的からずれている。

ワーワー騒がしかった。

「……とにかく恭司は出てきなさい。お嬢様とパチユリー様が待って……あ、こちら！」

パチユリーと聞いてコートキャストオフし、全力で逃げ出した。

先日ホムンクルスを作るからと、パチユリーに性的な意味で襲われたのがトラウマになっているらしい。

「あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！『俺は咲夜から逃げ出したと思ったら、目の前に咲夜がいた』。な……何を言っているのかわからねーと思うが俺も何をされたのかわからなかった……。頭がどうにかなりそうだった……催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……」

今は首根っ子掴まれている。

咲夜の世界に入門しても勝てない事は明白だった。

「ほら、行くわよ」

容赦なく引きずっていく。

扱いがだんだん荒くなっている気がする。

「やめろお！マジで助けて美鈴！俺の天使ー！」

必死に手を伸ばして助けを求めている。

「えへへ、恭司さんの匂いがします」

残されたコートを着てニヤニヤしているので、コートを着ていた本体のピンチに気づいていない。

そのまま館に引きずられていった。

「こうなったら覚悟を決めるしかない。一応持ってきてはいるんだ、襲われたらデュエルで決めればいい」

地下図書館前をうろろして既に二十分くらい。

勇気ある誓いと共に中に入った。

「……………」

デュエルディスクを装備して歩いていく。

前回食らった小悪魔のハートトラップを警戒している。
ちよつとそれを思い出してニヤニヤ。

しばらく歩いていくとパチュリー以外に紅魔館の主だった面々がデュエルディスクを付けて勢揃いしていた。
美鈴までいるのは咲夜的能力で先回りしたからかもしれない。

「来たわね。外来の決闘者、私達全員を同時に相手してもらおうかしら」

6対1とか無茶苦茶な事を言ってくるレミリア。

「それはひょっとしてギャグで言ってるのか？」
耳を疑い、流石に聞き返した。

3人同時ならアカデミア時代にやったが、流石に今回は無理だと考えている。

「本気よ。これを拒絶するなら館から出さないわ」

咲夜と美鈴がサツと構えており、勝てる気しないはず。

「……で、俺が負けたらどうするんだよ」

退路は塞がれ、通常戦闘では勝てるはずがない。

そんな変則デュエルをするにも何かしら理由があるはずだと、とりあえず聞いてみた。

「私達が勝てば貴方を従者にするわ。ずっと言ってるけど貴方みたいな能力者が欲しいのよ」
真剣な表情でこちらを見ている。

今までずっとレミリアからの誘いは冗談だとばかり思っていたので驚いている。

「……そうか。で、俺が勝った場合は？」

やるなら勝ちに行きたいし、貰えるものは貰いたい。

「……えっ？ ちょ、ちょっと待ってなさい！」

考えていなかったらしい。

円陣を組み皆でひそひそ話し合っている。

十分後。

「決まったわ。恭司が勝つたら……って居ないわ！ 咲夜！」
当たり前だが既に逃げ出している。

レミリアの声に咲夜が頷いて一瞬で消えた。

「お嬢様、捕まえました」そしてすぐに現われたと思うと、恭司の襟首を掴んで連れてきていた。

「図書館で迷っていないければ……」
門に到着した時に捕まったらしい。

咲夜の姿を視認した時は本気で怖かったようだ。

「逃げたから恭司が勝つた時の何かはなしよ」
レミリアは普通に怒っていた。

パチュリーは期待した視線をチラチラと向けてくる。

「仕方ない。なら美鈴にちゅーしてもらっからいい」
もちろん頬にしてもらっつもりで言った。

「ええっ!?!」
いきなり言われてびっくりしている。

「ふふん、それくらいならいいわ。さあ、始めるわよ」
レミリアの独断。

皆デュエルディスクを起動させた。

「よし、ご褒美ぶらさげられてテンション上がったわ」
デュエルディスクを起動させ対峙した。

ワイシャツにマフラーだけでとても寒そう。

「「「「「デュエル!」」」」」

「俺のターン、ドロー」
いつもより真剣に手札を確認。

対複数戦を考えたデッキのようで、どうするのかを即座に決められる。

「モンスターをセット、さらにカードを二枚セットしてターンエンドだ」

次に回ってくれば勝ちだが表情には出さずエンド宣言。

「私達のターン、ドロー！」

省略したいらしく、バトルフェイズは個々だがメインフェイズは一緒に進むようだ。

1対6のバトルロイヤル、フィールド・召喚権・LP等は各自別々とかなり不利な戦い。

こうでもしないと引つ繰り返される可能性が高いと考えてレミリア達が決めていた。

恭司のLPは24000だがこの面々相手には少ない。

「永続魔法・ミイラの呼び声を発動。手札からヴァンパイア・ロードを特殊召喚、そしてヴァンパイア・ロードを除外してヴァンパイア・ジェネシスを特殊召喚するわ」

ATK3000

レミリアは最初から全力で来ている。

手加減などしないし、するつもりもない。

人の命は短い、従者にして咲夜との間に子を作らせてその血筋の者を連綿と従者にしようとか、未来の事を考えている。

「フィールド魔法・死皇帝の陵墓を発動。LPを10000支払いブラック・マジシャン・ガールを召喚。そして魔法カード、賢者の宝石でブラック・マジシャンをデッキから特殊召喚するわ」

BMG

ATK2000

ブラック・マジシャン

ATK2500

パチュリーは勝てば別件でレミリアから恭司を借りる事が出来るので当然加減等しない。

仲間に有利なフィールド魔法を張るくらいに考えている。

「私はE・HEROヘル・ブラットを特殊召喚、ヘル・ブラットを生け贄に捧げてE・HEROマリシヤス・エッジを召喚します」

ATK2600

小悪魔はパチュリーに従い追い詰めていく。

個人的に不思議と惹かれる物がある恭司と同僚になるのもいいかなくらいの考え。

「モンスターをセット、カードを四枚セットして私はターンエンドです」

美鈴は守りに入っている。

一撃で致死量の反射ダメージを与える、ある意味一撃必殺狙い인데ツキ。

武の基礎を底上げしている師であり、一緒に馬鹿な事をする友であり、最近意識している異性でもある恭司が館に来てくれるのはとても嬉しい事で絶好調である。

「LPを2000支払って、アルカナフォー스XXI - THE WORLDを召喚させてもらいますわ。……当然正位置」

ATK3100

咲夜が強力な正位置を出すのは流石と言うべきか。

前にレミアからいずれ子を作って欲しいと言われた相手が目の前に居るが一切の動揺はない。

人間同士、とんでもないスペックを持った二人の子はどんな事になるかは気になる。

「ダーク・ホルス・ドラゴンを手札から捨てて、ダーク・グレファアを特殊召喚。ダーク・グレファアの効果で手札から終末の騎士を捨てて、デッキからネクロ・ガードナーを墓地に送るよ。そして墓地に闇属性モンスターが三体だからダーク・アームド・ドラゴンを特殊召喚」

ダーク・アームド・ドラゴン

ATK2800

ダーク・グレファア

ATK1700

フランは複雑な胸中だった。

恭司はどこかしらに縛られてほしくないと思う反面、ずっと一緒に居て欲しいと思っている。

故に破壊効果は使わず真正面からぶつかるようだ。

「私からね。セットしたモンスターに攻撃するわ、ヘルビシヤス・

ブラッド！」
レミリアの攻撃宣言でヴァンパイア・ジェネシスがセットモンスターに襲い掛かる。

「サイバー・ラーバアだ。戦闘破壊された事でデッキからサイバー・ラーバア1体を特殊召喚する」

DEF600

機械で出来た虫のようなモンスター。

「ブラック・マジシャンで攻撃。黒・魔・導」
パチュリーが攻撃宣言をするが、恭司はニヤリと笑っている。

「フィールド上で表側表示のサイバー・ラーバアが攻撃対象に選択された時、このターン戦闘によって発生する俺への戦闘ダメージは0になる」
サイバー・ラーバアは破壊され、再びデッキからリクルート。

「パチュリー様、次のターンも使われたら困りますよね。マリシャス・エッジで攻撃、ニードル・バースト！」
小悪魔がカットインし、目が合いウインクされた。

「ああ、可愛い……はっ！」
そんな小悪魔に心奪われる所だった。

いや、奪われていた。

フランと咲夜はバトルを行わず、美鈴とフラン以外はカードを一枚ずつセットしてエンド宣言をしていた。

「ラストターン、ドロー」

皆一様にラストターン？と不思議そうにしている。

「……罨カード、和睦の使者を発動」……」

美鈴とフラン以外はキメラテック・オーバー・ドラゴンによる1k i111を警戒して和睦の使者を伏せていたようだ。

考え方は良かったが、たまに型にハマらないデッキを作るのが恭司。

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ！ 罨カードオープン、チェーン・マテリアル。このカードの発動ターンに融合召喚を行う場合、融合モンスターによって決められたモンスターを自分の手札・デッキ・フィールド・墓地から選択してゲームから除外し、これらを融合素材とする事ができる。このカードを発動したターン攻撃する事はできず、この効果で融合召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される」

皆それがどうしたんだという顔をしており、既に自分達の負けが決定した事に気づいていない。

「セットしていたパワー・ボンドを発動し、キメラテック・オーバー・ドラゴンを指定する」

デッキ・墓地からカードをどんどん除外していく。

サイバー・ラーバア 3
サイバー・ドラゴン 3
プロト・サイバー 3
サイバー・ドラゴン・ツヴァイ 3
リフレクト・バウンダー 1
サイバー・ダーク各 3

そして攻撃力35200のキメラテック・オーバー・ドラゴンが融合召喚された。

攻撃できなくても凄まじい威圧感を発している。

「恭司、血迷ったのかしら？ 攻撃は出来ず、さらに私達は和睦の使者を使っているのよ。自分から負けを認めるつもり？」
レミリアの発言に恭司は口角をやや上げて笑った。

「ご褒美をぶら下げられた恭司が負けるはずがなく、相手の懐にある勝利をもぎ取っていく。」

「いいや、俺はもう未来をこの手に掴んでいる。手札から魔鏡導士リフレクト・バウンダーを通常召喚。そして、魔法カード・モンスターターゲットを発動。リフレクト・バウンダーをリリースし、通常召喚可能なモンスターが出るまで自分のデッキをめぐりそのモンスターを特殊召喚する。他のめくったカードは全て墓地に送るけどな」
因果独断、パワー・ウォール、未来融合、パワー・ボンド………カタパルト・タートル。

「カタパルト・タートルを特殊召喚する。これで俺の勝ちだ……が、駄目押ししてやつをしてみようと思う。速攻魔法、リミッター解除を発動。これでキメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃力は二倍になり、70400に跳ね上がる」

キメラテック・オーバー・ドラゴン

ATK35200 ATK70400

カタパルト・タートル

ATK1000

ハッと何かに気づいたパチュリーが青冷めてガタガタ震え始めた。カタパルト・タートルの効果を思い出したようだ。

「カタパルト・タートルの効果発動。自分のフィールド上に存在するモンスター1体をリリースし、そのモンスターの攻撃力の半分をダメージとして相手プレイヤーに与える。……これはあまり使いたくなかったんだが、1対6だから仕方がないよな。キメラテック・オーバー・ドラゴンをリリースさせてもらおう」
そう宣言すると同時にカタパルトから撃ち出された。

そして撃ち出されたキメラテック・オーバー・ドラゴンが六人に降りかかり、35200のダメージがダイレクトに与えられた。

あまりのダメージにみんな座り込んで動けず、叫ぶことさえ出来ない程の威力だったようだ。

「レミリア、俺の勝ちだな」
ソリッドヴィジョンが消え、ただ一人立っている決闘者。

「くっ、まさか六人でかかっても勝てないなんて……」
立ち上がり、悔しそうに睨み付けてくる。

降ってきたカメラが怖かったのか涙目だった。

「まあ、引きがよかったから。それにこうでもしないと六人相手には勝てんよ」

ケラケラと笑っているが顔が赤く、頭がふらふらしている。

「え、えつとですね。目を閉じてもらえると嬉しいです……」
復活した美鈴が指先をいじり、もじもじしながら近づいてきた。

すぐにご褒美が貰えるらしい。

「おおっ、ご褒美か……ムグッ」
目を閉じ、ワクワクしながら美鈴に頬を向けている。

しかし肩を掴まれて美鈴の方を向かされ、何事かと目を開けると目を閉じた美鈴に頭を掴まれ唇を奪われた。
ズキュウウウウン！という効果音が入りそうだった。
互いの立ち位置が逆だが。

「ん……え、えへへへ」
たっぷり三十秒程唇を合わせてから離れていった。

真っ赤になり頬に手を当て、いやんいやんと首を振って暴走している。

この数か月、色々やった事で好感度がかなり高くなっていた美鈴。日々の積み重ねの結果がここで出た訳ですね、わかります。

「……………」

予想外の行動に啞然としていたが、限界が来て倒れこんだ。

目を回し湯気が出るほど真っ赤つかである。

「凄く熱い……。お嬢様、熱を出してます」

咲夜が倒れた恭司の額に手を当て、レミリアにそう告げた。

毎日毎日寒空の下で雪掻きや買い出しやらしていれば風邪を引いて熱くらい出す。

確実にとどめは美鈴だけだ。

「いつもの部屋に連れて行って寝かせなさい。明日も熱が酷かったらあの薬師の所に連れていかないとダメね」

レミリアの冷たい手が気持ちいいのか、額に触れると少しだけ心地好さそうだった。

コートを着ておらず、上半身がワイシャツにマフラーだけの今の格好もまずい。

ある冬の日の出来事。

起きたらきつと忘れていること褒美。

爆発すればいいのに。

続く。

紅い館のRノオーバーキル（後書き）

米版のシクはあんな綺麗なのに、日版のシクは何で微妙なんだろ。

孔明スリーブを買ったから畏のみのデッキを組んでみた。
勝ち筋が見えない。

本当に怖い永琳の試薬の副作用（前書き）

セクハラをされる。

セクハラをされる。

鋼鉄ジグ。

本当に怖い永琳の試薬の副作用

永遠亭から出られなくなった。

これは間違いなく永琳のせい。

半分くらいは自業自得かもしれないけど。

「……で、これはいつ治るんだよ」

どこかで聞いた覚えのある凜とした声。

そう、俺は今

「女の子ライフを楽しみなさい。私も治せるように善処するから」

女の子になっていた。

原因はこの前飲んだ薬の副作用らしい。

謝罪を要求したら開き直られ、嬉々として色々されたのは早く忘れたい。

何よりも能力が使えない今追い出されたら死ねる。

「善処じゃなくてがんばってくれよ……。しかし、色違いの乙女さんになるとは」

鉄乙女を黒髪黒目にした、まさに2Pカラー。

声も見た目もそっくりで初めて鏡を見た時は啞然としていた。

「恭司。今日はこれ、これ着よう?」

キラキラした目で鈴仙が自分の服を持って来ている。

断るとしょんぼりして心が痛むってレベルじゃなくなるのが困る。

「あのね、鈴仙。俺は風邪を治すために……」
優しく断っている。

紅魔館で倒れた翌日、下がらないどころか酷くなった熱。
立つこともままならなかった恭司は咲夜によって永遠亭に運ばれていた。

「でもすぐに治ったよね? その薬の副作用でこうなっちゃったんだし」

苦しみのあまり、いつそ殺してくれと頼むくらいに酷い熱だった。

そして永琳の差し出した試薬を躊躇いもなく飲み今に到る。

「うぐっ……。だけど俺、変態じゃないから女の子の服を着るのはちょっと……」

今までの服を着ていて、胸もさらしをきつく巻いて目立たないようになっている。

鈴仙に着せ替えられた姿をてゐに撮られてから女物の服を着るのが嫌で嫌で仕方がない。

写真は文の手に渡る前に奪還したのでセーフ。

「今は女の子だから大丈夫だよ。だから、ね？」
今は同性だからなのかやたら強気な鈴仙。

綺麗な赤い瞳が今日は怖い。

「あらあら。恭司、大変ねー」
他人事だからニヤニヤして見ている永琳。

「う……永琳にセクハラされたって輝夜に言い付けてやるー！」
走って逃げていった。

有耶無耶に出来てよかったのかもしれない。

「あつ、待って！ 絶対似合うから！」
追送の鈴仙。

自分とお揃いの服一式を持って追いついていった。

「何でかしらね。今の恭司もイジメたくなるわ」
『は』ではなく『も』だから性質が悪い。

嬉しそうに二人が去っていった方を新しい玩具を買ってもらった子供のような笑顔で見っていた。

「ねえ、恭」

襖を開けてすぐに閉じた。

輝夜が女物の服を持って待っていた。

「俺が玩具になっている……だと……？ これは由々しき事態だ」
悩んでいるとスパーン！と襖が勢い良く開いた。

「いきなり閉めないでこれ着てよ！ ……って痛い痛い痛い！」
銀様が着ていた服を持って笑顔で出てきた。

どうやら香霖堂で購入したらしい。

「うおおおっ！ 恭司ブリーカー！ 死ねえ！！」
そんな輝夜に抱きついて締め上げている。

二次 でアレを初めて見た時に啞然としていた。
主人公が死ねえ！って……。

「うう、本当に死んじゃうかと思った……」
腰周りを撫でて涙目な姫様可愛いです。

「次にあんな服着せようとしたらヒルデガンみたいにするからな」
上半身と下半身に分けるとかなにそれグロい。

「だってお約束じゃない。こんな非現実的な事が起きてるんだから
手をわきわきさせながら近づいてきた。」

セクハラをする親父のような目で身体を舐め回すように見てくる。

「寄るな、近づいてくるな」

自然と両腕で自分の体を抱き締めて距離を取っている。

「だが断る。その胸に突った脂肪の塊を私に差し出しなさい」
目がとてもいやらしくなっている。

セクハラ大魔王の悪影響がこんな所で出ていて、間違いなく因果応
報だった。

「何でそんな目をしてるんだよ。……ひゃっ！ や、やめろ！」
輝夜が抱きついて胸を鷲掴みにしてきた。

どうやったのか一瞬でさらしまで外されている。

「くっ、男に負けるなんて……」
悔しそうに、しかし楽しそうにむにむにと揉みしだいている。

大きさは鈴仙くらい。

「ひっ！ や、やめろって！ このっ！」
好き勝手に揉んでくる腕を掴んでやめさせた。

頬を朱に染めて少し呼吸が荒くなっている。

「あら、どうしたの？ 今のはただのスキンシップよ？」
ニヤニヤして、まだ手をわきわきさせている。

「……姫さん、最初に会った時よりイイ性格になったよな」
恭司の影響です。

横目で見ながらさらしをきつく巻いていく。

「それは間違いなく恭司のせいね」
最近やらなくなった妹紅との殺し合いといい、色んな影響を受けている。

「左様で。やっぱり胸は男の状態で見たりするのがいいや。揺れるし足元見にくいし邪魔で仕方ないわ……いひゃい」
イラッとした輝夜がぎゅーっと頬を引っ張っている。

「それは嫌味かしら？ 私のは小さくて揺れないって事？ 足元なら見やすいわよ？」
力がだんだん強くなっていき、額に青筋が浮かんでいる。

「ひいひいっ！？」
凄く怖い表情の輝夜と頬に走る痛みに涙目になっている。

三十分後

「すすすん……もうお婿に行けない……」
涙目で、荒い呼吸に赤い頬。

あの後すぐにさらしを奪われ、これでもかと胸を揉まれ続けていた。

「何か癖になりそうだな。ひゃん！とかやだあっ！とか可愛い声出してたし」

そんな事をニヤニヤしながら言う輝夜も結構。

「うう、汚されちゃったよう……」
背を向けてさらしを巻いている。

視線を感じ、ふと襖を見ると隙間から赤い瞳が覗いていた。

「あ」

鈴仙が覗いていたようで、気まずそうに目をそらされた。

「……恭司ブリーイイイカアアア！死ねええええええ！！」
鈴仙に見られていた事に気づき、顔を真っ赤にし涙目のまま輝夜に突進して締め上げていく。

「はうあっ！死ぬっ！本当に死んじゃうううっ！！」
輝夜がヒルデガンになりかけている。

臓物をぶちまける！とばかりに力を入れていく。

「き、恭司！落ち着いて！私は何も見てないから！」

このままだと姫がてけてけになつてしまつ、と焦つた鈴仙が入つてきて止めようとしている。

「嘘だツ！」

信じられないようで、やたら迫力があつた。

「ほ、本当だよ？ やんっ！とかダメえっ！とか聞いてないよ？
本当だよ？」

頬を赤くし、目を合わせようとしなない。

どう考えても全部見られてます、本当にありがとつございました。

「うわああああっ！ てるよのバカあああああ！！」
あだ名で呼んでさらに力を込めていく。

最初から見られていた事を信じたくなくなつた。

「ふ、ふふっ……。わ、私が死んでも第二、第三の私が現われ……
ぐふっ！」

そのまま気絶してしまつた。

「恭司、大丈夫。私は気にしないから」
肩をぽんぽんと叩いて慰めてくれている。

「ううっ」

体育座りで落ち込んでいる姿が似合つ。

早く男に戻りたいと本気で思っているが、それがいつになるか。

「さ、服を着替えて気分転換しよう？」

ワイシャツにネクタイ、ブレザーにスカートとお揃いの服を見せている。

「え？ いや、それはちょっと……」

中身が男の子人以上、女装するみたいで嫌だった。

見た目は女の子でも心は紳士とか手に負えない気もする。

「てゐなら居ないから平気だよ？ 私の部屋で着替えようね」

腕を掴んで立ち上がらせ、そのまま自分の部屋まで連れていく。

鈴仙の部屋

「うう」

結局上目遣いで着てくれないの？と言われ渋々着ている。

慣れるはずのないスカートにもじもじしている。

「えへへ、お揃いだね」

幸せそうに腕を組んでいる。

男や女ではなく、鉄恭司という個人が好きなので性別を気にしてい

ない。

「……鈴仙が嬉しいならいいか」
もう諦めがついたようだ。

「あ、そうだ。女の子なんだから名前も可愛いのにしよっ?」
名案だとばかりに微笑んでいる。

「いや、恭司でいいじゃないか。身は女だが心は男だし」
そのせいで精神と肉体の釣り合いが取れず、夜中に不安で泣いていたりするのは秘密。

「それなら恭か司は?」
あくまで名前に拘りたいようだ。

鉄恭、鉄司どちらのがマシか。

「つかさつていいなディケイドみたいだし」
基準がライダーだった。

「私は斗貴子を推すわ」
いつのまにか輝夜が入って来ていた。

「てるよさんの意見は聞きません」
散々辱められて怒っている。

「さっきまであんなに可愛かったのに」
ぼそっと呟いている。

「鈴仙、お前の主人が百合な道に目覚めそうだと。修正して上げないと」

「え？ でも姫様だから」
目覚めても全肯定するようだ。

「恭司……いえ、私がこんな事するのは斗貴子だからよ！」
「ババーン！」

「ババーン！じゃねーよ。それと斗貴子言っつな」
「スパーン！」とスリッパで輝夜の頭を叩いた。

輝夜にこんな事が出来るのは恭司くらいだった。

「ギャーギャーワーワーと今日も永遠亭は騒がしい。」

永遠亭の常連になりつつある恭司。
専用の個室が作られる日も近い。
そして女の子になってしまい、しばらくはこのままという大惨事。
名前はどうなってしまうのか。

続く。

本当に怖い永琳の試薬の副作用（後書き）

彼……彼女はしばらくこのまま行くけど名前はどっしよつか。

DTでヴァイロン・オメガとヴァイロン・アルファのシク出てワロ
タ。

そんなのよりもE・HEROガイアをください……。

やったね、つかさちゃん！名前がついたよ！（前書き）

誰かのトラウマを刺激しそうなサブタイトル。

遂にTGがOCG化。

テンション上がってジャンプ四冊買った。

彼に戻るまではデュエル不可な状態に追い込まれております。
しばらくはまったりとした永遠亭での日常。

やったね、つかさちゃん！名前がついたよ！

「よし、帰れ」

てると一緒に入ってきた文を見て間髪入れずに拒否した。

座布団に座って腕を組み、にこやかに告げている。

「そんな……。今日は普通にお見舞いに来ただけなのに……」
俯いていしょックを受けているように見えるが、カメラを手にしている時点で信用できなかつた。

「この前の早苗との婚約についての記事とか誰の仕業だったか胸に手を当てて考えてみる」

他にも紫と慧音にビンタされた写真を載せられたりと話題の中心にいつも恭司がいる。

「て、天狗です！ 天狗の仕業なんですよ！」

何か急に焦りだし、怪しさ爆発。

「お前がその天狗だろうがよ。射命丸さんよ」
ジト目で見ている。

今日の服も鈴仙がチョイスしたブレザー！。

男の時に着ていた服等は全て永琳に持っていかれている。

下着から服まで全て新しく用意された女物に変えられ、部屋に戻ってそれを見て絶望していた。

その絶望する姿を見て喜んでいた永琳が目撃されていたり。

「う……。お願いします！ 恭司さんを使った記事の新聞は好評なんです！」

ドタバタ珍道中だったり、シリアスに決めてみたりと飽きない人物。みんな今回は何をしたのかと期待して待っているようだった。

「俺じゃなくて早苗の記事にしるよな。あいつの常識を振り切った行動とか最高にクールだろ」

里では逃げる恭司を追う早苗が日常の「コマになり始めている。

「あの神様達に怒られちゃいますよ」
当たり前でしょ？ って顔にイラッ ときた。

「それよりもてゐ、お前何で買収されたんだ？ 鈴仙がここなら射命丸も来れないって言ってたぞ。誰かが手引きしない限り」
立ち上がり、じりじりと距離を詰めている。

「何の事が分からないウサ」
じりじりと距離を取っている。

両者向き合って

「さあ、お前の罪を……。数えろ！」

「今さら数えられるかウサ！……つかさになんて捕まらないよー！」
互いに全力で走って行った。

スカートが翻りばつちり見えているが、心は男なので気にすらしな
い。

五分後

「男の時と比べて腕力だけ落ちてるな。素早さは上がったけど、早
く戻りたいなあ」

てゐを捕縛し永琳の実験部屋に放り込んで戻ってきた。

さらしをきつく巻いているから走りやすいが、筋力などが若干下が
っている。

「あ、戻ってきましたね？」

文が座って待っていた。

「……仕方ないな。俺の事の代わりにクリスマスを教えてやるっ
胡坐で座布団に座っている。」

「うーん、今の可愛らしい姿について聞きたかったんですが……。
今回はそのクリスマスで我慢します」
パシャッとごく自然に撮ってから話を聞き始めた。

青年？説明中……。

「ってわけでプレゼントを渡したり、いい子にしていた子供の所に

はサンタクロースが来るわけだ。それとさっき撮った写真はネガごと渡してもらおうか」

久々に外の事を話すからか饒舌だった。

チキンを食べる発言で文が怒ったことを除けば満足してもらえたよ
うで、上機嫌でメモを取っている。

忘れずしっかりとネガを寄越せと手を出して要求。

「……それが三週間後にあるんですね。急いで新聞を作らないと！

ご協力ありがとうございますー！」

ネガを渡すなんてとんでもない！とばかりに無視し、風のように逃げていった。

啞然として逃げていった廊下を見ると、白目を剥いたてゐるが兎
達に運ばれていく姿が目についた。

どうやら狙い通りお薬の実験をされたようだ。

「ふっ、てゐに天罰降臨。……ってやばい、射命丸に写真撮られた。
女装趣味とか思われたら俺は死ぬしかない」

女の子になつてから涙腺が緩くなつており、変態扱いされるのを想像して涙目。

永琳の実験室

「恭司……つかさ、貴女は今日から弟子二号よ。働かざる者食うべ

からず」
部屋で打ち拉がれていたら無理矢理連れてこられていた。

「俺は恭司だ、つかさ言うな。それに家事はしっかりやってるんだが」
キッ！とした目で永琳を見ている。

輝夜、妹紅、永琳、慧音、鈴仙の会談により決められた女の子状態の恭司の名前。

朝まで討論した結果、皆が納得した名前がつかさだった。

「……また縛られて色々されたいのかしら？」
女の子初日のトラウマが蘇り、ビクツとして静かになった。

身体検査兼セクハラ地獄の記憶が蘇る。

「っ、つかさでいいです……」
かぁっと赤くなった顔が何が合ったのかを物語っている。

「それならいいのよ。それじゃあ、まずは
手取り足取りしっかり教え始めた。

「初めてにしては中々よ。筋がいいわね」
飴と鞭で伸ばすタイプらしい。

……その手がつかさの胸をまさぐっていなければ。

「あの、ただ後ろから胸揉んでただけじゃ……」
耳元で手順を説明してもらっていたが、成果は見えていない。

輝夜と永琳はそれはもうチャンスがあればスキンシップを測ってくる。

「私に身体を調べられる。それが今の貴女の仕事なのよ」
キリツとした顔で最低な事を言っている。

さらしは邪魔ね、と軽く外してしまうくらい変態淑女になってしまった。
われた。

「うわぁ、さっきと言ってることが違う。この家に居ると普通に貞操の危機を感じるわ……」
安全なのが風呂とトイレだけで、里には帰れないからどうしようもない。

「さぁ、続きよ。こんな事されてるのに出来たんだから凄いわ」
耳に息を吹き掛けたりとかなり楽しんでいる。

「ひゃんっ！ もうやめろよ！ うう、お家に帰りたい……」
危なくない調合とかをやっているので安全ではあるが、早く慧音の元に帰りたくて仕方がない。

「今の貴女は普通よりも強いだけの女の子よ。能力は使えず、デューエルでも引きが悪い」

まさに無力な存在で永琳達の庇護がなければ生きていけない。

「それはそうだけどさ……」

永琳に惨敗した日にカードも持っていていかれてしまい、最近触れていない。

「慢心して賭けに負けたんだから言う事を聞きなさい。それにここなら安全に生活出来るわ。私達が守ってあげる」

永琳との賭けは早く治す方法を見つける事、負けた場合は身体を自由に調べても構わないという事だった。

結果は自分が負けるはずがないという慢心が招いた敗北。毎日朝晩身体検査という名のセクハラを受けている。

「う……」

守ってあげるといふ永琳の真剣な声に照れている。

真剣な声で騙されかけているが、背後の永琳はニヤニヤしていた。

「だからこれくらいは平気よね？」

再び驚掴みされても抵抗しなくなっている。

寒いのにブレザーを脱がされ、上がワイシャツとネクタイだけだった。

「師匠、戻りました」

しかし鈴仙が帰ってきた事で、つかさは雰囲気流されそうになっ

た事に気づきぼんやりしていた頭を振っている。

永琳はチツと気づかれぬように舌打ちしてから手を離して振り返った。

「あら、今日は早いのね」

「ええ、早く見つかりましたから薬草などの品々を渡している。」

「じゃあ私の事は先輩って呼んでね？」

鈴仙はあの後すぐにつかさが居るのに気づき、弟子二号になったと知らされて喜んでくれた。

「はい、先輩」

色んな服を着せようとしてくる事を抜かせば、一番一緒に居て安心できる。

まず悪戯をされないのが大きい。

「つかさ、今日はもういいから部屋に戻りなさい。まだその身体に慣れた訳ではないでしょ？」

何故か永琳が優しかった。

ぶっちゃけつかさが鈴仙という時間を削りただけだが。

「う、うん。それじゃあ、また後で」
さらしを回収してとてちてとてちてと走って行った。

部屋。

「今日もえらいめにあつた」

さらしを巻き直し、エプロンを装着した。

部屋の掃除をしながらセクハラしてくる永遠亭のトップ二人を思い出して溜め息を吐いている。

「うーん、マジであるの二人おかしくなりすぎだろ。俺がいったい何をしたっていうんだ」

掃除が終わり、永遠亭の面々のほつれたり破れたりした服を修繕していく。

母親みたいになっている感が否めない。

「髪を短く切ったら髪を伸ばす薬とか作るし。里の爺様達歓喜すぎるな。かなり儲かるんじゃないか？」

髪が鬱陶しいとベリーショートにしてみたらてゐを除いた面々が激怒し、永琳が作った薬を無理矢理飲まされて髪を伸ばされた。

無駄に輝夜くらいに髪が伸びて余計に鬱陶しくなっている。

「……あれはめっちゃ怖かったなあ。唾然とした顔から般若のような顔に変わって肩を掴まれた時は殺されるんじゃないかと思った」
裁縫を終わらせてそれぞれの部屋に届けられるように綺麗にたたみ、妖怪兔達を呼んで持っていかせた。

昼食

「はいはい、喧嘩しない。好きな方選んで持っていきなさい」
昼食は二種類用意して好きな方を選ばせている。

人型になった妖怪兔達が我先にと押し合っているのを仲裁していた。

「今日はカレーうどんとカレーそばなのね。私はカレーそばにするわ」

永琳は物珍しさからカレーそばを持っていった。

「私はカレーうどんにするね」

「つかさ、月夜ばかりと思うなよ……」

鈴仙とてゐはニンジン多めのカレーうどんを持っていった。

酷い目に合わされたてゐが呟いていたがスルー。

「しまったな、うどんもそばも残らなかった」
自分とかなか来なかつた輝夜の分がない。

「ええっ！？ そんな酷い！」

輝夜は毎回楽しみにしているらしくショックを受けている。

「俺と輝夜のはこうしよう。これもおいしいよ」

冷やご飯を余ったカレーの鍋に入れ煮込んで和風カレー雑炊を作り始めた。

「はい、完成。愛情もたっぷり入れたぞ」

「本当においしそうね」

器に装い、スプーンを拝借して皆の所に運んでいく。

皆珍しそうに見てくる。

「まだ少しなら鍋に入ってるからどうぞ。ではいただきます」
食べずに待っていた皆にそう告げ、挨拶をして食事を始めた。

「はふっはふっ」

「あちちっ」

輝夜と仲良く食べている。

黒髪ロングな二人が並んではふはふ食べている、何とも和む光景だった。

「ご馳走様でした。食器と箸は流しに置いてね」
そう言っつて自分の食器を運んでいく。

誰よりも年下のはずなのにすっかりみんなの母親みたいだった。

縁側

「ふう、お茶がおいしい……」

冷たい水で食器を洗い、お茶を飲みながら休憩している。

その周りを寒そうな兎達が寄り添っていた。

「夕飯は……にんじん多めに入れた肉じゃがと漬物かな。糠漬けのやり方を婆様達に習っつておいてよかった」
洗濯以外の家事を任せられて毎日充実。

カードに触れられない事を除けば楽しい毎日だなと考えている。

「つーかーさー、早く来なさい」

輝夜の部屋から呼ぶ声が聞こえてくる。

いつのまにかゲームの相手をする時間になっていた。

「はい、今行きまーす！ よし、お前達も解散だ」

集まっていた鬼たちを軽く撫でて起こし、解散させた。

空の湯呑みを流しに置いて輝夜の部屋に駆けていった。

セクハラする二人にいつもと変わらない鈴仙とてゐる。

永遠亭のお母さんになりつつある恭司改めつかさ。

彼女が彼に戻る日は遠い。

続く。

やったね、つかさちゃん！名前がついたよ！（後書き）

やっとガイア当たった。

ジャンプフェスタ行けないからMとVは一般販売待ち。

今回の天使ストラクの豪華さは凄い。

ドラグニティの時のような事にならなくてよかった。

幻想郷縁起・英雄伝追記（前書き）

本棚の求聞史紀を引っ張りだして書いてみた。
書きにくさMAX。

MHP3rd、次回配信クエの依頼者はネギまのエヴァ様ですね。

幻想郷縁起・英雄伝追記

自由気ままな外来人

鉄 恭司 Kyouji Kurogane

職業 里での教師等

能力 札を操る程度の能力（*1）

住んでいる所 人里

八雲紫に連れられて幻想郷に来た外来人。

デュエルと呼ばれるカードを使ったゲームでは無類の強さを誇る。

気分屋で幻想郷が楽しいのかあつちに行ったりこつちに行ったりしているのが目撃されている。

性格

彼は自分がやりたいようにやる自由人。

彼を縛る事はまず出来ないだろう。

妖怪等の人外を惹きつける魂でも持っているのか、良くも悪くも遭遇する確率が高い。

誰に対しても優しく、敵意を見せない限りはすぐに親しくなれる。

食べ物を粗末にする者と女の子を泣かせる男が大嫌い。

能力

札の怪物や魔法・畏を実体化させたり、札にあらゆる現象を封じる事が出来る。

神すら封じる事が出来るらしい。

ただ、この世の理を無視する事は出来ない。(＊2)

普段彼はこの能力で野菜等の食材を保存しているようである。

強大な能力を便利に使いこなしているようだ。

尚、この能力の他に赤き竜と呼ばれる力を使うらしいが不明である。弱点としては能力を行使すると目が真っ赤に染まるので分かりやすい事と、発動までの時間がある事だろう。

日常

里で教師をしながら子供達と遊んでいる。

たまにふらっと居なくなつては色々な事をして新聞に載っているの
で既に有名人である。

里に来る妖怪鬼とかなり親しいらしく、よく楽しそうに会話をして
いる姿が見られる。

彼曰く、あんな子を嫁に貰える奴は幸せ。

彼以外の人間とも最近話をするようにになっているが、笑顔を見せ
るのは彼の前だけなのに気づいていないのだろうか。

迷いの竹林に住んでいる人間とも仲が良く、腕を組んで里内を引つ
張り回されてる姿をよく見かける。

彼女の性格も緩くなっているのか二人の笑い声がよく聞こえる。

甘味処でよく奢らされているようで、席に着くだけでいつものよ
ろしいですか？と言われるくらいの常連。

妖怪の山の上にある、守矢神社の現人神に追い掛けられている姿は
既に見慣れた光景。

そのせいで彼はしばらく里の男達に嫉妬されていたが、最近はなり
ふり構わない彼女の行動に同情されるようになっていた。

人里の昼下がり、凄く速さで走っている男女を見かけたら男の方が

無事でいられるように祈ってあげてほしい。
仕事

里での教師だが、外来人を博麗神社まで連れていく事もある。
外では有名だったらしく、外来人が興奮している姿がよく見られたりもする。

教師としての彼の教え方は上手く、その日の範囲が終わると語り始める彼の話はとても面白い。
彼が出掛けた場所

・博麗神社

彼が幻想郷に来て最初に逃げ込んだ場所。
妖怪相手に戦わずに逃げたのは良い判断だった。
八雲紫にやたらべたべたされたらしい。

・紅魔館

本当に紅いのかを見に行っただけ、とは本人から聞き出した事。
彼は左腕を千切られ死にかけた事でバーニング・ソウル（*3）が
覚醒、悪魔の妹を圧倒した。
新聞にも載っていたが信じられない事である。その事件からフラン
ドールに懐かれレミリアに気に入られたらしく、よく遊びに行っ
ているようだ。

甘えん坊のフランと言えるのは彼だけだろう。

・永遠亭

紅魔館で繋いでもらった腕だが、稀に激しい痛みを感じ診てもらった為に向かったようだ。

特に何も無かったと言っていたが間違いなく何かあったに違いない。

・魔法の森

アリス氏に聞いた所、彼女の家で家事をしていたようだ。

新しい人形を作るのに滞在していたらしく、彼女が見せてくれた人形は彼に少し似ていた。

実力

彼はとにかく逃げる事を最優先にする。

勝てる戦いしかしないが、時には無茶をして大怪我を負っている。

普通の人間と比べても高すぎる身体能力に彼の能力が合わさる事で上位の妖怪の相手も可能。

油断していたとはいえ、鬼である伊吹萃香を能力を使わずに地に沈めたのは様々な人妖に衝撃を与えた。

この事件以後は理性のある低級な妖怪は彼を避けるようになったようだ。

カードの精霊と呼ばれるものが見えるらしく、精霊界と呼ばれる世界にも行けたらしい。

外に居た時に幾度か世界を救ったらしいが真偽は不明。

カード

彼が扱うカードの一部を紹介する。

スターダスト・ドラゴン

星屑の竜。

キラキラと輝きとても美しい姿をしている。

破壊を無効にする力を秘めている白銀の竜である。

レッド・デーモンズ・ドラゴン

紅い悪魔の竜。

禍禍しくも美しいとは彼が言っていた事。

守る者を悉く破壊する力を秘めた竜。

ブラック・フェザー・ドラゴン

黒き翼の竜。

鳥のような姿にも見える。

彼に直接与えられるダメージを肩代わりする能力を秘めている。

実体化させるならこいつが最優先だと呟いていた。

エンシエント・フェアリー・ドラゴン

古代の妖精竜。

実体化すると唯一会話が出来る存在。

カードの精霊で彼にアドバイスをするようだ。

ブラック・ローズ・ドラゴン

黒薔薇の竜。

薔薇を模した姿をしている。

ありとあらゆるものを破壊する能力を秘めている。

(*1) 本人は札に封印・解放する程度の能力と言っていたがこちらのほうが正しいと思われる。

(*2) 死者の蘇生など。

(*3) 赤き竜の力を使い奇跡を起こす者らしいが、よく分からない。

おまけ。

「どうですか？」

膝の上に座った阿求が見上げてくる。

完成したと見せに来て、一緒に見ましようとして膝に乗ってきいた。

「よくわからんがいいと思うよ。でも人里に住んでる俺を載せてもいいのか？ 英雄伝は里に住んでいない人間を載せるってここに書いてあるけど。それと自分の姿が絵として載るのが恥ずかしい」
促されるままに流し読みして、細かい事を聞いてみた。

デュエルディスクを付けて腕を組んで目を閉じ、壁に寄り掛かって

いる姿が絵に描かれている。

「特別に載せる事にしました。絵は射命丸さんに貰った写真を見て描いたんです」
「ここにこしている。」

色々聞いて回り、写真を貰っていたらしい。

「しかしスクラップ・ドラゴンがなくて全俺が泣いた」
五竜しか載ってなく、本来のエースが居ない。

実体化させるとバラバラにされても、そのバラバラにされたパーツで蘇り続けるチートドラゴン。

「それは見せてもらってないからです」
居心地いいですねと座り続けており、兄に甘える妹のようだった。

「まあ、いいか。あつきゅん、そろそろ膝から降りてもらいたい。
またいらぬ誤解を受け……あ」
いきなり襖が開き、アリスが入ってきた。

サプライズで遊びに来たようで、素敵な笑顔で入ってきてくれたが
上海共々固まっている。

膝に乗せている 無理矢理乗せたに違いない やはりエリートロリ
コンだった 成敗！

「上海、懲らしめてあげなさい」

そんな想像をし、私が更正させないとして顔で上海に指示を出した。

「じゃ、上海！ これは誤解なんだ！ これは阿求が……！」

何か浮気がバレた夫みただった。

フライパンを持ってこちらに向かってくる愛しの上海に必死で弁解している。

既に阿求は膝から離れてお茶を飲んでいた。

「……」

ムツとした顔の上海がどんどん近づいてくる。

命令だからというだけではなく嫉妬もしているようだ。

「許してください！」

Oh, Japanese Do-Ge-Za!

だが許される訳がなく振り下ろされ、ゴン！という音がした。

「上海、ご苦労様。久しぶりね」

阿求に挨拶している。

用意されていた座布団に座り、恭司の湯呑みと羊羹に手をつけた。若干手を付けられていたのに気づいたのか、ほんのりと頬が赤い。

調律者はたんこぶを作って土下寝状態。

上海が部屋の隅まで引きずって行き、たんこぶを撫でている。

親しげに話す二人。

部屋の隅にでダウンしている調律者。

これはある冬の日の一幕。

幻想郷縁起・英雄伝追記（後書き）

紅魔館で熱に倒れるよりも前の話。

恭司が注ぐ上海への愛は、グラハムが注ぐガンダムへの愛に勝るとも劣らない。

でもロリコンではない。

MHP3rd、ジンオウガよりも砂漠のオタマジャクシみたいな奴のが強いと思う。

おかしな文ちゃん**と**狂暴な少女**(前書き)**

この作品の射命丸はこれを期におかしくなります。
捻る。

永琳の好感度鰻登り。

おかしな文ちゃんと狂暴な少女

「は？」

両手で湯呑みを持っている。

朝食後の団欒中に嬉しそうに文が入ってきた。

そして話を聞いてみて思わず自分の耳を疑う事を言われた。

「だからですね、貴方が薬師が来るまでの間に対処した里の男達が貴方については是非知りたいと言ってます」

それを聞き、いいタイミングだと思い取材してくる旨を告げて来たようだ。

つかさは対面で苦い顔をしている。

「断る。俺は自分の首を絞めるような真似はしたくないし、知られたくない」

止血やちよつとした体温を計っただけなのに何故だと不思議そう。

処置の為に素早く行動してスカートを翻したり、パンツが見えようが関係なく胡坐で止血したりと無意識で刺激的な事をしていただと思う。

「えつとですね、それと色々と聞いてみたんです。腕を組んで睨みつけてほしい、罵倒しながら踏んでほしい、黒より白にして欲しい、普通にエロいだそうです。やりましたね、男にモテてますよ」

意地悪そうに笑っていてイラッ とした。

「最後の普通にエロいが意味分かん。俺はエロくない、せめて男らしくしてるだけだ。それに俺は男だからモテるなら女の子がいい」
現在進行形で胡坐で座り、パンツ丸見え状態でよく言う。

鈴仙コーディネートで今日は黒ニーソ装備。

一度逆らって銀様仕様のゴスロリ以外持っていかれてからは従うようにしている。

「あやや、この人本気で言ってるんですか？」

この場に残っている輝夜と永琳を見て聞いている。

二人は頷いて肯定。

「元男だから気にしないし、見られても恥ずかしくないみたいなのよね」

「永遠亭のお色気担当に任命しようかしら」

二人ともやれやれって顔をしながらもしっかりと見ている。

「射命丸、セクハラするこの二人なら記事にしていけど。毎日胸を揉んでくるんだこの二人は」

揉み心地がいいからと言う理不尽な理由で毎日揉まれている。

養われているし、賭けに負けている以上文句は言えない立場。

「うーん、でも今日は恭司さんについて」

「違うわ、今はつかさよ」

永琳が名前にツツコミをいれている。

「……つかささんについて聞きたいんです!」

名前をメモしてからキラキラした目でこちらを見ている。

「禁則事項です」

某未来人のようにニツコリ笑って拒否。

「まずは好きな異性のタイプから」

スルーして里の男達から承って来た質問を見ている。

「好きになった女性がタイプ」

「好きになった男性がタイプ、と」

普通に捏造している。

「友人的な意味で好きなのは十代、ヘルカイザー、遊星、クロウ」
「元ジャックが省かれているのはご愛敬。」

きつとツンデレだからに違いない。

文はそれが誰か分からないので、不思議そうな顔をしている。

「よくわからないですけど次は……」

あれから一時間ほど質問に答え続けた。

「ほら、もういいだろ。俺はこれから掃除したり昼の準備したり忙しいんだよ」

立ち上がり、シッシツと手でやっている。

既に輝夜と永琳はいなくなっていた。

「最後に写真を……おおつと足と手が滑っちゃいましたあ！ ふぎやっ！」

定期購読者になってくれた里の一部の男達へのサービス用にと滑り込んでスカートの中を撮影。

直後に顔面を踏み付けられている。

「盗撮は犯罪ですよー？」
ぐりぐりと踏み付けているが、痛くないように軽く屈辱的な気分になるようにしている。

「こ、これが踏まれたという気持ち……貴方達の言っていた事を言葉ではなく心で理解しました！ あと、私も黒より白のがいいと……ふぎやっ！」
ぐりぐりされているのに喋っている。

踏まれた事で里の男達が言っていた事を理解し、目覚めてしまったらしい。

中を見て黒より白のがいいと言われた理由も理解した。

「そんな事は永琳に言え。ネガは回収させてもらうからな」
下着は毎日風呂上がり用に用意されている永琳チヨイス。

カメラから撮られたフィルムを取り出している。

「も、もつと踏んでください！ 持っていていいですから！」
何やらいけない世界に完全に目覚めさせてしまったようだ。

ハアハアしてキラキラした瞳に思わず足を退けた。

「帰れ」

冷たい目で見ながら命令している。

手遅れかもしれないが更正してくれるのを祈ろう。

「ああ、そんな所も……」
頬を赤らめ艶やかな目で見ってくる。

どうやら文フラグはこんな所にあっただらしい。
人生どれがフラグになるか分からないね。

しつこい文をなんとか追い返し、玄関まで出てくるとちょうど来客

が。

「あれ、妹紅？ 珍しいね、わざわざここまで来るなんて」
エプロン姿が眩しい。

「うわぁ、すっかり女の子になっちゃってるね」
妹紅が何かを頼みに来たみたいだ。

「うっさい。それでどうしたんだ？」

「ああ、そうそう。最近外来人の一部が賊になりさがっててさ。そいつらの制圧に行こうと思って」
里でも被害が出始めているので妹紅が立ち上がったようだ。

つかさが男に戻っていたら誘うつもりだったようだが、まだ女の子で少し困っている。

「俺も行く。二人なら何とか出来るだろ」
エプロンを外して準備を始めたが正直弱そうだった。

「今の恭司……つかさじゃ危ないよ。里の自警団を連れていくから」
「こう見えても強いんだから平気だって。早く行こう」
妹紅の腕を掴んで引っ張っていった。

賊の根城。

「な、なんなんだよお前は!? ひっ!」

いつも通り俺達は襲撃の計画を立てていた。

そこに現われた白い髪にリボンを付けたもんぺ姿の女と黒い髪を後ろで結ったブレザー姿の女。

最初は上玉の女二人がわざわざ来てくれてラッキーだと思った。

だがそれは間違いだったんだ。

こいつらは悪魔だ。

特にブレザー姿の女は躊躇いなく人体の急所を狙ってきやがる。

「遅いよ」

今のつかさはまるで稲妻のごとき疾さ。

そして一見無防備にも見える鉄壁の防御。

腕力が落ちて素早さが強化された事により、彼女が使うようになったのは舞神法。

舞神法とは。

武漢烈史によれば舞神法の始祖・貞星時平は数々の戦場において、ただの一度も敵の矢じりと刀に血を流す事はなかったとされる。

丹田法と並ぶ古流武術の極意とされ、見切り・体術・稲妻の素疾さを持つ者にのみ許され、あらゆる打撃技に対応し、その威力を完全に殺してしまうという絶技である。

耐久力が低いつかさの状態で生かせる最高の技だった。

そしてそのまま一人に接近して

「く、来るな！」
蹴ろうとした右足をすつと後ろに引く事で避け、戻そうとした右膝に接近し触れて何かをした。

「大腿掌！」
手形は竜爪。

だがそれをチャンスと思ったのかその腕を掴み、再び蹴りを入れようとしてくる。

「ぐああつ！ あ…足が！ うわあああつ！！！」
だが蹴ろうとして動かした右足に激痛が走り、足を押さえて転がり悶えている。

それを冷たい目で見下し、ただ立っている。

「……………」

「てめえ…………！！ 俺の足に何しやがった！」
賊の男は片膝をついたままつかさを睨みつけ、そのまま拳を振るってくる。

目が血走り恐怖で顔が歪んでいる。

「指伸掌！」

拳を避け、さらにその前腕に何かをしている。

「うわあああつ！……あああーっ！！」
腕に走る激痛に倒れこんできたので、それを抱き留め背中に両手を当てた。

「や、やめてくれ……もうしないから……」
苦しそうに顔を歪めて懇願してくるが、それで許す程甘くない。

「破傀拳……広背掌」
ぼそりと呟く姿は悪魔のよう。

背に当てた手を捻り、思い切り身を離れた。

「は……ぎゃあああああつ！！！！」
激痛に叫び、そのまま気を失ってしまった。

服の背の部分が二ヶ所穴が空いている。

広背掌。

大技というよりも通常技に近いが、必殺と呼ぶに値する破壊力を持つ。

別称・背双掌。

相手の懐に入り、背中を両手で抱き込むような姿勢から広背筋を二気に捻る。

それによって相手は、一切腕を上げる事も引くことも不可能となる。この特性から殺陣の流れに組み込むよりも、とどめに使われる傾向が強い。

威力は相当なもので2〜3mmの鉄板をまるで紙切れか何かのように引き千切ってしまう。

間接を外す破傀拳ではなく、捻る破傀拳。

指先を鍛え始めた頃に同時に訓練をして身につけたオリジナルの破傀拳。

原作でもこちらは近年に編み出されたオリジナルである。

賊を壊滅させ、妹紅と一緒に捕縛し里の自警団に引き渡した。一人重傷者がいたが関係ないとばかりに引き渡したつかさは酷い女の子。

「え？ 背中・右大腿・左前腕の筋肉を極限まで捻ったんだよ」
永遠亭への帰り道、妹紅に何をしたのか聞かれたので答えている。

捕縛した報酬として野菜を受け取っていた。

「うわぁ……」

普通に引かれている。

妹紅はひたすら通常弾幕で気絶させる楽な作業だったが、つかさ担当の方は金的やら人体の急所を狙って倒したりと少し悲惨だった。

「久々に身体を動かしたからいい運動になったよ。送ってくれてありがとな」

ばいばーいと手を振り、見えてきた永遠亭に走っていった。

「やっぱり根本は変わってないんだ」

走っていく後ろ姿を見て何か納得している。

台所。

「どこに行つてたのかしら？」

いくら待つても来ないので永琳が捜し回っていたらしく、台所に野菜を置いた所に永琳が来た。

「ちよつとそこまで」

背後にいるが怖くて振り向けない。

肩に手を乗せられた。

「服が汚れてるわよ。それに妹紅が来てたみたいね」

結った髪を解き、さらさらと髪を梳いてくる。

自分との時間を妹紅と過ごした事が気に入らないらしい。

「う、ご、ごめんなさい。身体を動かしたくてつい」

声に怒りを感じ素直に全て話した。

赤くなったり青くなったりと普段クールな永琳の表情がころころと変わっている。

「女の子なんだから危険な事したらダメ。弾幕が使えない貴方は格闘戦しか出来ないんだから」
こちらに振り向かせ、手を握り真剣な顔で話している。

家族として本当に大切に思ってくれているようだ。

「うん……」

心配されているのが分かり、素直に頷いた。

「よろしい。お昼期待してるわ」
頭を撫でニッコリ笑って去っていった。

「あっ……」
いつもと違ってセクハラをせず、優しくされてきゅんきゅんしている。

去っていく背を見送った。

「（ふふふ、これで私の好感度は鰻登り。彼に戻っても主導権は握れるはず）」
打算的な行動だった。

永遠亭のお色気係、鉄つかさ。
無意識だから性質が悪い。

家事に追われ戻るといつ目的を忘れかけている。

続く。

おかしな文ちゃんと狂暴な少女（後書き）

黒しか用意しないのが永琳クオリティ。

捻る破傀拳を閃いた経緯は不明。

今度のDSに付属するのはシェリーのカードらしいですね。
Z・ONE欲しいから三本も買わないといけない。

クリスマス特別編 モテ期到来のK / 本妻は慧音（前書き）

クリスマスまつたく関係ないぜ。

異世界のB / 闇の誘惑から一年後の世界。

心が決まってるから出来てしまったハーレムって完全に拒絶するか、
本妻が決断しない限りはするずる行くと思う。

今日はちよつと飲み会にお呼ばれして参加。

リア充だらけの街中を一人で行くのは嫌じゃ。

助けてしつとマスク！

クリスマス特別編 モテ期到来のK / 本妻は慧音

ヴォルケンリッターが現われて一年。色々あって管制人格が現われて半年。

様々な事があった。

ゆうかりんに6対1で全滅させられかけたり、レジェンドロリコンの称号を与えられそうになったり、紫の胸を鷲掴みにしてしまい三途の川で小町に遭遇したり。

「リインフォース、前に布団に入り込むな言っただはずなんだが……」
早朝、柔らかさと暖かさと動けなさに目を開けると目の前に居た。

布団に入り込んで抱きつき、隙だらけですやすや寝ている姿は半年前からは想像できない。

「う……ん……」

そして闇の書が夜天の書に変わって半年。

「こんな所見られたら他の奴らも毎日入ってきちゃうからダメだっ
て言ったのに……」
厳しかったり甘やかしたり、戦ったり事故が起きたりで素で仲のいいザッフィー以外にこれでもかと言うくらいフラグが乱立している。

特に今入り込んできている彼女は、出てきてからしばらくの間モンスターファームで言う超溺愛状態だったからか群を抜いている。

「恭司君、朝ですよー……」
そーっと囁くように入ってきたのはシャマル。

呼び捨てにしてくれと頼んだら流石に主を呼び捨てには出来ないと言われ、妥協して君を付ける事で納まった。

「主、朝です」

シグナムは主か恭司と呼ぶようになっていた。

最初は呼び捨てなんてありえませんかと言っていたが、最近緩くなりようやく呼び捨てにしてくれる時がある。

「恭司、早く起きて朝ご飯食べようぜ」

甘やかしまくったらデレツンデレデレになったヴィータ。

原作の彼女より丸く、デレ分がツンを上回ってしまった。

同じく恭司が甘やかし放題なフランと仲良しで、魔理沙とよく遊んでいるからか喋り方が似てきている。

後衛の魔理沙が魔砲、前衛のヴィータが天罰降臨するので手に負えない。

ザフィーラは狼状態で恭司の部屋にある何個かのビーズクッションを渡り歩いている。

暖まってくるとひんやりしたビーズクッションに移るその姿は犬と変わらなかった。

里の犬にモテて困るとニヤニヤしながら惚気て恭司に爆発しろと言

われたりも。

「ぐ、ぐー……」

修羅場になる前に寝たフリをした。

目を閉じる前、目の前のリインフォースがニヤリと笑ったような。

今住んでいる家は空き家になった両隣を買取、慧音宅と合わせて大きく建て直した家。

ヴォルケンリッターが現われてから慧音は以前より積極的になり、シグナムとよく対立している。

早苗はシャマルと対立するので出かける時はヴィータかザフィーラとばかり。

「……今、マスターは私と幸せに寝ている。お前達は出ていくべきだ」

マスターと呼んでいるのはきっと恭司の趣味。

三人を挑発するように話しているのがわかり、ぎゅっと頭を抱き抱えて放そうとしない。

「どうせ貴女が勝手に潜り込んだんでしょ？恭司君は私と一緒に寝ると幸せだって言っていたわ」

「ふっ、お前達では主も安心できないだろう。私は一緒だと安心すると言ってもらえたぞ」

武力的な意味で。

「別に誰と一緒に寝てもいいじゃん。あたしと一緒に寝ると夜更かしするぜ？」

デュエルモンスターズを楽しんでいると夜更かししてしまう。

それぞれのバリアジャケットは原作とは変わっている。

シグナムはジエムナイト・ルビーズの甲冑で兜部分がなく、カラーを青にしたバリアジャケット。

ヴィータはジエムナイト・パースの甲冑で、シグナムのと同じく兜部分がなくカラーが赤。

シャマルはエンディミオンの服でカラーは白、ザフィーラはX-セイバー ウェインと皆デュエルモンスターズの物だった。

「……喧嘩するな。てか俺が自分の意志で一緒に寝たのってザフィーラとヴィータだけじゃないか？」
「暴れられても困るので目を開いて言った。」

真面目なシグナムやシャマルにも多数のフラグ乱立させたからか、原作では考えられない大胆さで二人とも潜り込んでくる。

ザフィーラは狼状態で毎日一緒の部屋で寝ているし、ヴィータは遊び仲間でもあるから部屋に専用の布団もある。

「マスター、それはおかしいです。昨日の夜にいつでも来ていいと

言っていました」

リインフォースが頭を抱えたまま耳元で囁くように言ってくる。

「いや、確かあれって来れるものなら来ていいぞ。ただし俺が超信頼しているスパーザファイラの守りを突破できるなら……ってザファイラアア!!」

部屋の隅に燃え尽きた狼がいた。

守り切れず倒されてしまったらしい。

「勝者の特権です」

幸せそうにぎゅっと頭を抱え込んでいる。

「お、おおつ。桃源郷はこんな所に……」
柔らかな感触についニヤニヤしてしまう。

それを見て烈火の将がリインフォースを凄じ睨んでいる。

「ふっ、まあいい」

強者の余裕はシグナムのが大きいからか。

「うっ……」

シャマルは戦力差に怯んでいる。

「マスターがおっぱい大好きなのは慧音から聞いていますから」

「何故ばれたし。てか慧音に洗脳された感も否めないんだが」

家の中では胸元が開いた服を着て、さり気なく見せてきたりと自分の武器を存分に活用している。

今じゃ立派なおっぱい星人になっています、本当にありがとうございます。いました。

「遠慮なさらずに」
頭を掴みぐいぐいと胸に押しつけている。

コザッキー達が直した時にプログラムがはっちゃけるようになってしまったのかもしれない。

「いや、そろそろ起きたいしシャルマルが泣きそうだからさ」
物凄く名残惜しいが離れた。
シャルマルが涙目で睨みつけているのに気がついたようだ。

四人を部屋から追い出し、服を着替え始めた。

「おはよう、慧……ってリインフォースかよ」
慧音と同じ服を着ている。
後ろ姿が少し似ていて一瞬間違えてしまい、激しく後悔。

「私はこっちだ。おはよう、恭司」
後ろから抱き締めてくる慧音。

知らず知らずにフラグだらけだった内の一人。

愛ではなく友を選び続けたのに愛寄りになっていた。

彼の通信簿には先生好きですと書かれているかもしれない。

尚、霖乃助に愛を選び続けると男好きですに変わるので注意。
輪ゴムで戦うと輪ゴム戦士です。

「おはよう、慧音。その行動に胸キュンポイントが高まる」
女の子に抱きつかれてきゅんきゅん。

背に当たる二つの球体にニヤニヤ、シグナム達はイライラ。

「ふふっ、私と恭司の仲だからな」

一番長く一緒に居るんだから、とヴォルケンリッターを挑発している。

「上白沢、我が主から離れてもらおうか。何度も言うが主を誘惑するのはやめてもらいたい」

バチバチとシグナムと慧音の間に火花が見える気がする。

「だが恭司は嫌がっていない。それに誘惑じゃない、家族とのふれあいだ」

余裕な慧音は身体をさらにぎゅっと思着させてくる。

攻略したんじゃない、攻略されたのかもしれない。

「主も何か言ってください！」

矛先をデレデレしている恭司に向けた。

「いや、別に嬉しいし特に文句はないんだけども」
この一年で慧音の好意には気づき、色々育んできた。

最初の頃は独占欲でいっぱいだった慧音も、揺るぎない自分の立ち位置に気づいて大らかになっている。

ぶっちゃけるなら本妻ほぼ確定してるし、妾が居てもどつって事もないのに気づいた。

「主！」

嫉妬の権化シグナムさん。

この一年で一番変わったのが彼女。
愛戦士である。

「ああ、もう。慧音、また後でな」
渋々離れてもらった。

念願のイチヤイチャも守護騎士がいるので出来ない。

「先に朝食の用意をしておく」
頬に軽く口付けて行ってしまった。

「Oh……ラブ注入された」
ニヤニヤしていたらシグナムに襟を掴まれており、凄い怒気を感じる。

「朝の訓練の時間です」

般若のように恐ろしい。

シヤマルとリインフォースも似たような顔をしており、ヴィータはアチャーって顔をしている。

「お、お前達、どうしたの？」

皆に愛されているがその愛は激しかった。

「はつきり言います。嫉妬しました。私達にも愛をください」

「ZOO。愛ならいつでも与えていると思うが」

ハグなら毎日しているだろと言いつ返している。

家族に対するものだが。

「上白沢にするようなのがいいです」

もじもじと頬を赤らめながら言うシグナムは可愛かった。

「なん……だと……？」

今更ハーレム状態なのに気づいた。

流石にこれはネガティブに捉える事は出来ない。

「恭司、こいつらの好意に気づいてなかったのか？」

ヴィータが呆れたように聞いてきて、三人も驚いた顔をしている。

「いや、だって主に対する敬愛とかその類かと思ってたし」

「マスター、敬愛だけなら私のおっぱいに顔を埋めさせません」
ラインフォースが焦って答えている。

「わ、私だって敬愛だけなら布団に潜り込まないわ」シャマルも焦っている。

お姉さんお姉さん言ってたから弟のような存在に対する好意と勘違いされたら困ると考えている。

「敬愛で風呂に乱入なんてしません」
シグナムだけレベルが段違いで、ラインフォースとシャマルがそんな事してたのかって顔で見っていた。

「まさか、そんな風に見られていたとは思わなかった。やったぜ俺、人生で初めてのモテ期が来た」
前向きに捉えているが正直混乱している。

ハーレムを目指していたわけではなく、好きになった人と相思相愛な現状にサテイスアクションしているので困る。

「上白沢に向ける愛の10%でいいんです。それを私に向けてくれれば」

「私達に向けてくれれば」
シャマルが訂正している。

「うーん……そう言われてもな。シグナム達が慧音に聞いて、いいって言ったらいいよ」

とりあえず逃げに入った。

慧音なら、慧音ならなんとかしてくれると考えての決断。

「わかりました。お前達、行くぞ」

シグナムを筆頭に三人で行ってしまった。

歩いていく三人の背はとても大きく見える。

「……………ヴィータ、俺疲れたよ。慧音とイチチャイチャ出来ないし……………」
イチチャイチャしてその行為を愛とか言いたいようだ。

いつも三人の内の誰かに邪魔される理由も分かってしまい脱力している。

「でもさ、あいつら以外にもまだ居ると思うぜ」
指折り数えるヴィータに顔を引きつらせている。

紅魔館組とかつて聞こえないくらい小さな声で呟いている。

「いやいやいや、ないって」
心当たりが鈴仙と美鈴それに今でもストーキングしてくる早苗しか居ないのに、ヴィータの数えている人数が両手で足りなくなっている。

「くじけずがんばれ！ 応援してるー！」
友達として応援してくれていた。

闇の書と出会い一年、夜天の書に戻り半年。
慧音と相思相愛になって半年。

しかし本人が知らぬ所で色んなフラグが乱立。

本妻（予定）の慧音が妾を認めた事でこの後大変な事に。
彼の冒険はこれからだ！

おまけ。

そんなハーレムフラグがたった日から数日。

「ああ、もう可愛いなあ」

ヴォルケンリッターを結界管理の為に冬眠前の紫に（無理矢理）貸し、慧音と二人きり。

エプロンを付けた慧音の後ろ姿にニヤニヤが止まらない。

「」

久々の二人きりな状況に慧音もご機嫌。

朝からイチヤイチャ出来たのもよかったのかもしれない。

「リア充のみんな、爆発しろとか言ったり思ったりしてごめん」
爆発しろ、百回くらい爆発しろ。

「恭司、今日はどこに出かけようか」

嬉しそうに振り向く慧音。

新妻までのカウントダウンが始まっている。

「俺としては炬燵でイチャイチャしていたい」

慧音の為なら死ねるし、デュエルだって捨てられる。

慧音を守る為なら初手エグゾすら引き起こすんじゃないかってくらい最近の恭司は神がかったている。

「ふふっ、それもいいな」

満月の晩に仕事をこなす慧音の速さは毎回世界を縮める程。

姿が変わっても向けられる愛が変わらないのがとても嬉しいから張り切るらしい。

「そうだ、慧音。最近妹紅がやたらべたべたしてくるのを何とか止められないか？」

慧音がいるから、とやんわり拒絶しても腕を組んだり抱きついてきたりする。

特に慧音と相思相愛になってからスキンシップが増えていた。

「そうだな……。私は恭司が妾を何人作っても構わないと考えている」

料理をする手を止め、真剣な表情で答えている。

今後絶対に現在の妹紅みたいな者が出てくる。

それならば皆で彼を愛せば無益な争いは起きないし皆幸せになれる、という慧音にしてはぶっ飛んだ結論を出していた。

愛されすぎて真面目な慧音の頭のネジが吹っ飛んでいるに違いない。

「めかけ……？ 本妻のほかに愛し養っている女性……いや、待てよ慧音。俺は慧音、君だけを愛しているんだ。この気持ちの名前が愛だ！」

辞書で妾を調べて焦りだした。

今まで色々な人と関わり、様々な愛を振りまいてきた人間とは思えない一途さ。

キバの初期の音也よりはマシだろうけど。

「今の情熱的な恭司もいいな……。だが、私は積極的に作れとは言っていないからな？」

愛していると情熱的に伝えられてもじもじ。

妹紅や鈴仙のように諦めきれずにいる娘を妾にしろと遠回しに言っている。

「うーん……。妹紅も慧音みたいに愛せばいいのか？ 間違いなく燃やされそうだが」

抱き締めて燃やされる自分の未来を想像して青くなっている。

「ちゃんと考えてあげてほしい」
そう言っただけで料理に戻った。

「わかったよ、考えてみる。だけどどうなっても俺は慧音が一番だからな」

背中に向けてそう告げた。

ラブファイアーが燃え上がっている慧音の頼みだから仕方なく考える事にしたようだ。

嬉しそうな慧音の背を見ながら今後の事に頭を抱えている。ここに到り自分の惹き寄せる性質が仇になってしまった。

クリスマス特別編 モテ期到来のK / 本妻は慧音（後書き）

皆がこれを読んでいる時、俺は街中を全力疾走しているかもしれない。

慧音一筋になつたはずなのに本妻公認のハーレム。

だけど本気で好きになつた相手以外とイチャイチャなんて出来ないと思つんだよなあ。

冗談半分で接する事は出来てもそれ以上に踏み込めない。

守護騎士は家族だと思っっているからスキンシップの内、だと思つう。

その内に夜天の書に変わった時に起きた事とか、リインフォースが出てきたりする半年前の事も書こうかな。

最後に、リア充の皆さんは爆発してください。

現人神がハアハアするそうです。(前書き)

セクハラは標準装備。

巫女服。

メイド服。

現人神がハアハアするそうです。

「あれ？慧音じゃないか」

永遠亭を隅々まで掃除していたら慧音が来ていた。

何故かこちらを見て、額に手を当てて溜め息を吐いている。

「つかさ、雑巾掛けをするのはいい。だが下着が丸見えだぞ。女の子なんだから恥じらいを持たないとダメだろう？」

掃除している所を見られていたようだ。

恥じらいを持ってというのは無理だと思っ。

「いや、別に減るもんじゃないしさ。見たい奴には見せるくらいのが……いひゃいひゃい」

バカなことを言っているお色気担当の頬を掴んで引っ張っている。

「女の子が馬鹿な事を言うもんじゃない。嫁の貰い手がなくなる…

…いや、そうなっても私が貰うから大丈夫か」

小声で聞こえないように自己完結している。

鈴仙と同じで男とか女じゃなく恭司という魂を持った固体に好意を寄せている。

「で、どうしたの？遊びに来たの？」

珍しいなと思いつながらバケツに雑巾を浸して絞っている。

冷たい水に手が痛くなるが、既に慣れていた。

「守矢神社の……東風谷さんが来たいと言っているんだが」

申し訳なさそうにしている。

恭司は凍り付いたように動かない。

「ダメ、絶対。凄い貞操の危機を感じる」
男の時でもなかなか手強い相手だったのに、女の状態だったら間違いなく抵抗できなくなる。

「先に謝っておく。すまない」
深々と頭を下げた。
どたどたと走ってくる音が聞こえる。

「恭司さん！いえ、今はつかささんでしたね！愛しの早苗が来ましたよー！」
最近常識をドブに捨て去った暴走少女が廊下の向こう側から現われた。

「リバーズカードオープン！三連盃！」
だんっ！と廊下のある部分を強く踏んだ。
こんな事もあるうかと仕掛けてあった罠。

「きゃっ！はうっ！きゅう……」
小中大と時間差で降ってきた盃が綺麗に早苗の頭に命中。
頭にたんこぶを作ってダウンした。

「危なかった。ますます変態具合に磨きがかかってんじゃねーかよ」
バケツと雑巾を持った。

「早く男に戻るのを祈っている。今日はすまなかった」
一人でそのまま帰っていった。
一人で。

「え？いや、ちょっと！忘れ物してますよー！」
早苗を置いて行ったのに気づいて慌てている。

永琳と輝夜のセクハラレベル5とすると、早苗は20。

つかさの部屋。

「くそつ、何で俺が……」

あてがわれている部屋で早苗の様子を見ている。

「気絶させたんだから面倒見てあげなさい。今日はもう仕事なくていいからね。さてと、ごゆっくり」

たんこぶを診ていた永琳に言われている。

処置が終わりニヤニヤしたまま去っていった。

「嫌な予感しかしねえ」

額のタオルを水に浸し、絞ってから額に乗せている。

「ああ、いい匂いがします……」

目を覚ました第一声。

掛け布団をくんかくんかしている。

「おい、やめろ」

流石に恥ずかしいらしく掛け布団を剥いだ。

「ふふつ、私の時代が来ました。スーパーまさぐりタイムです！」
布団を剥ぐのと同時に早苗が飛び掛かってきた。

「うわあっ！誰か男の人呼んでえ！男の人呼んでえ！」

抱きつきブレザーを脱がし、ワイシャツのボタンまで外してくる。
この間僅か5秒。
奇跡を起こす程度の能力の無駄遣い。

「本当に女の子になってますね」
絡み付かれたつかさはされるがままになっている。
体を這う手を払おうにも縦横無尽に動かれて対応できない。

「ばっ、この馬鹿！それは洒落にならないって！どこ触って確かめてるんだよ！」
暴れ回って拘束から逃れようとするが絡み付いて離れない。

「パンツの中です。一番分かりやすいですからね！……ぎゃんっ！」
キリッとした顔に問答無用の頭突き。
顔を抑えて悶えている隙に立ち上がった。

「この馬鹿！……あ、開かない!？」
逃げようとして襖に手を掛けたが開かなくなっている。
じりじりと背後から忍び寄る早苗。

「ふふふふふ、逃げ場なしですね」
手をわきわきさせながら近づいてくる。

「寄るな、来るな……アッー！」
押し倒され何かされている。
助けを求めるように伸ばされた腕すらも掴まれてしまった。

二十分後……。

「すんすん……」

「んー、楽しかったですねー！」

満面の笑顔の早苗と腋の出ている巫女服を着せられて若干泣いているつかさ。

服を全て剥かれてから無理矢理着せられていた。

「楽しくねえよ！この変態！変態神様！」

涙目で怒っている。

寒いし恥ずかしいし、辱められたしで踏んだり蹴ったり。

「んー、まだツンツンしててデレてないですね……えい。こちよこちよこちよ」

丸出しの腋をくすぐり始めた。

もう普通にならないとデレはないと思う。

「あははははっ！やめてっ！くすぐりたいのはダメえ！あははははっ！」

くすぐりに弱いのが身を捻ったりして悶えている。

カニバサミで体をロックしているので逃げられない。

「本当に肌もすべすべしてますね。違う意味で女の敵です
容赦なくくすぐっている。

今日の早苗は久々に会えたので絶好調である。

「やだあっ！死ぬ！死んじゃうっ！あははははっ！
くすぐったくて苦しくて涙が零れている。

巫女服着た二人の少女が密室で絡み合っている。

こう書いてみると何かとても卑猥な気がする。

「早く男に戻ってほしいなあ。また毎日デートしたいです」と言いながらくすぐりをやめない。
デートと言つ名の追い掛けっこ。

「あはっ！はっ！お、お願いだからやめて！」
弱くくすぐられたり激しくくすぐられたり緩急を付けられている。
イヤイヤと首を振って助けを乞うている。

「くくり……」
イヤイヤと首を振る仕草がツボだったらしく、手の動きを止めて唾を飲み込んでいる。

「はあ、ん……ふう。本当に死んじゃうかと思った……」
因果応報。
かつて妹紅をくすぐりまくった報いが今頃帰ってきたようだ。

「つかさー！対戦するわよ！この前のリベンジなんだから！」
分厚い眼鏡が似合いそうな事を言いながら輝夜がDS片手に入ってきた。

「あ、どうも。お邪魔してます」
足で胸をかにはさみして逃げられないようにして、つかさの胸をお揃いの巫女服の脇から手を入れて直に揉みしだいている。
じたばた抵抗しているつかさを尻目に、何食わぬ顔で輝夜に挨拶。

「そ、それは私のなんだからー！」

拘束から逃れようと抵抗しているつかさに飛び掛かった。
独占欲が強いようだ。

「ううっ、変態が二人に……いやっ！やめてっ！」
二人に襲われている。

「あつたかくて柔らかくてすべすべですね」

「この前より大きくなってない？」
右と左に別れて触り心地を楽しんでいる。
セクハラ！やらずにはいられないッ！

「うううっ」

胸が弱点になってしまっている。
倒れ伏してびくびくしている姿が妙にいやらしい。

「はぁ、堪能しました。それで輝夜さんは何をしに来たんですか？」
すっかり意気投合して名前で呼びあっている。

「ポケモンの勝負をね。私のカイリキーのあなをほる攻撃をくら
わせようと思ったんだけど」

しかもNNがあべさんで、性質が悪いネタポケモンを育成している。

「私も持ってますよ。今度交換しませんか？」
ぐったりしているつかさを尻目にわいわいと楽しそうにしている。

「い、この恨みはらさでおくべきか……」
DSを片手に呟いている。
どうやら復活したらしい。

「つかさが負けたらこれ着てもらおうから」
紅魔館から取り寄せたメイド服。
自分の世話をさせる為だけに取り寄せた貴重な品でサイズもぴった
り。

「絶対負けねえからな」
顔が引きつっている。
自分のメイド姿を想像してしまったようだ。

「カイオーガはズるいわよ！伝説禁止ー！」

「そんな話聞いてませんー！勝てばよかるうなのだ！」

「俺のルンパツパとオムスターが……」

「雨パ対策はバッチリよ。可愛いわ、私のシャワーズ」

「ぜったいれいどが当たる当たる」

「ふふっ、ここまで私をコケにしたお馬鹿さんは初めてよ」

「げっ！襷そいつかよ！」

「黒焦げになりなさい！」

「ま、負けた……」

「私のブイズの勝ちね」

5Vを粘る時間があつた輝夜、妥協するつかさ。

「むっ、つかさんは雨パですか。私の晴れパの天敵です」

早苗は晴れパだった。

太陽神はもちろん入っている。

「さあ、着替えなさい。そして私を甘い声でご主人様あと呼びなさい」

輝夜のご主人様あも可愛らしかった。

「今のは練習だから……いや、マジでマジで。だから寄ってくるな……えーりん！えーりん！助けてえーりん！」
早苗と輝夜がじりじりと詰め寄ってくる。
思わず助けを求めたのが永琳。
何か歌みたいだった。

「無駄よ、永琳はご主人様二号だもの。さあ、捕まえた。こんな往生際の悪い子はぬぎぬぎさせちゃいませうねえ」
ぬがせちゃうおばさ……ぬがせちゃうおねえさん。

早苗も一応輝夜の前なのでハアハア言うだけで普通に脱がしていく。

「ぜ、絶望した！熱の苦しさを我慢できなかった自分に絶望した！
メイドつかさ爆現。

今度は咲夜とお揃いである。

「やっぱりエプロン付いてると何でも似合っわね」

「私は脱がしてる時が一番楽しかったです」
レベル5×20＝100。

今の早苗はひかりのたまがないと傷つける事が難しいだろう。

「あ、そうだった。今日の夕飯は何？」

「え？そんなの食材を見てみないとわからない……痛！
輝夜が持っていたピコハンで頭を叩かれた。
あまり痛くないが痛いと言ってしまうのが人間。

「違うでしょ？」

分かっているくせにつて目で見てくる。

内Pで使われていたピコハンと似ている。

「いや、だから見ないと分からな……痛い痛い」
ピコピコピコ！っていい音。
ムツとした輝夜が睨んでいる。

「敬語」

ビシツと指差し。

「ご主人様、夕食のメニューはまだ決まっていますわ」
咲夜を参考にして対応してみた。
一気に輝夜の機嫌がよくなっている。

「楽しいわねこれ」

「あ、そろそろ人里に行かないと。これ置いていくんで色々楽しんでくださいねー」
持ってきた巫女服を置いて人里に向かっていった。
嵐のような早苗だった。

夕方

「くっ……」

屈辱。

メイド服が珍しいのか妖怪兎達や永遠亭の面々が台所まで見に来ている。

「女装趣味が……」

てゐがぼそりと呟いたのが耳についた。

「違っわ！このウ詐欺！」

振り返っておたまを突き付けた。
ニヤツと笑ったてゐの手にはカメラ。

「かかったな！アホが！」

パシャッとメイド姿を写し、そのカメラを庭に向かって放り投げた。

「は？」

「今度高いニンジン贈らせてもらいますねー！」

庭に投げられたカメラをどこから現われたのか射命丸がキャッチし、そのまま飛んでいった。

「……………」

額に青筋を浮かべながら、てみを捕まえて頬を引っ張っている。

「……………」

てりもつかさの頬を引っ張っている。

椰子とカニみたいな二人だった。

日を追う毎に酷くなるセクハラ。

大きくなるんじゃないかと思われる胸。

それを楽しんでいるトップ二人がいる限り戻れる日は遠い。

続く。

現人神がハアハアするそうです。(後書き)

きっと彼女はそろそろ彼に戻れるはず。

新アニメのかつとピングはどくなるんだろう。
かなり嫌な予感しかない。

正月特別編 復活のB / 祝福のEール（前書き）

明けましておめでとうございます。

正月から大変な出来に仕上がっております。

本編とは違う平行世界、前に書いた二つの間にあつた一幕。
まだ一途じゃない時の恭司。

今年もよろしく願います。

正月特別編 復活のB / 祝福のEール

「性的な要求してきたパチュリーとツンデレだったアリス、一週間の滞在を対価に魔理沙……半年もかかったな」

ヴォルケンリッターが出てきてから半年、コザッキー達の活躍により防衛プログラムを正常化。

防衛プログラムが正常に戻ってから、夢の中に毎日現われるちよつと迷惑な女性が涙目で縋りついて来たりも。

「そろそろあの子が出てくるわ」

シャマルがニコニコしながら言ってくる。

三人の魔法使いの魔力をJapanese Do-Ge-Zaで蒐集させてもらい、ヴォルケンリッター達の魔力もギリギリまで書に吸わせていた。

「パチュリーが一番やばかった。性的な意味で」

据え膳食わねば何とやらというが、恭司は自分が本気で好きになった相手としかその類の事はしたくないらしい。

パチュリーと小悪魔の潤んだ瞳に流されかけたのは秘密。

「シグナムが暴れて有耶無耶になったのよね」

チャームの魔法を使われていたのか、パチュリーを抱き締めかけた時に我慢の限界を越えたシグナムが暴れた事で有耶無耶になった。

そして結局は恭司が実験に協力する事で交渉成立。

「今の私は阿修羅すら凌駕する存在だ！ってハムみたいな事言ってたな。てか弾幕ごっこ上達しすぎだろ」

恭司なんて通常弾幕すら出来ないのに、シグナムはスペルカードま

で使える。

「まさかあのシグナムをメロメロにするなんてね」
シヤマルは感心している。

騎士とか戦士としてではなく、一人の女性として恭司を慕っているのが意外なようだ。

「どうやら人を越えた存在は俺に惹かれて、さらに傍に居ると落ち着くらしい。ソースは紫」

相手が敵意を持っていると逆にとても腹立たしくなるらしい。べったべたにくっついてきた紫が言っていた。

その事を意識したせいなのか出かけると妖精がまとわりついてきて近づいてくる敵意を持った存在から守ってくれたりする。

傍から見たら小さな女の子ハーレム。

それを見たアリスからレジエンドロリコン扱いされかけたり。

「何でか知らないが文に連れられてきた椛だったか、あいつとザフィーラかなり仲悪いんだよな」

居心地の良すぎる恭司の傍に年中居る事ができ、愛でられるザフィーラに嫉妬。

ザフィーラが羨ましいだろって目で椛を見るのも原因。

「恭司君が女の子がいるのにザフィーラにはかり構うからじゃないかしら」

「いや、だってザフィーラふっさふさだし」
もふもふせざるをえない。

ザフィーラを目の敵にしているのは椛と藍様。

八雲家とは結界のメンテナンス関係でヴォルケンリッターを派遣す

る契約を結んでいる。

「盾の守護獣を愛玩動物扱いしたのは恭司君が初めてかも」
ふふふ、と笑っている。

「でも俺、最近は藍様の尻尾に夢中なんだ」
橙と仲が良いからかよく二人で遊びに来たりする。
その時に尻尾をもふもふさせてもらっている。

「ああ、だから最近のザフィーラは毛並みを気にしてるのね」
たまたま覗いた部屋で、恭司が嬉しそうに藍様の尻尾をもふもふしているのを見て衝撃を受けていた。
しかも藍様に勝ち誇った顔で見られたのも拍車をかけたようだ。

「さて、無駄話はこれまでにしよう。アリスがくれたこの魔力が籠められたリボンと、香霖堂で買ってきたこの魔力が籠められた石で管制人格を覚醒させようか」
闇の書に二つを乗せた。

コザッキーたちの魔改造で一度蒐集した人物の魔力でもページが埋まるようになってる。

毎月三人の魔女と守護騎士の魔力を蒐集させてもらい、半年でようやく覚醒に必要なページまで貯まっていた。
毎月魔法使い三人の難題をこなすのは至難の業。

「普通にマスタースパークとか撃てそうね」
シヤマルが闇の書に魔力を吸収させていく。

するとあの時のように本が発光したかと思ったら、闇の書の見たい目
が変化。

次いで管制人格の、夢に現れていた女性が立っていた。

「……主、酷いです。夢の中であれだけ話し掛けていたのに無視するなんて」

「起動の許可は出してたんだからいいだろうが。それとどうせ呼ばれるならマスターがいい、てか夜天の書になつとる」

涙目な管制人格の女性に興味を押しつけている。

今の状態でもスタイルの良さが分かるので目を逸らしながら言った。

コザツキー達で正常に戻したが闇の書の外装などなどまでは戻せていなかった。

マスタープログラムである彼女の起動と共に完全に修復が完了したようだ。

「はいはい、とりあえずこれ着てからね」

シャマルが慧音から借りてきた服を手渡している。

「さすがシャマルだ。最近少し太ったって聞いたが……うわああっ

！！ホラー！ホラーすぐる！」

額に青筋を浮かべたシャマル。

そのシャマルの腕が恭司の胸から生え、顔面をアイアンクローしていた。

「女の子にそんな事言ったらダメってお姉さん言ってたわよね？」

主に対する仕打ちの酷さに女性は服を持ってぽかんとしている。

「はっ、シャマルが女の子とか冗談きついで！……いたたたたた！

！ち、違う！綺麗な大人の女性だからって意味でええええ！！」

顔から手を離させようと出来るが出来ず、痛みに床をごろごろ転がり回っている。

「シャマル、マスターに何をしているんだ」とりあえず慧音の服を着てから止めに入った。

「いいのよ。恭司君は家族なんだから、間違った事は正さない」とシャマルのブロッケワードを言ってしまったのが原因。

「うううっ！だがタダではすみさんぞシャマル！……赤って大胆すぎないか？イメージ的に白なんだが」
転がり回っていたらシャマルの足元。
スカートの中を思いつきり見て感想を言う紳士。

「きゃっ！き、恭司君のえっち！」
飛び退いてスカートを押さえて座り込んだ。
真っ赤になり睨みつけてくる。

「ふっ、勝った。男は総じてエロい生物だ。俺に勝ちたければ羞恥心を捨てるんだな、シャマル！」
格好良く言っているが、もう普通に変態だった。
そして何気なく管制人格の女性を見る。

「マスター？」
不思議そうに小首を傾げ見てくる姿に心を撃ち抜かれた。
背は恭司よりも低い。

「……そうだ、この恭司がお前の名付け親になってやるっ！強く支える者、幸福の追い風、祝福のエアール、リインフォースと言っものはどうか！」

これだけは知っていたみたいだった。
シュトロハイムのように言えたことで満足している。

「リインフォース……」
自分に与えられた名前を噛み締め、嬉しそうな笑顔を見せてくれた。

「まあ、争いとかはそんなにないし普通の女の子として生きていいぞ。シグナムみたいになられると困るけどな」

自警団で妹紅としばしば対立するがライバルのような関係。

慧音とはよくわからないが対立している。

恋敵だからだろうけど。

「あ、失礼します。……ユニゾンイン」

何か思い出したのが唐突にユニゾンしてきた。

「お……おおっ！こ、これは……！俺は常識を捨てるぞ！早苗ー
！」

体に満ち溢れていた使い道のない魔力の制御をリインフォースが行い、使い方まで理解できる。

何故早苗の名前なのかは分からない。

「うわぁ……」

何かシャマルが引いている。

そっと手鏡を見せてきた。

「……い、いやぁぁっ！！中二病が再発しちゃうっつ！！」
髪の色、目の色がリインフォースと同じ蒼に近い銀髪で赤目になっている。

魔改造の副作用からか、ユニゾンするところなるようだ。

「くすくすくす……」
切実な恭司の叫びを聞き、最近ふと……肉付きのよくなったシャマルが笑っている。

近距離型の恭司とリインフォースの広域攻撃が合わさるとどうなるんだろ。

リンクの回転斬りのような技が使えたりしそうだが。

「マスター、これならしっかり訓練すれば魔法も使えるようになり
ます」

ユニゾンを解いたリインフォースが言ってくる。

完全に違和感なく同調できたのが意外だったのか若干興奮している。

「いや、ユニゾンは切り札にしようマジで」

黒髪黒目に戻ってホツとしている。

憧れていた髪や目の色の変化は予想以上にきつかったらしい。

「分かりました。マスターがそう言うのであれば」
不満そうだったが納得してもらえたようだ。

数日後

太陽の畑

「し、死ぬ！リインフォース！ユニゾンして撤退するぞ！ひいつ！」
死屍累々。

気絶していたシグナムやヴェータ、魔理沙から離れるとシャマルが

三人と共に里に逃げていった。

「貴方は逃がさないわよ！」

幽香が怒気を漲らせて日傘を振り下ろしてくる。顔を真っ赤にして怒っていてとても恐ろしい。

「うわああっ！許してゆうかりん！」

火事場の馬鹿力なのか、すべて回避している。まったく油断ができない。

「み、見たんだから責任取りなさいよ！」

攻撃の手を止め、目を潤ませてこちらを見ている。

USCとか色々言われていたが、恭司と出会って色々あってからは初々しい乙女のようになっていた。

「じ、事故だろ！だから許してください！」

土下座が効く相手ではないのがわかっていいるからジリジリと距離を離していく。

こうなった原因は妖精の悪戯。

楽しく皆でお茶を飲んでいて、幽香がおかわりを取りに行った時に起こった。

突然スカートが捲れ上がりパンツ丸見え状態で転んだ幽香。

眼福だとガン見していたらシグナムに目潰しされ、絶叫しながら転がる恭司。

大爆笑な魔理沙とヴィータ、心配そうなシャマルと目潰しを見ていなかったから不思議そうに恭司を見ているリインフォース。

起き上がった幽香は、最強の妖怪と改めて理解出来る強さで悪戯をした妖精を消し飛ばした。

そして見られたのが分かっているから、皆の記憶を消してやること
こちらに襲い掛かってきたのである。

最初にやられたのはシグナム。

転がり悶える恭司を仕方なく守る為にセットアップしたまではよか
ったが、実力差ははつきりしていたのと転がる恭司が邪魔でやられ
てしまった。

次にやられたのは魔理沙とヴィータ。

二人のコンビネーションを力で押し崩し、二人が立て直そうとした
所をマスタースパークでまとめて撃墜。

そして目の痛みに耐えて立ち上がった我等が主人公、恭司。

幽香を見てまず逃げたのは許せる。

本人は気づいていないが倒された三人から距離を取ったお陰で、シ
ヤマルは三人と魔法で里に逃げる事が出来ていた。

ぶっちゃけ見捨てたとも言えるが。

そして今に到る。

「マスター！」

今が好機とリインフォースがユニゾンしてきた。

うまく扱えなかった魔力が漲り、身体強化に全てを注ぎ込んでいく。

「な、何よそれ……は、速いつ！あつ、えっ？」

目に見えて強くなったのが分かり睨みつけてくる。

銀髪赤目の恭司は幽香に接近して耳元で何か囁いた。

これが原因で今晚地獄より恐ろしい目に合うとは知らずに……。

「ほ、本当？」

「ああ」

ちらちらと恥ずかしそうに見てくる幽香。

爽やかに対応しているが内心は冷や汗ダラダラ。

「そ、それなら仕方ないわね」

何故かデレデレ。

スツと腕を組んでくる。

腕を掴まれた時、折られる！とびびっていたのは秘密。

夕刻頃に解放され、恥ずかしそうに花の種を分けて見送ってくれた。

「リインフォース、ユニゾンアウトだ」

「マスター、お疲れ様でした」

げっそりした恭司に芳いの言葉をかけている。

怯え具合とかもユニゾンしていたので分かっている。

夕食後

「さて、今日の議題は花の妖怪……風見幽香を口説いた不埒な者についてだ」

慧音やシグナムがぴりぴりしている。

弁護側のヴェータ、ザフィーラはやる気がなさそうにダラダラして

いる。

「あ、あのお……何で俺縛られて……」
間接を外しても抜け出せないような縛り方。
判決は決まっているようなものだった。

「マスター、喋ってしまいました」
悪気がないようにリインフォースが言ってくる。

「ばっ……死ぬよ!？」
確定した未来が見える。
ユニゾンしてる時やけに静かだとは思っていた。

「『俺はそんな少しドジな幽香の好きだな』と言っていたらしい
じゃないか」
慧音がとても怖い。

「『俺にだけそついう姿を見せてもらいたいな』と言っていたそつ
ですね主」
シグナムも怖い。

「あ、あれは、その場を切り抜けようとしただけで……」
「私は密着されてデレデレしてたマスターを見ましたが」
マスターを裏切り放題である。
表情には出ていないが嫉妬心からの犯行。

「「……」」

「グイーター！ザッフィー！助けてえええ！！ああああ……」

額に青筋を浮かべた二人に引き摺られて行った。

縛られたまま容赦のない弾幕を撃たれての悲鳴とピチユーンって不思議な音が何回も聞こえてくる。

夜天の書の完全復活。

現われたリインフォース。

乙女なゆうかりんに色々な人妖に愛を配り回る恭司。

半年後には一途になっているとは思えなかった。

正月特別編 復活のB / 祝福のEメール（後書き）

予約投稿で年内に投稿しております。

大晦日には1対1対1対1の変則デュエルをする予定。

HERO対ドラグニティ対サイバー対ヴァイロン。

なんてカオス。

普段凜々しい人が怯えるのっていいよね？（前書き）

やりたいようやってやったぜ。

DANDAN女の子になつていく。

変化する条件が緩い永琳の薬。

普段凛々しい人が怯えるのっていいよね？

「」
「」
自然に女物の服を着て鏡の前で確認。

心も女の子になり始めているのか自分で服も選んでいるみたいだった。

胸もさらしじゃなくなっているから、胸が服を押し上げている。

「師匠、やばくないですか？だんだん心まで女の子になっていきますよ」

「昨日なんて里の男に下着を見られて恥じらってたわ。顔赤くしてスカートを押さえて座り込む仕草が可愛くてそれはもう……」
襦を少し開けて部屋を覗く師弟。
だんだん体に心が引っ張られているつかさを観察しているようだ。
結果的にやばい事が分かった。

朝食後。

「え？何言ってるんだよ、俺は男だし……。永琳、俺どうしたら強制されずに自分の意志で着た服に気づき、胸もさらしじゃないのが自然になっているので愕然とした。
咄嗟に永琳にすがっている。

「何とかするからその顔をやめなさい」
「やたら可愛い顔をしてすがっている。」

懐から取り出したのは一錠の薬。

「それ飲めば戻れるのか？」

変な色の錠剤を訝しげに見ている。

不安爆発。

「完全に戻せる薬が出来るまでの時間稼ぎよ。そうね、薬に名前を付ける恭司1/2かしら」

名前からして嫌な予感しかしなかった。

輝夜が何かに気づいたが成り行きを見守っている。

「とりあえず着替えてきてから飲むよ」

この服で戻ったら死ぬると言って部屋に戻っていった。

五分後

「これなら男に戻っても平気だろ」

隠し持っていたジーンズに薄い長袖とパーカー。

パーカーを脱ぎ改めて薬を手にした。

「……………」

皆が黙って見守る中、薬を飲み込んだ。

だが特に変化がない。

「失敗？……………ってあちゃちゃちゃ！何するんだ！……………って戻ったあ！？」

永琳に熱めのお湯をかけられたと思ったなら男に戻っていた。
周りの皆も驚いている。

「成功ね。完全に戻る薬が出来るまではそれで我慢なさい」
キリツとして格好良い。

「一時的とはいえありがとう！」
久々の男の子。
手を握ってぶんぶん振っている。

「ま、まあ、そこまで喜んでもらえると嬉しいわ」
握られた手と嬉しそうな顔を見て照れている。
だが肝心な事を忘れていたり。

「冷たっ！てゐ、お前……ってまたかよ!?!」
てゐが何かに気づき、冷めて水になった元熱いお湯を恭司にぶっかけてみたようだ。
すると女の子に戻ってしまった。

「うわあ、永琳あの漫画読んだの？」
輝夜が聞いている。
らんま1/2ですね、わかります。

「ずっと女の子よりはいいかと」
今回は悪気はなく、100%善意。
確かに水をかぶらなければ男でいられるのは大きい。

「お湯湧かしてくる」
上は下着を付けていないので服が肌に張りついて、体のラインが出ている。

ジヨルジュ長岡が狂喜乱舞しそうな光景だった。

(。。。)〇三。

「うわ……エロ……」

てゐですら思わずそう呟くくらいにエロい。
寒そうにパーカーを着込み、濡れたままで行ってしまった。

「結局意味がない気がするなあ」

洗濯まで任されるようになってるので、夜に風呂に入ってから朝食の準備までの間しか男でいられない。

水をかぶらなくても、ただ腕を水に浸すだけで女になってしまうのに洗濯中に気がついた。

「ん……」

人型になった小さな妖怪兔の女の子が膝に乗り、胸に顔を埋めて寝ていた。

乳枕とは子供だから許される。

「さらしを付けていなかったのが仇になったか」

幸せそうに眠っているので動けない。
昼の準備も終わり休憩中でよかった。

数十分後

「……もうやめてほしいんだけど」

女の子が起き、掃除を始めたら輝夜に部屋に引っ張りこまれた。

「ママー」
とか言いながら胸に顔を埋めて揉んでいる。
さっきの女の子を見ていたらしい。

「ママじゃねーよ。まったくいつになったら戻してもらえるんだか……」
戻す薬は完成しているが、女の子に変える薬がまだ未完成なので戻してもらえない。
徐々に女の子の思考にシフトしていくのが恐ろしい。

「むふふふ、やらずにはいられないわ。ふーっ」

「ひっ!」
考え事をしていたら耳に息を吹き掛けられてびくっ!としている。

「かわいいー。私と居るのに考え事しないの」
綺麗で可愛い変態な姫様だった。
早苗との交流でレベルが5から10まで上がっている。

「くっ、これも全部ゴルゴム……永琳のせいだ。明日リベンジしてやる」

荷物は取り返し済み。
ツンデレなてゐが何とかしてくれていたりする。

『勘違いしないでよね。ライバルが男に戻らないと張り合いがないだけなんだから』
とか言いながら渡してくれました。

「うーん、そうね。女の子もいいけど、男に戻ってもらった方がいいわ」

からかう事には変わりはない。
どうせ永琳なら男　女の薬作れるようになるだろうって考えもある。

「デュエルの前にお湯を触らないとな。そして完全に戻ったらクリスマス中止のお知らせをしないと」

女の子状態じゃ引き運がなく、事故ばかり。
運に見放されたんじゃないかってくらいにカードに弱い。

「今回はどんな奇跡を見せてくれるのかしら」

「HEROかなー」

奇跡の融合的な意味で。

夕飯の時間。

「永琳、明日リベンジさせてもらおう」

筍の煮物を食べながら宣言。

永琳は一瞬何が？って顔をしていたが、すぐに理解したようだ。

「わかったわ」

女の子にする薬が完成したので今夜にでも完全に戻すつもりだったが、このデュエルでのデメリットがないので了承した。

つかさは普通にしても運が悪い。

心配そうな鈴仙に大丈夫と伝え、明日の永琳との決闘に備え早めに就寝した。

翌朝。

朝食を食べ終え、お湯に触れて男に戻った。

その状態でデュエルディスクを付け、デッキをセット。

「私が勝つたら年内はそのままで居てもらおうわ」
永琳の綺麗な髪が風になびいている。

「俺が勝つたら完全に戻してもらおうからな」
伸びた髪はしつかり切って来ている。

動かしやすい体でモチベーションが上がっている。

「デュエル！」

「ドロー。私はお注射天使リリーを召喚、そして三枚のカードを伏せてターンエンドよ」

ATK400

注射器を持った可愛らしい女の子のモンスター。

やはり永琳に似合うモンスター。

「俺のターン、ドロー！……手札からE・HEROバブルマンを準備表示で召喚。このカードは自分の場にカードが存在しない時に召

喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、デッキからカードを二枚ドロ―する」

DEF1200

十代の友達、バブルマン。

アニメ仕様なのは最終回まで変わらなかったから仕方がない事。

「そして手札のE・HEROスパークマンとE・HEROエッジマンを融合！来い！E・HEROプラズマヴァイスマン！」

ATK2600

「……………」

これから何をするのかしつかりと見ている。

効果が多種多様なHEROを目に刻み付け、今後の対策を練る為に。

「プラズマヴァイスマンの効果発動、手札を一枚捨てて攻撃表示のお注射天使リリーを破壊する！」

手札を一枚墓地に捨ててリリーを破壊した。

お注射天使って言う時恥ずかしそうだった。

「くっ、破壊効果のHERO……………！」

フィールドのリリーが破壊され消えていく。

今は為す術がない。

「さらに手札からミラクル・フュージョンを発動！場のE・HEROバブルマンと墓地のE・HEROフェザーマンを除外し、E・HEROアブソルトZeroを特殊召喚！」

ATK2500

先程捨てたのがフェザーマンだったようだ。
禁止カード、フェザーマンは伊達じゃない。

「危ないわね。速攻魔法・非常食を発動し、セットされた二枚のカードを墓地に送りLPを2000回復するわ」
LP4000 LP6000

全力の恭司はとんでもない事を再認識している。
伏せていたのは王宮のお触れと偽物の罫。

「2体のモンスターでダイレクトアタック！」
戻れるかどうかの瀬戸際なので容赦はしない。
永琳に2体のモンスターが迫り直接攻撃。
その衝撃で永琳が吹き飛んでしまった。

「くっ！まだ負けては……！」
LP6000 LP9000

吹き飛んだが地に手を付いて跳ね、体勢を整え着地した。華麗なお
師匠様に皆拍手している。

「お師匠さんお見事。言わせてもらっなら白より黒のがいいな」
うまい事見えたようだ。
ニヤツと笑って言ったら真っ赤になっている。

「っ！私のター……」

「まだだ。速攻魔法、マスク・チェンジを発動！アブソルトZeroを墓地に送り、エクストラデッキより現れる！M・HEROヴェイパー！」

ATK2400

その言葉でアブソルトZeroが消え、新しいモンスターが現れた。

「連続攻撃……！」

一切の容赦のなさとなされたHEROに驚愕。
これでチェックメイト。

「M・HEROヴェイパーでダイレクトアタック！フリアティクエクスプロージョン！」

「きゃあああああっ……！」

最後の一撃で膝をつき、デュエルディスクが待機状態に戻った。

LP900 LP0

「この二週間は長かった……」

目を閉じ、完全に戻れる時が来たと勝利を噛み締めている。そこに気まずそうな顔をした永琳が近づいてきた。

「恭司、ごめんなさい。さっきのデュエルで吹き飛ばされた時に作った薬がこぼれてしまつて、作り直さないといけないのよ」
肌身離さず持っていたのが仇となった。
服の胸元がじつとり濡れている。

「……試しにそこ舐めたら戻つたりしないかな」

変態紳士は伊達じゃない。

下心90、本心10で言っている。

幻想郷に来てから色んな扉を開きすぎている気が多々。

「試してみる？」

挑発するように腕を組み胸を強調し、ウインクしてきた。
なので

「ああ、そうだな」

からかわれてたまるかと抱き寄せて腕の中に納め、逆にからかうことにした。

ニヤニヤしそうなのを堪え、真剣な顔で永琳を見ている。

「あつ、えっ？」

からかうつもりがすっぽり包まれてしまった事でパニックになっている。
いる。

頬を赤く染め乙女のように。

「これは俺が外の世界に居た時にあつた本当の話です……」

逃げられないように強く抱き締め、おどろおどろしい口調で恐怖体験を語り始めた。

「っ！」

抱き締められて赤かった顔を、真っ青にして固まっている。

実は怖がりだった永琳。

つい最近した真冬の怪談大会でつかさ状態の恭司にだけバレてしまっていた。

ポーカーフェイスだったが隣に座っていたつかさの手を強く握り、その手も汗ばんでいれば誰でもわかる。

貴方が怖がっているかもしれないから、と部屋に来て布団に入ってきたのもバレる原因だったが。

「……………そして寝ようとしたんですよ。そうしたら扉をノックする音がコンコン、コンコンって聞こえてきましたね。こんな時間に誰だろうなーって見に行った訳なんです。そこは二階建の古い寮でしてね、ぎいいいいって音をたてながら扉を開けると目の前にながーい髪の女がぼーっと俯いて立ってましてね。そいつが顔を上げ俺を見て……………あはははははははっ！！って笑うんですよ！俺は怖くなっとうわあああっ！！って叫んで……………」

実験を語っている。

永琳は胸に顔を埋めてぶるぶる震えながらしがみついてくる。

20分後。

「……………そいつの正体は分からず仕舞です」

実験以外にも三本くらい怖い話をしていた。

周りで興味津々に聞いていた、恭司よりは年上だけど妖怪としては

幼い妖怪兎達も怖くなって足にしがみついている。

「こ、怖くないわね。本物の幽霊ならここじゃ普通よ
幽霊はよく見かける。」

が、外とはレベルが違いすぎる。

「し、師匠、私今日寝られないかもしれません……」
鈴仙も怖いのがダメなのかしがみついてきている。
恭司の語った話がとても怖かったのだけは確か。

「流石お師匠さん、なんともないか。鈴仙は布団持ってきて俺の部屋と一緒に寝ればいいんじゃないか？」
友達以上恋人未満な鈴仙に提案。
ポツと顔が赤くなっている。

「う、うん……。そ、そうしよう……。かな？」
もう怖いのがなくなってしまったのか、恭司から離れて可愛い仕草で照れている。

「……………ハッ！二人がいかかわしい行為をしないように師である私も一緒に寝ます。私が真ん中になればそんな事も出来ないでしょうし」

このままだと今晚行くのは無理になると焦り、割って入ってきた。
妖怪兎達は集団で行ってしまったが永琳だけはまだ抱きついたまま倒れないように抱き締めているが、離れたらへたりこむのが目に見える。

「俺は真ん中がいい。気分良く寝れそうだし」
両手に華がいいようだ。

「わ、わかったわ。それでいいから」
誰かと寝られればいいと考えてる。
怖がりな永琳を想像すると可愛い。

夜

「しまった。ノリで真ん中とか言ったが、そんな位置に居たら性欲
を持って余す」

三つの布団を敷きながら呟いた。
紅魔館に泊まった翌日はやけにすっきりしているのはきつと……。

「はいはい、頭出しなさい」

「……ですよねー」

素直に頭を出したら水を軽くかけられ女の子に変えられた。
この状態なら抱きついてても恥ずかしくないという永琳判断。

「一粒で二度おいしいってこの事ね。あら、あの薬の効果まだ切れ
てないのね」

髪が一気に腰くらいまで伸びていた。

それが嫌そうな顔のつかさ。

「うっ、久々にパジャマ着れたのに胸が窮屈に」
ボタンが飛びそう。

仕方なくボタンを外し、さらしを巻いていく。

「ウドンゲ、これがサービスシーンよ」

「はい、師匠」

体育座りで鑑賞する二人。

凄いシユールな光景だった。

「俺のピユアだった鈴仙が永琳の思考で汚されていく……」

長袖のシャツとジャージの下に着替えた。

パジャマは男用だからとナイトキャップと一緒にしまっている。

「早く寝ましよ。明日から忙しくなるわ」

薬を再び作るために。

「私もがんばります！つかさが恭司に戻る為にもがんばらなきゃ」

鈴仙は頼もしかった。

「早く寝よう。一日でも早く戻りたいわ」

つかさはさっさと抱き枕を持って布団に潜り込んだ。

束の間の男性化。

次回こそ戻るはず。

きつと冒頭ですぐに。

続く。

普段凛々しい人が怯えるのっていいよね？（後書き）

遊戯王、新年初購入。

T D G Sを10パックでホ口の星屑が出ました。

これでホロ、アルティメット、ウルトラ、スーパ、ノーマルで揃ったわー。

超紳士復活、レベルは20。(前書き)

男 女 男 今ここ

紳士(自称)から超紳士(自称)へ。

そして、やりたい放題へ……。

超紳士復活、レベルは20。

「ようやく戻った……。最高にいい気分だ!!」

朝からスーパーパーハイテンション。

既に男物の服に着替えてコートまで着ている。

永琳が薬をこぼして数日、やる気が漲った鈴仙のお陰ですぐに薬は完成した。

そして昨晚薬を飲み、本日早朝に完全復活を遂げた。

若干外見の鋭さがなくなり、緩く親しみやすくなったように感じる。

「よし、帰ろう!.....あいつら待ち構えてやがった」

荷物を持って襖を開けたら、永遠亭の者が勢揃いしていた。

一度襖を閉めてどうするか悩んでいる。

「ふっふっふっ……。恭司、貴方があのハクタクの元に帰ろうとするのはお見通しよ!」

すぱーん!と襖を開けて輝夜が入ってきた。

輝夜だけ慌てて来たらしく、寝癖に恭司から奪ったジャージ姿と姫とは思えない格好だった。

「そりゃそうだろ。俺の住ませてもらってる所の家主だし」

そんな姿の輝夜はスルーし、胸大きいし美人だしお姉さんだしと関係ない事を考えている。

「ここに住めばいいじゃない。家事だけしてもらえればいつまでいてもいいわよ」

そう胸を張って輝夜が答える。

その淋しい胸を見て目を逸らした。

「いや、毎日居たら楽しくなくなるぞ。だから俺は里に帰って、ここには偶に来る事にした方がいいだろ？」

寂しそうな鈴仙にハートがチクチク痛むが仕方がない。

フラン達にも会いに行かないといけないと考えている。

「超美人な姫、巨乳女医、ウサ耳女子高生、ウサ耳ロリ。こんなに揃ってるのに？」

自分、永琳、鈴仙、てゐ率いる妖怪兎軍団を順番に指差した。

鈴仙は女子高生ではないし、てゐも見た目だけロリである。

「自分で超美人言うな。まあ、心惹かれるものはあるけど俺はまだ見ぬ所に行きたいんだよ」

まだ行つてない場所を夢見て目がキラキラしてる。

誰にも縛れない男。

「……そう。それならデュエルで決めましょう？私が勝ったら貴方はここで暮らす、貴方が勝てば里に帰る。調律者なら断らないわよね」

デュエルディスクを付け、真剣な表情の輝夜を見て覚悟を決めた。

「ああ、いいよ。俺はこれまで自分の進む道を切り開いてきた。そしてこれからもな」

カバンからデュエルディスクを取り出し装着。

庭

「まさかの味方ゼロ」

皆、輝夜側に行ってしまった地味に寂しい恭司。

あんなに仲良しだった妖怪兎達まで居なくて少し凹んでいる。

「ふふん、私の人望よ」

腰に手を当て、胸を張り自信満々に言ってくる。

「えー」

「何よ!」

疑いの眼差しを向けられてぶんすか怒っている。

「どつちかと言えば恭司を帰したくないから姫に付かないといけなのよね」

「師匠、姫様には勘違いしてもらった方がいいですよ」
妖怪兎一同頷いている。

全員帰したくないから恭司側に付かなかっただけだった。

「早く帰って慧音の二つの立派な山を見たいわ(さっさと始めようぜ)」

「くっ、このおっぱい星人!」
本音と心の声が逆に出でしまい、輝夜の怒りのボルテージが上がっていく。

恭司の思わぬ本音を聞いた永琳と鈴仙は、自分の胸を見て安心しに

こやかになっていた。

「ふっ、大は小を兼ねるんだぜ？」

「絶対負けないわ。女の子に戻して徹底的に辱めてあげる、早苗と一緒に」

早苗とは魂の姉妹と言ってもいいくらいに仲良くなっていた。鞭や蝋燭用意しなきゃ、とぶつぶつ呟く声が聞こえてくる。

「デュエル！！」

「私のターン、ドロー！……モンスターをセットしてターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！スクラップ・ゴブリンを捨て、クイック・シンクロンを特殊召喚。そしてクイック・シンクロンをリリースしてスクラップ・ゴーレムを召喚。そしてスクラップ・ゴーレムの効果で墓地のスクラップ・ゴブリンを特殊召喚する。レベル5スクラップ・ゴーレムにレベル3スクラップ・ゴブリンをチューニング！三つの輪がゴーレムを包み光の星に変えていく。」

「静寂を破り裂き、幻想に到った姿を見せる！シンクロ召喚！鉄屑の竜、スクラップ・ドラゴン！」

久々の登場にいつもよりも多く咆哮をあげている。

ATK2800

「いきなりシンクロ召喚……！燃えてくるわ！」
キラキラした目で見てくる。

「そりやどうも。カードを一枚伏せてスクラップ・ドラゴンの効果発動！そのセットされたモンスターとこの伏せたカードを破壊する」
スクラップ・ドラゴンの口から吐き出された光がセットされたモンスターを飲み込み、その反動を殺す為に叩きつけた尾で自分が伏せたカードを破壊した。

「くうっ！」

その衝撃に耐えている。

「俺が破壊したのは呪われた棺。セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、相手は次の効果から1つを選択して行う。自分の手札を1枚ランダムに捨てる。それから自分のフィールド上モンスター1体を選択して破壊する。輝夜の場にモンスターは存在しない、だから手札を1枚ランダムに捨ててもらおうか」
お得意のコンボで蹴散らしていく。

「くっ、能動的に使ってくるなんて」

手札を一枚ランダムに捨てて忌々しそうにこちらを見てくる。

「それが調律者の恐ろしい所なんですよ。輝夜にダイレクトアタック！スクラップ・バースト！」
再び口を開き、光線を吐き出し輝夜を飲み込んだ。

「きゃあああっ！……これくらいで負けてられないわ！」
LP4000 LP1200

ふらつきながらも恭司をキッと睨みつけた。

「カードを一枚伏せてターンエンドだ」
しかし対峙する恭司の姿は輝夜達が今まで見てきた中で一番力強い。運は全て恭司に向いている。

「私のターン、ドロー！……ふふっ。恭司、再び貴方に見せてあげるわ。高等儀式術を発動、そして非常食を発動して高等儀式術を墓地に送りLPを1000回復するわ。そして高等儀式の効果でデッキから甲虫装甲騎士を二枚墓地に送り、終焉の王デミスを降臨！」
LP1200 LP2200
ATK2400

「デミスとデビルドージャー、デミスドージャーか……」
最初と変わってないなら勝てるなど考えている。

「デミスの効果を発動、LPを2000支払ってデミス以外の全てのカードを破壊させてもらうわ！」

LP2200 LP200

「まあ、全部読めてたからな。トラップカードオープン、威嚇する咆哮を発動！このターン、輝夜は攻撃宣言をする事ができない。さらにスクラップ・ドラゴンが相手に破壊された時、墓地に存在するシンクロモンスター以外のスクラップと付くモンスターを1体特殊召喚する。俺はスクラップ・ゴーレムを蘇生させる」

ATK2300

「ええっ！？で、でもデミスに巨大化を装備、墓地の昆虫族2体を除外してデビルドージャーを特殊召喚するわ！うう、ターンエンド！攻撃を封じられ驚愕、無駄に足掻いている。

デビルドージャーが特殊召喚され、デミスが巨大化して立ちほだかった。

終焉の王デミス

ATK2400 ATK4800

デビルドージャー

ATK2800

「俺のターン、ドロ！。スクラップ・ゴーレムの効果でスクラップ・ゴブリンを蘇生、そしてレベル5スクラップ・ゴーレムにレベル3スクラップ・ゴブリンをチューニング！」

再びシンクロ召喚を行い始めた。
だが呼び出すのは別のシンクロモンスター。

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」
紅い悪魔の竜が降臨し、輝夜の前に立ちふさがった。

ATK3000

「スターダスト・ドラゴンと同じように調律者がよく使うシンクロモンスター……」
その禍禍しくも美しい姿に見惚れてしまう。

「レッド・デーモンズ・ドラゴンでデビルドージャーを攻撃！灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」
そんな事は関係ないとばかりにレッド・デーモンズ・ドラゴンの吐き出した火炎がデビルドージャーを飲み込んでいった。

「きゃあああつー！」
LP200 LP0

「また負けちゃったわ……」
Orz こうなっている。

入り口

「あー、やっと帰れる。熱がこんな大変な事になるとは」
荷物を背負って永遠亭から出てきた。
少し離れた場所に見慣れた少女がいる。

「あつ、恭司！やっと戻れたの？早く帰ろ、慧音も待ってるよ。髪もかなり伸びたねー」
こちらに気づいた妹紅が駆け寄ってきた。
そのまま自然に腕を絡め、その場をぐんぐん離れていく。

「妹紅、あのツインテールはなんだ？」
迷いの竹林の入り口辺りをうろろしているツインテール。
誰かに似てるなと思いつつ妹紅に聞いてみた。

「あれも天狗だよ。最近よく見るんだよね」

「……あ、多分あれだ。貴方が鉄恭司よね？」
こちらに気づいて近づいてきた。
文のように一本下駄で分かりやすかった。

「あー、よく間違われるんです。俺は天道恭司って言う別人ですよ」
面倒なのはスルーに限るな、早く里に帰りたい。と嘘を吐いた。
いつか嘘を吐くのを怒られる時が来る。

「あ、ごめんなさい」

人違いだったとすまなそうな表情。
それと少し疑っているような表情もしている。

「いえ、いいですよ。綺麗なお嬢さんになら幾ら間違われても。それでは」

嫉妬した妹紅に腕をつねられながら歩き去っていった。

「……」

やはり何かおかしいと二人の後を付け始めた。
正直バレバレの尾行である。

「しりとりしようぜ。妹紅からな」

何故か唐突にしりとりを始めようとしている。

沈黙が気まずく、つねられている腕を放してもらう為にも違う方向に意識を向けようと必死。

「もんぺ」

焦らず普通に返してくる妹紅は既に染まっている。

つねるのはやめたが腕を絡めるのはやめないようだ。

「ぺったん娘」

「今の言い方が変わったような……」

「ほら、早く。妹紅が負けたらスカートになつてもらうつもりなんだから。拒否は出来ないからな、答えは聞いてない！」

「なっ!?!じゃ、じゃあ私が勝つたら恭司はこの寒さの中一日禪だ

けだからね！」

負けたらスカートがショッキングだったらしい。
禪なら恥ずかしいだろうととしてやったりな表情で恭司を見ている。

「望む所だ。俺は幾らでも寒さに耐えてやんよ。ただし、妹紅のスカート姿が見たい俺は誰にも負ける気しないはず」

最近恭司も常識を捨て始めている。

元からとか言うな。

「こ、香水！」

恭司から色んな話を聞いたり、香霖堂で外界の本を立ち読みして色々詳しくなっている。

「イーノック」

そんな返しで大丈夫か？

「く、靴！」

大丈夫だ、問題ない。

「つるぺた」

「狸！」

「きつつき」

「狐！」

.....

.....

…
…

「わんこ」

「こ、こ、こ……コイン！あ」

シンプルに負けた妹紅。

少女よ、これが絶望だ。

ターンエンド。

「フウハハハハ！勝った！この超紳士、鉄恭司の勝ちだ！やったぜ俺、凄いぞ俺！」
めっちゃテンションが上がっている。

ツインテールにつけられているのを忘れて名前を言ってしまうくらいに。

「やっぱりあんたが鉄恭司なんじゃない！」

バーン！と空を飛び二人の頭上を飛び越えて目の前に着地。
ビシッと指を差してくる。

「紫か……アウチ！」

頭上を飛び越える瞬間に上を向きしっかり目に焼き付けていたらしい。

ぼそつと呟いたら妹紅にあんよを強く踏まれた。

「わざわざ取材をしにきたのに逃げようとするなんて」

「取材……？そのツインテール……そうだ聞いた事がある！」

恭司がハツとした顔になった。

思い当たる情報があったようだ。

「知ってるの？恭司」

「最近変態になってきた射命丸が言っていた……。仲間に引きこもり、ヒツキーがいると。それがお前だ！」
ビシッと指差した。

「引きこもり言うな！」
ペースを乱されまくりでどうしたらいいか分からなくなっている。
奴は常に予想の斜め上に行く。

「ふっ、凶星か」
超紳士は不敵に笑っている。
何でこんなに偉そうにしているのかが分からない。

「何でこいつだけ念写が……」
ぶつぶつ呟いている。
念写しようとするのと全て真っ黒でSOUND ONLYという赤文字が浮かび上がる。
射命丸に写真を撮られているはずなので全部そうなるのはおかしい、と引きこもりをやめて取材に来たようだ。

「取材なら早くしてくれよ。寒いし早く帰りたい」
マフラーにコートでも寒い。
足踏みして暖を取っている。

「まずは写真を撮らせて」
新聞作りに必要な物。

写真一枚撮るのにここまで時間がかかったのは超紳士が一筋縄では
いかない存在だからである。

「ああ、分かった。それで君の名前は？」
名前を知らないのに今気がついた。
女になって踏んでくれと要求してくるのが分かるので文には聞きたくないようだ。

「姫海棠はたて」
答えながら写真を撮っている。
今回は普通に映っているようでご満悦。

「色々呼び名を考えたがはたてでいいか」
写真を撮られながら答えている。
妹紅はスカート確定でもじもじしながら空を見て、誰かに言い訳している。

「よし、それじゃあ色々聞くからね。逃げようとしたんだから覚悟しなさいよ……って何してんのよ」
新しいペンと手帳を取り出したはたて。
そんなはたてに近づき肩を組んだ恭司。

「まずは一緒に写真を撮らせてくれ。ほら、美人なんだから笑った笑った」
自分の携帯のカメラ機能でツーショットの写真を撮ろうとしている。
フォルダには今まで出会った様々な人妖達とのツーショットが収められていたりする。

「あ、え、でも」
急におろおろし始めた。
撮られるのには慣れていないらしい。

「誰にも見せないから安心しろって。ほら撮るぞ」
妖精が居ないので密着して自分で撮影した。

「はたて、顔が真っ赤だな。風邪でもひいたのか？……やっぱり俺には無理無理。すまん、密着しすぎた」
鈍感な真似をして鳥肌がたっている。

写真は二人とも笑顔だが、はたては真っ赤な顔でぎこちない笑顔だった。

「べ、別に平気よ。それよりも取材させて」
まだ顔が赤いままだが、そのまま取材を始めた。

「……ってわけだ。あ、一応言っておくがこれは射命丸にも話してない事だから。さっきのお詫び代わりに」
自分の血筋やら三幻魔等について語っていた。
アカデミアで起きた面白おかしい事件なども。

「……ありがとう。新聞が出来たら届けるから」
そう言っただけで飛んでいってしまった。
スカートを気にしていないから下にいる超紳士が歓喜。

「俺もラッキースケベなのかな。痛い！」
絶景かなとニヤけながら見上げている。
しかし悪い事は出来ないもので、いつのまにか言い訳を終えていた妹紅に足を強く踏まれた。

「まったく、相変わらずスケベなんだから」

ジト目で見てくる妹紅。
嫌悪感等はないようだった。

「男がそうじゃなかったら人類滅ぶだろJK」
開き直る超紳士。

早朝まで女の子だったとは誰も思っまい。

「それじゃあ、私の事もそういう目で見たことあるの?」
「やだー、と恭司をからかうように両手で体を抱き締めて距離を取った。」

「それであるって言ったらどうする?」
妹紅に近づき、冷たくなっている頬に手を当てた。
目と鼻の先まで顔を近づけてみたり。

「ま、またからかってるんでしょ」

「違うよ。俺は妹紅の事……」
このまま妹紅ルート突入かと思ったら、どこからか飛んできた弾に当たってピチュウった。

「え?あ、慧音」

頬を赤く染め、ドキドキが納まらない妹紅。
里の方から慧音が走ってくる姿が見えた。

「はあはあ……まったく、妹紅をからかうんじゃない」
嫌な予感がしたらしく、猛ダッシュで来たみたいで呼吸が乱れている。

「……痛たたた。何があっただ……け、慧音」

気づいたら慧音が目の前にいた。
厚着してるのに立派だなーと思いながら胸を見ている。

「恭司」

さくさくと雪を踏みしめながら近づいてくる。

「た、ただいま」

脳内アラートが凄鳴っている。
だが逃げるわけにもいかない。

「おかえり」

そのまま抱きついてきた。

真面目でクールなイメージの慧音の予想外の行動に胸キュンポイントが半端ない。

「胸キュンポイントが……ん？慧音、いい匂いがする」
くんくんと慧音の香りを嗅いでいる姿は変態……ちょっと犬っぽかった。

「恭司が置いていったシャンプーとリンスだ」

胸に顔を埋めながら言っているから籠もって聞こえる。
綺麗な髪の毛が陽光で輝いている。

久々に会う慧音は美しさ30%増しだった。

「いい香りで素晴らしい！あ、そうだ。今日は久々に俺が飯作るよ」
抱きついたままの慧音に言った。

さっきまであんなに構ってくれてたのに、と独り言を呟きながら妹
紅はつまらなさそうにミニ雪だるまを作っている。

人里

「おはよう爺さん、また遊びに行くからな」

「応、風邪治ったのか！坊主と将棋するの楽しみにしてるからな！
すれ違った豪快な爺さんに挨拶している。
がっはっはっ！と笑っていた。

「おばあちゃん、また今度漬物とか色々教えてもらいに行くからな」

「恭司ちゃん、元気になったんだねえ。用意しておくからねえ」
昔話等を楽しそうに何度も聞く恭司は爺さん婆さんに人気があつた。
梅酒やら果実酒の作り方を習い、様々な果実酒を作ってみたりもしている。

慧音宅。

「恭司、大人気だったね。びつくりしたよ。ところで途中会った青年が言つてたミアキスを胸に！つて何？」
老若男女、様々な世代に知り合いがいた事に妹紅は驚いている。

「ふふん、俺って人望あるんだぜ？ミアキスについては秘密だ」
里の青年と未婚の男性を集めて恭司がリーダーになって作った秘密結社。

主な活動は里の娘で誰が可愛いかの調査、恭司の作った新作料理の試食等々多岐に渡っている。

ミアキスとは恭司が香霖堂でたくさん仕入れてきたバッジに描かれている架空の生物の名前で、メンバーは皆そのバッジを持っている。

「まあ、それはいいがあ的女性は誰なんだ？」

美人で大人の色気がある女性に話し掛けられていたのが気になる慧音。

関係が気になって仕方ない。

「最近迷い込んで来た外来人だよ。何でも夫が失踪してからフラフラ探し回ってたら幻想郷に迷い込んでたらしい。俺が保護して外に帰るか聞いたんだけど、借金の問題もあつて帰りたくないって言われてさ。俺が里長に直接話をしたら、こっちをチラ見しながらも即空き家を貸してもらえたんだ」

俺には何で貸してもらえないのかと聞いたら、頼むから慧音先生と暮らしてくれと縋りつかれていた。

何かトラウマになってるらしく、絶対にダメ！と恭司には貸してくれなかった。

「道理で私が見たことないわけだ」

「今は美代ちゃんの父親がやってる甘味処で働いてるよ。良く出来た嫁さんだったみたいで製菓衛生師の資格もあつたみたいで即戦力だよ」

仕事の事まで面倒を見てあげていた。

いつのまにか里でかなりの人脈が作られている。

「あの女の人がそうだったんだ。凄い美人だよな」

妹紅は恭司を連れていくので何度も遭遇している。

会う度に深々と頭を下げてくるから不思議に思っていたのが氷解したようだ。

「その彼女なんだけどな、新しい恋をしてるんだぜ？あの八百屋の傍の……」
炬燵でワイワイと話している。

数十分後

「あいつは一昨年、嫁さんに先立たれてずっと塞ぎ込んでいたから丁度いいのかもしれない」
慧音がお茶を飲みながら答えている。

「それなら二人には幸せになってもらいたいな。周りに住んでる爺ちゃん婆ちゃんもお似合いだって言ってたし」
恭司もお茶を飲んでいる。
まったりとした時間は久々だった。

「……」
二人の話に飽きた妹紅はみかんの白いのを一生懸命取っている。
何か恭司に関わってから若干精神的に緩く、幼くなつたように思えた。

遂に復活した恭司。

つかさの状態で一度だけ訪れた里。
それが原因である男が大変な事になっていたりする。

続く。

超紳士復活、レベルは20。(後書き)

二月はやりたいゲームラッシュ。

逆転検事2にマクロストライアングルフロンティア、TOWレディ
アントマイソロジー3、PSP02i。

笑ってはいけないスパイ、録画していたのを見たけど浜田人形が普通に面白かった。

ある師走の出来事。(前書き)

霖乃助が振り切る。

妹紅が着替える。

慧音が嫉妬。

今回もやりたい放題書いてやったぜ。

ある師走の出来事。

「霖乃助、この剣格好良いな」
全体がエメラルドの不思議な剣を見て言っている。
自分呼んでいる様な気がして仕方がない。

今日はお休みの香霖堂。

最近いつのまにか増えていたりする商品を二人で整理する為である。
ちなみに恭司は前日たまたま寄って頼まれたから手伝いに来ていた。
永遠亭から里に戻って二日しか経っていないのにアクティブすぎる。

「欲しかったら持っていきなよ。僕と恭司の仲じゃないか……だから、たまにでいいからつかさんに来るように言ってもらえないかい？あの薬師に頼めるのは恭司くらいだろうしさ」
頬を赤らめ、頭を掻きながら言うてくる。

恭司「つかさだと知っているのは一部だけ。
新聞には永遠亭に現われた謎の少女としか載せられていなかった。

「え？あ、ああ。永琳に伝えておくよ……」
頬を引きつらせて返答した。

カウンターの写真立てに飾られているのは射命丸から買ったらしい
つかさの写真が収められている。
どうやら霖乃助は心を撃ち抜かれたらしい。

「お願いするよ。ああ、早く彼女にお会いしたい」
あの霖乃助がこんなにも恋い焦がれるには訳がある。

彼が店を休みにして里まで買い物に向かった日、無理矢理鈴仙にくつついて里まで来たつかさと遭遇。

ちよつとした事で足首を捻って痛みに耐える霖乃助を見かけ

『あ、大丈夫か霖乃助？足首捻ったのか。よし、肩貸すから移動するぞ』

霖乃助に肩を貸し人通りが少なく、座れる場所まで連れていく。

自分の外見が変わっているのに今まで通りに接しているのは開き直っているからか。

『き、君は？何で僕のことを知っているんだい？』

いい香りと柔らかい身体にドキドキしながら尋ねている。

何故か安心できる居心地のいい存在だった。

『そりゃ知ってるに決まってるだろ。ほら、見せてみる』

足首に触れて確認を始めた。

痛いところはないか？と上目遣いで聞きながら確認している。

『いつ……！そ、そこが痛いっ』

『待つてる。捻った時の手当てなら慣れてるんだ』

手慣れたように、もしもの為にと持ってきていたポーチから色々取り出し固定している。

『ありがとつ。あつ……』

さらさらな黒髪、動く度に揺れていい香りがする。

しゃがんで作業しているから、膝くらいまで伸びている髪の一部が地面に着いて汚れてしまっている。

『よし、できた。これから買い物だろ？俺も付き合っから』
髪のをれを気にせず、にこやかに笑いながら再び肩を貸した。
笑顔を見るたびにドキッとしてしまう。

『あ、ありがとう』

半妖でも効果は抜群の惹き寄せる魅力。
密着していると心を簡単に許してしまいそうになる。

『まずはあつちの店だな』

肩を組んだまま世間話をし、色々と買い物をしていく。

『ほら、こうすればいい。帰りは足に負担かけないように』
購入した商品を入れたエコバックを手渡した。
送っていつてあげたいけど鈴仙を待っているから、とすまなそうな
声で謝っている。

『大丈夫だよ。つかささん、今日はありがとう。このお礼は必ずす
るから』

名字は言わずに名前だけ教えていた。

買い物の最中、霖乃助にはラブコメの主人公のような事が起きてい
た。
バランスを崩して倒れた霖乃助がつかさの胸を鷲掴みにしたり、少
し離れて店のおばさんと話していたつかさのスカートが石につまづ
いておろしてしまったり。

スカートをおろした時には霖乃助は里の男達に英雄扱いされていた。
あまり気にしないつかさに変わって店のおばさんにビンタされたり

していたが。

『そだなー。胸揉まれたり、パンツ見られたりしたしなー』
ニヤニヤと意地悪そうに笑っている。
お色気担当の面目躍如。

『う、ごめん』
顔を赤らめながらあわあわしている霖乃助は珍しかった。
そして自分の手を見て握ったり開いたりしている。

『……えっち』
胸を両手で隠して距離を取った。

『うあつ！ち、違うんだ！これはその……』
ハツとして弁解している。
嫌われたくないと思って必死である。

『あははっ、嘘だつて。気にしてないよ。またな、霖乃助！』
可愛らしくウインクして走り去っていった。
無意識に女の子っぽい事をしているのに気づいていないのは幸せなのかもしれない。

『ああ、何という麗しさ……。奪われた……。ああ、そうだ奪われてしまった。つかささん、僕は君という存在に心奪われた男だ』
短時間で完全に心奪われていた。
今まで会ってきた中でも不思議な魅力を持っていたからだと考えながら帰っていく。

「お礼も用意してあるんだ。このリボンなんだけどどうか？あの綺麗な黒髪を地に付けないように選んだものなんだけど」
霖乃助が見せてきたリボンは白く、手触りもよかった。

店の商品ではなく、アリスと物々交換して手に入れたようで質もかなり良かった。

「い、いいんじゃない？」

その内にまた女の子にならないといけない空気に、若干頬がひくひくしている。

「それならよかった。整理して店の見栄えもよくしておかないとね。彼女にどう思われるか分からないし」

ご機嫌で店内を綺麗にしていく。
居住しているスペースは既に綺麗にしてある辺り本気度がわかる。

「どうしてこうなった……」

飾られている写真に触れようとすると霖乃助から殺気を感じる。
しかもメイド服でお玉を突き付けているあの時の写真なのが余計に恥ずかしい。

「あ、この服とか彼女に似合うと思わないかな？メイド服が似合うんだから絶対いいと思うんだ」
チャイナドレスを指差し、着ている所を想像してテレテレ。

「ああ、いいんじゃないの？てか霖乃助も性的な事に興味あったんだな」

かなり投げ遣りな反応で返している。
女の子になるのは嫌だからどうにかならぬか考えているが、どう

にも出来ない絶望。

「そりゃ僕も男だからね。あの母性溢れる胸とすらつとした綺麗な脚には目がいくさ。あ、この事は秘密にしておいてくれよ?」
手をにぎにぎし、顔を赤らめてニヤニヤしている。
何を想像しているのか丸分かりである。

「へ、へー」

変身してしまっていた本人が目の前に居る時点で手遅れ。
もし次に変わったとしたら、さらしはきつく巻こうと決めた。

「恭司は彼女を見てないのかい?入院してたらしいじゃないか」
そんな入院していた恭司を羨ましいと言うような目で見てくる。
ゾッコンってやつらしい。

「俺が入院してたのは別のところだったからな」
さらつと嘘を吐いている。

女になってたんだよ、なんて本当の事を言えるわけがない。

「そうだったんだ。君が恋敵にならなくてよかったよ」
本気でホツとしている。

恋はいつだって唐突らしいが、この恋だけはダメでござる。

「そうだな。俺は慧音とか美鈴みたいな頼りになるお姉さんがいいし」その二人にはデレデレ。

特に美鈴には膝枕をしてもらったり、ちゅーしてもらったりと羨ましくて爆発してもらいたい。

本人にちゅーしてもらった記憶がないのはざまあwww

「彼女の麗しさが分からないなんて可哀想だな。これだって射命丸

に色々渡してようやく手に入れたんだよ」
メイドつかさの写真を手に取りニヤニヤ。
霖乃助のちよつとクールなイメージが木っ端微塵だった。

「霖乃助はなかーま」
思わず肩を組んでしまった。
やはり類友である。

「なかーま」
霖乃助も肩を組んできた。
店内で肩を組み合う漢二人。

「だがそれはドン引きされる。絶対にやめておいた方がいいぞ」
スク水とブルマを指差した霖乃助に忠告。
拾ってきた霖乃助は相当あれだ。

「そうだね。仲が深まったら着てもらえないか聞いてみることにするよ」

この霖乃助はもう手遅れな程の一途な変態思考。

「とりあえずさっさと片付けるぞ」
綺麗に整頓していく。

女物の服・下着等は別区画に並べ、男物を離して並べていく。
ALIENと書かれたTシャツを見つけ、欲しくて仕方なくなった
が堪えて陳列した。
時折センスがぶっ飛んだ物に惹かれる事がある。

数十分後。

「なんとという事でしょう。あんなにぐちゃぐちゃだった店内がこんな綺麗に」

見やすく整理整頓され、霖乃助も満足気に頷いている。

「完璧だね。これで招く準備は出来たし、お茶でも飲むかい？色々話もしたいしね」

思っていたより早く片付けが終わったようで誘ってくる。

「おっ、いいな。お茶菓子にも期待しよう」
ウキウキと居住スペースに向かっていった。

.....

.....

.....

.....

.....

「赤G3に紫G2あるから ガンダムは五国で出せるな。資源を2払って配備エリアにロールイン。そして資源を1支払ってプルツィをセット。プルツィがサイコミュ持った に乗った事でサイコミュを+1、ギラ・ドーガを宇宙と地球両方に出撃させる」

どんな流れか分からないが二人でガンダムウォーをプレイしている。この世界ではデュエルモンスターズの陰で細々と生産されていたみたいだった。

「白五国あるからキラ・ヤマトとフリーダムガンダムを手札から宇宙に……」
霖乃助も楽しそうに戦っている。
おい、デュエルしろよ。

数十分後。

「デュエルモンスターズ以外は久々にやったが楽しいな。最近のはルールがよく分からないけど」
前に試してみたようだが、ガンダムウォーの実体化は出来なかった。一時期かなりガツカリしていたせいか、慧音達に心配され優しく接されていた。

「僕のデッキとデュエルするの嫌がるんだからこれしかないだろ？」

「ロックバーンとかネチネチしてて戦いにくいんだよ。ラヴァ・ゴレムとかヴォルカニック・クイーンでモンスター除去もしてくるし」

思い出ただけでゲツソリしている。

ロック除去に気を取られ、波動キャノンで倒されたのが相当効いている。

「魔理沙も突破出来ないって悔しがってたよ。エクゾディアが揃わないって嘆いてたし」

どうやらツケをチャラにするかどうかでデュエルをして勝ったらしい。

「エクゾディアはロマンだからな。エクゾディアの精霊を深夜に見

「た時は漏らすかと思った」
かなり怖かったらしい。

想像してほしい。

深夜寝苦しくなり目を開くと両手両足が宙に浮いており、顔が覗き込んでくる姿を。

下手なホラー映画よりも怖い光景。

「そろそろ帰るわ。用事思い出したから」

「それじゃあ、よろしく頼む。出来るだけ早めに来てもらえたら嬉しい」

くれぐれもと手を握って頼まれた。茶葉とか渡されて里に帰っていく。

慧音宅

「あー、わくわくする。慧音がない今日がチャンスだったとは」
炬燵で暖まりながらwktkしている。

理由としては遊びに来た妹紅に服を手渡し着替えてもらっているから。

「き、着替えたよ……」

顔だけをこちらに見せているポニーテールな妹紅。
もじもじしている姿が可愛い。

「おおつ、ポニーテールも似合う。しかし服を見せるのを焦らすとはなかなかやるな。早く早く」
恭司は早く見たくて仕方がない。
なかなか入ってこようとしない妹紅に催促している。

「ど、どう？ やっぱり似合わないでしょ……」
俯き、顔を赤くしながら呟いている。

ミニスカートにセーターと可愛い姿で、白く綺麗な脚が眩しい。

「いや、可愛いよ。似合うじゃないか」

サムズアップして褒めている。
携帯を構えた。

「だ、ダメ！ 記録に残すのは絶対にダメ！ 恭司の記憶にだけ残しておいて！」
慌ててこちらに走り寄り、携帯を押さえ付けて言うてくる。

「……わかったよ。だから今日一日はそのまま居てほしいな」
炬燵に入りなと隣を空けて招いた。
そこにいそいそと入ってくる。

「はあ、あつたかい。脚がかなり冷たいよ」

「お嬢さん！」
何かを思いついたように恭司が隣で垂れている妹紅に呼び掛けた。
ニヤニヤしている。

「なあにい？」

テーブルに顎を乗せて垂れている。
たれもこう。

「パンツ見せてもらってもよろしいでしょうか？」
急に真似したくなったらしい。

それを聞いて垂れていた妹紅がバツと身を起こし、渾身の右ストレートを繰り出した！

「な、ナイスパンチ……ぐふっ」
いい感じに決まりぴくぴく震えている。

「このスケベ！」
真っ赤になりながら炬燵を離脱し、着替えに走って行ってしまった。

「冗談だったのに……」
いつもの格好に戻り、恭司の隣に戻ってきた妹紅はまだ少し怒っているみたいだった。

「スケベな奴の事なんて知らないよーっだ」
それなのにわざわざ隣に座り、怒ったフリをするのが愛らしい。

「甘味処でお汁粉奢るから許してください妹紅様ー」

「……はあ、しょうがないね。許してあげる」
そう言っって手を握ってくる。

恭司の手を妹紅が握って暖めるのが、慧音が居ないこの時間帯の日課になっていた。

冷たい手は心が温かい人の証拠と聞いたりするがどうなのか。

「あつたかー。決闘者は手が命、妹紅の手が羨ましいな」
ぎゅっと手を握って暖を取っている。

女の子の手を普通に握れるようになってるのが成長した証拠。

「ねえ、今からお汁粉食べにいこうよ」

いいでしょ？って手を離し、腕を絡めてくる。

恋愛した経験なんてゼロと言ってもおかしくない妹紅。

だから距離感が分からないので腕を組むくらいは普通なんじゃないかと思っっている。

「慧音居ないけど仕方ないか。お土産に団子買って帰ってこような」
立ち上がり、妹紅と一緒に玄関に向かった。

外。

「戸締まりよし、じゃあ行こうか」

「おー！」

仲良し二人組の出撃を里の人達は微笑ましく見守っている。

つかさに惹かれて崩壊した霖乃助。

それに関して現実逃避気味な恭司。

そして可愛いミニス力妹紅。

今日も幻想郷は平和だった。

続く。

おまけ。

「羨ましくなんてないんだからね！」

「うわあ、大胆だね」

相変わらずカップルが多い甘味処。

皆専用ジュースを飲んでいるのを見て顔を赤らめる妹紅に悔しがる恭司。

「私が提案したサービスですから。最初は無料で、次からはお金を戴くようにと」

かなり美人でスタイルも良い女性が妹紅と恭司にも運んでくる。

やはりカップルに好評でリピーター続出らしい。

美代ちゃんのお父さんはうっはうは状態。

「なるほど。で、あれからどうなった？」

ニヤニヤしながらその女性に進展があつたか聞いている。

この女性が恭司が面倒を見た外来人のようだ。顔を赤らめもじもじする様は年上には見えない。

「えっと、その、い、一緒に暮らす事に……」

嬉しいのと恥ずかしいので真っ赤。

一人で来ている彼女目当ての男達の悲痛な叫びが聞こえてくる。胸に付けたミアキスバッジが虚しく輝いている。

「おお、やったじゃないか！」

「おめでとー」
祝福する恭司と妹紅。

周りのカップルからも祝福され、ぺこりと頭を下げ引つ込んでいった。

幸せオーラが体に漲っていたのがよく分かる。

「……さて、逃避していたが避けられないぞ」

「……タダより怖いものはないね」

二人の真ん中に置かれている一つの器に二本のストロー。

お試し用は小さめの容器らしく、同時に飲むと顔が凄く近くなる。追い込まれると柔軟な考えができなくなるのか、交互に飲むって案が出てこない。

「よし、じゃあせーので飲むぞ。目は閉じるんだぞ、恥ずかしいからな」

「慧音に見られたら私達絶対に頭突きからの座布団なしで正座、三時間説教になるよ……」

覚悟を決めた二人は目を閉じストローを手にした。

周りも妙な緊張感で二人を見守っている。

「「セーの!」「」

目を閉じてストローに口を付けた。

互いに少し身を乗り出す形だから、外から見たらうまい具合にキスしてるように見える。

ごくごくとすぐに飲み干し離れた。

「うわあ、何だこれ。照れるってレベルじゃねーぞ!」

「これ、いいかも」

いやあっ!と悶えている恭司と何か気に入っている妹紅。微笑ましく見守る周囲のカップル。

「ほう、私が授業を終えて帰ろうとしている時にこんな事をしているとはな」

そして二人の傍に立つ慧音大魔神。

嫉妬と仲間外れにされた事でかなり怒っている。もう普段の八倍怖かった。

「「セーの!」「」

注文した分のお金を置き、慧音を見ないようにして二人で店の外にダッシュ。

背後から追い掛けてくる気配。

「止まらないと撃つぞ!」

「止まっても撃つだろ！」

「嫌な予感がする！」

里の外までBダツシユする二人。

里から出た途端に激しい弾幕が背後から飛んでくる。

「見える！俺にも弾幕の軌道が見えるぞ！」
とにかく避ける避ける。

「慧音！私は悪くないの！恭司が私に無理矢理！」

「あ、てめえ！嘔吐くなよ！」

仲良く並んで疾走している。

駄菓子菓子

「転世『一条戻り橋』」

背後でスペルカードを発動する慧音様。

発動した事により慧音に戻っていく弾幕。

「ちよっ」

「け」

それを言い合いをしながら疾走していた二人が避けられるはずもなく、当然仲良くピチュった。

慧音宅。

「大変申し訳ありませんでした……」

「ごめんなさい……」

二人の頭に来たたんこぶ。

寒さでガタガタ震えながら謝っている姿はちょっと面白かった。

「……恭司は今度私と一緒に甘味処に行ってもらおう。妹紅は一カ月甘味処に行くの禁止だ」

大胆にも色々やった妹紅に対する嫉妬で若干厳しかった。

早苗が出現するようになってから慧音も積極的に動いてはいる。

「うん、いいよ」

「な、なんで私だけそんなに重い！？恭司だけずるい！」

よかったと安心する恭司と慧音に詰め寄る妹紅。

罰に差がありすぎると憤っているようだ。

「妹紅、恭司はこれから每晚私の部屋で資料作りもしてもらおうから落ち着くん」

「え、冗談？」

手書きの大変さを思い出し、少し顔色が悪くなった。

毎日とか言われているのを聞いて妹紅は満足したらしい。

「それならいいかな。私だけ辛いのが嫌だもん」

「慧音と夜に二人つきりという事は……。慧音先生のはちみつ授業

とか」

何か楽になることを期待した目で慧音を見ている。

既成事実が作れるんじゃないかという考えが慧音の心を過ったが、頭を振り正気を取り戻した。

「……そんなものはない。これは罰なんだからな」
まだ少し心惹かれている。

「うう、がんばります……」
慧音には素直だった。

おしまい。

ある師走の出来事。(後書き)

GSも発売された今、皆様どうお過ごしでしょうか。

自分は目当てのカードが特に無いのに4箱買ったのが不思議です。

後は近所の本屋でGX2巻を3冊、4巻を3冊、6巻を3冊も購入しました。

何であんなに売っていたのか不思議で仕方ないけど。

最近積んでたTOWRM2やってるけど、やっぱりクラトス格好良
い。

好きな女性キャラはリリース。

エプロンドレス姿って何か惹かれるものがある。

クリスマスは宴会に変わりました。(前書き)

勇儀の姐さん。

防御力超特化。

第一部のエリナ現象再び。

クリスマスは宴会に変わりました。

「何でまたこんな事になってんだよ……」

寒空の下、境内に立つ恭司。

目の前には一本の角を生やした金色の髪の女性。

立派なメロンを二つ持っていらっしやる。

「萃香の事を倒したって聞いてからずっと興味があっただよ」

嬉しそうに笑っている。

不意も突けないので勝てる訳がなかった。

クリスマスの夜、何故か慧音と妹紅と紅魔館メンバーに博麗神社まで連行されていた。

クリスマスだからと張り切って作った料理も全て持って行き、その数に霊夢は凄く喜んで持て成し、歓迎してくれた。

現在恭司は自分用の猪口を持ってどこかに向かっている。

「萃香、約束果たしに来たぞ」

「あ、久しぶりー。ほら呑も呑も」

そう言っつて萃香の前に座ると持っていた猪口に酒を注がれた。

一緒に酒を飲む約束をしていたのをちゃんと覚えていたらしい。

「酒なんて何年ぶりだろう」
サテライトで荒れていた少年時代に呑んでいたようだが、この体では初めて。
前回は酔う訳にはいかないので呑めないのを装っていただけだった
りする。

ぐいっと一気に流し込んだ。

「おー、イケる口？」

恭司の胡坐の上に座り嬉しそうに見上げてくるが、角が偶に刺さり
そうになる。

「ん、まあな」

アルコールに強い身体のように特に違和感を感じられない。
萃香の注いだ酒が飲みやすかっただけの可能性もあるが。

「おっ、居た居た。萃香、そいつが前に話に聞いた人間かい？」

一本角でスタイルの良い女性が歩いてきた。

何だか姐さんと呼びたくなるのは俺だけではないはず。

「そっだよ勇儀。あの時は本当にあのまま殺されるかと思ったよ」
身体中の間接外してくるんだもん、とけらけら笑いながら話してい
る萃香は豪快だった。

「えっと、どちら様で……？」

嫌な予感が180くらいするが聞かないわけにはいかなかった。

「あ、恭司。こいつが前に紹介しようとした私の仲間だよ」

「星熊勇儀。よろしくな、恭司！」

あはははっ！と背中をバシバシ叩いてくる。

とつてもフレンドリーな姐さんだった。

「いたたたた。よ、よろしく。俺は鉄恭司……って言わなくても知ってるんだっただか」

萃香の仲間だからまた小さいんだろうなと思っていたから困惑している。

誤解されないようにフォローするなら背の話である。

「なあ、私とも勝負しないか？私が勝ったら一晩付き合ってもらおうって事でさ」

くいつと持っていた杯を傾けて誘ってきた。

一度鬼と戦って大怪我を負い、それでも再び真正面から鬼とぶつかる覚悟があるかを試す意味も込めている。

「じゃあ、俺が勝ったらちゅーでもしてくれるのか？」

試されているのに気づかないのがこの男。

少し酔い始め、セクハラ発言まで飛び出す始末。

空きっ腹に酒、しかも一気に飲んだのがまずかったかも。

「ちゅー？あははっ、いいねえ！わかった！嫌って言うてもちゅーしてあげるよ！」

鬼は嘔吐かないからね！と言って、また背中をバシバシ叩いてくる。

怖じ気づいて逃げる所か、今回も真正面からぶつかるつもり恭司にご機嫌になっている。

面白い人間のカテゴリーに入ってしまった。

「いたたたた。やるなら境内でやろつ。宴の前座にちようどいいだろつしな」

持ってきていた水をぐいつと飲み干し歩いていった。

境内

「俺の自爆でした」

水を飲んで冷静になり、寒空の下風に吹かれて酔いが覚めていた。そして十数分前の回想をしてこの状況が自爆なのによやく気づいた。

永遠亭組はWelcomeとばかりに治療の準備をし、紅魔館組はフランが心配そうにこちらを見ていて美鈴が嬉しそうに手を振ってくる。

慧音は額に青筋を浮かべ、妹紅は退屈そうに眺めている。

他にも何だ何だと見に来る宴会参加者が多数。

「じゃあ、始めようか」

「ま、待った！」

ウキウキした様子の子の勇儀に対して、焦りまくりな恭司が待ったをかけた。

純粹な勝負では十中八九勝てないので頭を使うようだ。

「なんだい？」
闘る気満々でギラギラした目をしている。

「一撃、一撃で決めよう。俺が星熊さんの攻撃を受けて耐え切った
ら俺の勝ち、気絶したら俺の負け。どうだ？」

「これでも冷や汗が止まらない。
鬼の一撃はかなりトラウマになっているが、何発もくらわないように
するにはこれしかないと考えての決断だった。

「うーん。……まあ、いいか。一撃だね？」

恭司の提案に少しだけ悩んでいたが了承し、一撃の為に構えを取っ
た。

ギラギラしている目、力が入っているのがよくわかる腕。

「……ああ」

背筋がゾクツとする程の闘気に逃げ出したくなる。

少し後悔しているが覚悟を決め、上着を脱いで長袖のシャツだけに
なった。

その胸元に輝くのはALIENの文字。

結局買ったらしい。

無言で向かい合う二人。

皆、真剣に成り行きを見守っている。

目を閉じ呼吸を整えていた恭司が目を開いた。

「来い！」

覚悟完了。

腹部に打ち込ませようと両腕を開いて見せた。その潔さに勇儀もニツと笑って答える。

「いいね、気に入ったよその覚悟。死ななかつたらいい関係が築けそうだよ」

そう言うと恭司の視界から消え、次の瞬間腹部に凄まじい衝撃が走った。

凄い勢いで物体が衝突した音が神社に響き渡り、腹部に受けた衝撃で恭司は吹き飛ばされるように後退していく。

俯いたままで顔が見えずそのまま木に激突し、その木が衝撃を受け止め折れる事であろうやく恭司は止まった。

シーンと静まり返る神社。

真っ先にフランが駆け出した事で皆動き始め、恭司の元に駆け寄っていく。

誰もが最悪の結果を想像して真っ青になっている。

だが……

「よっし……フ ……よし!!」

そこにはノーダメージの恭司がしっかりと立っていた。

服の腹の部分が破けているがまったく怪我をしていない。

勇儀を含め皆が啞然とする中、駆け寄らなかつた美鈴だけは嬉しそうに拍手しながら歩いてくる。

「師として鼻が高いです。丹田法をこの短期間で完全に物にするなんて本当に凄いですよ!」

撫で撫でしてあげますね!と恭司の頭を撫で撫で。

「おおつ、色んな意味でサンキュー。でもお気に入りの服の腹のところに穴開いちゃったわ……」
割れた腹筋が丸見え。
無駄な筋肉を付けない鍛え方で細いのにがちりとしている。

「ねえ、サマナー。大丈夫なの？痛くないの？」
絶対に死んだと思っていたから涙目なフラン。
無事と分かり、安堵からその場に座り込んでいる。

「平気だよ。あ、でも木に衝突したから背中が痛いな。怪我はしてないから安心してくれ」
座り込んだフランの目元に浮かぶ涙を優しく拭い、笑顔を向けた。

「よかった……。サマナーが死んじゃってたら、私が仇を取らなきゃって思ってたもの。決めたわ……能力の制御を出来るようにする、それで私がサマナーを守るから。だからこんな無理な事しちゃ嫌だよ……」
凄く悲しそうな顔をしていて、その表情に凄く罪悪感を感じてしま

う。
「……わかったよ、フラン。無茶は出来るだけしないって約束するから」
紅魔館のメンバー以外はフランの変わり様に驚いている。
前回の宴会の時よりもさらに普通になっているからかもしれない。

それで納得したのは分からないが美鈴の背後に隠れてしまった。
仕方がないので勇儀に声をかける事に。

「星熊さ」

「勇儀！勇儀って呼びな。気に入ったよ。並の妖怪でも軽く昇天出来るくらい力を入れた一撃だったんだけど、まさか耐え切るなんて思わなかったよ」

名字を呼ぼうとしたのを遮り、名前で呼ぶように言ってくる。後半の勇儀の言葉に恭司の顔が青くなった。

「生きててよかった……。GJ、俺！」

生きている事に感謝と丹田法を完全に物にしていた自分を称賛。防御に全エネルギーを注いでいたから、穿たれる瞬間服の内側で腹部がぼんやりと輝いていた。

「こつちおいで。勝者へのご褒美だよ」

ご機嫌で手招きしている。

強烈な一撃を耐え切った人間の存在に嬉しくなっているようだった。

「いや、ご褒美は今度にも……うわっ！」

勝った時のご褒美を思い出して今度にしてもらおうとしたが、腕を掴まれてそのまま引っ張られ勇儀の腕の中に。

「遠慮するなって。……でもな、その、さっきはああ言ったけど私は初めてなんだ」

何が？と聞こうとした時には強く抱き締められて唇を奪われていた。目の前には目を閉じ、顔を赤くした鬼の綺麗な顔。

「……………！」

ズキュウウウウンー！！

目を見開き抵抗しようとするが鬼の力には勝てないし、防御に全エ

ネルギーを回した事でへろへろになっている。
頬とかにしてくれるものだと思っていたからパニック状態。

その光景を見てギリツ！と何人かが歯軋りし、睨み付けている。
じたばた抵抗する恭司と逃げられないように抱き締める真っ赤な勇儀。

鬼の四天王は初めてのはずなのに舌を入れてくる大胆さで、外野は真っ赤になりながらもその光景に釘づけである。
静まり返った神聖？な神社にぴちゃぴちゃという音が響く。

「ぶはっ、はあはあ」

「はあはあ……。あうあ……」

勇儀が唇を離すと、しばらく二人の間に唾液の橋が架かっていた。

ぼんやりとした頭で目の前の女性を見ているが、完全に男のプライドが木っ端微塵。
見ているだけでドキドキが止まらない。

「え、えへへ、何か照れるね。それに不思議な感じがしたよ。包まれるような、気分が凄く良くなる……。んー、やつぱり」
性に明け透けな鬼の中でもピュアだった勇儀が、顔を赤らめ大胆に抱きついてくる。

「恭司さん、ちょっと手伝いなさい。ほら、あんた達も準備しなさいよ」

何人かの怒気を感じ、助け船を出してくれたのは霊夢。
持ってきた料理が最多だったし、お賽銭をよく入れているから友人

として仲がいい。

「あ、ああ。助かったよ霊夢」

渋々離れた勇儀と周りの視線から逃げるように霊夢の元に向かった。

二人で中に入ると同時に、外で凄惨な怒声と弾幕が展開される音が響き始めた。

屋内。

「……………って事か」

「ええ。だから……………」

二人で話ながら色々並べたりしている。

外から聞こえてくる弾幕ごっこの音は聞こえないフリ。

破れたシャツを畳んで破棄し、新しいシャツに着替えているのでお腹も冷えなくて安心。

「私はこうだと思えます」

「うわっ、びっくりした!」

「早苗、あんた付いてきてたの?」

いつのまにか居た腋巫女二号。

二人の背後にいたらしく急に声をかけた事で二人の肩がびくっ!となっていた。

「ふふふっ、当たり前です。早苗、恭司さんと名前で呼び合う二人は一緒に居るのが普通なんですよ」「当然でしょ？って顔をしている。常識を捨て去った彼女に敵はいない。」

「その理論で言えば俺はほとんどの人妖達と一緒に居るのが普通になるな」

「あら、それなら私とも居るのが普通になるわね」

割と常識がある霊夢は頼りになる人ランキング堂々の一位だった。

慧音はたまに暴走するようになってから三位に転落している。

「やれやれ、わかってませぬね。恭司さんが私の名前を呼ぶ時には愛が込められているんですよ？もちろん私が恭司さんと呼ぶ時も愛を込めています」

胸を張り自信満々に答えている。

ここにもメロンが二つ。

「もつと愛を込めてー！」

「パピ！ヨン！」

へーい！と霊夢とハイタッチ。

暇そうな霊夢にある漫画を貸し、仲間に引き込んでいたから出来るコンボ。

早苗がムツとしているがスルーして酒やら料理を並べていく。

十分後。

「なんか美鈴と慧音がやけにピリピリしてる……」
ちなみに鈴仙は現在進行形で恭司の傍にいたりする。
ただ姿が認識できないだけで。

「愛されてるわね。良くも悪くも」

「勇儀さんを見ると心臓がドキドキして顔が火照る。これは恋？それとも風邪？」
さっきので惚れてしまったのか、勇儀と目が合うと心臓のドキドキが止まらない。
向こうは目が合うと嬉しそうに手を振ってくれるが、同時に美鈴と慧音の鋭い視線がチクチク刺さる。

「馬鹿な事言っていないで飲まないで料理もなくなるわよ」
そう言っただけ料理を食べに行ってしまった。

各々楽しんでいる中、ある場所だけはピリピリしたままだったりする。

「恭司、ほらこれ飲みな」
勇儀が隣に座り体を密着させ、杯に酒を注いで飲ませようとしてくる。

そんな恭司は勇儀の柔らかい肢体と、さっきの出来事が脳内で延々リピートされてもう心臓が爆発しそうだった。

「楽しく飲むって約束したからねー」

ケラケラと笑いながら胡坐の中で萃香が酒を飲んでいる。

遠くからアリスが口パクでロ・リ・コ・ンと言っているのが見えた
りする。

「恭司、これを食べてみないか？」

「恭司さん、これ飲みましょう」

慧音と美鈴は既に攻略される側から、する側が変わっているの
ったり。

ウラヤマーデス。

「一辺に言われてもその、何だ……困る」

綺麗な女性に囲まれておろおろしてしまうのは仕方がない事。

早苗は何だかよく分からない駆け引きとか言って離れ、鈴仙は輝夜
達の元に帰ってこちらをチラチラ見ている。

妹紅は離脱してフランと話していたりする。

恭司繋がりで話が進み、そこにレミリアやパチュリー達も加わり話
がさらに盛り上がっている。

恭司の知らない所で予想外の交友関係が築かれている。

「いいからいいから」

「ほらほら」

飲ませたり食べさせたりと鬼二人は容赦が無い。さつき全力をガードに使って振り払う元気もないからどうしようもないが。

「恭司さん、はい。いつものお礼です」

料理を箸で掴み差し出してくる。

弁当やらパンやらを差し入れしたり、この前はコートを買ったので感謝しているようだ。

一緒にシエスタをして咲夜に怒られたり、楽しく話をしたり、魔理沙を撃退したりと色々やっている内に好感度が高まり、恭司を攻略する側に回った美鈴。

勇儀にキスされる前までなら恋敵達から一歩抜き出していた存在だったりする。

「ほら、私が作った煮物だ。最近腕が上がったんだぞ？」

慧音は筍の煮物を箸で掴み差し出してくる。

言わずもがな尊敬や守護者だから等ではなく、一人の女性としてハクタク化しても見てくれる恭司に恋慕している。

弟のような存在に対する好意だろうと思われているのに気づき、どうにかしようとかんばっている最中である。

一つ屋根の下で一緒に暮らしているので、一番進展がありそうな女性。

「いや、マジでそんな一気には無理……むがっ」

ほいほいと口に入れられていく料理。

そして合間に注ぎ込まれる酒。

だんだん限界を越えてきたのか目が据わり、頭がフラフラ。
萃香は違う場所に行ってしまった、勇儀慧音美鈴と包容力のある三人に囲まれ幸せなまま眠ってしまった。
目を閉じようとした時、三人が何か言っている姿が見えたが我慢できずに意識を夢の世界に飛ばした。

新しい鬼の女性との出会い。
望んだことだが大胆に奪われた唇。
これは恋なのか、また風邪なのか。

続く

おまけ。

「……何度見ても普段の破天荒具合が嘘みたいな寝顔だ」

「甘え上手なんですよね」

慧音と美鈴がスヤスヤ寝ている恭司の寝顔を覗き込んでいる。
酒臭いのは仕方がない。

「本当に面白い人間。うりうり」

姐さんは頬をつつつきながら酒を飲んでいる。

「うーん……」

つつつかれてうなされている。

その頬はぶにぶに。

「よいしょっと」

手慣れた動作で頭を膝の上に乗せる美鈴。

秋にはよく膝枕をしていたようで、寝顔を見ながら優しく頭を撫でている。

「紅さん、足が痺れたら困るだろう？私が代わろう」

その手があつたかつて顔をした慧音がそわそわしている。

「美鈴でいいですよ。足は慣れてますから大丈夫です」

秋の紅魔館の門前で、よく恭司がP3ごっこをして楽しんでた。

……目を閉じますか？

・目を閉じる

……

「そ、そうか……」

シユンとして引き下がった慧音。

姐さんは寝顔をジーツと見て顔を赤くしたり、頭を振ってみたりと忙しい。

「本当に不思議な人ですよ。恭司さんが関わってからレミリアお嬢様とフランお嬢様の仲も良くなりましたし」

愛しそうに頭を撫でながら呟いている。

ただの人間が紡いだ絆が全てを好転させている。

今回の事で能力の制御が出来るように訓練をすると決めたフランがいい例。

「確かに不思議な男だと思う。寺子屋に来なくなっていた子供達も、恭司が来てからは毎日来るようになった」

仲間外れはせず、寺子屋が終わってから一緒に遊ぶ子供みたいな先生だから毎日通いたくなる。

子供達がやりたい事にしつかり付き合うのがいいのかもしれない。

妹紅も明るくなり、以前では考えられないくらい人と関わっている。朝と夜に来ては恭司と戯れあつて帰っていく毎日。

自警団にも寒いと嫌がる恭司を無理矢理連れて行くくらいに自由奔放。

「攫つて行けばよかつたかもしれないねえ……」

ぐいっと酒を飲みながら呟く勇儀。

多少加減したとはいえ無傷で耐え切った恭司を気に入っている。

くすぶるHeartに火がつくのは秒読み段階だった。

おしまい。

クリスマスは宴会に変わりました。(後書き)

年上人外キラーK。

幻想水滸伝は2が一番面白かった。

ビッキーは俺の嫁。

PSPをお持ちの方は安くなってるので幻想水滸伝1 & amp ; 2
の購入をお勧めします。

宴会の翌日、まだ続いてた。(前書き)

すり替えておいたのさ！

すぐに治った二日酔い。

でれでれーせん。

サイバー流チート。

宴会の翌日、まだ続いてた。

「……朝なのにまだ続いてる。頭痛い……」
騒ぎ声とガンガン痛む頭で目を覚ました。

朝になってもまだ宴は続いているようで、追加の料理等々が置いてあったり。

何人が寝ていたりするが、それでも騒がしかった。

「……え、何これ。ドッキリ？」

状況を把握すると誰かの膝に頭を乗せていて、お腹に上海が乗っている。

起きているのかは分からないが左腕にはパチュリー、右腕にはフランがひつついている。

パチュリーは着痩せするタイプなんだな、と現実逃避していると膝枕の人物が覗き込んできた。

「ようやく起きたのね」

覗き込んできたのは美鈴ではなく何故かアリスだった。

そして説明と言う名のツンデレ具合を發揮してくれた。

あの寝てしまった後に色々あつて慧音達は向こうで飲んでいるらしく、アリスが仕方ないと見ていてくれたようだ。

フランは一緒に見ていたらしいが、パチュリーはいつのまにか居たらしい。

「すまん、今頭を退けるから……痛たたた」

二日酔いで頭が痛くて仕方がなく、苦痛で顔を歪めている。
折角のアリスの膝枕も痛みでそれどころじゃなかった。

「いいから、まだ横になってなさい。上海、お水持ってきてあげて」
いつにも増して優しいアリスに、弱った恭司の胸キュンポイントが
上がる。

スクツと立ち上がった上海が恭司の頬に軽くチュツとしてから水を
取りに飛んでいった。

「アリス、上海にチュツてされたんだが」

「最近の上海、自主的に動いてる気がするのよね。でもロリコンな
恭司は嬉しいんでしょ？」

上海は半自動だったのが八割自動くらいになっている。

からかっているのか、それとも本気で思っているのかまたもロリコ
ン呼ばわりである。

上海、阿求、フラン、レミア、萃香と見た目幼女に人気な恭司の
心にはグサツと刺さってしまう。

やったね恭ちゃん！

まだまだ増えるよ！

「ロリコンじゃない。けど頬にちゅってされるのは男なら誰だって
嬉しいわ」

「ふーん……ん」

急に顔を近づけて頬にちゅってしてくるアリス。

アリスが何を考えているのか分からず、啞然とした顔で見上げてしまっ。

「あ、アリス？」

まさかアリスにされるとは夢にも思わず聞き返してしまった。

「か、勘違いしないでよね。本当に嬉しいのか試したただけなんだから、別に恭司が好きとかそんなんじゃないんだからね！」

真っ赤な顔でツンデレっておられる。

最後に頭に響く声量で言われたせいで頭がずっきんずっきん。

「た、頼むから少し声小さめで……」

苦痛に顔を顰めている。

二日酔いの時にツンデレを相手にする時は、用法用量を守って正しく相手してください。

「ごめんなさい……って、何で私が謝ってるのかしら」

「うう、頭が痛い……」

そうこうしている内に上海が鈴仙まで連れて帰ってきた。

それに気づいたアリスが慌てて膝を引き抜いたせいで、恭司は頭を畳に打ち付けてしまう。

普段ならたいして影響はないが、今回は頭に響きその場で苦しみ悶えている。

そんな何かに悶えている恭司を鈴仙は心配そうに覗き込んで声をかけてきた。

「恭司、大丈夫？あ、そうだこれ飲んで。師匠から二日酔いに効く薬貰ってきたの」

ひつついていたフランとパチュリーの二人をゆっくり引き離し、赤くなっているアリスを尻目に何の迷いもなく膝枕をしている。

上海はテーブルにコップを起き、お腹に乗ってすりすり。

マーキングみたいで可愛い。

「れーせん……おれはもうだめかもしれない。あたまががんがんと……」

甘えるように鈴仙のお腹に顔を押しつけている。

痛くて痛くて周りの目を考えてなんていられず、アリスに冷たい目で見られているのにも気づかない。

最初はお腹に顔を押しつけられてびっくりしていた鈴仙だが、慈愛の表情で頭を撫で始めて幸せそうだった。

鈴仙も既に攻略する側だが、攻略される側でもいけるので二度おいしい。

「弱気な恭司も可愛い……」

うつとりした顔で幸せそうに頭を撫でている。

ちよつと最近粘着気味で、姿を見えないようにしてストーキングしてくるくらい的好感度の賜物である。

アリスがうつとりとした顔の鈴仙に引いているが気にしない方向で。

「……あ、すまん鈴仙。我を忘れてた」
頭の痛みが一時的に治まり、鈴仙のお腹から離れて膝から頭をどけた。

転がり落ちそうだった上海を抱き上げて肩に乗せ、アリスの冷たい目線は無視。

「それじゃあ、まずは薬を飲んで？」
可愛らしく八意印の薬を見せてくる鈴仙。

「う……」
躊躇してしまうのは女の子になったり、犬耳が生えたりしたからだろう。

毎回トラウマを植え付けられている。

「はい、あーん」
粉末らしく、手を添えて飲ませようとしてくる。
じーっと見てくる赤い瞳が美しい。

「あ、あーん……」
仕方なく口を開き、注がれてくる粉末を受け入れた。

何故か一緒になって口を開けている上海が可愛い。

「うっ、苦い……!!」
舌に粉が触れた途端に口に苦みが広がり、慌ててコップを手に取って水で流し込んでいく。

数分後

「流石永琳の薬だ、なんともないぜ。サンキュー、鈴仙」
肩の上海が頭に座っても平気なくらいになっている。

指で上海の頬を撫でてあげると嬉しそうに頬摺りしてくるから可愛くてたまらない。

恭司の心のオアシス。

「どういたしまして。あつ、そうだ。今日はね恭司が好きだって言ってた香りなの」
ナチュラルにぎゅっと抱きついて甘えてくる鈴仙。
どうやら昨日から甘えたかったみたいで我慢の限界だったようだ。

妹紅が蓬莱人である事をカミングアウトしたように、鈴仙もまた己の罪をカミングアウトしている。

恭司には鈴仙の辛さを理解する事は出来なかったが、その辛さを受け入れてあげる事は出来た。

その日から前以上にべったりくっついてきたり、姿を見えなくして

のストーキングが始まっている。

「シャンプー？……うん、桜の香りっていいな」

パチュリーとフランに毛布を掛けてから鈴仙に向き直り、鈴仙から感じられる香りに答えている。

「へえ、恭司って桜の香りが好きなのね」

隣に座ったアリスが意外そうに言うてくる。

ハートをばらまきながら抱きついている鈴仙は見ないことにしたらしい。

「ああ、いい香りするし。少し腹減ったな……」

テーブルに置かれているおつまみ代わりの料理をちまちま食べ始めた。

しばらくすると、ある程度甘えて満足したのか鈴仙がアリスに挨拶して雑談に混じり始めた。

三人で里での流行りや、好きな料理などを楽しげに話しているとニコニコした輝夜が現われた。

「恭司、私の新デッキとデュエルしなさい」

目の前に座り、服を緩めてちらつと胸元が見えるようにして気を引こうとしている。

「それは輝夜がやっても……いや、なんでもない。デュエルだな、よしかかってこい」

チラツと見て何か言おうとしたら、めっちゃ輝夜に睨まれたので挫折。

料理を横に退け、軽くテーブルを拭いてデッキを乗せた。

その隣でさり気なく胸元のボタンを外してアピールしている鈴仙と、その鈴仙を見て戦力差に怯むアリスがいた。

頭上の上海はどこから取り出したのか、いそいそと何か羽織っている。

「ふふん、もう負けないわよ」

「自信满满だな。俺も負けるつもりはないけど」

「デュエル！」

互いにデッキをシャッフルし、五枚ドローして手札にしている。

「私のターン、ドロー！ ジェムナイト・サファイアを守備表示で召喚。カードを一枚伏せてターンエンドよ」

DEF2100

「ジェムナイトか。ドロー！ 魔法カード融合を発動、手札のサイバ

「ドドラゴン2体を融合してサイバー・ツイン・ドラゴンを融合召喚」

ATK2800

「何で初手で出せるのよ……」

「サイバー・ツインでサファイアを攻撃させてもらっ」「ソリッドヴィジョンもなく、まったりとしたデュエルだった。」

「トラップカードオープン、マジカルシルクハット。サファイアとデッキからモンスター以外のカード二枚を裏側守備表示でセット」

DEF0 x3

「とりあえず、右と真ん中に攻撃させてもらっ」

「ジェムナイト・フュージョンとジェムナイト・サファイアよ」
普通に戦闘破壊されて墓地に送られた。

「バトルフェイズを終了、セットされたそのカードもマジカルシルクハットの効果で破壊だ。カードを一枚伏せてターンエンド」
もう一枚もジェムナイト・フュージョンだったように破壊され墓地に送られた。

「私のターン、ドロー。墓地のジェムナイト・サファイアを除外してジェムナイト・フュージョンを手札に加えるわ。墓地のジェムナイト・サファイアを除外してジェムナイト・フュージョンを手札に加えるわ。そしてジェムレシスを召喚し、デッキからジェムナイト・サファイアを手札に加えてジェムナイト・フュージョンを発動！ジェムナイト・サファイアとジェムナイト・クリスタで、ジェムナイト・アクアマリナを融合召喚よ」

ジェムレシス

ATK1700

ジェムナイト・アクアマリナ

DEF2600

「うわ、厄介な奴を……」

「墓地のサファイアを除外してジェムナイト・フュージョンを再び手札に加えるわ。そして場のアクアマリナと手札のジェムナイト・ガネットを融合、ジェムナイト・ルビーズを召喚。アクアマリナが場から墓地に送られた時、相手の場のカード一枚を手札に戻せるからサイバー・ツインを戻してもらおうかしら」

怒濤のコンボで追い詰めてくる。

ジェムナイト・ルビーズ

ATK2500

「リバーカードオープン、融合解除。サイバー・ツインを戻して墓地のサイバー・ドラゴン二体を自分の場に特殊召喚する」

サイバー・ドラゴン×2

ATK2100

「……まあ、いいわ。ジェムナイト・ルビーズの効果発動、ジェムレシスをリリースしてエンドフェイズまでルビーズにその攻撃力を加える」

ATK2500 ATK4200

「……」

「ふふん、安心するのはまだ早いわよ。死者蘇生でジェムナイト・クリスタを蘇生、ルビーズの効果でクリスタをリリース。そしてサイバー・ドラゴンに攻撃！」

ATK4200 ATK6650

「だけど輝夜は詰めが甘い。手札からオネストを墓地に送り、相手モンスターの攻撃力をエンドフェイズまで攻撃されたサイバー・ドラゴンに加える」

ATK2100 ATK8750

「ええっ！？た、ターンエンド」

LP4000 LP1900

「俺がオネスト二枚握ってたら即死だったな。俺のターン、ドロ。……パワー・ボンドを発動し、今ドローした手札のサイバー・ドラゴンと場の二体のサイバー・ドラゴンを融合。サイバー・エンド・ドラゴンを召喚」

積み込んでいたんじゃないかってくらい綺麗に手札がなくなった。

ATK4000 ATK8000

「うう、女の子にして可愛がる企みが……」

「ダイレクトアタック」

もうかなり緩かった。

頭上の上海はビシッと決めている。

恭司の服を再利用し、オシリスレッド風の上着を着ているのが愛らしい。

「私が負けても第二、第三の私が現われるわ！覚えておきなさい！」
そう捨て台詞を残して逃げていった。

「輝夜、またなー」

ひらひらと手を振って見送った。

永琳に泣きついて見えているのが見える。

「あれ？この子が着てるのって……」

上海のオシリスレッド風のジャケットに鈴仙が気づいた。

「上海？……おお、お揃いじゃないか」

頭から下ろして見てみると、お揃いのジャケットを着ているのに気がついた。

「恭司のボロボロになったジャケットの生地で作ったのよ。捨てようとしたのを上海が何回も持ってくるんだもの……」

「いいなあ……」

鈴仙は自分のトレードマークでもあるブレザーを脱いででも、お揃いの欲しいようだ。

「あ、そうだった。アリス、お金払うから後2着くらい頼めない？
いつでもいいんだけど」

いつダメになるか分からないから予備がどうしても欲しい。

アリスに頼もうと思っていたのでちょうどいいタイミングだった。

「……いいわ。ただし、いつになるかわからないわよ」

頼られて照れているのか若干頬が赤い。

「ありがとう。たまに干していると風に飛ばされてなくなってるから不安だったんだよな」

その度に誰かが持ってきてくれるからなんとかなっているが、いつ

かはロストしそうな気がしている。

飛ばされたのを持ってきてくれるのは文、三月精、鈴仙とまちまち。香でも焚いて香りづけしてくれているのか、毎回いい香りがするのでありがたいと思っている。

「どんな強風だったら飛ぶのかしら」

「外での常識は通じないって理解してるから大丈夫だ」
すっかり幻想郷に染まっていた。

楽しく過ごしているが、もうしばらくするとレミリアや咲夜、早苗等のデュエリスト達が自分の欲望を叶える為に挑んでくるとは夢にも思わない恭司だった。

695

年越しまで後六日。

初めて迎える幻想郷での正月。

大晦日は手伝いに駆り出される事は間違いない。

続く。

宴会の翌日、まだ続いてた。(後書き)

フランとパチュリーはただくつついて寝ていただけ。

星蓮船、ようやく友人のプレイを視聴。

キャラが掴めればその内にも。

最後に、ゆっくりは可愛い。

20万PV特別編 お預けのZノ愛でいっぱい(前書き)

一途さを振り切るぜ。

守護騎士達はフリーダム。

シグナムと散歩。

20万PV特別編 お預けのZノ愛でいっばい

「まさかここが桃源郷だったとは」

「恭司」

「恭司さん」

慧音と美鈴に左右から抱きつかれてニヤニヤが止まらない。対面に座る三人が般若のような顔をしているのはスルー。

何故美鈴がここに居るのかというと、最近居眠りをせずがんばっているから特別にお休みを貰えたらしい。

それで折角だからとお泊りに来たから美鈴が居る訳だった。

美鈴は恭司の格闘関係の師であり、守護騎士達も一目置いている。

「マスター、私のおっぱいなら直にさわ」

「お前は自重しなさい。一瞬心がぐらついたがダメだろ」

振り切ったリインフォースが全て言う前にカットイン。

直に触れるチャンスに心が揺れたが、慧音達の手前お願いしますとは絶対に言えなかった。

「主、ハーレムは困るとか言っていたのはどうしたのですか？紅だけは何特別扱いですか？」

ビキビキと額に青筋を浮かべるシグナム。

独占したいくらいに愛している主を二人に盗られて気に入らない。

「だって慧音が冷たい恭司は嫌いだって言っただもん」

慧音以外に少し冷たく接していたらそう言われ、焦って色んな人に愛を振りまき始めていた。

一途な自分は返上したらしい。

「もん、じゃないです！それなら私達にも愛をください。特に私にください」

騎士とか戦士とかどうでもよくなってるのか、シグナムが激しいアプローチを掛けてくる。

今までコンプレックスを持っていた胸も大きくてよかったと言っくらしいに。

「あ、それなら私も愛が欲しいわ」

「私はマスターの子供が欲しいです」

一人だけ愛の先にあるものを欲しがるリインフォース。すっかり緩くなっている守護騎士達だった。

「ちよつとは自重しろよお前達。あ……痛たたたた！」

三人に構っていたら嫉妬した慧音と美鈴に脇腹をつねられている。小さくつねっているからかなり痛い。

「私達を無視しないでくれ」

「師匠の事を無視するのはダメですよ」

二人の好感度は色々突き抜けてしまっている。

ペルソナで言うところのコミュニケーションだとMAXである10を越えて20くらい。

「くっ、主！そんなにデレデレしないでくださいー！」

「いや、無理だろJK。美人二人に抱きつかれて頬が弛まない訳がない、柔らかいし」

普段頼られる立場の二人に甘えられるのもデレデレしてしまう原因。おっぱい星人でもあるから三倍くらい嬉しいというのは心に秘めている。

「美人だなんてそんな……」

美鈴はデレツデレ。

頬を朱に染め、目を潤ませている。

「ふふっ、ありがとう」

慧音も嬉しそうに密着してくる。

三人がイチヤイチャし始めたので、何らかの対策を練る為に守護騎士達は出ていった。

数日後。

最近やたらと主に対する行動が酷いので、部屋に守護騎士の三人を集めて会議を始めた。

「えー、最近君達のセクハラ行為が激しいんですが」
毎日毎日色々してくるので理性を多少振り切りかけている。

肉付きのよくなったシャマルとおっぱい魔人のシグナム、何故か素でエロいリインフォースのジェットストリームアタック。好意を持って色々してくるのに耐えられる訳がない。

「ちょっとお風呂に乱入しただけです。主の手は気持ち良かった……」
頬を赤らめもじもじチラチラとこちらを見てくる。
以前からだが、この数日で完全に一人の女として主を見ている。

「うん、タオル巻かないで恥ずかしそうに手だけで隠して入ってきたシグナムは魅力的だったが……。でも背中を手で洗ってくれないと泣くって言うから洗っただけだろうが。最初の頃の騎士がどうこう言ってたお前はどこへ消えた」
手で背中を洗ったとかうらやまけしからん。

間違いない、このシグナムの照れ具合から絶対おっぱいも触っていやがる。
爆発すればいいのに。

「着替えてるとは思わなかったのよ」
見つめてくる恋するおと……淑女。
赤らめた頬に手を当てている。

「バインドで四肢を固定して突入してきたくせに何言ってるんだお前は」
着替えている最中にいきなり四肢が固定されて動けなくなり、突入してきたシャマルに隅々まで観察されまくっていた。

「うふふふふ」

「うわぁ、背筋がゾクツとしたわ」

ニヤニヤしているシャマルの笑い声に背筋がゾクツとしている。

「ふっ、お前達は所詮その程度。私は毎晩身も心もマスターと一緒に
なっていた」

凄く勝ち誇るリインフォース。

原作の面影は完全になくなっていった。

「まあ、ユニゾンしただけだがな」
身も心も一つになれるユニゾン。

戦闘前の台詞はもちろん

『さぁ、お前の罪を……数えろ！』

これに決まりだろう。

「ふふっ。マスター、その首筋のキスマークは私のですよ」
眠ったのが分かるとユニゾンアウトして唇やら首筋やらに何度もくちづけしていたようだ。

「これキスマークだったのかよ。虫刺されだとばかり思ってた……。
リグルにこの跡見せて、虫達を移動させてくれて頼んできたばかりか
りだぞ」

何とかしてもらえないかと頼んできたのに無駄足だった。

リグルは虫刺されじゃなく、キスマークだと気づいてもじもしながら形だけ了承してくれていた。

「所有者の刻印……いえ、所有する者からの刻印です」
無駄に美しくウインクしてくる。

「その美しいウインクが逆に腹立たしい。コザッキー達ちゃんと直したのかよ」

夜天の書を持って眺めてみたりしている。
じーっと見てもよく分からないだろうに。

「そうでした。マスター、私のいもう……私達の娘を作りましょう。
あの河童達に協力を仰げばすぐにでも出来ますよ！」
突然思いつき、興奮しながら抱きついてくる。

闇の書をコザッキー達が修復・整頓した時に、何故か余った様々な
ユニゾンデバイスに関するプログラムとリインフォースが提供する
自身のプログラムの一部。

そして魔法使いと技術者の協力、恭司の持つモーメントの技術。
これだけあればこの世界にリインフォース？が誕生するかもしれない。
い。

ただしデメリットとしてアリスにまたロリコン呼ばわりされてしま
うかもしれないが。

「意味わからん。第六の守護騎士って事か？……いや、待てよ。お
前等に追い掛けられた事はあっても守ってもらった覚えがない」
ハッとして気がついた。

今まで守ってくれた事が殆どない事に。

「いえ、私はしっかり主を守っています」
キリツとして言い返してくる。

シグナムは過去に一度、恭司に倒された時の攻撃方法が若干トラウマになっていたりする。

「カートリッジなんたら言っただけで紫電一閃を俺にたたき込んだ奴に言われてもな。マジで死ぬかと思ったし」
ジト目でシグナムを見ている。

紫電一閃を生身で受けて大ダメージ、ちょっとした反撃でシグナムを撃墜してから永遠亭に運び込まれていた。

「そつえば魔力を刀身に纏わせたのを見て思いついたとか言っていましたね。叩き落として巻き起こった砂煙から突撃してくるとは思いませんでした……」
相当強力な一撃をくらったようで、お腹を押さえて青冷めている。

「MARZ戦闘教義指導要項十三番、『一撃必殺』！シグナムには超特別指導をしたまでだ」
ちよつとだけサルファのチーフっぽく言っているが、痛みに我を忘れての反撃だったりする。

リフボードに魔力を纏わせてテムジンのブルー・スライダーを再現したらしく、入院先の永遠亭で輝夜に自慢していた。

MARZと一緒にプレイしていた事もあり、今でも見たい見たいとせがまれたりしている。

「恭司君の怪我が酷くてシグナムはザフィーラに怒られてたのよね」
うふふ、と笑いながらシャマルが会話に入ってきた。

めっちゃ仲良くなっていたザフィーラが狼状態でシグナムを正座させて説教していたらしい。

凄いシュールな光景である。

「さて、シグナムいじりはここまでにしておこう。でも新しい守護騎士とか別にいらないだろ」

「いえ、きつと需要があると思います。大きなお友達とかに」

「はい？まあ、とにかくそれは保留で」

意味の分からない発言をするリインフォースに対して保留にすると告げた。

創造するのに河童達（主ににとり）と魔法使い達（魔理沙、パチュリー、アリスに時々白蓮）からの要求を飲まないといけないから乗り気じゃなかったりする。

『誠に淫ら、破廉恥な腕であるッ！いざ、南無三　！』

とカリスマオーラ全開の白蓮にフルボッコにされた事もあった。事故なんだろうけど破廉恥な腕の時点で何をしたか分かる。

ちなみに白蓮と知り合った経緯は、魔法使い（魔導師）を（嫌々）目指している恭司の話聞き向こうから訪ねてきたからだった。

そして人外キラーは伊達ではなく、一カ月くらいで二人きりの時には甘えてくるようになってる。

人も神も妖怪も別け隔てなく接する恭司だからかもしれない。普段頼られている人に甘えられるのはとても嬉しい事だった。

里

「主、嬉しいです」
腕を組んで幸せそうに歩いている。

里の人達も見慣れてしまい何の反応もせず自然に過ごしている。
妹紅達に腕を組んだまま引っ張り回され続けた事が見慣れた原因かもしれない。

「まあ、たまにはな」
それでも身長176cmの恭司と167cmのシグナムは結構目立っている。

屋台前

「主、これは？」

「最近売られるようになった、たい焼き。この類のは作れなかったから嬉しいな」
にこにこしながら袋から取り出してシグナムに手渡している。

作りたてホカホカでいい匂い。

「ありがとうございます。ふふっ、皆の分も買ってあるんですね」

「家族だからな。それにこうすれば暖かいままだったりする」

自分の分を取り出して、残りをカードに封じてポケットに突っ込んだ。

本当に能力の無駄遣いである。

「何回見ても不思議な能力ですね。最初はうわ、今回の主は頭がおかしいのかと考えていましたが」
うんうんと頷くシグナム。

確かに能力を知らない人からしたら、カードを使うとか頭がおかしいと思われても仕方がない。

「あの謎の憐れみを込めた視線はそれかよ」
たい焼きを食べながら歩き始めた。

「だからモンスターがカードから実体化した時は本気でびっくりしました」

「お前達ダンディライオン見て目を見開いてたもんな」
たい焼きを齧りながらニヤニヤしている。

この世界に来てから出番のない恭司の相棒だった。

「初めて見たら誰だってああなります」

「十代はならなかったけどな」

「聞いた限りだとその者は既に……」

楽しく話をしながら歩いていく二人だった。

幸せになった美鈴、愛が足りないと嘆く守護騎士。

そして需要がないだろうと保留にされたリインフォースの妹分登場フラグ。

まったりとした日々はまだまだ続く。

おしまい。

20万PV特別編 お預けのZ/愛でいっぱい(後書き)

慧音に嫌われる〃死。

?の需要は戦力過多って意味で。

恭司はリリカルに関しては曖昧な知識しか持ち合わせてません。

先日LODTで引退した友人が復帰。

ライロでかなり早く裁き出してどや顔してきたんで、クイラとインティ出して月と太陽の恐怖を味わってもらいました。

神様達に軽く馴染む人間（前書き）

神様達と炬燵でぐだぐだ。
ケロちゃんにあっさりと。
三人で風呂。

神様達に軽く馴染む人間

「アルバイトらしいです」

今日は十二月三十日。

朝も早くに早苗に連れられて守矢神社に来た恭司は元旦にお守りの販売などを行うらしい。

「んー、やっぱり心地いいね」

招かれ座っていたら膝にケロちゃんに乗っかってきてずっとこのままである。

「すまないね。早苗だけじゃ人手が足りないんだ」

神奈子様がそう言うと、美人に弱い恭司はおろおろしてしまう。

「あ、いえ、大丈夫です。ただ自分で平気なのが気になりました。敬語のようなものを使っている。」

敬語が苦手でも神聖で偉い神様にはがんばって敬語を使うようだ。

「それは大丈夫だ。終わったらお節料理を振る舞う予定だからな。早苗お手製のね、と言われた。」

慧音宅では恭司が作ったお節料理を詰める準備が進んでいたりする。

「昼からは博麗神社の手伝いに呼ばれているんで最後まではちょっと……」

すまなそうに謝っている。

守矢神社で午前まで手伝い、午後からは博麗神社と元旦から忙しい。脳内で慧音達とお節を食べてから博麗神社に行く流れをシミュレートしている。

「そついえば恭司相手に堅く話す必要はないんだっただね。まあ、無理は言えないか。あっちの巫女も元旦は忙しいみたいだし」
神奈子様も砕けた口調になった。

恭司が近くにいると神様だろうが何だろうが緩くなってしまうようで、頬杖について向き合っている。

「ねえ恭司、ルマンド食べようよ」
膝に座った諏訪子様が催促してくる。

神々の造り出したアーティファクトであるルマンドを捧げるとのお達し。

「もう残り少ないですよ……」
そう言い、泣く泣く二袋だけカードの封印から解き放った。
春になったら紫に補充してもらおうとしても、あと三ヶ月を十袋はかなり厳しかった。

数時間ほど楽しく雑談していると早苗が帰ってきたようで、パタパタ走ってくる音が聞こえてきた。

「ただいま帰りました。ああ、寒いです」
コートを脱いでから、いそいそとわざわざ狭い恭司の隣に入ってく

る。

その光景を見て目の前でニヤニヤしている神奈子様。

「そのニヤニヤはなんですか」

恭司がジト目で見ながら聞いている。

ぎゅっと手を握ってきて勝手にへヴン状態になってる早苗は放置。

「いやいや、早苗の婿にならないかなーってね」

そう言っただけでニヤニヤしながらお茶を飲んでいる。

その時、恭司の体に電流走る！

そして前に諏訪子様には教えられた、神奈子様は意外とウブで奥手だ
という情報が脳裏を過る。

これはやるしかない、鉄恭司は男の子。

反撃開始。

「うーん、神奈子さんの婿になら喜んでなりたいですね。……………」

あの、何するんですか」

「……………神奈子、汚いよ」

胡坐に座っていた諏訪子様と恭司に飲んでいたお茶を吹き出してい
た。

二人共顔を拭ってジト目で見ている。

「何言ってるの！？ わ、私の婿って……………」

真っ赤になり俯いてゴニョゴニョ言っている。

反撃成功。

その光景にニヤニヤが止まらない恭司と諏訪子様。

悪戯方面でも仲が良い二人だった。

「冗談ですよ。俺じゃ神奈子さんのような綺麗な方とは釣り合い取れないですし」

某CROSSなんちゃらの主人公並に容姿に自信がないし、神様と人間じゃ無理だろうと考えている。

遊星やらジャックやらに負けなくらいの容姿はしているのにこの自信のなさ。

「私ならいいですか？」

「いや、それは分からないけども」

違う世界から戻ってきた早苗が寄り掛かってきて、肩に頭を乗せてくる。

これは流石にドキドキしてしまう。

「ふふっ、照れちゃって可愛いです。明日は一日元旦の準備も手伝ってもらいますから、今日は泊まっていつてください」

そう耳元で囁いてくる早苗。

妙な色気に胸の鼓動が激しくなる。

「て、照れてなんかないし！……え？俺、今日泊まるの？」

「あ、それいいね。また一緒にお風呂入ろうよ」

普通にケロちゃん懐きすぎている。

知らない人が見れば兄に甘える妹に見えるといいなあ。

「でも諏訪子さん悪戯するからなあ」

「えーっ。ちょっとだけ腕の傷痕舐めただけなのにー」
前に一緒に入った時に昔つけられ腕の傷痕をぺるぺるされた経験があるらしい。

なんてうらやまけしからん事をされているんだ。

「じゃあ、またデュエルで決めようよ。この前もそうだったもんね？」

ニマニマしている諏訪子様、それを見ている苦い顔の恭司。
水着で乱入しようと思んでいる早苗に、まだ何かゴニョゴニョ言っている神奈子様。

何だか力オスな空間だった。

「……………くっ、今回は負けない」
美鈴のアステカイキリー以外で初めて1キリーされたのが諏訪子様。

境内。

「あーっー」

寒そうに震えている。

「寒っ」

山の上はとても寒かった。

「デュ、デュエル！」

二人共ガタガタ震えながらで格好悪かった。
残りの二人は中でヌクヌクして居ない。

「俺のターン、ドロ！ E・HEROフォレストマンを守備表示で召喚。カードを一枚セットしてターンエンドだ」

DEF2000

「私のターン、ドロ。永続魔法、ウォーターハザードを発動。ウォーターハザードの効果で魔知ガエルを特殊召喚して、地獄の暴走召喚を発動！ 魔知ガエルは場に居る限りデスガエルとして扱うから、デスガエルを三体デッキから特殊召喚！」

魔知ガエル

DEF2000

デスガエル×3

ATK1900

「これはまたあの……」

どつやらこれで1キルされたらしく顔が引きつっている。

E・HEROフォレストマン×2

DEF2000

「デスガエルが三体いるから魔法カード、死の合唱を発動！ 恭司の場のカードを全部破壊だよ！ あーうー！」
諏訪子様の妙な叫びに呼応するようにデスガエルも合唱を始めた。その合唱に耐え切れず恭司の場のフォレストマンが吹き飛んで消えていく。

「ちよっ……！！！」
耳を塞いで耐えるもデスガエルの合唱で伏せていたヒーロー・シグナルも破壊されてしまった。

「三体のデスガエルでダイレクトアタックだよ！ デス・リサイタル！」

「うおおおっ！」
ダイレクトアタックされて境内をごろんごろん転がり回っている。

LP4000 LPO

「さっ、一緒に入る！」
俯せでダウンしていると背中に乗っかってくる。

「二回も負けたあ……」

一回目はシンクロ、二回目は融合で負けている。

ファンの方にはご褒美な諏訪子様とお風呂タイム。

風呂

「タオルは最後の砦」

腰にタオルを巻いて桶にアヒル隊長やらカエルのおもちゃを入れている。

普通に風呂で遊ぶ気満々だった。

「この前は大変だったからねー」

気にしないのかすっぽんぽんの諏訪子様。

物凄い犯罪の臭いがする光景だった。

恭司がロリコンだったらR - 18な光景が広がっていたかもしれない。

「恭司って背中洗うの上手だよね」

「まあ、俺の家族に諏訪子さんくらいの背の子が居ましたから」
タオルで綺麗に洗ってあげている。

「恭司の背中って大きい。前は傷たくさんあるのに背中には傷ないよね」

「背中への傷は相手に背を向けた時に出来ますから。誰かを守る為なら背中に傷がついてもいいですけど」

「遠慮したが、いいからいいからと言われて背中を洗ってもらっている。」

「お腹とか凄いですよね」

「うおわっ！ さ、早苗か！ 何で入って来てるんだよ！」
「すると綺麗な腕が割れた腹筋を撫でてきてびっくりしている。」

「あ、早苗も来たんだ」

「水着を探してたんです。やっぱりちょっときつくなってますね」

「てかその格好のがこの前のバスタオルオンリーよりエロいんだがスクール水着で胸がぎゅぎゅうになっただけ、目のやり場に困り目が泳いでいる。」

「一度バスタオルを巻いただけで乱入された事もあったらしい。」

「一生付き纏われる運命なのかもしれない。」

「あ……それじゃあ子作りしますか？」

「それなら私がアドバイスしようか？」

「しねえよ！ てか何でエロいって言っただけで即子作りになるん

だよ！」

嬉しそうな顔で言ってくる早苗にアドバイスが居るか聞いてくる諏訪子様。

まだ外の常識を完全に捨てられない恭司には対処が大変だった。

「あー、疲れた……」

「恭司さんつたらあんなに激しく……」

「抵抗しただけなのにそこで止めたら誤解されるだろ！」

「あははっ、恭司が来てから早苗も変わったよね」

三人で浴槽に入って暖まっている。

二人のやり取りを見て嬉しそくに笑う諏訪子様。

「人のタオルを剥ぎ取るうとする悪い子になってますけどね」

「だって、どうしても見てみたかったです」

「それなら早苗、朝に見てみたら？」

「諏訪子さんも余計な事言わんでください！」

ただ風呂に入るだけで大騒ぎだった。

「あ、そうだった。最近さ、部屋に一人で居ると誰かに見られてる気がするんだよ」

「えっ、ストーカーですか？ それは許せません！ なので私がおはようからおやすみまで恭司さんを見守る事にします」
どっちかと言えばこっちのが……。

「…………どうやら早苗ではないみたいだな。克服したと思ったんですけど、霊的なものだったら困るんで諏訪子さん今度見てもらえませんか？」

「いいよ。恭司の部屋見てみたいしねー」

女性二人と風呂に入りながらする話ではなかった。

そして十分に暖まってから先に二人を風呂から上がらせ、しばらくしてから自分も上がった。

「ここから先はR指定だ」

シャツ！と脱衣場に取り付けたカーテンを閉めて急いで着替えていく。

「それなら私は見てもいいはずですよ！」

シャツ！と急いでカーテンを開ける早苗。

隠れて覗き見していたようで、ハアハア言っつて少し怖い。

「残念だったな」

下半身は着替え終わっており、上半身だけ裸で髪を拭いている。

「……………」

しかし舐め回すように上半身を見てくる。

「うあつ、何か背筋がゾクゾクした」

長袖のシャツを急いで着て、アリス作のオシリスレッド風のジャケツトを羽織った。

「ふう、満足しました」

よく分からないが爽やかな笑顔を見せてくる。

そして夕飯

「神奈子さん、そんなにイジケないでくださいよ」

「いいいいいよ、どうせ私なんて……。三人で楽しんじゃってさ……」

部屋の隅っこで体育座りでイジケているのを恭司が復活させようとしている。

早苗や諏訪子様はご飯を運んだり、おかずを運んだりしている。

「神奈子さん、別に仲間外れにしたわけじゃないんですよ」

「いつもいつも私だけ……」
毎回恭司が遊びに来ると三人で自然と盛り上がってしまい、神奈子様だけ蚊帳の外になってしまう。

「つ、次は一緒に行動しましょう。そうすれば仲間外れなんてありませんよ」

「……………本当？」
体育座りのまま見上げてくる。

「はい。だから一緒に夕飯を食べましょう？」
手を差し出して笑ってみせている。

「……………わかった。ほら、早く行くよ」
手を握り、立ち上がると引きずるように早苗達の元に急いだ。

食後。

「たまには違う人が作った物を食べるのもいいな」
最近は家事を一手に担っていて、慧音は食器の後片付け等をしている。

「ずっと思ってたんですけど、恭司さんの家事スキルって異常ですよ。誰かに習ってたんですか？」

「異常とか言うな。おばあちゃんと従兄の兄さんから教わったんだ」
お茶を飲みながら答えている。

「そうだったんですか。ミアキスバッジを付けた人達がみんな、女だったら嫁に欲しかったって言ってましたよ。恭司さんは私の嫁だ
って言うっておきましたけどね」

「早苗、それを言うなら婿だよ」

「それ以前に早苗とはそんな関係じゃないけどな。てかあいつらには説教する必要があるさうだ」

胸を張って言う早苗を指摘する諏訪子様。

そんな二人を冷静に対処する恭司。

「……」

そしてやはり蚊帳の外でイジける神奈子様。

諏訪子様の部屋

「神奈子さんはあのままですよかったですか？」

「いいのいいの。それより早く寝よ」

早苗や神奈子様の部屋に泊まるって訳にはいかないので、毎回諏訪子様の部屋に泊まる事になっていた。

「……もう疲れたんで寝ましょう」

ジャケットを脱ぎ、用意されていた二組の布団の一つに入った。

「おやすみー」

諏訪子様も帽子を外して隣の布団に入っていた。

明日の大晦日は一日準備に使われる。

そして明日も泊まる事になる。

元旦は両神社でお手伝い。

続く。

おまけ。

深夜

皆が寝静まった後、諏訪子様の部屋の襖がスーッと開きパジャマ姿の早苗がそーっと部屋に入ってきた。

そして当然のように足音を殺し、恭司の寝ている布団に入っていく。

「……………ぐっすり寝てますね」

一瞬外気にさらされた時に身じろぎしたが、早苗が潜り込んできても起きずに眠っている。

どうやら最初からこうするつもりで諏訪子様の部屋に布団を二組敷いていたようだ。

一度眠るとなかなか起きない事を調べ上げていた早苗にはまたとないチャンスだった。

「ぐう……………」

「うふふっ、幸せ。こんな気持ちを向けるのは恭司さんだけなんですからね。おやすみなさい……………」

起きていたら絶対にもらえない事をされ、蝶最高な気分で眠り

についでしまった。

無意識で目の前に来た早苗を抱き締めていた。

どうやら早苗を置いてきた抱き枕と勘違いしているようで、安心して顔でスヤスヤ眠っている。

たまに慧音も早苗と似たような事をして、朝方にこっそりと部屋に帰っていたりする。

「寒い……」

もぞもぞと暖かい隣の布団に移動し、恭司の背中に張りつく諏訪子様。

まさにサンドウィッチ状態。

明日の朝は大騒ぎになる事間違いなかった。

おしまい。

神様達に軽く馴染む人間（後書き）

TGを本編で使うにはモーメントをエンジンに使ったD・ホイールとクリア・マインドの境地に達しないとイケないのか！。

EXVC10パック追加購入。

ウル ハルバード。

スー ワンダー、サイバー。

ありがとう神様とショップの店員の人。

今回TG以外はスー以上バーサーカーだけだな。

マイソロ3が楽しくて仕方ない。

傭兵はしっかり連動サイトにアップしてます。

正月、元旦から宴（前書き）

守矢組カッタ。

一瞬で着替えた正装。

超積極的な勇儀。

絶不調。

正月、元旦から宴

「うーん、似合ってるのかな」
着用した自分の姿を見ているが、自信がないから不安そうにしている。

元旦、守矢神社から帰ってきて博麗神社に向かう前に慧音達に紋付羽織袴と完璧な礼装に着替えさせられていた。
黒髪黒目だからしつかり似合っている。

「はぁー、馬子にも衣装だね。あのスケベな恭司には見えないよ」
意外と根に持つ妹紅が厳しい事を言ってくる。

「酷いや……」

「うん、似合うじゃないか。次は妹紅だ」
着替えた慧音が出てきて感想を言ってくれた。
着物姿も艶やかで美しい。

「慧音も似合ってる綺麗だよ。妹紅の着物姿は楽しみすぎる」
扇子を片手にニヤニヤしている。
どうからかってやるうかと楽しみにしているのがバレバレだった。

「綺麗すぎて惚れてもしらないからね」
ニヤニヤされてイラツとしたらしく、慧音を連れて部屋に入っていた。

十数分後。

「しかし事務職用だからとか言われて神社の袴とか着せられるとは思わなかったなあ」

「恭司、どう？ 似合ってるでしょ」

午前中の忙しさを思い返していると、ようやく着付けが終わった妹紅が出てきた。

その姿は美しく、慧音に負けず劣らず似合っている。

「おおっ、俺の予想以上に似合ってる。ああ、もこたん可愛いよもこたん」

「そ、そう？ えへへ」

からかわれたりするかと思っていたが普通に褒められて照れている。

「二人共そろそろ行こうか。恭司は向こうで手伝いがあるんだろう？」

忘れてたと焦りながら三人で博麗神社に急いで向かった。

道中すれ違う人達に新年の挨拶をしながらなので結構時間がかかっているが。

博麗神社

「珍しく人が結構いるな」

妹紅達と別れ、霊夢を探して歩き回っている。

人もそれなりに居り、賽銭箱も少しは潤うと思う。

「あけましておめでとう、今年も仲良くしましょうね。さ、来たなら早く着替えて手伝って」

さっさと出てきて腕を掴み、着替えさせようとグイグイ引っ張って行く。

「あけましておめでとう、霊夢。しかし何をそんなに焦ってるんだよ」

「恭司さんの袴姿が高く……何でもないわ。早く着替えてきて袴姿がどうにかなるのか口に出しそうになっていた。

なんとか誤魔化し来客用の部屋の前に着くと無理矢理押し込み、用意された服を着るように伝えている。

「まったくもう……。さっさと着替えるか」

……

……

……

……

……

「いや、待て。勝手に着たらダメなんじゃないのかこれ」
部屋から出て霊夢に確認している。

事務職用のものはないのか、上下とも神主用の物だった。
長いこと誰も着ていなかったようでした。しまわっていたのを引っ張りだ
してきたようだ。

「別にいいわ。一緒にお守りとか売ってもらっただけだもの」
背中をぐいぐい押して、自分の姿が映らないような位置取りをして
いる。

「わかった、わかったから押すなって……。ん、フラッシュにシャ
ッター音？ 射命丸か？」
どこで撮っているのか分からないが聞こえてきて見回している。

「天狗はどうでもいいから早く行くわよ」
何故か凄く機嫌が良くなっている。
背中を押す力も強くなったような気がする。

「鉄の兄ちゃんは正月から忙しいんだねえ」

「おっさんもさっきは守矢神社に居たじゃないか。ほら、気をつけ
て帰れよ」
お守り等を代金と引き替えに渡している。

「霊夢はどこ行ったんだよ。俺だけに押しつけ……ああ、今行くから！」

忙しく動き回り、大体の雑用までしている。

「……ようやくピークを越えたな。結局霊夢は最後の方までどこか行ってるし。……そして集まりだす妖怪達。萃香、あけましておめでとう。肩から降りてもらえないか？」

「あけましておめでとう。さあ、新年から呑むよー！」
肩車状態で歩き回っている。

しばらく歩いてから萃香を降ろし、最初に押しこめられた部屋で洋服に着替えている。

紋付羽織り袴は着ないようだった。

そして元旦の夕方から始まる宴会。

皆で挨拶をしてからそれぞれ楽しみ始めている。

「……伊達巻きが大好きです」
誰にも見つからないように隅っこでおせちをつついている。

「あ、いたいた。よっと、呑もうか」
しかし勇儀の姐さんは見つけていたようで、酒と杯を持って嬉しそうに隣に座ってきた。

「勇儀さん、あけましておめでとう。今年も一年よろしくお願いたいな」

「あけましておめでとう。今年もよろしくお願ひするよ」
そう言つて肩に手を回して引き寄せてくる。

「ああ、勇儀様お戯れを……」

「あはは、よいではないかーってね」

出会つてまだ一週間しか経っていないのに息の合った二人だった。

「ふはははは！ 見よ、このボディ！」
めっちゃ飲まされて酔いがまわり、身体が熱くなり上半身裸になっている。

その光景にキヤーツ！と黄色い声があがった。
真っ赤になつて俯く者、ちらちらと見て照れている者、堂々と見て酒を呑んで煽る者等。

「……正月から何をやっているんだお前は！」

「うおおおおおお！ は、走つてきて頭突きつて……」
その光景に見惚れていた慧音がハツとして立ち上がり、走り寄つて頭突きを決めていた。

頭を抑えて蹲る恭司にシャツを着せ、すぐに自分が座っていた場所に戻っていくのは流石だった。

「あー、酷い目にあつたわ。勇儀さん、ひざまくらー」
けらけらと笑っていた勇儀の元に戻り、その膝に頭を乗せた。

「本当に恭司は物怖じしないねえ。鬼の四天王にこんな事させる人間なんて他には絶対にいないよ」

そう言いながら火照った顔に触れてくる勇儀の手が冷たく、心地よい。

「精霊界で殺されかけたり、邪悪な神の贄にされたからなー」
目を閉じ過去の出来事を思い出している。

「精霊界？」

「ああ、カードの精霊がいるんだ。んっ……あ、え？」
唇に触れる柔らかい感触に目を開くと勇儀の顔が物凄く近くにあり、酔いが一気に覚めてしまった。

「今のはお年玉つてやつだよ。そ、それに私に勝ったご褒美は恭司が死ぬまで有効だから……」

頬を赤らめ、杯に酒を注いでいる。

後半はもう赤鬼つてくらいに真っ赤になりながら呟くように言っていた。

一番積極的で大胆な勇儀。

押されるのに弱い恭司とは一番相性が良い。

ちなみに唐突にキスした理由はなんとなくだったりする。

「あ、ありがとう……」

ちよつと二人の周りが桃色空間になっている。

そしてそれを物凄い目で見ている鈴仙と慧音。

「くっ、あの浮気者め……」

別に慧音の恋人ではないが物凄くイライラしているのがコップに入った罫でわかる。

「私は傍にいられば……」

と言いながらも目が凄く怖い事になっている鈴仙。

美鈴は離れた位置にいて見えていないので気づいていない。

「この前は言い忘れてたけど、私にさんはいららないよ。あの里の半獣みたいに私を呼び捨てにしな」

「いや、でもまだ会って一週間くらいだしさ」

「私は気にしないよ。だから呼び捨てにしな」
その強引さはとても有効だ。

「……分かったよ。勇儀って呼べばいいんだろ？」

「それでいいんだよ。ほら、飲んだ飲んだ」

仰向けになつた恭司の口に酒を注ぎ込んでくる。

「がぼっ、ごぼっ……」

唐突に注がれ溺れそうになっていた。

「あつ、ごめんよ。大丈夫かい？」

「り、陸で溺死するかと思った……」

膝から頭を退け、上半身を起こして呼吸を整えている。

「あ、あははは。……萃香が呼んでる気がする」
そそくさと離脱していった。

一時間後。

「シンクロ召喚、氷結界の龍トリシューラ。魔理沙の場の魔法・罫のセットカードと手札の真ん中のカードと墓地の封印されし者の右足を除外」

「ううっ！」

「魔法カード、シンクロキャンセルでシンクロ召喚に使用したモンスターを戻して再シンクロ。またトリシューラ出して、今度はセットされたモンスターと残ったその手札と墓地の左足を除外。バトルフェイズにダイレクトアタックして終わりだ」

「正月からぼっこぼこにされちゃったぜ……」

酒を飲みながらアリス、パチュリー、魔理沙と連戦しているが当然連勝している。

「あー、もう限界だ。眠い……」
ふらふらと外に出て眠気を覚まそうとした時、誰かの声が聞こえてきた。

「……から……で」

「そんなに……」

その声の元に近づいてみると霊夢と文がひそひそと何かしている姿が目に入った。

こちらには気づかずに会話を続けている。

「既に四枚売れましたよ」

「好意を寄せている相手と外来人の一部なら買うでしょうね。売り上げの4割は貰うからね」

二人で何かを囲んで密談している

「霊夢に射命丸、何やってんの？」
ひょいっと覗き込んだ。

「あやややや！ な、なんでもないですよー！」
慌てて何かをしまっている。

「ほう、なら明日にでもはたてに聞いてみようかな。しまったものが写真だったらあいつの念写で確かめてもらおう事だって出来るしな」
ただし恭司の写真は何故か念写不可なのを忘れてる。

「あつ、はたてで思い出しました！ 私に話してない事を教えるなんて酷いじゃないですか、私にも新しいネタをください！」
ハツとして詰め寄ってきた。

「嫌でござる。はたてに関してはお詫びの意味も込めたんだから
そう言つと背を向けて歩きだした。」

はたての名前を出したのは失敗だったと逃げに入ったようだ。

「ずーるーいーでーすー！」

文はその背に飛び掛かり、耳元で喚いている。

霊夢は先に戻るわね、と行ってしまった。

「文、やめろつて。当たってるぞ」

「当ててるんです。……つて今、私の事名前呼びました？」
うりうりと背中にしがみついていたが、名前で呼ばれた事に気がつ
いた。

「いや、お前が名前で呼べつて言うから呼んだんだが」

「ようやく親しくなれた気がします。私だけ名字で呼ばれていまし
たから」

「そりゃ悪い事を……ん？ 何だこれ」
しばらく歩いて境内の方に出ると、霊夢が落としていったと思われ
る写真を入手した。

「あ」

「……俺を撮るのは構わないが、売るのはいかなものかと思う。」

射命丸はどう思うかな？」

神主の格好で写った写真に値段が書かれているので、これはサンプルだと思われる。

そして呼び方が射命丸に戻ってしまった。

「……まあ、リーズナブルな値段だし深くは追求しないよ。男の写真なんて売れないだろうし」

「あ、あははは……。今度から許可貰ってからにします」

恭司があまり怒っていないからか安堵の表情で背中から離れた。

「そうしてくれ。何なら気に入った写り方した写真にサインしてもいいぜ」

そう言っただけケラケラ笑って文と肩を組んだ。

どうやら酔いは完全には覚めていないらしい。

「……さあ、中で飲みましょう！ 朝まで寝かせませんよー！」
肩を組んだまま中に入ってしまった。

幻想郷で迎えた正月。

元旦の宴で積極的な勇儀。

今年も波瀾万丈な一年になる事は間違いない。

続く。

正月、元旦から宴（後書き）

水曜の放送でZ・ONEはもう小物にしか見えないわ。

遊星が使うデルタアクセルシンクロ、コズミック・ブレイザー・ドラゴンは現在進行形の世界ではいつ使うんだろう。

さて、皆さんにはお気に入りのお宝はありますか？

自分はサイバー・ドラゴンが好きすぎて全レアリティ三枚ずつ揃えています。

デュエルディスク付属の回収がかなり大変でしたが。

ENDING No2 パラレルな少女達(前書き)

あらゆる結末を迎えた数多の世界から集まったらこうなるんじゃないかと。

ENDING No2 パラレルな少女達

「解せぬ」

目を覚ますとすまきにされて地面に転がされていた。

少し離れた場所で人妖神霊と物凄い人数の少女達が言い争いをしている。

「私の夫よ。博麗の血を絶やさない為に連れてきたって紫が言ってたんじゃない！」

「そんな事を言った覚えはないわ。第一、貴女は私達を祝福してくれたじゃない。何を言っているのかしら？」

「いや、それはおかしい。恭司は私と結ばれて里を守っているんだ」

「慧音も何言ってるの？ 恭司は蓬莱人になって私と永遠を生きてくれるって言ってたんだから」

他にも様々な種族の者達がそれぞれ恭司は自分の夫だと主張し、治まりがつかなくなってきたている。

「……てかさ、俺は外の世界に帰ったはずなんだが。起きたら幻想郷、しかもすまきとかどうなってるんだよ」「
ぼそりと呟いた言葉に皆がこちらを振り向いた。

『どっついう事よー』

そして信じられないって顔で皆が詰め寄ってきた。

「怖っ！ 俺は誰とも恋仲にも夫婦にもなっていないぞ。やるべき事が出来て外に戻ったんだし」
全方位から見下ろされ萎縮してしまいそうだった。

「……ちよっと、それどういう事よ。霊夢と一緒に居ると幸せだっ
て言ってたじゃない！」
すまきにされた恭司の頭を掴んでがくがく揺らし始めた。

「お、落ち着け！ せ、説明するからあああ！」

「納得のいく説明を頼むわよ」
そう言っただけ近づいてきた紫が、すまきの状態から解放してくれた。
逃げるなよって眼で見ている。

立ち上がり、身だしなみを整えてから彼女達と向き合った。
包囲を狭めて前に出てきたのは紫、神奈子様、永琳、白蓮、慧音、
映姫様と話の分かる方達だった。
どの方達も笑顔だが、その笑顔が恐ろしい。

「多分あんた達のそれぞれの主張は正しいんだと思うんだ」

「恭司、それは浮気をしていたって事か？」
額に青筋を浮かべた慧音がにこにこしながらこちらを見ている。

「ち、違っって。突拍子もない事で信じられない事なのかもしれないけど……」

自分の持っている知識と場の状況を考え、ほんのちょっとした勇気を出して少女達に説明をした。

「……なるほど、平行世界ね。それなら今の状況も納得できるわいち早く理解した永琳がうんうんと頷いている。

「わかってもらえてよかった……」

「要するに、数多ある平行世界でそれぞれ結ばれた者達の意識だけがこの世界に集まってしまったと言いたいですね？」
安堵の表情を浮かべていると映姫様が尋ねてきた

「そう、そうなんだよ！ だから俺は鉄恭司だけど、各々が知っている鉄恭司ではないんだよ」

「ふーん。でも関係ないわね、今ここにいる恭司さんを私だけのものにすれば今まで通りなもの」
分かってもらえて嬉しい恭司にさらなる爆弾を投下する霊夢。

どうやら霊夢と結ばれた世界では心底愛し合っていたらしい。

「あら、霊夢もそう思っていたのね。私も連れ帰ってしまえばいいと考えていたのよ。藍達も喜ぶわ」

霊夢を発端に皆が臨戦態勢に入り、スペルカードを取り出す者までいる。

それぞれの世界でどれだけ愛し、愛されたのかよく分かる光景だっ

た。

「やるなあ、それぞれの世界の俺。こんなに愛されてるとは羨ましい限りだわ」
まるで人事のように呟いている。

さっきから上海がくつついているのも和む。

「危なくなったら止めよう。しかし、数年ぶりに見る上海は相変わらず可愛いな」
上海をそつと持ち上げてにこにこする姿はちょっと危ない人。
上海は嬉しそうに頬摺りしている。

激しい弾幕ごっこが繰り広げられ、たまにこちらにも飛んできてとても危ない状態。
そしてとうとう恭司に直撃し、吹っ飛ばしてしまった。
それを見た皆の動きが止まり、青冷めた顔をしている。

「……あまり俺を怒らせない方がいい。流星『スターダスト・ミラージュ』！」
起き上がり、埃を払ってからスペルカードを発動させた。

この恭司は弾幕もスペルカードも扱えるらしい。
どうやらほとんどの世界では使えないらしく、驚愕の表情を浮かべて止まってしまった者達がどんどん落とされていく。

数分後

「勇儀に美鈴、萃香とか反則だろ」

次のスペルカードを発動させようとした隙を狙われ、飛び掛かってきた三人に取り押さえられていた。

勇儀に上半身、美鈴に下半身、萃香に頭を押さえ付けられている。

「よくやったわ、萃香。まさかスペルカードが使えるなんて……流石、私の夫ね。一緒に異変の解決にも行けるじゃない」
とても嬉しそうに言いながら撃墜された霊夢が歩いてきた。

「なんかこれ詰んだ？ 紫がああなってる時点で逃げ場がないような。……なんだろう、柔らかい」
逃げられないかなと手を動かしたら柔らかい何かを鷲掴み。

「やんつ、恭司はやっぱり私の胸を触るの好きなんだね。嬉しいよ」
掴んだのは上半身を押さえつけている勇儀の姐さんの胸だったらしい。

恭司からは見えないが嬉しそうに勝ち誇った顔で他の少女達を見ている。

「え、あ、その、ごめん……痛たたたたた！」
慌てて手を離し、真っ赤になりながら謝っている。

気に入らない萃香が両手に力を入れて頭を握っていた。

博麗神社境内。

「ちくしょう、勇儀のおっぱいに釣られてる間に捕まったとか格好悪すぎる」

芋虫のように藻掻いている。

ロープでぐるぐる巻きにされ、強力な結界が二人の巫女によって張られて神社の一角から出られなくなっている。

魔法使い組も手伝っており、確実に突破は不可能だった。

「仕方がないからクジで決めましょ。それで一週間ずつ滞在する場所を決めて行けばいいわ」

じたばた藻掻いているのを尻目に場を仕切る霊夢。

「紅魔館、永遠亭、白玉楼、マヨヒガ、守矢神社、命蓮寺の人達は一まとめね。他はまあ、細かく決めていけばいいわね」
そしてノリノリな紫。

「やーめーろーよー」

「つつん」

クジは早苗に任せて木の棒で恭司をつついて遊んでいる諏訪子様だった。

数十分後

「今週は博麗神社よ」

結果を解き、ロープを解いて腕を絡めてくる霊夢。

他の者達がギリツと齒軋りをしても気にしないのが図太い。

「もうどうにでもな―れ。きっと一方通行で元の世界には戻れないんだろっしー」

強さ的にも幻想郷の中で下から数えた方が早いし。

「さっ、邪魔者達は帰った帰った」

霊夢は他の者達の追い払いに入った。

「痛たたた、急に頭が痛くなってきたぜ。これじゃ家まで耐えられないかも」

魔理沙がちらちらと恭司を見て意図を察してくれと訴えている。

「え、魔理沙マジかよ。ちょっと休んでいった方が……」

意図は察していないが嘘を見抜けず普通に心配している。

「あら、あんな所に薬師がいるわね。診てもらおうといいわよ、それじゃ」

「魔理沙、お大事にいいいい」

霊夢にずるずると引きずられていってしまった。

集まってしまった各世界で結ばれた少女達。

どの世界とも違う結末の世界から現われた調律者。

彼がこれから誰に惹かれるのかは少女達のみが知っている。

おしまい。

おまけ。

「天狗は監視、魔理沙は毎日行つて出来るだけ二人きりにはさせないで」

パチュリーを中心に境内で会議が行われている。

「でも不思議だぜ。ここにいる皆が恭司と夫婦だったんだよな」

「私は上海にばかり構うあの人を振り向かせるのが大変だったわ」
嫉妬するアリスが可愛いから結婚後も上海に構っていたり。

「騙す形で蓬莱人にしちゃったけど笑って許してくれたわ。あのかぐや姫に想われて幸せだった」

竹取物語を勉強したらしい。

今後に関する会議がいつのまにかそれぞれの惚気話になっていた。

ENDING No2 パラレルな少女達（後書き）

もしこんな風になったら大変だろうなあ、と考えて書いた。
今は反省している。

映画パックを帯留だけど箱扱いで10パック購入。
封入操作されてるのはジャンク・ガードナーかな。
あれだけ三枚しか出なかったし。

魔女の薬と小悪魔さん（前書き）

適当に書いていたらこんな事になっていた。
アニメ仕様のカード有り。

アニメもゲームもスタードライバー面白いです。

魔女の薬と小悪魔さん

「断る」

紅魔館の地下。

三人の魔法使いに拒絶の言葉を言い放つのは、真剣な顔が似合わないくらいつつある恭司。

フランの様子を見に来たら図書館に拉致されてしまっていた。

「あら、残念ね。小悪魔の膝枕が……」

「よし、バッチコイ！」

パチュリーが小悪魔の名前を出して膝枕と言うだけであら不思議、断った恭司があっさり意見を翻してしまった。

「うわあ、パチュリーが言ってた通りだぜ。小悪魔の名前を出すとすぐOKするんだな」

「上海が聞いたら泣くわよ」

魔理沙は感心し、アリスは呆れたように見ている。

上海はお留守番らしく今日はいない。

「向かって右からパチュリー、アリス、魔理沙が作った薬か……何か嫌な予感がする。てか嫌な予感しかしない」

魔理沙とアリスは無視して並べられた飲み薬を見ている。

「まずは私の薬」
ずいっとパチュリーが席を立ち、その薬を口に運んでくる。

最近やたら体の調子がいいらしく、やたらとアクティブである。

「うっ、苦い……。でも特に何も変化は……。痛たたたた！ あ、足がつった！」
薬を飲んで少しすると、いきなりふくらはぎに痛みが走り椅子から転げ落ちた。

「くふふふ」

その様子にご満悦なパチュリー。

クールで消極的だった彼女は既に居なくなっていた。

「くっ、こんなくだらない薬を作って……。笑い方が可愛いらしいのがまた腹立たしい」

なんとかかつた足を戻し、椅子に座り直している。

「次は私のよ。ほら、さっさと飲んで」

間髪入れずに差し出してくるアリスは容赦なかった。

「あ、特になんともないや。……。涙が止まらないのを除けば」
ぼろぼろ涙が零れて止まらなくなっている。

「へえ、泣くとそんな感じになるのね。何かゾクゾクするわ」
指先で涙を拭いてみたりと凄く楽しそうだった。

二十分後

「魔女の薬マジパネエ」

小瓶に涙が貯まるまで止める薬を貰えず、たくさん涙を流して目が赤くなっている。

冷めた紅茶で水分を補給し、ひりひりする目元を抑えたりしている。

「最後は私だ。さあ、ぐいっと飲むんだぜ！」

一番でかい容器に入った得体の知れない液体を口に押しつけ流し込んでくる。

「げほっ、ごほっ！　まずいい！」

めちやくちやまずいらしい。

「薬がおいしくてどうする。どうだ？」

何か変わったかどうかわくわくしながら聞いてくる。

「いや、特に。でも視力がよくなったのか小悪魔さんが見える。うむ、今日も可愛らしい」

かなり離れた位置にいる小悪魔を発見するくらい目がよくなっている。

「失敗か……」

ガツカリして椅子に戻っていった。

「パチユリー、俺頑張ったからそろそろご褒美をください。君達の薬を飲んだらさらに癒しが欲しくなりました」

「仕方ないわね。ほら、こっち来なさい」
パチュリーに手招きされ、ほいほい近づいてしまった。

「え、あれ？ 小悪魔さんは？ 俺の心のオアシスは？」
きよろきよろと見回している。

「特別に、私が膝枕してあげる」
恭司がどこからか持ってきて設置したソファに腰掛け、隣をぼんぼん叩いている。

「マジで？ あのパチュリーが？」

「あのつて何よ。ほら、早く来なさい。何なら恭司が大好きな私の太ももで顔を挟んであげてもいいわよ」

「ちよつ、人の性癖を捏造してんじゃねーよ！ アリスと魔理沙がどん引きして距離取っただろーが！」
距離を取りひそひそ話す二人に怯み、パチュリーに文句を言っている。

今更って感じもする。

「あら、じゃあ小悪魔だったら？」

「してもらえるならジャンピング土下座からの土下寝してもいい……はっ」

アリスからは凄い冷たい目で、魔理沙にはおもちゃを見るような目

で見られている。

「本当自爆だけは得意ね。ほら、頭乗せて」

「邪魔します」

もう自棄になり膝に頭を乗せた。

「……こちよこちよこちよ」

「わぷっ」

ジーツと顔を見下ろしていたかと思ったら、自分の髪で恭司の顔をくすぐり始めていた。

「悪戯って楽しいわね。恭司が教えてくれなかったらこんな楽しみ知らないままだったわ」

素敵な笑顔で見下ろし、何か満足気だった。

「余計な事を教えなければよかった……。お前がフランに何か吹き込んで、力一杯抱きつかれた時はジオングになるかと思ったんだからな！」

足なんて飾りです！

「なあ、アリス。恭司をあのままにしといていいのか？」

頼杖について二人を眺めていた魔理沙が突然アリスに問い掛けていた。

「なんで私に言うのよ。私には関係ない事よ」

涙の入った小瓶を眺めながら問いに答えている。

十分後

「ぐう……」

毎日が難易度マニアで疲れていて、ぐっすり眠っている。

「ふふふ」

いつのまにか小悪魔に変わっていて、頭を優しく撫でている。

どうやらすぐに飽きたパチュリーが小悪魔と代わっていたようだ。

「……あの、皆様？ 何故見てるんですか？」

ジーンと六つの目に見られているのが気になった。

「いつもみたいに寝てる時にチューするのかと思って」

「右に同じだぜ」

「私は貴方が恭司に襲われないように
各々の理由を述べている。」

「……恭司さん、起きてください。起きて」

「んあ……小悪魔さん……？ んんっ！？」
寝呆け眼で見上げていると頭を掴まれ、思いつきりちゅーされていた。

「うわっ、本当にしてるぜ！ 慧音に教えたらハリケーンミキサで恭司死んじゃうかもしれないな」

「小悪魔は相変わらず大胆ね。あれ舌入れてるわ」

「……………」
パチュリーと魔理沙は平然と見ているが、アリスは顔を赤くしながら無言で凝視している。

「ん……………はあ、ご馳走様でした」

唇を離し、ご馳走様の挨拶をした小悪魔。
やけにつやつやしている。

「……………」
いきなりすぎて何が起きたのか理解できず、口内を激しく蹂躪してきた小悪魔をぼんやりとうつろな瞳で見ている。

さらに虚脱感が襲ってきて目蓋がどんどん下がってきている。

「あ……………おやすみなさい。ゆっくり寝てくださいね」

優しく頭を撫で、うつろな瞳の恭司を寝かしつけている。

「く……………す……………」
そのまま目を閉じ再び寝息をたて始めた。

「……………危なかつたです。夢中になって精気を吸いすぎて殺しちゃっ

ところでした」

お肌はツヤツヤだが、顔を青くした小悪魔が反省している。

可愛くても悪魔は悪魔だった。

三時間後

「う……体が怠い……」

「大丈夫ですか？」

目を覚ますとかなりの怠さと、愛しの小悪魔の声が聞こえてくる。

「あ……う、ごめん。すぐ退くから」

膝枕をしてもらっているのに気づき、頭を退けて立ち上がった。

若干ふらついたが問題なく立つ事が出来ている。

支えようとした小悪魔が驚いた顔をしているのが不思議だった。

「小悪魔さん、膝枕ありがとう。いい夢見させてもらった」

少し顔が青いのは精気を吸われ過ぎたから。

「その、あの、私……」

「あ、そうだデュエルしないか？ 最近忙しくて出来なかったからさ」

何か言いたそうな小悪魔の言葉を遮り提案している。

「あ、はい。分かりました」
出鼻を挫かれ、持ってきますねと取りに行った。

五分後

「いやー、久々だな」
デュエルディスクを付けて嬉しそうにデッキをセット。

「終わったらちゃんと謝らなきゃ」
何かを呟いて気合いを入れている。

「デュエル！」

「私のターン、ドロー。モンスターをセット、カードを一枚伏せて
ターンエンドです」

「俺のターン、ドロー。手札からサイバー・ドラゴンを特殊召喚。
そしてセットモンスターに攻撃、エヴォリユーション・バースト！」
セットモンスターに向けて口を開き光線を吐き出している。

ATK2100

「伝説の柔術家ですよ」

DEF1800

「うわ、予想外すぎる。カードを三枚伏せてターンエンド」

守備表示の伝説の柔術家を攻撃した事でサイバー・ドラゴンがデッキトップに戻ってしまった。

「私のターン、ドロ。……ダーク・フュージョンを発動します」

「カウンター罠発動、神の警告。LPを2000支払い、ダーク・フュージョンの発動を無効にする」

LP4000 LP2000

「うう、一枚伏せてターンエンドです」

どうやら手札事故らしくモンスターを何も出せなかった。

「俺のターン、ドロ。罠カードオープン、活路への希望！ LPを1000支払い、相手とのLP差が1000ポイントにつきカードを一枚ドロする。俺と小悪魔さんのLPの差は3000、三枚ドロだ」

引いたカードを見て笑っている。

「……」
集中出来ず、少し上の空な小悪魔。

「パワー・ボンドを発動！ 手札のサイバー・ドラゴン三体を融合させ、サイバー・エンド・ドラゴンを融合召喚！」

巨大な三つ首の機械竜が小悪魔の前に立ちはだかった。

ATK4000 ATK8000

「ふう……」
どう謝るかを考えるのでいっぱいいっぱい驚いていない。

「伏せが怖いけど、このままダイレクトアタックするしかない。エターナル・エヴォリユーション・バースト！」

「あつ、痛いのは嫌なんです。畏カードオープン、ディメンション・ウォール」
さらっと攻撃を返してくる。

「カウンター罠、神の宣告を発動。LPを半分支払いディメンション・ウォールの発動を無効にする」

LP1000 LP500

「カウンター罨発動、盗賊の七つ道具。LPを10000支払って、神の宣告の発動を無効にしますね？」
可愛らしく微笑みながらの死刑宣告だった。

LP4000 LP3000

「ちよっ……!!……!!」

サイバー・エンドから放たれた光線が小悪魔に向かっていく。
しかし小悪魔の目の前で空間が歪み、恭司の背後からその光線が現われ直撃した。

LP500 LP0

「た、楽しいデュエルだったぜ……」
8000ダメージをダイレクトに受け、ふらふらしている。

奪われた精気はデュエルで回復したのか、血色が良くなっている。

「恭司さん、ごめんなさい。さっきは精気を吸いすぎてしまって……」
「……」
俯きしょんぼりしながら謝っている。

「精気を吸いすぎる？」

理解していないのか不思議そうに小悪魔を見ている。

「はい、さっきのキスで……」

「えっ……そんな……」

小悪魔の懺悔にショックを受けている。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

嫌われるのが嫌で泣きそうになりながら必死で謝っている。

胸キュンポイント20くらい。

「ちくしょう、何で覚えてないんだ俺！ キスされたのに！」

精気を吸われた事よりも、キスされたのに覚えていない事を悔しがっている。

小悪魔とのキス>>>>越えられない壁>>>精気を吸われて死にかけた事

「あの、怒ってないんですか？ 後少し吸っていたら死んじゃったかもしれないんですよ？」

「そんな死に方なら本望です。地縛神に贖にされかけたり、親友の前世の親友に殺されかけたりするよりはずっといいよ。まあ、死ぬのは怖いけどね」

「でも、やっぱり私が納得できないんです。力が漲るくらいに吸っ

「ちやいましたし……」

お肌もツヤツヤで可愛さ三割増しの小悪魔。

「じゃ、じゃあ頬にキスを」

そんな小悪魔を見て欲望が止められなくなっている。

欲望に素直すぎるのも考えものだが、聖人君子じゃないから仕方がない。

「えっと、頬でいいんですか？」

「ああ！」

無駄に爽やかな笑顔だった。

三人の薬はどれも誰得。

小悪魔も悪魔なんだと再認識。

そしてデュエルで小悪魔にサクッとやられた恭司だった。

続く。

魔女の薬と小悪魔さん（後書き）

ちなみに恭司が会う度に行っている小悪魔へのアプローチは仲良くなる為にやっつけて三割くらい冗談。
ナチュラルに可愛いから七割は本気。

ジャンクドッペルTGに何となく異次元の精霊入れてみたら意外と腐らなくて助かる。

ワンダーマジシャンの効果で星屑に破壊されても泣かない。

ハルバードはロマン。

トンボとパウグラーは……。

ある日の紅魔館（前書き）

レア、二重の意味で。
チェンジ。

やりたい放題なパチュリー！。

ある日の紅魔館

紅魔館の門前

「美鈴、聞いてくれよ。最近紅魔館に来る途中に妙な闇を抜けるんだけどさ、通り過ぎてからなんか頭痛くなるんだよ……」
今も痛いんだよな、と呟いている。

「ああ、もう本当に幸せで……え。それワザとじゃなかったんですか？」
恭司が作ってきたお弁当を幸せそうに食べていた美鈴が、その発言にびっくりしながら頭を指差してくる。

「ワザとって何だよ、何も無いじゃないか。なんか頭が痛いからか重く感じるな……」
振り向くが何もなく、訝しげに美鈴を見ている。

「ほら、離れなさい。……犯人はこの子です」
恭司の背後にまわり、何か言っている。

なかなか離れなかったから実力行使をしたのか、金色の髪に赤い瞳、リボンを付けた黒い服の少女が美鈴に捕まっていた。

「む、誰か知らないがこんにちわ」

「ごめんなさい」

見た事ない子だなと挨拶したらいきなり謝られてしまった。
何故かシユンとした様子に罪悪感がマッハ。

「美鈴、謝られるような事されてたのか？ あそこまでしょんぼりされると俺のガラスの心が痛む」
ガラスはガラスでも防弾ガラスだけど。

「毎回頭が痛かったのはこの子に齧られてたからですよ」
頬に米粒を付けたまま、少女の首根っ子掴んでぶらーんとさせている。

「マジで？ 齧られてたとかなにそれこわい……」
浮かびながら齧られていても気づきそうなものだが、どうやら本気で頭痛と勘違いしていたようだ。

「闇の中をいい匂いを通り過ぎるからつい齧っちゃたの」
毎回行く時に焼き菓子やら美鈴への弁当を作ってから来ていたから釣られてしまったようだ。

「つい、で齧るとか流石妖怪だ……。だが俺はレアだぜ？」
外は妹紅に燃やされかけたりしているし、内は生だからレアで間違っ
つてはいないと思う。

「そーなのかー」

「ああ、納得してもらえて嬉しいよ。君の感じたいい匂いってのは
お菓子か美鈴の弁当だろうな。うーん、そうだな……。今後俺を齧ら
ないのなら君の分も色々作ってくるけど」

慧音から貰える給料という名のお小遣いは両神社のお賽銭、趣味の
料理の食材やらになっているから一人分増えても対して痛くなかつ
た。

タイミングが悪いと一週間毎日誰かと甘味処に行く事もあるくらい
余裕があるみたいだし。

「……いいの？」

「ああ。まずはこれ、今日の俺の分だがやるよ」
おにぎりとプリンの器を差し出した。

「あの、貴方の名前は？」
受け取ってから名前を聞いていないのを思い出し、上目遣いで聞い
てくる。

「恭司。恭しさを司ると書いて恭司」
俺にぴったりだろ？と笑顔を見せている。

「えっ」
そんな二人のやり取りを見ていた美鈴が、恭司の言葉にないわーっ
て顔をしていた。

「なんだよ美鈴、恭しい態度なんて取ってないだろみたいな目は。
……それで君の名前は？」

「ルーミアだよ。恭司、これ本当に食べていいのー？」

「もちろんだ。俺はおせうさまが隠してるおやつを分けてもらっか
ら、遠慮せずにどうぞ」
女子供には甘いがロリコンではない。

「いただきます」

数分後。

「ごちそうさまー」

綺麗に食べ終えにこにこしている。

「美味しく食べてもらえてよかったよ」

「えへへ、ありがとう。えっと、恭司またね」

満足したのか曇天の中間を纏わずに飛んでいった。

「またなー。……おい、居眠りしていると咲夜に怒られるぞ美鈴」

「くう……えへへ……」

恭司の膝に頭を乗せ思いつきり眠っていた。

幸せそうににへらつと笑っている。

「仕方ない、ちょっと門番を頼む」

レッド・デーモンズ・ドラゴンを実体化させ、自分達の前にたたずませた。

「これでよし。幸せそうに寝てるな」

帽子をそつと取り、寝顔を眺めている。

「くう……」

「額に中って書いたら怒られるだろうな……。おお、柔らかいな」
ライメンマンさんにしようと企みながら、どこかをつついている。

「んん……」

つつかれて身じろぎ。

「美鈴みたいな嫁さん貰えたら毎日幸せだろうな。美人だし、和むし」

頬を好き放題に触りながら呟いている。

しばらくして眠くなったのか一緒に寝てしまった。

「咲夜、この二人使ってもいいかしら？」

「パチュリー様。ええ、かまいません。いつまで待っても入ってこない恭司と居眠りしてる門番でしたら。死なない程度にお願いします」

途中二人の会話が聞こえた気がしたが眠気には勝てず、そのまま再び意識を落とした。

「よく寝た……」

「恭司さん、大変です」

聞き慣れた男の声に目を開くと、目の前に自分の顔があった。

「え？ あ、何で俺が？ 幽体離脱？」

「違います。私達、入れ替わってます」
妙に落ち着いて敬語な自分に違和感がMAX。
しかも体が入れ替わるという超展開。

「……なんだ、もうこんな超展開は慣れたぜ。宇宙はカードの表と裏から誕生したんだぜ」
慣れてなんておらず、パニックになっている。

「パチュリー様、美鈴の中は恭司なんですよね？」

「ええ、それで恭司の中に美鈴よ。恭司はいい感じにパニック状態
ね」

その様子をこっそりと見ているパチュリーと咲夜。

「とにかく落ち着いてください。……あ」

「美鈴、どうした？ 何かいい案でも思いついた？」

「そうですね、目の前には私の身体。そして今の私は恭司さん
自分がした事がないような素晴らしい笑顔を見せてくる。
嫌な予感しかしない。」

「……それで？」
少し距離を取った。

「既成事実を作れると思いませんか？」
その言葉と共に屋敷の中に逃げ込んだ。

「あ、そんなところに隠れてたのかよ！ パチュリー、早く戻せ！」
中に入る途中で発見し、文句を言いながらも走って逃げていく。

美鈴の姿と声で乱暴な言葉遣いはかなりの違和感がある。

「恭司と入れ代われれば既成事実が作れるなんて盲点だったわ」
しかし妙にウキウキしているパチュリーはまったく聞いていなかった。

その間も背後から迫るM恭司。
気を使う程度の能力で身体強化をしているようで、美鈴の身体の高いスペックにも余裕で付かず離れずを保っている。

「俺の身体に馴染みすぎだろ！ こっちはハンデあるのに！」
もう揺れる揺れる。

「痛い事はしませんから！ ……やっぱり痛いかもしれないですけど優しくしますから！」
千載一遇のチャンスを必死に掴もうと追い掛けてくる。

「おまつ、馬鹿じゃないの！？ 自分の身体を襲おうとするんじゃないよー！」

……………

「罨カード、落とし穴！ ……俺だけ能力使えないのかよ!?」
追い付かれそうだったので落とし穴を使おうとしたが、何故か実体化出来なかった。

「ようやく捕まえましたよ!」
その隙を見逃してもらえないはずがなく、後ろから抱き締めるようにして拘束された。

そのまま抵抗できないように拘束され、美鈴の部屋まで引きずるよ
うに連れて行かれている。

美鈴の部屋

「H A N A S E!」
慣れていない身体で抵抗するも、抜け出せないままここまで連れて
こられてしまった。

「さあ、早く既成事実を作りましょう!」
そして無理矢理ベッドに押し倒され、もうかなり色々ピンチ。
互いの貞操とか男のプライドとか。

「恭司……じゃなかった、美鈴。許すから少し眠ってなさい」

そしてそんなピンチに颯爽と現われた咲夜。

M恭司の背後に立ち、意識を強制的にシャットアウトしてくれた。

「咲夜、ありがとう助かった。……うおっ、何するんだよ！」

感謝をしていたらいきなりナイフを投げられ、間一髪で避けている。

「あ、ごめんなさい。でも美鈴の声で呼び捨てにされたから仕方ないわよね。……恭司、貴方も眠りなさい。起きたら戻っているはずよ」

「わかった、本当に助かったよ。とりあえずおやすみ……」
目を閉じて眠り始めた。

一時間後。

「咲夜、お前これは確信犯だろ」

「恭司の身体ってかなり動きやすいわね」
起きると今度は咲夜と入れ替わっていた。

うきうきして身体を動かすS恭司とそれをジト目で見るK咲夜。
美鈴はベッドですやすや眠っている。

「しかし咲夜の身体は細いな、ちゃんと飯食ってるのか？ ……だ
けど女の子と身体が入れ替わるとか地獄だろJK」

「私の許可なくトイレに行ったり、無闇に身体に触ったりしたら抹殺するから」
両手にナイフを構え、そんな目も出来るんだってくらい怖い目をした自分の身体に脅迫されてしまった。

「俺を変態扱いしないでもらいたいな。俺は紳士なんだ」
恭司が咲夜の身体に入ったので、能力が使えない普通のメイドに成り下がっている。

十分後。

「ごめん、咲夜。凄くトイレに行きたい……」

「我慢なさい。パチュリー様を見つけたらすぐに戻してもらおうから」
さつきから同じ問答が何度も繰り返されている。

「ま、まあ？　俺が漏らしても咲夜が漏らした事になるからいいんだけどな」

辛そうに足をもじもじさせながら文句を言うK咲夜。

普段咲夜がしない行動でちょっとだけ可愛く見える。

「もしも漏らしたりしたら泣いたり笑ったり出来なくするから」
無表情でナイフを構えた姿は見た目自分なのに凄く恐ろしかった。

「ひっ……」

さらに二十分後。

「くっ、仕方ないわ。目隠しと耳栓、私が外すまでは付けてなさい」

「……」

我慢の限界が近く、涙目でこくこくと頷き耳栓と目隠しを装着した。すると時間を停めて移動したのかいきなり下着をおろされ、何かに座らされてぼんぼんと肩を叩かれたので……

「ふう、すつきりした。これでまだまだ戦える」

「早く行くわよ」

自分の声で女性のように話されるとゾワツとしてしまうのか、K咲夜は身震いしている。

「いや、パチュリーなら見つけたぞ。あの曲がり角からこつちを覗き込んで」

「パチュリー様、すぐに戻してください。このままだと私は恭司と一緒に風呂にまで入らないといけなくなります」

時間を停止させて連れてきたようで、いつのまにかパチュリーが目の前にいた。

「あら、もういいの?」

「はい。ですから戻してください」

入れ代わる事で起きる弊害を考慮してなかったらしい。

「パチュリー、早く戻してくれよ。咲夜がトイレに行くなどか言うんだよ」

困るよな、と咲夜の姿と声で言われてパチュリーがかなり怯んでいる。

「か、かなり違和感を感じるわね。早急に戻すわ」
思っていた以上の破壊力だったらしく、動揺して目が泳いでいる。

慌てて本を捲っている。

「あーあ、俺も時を止めてみたかったな。ザ・ワールド! 時よ止まれい!とか言ってる」

「私もカードを実体化させてみたかったわ」
パチュリーが必死で呪文を唱えている最中も二人でお喋りしている。

しばらくすると意識が朦朧として、二人共壁に寄り掛かり座り込んだ。

そのまま眠気が襲い目を閉じてしまった。

一時間後。

「うわっ、身体がやけに軽い」

無事元に戻れたはずなのだが、何故か身体に力が漲っている。

恐らく美鈴の気を使う程度の能力が恭司の身体で使われた事で、効率よく循環できるようになったからだと思われる。

ちなみに咲夜は即仕事に戻り、パチュリーは目の前で動こうとしない。

「恭司、今回もごめんなさい。ついやっちゃったのよ」
「てへぺろ」と可愛らしく謝り、そのまま様子を伺っている。

「可愛いから許す。可愛いは正義だ」
思わず携帯で撮って保存し、可愛いからとあっさり許してしまうのがこの男だった。

「あら、ありがとう。でも小悪魔が言ったようにはなっていないね」

「小悪魔さんが？」
携帯をいじっていたが、小悪魔という言葉に反応してパチュリーを見た。

「相変わらず小悪魔に対する反応速度が異常ね」

「まあ、そのなんだ……とりあえず異議を申し立てる」
泊まる度に小悪魔とごいごいによる夢を見てますなんて言える訳がなかった。

……それが本当に夢なのかは分からないが。

「とりあえず異議を却下するわ。ほら、早く私を抱き上げて運んでだっこー、と両手を差し出してくる。」

「パチュリー、俺を何だと思ってるんだ」

「私と小悪魔の嫁」

躊躇いなくキリツとした顔で切り返してきた。

「はいはい、まさかそんな冗談を言うようになるなんてな。まったく誰の影響だよ」

「……」

やれやれって感じの恭司を無言で指差している。

「……お姫様、どちらまで」

差された指を無視し、パチュリーをお姫様抱っこで抱き上げて行き先を聞いている。

「図書館まで」

当たり前のよう首に手を回している。

このパチュリー、ノリノリである。

「パチュリー、少しふと」

「それ以上言ったら咲夜にない事ない事言っわよ」

「くっ、流石紅魔館のブレインなだけはある」

「迂闊な事を言つと大惨事になるから気をつけるのね」

「慧音より優しくて涙が出そうだわ。頭突き 頭突き 足払い 海
老固めと流れるように……」

「口は災いの元って……」

お姫様抱っこをしたまま歩き去っていった。

大体恭司が訪れるとこんな事が毎回起こる紅魔館。

そして小悪魔の夢は本当に夢なのか気になるところ。

パチュリーの好感度は外の知識を与えたり、魔法について聞いたり
している内にじわじわ蓄積していき今に到っている。

続く。

ある日の紅魔館（後書き）

パチュリーは何しても許す恭司にだけ甘えるように悪戯をします。

計画停電やるのはいいけど、パチンコとゲーセンは自粛してない所が多いと思う。

何となく寄った店でサゴーズメダルが売ってたから何となく購入。
今月他にもMG3にスターター2011と欲望が止まらない。

・日常の1ページ(前書き)

短く思いついたものや、本編では語られなかった所を随時追加していく予定です。

最終更新11/5。

ちなみに空の軌跡で好きなキャラクターはリラさんです。

・日常の1ページ

・きつと明日はレベルアップ

「パチユリー、今日は小悪魔さんの目を見てちょっとだけ会話できた」

「目を見ると恥ずかしくて何も言えなくなっていたのに成長したわね。それでどんな会話をしたのかしら？」
パチユリーは会話の中身に興味津々だった。

『あの、恭司さん。このコンボって出来ますか？』

『ああ、それなら出来るよ』

『ありがとうございます！』

「えっ、それだけ？」

「うん。だってナチュラルに可愛いから、冗談なしだとドキドキしちゃってうまく喋れなくなるし」

慧音、勇儀、美鈴は姉っぽくて平気らしい。
基準が理解できない。

「まあ、でも成長してるわね」

「きっと明日はレベルアップ」
明日するであろうつ会話をシミュレートした結果を語り始めた。

『あの、恭司さん。このコンボって出来ますか？』

『ああ、それなら出来るよ』

『キスしてもいいんですよ？』

「何でいきなりキスに繋がるのよ」

「そこが男と女の不思議な所だよな」

一度永琳に頭を開いて見てもらった方がいいかもしれない。

・きつと明日はレベルアップ2

「……………やあ、パチユリー」

「……………恭司？ 何かあったの？ 顔が真っ青じゃない」
声をかけられて本から顔を上げると、青白い顔をしてふらふらした
恭司が立っていた。

「……………この前の会話がちょっと違う形で現実になって、キスされた
らこうなっていた。何か小悪魔さんツヤツヤしてたけど」
ふふふふと幸せそうだがフラフラしている。

「えっ、あれ現実に起きたの？」

「……ああ。ただし小悪魔さんからお礼代わりにされたんだ。そしてその前に違う会話もできたぞ」
会話以上の事をされたのにまだ会話に拘っている。

『パチユリー様見ませんでしたか？』

『さっきはあつちに居たよ』

『ありがとうございます！』

『ユアウェルカム』

「何で最後だけ英語なのよ」

「英語だったらモテるかもしれないだろ」
キリッとした顔で言い返している。

口を開けばガツカリ王子。

「たまに恭司が分からなくなるわね……」
思わず頭を抱えてしまった。

「きっと明日はレベルアップ」

『パチユリー様を見ませんでしたか？』

『さっきはあつちに居たよ』

『今すぐ抱いて』

『ここではまずいよ』

「何で私を探していたのにいきなり抱いてっつてなるの？」

「そこが男と女の不思議な所だな」
すっかり元気だった。

・輝夜と妹紅

「痛たたたたた！ やめて！ 俺のLPはもうゼロ！」

「はーなーせー！」

「いーやーよー！」

二人に両腕を力一杯引っ張られている。

筍が食べたくなり、迷いの竹林に向かう途中で妹紅と遭遇。仲良く二人で筍を取っていると散歩をしていた輝夜が出現。嬉々として恭司の右手を掴み連れていこうとする輝夜、それに気づいた妹紅が左手を掴んだ事でこうなっていた。

「私と筈を取ってたんだから、お前は一人で行け輝夜！」

「何よ！ 恭司は私と行きたいに決まってるんだから、貴方こそ一人で取ってなさいよ妹紅！」

美少女二人に引っ張られて羨ましく思えるが、そんな事はなかった。

「腕が、腕が取れる！」

「こっぴなったら……」

「デュエルで決めるわよ！」

バツと距離を取り、どこからかデュエルディスクを取り出して装着している。

少女決闘中……

「喧嘩両成敗だ」

リミッター解除をされ全力全開のキメラテック・オーバー・ドラゴンが立ちはだかり、輝夜と妹紅のモンスターを同時に吹き飛ばした。

ATK16000

「うわあああっ……」

ヴォルカニック・デビルがあっさりと消え去り、妹紅に直撃してい

る。

LP4000 LP0

「きゃあああつー!!」

ジェムナイト・ルビーズが輝夜を守るうと立ちはだかるが、「こちらも消し炭にされて輝夜に直撃。

LP4000 LP0

「俺の一人勝ち」

片腕を空に上げ、勝利の余韻に浸っている。

「うう、強すぎ……」

「こつなったら恭司に決めてもらいましょ……」
座り込みながら何か言っている。

二人して立ち上がり詰め寄ってくる。

何か浮気した男の修羅場みたいな光景だった。

「私と筈を取るのか」

「私とデー……じゃなくて散歩をするのか」

『どつちー!』

本当は仲良しなんじゃないかって思えるくらい揃っている。

「三人で筒を取って、その後で三人で散歩すれば皆嬉しいだろ」
簡単な解決策だった。

「……タケノコクラッシュ！」

「ギャンツ！」

妹紅と仲良く筒を取っていたらそれに嫉妬したのか、輝夜が筒を恭司の後頭部に向けて投げつけていた。

「馬鹿輝夜！ 恭司に何するんだ！」

慌てて恭司を見ると後頭部に大きなたんこぶが出来ていた。

「ほ、星が見えたスター……」

起き上がり痛む頭を振っている。

「次は私と筒を取るわよ。妹紅は一人で取ってなさい」
そんなふらふら恭司の腕を掴み連れていった。

「……タケノコサイクロン！」

「グフツ！」

仕方がないので輝夜と雑談しながら筒を取っていて、何気なく振り返ったら妹紅が投げた筒が顔を直撃。

どうやら一人で筈を取るのが寂しかったらしい。

「何してんのよ馬鹿妹紅！ 恭司の顔に筈の跡付いちゃったじゃない！」

かなりの力で投げ付けられたようだ。

「う、うるさいな！ 男の勲章ってやつだよ！」

二人は睨み合い、いつ弾幕ごっこが始まってもおかしくなかった。

「た、助けてえーりん……」

ずるずる這いずりながら二人から距離を取り、逃げている。

筈の直撃で鼻血が出ているが構っていられなかった。

ある程度這いずっているとスカートともんぺが目の前に現れ、顔を上に向けてと素敵な笑顔の二人が居た。

「恭司、この引きこもりに言ってやってよ。俺は妹紅と居た方が楽しいから帰れってさ」

「この焼き鳥女に言ってあげて。輝夜との時間は何物にも代えれないから帰れって」

「……あーっ！ あんな所にニンニンネコピョンが！」

鼻血を袖で拭って立ち上がり、二人の背後を指差して声をあげた。

これ以上付き合ったら命が幾つあっても足りないと思えば逃げに入ってい

る。

『えっ!?!?』

謎の生物名にバツと振り替える二人だが、何もなかった。

「……………逃げた?」

「……………逃げてるわね」

遠くに走り去る背中が微かに見えている。

「なあ、一時休戦にして逃げたアレ捕まえないか?」

人里に逃げていく後ろ姿を指差して発言している。

「私もそう思ってたのよ。妹紅、私の足を引っ張らないでよね」

「輝夜こそゆっくりしてたら置いていくからね」

恭司が来るまで殺し合いをする仲だった二人が共通の目的の為に手を取り合っている。

恭司を緩衝材に少しずつ仲が改善されていく二人だった。

・惚れ薬

香霖堂

「あん? 惚れ薬だつて?」

「そうだよ。これを飲めばつかささんだって僕に好意を持つはずの道具だ」

目をキラキラさせた霖乃助が瓶に入った薬を手に行っている。

「胡散臭すぎるわ」

淹れてもらった茶を啜り、カウンター近くの椅子に座り話している。

「僕もあまり信じてないよ。でも男のロマンなんだろう？ 僕はつかささん一筋だから興味ないけど」

恭司が持ってきた羊羹と一緒に茶を啜っている。

「ロマンなんだろうけど正直幻想郷で飲んだら大変だろ。さあ、地獄を楽しみな！ ってなるわ」

戦闘力が下から数えた方が早い二人には悪夢しか見えない。

「まあまあ、試しに飲んでみないか？ 成功でも解く薬も貰ってるからさ」

何故か霖乃助は凄く楽しそうだった。

「嫌です。もし本物だったら誰からも逃げられないだろ。俺の能力って封ずるにも解放するにもラグがあるから」

「飲んでくれるなら店の商品一つだけタダで持っていってもいいよ。あろうことか物で釣ろうとしている。」

「そんな餌で俺が釣られクマー」

どうしても欲しかったお洒落なカンテラを手に行っていた。

「それでいいのならいいけど。さあ、飲んでみてくれ」

安物だったらしくホツとした顔で瓶を差し出してくる。

「いただきまーす……不味ッ！」

一気に飲み干し、あまりの不味さに蹲っていた。

「これが解薬だからなくさないように。何が起きたかは今度教えてくれればいいから」

そう言ってもう一つの瓶を握らせ、店から送りだした。

まだ苦しんでいるのに送り出す霖乃助、恭司の扱いを心得ていた。

帰り道。

「霖乃助もいい物くれた。このカンテラが前から欲しかったんだよな」

カードに封じてウキウキしながら帰宅していると背後から何者かの気配が近づいてくる。

「……………いい、キョージー！」

「ん？ あ、チルノと大ちゃんだわ」

自分の名を呼ぶ声に振り返ると二人がこちらに向かってきていた。

ずっと探していたようで嬉しそうに手を振りながら近づいてくる。

「……………大好きー！」

そして、ある一定の距離まで近づいて来たと思ったなら懐に飛び込み

抱きついてきた。

「おっと、どうしたんだチルノ？　さいきょーだから甘えないんだって言うてなかった？」

そんなチルノを普通に抱き留めている。

「デュエルでさいきょーのキョージに甘えるのはいいのー！
とんでも理論だった。

「そうかい。で、大ちゃんはどうしたの？」

いつもは恥ずかしそうにしながら傍にいただけなのに、今日は背中に抱きついていて不思議だった。

「……私も大好きですから」

大妖精の言葉を聞いて惚れ薬が効果を発揮している事を理解した。

「……あのクソ不味い薬、マジで惚れ薬だったのか。これはちょっとデレたアリスが見てみたいぞ」

困るとか嬉しいとかではなく、デレたアリスが見たいって考えに到るのが凄い。

「えへへ」

「うふふ」

「よし、戻ってアリスん家に行こう」

前にチルノ、後ろに大妖精を装備したまま魔法の森に戻っていった。

今回影響を受けた者。

チルノ。

大妖精。

・神様達と一緒に

「きゃあああつ!! き、恭司! 助けてえつ!!」

「ぐえつ! ぐ、ぐるじ……!!」

「G、Gが出たんだよ!!」

悲鳴をあげながら外に飛び出してきた神奈子様。

運悪く参拝していた恭司を見つけ、その首に腕を回してしがみついていた。

「い、息が……」

きゃあきゃあ言いながらしがみつく神奈子様。

その腕で首が締められ恭司の意識は限界が近かった。

五分後

「すうううはああすうううはああ……生きてるって素晴らしいッ!」

深呼吸をし、青空を見上げて生きる喜びを実感している。

「私の威厳が……」
顔を両手で隠し、耳まで赤くして座り込んでいる。

Gは諏訪子様が外に追い払ったようすで既に居なくなっていた。
大騒ぎの末に死にかけた人間が一名居たが。

「神奈子も大胆だよー。怖いからって恭司に抱きついちゃってさ」
諏訪子様がニヤニヤしながら恭司の隣に立っていた。

「俺は殺されるかと思ったんですが……。Gが怖くてきゃあきゃあ
言ってたのは可愛らしくてたまらんかったです」

「うう、ごめん。我を忘れてたんだよ……」
危うく予想外のタイミングでこまっちゃんに会ってしまっ所だった。

「まあ、役得でしたから。それと諏訪子さん、さっきおみくじを引
いてみたら真っ白とか運がなさすぎるんですが。初めて引いてこれ
とか俺のこの何だかよく分からない思いはどうしたらいいんですか」
ちよっとした臨時収入で初めておみくじを引いていたらしい。

「あ、それ早苗の婿選びに使っつもりだったやつだよ。それを引け
るのは次代の風祝の力を衰えさせる事のない血筋の人間だけだった
んだけど……」

「だけど？」

「さあ、やろう！って時に恭司が幻想郷に来たからやめたんだよ。
恭司だったら次代の風祝を孕ませるのに血筋も完璧だし、早苗も好
きな男と一緒にになれるからね」

ケロちゃんはちょっと生々しい。

「でもこれ入ってましたけど。それとまだ俺にはそういう類のは早いです」それが少し恥ずかしく目が泳いでいる。

「うーん、逆に遅いくらいなんだけどなあ。まあ、その白いのは多分早苗が間違えて入れちゃったんだよきつと」

「いえ、恭司さんが引くと思って入れておいたんですよ。やっぱり私と恭司さんは会おうべくして出会ったんです。これが愛の奇跡なんですよ」

いつのまにか早苗まで一緒に居て、嬉しそうに白いだけのおみくじを覗き込んでいる。

「……神奈子さん、俺これを引いたんで貴女の婿になれたりしません？」

びっくりしたのを悟られないように、ジーツとこっちを見ていた神奈子様に声をかけて会話に入れようと気遣ってみている。

「わ、私の婿は探してない！」
気遣われた事と婿という単語に反応してくれたようだ。

「うーん、それは残念ですね。……あ、時間だ。それじゃあ、そろそろ帰ります」

空いた時間に来ていただけだから早く帰らないといけなかった。

「ばいばーい、また来てねー」

「また来てくださいね」

「今度改めてお詫びさせてもらおうからね」

三柱の神に見送られながらダイガスタ・ガルドスを実体化させ、その背のウィンダに頼んで乗せてもらい里に帰っていった。

「早苗、絶対逃がしちゃダメだよ。あの子は婿に欲しい」

「はい、愛の奇跡でがんばります！」

他の人には負けません！と張り切っている。

「婿に来たら神奈子も嬉しいよね？」

「べ、別に私の婿じゃないし」

何度もからかわれたり、冗談で口説かれたりしている内に神奈子様の気になる異性になっていたりする。

「諏訪子様、いつその事私達三人の婿になってもらえば解決しませんか？」

常識を振り切っただけはある発想。

「あはは、早苗らしいねー。そうなたら毎日楽しそうだね」

今日も平和だった。

・ 続惚れ薬

魔法の森

「何だこれ地味に無敵じゃないか」

出てくる妖怪や妖兽等を大妖精とチルノが弾幕で追い払うので、い

つもより早くアリスの家に近づいているようだ。

「キョージ大好きー」

ただチルノが抱きつき、頬を擦りつけている部分が凍り始めている。

「ぼかぼかして気持ちいい……」

背中から抱きつく大妖精もほわわんとした顔で離れようともしない。妖精ホイホイである。

「妹分二人に好かれるとかこれが姉魂の対極、妹魂か。クリア・マインドに到れるかもしれない……ちくしょう、これが惚れ薬の効果じゃなければ」
実力ではないので悔しがり、二人をくつつけたまま歩いていく。

アリス宅

「アーリースーちゃん、あーそびーまー……へぶっ！」

扉の前で声を上げていたせいで、扉が勢い良く開かれて顔面を直撃。

幸い森の途中でチルノと大ちゃんとは手を繋いでいたので被害を受けたのは恭司だけ。

しかし衝撃はかなりのもので三人仲良く吹っ飛び、恭司を除いた二人は目を回してダウンしてしまった。

「うう、顔が……」

予期せぬ一撃で鼻血が出ている。

骨が折れずに鼻血だけで済んだのが凄い。

「あぁっ、恭司ごめんなさい！ 痛かったでしょ？ 今すぐ手当てするから家に入って？」

頬を赤らめデレッデレなアリスが献身的に肩を貸して立たせて心配している。

「でもあの二人が」

「妖精だから平気よ。人間の貴方が心配だわ」

誰お前と言いたくなるのを飲み込み、チルノ達を心配しながらもたくさんの人形達に強引に家の中に連れていかれていた。

アリスの部屋

「上海ありがとう、ただの鼻血だけだから」

ベッドに腰掛けさせられ、ハンカチで鼻を優しく押さえてくれる上海の頭を撫でて感謝。

「ドアをぶつけてしまつてごめんなさい。来てくれた事が嬉しくつて……」

腕を絡めて密着し、涙目で謝っている姿はツンツンしてるアリスからは想像できなかった。

「べ、別に気にしてないよ」

霖乃助に渡された解く薬を飲んだら正気に戻ったアリスに殺される

んじゃないかと冷や汗が背を伝っている。

上海は血が止まったのを確認し、ハンカチをテーブルに置いて頭の上に着地。

「……動けない？」

何故か首から下、腰から上が何故か動かない。

「その服ね、私の魔力を込めた糸を使ってるの。だから私が操る事も出来るのよ。あと、どこにいるか分かるように呪符も縫い付けてあるわ」

なんかもう薬を飲む前から色んな細工をされていたようだった。

友達付き合いの仕方がよく分からなかったのかもしれない。

「いやいやいやいや、待て待て待て待て！ ストーカーだったの？ やけにピンポイントで遊びに来るなとは思ってたけど」
何もなくごろごろしている日に遊びに来るから不思議に思っていたが、その疑問が氷解した。

「ストーカーじゃないわ、これが私の愛なの。分かってもらえる？」
普段とは違い可愛い態度のアリス。

「愛なら仕方ないな……」
あっさり納得してしまった。

嬉しそうなアリスがスツと手を動かすと上半身が勝手に動き、ぎゅつとアリスの身体を抱き締めってしまった。

「う、動け俺の上半身！ あっ、桜のいい香り……じゃなくて！」
ぎゅっと抱き締めしており、腕の中のアリスは恍惚の表情を浮かべている。

「幸せ……」

背中に手を回して抱き締め返してくる。

「ああ……俺、絶対死んだ……」

死ななくてもアリスの弾幕が襲い掛かるのは間違いない。

……

……

……

…

「……ちょっとだけ待っててね？」

一時間程抱き合っていたが名残惜しそうに離れ、上海と共に血の付いたハンカチを手に部屋から出ていった。

「……逃げるなら今しかない。後が怖いけど」

場所を特定されないように上着を脱ぎ、窓を開け荷物を持って魔法の森へ猛然とダッシュしていった。

今回影響を受けた者。

アリス・マーガトロイド。

上海人形。

・朔也と咲夜

香霖堂

「これはギャレンじゃないか」

「知ってるのかい？」

ギャレンラウザーを見かけ、手に取り呟いていたら霖乃助が背後にいた。

「ん？ ああ、仮面ライダー剣って特撮の説明し始めた。」

……

……

……

…

「恭司、ここに居るって聞いたけど……あら？」

約束の日なのになかなか来ないので咲夜が探しに来ていた。

そして香霖堂に来ると中から探し人の声が聞こえてくる。

『……で恭司は誰が好きなんだ？』

『俺はこの……朔也かな。格好良いし、もう大好きなんだ』

「ッ！」

中に入ろうと扉に手を当てた状態で一気に耳まで真っ赤に染まった。
橋の部分は聞き取れなかったようだ。

『へえ、以外だな。近接系が好きなのかと思っていたよ』

『俺は臆病だからな。やっぱり大好きだ』

「（さ、咲夜って言うってたわよね？ まさか恭司が私の事を大好きだったなんて……）」

両手を頬に当ていやんいやんと取り乱している。

ああ、勘違い。

朔也であって咲夜ではない。
読み方が同じで誤解を招いてしまった。

『あ、やばっ。もう行かないと』

『吸血鬼の姉妹の相手をするんだっけ？』

『あの二人は甘えん坊だから。そんじゃ、またな』

外

「あつ」

「あれ、咲夜じゃないか。迎えに来てくれたのか？」
扉を開けると咲夜が目の前にいた。

「あ、その……ごほん、早く行くわよ」
ちよつと焦ったが冷静になり、そつと手を握った。

「うん、たまにはゆっくり行こうか。咲夜と話をしてみたかったし」
いつも少しか話が出来ないから嬉しそうに手を握り返した。

「あつ、う、うん」

咲夜が好きって言葉が頭に通り、胸の鼓動が早くなっていく。

「どうしたんだよ。今日はやけに優しいな」
いつもなら忙しいんだからとか言われて気づくとレミリアの部屋だ
ったりする。

「とにかく早く行くわよ！」
完全に意識するようになってしまい、手を繋いでいるだけで恥ずか
しくなってしまう。

「はいはい。やっぱりいつもの咲夜だわ」

これが咲夜フラグの一部始終だった。

・続々惚れ薬

「霊夢のところで匿ってもらおう。迂闊にこれ飲んだらアリスにぶつ
転がされるかもしれんし」

独り言を呟かないと勇気が出ないらしい。

霊夢に匿ってもらい、この効果を切る薬を飲むつもりのようなのだ。正気に戻ったアリスの襲撃がとも怖いようだ。戦操「ドールズウォー」等を使われたりしたら……。

そんなこんなで危機感があるのかないのか分からないまま呑気にてくてく歩いていく。

「武器、そうだ武器を貰っていこう」

思い立って香霖堂に入り、色々と漁っていた。

「本物だったみたいだね。その必死さで分かるよ」
のんびりお茶を飲みながら漁っている恭司を観察する霖乃助。

「こ、これは武士沢ブレード！」
工事現場で振るあれを手にして興奮している。

「ツケにしとくから」
まいどとそのまま見送った。

「まさかあの武士沢ブレードを手に入れられるなんて思わなかった」
嬉しそうに振り回しながら歩いていく。

「へえ、それってぶしざわぶねーどって言うんだ」

「ああ、ヘルメット武士沢が愛用していた最強の武器だ……誰だ！
普通に会話していたのに気づき、辺りを見回した。

「ここだよーっと」

急に肩に重みを感じ、頭を掴まれた。

「なんだ萃香か。アリスが追い掛けてきたのかと思って焦ったわ
条件反射で萃香の足を掴み、肩車の状態に。

「さっ、呑もうー！」

そう言っただけから瓢箪を口に押しつけ無理矢理飲ませようとしてくる。

「ちよっ、ごほっ！ 神社、博麗神社に行ったら呑むから！」

少し飲んでしまったがなんとか神社に着くまで待つてくれと頼んでいる。

「それじゃあ私が運んであげるよ。よーし」

肩から降りた萃香にお姫様抱っこされてしまった。

「すっごい恥ずかしい。……どうやら萃香には効いてないみたいだな」

薬の効果がでないみたいで安心している。

「……このまま攫ってどうかな」

ジーンと顔を見てぼそりと呟いている。

「前言撤回、効いてるわ。神社に早く連れて行ってくれ！」
身の危険を感じ早く霊夢に匿ってもらおうと必死だった。

博麗神社……に続く階段

「きゃー！ 霊夢さん素敵ー！」

「萃香も私の前で人攫いをしようなんてね」
恭司をかばうように前に出た博麗の巫女は凜々しかった。

「ちっ、まさか掃除してたなんて予想外だよ」
攫うのを失敗して悔しがっている。

どうやら階段の前まで来て、そのまま連れ去る予定だったらしい。
しかし即霊夢に見つかり失敗に終わっていた。

「……なんだろう、俺嬉しいのに涙が止まらない」
女の子に攫われかけ、女の子に守られて無性に悲しくなっていた。

霊夢がチラチラ見てくるのも気になるところ。

「分が悪い……。恭司、今度は攫うからね」
そう言っただけ消えるように去っていった。

「……恭司さん、もう大丈夫よ。さあ、行きましょ」
手を掴み、ふわりと浮き上がった。

「ああ……。早いとこ飲まないと」
肉食系女子としか言えない彼女達に疲れている。

博麗神社境内

「……なるほど。だからいつも以上に魅力的に見えるわけね」
いつもは目を見て話せるが、今日はまともに見られない。

「霊夢があまり効果を受けてないみたいで助かったよ」
まったく普段通りだが、霊夢視点からはキラキラして見えている。

「は、早く飲んじやいなさいよ。アリスは私をなんとかしてあげるから」
説得と言う名の弾幕ごっこで。

「……待てよ。あの霖乃助が素直に渡すか？」
瓶を取り出したが、最近イイ性格になってきた霖乃助に一抹の不安を感じてしまう。

「早く飲みなさい」
だんだん余裕がなくなっているのか焦り始めている。

「わかりました。いただきます……何するか」
飲もうとしたら散々飲めと言っていた霊夢にサッと掠め取られてしまった。

「こんなのいらないわ。私が他の女達から守ってあげるから」
あるう事がその瓶をぽいつと投げ捨てる暴挙。

「なっ……うおおおっ……！」
全力で滑り込み、瓶をキヤッチ。

「あ、そうよ。神社に強力な結界を張って出られなくすれば」
誰に対しても平等な巫女さんもおかしくなってしまうた。

「永琳……そうか、彼女ならきつと何とかしてくれる！ 必殺！」
霖乃助を信用していないのが丸分かりだった。

霊夢に駆け寄り、小銭をばらまいて一気に階段を駆け降りていく。

「ダメじゃない、素敵なお賽銭箱はあつちよ？ ……逃げたわね」
拾い集めて顔を上げると居なくなっていた。

今回影響を受けた者。

伊吹萃香。

博麗霊夢。

・輝夜と恭司のゲーム三昧

輝夜の部屋

「輝夜、パーンの武器と防具を最高にしてレベルも上げておくとい
いぞ」

某ゲームをプレイ中の輝夜に教えている。

「でもパーンが死ぬのはイベントだから助からないでしょ？」

「テオとの一騎討ちに勝つと死なないんだよ」

ずずつとお茶を飲みながら教えている。

「……早く言つてよ!?!」

初プレイの時に教えてもらえなかったのに気がついたようだ。

「もう一度やり直すみたいだから教えてたんじゃないか。俺やさしー」

「……まだ秘密にしてる事あるんじゃない?」

疑り深い姫様は隣に座る恭司をじーっと見つめている。

「ボスはおかねを連打すれば戦わずに戦闘を終わらせる事が出来るぞ」

「……私が苦労した最後のおうごんりゅうも?」

「ああ!」

めっちゃんいい笑顔だった。

「ぐぬぬ……だから私が必死で戦ってる時ニヤニヤしてたのね!」

「EXACTRY」

やたらいい発音と笑顔。

「しかも地味に役立つ情報ばかりじゃない!」

「いや、だって最初から教えたらつまらないだろ」

「うー!」

ぽかぽかと叩き始めた。

「痛い痛い」

結構仲良しな二人だった。

・わんわんお！

慧音宅

「はいはい、どちら様？」

留守番をしていると誰かが尋ねてくる声が聞こえ、玄関に向かった。

開けてみると白い犬のような耳、ふさふさな尻尾を持った少女が立っていた。

「あの、前に文様の新聞に載ってて興味があったので来てみたのですが」

ほんのり頬を赤くし、尻尾を振っている。

「そうなんだ。ようこそ、歓迎するよ。ところで君は？」

「あっ、ごめんなさい。私は犬走権と申します」

ぺこりと頭を下げて挨拶をしてきた。

「ご丁寧にも。知っていると思いますが、鉄恭司です
会釈を返し、こちらにも名乗り返した。

そしてここじゃなんだから、と家に上げて部屋に案内した。
部屋で待ってもらい、お茶請けとお茶を取りに向かった。

恭司の部屋

「……………」

部屋に掛けられているジャケットにふらふら近づいて手に取った。

顔を埋めてくんくんと匂いを嗅いでいる。

尻尾をぶんぶん振っていて、まるで犬のようだった。

「太陽と雄の匂い……………」

嬉しそうにジャケットを抱き締めている。

椀は文に見せられた恭司の写真で一目惚れをした貴重な存在。

あらゆる動物を嬉しそうに可愛がる姿を千里眼で見ても、さらに惹かれていたりもする。

「よつと、犬走さんすまん。開けてもらえないか？」

そうとも知らずお茶とお茶菓子を持って戻ってきてしまった。

「は、はいっ！」

びくっ！としてジャケットを戻し、慌てて開けた。

数時間後

「わふう」

ぐにゃんぐにゃんでデレデレな椀に抱きつかれている。

「何か俺いけない事してる気分。耳とか触らせてもらったのがダ

「メだったか」
「めっちゃ可愛がったらしい。」

「もっと撫でてくださーい」
「頭を胸元にぐりぐり押しつけて甘えてくる。」

白狼天狗の誇りなんてなかった。

「そして俺のゴールが絶望っていう」
部屋の入り口に背を向けて座っているが、物凄い刺すような視線を感じている。

「恭司、後で私の部屋に来るように。もし逃げたら……わかるな？」
後ろから慧音の怖い声が聞こえてくる。

満月じゃないのに角がありそうで振り向けない。

「わ、わかりました……」
戸を閉め、歩き去っていった。

「耳をもっと、さっきみたいに触ってくださいー」

一時間後

「ま、また来ますね！」
「ご機嫌な栴を玄関まで見送っていた。」

「ああ、うん……」

この後の慧音が怖くて元気がない。

「えへへ」

タオルを大事そうにしまっている。

「そんな今まで使ってたのより新しいのがあるのに。本当にそれでもいいの？ 洗濯はしてるけど俺が使ってたタオルだし、今日も使ってたんだけど……」

どうしても欲しいと言われて渡していた。

椀は恭司の匂いが染み付いたタオルが欲しかったらしい。今日も使ったと聞いてますます手放せなくなっていた。

「これがよかったです。それでは失礼します」

「それじゃあ、またな」

元気に去っていった椀が見えなくなるまで見送った。

「それじゃあ、私の部屋に行こうか。怖くないぞ？」
肩に手を乗せ、優しく囁いてくる。

そしてそのまま無理矢理部屋まで引きずり始めた。

「ば、馬鹿な！ 俺の逃走経路が読まれていた！？」
さり気なく家を出て紅魔館に逃げ込むつもりだったらしく、いつのまにか背後にいた慧音に驚いている。

「何か月一緒に暮らしていると思ってるんだ。お前の行動は分かりやすい」

ずるずると引っ張り部屋に入った。

「どうせ捕まるのはわかってたさ……」

そして慧音の部屋の戸が閉じられた。

・夜の帰り道

「くそ、輝夜め……。俺は零なんてやりたくなかったのに」
ぶつぶつと文句を言いながら走っている。

輝夜と遊んでいたら、いつのまにか夜になっていたので焦り永遠亭から里に帰っていた。

しかも遊んだゲームが零と最悪なチヨイス。

そんな恭司を待ち伏せる一つの影。

「真っ暗で怖すぎる……。縄の巫女とか出てこないよな……」
いつもなら妹紅と一緒にだから軽口を言いながら帰るのに、今回は一人きり。

独り言を呟きながらしばらく歩いていくと奇妙な傘が落ちていた。行きにはなかったのに、と呟き手に取っている。

開いて回して見ていると赤い一つ目と目が合ってフリーズ。

「うらめしやー！」

フリーズしたままでいると、背後から何者かがぼん！と背中を叩い

てきた。

「うおおああっ！ 出たああああ！」
本気でびっくりしたらしく、傘を手放して思いっきり前に跳んで
いた。

そしててみが仕掛けていた落とし穴に綺麗に落下。
何か神掛かった流れだった。

……

……

…

「だ、大丈夫？」

あの傘を差した女の子が、深い穴から登ってきた恭司を心配そうに
見ている。

心配そうだが、何だか満足そうにも見える。

「こんな深い落とし穴とか一瞬マジで死ぬかと思った……。よく見る
とその傘、茄子みたい。茄子と傘が融合した妖怪変化？」

「茄子じゃないよ！ からかさお化け！ まったく……でもいい標
的が見つけられてよかった！」
『うおおああっ！ 出たああああ
！』
「だつてー」

あははー、と笑いながらお腹いっぱい満足気だった。

「うっさい！ ……そういえばさ、俺がさっき穴から這い上がって
る時にしゃがんでなかった？」

何か反撃のアイディアでも浮かんだのかニマーっと笑っている。

「え？ うん。おっこちたから心配だったし。何そのニヤニヤした顔」

どうやら驚かせはするが基本優しい妖怪らしい。

「そっか、幻覚じゃなかったか。うん、縞っていいよね
いい笑顔で言い切った。

「？ ……え、え、えっちー！」
最初は？って顔で見えていたが、気がついたのか真っ赤になり傘を持って走り去って行ってしまった。

「ふふん、勝った」

這い上がったのは、ご褒美があつたからかもしれない。

・茄子再び

「あー、ごろごろするの気持ちいいー」
寝転がって幸せそうにしている。

「うらめしやー！」
いきなり部屋に先日の少女が飛び込んできた。

「今日は水色か。ご馳走様ー」
ちょうど仰向けで入り口の方を向いていたからばっちり見ている。

「うっ！」
さっ！と座り込みスカートを押さえた。

「俺が紳士でよかったな。紳士じゃなかったらしばらく眺められて

たぞ？　ところで、名前を聞き忘れていたんだが君は誰？」
仰向けのまま尋ねている。

今は傘を持っていないようで普通の女の子にしか見えない。

「私は多々良小傘。うらめしやー」
可愛らしく片目を閉じてべーっと舌を出す姿は全然怖くなかった。

「おー、こわいこわい」
完全におちよくっている。

「ちゃんと驚けー」

「こんな朝から来られても怖いはずないだろ」
関係ないとはかりに「ごろごろ」していた。

「貴方、恭司って言うんでしょ。さっき出てきた女の人が言ったけど」
床に置いてある座布団を取り、その上に座り直した。

家の前をうろろろしている所を慧音に捕まり、仕方なく通されていた。
た。

傘は玄関の傘立てに置いてきたらしい。

「ああ。鉄恭司だ」
お菓子でもどつぞー、と寝転がりながら手渡している。

数十分後

「ねえねえ、時々来てもいい？」

居心地が良いのかお菓子を食べ終え、一緒にごろごろしている。

「いいよ。一緒にごろごろしよう」

「やった！ 恭司はスカートの中見るけどいい人間だね！」

「おい、バカやめろ！」

慧音に聞かれたら頭突き確定すぎて焦っている。

「恭司、後で話がある」

三人分のお茶とお茶菓子を持った慧音がちょうど入ってきていた。

「ひっ！」

「あっ、お腹いっぱい」

ある意味で驚かした事になったらしい。

・パチユリーの診断

「恭司、貴方は生まれた月から考えると獅子宮ね。特質は不動宮、マイペースで頑固。元素は火の宮、積極的・攻撃的で自信家。守護星は太陽、芸術の神アポロンとされているわね。生命力・支配を象徴するみたいよ」

占星術の本で調べられている。

「獅子宮って何だか格好良いな。アポロンってのがよく分からないけど」

「獅子宮の他の象徴は父性・統率力・威厳・包容力・活動的・創造・権力・正義・奉仕・単純・華やか・横柄・不遜……ますますぴったりじゃない」

幾つも当てはまっております、パチユリーは納得していた。

「でもさ、膝に乗って寄り掛かりながら言う事じゃないよね」
パチユリーが膝に乗って寄り掛かっている。

髪の毛のいい香りでもうになっちゃってしまっような状態。
両手はパチユリーのお腹に当てている。

「ふふふ、お姉さんに欲情しちゃったのかしら？ ……むきゅっ！」

「肉付きいいよね。パチユリーは」
脇腹をむにむに触っている。

自然にセクハラをする程度の能力。

「私が気にしてる事を……」
運動不足を自覚しているらしい。

「でもこれくらいがいいよ。適度に肉付いてる女の子って可愛いし」
むにむにと脇腹を触り続けている。

「そ、そうなの？ それなら維持するわ」
可愛いって言われ、髪をいじりながら照れている。

「ああ、パチユリーはこれくらいがいいよ。それで俺を呼んだ理由

って何？」

こう見えても結構忙しいんだぞ、と呟いていた。

「これが呼んだ理由だけど？ 最近あまり来なかったからつまらなくて」

「マヨヒガで働いていたから仕方ないだろ。さっきは久々のフランブリーカーで死ねえ！されるかと思った。……しかし、何で女の子はこんな柔らかいんだろう」

ちよつと自重できなくなりぎゅーっとパチュリーを抱き締めている。

「ふふふ、やっぱり私にメロメロじゃない」
抱き締められて満更じゃない顔をしている。

「エロイムエツサイム、エロイムエツサイム。って言ったら小悪魔さん来たりしないかな」
抱き締めるのにいいサイズのパチュリーをぎゅーっとしたまま呟いていた。

「呼びました？」

そうしたら本当に小悪魔がひよこつと本棚の間から現れていた。

「まさかの小悪魔召喚ね」

「まさか本当に反応して来てくれるなんて思わなかった」

「あ、パチュリー様いいなあ」

パチュリーをぎゅーっとしているのを見て羨ましそうに呟いている。

「Welcome」

よいしょ、とパチュリーを膝からおろしていた。

「この扱い、イラツとくるわ」

隣に着席させられてジト目で恭司を見ている。

「そ、それじゃあ、お言葉に甘えて……」

いそいそと膝に乗ってきた。

「し、失礼します……」

パチュリーの時とは違い、ガチガチになりながら小悪魔を抱き締めている。

「もっと腕に力を入れても大丈夫ですよ」

「う、うん」

ぎゅっという感じの力で抱き締め、そんな幸せを噛み締めている。

「これは私がお邪魔虫なのかしら……」

いい雰囲気な二人の隣で悩んでいるパチュリーだった。

・日常の1ページ(後書き)

今度Wiiで出る遊戯王のデュエルトランサーは発売時期完全に逃してますね。

パックはSTBLまでDTはインヴェルズの侵略までみたいですし。

無意識少女の見ていた期間（前書き）

無意識なあの子。

サイバー流（仮）。

いつかの為のフラグ。

無意識少女の見ていた期間

「えーっと、君は誰？」

いつもより早く目が覚めると、腕の中にすっぽりと少女が納まっていて混乱の極み。

黒い帽子に体から管のような物が伸びていて、その管のような物の中心によく分らないが球体があった。

「あ……」

しまったって顔の少女と目が合う。

「答えられないならそれでもいいよ。まあ、でも寝る時は帽子くらは取るうな」

まだ若干寝呆けているようで、帽子を外して枕元に置いてあげている。

「あ、あの」

「いいからいいから。まだ早いし寝よう……ぐう」

夢だと思ったのか目の前の少女をぎゅっと抱き締めて即眠りに就いた。

一時間後。

「ゆ、許してください！ 夢だと思ってたんです！」

慧音と少女に向かって土下座し、額を部屋の畳に擦り付けている。

意識が完全に覚醒すると同時に目の前ですやすや眠る少女がリアルに存在する事に気づき大慌て。
そこにいつもより遅い起床が心配になった慧音が到着。
後はもう即土下座で今に到る。

「恭司、顔を上げなさい。私はお前を信じているよ。……だから一回」

顔を上げた恭司の頭を掴み、きつい頭突きを決めた。

間違いなく嫉妬でした。

「ありがとうございますッ！」
頭突きをくらい目がふらふらし激しい痛みを感じるが礼を言っている。

「やっぱり痛そう……」
痛そうな顔で見ている少女。

「この件は自分で解決するように。私は獅子が谷底に子を突き落とす気持ちなんだ、分かってくれ」
そう言っつて部屋から走り去っていった。

「うおおおっ！　　いってえええっ！　　あれ全力だったって絶対！」
慧音が居なくなっつてすぐに頭を押さえて床を転げ回っている。

「だ、大丈夫？　　今までで一番凄かったけど……」

帽子をかぶり転げ回る恭司を心配してくれる少女は天使のようだった。

「うう、禍福は糾える縄の如し……」
可愛い少女を抱き締めて寝る幸福の次に来た、慧音の頭突きという災い。

五分後。

「うー、まだ痛い……。ところで君の名前は？」

「私は古明地こいし」
来客用のクッションを取り出して来て座っていた。

「こいしちゃんか。俺は鉄恭司、適当に呼んでくれればいいよ。だ
けどよくクッションの場所分かったね」
邪魔にならないようにしまってたのに、と不思議そうに見ている。

「恭司の事はずっと見てたから」
少し頬を赤らめている。

「え？」

「私は覚って妖怪なの。能力は無意識を操る程度の能力」

「覚って確か心を読むってやつ？」
妖怪について色々勉強しているらしい。

「そうだよ。私は瞳を閉ざしてるから心を読む事は出来ないけど」

「あー、よかった。それならえっちな事考えてても平気だな」
もうナチュラルに変態だった。

「えっ、そつち？ 心読まれたら嫌とかじゃなくて？」
目を丸くしている。

「うん、特に気にしないな。こっちに来てからはありのままの自分だし」

考えた事を口に出し、本能に忠実な男だった。
今もこいしちゃん、マジ天使とか考えていたり。

「……ずっと見てたけどその反応は予想出来なかった」
ちよつと嬉しそうにしている。

「そついやずつと見てたって言ってるけど、いつから？」

「貴方が獣型の妖怪に襲われてた時から。たまたま珍しい格好の人間を見かけたから追い掛けてみたの」

「いや、それって何カ月前じゃないか？ しかもあの時周りには俺しか居なかったし」

幻想郷に来てすぐ、紫の制止を振り切った直後の事である。

「私の能力で恭司に感知されないようにして追い掛けてたから」

「えっ、マジで？ ………………待てよ？ もしかしなくても今まで俺が取った行動とか……………」

欲望に忠実だったり、バーニング・ソウルに覚醒したり、女の子になつたりと。

「えっと、全部見てたよ」
頬を赤らめている。

自由の体現者である恭司を見ている内に興味から好意へ代わり、鈴仙より前からストーキング。

何よりも喜怒哀楽がころころと変化し、思った事もつい口に出して酷い目に遭っているのが面白かったみたいだが。

「やばい、凄く恥ずかしい。レベルで言うなら黒歴史ノートを見られるくらいやばい」
真っ赤っかになっている。

フランを甘やかしたり、上海を口説いてみたりしたのを全部見られていたと考えるとロリコンだと思われるも仕方なかった。
何よりノートPCの壁紙にしてある銀様を見てニヤニヤしていたのも見られていた事に。

「だ、大丈夫！ トイレは見えないから！」

「風呂は見てたのかよ!？」
なかなか面白い組み合わせの二人だった。

五分後。

「とにかく今後はしないように。堂々と入ってきなさい。てか夜に感じる視線が怖いからそつと見るのはやめて！」

「……いいの？」

「ああ。どうせなら面と向かって話をしたいしな」
どっちかと言うと、どこかからの視線が怖いだけである。

「よかったー。あ、そうだデュエルしてみたいの」
デュエルディスクとデッキをセットしている。

カードもディスクもカバンから拝借した物と思われる。

「なくなったと思ってたら君が持っていったのか。まあ、いいよ」
新たなデッキをセットして庭に向かった。

途中すれ違ったやけににこにこした慧音が耳元で
「浮気者……」
とボソツと呟いたのが怖かったが。

庭。

「よし、やるか」

「ずーっと見てたんだから負けないよ」

「」「デュエル！」

「俺のターン、ドロー！ モンスターをセットし、カードを二枚伏せてターンエンド」
とりあえず様子見とセットだけしている。

「私のターン、ドロー。手札からプロト・サイバー・ドラゴンを召喚、手札のサイバー・ドラゴンと場のプロト・サイバー・ドラゴンを融合。サイバー・ツイン・ドラゴンを特殊召喚」
恭司がシンクロ以外でよく使うサイバーを模倣しているようだ。

いつも頼りにしている機械の双竜が相手の場に現われ、その強さを
知る恭司は少し顔色が悪い。

ATK2800

「セットモンスターを攻撃。エヴォリユーション・ツイン・バースト」
かなり見ていたようで攻撃名まで真似している。

「リバースカードオープン、魔法の筒」
筒に吸い込まれたサイバー・ツインの攻撃がこいしに跳ね返っていく。

「あっ、きゃああっ！」

LP4000 LP1200

「何を引くか、何を伏せたかまでは見えても分からないんだぜ？
まだ一枚伏せている。」

「うっ、もう一回攻撃してみる」
懲りずにもう一度攻撃を仕掛けてきた。

「セットモンスターはマシユマロン。裏側守備のこいつを攻撃した
コントローラーのLPに1000のダメージを与える。そしてこの
モンスターは戦闘破壊されない」
柔らかそうなモンスターはサイバー・ツインの光線を耐え切っていた。

DEF500

「きゃっ！……一枚セットしてターンエンド」
LP1200 LP200

「俺のターン、ドロー。……フィールド魔法、天空の聖域を発動」
発動すると周りが天空に代わり、二人は聖域の神殿に立っていた。

「マシユマロンをリリースし、裁きの代行者サターンをアドバンス
召喚。そしてサターンの効果を発動。自分のLPが相手を越えてい
る場合、越えているLPの数値分のダメージを相手に与える。まあ、

天空の聖域がないと使えないんだけどな」
恭司がサターンをリリースしたところで、嬉しそうにセットしたカードをオープンしてきた。

「ふふっ、残念でした。速攻魔法サイクロンを発動して天空の聖域を破壊」

これによりサターンの効果は不発に終わり無意味になってしまった。そして天空の聖域が破壊された事で周りの風景も元通りになっている。

「……手札の神秘の代行者アースを除外し、マスター・ヒュペリオンを手札から特殊召喚する」
そして現われたのは恒星の力を持つ太陽の神、マスター・ヒュペリオン。

ATK2700

「このカードは1ターンに一度、自分の墓地の天使族・光属性のモンスター一体を除外する事で場に存在するカードを一枚破壊する効果がある。裁きの代行者サターンを除外し、サイバー・ツイン・ドラゴンを破壊！」

「あっ」

為す術もなく破壊され消えていく。

「そしてダイレクトアタック」
恭司の宣言と共にマスター・ヒュペリオンの一撃がこいしに襲い掛かった。

「やつ、きゃあああああつー!!」

LP200 LPO

「デュエルは見てただけ、戦法を読んだだけで勝てるものじゃないんだぜ？」

チートドローナ恭司に言われると納得せざるをえない。

「うう、よくわかりました……」

「それじゃあ、一緒に朝飯食べる？ ちょっと慧音が怖いけど……」
最近多くなったスキンシップといい嫉妬深くなってきたような気がする。

「あ、今度私のお姉ちゃんに会ってもらえない？ 私が追い掛ける人間を見てみたいんだって」

「いいよ。それなら何かお菓子作って持っていこうかな」
クッキーとか、と呟いている。

「恭司のお菓子おいしいから喜ぶと思うよ。プリンとかおいしかっ

た」

「何で知って……ああ、たまに何個か無くなってたのはこいしちゃんだったのか」

毎回数え間違いかと思って作り直したりしていたが、この謎もようやく解けた。

「えへへ」

緩んだ第三の瞳により、少しずつ感情が豊かになってきている。

「まあ、いいけどさ。摘み食いは妹紅もよくやるんだよね」

妹紅はバレていないと思っっているが、知っっていて見逃しているだけだったりする。

「呼んだ？」

そんな話を庭でしているとひょこつと妹紅が現われた。

「ちょうどお前の話をしたとこだよ。俺があげたりボンを付けてくれて嬉しいって話をな」

「あ、そうだったんだ。このリボンを輝夜に自慢すると悔しがって優越感に浸れるんだよね。……ところでこの子は？」

妖怪みただけど、と若干警戒しながら見ている。

「ふっ、聞いて驚け。こいしちゃんは俺のファンなんだぜ？」

「う、うん」

こいしがしていた長期間のストーキングはなかった事にする紳士。

「……まあ、いつか。名前は？」

「私は古明地こいし。貴女は？」
知っているが尋ね返している。

「私は藤原妹紅。好きなように呼んでいいから」
古明地という名前に聞き覚えがあったが、恭司の判断に任せる事にしたらしい。

「私も好きなように呼んでもらっていいよ」
さり気なく恭司を守る位置に立つ妹紅に気づいたが、知らないフリをして答えている。

「で、結局妹紅は何しに来たんだよ」

「勿論朝ご飯を食べに。慧音が早くおかずを作ってほしいって言うてたわよ。……慧音も凶太くなったよね」
既に尻に敷かれているような状態だった。

「里の守護者に教師なんて大変な事二つもやってるからな。家に居る時くらいは甘えてもらわないと」
身内と認められた者にはとても甘かった。

「恭司の周りって居心地いいから甘えなくなるかも」
うんうんとこいしが頷いていた。

「それでこいしちゃんも食べてく？」
返事を聞いていなかったので再び一緒に食べるか聞いている。

「やっぱり今日は遠慮しておこうかな。お姉ちゃんに今度連れてくるって言いに行きたいから」

そう言っつてふわっと浮かび上がった。

「そっか。それじゃあ、また今度かな」

飛べて羨ましいとばかりに見ながら残念そうに言っている。

「うん、またね」

そのまま飛んでいってしまった。

無意識を操る少女に見られていた期間はここに来てからずっとだった。

そしていつか出会う彼女の姉。

こいしちゃんがサイバー流に弟子入りするのは未定。

続く。

無意識少女の見ていた期間（後書き）

いつか地底に行く時のフラグ。

さとりと対面したらどうなるだろう。

花粉症なようで目が痒く、鼻水にくしゃみが酷い。

他にもありがとウサギとぽぽぽーんが頭から離れなくなって困る。

エクシーズついに解禁されたけど、おジャマにガチガチガンテツ入れたくらいだった。

次に出る予定のエクシーズ見ても期待できないし、モチベーションが下がるなあ。

紅魔館の執事もどき（前書き）

書きたいように書いた、今は反省している。

実質六日間。

泣かせてしまった。

劇団鉄。

紅魔館の執事もどき

「わあ……。お姉様、私の執事に欲しい！」

「ダメよ。私の執事にして咲夜とペアにする予定なんだから」

「レミィ、ちょっと図書館に新しい司書が欲しいのよ。ちょうどいいのが目の前に」

「門番に配置してもらえたりは……」

各々が主張する中、咲夜の隣に執事のような服を着た恭司が立っていた。

「明日から一週間だけだからな。休みそれしかないし」
隣の咲夜にそう呟いている。

最近慧音が風邪でダウンしてしまい、看病＋寺子屋＋家事とハードワークをこなしていた。
そしてやっと全快した慧音から一週間程ゆっくり休んでくれと言われ、紅魔館に遊びに来たわけである。

「遊びに来てもらったのにごめんなさい。最近忙しくて……」
主にフラン以外の自重しない住人のせいだ。

「別に構わないよ。困った時はお互い様だろ？」
早速咲夜と親睦を深めていた。

五分後。

お嬢様方の話し合いは終わったようで、仲良く雑談していた二人に咳払いをして振り向かせていた。

「明日は図書館で働いてもらうわ。そして次は門番ね。次は私に付いて、その次の日はフランに。次の日は咲夜と一緒に仕事してもらって残り二日は全域担当してもらうから」
休みなしとの話は本当だった。

「ああ、わかった。だけど今日はもう休ませてもらうよ」
疲れた顔で呟いている。

「サマナー、行こー！」
嬉しそうに駆け寄ってきたフランに手を引かれて部屋を出ていった。

手を伸ばしかけた状態のレミリアがちょっとシユール。

フランの部屋。

「今日は一緒に寝ようねー？」
恭司が服を着替えているのを眺めながら話し掛けている。

「ん？ おっと、フランは本当に甘えん坊だな」
着替え終わりベッドに腰掛けると、ぎゅっと抱きつき甘えてくる。

「だってー。お姉様がいつも最初にサマナーを連れていっっちゃうんだもん」
甘えられる時間が少ないのが不満だったのか頬をぷくーっと膨らませて
いる。

「あはは、それ可愛いなフラン。今日の残りの時間はフランと一緒に居るから」
うりうりと頬をつついて言っている。

「本当？ お風呂とご飯と寝る時のお話も？」

「ああ。ほっぺにちゅーだってしてあげるよ」
ちゅーだけは冗談だけだな、と笑っている。

夕食後

「恭司、この後私の部屋……」

「サマナー、早く早く!!」
レミリアが何か言う前
に手を引いて部屋に戻っていく。

「ま、待ちなさいフラン！ 今度は私の番よ！」
最初は見逃したが二回目は
追い掛けてきた。

その光景を微笑ましそ
うに咲夜は見ている。
自分が甘える姿を想像
してみても少し耳が赤
くなったりしているが。

フランの部屋。

「二人が喧嘩するなら俺は美鈴の所に行くけど」

睨み合いをして動かなくなったスカーレット姉妹にぼそりと呟いた。

「ダメッ!」

「それなら仲良くしような。ほら」

二人を抱き寄せている。

「いただきまーす」

「まったく……」

仲良く二人して首筋に噛み付いた。

「相変わらず牙が皮膚を突き破る感覚は慣れないな……うっ」

幼子二人を抱き寄せ首にキスさせているロリコンの図。

「ジュールッ」

「んっ」

幸せそうに血を吸っている。

「一カ月に最低二回血を吸われるとか幻想郷じゃなかったら死んでるよなあ。永琳が専用の増血剤作ってくれて助かった」

何となく手持ち無沙汰でフランとレミリアの羽を触っている。

「……ごちそうさまでした。ねっ、お風呂行こー!」

早くー!と首に抱きついている。

「相変わらずおいしいわ」
チラッチラツと誘ってほしそつにしながらも冷静に血の感想を言っている。

「風呂でサツパリしてから寝たいから行くか。レミリアはどうする？」

チラッチラツと見られていたから聞いてあげる優しい紳士の鏡。

「そうね、恭司がどうしてもって……ま、待って！ 私も一緒に行く！」

しかし素直になれず置いていかれそつになって慌てていた。

「まったく、素直に一緒に入りたいて言えはいいのに」

「ねー？」

脱衣場

「ここから、お前達には早い……のか？」

服を脱ぐのをガン見されていたので注意したが、五百歳前後の姉妹なのを思い出し戸惑っていた。

「フラン、中で待ってましよう」

「やだ」

ちよつと照れているレミリアに興味津々なフラン。

「ほら、喧嘩するなよ？」
いつのまにか腰にタオルを巻いており、すっぽんぽんなフランとタオルを巻いたレミリアの仲裁をしている。

風呂場

「フラン、ありがとな。いい力加減だよ」

「えへへ」

背中をゴシゴシと嬉しそうに洗っている。

「……」

レミリアは恭司に背中と髪を洗われ、残りを自分で洗ってから一人で暖まっていた。

「ふふん、感謝しなさい」

「あつたかーい」

「両手に幼女ですわわかります」
暖まっていると膝に乗ってひつついてきた姉妹。
落ちないように支えている。

「恭司、ここ染みる？」

「お姉様、穴開いてるんだから絶対痛いよ」
互いが付けた吸血痕に触れている。

「もう痛みにも慣れたよ。永遠亭に行けば治してもらえるから気にするな」

「ん……」

「んー」

暖まった事で血行が良くなり、少し垂れてきた血を舐めている。

「うっ」

ちよつとこの光景は、ここから先はR指定だつて言われてもおおかない。

フランの部屋

「あー、さっぱりした。色々危なかったが」

首にタオルを巻き、コーヒー牛乳を片手に戻ってきていた。

「サマナーの歌ってたくさんあつて楽しいね」

「外の歌は面白いわね」

二人はフルーツ牛乳を飲んでいる。

飲み終わると一足先にベッドに横になった。

そしてその両隣にぽふつと寝転んでくる姉妹。

「今日の話はとなりのトト……」

有名作品で幻想郷で見かけたあの生物の物語を話始めた。

……

……

……

…

「くう……お前ん家……すう……」

「すう……おっぱけやーし……くう」

「……なんつーシンクロした寝言。相当気に入ったんだなあ。俺も寝よう」

猫バスもここにならいうさだ、と考えながら眠りについた。
一日目。

「小悪魔先輩、これはどこに？」
きびきびと図書館で働く執事姿の司書。

「それはこっちですよ。あ、そこは色々危ない魔導書もあるので気をつけてくださいね」

「わかりました。よつと」
パチュリーが読み終えた本を納めていく。

「やっぱり手伝ってもらえるといつもより楽になりますねー。あ、そうでした。片付け終わったら来るように、とパチュリー様が言っていましたよ」

「了解しました、小悪魔先輩」
先輩と呼ばれご機嫌な小悪魔と仲良く片付けをしてからパチュリーの元に向かった。

「パチュリー様、お呼びですか」
すつ、と音も立てずにパチュリーの背後に現われて声を掛けた。

「むきゅっ！ ……遅いわ。ほら、ここに座って私の椅子になりなさい」
いきなり声を掛けられてびくっ！と肩が跳ねていた。

そしてソファに座って椅子になれといつもより偉そうに命令してくる。

「御意」
びっくりしていたパチュリーに内心ニヤニヤが止まらないが、逆らわず命令通りに座った。

「んしょ ……ああ、なるほどなるほど。これは隣に座るよりいいわね」
本を持ってその膝に座り、何か納得している。

「 ……」
そーっと腰を掴んで脇腹を摘もうとしている。

「体調よし、魔力の巡りよし。喘息も隣に座るようにしてから落ち

着いているし最高の気分ね」

自分は癒せないが他人を癒す波動でも出ているのかもしれない。

ご機嫌で本を読み始めた。

途中何度か脇腹をむにっしたり、くすぐったりしてじゃれあっていたのを小悪魔が目撃している。

二日目。

「美鈴、よろしく頼む」

「まずは準備運動です。白黒が来たら全力で迎撃しますよ。人間の挑戦者でしたら弟子の恭司さんに相手をしてもらいます」
ぐっぐつと二人でストレッチをし、門の前に立った。

三十分後

「ふっ！」

「もつと踏み込みは速く！ その程度じゃ簡単に避けられますよ！」
ちよつとした秘策を仕込み、美鈴に指導を受けている。

二時間後

「あの雲はドーナツみたいだな」

「あつちは飴みたいですよ」

何故か手を繋いで雲を眺めている。

「あれは魚かな。うーん、塩焼きが食べたい」

「あ、それはおいしそうですねー」
何か楽しそうな二人だった。

お昼ご飯。

「朝にキッチン借りて作っておいたんだ」
美鈴や門番隊の妖精達の弁当をカードから解き放った。

出来たてで暖かいまま持ち運べる便利な能力。

「わあ、ありがとうございます！」
他の妖精達も嬉しそうにぺこぺこしていて可愛らしい。

「腹が減ったら力が出ないし、魔理沙が来たらがんばれるようにな
じゃあ、いただきます！」
手を合わせ皆で食べ始めた。

湖で遊んでいたチルノが来て恭司の膝に座り、一緒に食べるという
ハプニングもあった。

午後

「ただちに引き返し、これから行おうとする侵略行為を止めなさい
！」
遠くに見える魔理沙にも聞こえる声であり、美鈴達がそんな
大声も出せるのかとびっくりしている。

「へっ、退かないなら恭司でも容赦しないぜ！」
全力で飛んでくる魔理沙が何かを言っている。

「キサマ……その言葉、宣戦布告と判断する！ 当方に迎撃の用意あり！」
覚悟完了！

「恋符『マスタースパーク』！」
スペルカードを宣言して突っ込んできた。

「かかったな、魔法の筒！」
魔理沙の放ったマスタースパークが目の前に現われた片方の筒に吸い込まれ、もう片方の筒からそのまま跳ね返した。

「なっ!?!」
ピチューン

反射されるとは思っていなかったのか、勢いを殺せず直撃して撃墜されていた。

「だから止めるって言ったんだ。本をちゃんと返して、借りる期間を決めればパチューンだって貸してくれるだろ？」
気絶していたので門まで運び、手当てをしてあげている。

対魔理沙の最終兵器。

絶対魔法禁止区域とグラビティバインドでも行けそう。

「痛たたた、もつと優しくしてくれよ。傷に染みるぜ……それあの門番のニヤニヤをなんとかしてほしいんだぜ」
「ぶーぶー言いながら手当てをされていた。」

美鈴はニヤニヤが止まらないらしく、魔理沙を見てはニヤニヤしている。
恭司だけで防いだとはいえ、突破されなかったのが嬉しかったらしい。

「無理。ほら、治療も終わったんだ家にお帰り」

「気が変わったんだぜ。昼寝してく」
そう言っって帽子を取り、恭司の膝に頭を乗せた。

「あ、こら！ 恭司さんは門番の仕事が……あぁっ、体が勝手にっ」
美鈴も反対側の膝に頭を乗せていた。

もう寝る気満々だった。

「魔理沙と美鈴の髪はいいな。色が綺麗で」
目を閉じた二人の頭を軽く撫でて呟いている。

速効で眠っているようで二人からの反応はなかった。

そしてちゃっかり夕飯を食べて魔理沙は帰っていき、美鈴は寝ていたのがバレてナイフがサクッと刺さっていた。
三日目。

「お嬢様、おやめください。私はただの使用人なんですからそのよ
うな事は……」

甘えようとしてくるレミリアに意地悪をして何度も制止している。

「うーうー」

何度も拒まれてどう命令すれば甘えさせてくれるのか分からなくな
り、うーうーと涙目で唸っている。

「あまりわがママを言われますとおやつ抜きにしますよ?」

いつもの偉そうなレミリアと違い、可愛くてつい意地悪してしまう。

好きな子に意地悪をする小学生みたい。

「……」

しばらく俯いていたかと思ったら無言で抱きついてきた。

「お嬢さ……げっ!? う、嘘だよ? 甘えていいから、ね?」
顔を埋めてふるふる震えており、涙が胸元を濡らしていく。

「ふえ……うっ……あう……うっ……」

精神的に打たれ弱かったらしく、嘘泣きとかではなくガチで泣いて
いた。

「ごめんな。もう意地悪しないから」
もう罪悪感がマッハ。

「……………」
顔を埋め、ぷるぷるしたままベッドに行くよう指を差している。

「レミリアは可愛いな」

まだ泣き止まないのでも耳元で色々囁き、安心させようと必死になっている。

「……………レミィ」

「うん？」

すっと顔を上げたレミリアがぼそつと呟いた。

「二人きりの時はレミィって呼んで……………」
きゅつと服を掴みながらはつきりと言った。

対等で甘えられる存在故にフラン以上に依存してしまっている。

「ああ、分かった。分かったから泣き止んでくれ、な？」
撫で撫でして泣き止ませようと必死。

ある意味フランより幼かった。

四日目。

「何か恭司って呼ぶとドキドキする……………」

「私もフランお嬢様に名前前で呼ばれるとドキドキします」

ちょっと執事っぽくしている。

「……やっぱりやだ。サマナーもいつもみたいにして
名前は呼び捨てで敬語なしがいいらしい。」

「わかったよ。俺も昨日ので懲りたし」
フランにまで泣かれたりしたら、きっと立ち直れなくなる。

「嬉しいなー、私だけのサマナー」
レミリアにも取られず、一日一緒に居られるからご機嫌だった。

特に何も起こらず、楽しい話や里での日常を教えたりしながら一日
を過ごした。

スキンシップ等に飢えているのは姉妹共通だが。
五日目。

「メイド長、掃除終わりました。妖精メイド達が協力的で助かりま
したよ」

掃除を終わらせて咲夜に報告を行っている。

「妖精メイドが？ 何かの間違いじゃなくて？」
協力的な妖精メイドと聞いて目を丸くし、聞き返した。

「ええ」

「ちょっと待ってなさい。……信じられないわ」
時を止めて色々見てきたようだ。

恭司じゃ届かない部分や、分担しないとかなり時間がかかる所まで
ぴかぴかになっていた。

ここまでされると信じないわけにはいかなかった。

「次は何をやれば？」
どや顔で尋ねている。

「え？ あ、そうね。困ったわ、こんな早く終わると思ってなかったから他は私が終わらせたのよね……」
妖精メイドがこんなに働くとは思わなかったらしい。

「咲夜、ちょっと話でもしよう。レミリアも時間を止めなくても休める時間を与えたくて、俺をお前の下に付かせたんだろっし」

「でも私はお嬢様の従者だから……」
休む事に抵抗があるようだった。

「いいからいいから」
そんな咲夜の背を押し、貸してもらっている自分の部屋に連れていく。

客室

「ここ、もう客室じゃなくて恭司の部屋よね。違和感ないもの」
椅子に腰掛け、部屋を見回している。

クローゼットに私服がぎっしりと入っており、この部屋だけは何故か壁紙が白かった。

机にはペンやカードが置いてあり、本棚にはパチュリーが持ってきてくれる妖怪に関する本が並べられている。

「レミリアが好きにしていって言ったから、俺の好きにさせてもらっただけ。ただ斜光カーテンだから朝は寝過ぎそうになるんだよな」

外の物だが、とケーキと紅茶を咲夜の前に置いた。

「まあ、貴方が居ない時によくここに入られてるけどね。パチユリ様に小悪魔、美鈴に妹様にお嬢様もね」

ありがとうございます、と礼を言い話をしながら戴いている。

「ワイシャツとかシャツが何着か行方不明なのもそれが原因なのか？」

ワイシャツは紫から大量に渡されているのでいいが、普通のシャツが少なくなつて困っている。

「……諦めなさい。見かけたら回収しておくから」

たまにこの部屋のベッドでごろごろしている咲夜可愛いよ咲夜。

ワイシャツも何着か拝借して、部屋で着てみたりしているのは秘密。

「でも持っていったとしてもサイズが大きすぎて着れないと思うんだけどな。ちょっとのお金と明日のパンツがあればいいから、持っていかれても特に気にしないけど」
そう言つて自分の紅茶を飲んでいる。

ぶかぶかなワイシャツを羽織つた小悪魔を想像できないとは、奴は四天王の中でも最弱……。

その後も話が弾み、夕飯の時間まで楽しく互いの事について話し込んでいた。
六日目。

「恭司、私の部屋に来なさい。主人の命令よ」

「あら、レミィ。残念だけど今から図書館で整理をしてもらうのよ。館の主人と館の頭脳が対立していた。」

「君はここからここまでをこの子達と頼む」
何故か恭司に従順な妖精メイド達が指示通りに散っていった。

「……夢でも見てるのかしら」
咲夜は素直に従う妖精メイドが信じられないようだった。

廊下。

「フラン、ちょーっただけ離れてもらえないかな？」

「やー」
掃除の最中にやってきて背中に抱きついて離れようとしなない。

「フラン、すぐに離れなさい。私の言う事を聞かないとおやつ抜きよ」
掃除を眺めていたレミリアがキリッとした表情で妹を嗜めている。

「べーっ！ 絶対離れないわ。おやつならサマナーの血を吸うから

いいもん」

「えっ……」

その手があったたかって顔をしている。

図書館。

「あ、じゃあ今度作ってくるよ」

「本当ですか？ 楽しみにしてますからね？」

楽しそうに小悪魔と雑談しながら本の整理をしている。

「……」

そんな楽しそうな二人を恨めしそうに見ている魔女が一人。

「あつ、小悪魔さん。ちよ、ちよつとこんな場所じゃ」

「大丈夫ですよ。パチュリー様からは見えません」

場所を移動して姿は見えないが、声だけはしっかり聞こえている。

「……」

すっと立ち上がり姿の見えない二人の方に向かっていく。

「小悪魔さん……あー、これ凄い」

「ふふっ、どうですか？ 気持ちいいですか？」

「二人とも、そこまでよ！ ……何してるの？」

慌てて突入してみると、小悪魔が吸血痕に薬を塗っていた。

「吸血痕に薬を塗ってもらってるだけだが。仕事だから後でって言ったんだけど、小悪魔さんが気になるらしくて」

「仕事なのにするまん、とすまなそうに謝っていた。」

「パチユリー様、もしかして……」

鋭い小悪魔が何かに気がついてニヤニヤしている。

「ご、ごほん！ 片付け終わったら報告に来なさい」
顔を真っ赤に染め、そそくさと戻っていった。

「何だったんだ？」

「ふふふっ、私は寝呆けてる時にしか……」
「やたら意味深な事を呟く小悪魔だった。」

七日目。

夕方。

「何だかんだで楽しい休暇？ だったな」
「私服に着替え帰る準備は出来ていた。」

着ていた執事の服は咲夜が回収したのか既に部屋にはない。

帰り道

「いやー、土産たくさんもらったわ」

ワインやチーズ、他にも様々な食材を貰っていた。

働き具合から考えるとかなり低賃金な量だが、レミリアを泣かせてしまった負い目があって何も言えなかった。

慧音宅。

「ただいまー」

ガラスと玄関を開けて入ると妹紅が座っていた。

「あ……。おかえり……。私、寂しかった！」

「ああつ、ごめんよ妹紅！ もう離さないから！」
互いに強く抱き締めあっている。

「……………あんまり楽しくないね」

「……………離れ離れだった恋人がようやく再会出来たって設定は失敗だったな」

離れて今回の反省会をしている。

何事かと見に来た慧音が呆れていた。

毎回違うシチュエーションでやっているらしい。

「次は浮気相手の家に押し掛けてきた奥さんと浮気相手とイチャツいていた亭主でいこう」

劇団鉄の小芝居はここでしか見れない。

「何か次のは凄い楽しみ。慧音が浮気相手って設定なの？」

「私もやるのか？」

「そりゃそうだろ慧音。慧音がどうするか期待」
どんな演技をしてくれるのか楽しみだった。

執事っぽい事をした一週間。

妖精メイドを巧みに使い、咲夜の負担を楽にするという功績。
ただレミリアを泣かせてしまったのがいただけなかった。

続く。

紅魔館の執事もどき（後書き）

次は新しい場所に行く予定。

天狼王 ブルー・セイリオス欲しいから定期購読しようかなあ。
アニメでも漫画でもキングが好きで仕方ない。

色々自重しないのが彼（前書き）

美人で尻尾なお姉さん。

可愛く猫なお嬢さん。

フラグを増やす紳士。

色々自重しないのが彼

一月も終わりそうなある日の午後。

三人でまったり過ごしていたら誰かが訪ねてきた。

誰だろうと出てみると、立派な九本の尻尾と法衣に身を包んだ美しい女性が立っていた。

「君が鉄恭司君かな？ 私は八雲藍、紫様の式なんだ」

そしてその女性から唐突に自己紹介をされた。

「えっと……何か御用ですか？」

この世界に来てしばらくしてから紫としたある約束を忘れ去っている。

「ああ、君の力を借りようと思ってね。なに、紫様の起きる春までだから心配しなくていい」

そう言うにこやかな女性に思わず見惚れてしまう。

春まではかなり長期間の束縛である。

「あ……あー！ 外の物を持ってきてもらう代わりにこの事か！ ようやく思い出したようで、うんうんと頷いている。

食材などを持ってきてもらう代わりに紫の家族の手伝いをすると随分前に約束していた。

それがこの事だったらいい。

「少し待っていてください。慧音に事情説明してきますんで」

「うん、待たせてもらおうよ」

十分後。

「藍さん、私達の恭司を頼みます。家事なら何でも出来るので慧音も出てきて、私達のと強調し返してもらおうの前提で藍様と話している。」

「？ ああ、任せてくれ。家事が出来るのはとても頼もしいよ。何で執着するのかと不思議そうにしながらもしっかり頷いた。

家事をすべて任せられる実力があれば、冬を乗り切るのが楽になるなど考えている。」

「リフボードで空を飛ぶのも久しぶりだ」
色々な荷物を詰めたカバンと小脇にリフボードを抱えて出てきた。

その見覚えのある物におや？って顔をする藍様。

「それは？」

「これ、紫に貰ったんです。空を飛ぶイメージを描いてたらプレゼントトって絵と同じような物を」
嬉しそうにリフボードを持っている。

自分が作らされた用途不明のあれは彼に与える為の物だったのか、と藍様は頷いて納得している。

「それじゃあ、行こうか。それでは恭司君をお預かりします」
慧音に頭を下げ、浮き上がった。

恭司はリフボードに乗り空を飛ぶイメージをして浮き上がり、風に乗っている。

そして二人はそのまま飛んでいってしまい、慧音はそれを寂しそうに見送っていた。
ちなみに妹紅は炬燵でみかんの白いのを取っている。

マヨヒガ

「今日からお世話になる鉄恭司です。精一杯頑張るのでよろしくお願ひします」
藍様に案内されている途中、猫耳少女を見かけてしっかりと挨拶している。

「あつ、この前のお兄ちゃんだ！」
どうやら恭司を知っているようだった。

嬉しそうにしている所を見ると悪い印象はないみたいで一安心。

「橙、会った事があるのか？」
嬉しそうにキラキラした目をしている橙に思わず聞いている。

この作品の藍様は橙を家族として大切に思っており、一緒にマヨヒガで暮らしている。
だから特に暴走したりはしないはず。

「はい！ ご飯を食べさせてもらって炬燵にも入らせてもらいました！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。俺は君にご飯を食べさせたり炬燵に入れたりした覚えは……」
まったく身に覚えがなく焦っている。

何回見ても分からないので必死に思い出そうとしているが、やはり猫耳少女を見た事がない。

「にゃあ」
そんな恭司の目の前で、いきなり尻尾が二つある猫に変わり擦り寄ってきた。

「ああっ！ あの時のにゃんこだ！ ……猫だ！」
にゃんこと言ったのがツボに入ったのか、藍様が笑いを堪えている姿が視界に入り言い直していた。

ある日、恭司が里をぶらぶらしていると二つの尻尾を持った猫が子供達に取り囲まれているのを目撃。

いきなり囲まれびっくりして怯えていた猫を抱き上げ、子供達にはお菓子を与えて解散させ家に連れ帰っていた。

『やっぱ猫も可愛いなあ』

炬燵に入り膝の上で頻りに甘えてくる猫を撫で撫でする、それが幸せすぎてデレデレしていた。

『にゃあ』

心地いいのか手に頭を擦りつけてくる。

『尻尾が二本あるって事は妖獣なんだろうけど……。まあ、可愛いのは正義って言うし関係ないよな。ちょっと炬燵に入って待ってな、ご飯作ってあげるから』

膝からおろして炬燵に猫を入れ、そのまま台所に向かっていった。

十数分後。

『出ておいで、一緒に食べよう』

食べやすいように解した魚を醤油と一緒に白米に混ぜたものを皿に乗せて置いた。

そんな自分も魚と白米である。

いそいそと炬燵から出てきて食べ始めた。

水を入れた器も持ってきて置いてある。

食事も終わり後片付けをして炬燵に入っていると、うとうととして眠ってしまった。

途中誰かに抱きつかれているような気もしたが気にせず眠り続け、気がついたらあの猫はいなくなっていた。

『帰ったのかなあ………』

寝呆け眼で見渡すが居なくなっている。

また会いたいなあ、と呟いて再び眠ってしまった。

そして今に到る。

「えへへ。黙って帰っちゃってごめんね？ 藍様が探しに来てくれたから慌てちゃって」

女の子に戻り、凄く可愛らしく謝ってくる。

若干藍様が空気。

またしてもロリ娘に懐かれている。

某ピアスの青年が言っていた、ロリが好きなんじゃないロリも好きなんだ、と。

いつか恭司も胸を張って言う日が来るかもしれない。

「そうだったんだ。あ、俺は鉄恭司、しばらくの間よろしくな」

「私は橙。よろしくね、お兄ちゃん！」

お兄ちゃんと呼ばれ、しかも抱きつかれて激しく動揺している。

「仲良くなつてもらえて嬉しいよ。恭司君、君には家事を任せたいんだが大丈夫かな？」

空気が藍様が割つて入ってきた。

二人だけで仲良くなられて疎外感を感じてしまったようだ。

「はい、大丈夫です。こう見えて永遠亭でも全ての家事はやっていたので」

主夫としても優秀で働きに出ても優秀、嫁に貰いたくなるステータスだった。

「ふふ、それは頼もしいよ。それとたまにでいいから橙に料理等を教えてあげてほしい。恭司君に懐いているみたいだからね」
そう言つて微笑んでくる美しい九尾の女性。

慧音や輝夜で慣れてきたとはいえ美人の目を見るの恥ずかしく、目が泳いでしまう。

「はい、わかりました」

ドキドキしながら頷いていた。

恭司の部屋

「紫が用意しておいたとか準備万端すぎる」

月刊デュエリストマガジンやらルマンドやらが置いてあり、かなり

生活しやすい環境でご丁寧にテレビとDVDに炬燵まで置いてある。テレビが観れたりするのは分からないが、紫は恭司をここに永住させる気満々だった。

「マクロスF。紫はシェリルとでも呼んでほしいのか？ 銀河の妖精の方が？」
荷物を置いてからDVDを漁っている。

「おっ、スクライドのDVDが揃ってる。紫、俺の事が分かってるじゃないか」

紫が冬眠している間に好感度が鰻登り、ややLOVE寄りになった。

「ゲームにラブプラスとか。寧々さんみたいな人がいいなあ」
何がと言わないらしい。

それを棚に戻しポケモンを物色、自分のROMに技マシンやらを送っている。

「恭司君、少しいいかな？」
移動作業をしていると、藍様が部屋の外から声をかけてきた。

「あ、はい。どうしました？」
作業を中断して、襖を開けて出てみると照れ臭そうにデュエルディスクを付けた藍様が立っていた。

「君の事は紫様に聞いていたんだ。私ともデュエルをしてもらえないかな？」

「どうやら勝つ自信がかなりあるらしく、見てわかるくらい自信に満ち溢れている。」

「いいですよ。早速やりましょう」

デュエルディスクを取り出して装着し、デッキを選択してセットした。

嬉しそうに揺れる九本の尻尾を見ながら付いていくと日の当たる庭に出た。

「どうやら今回のデュエルのフィールドはこころしく、橙が縁側に腰掛けてこちらを見ている。」

「LPは8000、他のルールは同じでいいかな？」

「ええ、いいですよ。LP8000は少々ですが、ルールは変わらずLPだけが本来と違った。」

「デュエル!!」

「私のターンからだ。ドロー！ カードを二枚伏せ、ホルスの黒炎竜LV4を召喚！」

ATK1600

「ホルス……さっき伏せたのはお触れか？ いや、それなら後攻を選択するだろうし……」

アカデミアで十代がくらったあれかな？と観察しながら考えている。

「魔法カード、レベルアップ！を発動。ホルスの黒炎竜LV4を墓地に送り、デッキからホルスの黒炎竜LV6を特殊召喚してターンエンドだ」

LV4の体が輝きを放ち、翼を広げた黒炎竜LV6に進化した。

ATK2300

「俺のターン、ドロー！……」

このターンで終わらせたいなと考えながらドロー。

ドローしたカードを見て、あまりの引きの良さに思わず口角が上がってしまう。

「何故か分からないが勝てる気がしない……」

口角を上げた恭司を見た途端に勝ち筋が見えなくなっていました。

潜り抜けたデュエルの場数が段違いすぎる。

「まずは魔法カード、ハリケーンを発動して場の魔法・罫を全て手札に戻してもらおう」
強風が巻き起こり伏せられた二枚が藍様の手札に戻されていく。

「……………」
戻った二枚のカードと手札をシャッフルし、恭司の様子を見ている藍様。

「そして魔法カード、調律を発動。クイック・シンクロンを手札に加え、デッキをシャッフルしてからトップから一枚墓地に送る」
デッキのクイック・シンクロンが一枚自動的に取り出され、それを藍様に見せてから手札に加えている。

そして自動でシャッフルが行われ、デッキトップから一枚墓地にカードが送られた。

落ちたのはドッペル・ウォリアーで相変わらずいいカードが落ちる。

「そして手札のポルト・ヘッジホッグを墓地に送りクイック・シンクロンを守備表示で特殊召喚。そしてチューナーモンスターが場に存在する場合、墓地のポルト・ヘッジホッグを特殊召喚できる。さらに手札からジャンク・シンクロンを通常召喚し、効果により墓地のドッペル・ウォリアーを守備表示で特殊召喚する」
凄まじい展開力を発揮している。

クイック・シンクロン

DEF1400

ボルト・ヘッジホッグ
DEF800

ジャンク・シンクロン
ATK1300

ドッペル・ウォリアー
DEF800

「何という展開力だ……」
色々と紫から聞いていた藍様でも茫然とする展開力。

「レベル2ドッペル・ウォリアーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」
三つの輪になったジャンク・シンクロンがドッペル・ウォリアーを包んでいく。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 切り開け、ジャンク・ウォリアー！」
覚悟完了とばかりに薄い青の装甲を纏った戦士が現れた。

ATK2300

「あれがシンクロ召喚か……」

「ドッペル・ウォリアーはシンクロ召喚の素材に使われて墓地に送られた時、ドッペル・トークンを二体攻撃表示で場に特殊召喚する事が出来る。さらにジャンク・ウォリアーはシンクロ召喚成功時、自分の場に存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力を自分の攻撃力に加える。パワー・オブ・フェローズ!」
三体のモンスターの攻撃力が加算されジャンク・ウォリアーが強力になっていく。

ドッペル・トークン×2
レベル1

ATK400

ボルト・ヘッジホッグ

レベル2

ATK800

ジャンク・ウォリアー

ATK2300 ATK3900

「攻撃力3900は……」

藍様のデッキに正攻法で勝てるモンスターはいない。
というより融合などのギミックがなければ、この時代でシンクロに勝るカードは少ない。

「まだだ。レベル2ボルト・ヘッジホッグにレベル5クイック・シンクロンをチューニング!」

五つの輪がボルト・ヘッジホッグを包んでいく。
シンクロの大盤振舞である。

「集いし怒りが忘我の戦士に鬼神を宿す。光差す道となれ！ シンクろ召喚！ 咆えろ、ジャンク・バーサーカー！」
アニメでは何の活躍もなく、ホ口枠を取るなど言われた可哀想な赤い鎧の狂戦士が降臨した。

ATK2700

「わあ、凄い……」
座って見ていた橙も二度目のシンクろ召喚に目をキラキラさせている。

「藍さんには悪いが、このターンで決着をつけさせてもらおう。死者蘇生を発動してクイック・シンクロンを蘇生。そしてレベル1ドゥペルトークン2体にレベル5クイック・シンクロンをチューニング！」
そして三度目のシンクろ召喚に。

「三回目のシンクろ召喚……。ははっ、本当に凄いな」
圧倒的な展開力と強力なシンクろモンスターを一気に三体も呼び出そうとする目の前の存在。
もう笑うしかなかった。

「集いし叫びが木霊の矢となり空を裂く。光差す道となれ！ シン

クロ召喚！ 出でよ、ジャンク・アーチャー！」
弓を構え狙いを定めた射手が場に現れた。

ATK2300

「ジャンク・アーチャーの効果発動。1ターンに1度、相手の場に存在するモンスター1体を除外する。ディメンジョン・アロー！」
効果によりホルスの黒炎竜LV6を除外、これにより藍様の場に何もなくなってしまった。

「これが狙いだったのか」

「ジャンク・アーチャーでダイレクトアタック！ スクラップ・アロー！」
構えた弓から矢を放ち、放たれた矢が藍様を貫く。

「うっ！」

LP8000 LP5700

「ジャンク・バーサーカーでダイレクトアタック！」
邪魔される事なく、藍様に向かって巨大な斧を叩きつけた。
心なしか嬉しそうに見える。

「きゃあっ！ ……な、何でもない」

思わずぎゅっと目を瞑り、受けた衝撃に可愛らしい悲鳴をあげてしまい恥ずかしそうにしている。

LP5700 LP3000

「ジャンク・ウォリアーでダイレクトアタック！ スクラップ・フェイスオッ！」
覚悟完了！とばかりに藍様に加速して接近、拳を叩きつけて離脱した。

今日もジャンク・ウォリアーは輝いている。

「きゃあああああつ！！」
トドメの一撃は耐えられなかったのか、可愛らしく悲鳴を上げて座り込んでしまった。

LP1900 LPO

「平気ですか？」
座り込んだ藍様に手を差し伸べた。

熱くなりすぎたと反省し、敬語に戻っている。

「あ、ああ。しかし凄かったな」
ぼんやりとこちらを見ていたが、ハツとして手を掴んだ。

「お触れホルスはシンク口使う俺にはあまり脅威じゃないんですよ。
……あの、立てますか？」
手をぎゅっと握ったまま立ち上がらないので問い掛けている。

「ありがとうございます。これから紫様が起きるまでよろしく頼むよ」
そのまま立ち上がり、堅く握手をしてくれた。

「はい、家事なら任せてください」
手を握り返している。

そして約三週間後。

縁側

「藍の尻尾は本当に綺麗だよな」
何があったのかは分からないが、藍様を呼び捨てにしている敬語もなくなっている。
しかも美しい尻尾のブラッシングまでしている。

「本当にスポンジみたいな男だな、君は。頼りにしているよ」
心地好さそうに尻尾のブラッシングをされている。

橙は猫の状態でブラッシングされたらしく、すやすやと座布団の上で眠っている。

「キエアアアシャベツタアアア……ほい、おしまいだ。ふつくしい尻尾」

スポンジと言われて反応してしまったようだ。

そのまま藍様の隣に座り、ぽかぽかなお日様の下でまったりしている。

「恭司が来てから私の負担も減って助かっているよ。あの里の守護者が言いたかった事が今なら理解できるな」

隣に座った恭司に軽く寄り掛かり、肩に頭をもたれさせて呟いている。

この三週間で藍様は恭司を慧音の元に返したくなくなっていた。主に愚痴を聞いたり、素人ながら効率の良い結界のメンテナンスの仕方を提案したり、さり気ない頭の良さを藍様との会話で披露してみたりとこつこつ信頼度と好感度を上げていたようであり、かなり気に入られている。

フラグー級建築士の面目躍如である。

「まあ、まだ一カ月ちょっとあるよ。でも先週の慧音は面白かったな」。藍と食材の買い物しに行っただけで取り乱してたしくくっと思出し笑いをしている。

「まさかずつと付いてくるとは思わなかった」

気持ちは分かるが、と内心呟いてここまでしても何の反応も返さない恭司をちら見している。

「まあ、あれじゃないかな。姉が弟を盗られると思って付いてきたとか。俺の姉さんもよく付いてきてたし」
かなり緊張しているが態度には出さないようにしている。

「……これで鋭いと自負しているとはな」
見当違いな恭司の言葉にやれやれとため息を吐いた。

慧音の好意には気づいているが分からないフリを継続中。
しかしその好意は異性に対するの物ではないとネガティブに捉え、
期待せず傷つかないようにしている。

「揺るぎなき自我を保つ境地、この世界でなら到達できるかもしれない」
藍様に寄り掛かれてかなり動揺しているようではまだまだ無理である。

「どれ」
悪戯な表情でさらに身体を密着させてくる。

「やっぱり無理」
そんな藍様にデレデレしてしまい一瞬で諦めてしまった。

アクセルシンクロまでの道は遠い。

お手伝いをしに行ったマヨヒガ。

まったりした午後の日差しの下、藍様との仲が着々と深まっていく。
爆発しろ。

続く。

色々自重しないのが彼（後書き）

この作品の橙は藍様達と一緒に暮らしており、猫にもなれます。

あーあ、5D・S終わっちゃったなー。

ジャンク・ウォリアーが好きな自分には嬉しいラストデュエルだった。

そして可哀想なバーサーカーをこれからも使い続けたいと改めて思った。

世界のキング、何でラストデュエルで新シンクロ使うんだよ……。

藍様フラグは強固（前書き）

積極的な藍様。

のらりくらりと躲す恭司。

色々暴露する妹紅。

藍様フラグは強固

早朝

「おーい、二人共ご飯だぞー！」

エプロンを付け、テーブルに焼き魚や味噌汁を並べながら二人を呼んでいる。

「おはよー！ お兄ちゃんのご飯大好きー！」

朝も早いのに元気いっぱいのお橙が後ろから背中に飛び付いた。

すっかり懐かれており、特別に猫だけが棲む小さな里に連れていってもらっていたりする。

その猫達はお橙の言う事は聞かないらしく、若干不安に感じながらも付いていった。

廃村を利用してはいるらしく、そこら中が猫だらけのまさに猫の楽園。お橙に聞いていたよりも大人しく、足に擦り寄ってきたりと動物好きの恭司にはたまらない場所だった。

たくさん集まっているのに暴れず、気持ち良さそうにブラッシングや蚤の駆除をされる猫達を見てお橙は啞然としていたが。

「ほら、お橙。早く降りないとまた藍に叱られるぞ？」

お櫃に炊いたご飯を移し、茶碗と一緒に運んでいく。

その間もお橙は楽しそうに背中にぶらさがっていた。

にやんにやん言ってる可愛いな、と内心思っている。

「うん、恭司の料理は今日もおいしそうだな。それと橙は早く降りなさい」

そして今日も凜々しい藍様が到着。

「はい」

素直に背中から降りて自分の席に座った。

「はい、まずは藍のだ。それと橙の分……と」
茶碗に白米をよそって二人に渡している。

こうしていると仲のいい本当の家族みただった。

父親が藍様で母親が恭司、そして子供が橙。

そうなるに紫はおばあ……

「橙が好きな甘い卵焼きも作ってあるからな。藍は味噌汁の油揚げ多めにしておいた」

炊事洗濯掃除に橙の遊び相手や、藍様の手伝いとかかなりのハードワーク。

「やった！」

「ありがとう。油揚げを多く入れてもらえると今日一日がんばろうと思えるんだ」

「それじゃあ、食べよう。いただきます」
手を合わせ挨拶をした。

『いただきます！』

食後。

「藍、お昼のお弁当だ。結界の管理がんばって」
すぐに出かける藍の為に弁当箱を手渡した。

この光景は何だか藍様の奥さんみただった。
藍様が、ではなく。

「ああ、行ってくるよ。早く帰れたら二人で買い物に行こう」
橙は既に遊びに行っていないらしく、二人きりなので買い物という
名のデートのお誘いをしている。

「確かに食材がそろそろ心許ないと思ってたんだ。わかった、帰っ
てきたら一緒に行こう」
腕を組み食材の在庫を考えて了承した。

少し藍様が複雑そうな顔をしていたが、二人で出かける事が変わり
はないと納得して出かけて行った。

廊下

「まーどをあけーましよ、ルルルよーんでみましよ」
年がバレそうな歌を歌いながら掃除をしている。

庭

「出会った頃はこんな未来―想像できなくて―」
全て洗濯し、歌いながら太陽の下に干していく。

藍様は自分の服等を任せるのにしばらく恥ずかしがっていたが、最近では慣れたらしい。

永遠亭で慣れた恭司が淡々とこなすので照れなくなっている。

「んー、今日は洗濯物少なかったし昼前に全部終わってよかったな
ー。さてと、橙が帰ってくる前に昼の準備もしておくか」
休まずに昼の準備に向かった。

お昼

「ただいまー！」

『お邪魔します！』

橙と何人かの声が聞こえてきていた。

そしてバタバタと橙が廊下を駆けてくる音がする。

「お兄ちゃん、ただいま！」

ぴよんと料理中の背中に飛び付きにゃんにゃんごころ言っている。

「おかえり。橙、他にも誰か居るんじゃないか？」
中華鍋を振りながら尋ねている。

「えへへ、私の自慢のお兄ちゃんを見せたくて友達を連れてきたの」

「おつ、橙の自慢になれたのは光栄だな。それならお友達も一緒にお昼ご飯を食べようか。炒飯だから量はあるんだ」
橙を背に乗せたまま炒めている。

「言ってくる！」

ぴよんと背から離れてバタバタ走っていった。

……

……

……

…

「友達つてチルノと大ちゃんだったのか」

「橙ちゃんの自慢のお兄さんつて恭司さんだったんですね」
恥ずかしがりながらもちゃっかり隣に座る大妖精だった。

「お兄ちゃんは二人を知ってるの？」

「チルノは一応俺や藍と同じでデュエリストなんだ。大ちゃんは倒れてる所を介抱して知り合っただよ」
チルノと知り合った経緯は省いて、ちょうどいい位置にある大妖精の頭を撫で撫でしながら説明している。

「あ、これおいしー！ さすがキョージの料理ね！」
少し冷ました炒飯をチルノはぱくぱく食べていた。

「褒めてくれてありがとなチルノ。ほら、橙に大ちゃんもまずは食べよう」
いただきます、と食べ始めた。

午後

「掃除も洗濯も終わって暇なんだよな……。みんな遊びに行っちゃったし」

橙達はまた遊びに行ってしまう一人きりでぼんやりとしている。

洗濯物を取り込むにもまだ早い時間だった。
ぼーっと縁側に座って茶を啜っている姿は、神社でぼーっと茶を啜っている某腋巫女のように。

「俺、動物の妖怪にだけはならない」
妖怪になる為の108の方法、と書かれた怪しい本を読みながら呟いていた。

間違いなく柴犬の耳と尻尾になるだろうから渋い顔をしている。
どうせなら藍みたいなふさふさで格好良いのがいいなあ、と考えながら読み進めていく。

「出会った人や妖怪、神様とか増えたな」

本を読み終え、携帯に保存していた画像をノートPCにも移してフォルダを分けている。

「私達のもちやんとあるんだな」

いつのまに帰ってきたのか藍様が肩に手を置いて覗き込んできた。

「藍、おかえり。まあ、見ての通りだよ」

橙が笑顔で飛び付いてこようとしている写真や、藍様の名を呼び振り向いた時の写真など。

お賽銭をたくさん入れた直後の満面の笑みを浮かべた霊夢という貴重な一枚もあつたりする。

「洗濯物は取り込んでおいたから早速買い物に行こう。それとお弁当もおいしかったぞ」

さらっと褒め、座っていた恭司を立たせている。

「藍と橙の好みの味付けはもう分かったから。後は料理がおいしくなる素敵な調味料である愛情かもしれんね」

保存してノートPCの電源を落としながら答えていた。

急いで戸締まりと準備をして、藍様に抱えられながら里に飛んでいく。

抱えられ方のイメージをするならUFOキャッチャー。

人里

「鉄の兄ちゃん、毎回違う女の人を連れてくるのはおじさんどうかと思うの」

購入した米を渡しながら妬げちゃうねえとか言ってくる。

「おっさん、毎回若い里の女の子を口説こうとするはお兄さんどうかと思う」

さらっと暴露しつつ受け取った。

「あんだ、ちょっとこっちに」

「ち、違っただって！ それは鉄の兄ちゃんが……」
嫁さんに店の奥まで連れていかれてしまった。

「はっはー、正義は勝つ」

「上白沢さんは分かるとして、他に誰と来ているんだ？」
藍様は女性関係に興味を持っている。

「妹紅とか鈴仙かな。妹紅は甘味処に誘導しようとして付いてくるし、鈴仙は店の前でよく会うから。……早苗に射命丸、咲夜もいたな」
指折り数えて答えた。

便利に米をカード化してポケットにしまっている。

「それは毎回違う女性を連れてくると言われても仕方ない」
藍様も呆れてしまっくらい様々な少女達と来ていたようだ。

「おばちゃん、予約してたの入った？」

藍様を伴って店に入り、色々手に取ってからおばちゃんに入荷したか確認している。

マヨヒガに行く前に予約をしていた物があるらしい。

他にも日常生活に必要な消耗品を会計してもらっている。

「入ったわよー。男共は恭司ちゃんを見習ってほしいわ」

はい、と箱を手渡された。

「恭司、何を頼んでいたんだ？」

「包丁。おばちゃんの知り合いの鍛冶師の方に頼んでもらったんだ」
前払いにしたからお給料一気に無くなっちゃったけど、と呟いている。

「本当に料理を作るのが好きなんだな」

毎日毎日違うメニューを出してきて、おいしいと言うと嬉しそうに笑う姿を思い浮べていた。

「おいしい物を食べるのって楽しいだろ？ それに本当においしい料理は食べた者の人生まで変えるんだ」

そんな料理を作れるようになりたい、と言いながら箱を開けて包丁を見ている。

「それもおばあちゃんの言葉か？」

「うん、そつだよ。おばちゃん、ありがとう」
事ある毎に言っていたから藍様もおばあちゃんの言葉を幾つか知っていた。

「いいのよ、またご鼻屑にでももらえれば。それにしても綺麗な方ね」

藍様を見て呟いている。

「いえ、私なんてそんな……」

「藍、それは嫌味にしか聞こえないと思う」
かなりの美人にそんな事言われたら嫌味にしか聞こえない。

「だけどこんな美人な方を連れてくるなんて恭司ちゃんもやるわね」

「みんなそう言うよね。ここ来る前に寄った豆腐屋でも言われたし。俺なんかとそんな関係みたいと言われるのは藍が可哀想だろ」

「いや、私は別に構わないが」
さり気ないアピールは忘れていない。

甘味処

「で、何で妹紅まで居るんだよ」
注文を終えて運ばれてきたお茶を手に行っている。

あの後散々おばちゃんにからかわれ、疲れてしまったので甘味処に
来ていた。

「恭司が店員の女の子に手を出さないように見張りに」
妹紅がさり気なく一緒に座っている。

「よし、帰れ」

「ゴ―！と入り口を指差した。」

「まあまあ、いいじゃないか恭司。君の話聞かせてもらえるようだし」

藍様はちよつとワクワクしていた。

「確か八雲紫の式だっけ？ 私は藤原妹紅。恭司の友人で今の保護者みたいだし、妹紅でいいよ」

「藍だ、八雲藍。私も藍でいい」

二人は隣に座りあつて自己紹介をしていた。

「何だろう、この母親が友人の母親に俺の恥ずかしい事を暴露する前みたいな空気」

妹紅がニヤニヤしていて嫌な予感しかしない。

十数分後

「広い交友関係を持っている事がよく分かったよ」
山の神様から竹林のお姫様、紅い館の吸血鬼と色んな種族と知り合
いで少し驚いていた。

「それに、恭司ってね」
他にも色々と言われてしまい、様々な事がバレってしまった。

帰り道

「ふふふ、ここに来てからの行動全てを教えてもらったのは大きな」

ニヤニヤしながら抱えて飛んでいる。

「うう、バレた……」

妹紅の口を塞ごうとする度に藍様に押さえ付けられ、全て話されてしまい耳まで赤い。

「性的な事に興味が無いのかと思ったが、そんな事もないようで安心したよ」

寄り掛かって肩に頭を乗せてみたり、抱きつくように飛んでいるのに平然とした顔をしているから、不能なんじゃないかって思われていたらしい。

「自制が効くんで。俺のリビドーならきつとアインゴットを軽く三回くらい復元できる」

ドスケベって事ですね分かります。

「鉄のような自制心だと感心するよ。それとずっと思っていたが君の名前は面白い」
ぎゅっと密着して耳元で囁いている。

「そうか？ あと、当たってます藍様」

ぎゅっとくっつかれて耳が赤くなっている。

「当ててるのよ。それよりも名前の読み方が君にぴったりなんだ。……教えずで教示。縁起の良くない出来事で凶事。そして、自分の力や才能を信じて持つ誇りの矜持」
さらっとワザとだと言い、名前の読み方が面白い理由について説明してくれた。

「あー、うん。そうなんだ……」

当然説明はまったく頭に入らず、背中に当たる感触に全神経が集中している。

「恭司。この響きは実に君に似合っている」
異性として見られているのが分かりちよっとご機嫌な藍様だった。

橙の友達はチルノと大ちゃんだった。

妹紅と藍様が知り合いになり、さらに色々と暴露されてしまった恭司。

藍様の恭司を見る目が艶やかに変化したのがイラッとくるぜ！

続く。

藍様フラグは強固（後書き）

積極的に行けば藍様エンドにもすぐに到達出来るはず。

エクシーズ始動で出るDITテーマのエクシーズの扱いどうしよう。
エクシーズは使用する予定がないから物凄く困る。

寝呆けたスキマでどこかに（前書き）

色んな出会い。

紳士は淑女を引き寄せる。

ちよつとだけシンク口譲渡。

寝呆けたスキマでどこかに

「あ、勇儀さ……ギャンッ！」

勇儀の姐さんの姿を見つけて油断していたら、何かが脳天に直撃してそれに耐えられず気絶してしまった。

何故お手伝いをしているはずのマヨヒガに居ないのか。

それは家事を終わらせ縁側に向かう途中でスキマに飲まれ、気がついたら訳の分からない場所に立っていたから。

そしてたまたま歩いている勇儀の姐さんを発見して声を掛けようとした所だった。

……

……

……

…

「……で、私の所に連れてきたの？」

「だって気絶するなんて思わなくて……」

二人の女の子の声が聞こえ、意識がゆっくり覚醒していく。

「あ、頭がぐわんぐわんする……」

ハッとして上半身を起こすも、額に手を当て辛そうにしている。

「大丈夫？」

「ああ、なんとかな……」

少し治まってきたようで声の方を向いて答えた。

そこには金色の髪に黒いリボンを付けた特徴的なスカートの子と、その子に隠れるように桶に入った緑髪のツインテールの少女が居た。

「俺は確か勇儀さんを見かけて声を掛けようとして……」

「この子入りの桶が頭に直撃したんだよ」

ほら、と緑髪ツインテールの少女が入った桶を見せてくる。

「……えーっと、飴食べる？」

怒っていると思ったのか怯えられ、涙目で桶に隠れてしまった。ちよっとシヨックだったが気を取り直して飴で釣ってみている。

「……食べる」

飴に反応してひょこっと出てきた。

「ほら、あーん」

飴を持ってあーんってやる姿に違和感がない。

「あーん……あつ、おいしい」

ヨーグルト味が気に入ったのか嬉しそうな笑顔を見せてくれた。

「そうかい。……そうだった、勇儀さんを探さない」と

少女の笑顔に癒されていたが、ここがどこだか分からない以上知り合いを探すしかない。

「まだ少し休んでいたら？ まだ頭クラクラしてるんでしょ？ 私

はそんなに急ぎじゃないから話相手にはなれるよ」

「ありがとう。……そういえばまだ自己紹介してないよな」
優しい金髪の女の子に礼を言い、休ませてもらおうとしてから気がついた。

「あ、そうだったね。私は黒谷ヤマメ」

「ん……えっと、キスメ」

「俺は鉄恭司。黒谷さんとキスメね……よし、覚えた」
これで友達だな、と見ず知らずの場所で友人が出来て喜んでいる。

ヤマメが土蜘蛛の妖怪だったり、キスメが釣瓶落としだったりと話している内に色々分かったが驚かずに軽く受け入れていた。

「あはは、恭司って変なの」

「うん、やっぱり変だよ」

「あー、びっくりした。変だけか」

二人に変態って言われるのかと思ってドキッとしていたらしい。

一応自覚はあるみたい。

初対面な二人には流石に何もそんな事を言ったり、したりはしない。

……

……

……

…

「絶望した！ 空が飛べない自分に絶望した！ ……なんてやっている場合じゃない、徒歩でも行ける場所はないのか」
二人に話を聞き、地上と地下を結ぶ縦穴を見に行ったが自力で上れない事に気がついた。

ヤマメは用事を終わらせに、キスメも付いていってしまい一人きり。スニーキング状態で誰にも見つかる事なく到着していた。

「……………」

「どつするか……………」
独り言を呟きながらうつろうつろうつろしている。

「……………」

「実体化させて行くにしても距離が分からないし……………」
途中で切れたりしたら死んでしまう。

「……………」

「仕方ない、一度引き返して」

「貴方気づいてるわよね。さっきから私は何回も貴方の視界に入ってるもの」
戻ろうとしたら見ないようにしていた者に服の裾を掴まれてしまった。

「しまった、あえて見ないようにしてたのに捕まった！」

「その隠そうともしない所が妬ましいわ」

緑の目、金色のショートボブで後ろで髪の一部を結っており、服装も独特な女性。

「それで何か御用ですか？ 僕、お金ないんで……」

「別に何か取るうって訳じゃないわ。人間がうろろしてたから何かあったのかと思って見に来たのよ」

うろろし続けていたのが気になっただらしい。

「あ、それなら上に行きたいけど飛べないので連れて行ってください」

「そうしてあげたいけど、私じゃ貴方を上まで運ぶのは大変なの」
「どうやら今の恭司にはあまり妬ましい部分がないらしく、優しく対応してくれている。」

「残念です。そう言えば貴女の名前は？」

優しい女性の対応に名前を知りたくなっていた。

何よりも綺麗な女性だったから聞きたいって気持ちの高そうだが。

「私？ 私は水橋パルスィ、この縦穴を守護している者よ」

「水橋さんですか。俺は鉄恭司です」
握手をして自己紹介をした。

「旧都を探し回って勇儀さんに地上に連れていってもらわないとダメか……」

一人で帰れる自信は絶対はない。

あの後特に妬まれる事もなく会話を続け、パルスィに別れを告げてから旧都に向かっていた。

地底についても詳しく教えてもらって不安いっぱいになっている。

勿論ここでも強さは下から数えた方が早く、出来れば歩き回りたくないが行かなければ勇儀の姐さんに会えない。

……

……

……

…

「うう……あ、すみません」

気前のいい鬼から杯をプレゼントされ、それに酒を注がれている。

鬼の宴会をやっていたらしく、勇儀の姐さんを探していたら違う鬼の方々に引き込まれていた。

人間だ人間だともみくちやにされ、気がついたら肩を組まれて逃げ出せない状況に。

「ほら、飲んだ飲んだ！」

鬼の女性達に囲まれており、男の鬼達は気の毒そうに恭司を見ていた。

どこも女性が強いのは変わらないらしい。

「……ぷはっ」

注がれては飲み干し、注がれては飲み干し。

いい飲みっぷりで鬼の男女問わず気に入られている。

酔い始めてからは男連中と肩を組んでご機嫌に歌ったりと宴を楽しんでいた。

地霊殿の話や、覚の妖怪の話聞いたのはよかったのかもしれない。

数時間後。

「あははは、ばいばーい！」

仲良くなった鬼達に見送られ、手を振って歩き始めた。

貰った杯もしっかり持っている。

しばらく無意識にフラフラ旧都の中央の方に歩いていくと、よく分からない西洋風の建物の前に着いた。

「あー、永琳様様だわ」

酔い覚ましを飲んでから、改めて目の前の建物を見ている。

カード化して持っててよかったと呟きながらカバンを解き放ち、その中からミネラルウォーターを取り出して飲んでる。

「ようこそ恭司」
旧都からここまで無意識に来させたのはこいしだったらしく、いつのまにか隣にいた。

「こいしちゃん？」

「早く早く、みんな居るから」
何故ここにいるのかと不思議そうにしている恭司の手を掴んで連れていく。

抵抗もせず、ただこいしちゃんにされるがまま連れていかれている姿はダメな兄のようだった。

地霊殿内部

様々な動物が何故か寄ってくるので撫で回したりぎゅっとしたり、物凄く堪能しながら進んでいく。
さっきのはこのペットとこいしから説明され、さらに旧都やこいは旧地獄だと教えられてびっくりしていた。

「あれは？」

中庭の何かを指差して聞いている。

わくわくしているようで見える物全てが気になって仕方ない。
大きな子供だった。

「あれは灼熱地獄跡に向かう為の穴だよ。……いつ抱っこしたの？」

「さつき。超可愛い」

尻尾が二つの黒猫にデジャブを感じたが、躊躇なく抱っこして頭を撫で撫でしていたらしい。

主人らしき妖怪の部屋の前

「お姉ちゃん、入るよ」

そのまま中に連れられていく。

「あら、こいし。もしかしてこの人が前に言っていた？」

「うん、面白いんだよ」

見てて飽きないの、と紹介された。

「初めまして、こいしちゃんにストーキングされていたらしい鉄恭司です。趣味はデッキ調整、好きな事はデュエル、得意な事はチューニングです」

目の前の妖怪に関して『こいしちゃんのお姉さんもやっぱり可愛かったな』と考えながらも腕の中の黒猫を愛でるのをやめない。

「可愛いだなんて。私は古明地さとり、こいしの姉でここの主人よ。薄紫の髪の子に心を読まれ、挨拶をされた。

彼女の左胸にあるのは第三の目、服は上が水色でスカートは桃色。

「さとりさん、この猫が離れようとしませんが」
心を読まれた事よりもこっちに必死になっている。

降ろしてあげようとするのだが、にゃんにゃん言いながら服に爪を引っ掛けて離れようしない。

「お憐、離れなさい」

さとりがそう言つと没々離れ、さとの傍に向かった。

「さとり様、あのお兄さんの腕の中凄いですよ。何ていうか、こ
う、あたいの全てを包む感じのような」

いきなり女の子に変わったが幻想郷ではよくある事、と冷静に見て
いる。

赤い髪を両サイドで三つ編みにし、根元と先を黒いリボンで結んだ
おさげ髪。

黒い猫耳が可愛い、服は黒を下地に緑の模様のゴスロリのような
感じ。

「さとり様ー」

長いぼさぼさの髪に緑の大きなリボンを付け、真っ黒な翼に白いマ
ントの少女がいきなり入ってきた。

「お……おおっ！ か、可愛い！ ……痛いっ！」

少女に視線が釘づけになっていると、ムツとしたこいしに足を踏ま
れぐりぐりされてしまった。

白のブラウスに緑のミニスカートで、胸に真紅の目がある。
身長も高くて同年代くらいの容姿だったからか心の声が軽く漏れて
しまったらしい。

「うにゆ？」

「痛い痛い、こいしちゃんやめて！」

どこを踏めば痛いのか知っているらしくグリグリと踏み続けられて
いる。

こいしちゃんに足をぐりぐりされてから数十分後

自己紹介も終え、さとりと色々話そうとしたらペットの二人がそれ
をさせてくれなかった。

「にゃーん、お兄さーん」

お隣が人型のまま抱きついて甘えてくる。

「お隣ちゃん、さとりさんとこいしちゃんからの視線が痛い。そし
て空に即懐かれた意味も分からない」

心臓は早鐘を打っている。

「うにゆ……きょうじ」

火焰猫と地獄烏のサンドイッチ状態。

空は身体中べたべた触ってきて、頷いたと思ったら背中から抱きつ

いてきたので懐いた理由がよく分からない。
もしかしたら燃え滾る魂を持つ男だから本能的に懐いたのかもしれない。

一時間後

「さあ、ようやく話が出る」
さとりが何かを二人に伝えると、離れてどこかに行ったのでやっと話が可能になった。

「見せないわよ」
スカートを押さえてジト目で見てくる。

「これがマインドスキャンか」
パンツ見せてもらってもよろしいですか？と試しに考えてみたらしい。

「まったく……な、ななな何を考えてるの！」
急に顔を真っ赤に染め、怒り始めた。

「そんなの口に出したらR - 18になるから言えないに決まってるだろ」

キリッとした顔だが心の中は凄い光景が繰り広げられているらしい。

「わあ、本当に疎ましがらないんだ」
ずっとストーリーキングしていたからセクハラは見慣れている。

「うううっ！」
プシューッ！と湯気が出そうなくらいに顔が真っ赤で、頬に両手を

当っている。

「さて、悪戯するのはやめるとして」
妄想をやめ、さとりの目をじーっと見て何かを考えている。

「貴方がドスケベだつて事が分かったわ……」
真剣な顔で見えてくる恭司の心に新たなイメージが浮かび上がってきた。

「……うん、そうだ。君に決めた」
心に浮かぶ何枚ものカード、そしてその中でも綺麗な白いカードが印象的。

「……えっ、今は」
一瞬だけ心の表層に赤い竜のような物が見えた。

「最初は誰に渡すべきか、ずっと悩んでたんだよね。さとりさんならいいな」
カバンを開けてデュエルディスクを取り出している。

「恭司いいの？ シンクロモンスターは貴方だけが使えるものなんじゃ……」
こいしちゃんはいつも誰かに渡そうとするが躊躇ってはやめる姿を見ていたから驚いている。

「別に俺だけが使えるわけじゃないよ。六竜は渡せないけどね」
デュエルディスクと大量のカード、そしてサイキック族のシンクロモンスターを手渡した。

「何で私に……貴方は怖くないの？ 心を読まれても」

さとりが渡されたカードに触れ、呟くように聞いてくる。

心を読まれても平然としている目の前の人間が不思議で仕方ない。多分Mでもあるから思考が筒抜けなのがたまらないだけだと思う。

「うーん……特に怖くないな。だらだらした考えとか、えっちな考えが筒抜けなのは嫌だが」

今も眠い、藍はどうしてるのかな、こいしちゃんパンツ見えてると考えている事が筒抜け。

「……こいし、足を閉じなさい」

「見せてるの」

そう言いながらウインクしてくる。

この子も割と変態なのかもしれない。

風呂覗いたり、着替え覗いたりしてるし。

「残念、俺はロリコンじゃないから見ても興奮しない」
その割りにはしっかり見ていたようだ。

「お姉ちゃん、恭司何考えてた？」

「お空の胸が柔らかかったって……だから、その想像力は何なの！？」

空とイチヤイチャするR・18な妄想を繰り広げ始めたようだ。

「く、悔しい。ペットに負けるなんて……」

凄く悔しそうに足を閉じた。

感情が豊かになってきており、さとりも驚いている。ただ少し変態になっている妹に若干引いていたりも。

「……ふう。そのシンクロ以外のカードはお隣ちゃんと空にも分けてあげて」

デュエルディスクはまた次回にでも、と考えている。

「その自由さにペースが乱されるわ……」
自由人の心を読んで疲れてしまったらしい。

「お姉ちゃん、恭司に泊まってもらって明日デュエルでぼっこぼこにしよう」

パンツを見せたのに、空に負けたのが気に入らなかつたらしい。

「……帰りたいと言われても、地上に行くには貴方を運べて飛べる者がいないと無理よ」

こいしの思惑はスルーして、恭司の考えを読んで答えてくれた。

こうなるとやはり勇儀の姐さんが必要不可欠らしい。

「それなら眠いし今日は泊めてくれないか。正直限界なんだ」
鬼との宴ではしゃぎすぎて眠くて仕方がない。

「さとり様ー、部屋の準備が出来ました」
そんな話をしているとお隣が入ってきた。

「ご苦労様。恭司を案内してあげて」
予めこうなると予測して頼んでいたらしい。

「超愛してる」
さどりの手を握って感謝しているが感謝の仕方がおかしい。

「あ、え？」
握られた手と今の言葉で少し混乱してしまっているのに、感激のあまりに心の中までさどりに対する愛がいっぱい余計に混乱させてしまっていた。

「お兄さん、あたいは？」

「お隣ちゃんも超愛してる」
それを聞いたお隣が嬉しそうに、にゃーん！と抱きついてる。

そのままお隣に連れられて部屋から出ていった。

「彼は本当に自由ね。思った事を口に出すから心臓に悪いわ」
冗談でも愛してるとか言ってくるから心臓に悪い。

「面白いでしょ？ 誰に対しても親しくなるとあんな感じなんだよ」
姉妹のくすくす笑う声が部屋に響いていた。

客室

「お兄さん！ ダメだよ、あたいがいるのに他の猫の話なんてしち

「や！」

「え？ あ、ごめん」
反射的に謝っている。

部屋に案内してもらい、そのまま色々な話をしているようだ。話の流れで橙の話をしたら怒られてしまっていた。

「まったく、お兄さんは猫心が分かってないよ」

「猫心か……」

「そうだよ。しかも違う猫の匂いまでさせて……あたいの匂いで上書きしておくからね」
ぎゅーっと抱きついて体を擦りつけ、服に付いている橙の匂いを消そうとしてくる。

「どうやら俺はいつのまにかリア充になっていたらしい。どや？」
人間じゃない種族にはモテモテ、イラッとしそうなどや顔をしている。

「にゃーん」

散々マーキングして満足したのか猫になって膝の上で丸くなっていた。
た。

「……もう寝よう。明日こそ勇儀さん探して帰らないと」
膝のお隣を抱き上げ、敷かれている布団と一緒に入った。

逃げないみたいだからそのまま一緒に朝まですやすやと眠っている。

翌朝

「朝ご飯をいただいたと思ったら、あの灼熱地獄跡に続く穴がある中庭に連行されました」

デュエルディスクを付けて説明口調で呟いている。

「こいしが急かすから……。あれから聞いたからルールは大丈夫よ。シンクロ召喚の事も」

「お姉ちゃんががんばれー。恭司をぼっこぼこにしちゃえー」

昨日粉碎されたプライドの恨みをはらすとデッキ構築に携わったらしい。

「しまった、俺の手の内はこいしちゃん経由でバレてるじゃないか」
別にいいか、と少し距離を取ってデュエルディスクを起動させた。

さとりもデュエルディスクを起動させて距離を取っている。

「デュエル！」

「私のターン、ドロー。フィールド魔法、脳開発研究所を発動。そして手札から速攻魔法、緊急レポートを発動してデッキからクレボンスを特殊召喚。クレボンスをリリースしてマックス・テレポーターをアドバンス召喚。脳開発研究所にサイコカウンターを1つ乗

せて、マックス・テレポーターの効果を発動。デッキからレベル3のサイキック族、サイコ・コマンダーと静寂のサイコウィッチを特殊召喚。そしてレベル6のマックス・テレポーターにレベル3のサイコ・コマンダーをチューニング。シンクロ召喚、ハイパーサイコガンナー」

たんたんたんとあつという間にシンクロ召喚をしている。

ハイパーサイコガンナー

ATK3000

静寂のサイコウィッチ

ATK1400

「うわっ、いきなりシンクロ召喚かよ」

人の事は言えない。

「脳開発研究所が存在する限り、通常召喚に加えて一度だけサイキック族を召喚出来るのは知っているみたいね。手札からサイコ・コマンダーを召喚、レベル3の静寂のサイコウィッチにレベル3のサイコ・コマンダーをチューニング。シンクロ召喚、サイキックナイトメア」

日本未発売のシンクロモンスター、さとりが使うと洒落にならない効果を持っている。

ATK2400

「げっ!?!」

「サイキックナイトメアの効果発動。1ターンに一度、相手の手札をランダムに一枚選択して種類を当てる。当てたらこのカードの攻撃力は貴方のターンのエンドフェイズまで1000ポイントアップする。恭司、右から二番目のカードを指定させてもらっわ。それは魔法カード」

手札を頭に思い浮かべていたから手の内が筒抜け、絶対に当たる。

「うぐぐ……」

指定されたカード、魔法カード紅蓮魔竜の壺を見せた。

「ふふつ、カードを一枚セットしてターンエンドよ」「恭司があまりに正直すぎて、さとりは思わず笑っていた。

ATK2400 ATK3400

「ドロー！……よしよし」

常時デメリットのない真実の目が発動しているようなものだが、もう気にしない事にしたらしい。

「う……」

一瞬で膨大な量のコンボや展開する方法を思い浮べたので、さとりが少し怯んでいた。

「相手の場にモンスターが存在し、自分の場にモンスターが存在しない場合手札からバイス・ドラゴンを特殊召喚出来る。さらにダーク・リゾネーターを通常召喚！ レベル5バイス・ドラゴンにレベル3ダーク・リゾネーターをチューニング！」
ジャックもお得意のバイスリゾネーターでこちらもいきなりシンクロ召喚。

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！
シンクロ召喚！ 我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」
その禍禍しくも美しい姿を地底でも披露。

ATK3000

「……」

シンクロの口上にちょっと引いていた。

「魔法カード、紅蓮魔竜の壺を発動。レッド・デーモンズ・ドラゴンが場に存在する時に発動が可能、デッキからカードを二枚ドロースする」

アニメ仕様万歳。

「カードを三枚伏せてターンエンドだ」
相打ちしかできない状態なので三枚伏せてターンを終わらせた。

「私のターン、ドロー。……強化人類サイコを通常召喚し、効果発動。墓地のサイコ・コマンダーを除外して攻撃力を500ポイント

アップ。さらにマックス・テレポーターを除外して攻撃力を500ポイントアップ」

墓地のサイキック族を除外して攻撃力を上げている。

強化人類サイコ

ATK1500 ATK2000 ATK2500

「……」

無心になり、手札を読まれないようがんばっているようだ。

「サイキックナイトメアの効果を発動。左側のカードで種類はモンスターね」

既に手遅れだが。

「それ相性最高だな」

指定されたカード、ランサー・デーモンを見せた。

「これでサイキックナイトメアの攻撃力は1000ポイントアップ」
再び攻撃力が上がってしまった。

ATK2400 ATK3400

「ちょっとマズイ……かも」

「サイキックナイトメアでレッド・デーモンズ・ドラゴンを攻撃」
びっしっ！と指差す姿はカリスマ溢れる感じがする。

「畏カード発動、プライドの咆哮！ 戦闘時、自分モンスターの攻撃力が相手モンスターより低い時にその攻撃力の差分のLPを支払って発動。ダメージ計算時のみ、自分モンスターの攻撃力は相手モンスターの攻撃力を300ポイント上回る！ 迎え撃てレッド・デーモンズ・ドラゴン！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンが咆哮を上げ、炎を纏った拳でサイキックナイトメアを返り討ちにした。

LP4000 LP3600

ATK3000 ATK3700

「きゃっ！ ……そんな効果だったのね、ターンエンド」

どんなカードがあるのかまでは分かっていたが、テキストまでは把握出来なかったらしい。

LP4000 LP3700

「俺のターン、ドロ！ リバースカードオープン、バスターモード！ レッド・デーモンズ・ドラゴンをリリースし、デッキからレッド・デーモンズ・ドラゴン/バスターを特殊召喚する！」
右手を高く掲げバスター・モードを発動。

突如現われた炎にレッド・デーモンズ・ドラゴンの体が包まれたが、

すぐに炎を咆哮で消し飛ばした。
炎が消えて現われたレッド・デーモンズ・ドラゴンは赤い鎧を纏っている。

ATK3500

「あれがバスター・モード……」
デッキに入れてはいないが、さとりもハイパーサイコガンナーノバスターの存在を知っている。

「ハイパーサイコガンナーを攻撃！ エクストリーム・クリムゾン・フォース！」
攻撃宣言と共に襲い掛かっていく。

「畏カードを発動、聖なるバリア・ミラーフォース」
しかしハイパーサイコガンナーに襲い掛かるはずの攻撃がバリアに防がれ、レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスターに跳ね返ってしまった。

「……ですよねー。このカードが破壊された時、自分の墓地に存在するレッド・デーモンズ・ドラゴンを特殊召喚する。キャストオフ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」
ミラーフォースでボロボロにされた鎧が吹き飛び、レッド・デーモンズ・ドラゴンが身軽になって登場。

ATK3000

「クロック・リゾネーターを守備表示で召喚し、ターンエンド」
幸いクロック・リゾネーターは1ターンに一度の破壊耐性があるので、自分のレッド・デーモンズ・ドラゴンによる破壊もされない。

DEF600

「私のターン、ドロ。……魔法カード、サイコ・フィール・ゾーンを発動。ゲームから除外されているサイキック族のチューナー1体とチューナー以外のサイキック族モンスター1体を墓地に戻し、そのレベルの合計と同じシンクロモンスター1体をエクストラデッキから表側守備表示で特殊召喚するわね。私はメンタル・オーバー・デーモンを選択」

除外されていたサイコ・コマンダーとマックス・テレポーターが墓地に戻され、メンタル・オーバー・デーモンが呼び出された。

DEF3000

「あー、なるほど」
さとの予想以上の引きの良さでサイキック族の使い方にわくわくして見ている。

「メンタル・オーバー・デーモンの効果で墓地のサイキックナイトメアを除外。恭司、貴方の切り札はこいしから聞いているわよ。クロック・リゾネーターを守り、次のターンに手札のバリア・リゾネーターで召喚するつもりでしょう?」

手札は読まれており、こいしに切り札もバラされているので全てお見通し。」

「あはは、読まれちゃったか」
耐えられる自信があるから余裕で構えている。

「その余裕、いつまで持つのかしら。強化人類サイコでクロック・リゾネーターを攻撃！」

「クロック・リゾネーターは守備表示でいる場合、一回だけ戦闘破壊か効果破壊を耐えられる」
二回目はないが。

「ハイパーサイコガンナーで攻撃！」
攻撃宣言等をする時はやけにさとりが生き生きしている。

「手札からバリア・リゾネーターを墓地に送り効果発動、チューナーであるクロック・リゾネーターを指定する。このターン選択したモンスターは戦闘破壊されず、戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる」

ハイパーサイコガンナーの貫通ダメージは与えられずに済んだ。

「だけどハイパーサイコガンナーの回復効果は適用される、でしょ？ それにこれで切り札を呼ぶ事は出来ないはず。ターンエンド」

これが狙いだっただのか満足そうにターンを終わらせた。

大幅にLPを回復されてしまい、ダメージを防ぐ為にバリア・リゾネーターを使ってしまった。

次にレベル1のモンスターを引けなければ切り札を呼ぶ事が出来ない。

LP3700 LP6100

「あー、デュエルは本当に楽しいな！ さとり、君は最高だよ。シンクロモンスターを渡してよかった」

こんな地味に追い詰められた状態でも本当に楽しいと心が喜びで満ちており、まるで子供のようだった。

「ええ、私も楽しいわ。だから負けたくないと思えるのよ」
くすりと微笑み、負けないと宣言していた。

「いいや、俺が勝つ。こんなにも燃え滾ってるんだ、切り札を出せなきゃ格好つかないぜ！ ドロー！」
引いたカードを見て嬉しそうに笑った。

「チエーン・リゾネーター？」

「そうだ、チエーン・リゾネーターを召喚！ 相手フィールド上にシンクロモンスターが存在する時にこのカードの召喚に成功した場

合、自分のデッキからリゾネーターと名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。俺はクリエイト・リゾネーターを特殊召喚する！」

鎖に引つ張られ、デッキからクリエイト・リゾネーターが呼び出された。

チェーン・リゾネーター

ATK100

クリエイト・リゾネーター

ATK800

「こいしがずっと見ていた理由はこれなのかもしれないわね……」

「荒ぶる！ 荒ぶるぞ！ 俺の魂が！ ……バーニング・ソウル！」

目が真っ赤になり、輝きを放っていて少し怖い。

「二体のリゾネーターをレッド・デーモンズ・ドラゴンにダブルチェーンニング！」

四つの炎の輪となった二体のリゾネーターがレッド・デーモンズ・ドラゴンを囲んでいく。

「くっ」

そして心を感じる微弱な赤き竜の存在がさとの干渉を拒絶する。

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ！ シンクロ召喚！ 出でよ、スカーレット・デビル・ドラゴン！」

まさに悪魔の竜と言える容姿の切り札が地底に降臨した。

ATK3500

「凄い威圧感……」

物凄い狂気の力が感じられる。

「スカーレット・デビルは自分の墓地に存在するチューナーの数×500、攻撃力がアップする。今は四体のチューナーが墓地に存在している、よって攻撃力は5500になる」

ダーク、チェーン、バリア、クリエイトの四体。

ATK3500 ATK5500

「……」

さとりは一枚だけ残った手札を見て色々考えていた。

「サイクロン使わないかなくなって伏せてたこれ使うか。リバースカードオープン、二重召喚。ランサー・デーモンを召喚、そしてレベル4ランサー・デーモンにレベル3クロック・リゾネーターをチューニング！」

これで手札を全て消費した。

「天頂に輝く死の星よ！ 地上に舞い降り生者を裁け！ シンクロ
召喚！ 降臨せよ！ 天刑王 ブラック・ハイランダー！」
地底の空に七つの星が浮かび、北斗七星の形に変わった。

そして大きな鎌を手に持った巨大な人型のモンスターが降臨。

ATK2800

「ブラック・ハイランダー？」

ちらつとこいしを見るも、知らないと首を横に振っていた。

「このカードが場にある限り、互いにシンクロ召喚が不可能になる。
そして墓地のチューナーの数が増えた事で、スカーレット・デビル
の攻撃力がさらに500アップだ」
シンクロを封じ、攻撃力をさらに上げてきた。

ATK5500 ATK6000

クロックがOCG仕様だったのは悪しからず。

「シンクロ封じ……。だから今まで使わなかった、と」

「スカーレット・デビル・ドラゴンで強化人類サイコを攻撃！ バ
ーニング・ソウル！」

攻撃宣言したら、そのまま真っ直ぐ行って右ストレートでぶっ飛
ばしていた。

「きゃあああつ！ つ、一気に削られて……！」
強化し忘れたサイコの攻撃力は2500で大ダメージ、回復分を超過していた。

LP6100 LP2600

「ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！ ……装備魔法サイコ・ソードをハイパーサイコガンナーに装備させ、メンタル・オーバー・デーモンの効果でクレボンスを除外してターンエンド」

ハイランダーを倒してしまうと恭司のLPが下回ってしまい、サイコ・ソードの攻撃力が下がってしまうので手が出せない。

ハイパーサイコガンナー

ATK3000 ATK4000

「俺のターン、ドロー！ ……さとり、楽しいデュエルだった。ハイパーサイコガンナーを選択し、ブラック・ハイランダーの効果発動。選択したモンスターの装備魔法を破壊し、破壊した数×400ポイントのダメージを与える！」
ブラック・ハイランダーが大鎌を振りかぶり、ハイパーサイコガンナーが構えていたサイコ・ソードを叩き斬った。

「きゃっ！」

LP2600 LP2200

ATK4000 ATK3000

「そしてスカーレット・デビルでハイパーサイコガンナーを攻撃！
バーニング・ソウル！」

どうにか撃ち落とそうとするハイパーサイコガンナーから放たれた
攻撃を高速でかわし、そのままの勢いで拳を叩きつけて粉碎した。

「何を考えて……きゃああっ！」

爆風やら何やらでスカートがひらひらするのが気になると考えてい
たのを読んでしまい、覚悟する前に削り切られたダメージの衝撃を
受けてしまった。

LP2200 LPO

デュエルが終わった事で辺りの風景が元に戻り、さとりは座り込ん
で胸を押さえている。

「胸が痛いのか？」

カバンにデュエルディスクをしまっただけ歩いてきた。

「……衝撃が凄くって心臓がドキドキしてるだけだから。擦るつと
しなくていいの」

胸の鼓動が激しく昂ぶっている。

仕方ない、俺が擦ろうと考えていた恭司を制止していた。

「ちっ、残念。もう呼び捨てにするけど、さとりのタクティクスは凄かったよ。チェーン・リゾネーターを引けなかったら負けてたかもしれない」

さとりに対して心からの賞賛と、シンクロに頼りきりだった自分を戒めている。

「貴方のお陰で昨日は久しぶりにこいしと楽しく過ごせたわ。何かお礼をしたいのだけど……」

こいしとデュエルの練習をしたり、あれから色々二人でやっていたらしい。

「一宿一飯させてもらったんだし、それで十分だよ」
さらにブラック・ハイランダーも使えてかなり満足している。

しばらくこいしを含めた三人で談笑し、いつかまた来ると告げて単身勇儀の姐さんを探しに向かった。
アイテムを使わずに飛べるようにならなければ来れないが。

旧都

「しまった、見つからなかった時の事考えてなかった」
また泊めてもらう為に戻るとか格好悪すぎる。

「おつ、こんな所に居たのか。恭司、探したんだぜ！」
頭上から聞き覚えのある声が響く。

「その声、その箒、その帽子……霧雨魔理沙！」

「YES、I AM！」

チツチツ！とやりながら降りてきた。

「ああつ、魔理沙あ！ 僕の女神い！」

歓喜のあまり某オーブのダメ御曹司みたいになっていた。

「へへつ、女神って言われて悪い気はしないぜ」

「さあ、帰ろう。すぐ帰ろう」

明るい地上で橙と藍様に早く会いたくて仕方ない。

「早く乗りな。しっかり掴まってるんだぜ？ ……きゃあつ！ ど、どこ掴んだ今！」
パチュリーによくやるように脇腹をきゅっと掴んだら可愛い声が出た。

「えつ、脇腹……ごめんなさい、肩にする」

ミニ八卦炉を向けられ、謝ってから肩をしっかりと掴んだ。

「まったく……それじゃあ、振り切るぜ！」

照井さんみたいに勢い良く飛んでいった。

何の因果か地底を彷徨った恭司は色んな妖怪と出会い、鬼の宴会に

巻き込まれ、こいしちゃんの姉と遭遇。
そして渡す事を決めたシンクロモンスター。
何故さとりにも渡したかは謎。

続く。

寝呆けたスキマでどこかに（後書き）

チエーン・リゾネーターはOCG化してほしい。

次のDT、再録枠に何が来るんだろう。

七期仕様のサイバー・エンドが欲しいから再録してくれないかな。

またスキマに踏み入れた男（前書き）

これで大体の勢力に足を踏み入れた事に。
次にシンク口を提供するのはこの方。
忘れられてる訳ではない。

またスキマに踏み入れた男

「なあ、どう思うよ。折角地底から帰ってきたばかりだったのに、翌日にはまた見知らぬ場所なんだぜ？」

「私もいきなり紫のスキマから落ちてきたからびっくりしたのよ？」
ほわほわした美しい女性とお話している。

「起きたら嫌味の一つでも言ってるやらないとな」
あはは、うふふと楽しく話をしている。

……

……

……

…

「あの、幽々子様。こちらの方は？」
いつのまにか背後に女の子が立っていた。

銀色の髪をボブカットにして黒いリボンを付け、白いシャツに青緑のベストとスカート。
そして何より白い魂のような物が気になる。

「あら、妖夢。この子は紫のスキマから落ちてきたのよ」
ねー？とニコニコしながら言われ頷いた。

「あいつが寝呆けて開けたスキマに落ちるのは二回目なんだ。今回は幽々子さんみたいな優しい方が居て助かったよ」

自己紹介はしていたらしい。

「……大変ですね、貴方も」

スキマに落ちたと聞いて、物凄く可哀想なものを見る目で見てくる。

「そんな目で見ないでくれ、悲しくなってくる……ところで君の名前は？」

「私は魂魄妖夢です。貴方は？」

名乗ってから相手の名前を知らない事に気づき、尋ねた。

「鉄恭司。ただの元外来人だ」

もう外に帰るのは諦めたらしく、早苗のように常識を捨て始めていたりする。

「鉄さんですね」

「魂魄さんか」

互いに名字で呼ばれ慣れていないからか、くすぐったい感じになっている。

「あの、妖夢でいいですよ。名字って何かくすぐりたいです」

「奇遇だな、俺も名字はくすぐりたいから恭司でいい。……ところでその白いのは」
半霊が凄く気になっている。

「私の半霊です。半人半霊なので」

「刀に霊……？ 憑依合体とかオーバーソウルとか出来るんじゃない」

目をキラキラさせながら妖夢を見ている。

「？」

分からないから不思議そうな顔で見ている。

「恭司、妖夢と見つめあつてないでお話の続きをしましょう?」
隣に座っていたゆゆ様がぶくつと頬を膨らませて催促してくる。

「あ、ああ。それよりもこれ、幽々子さんに会う前に拾ったんだけど、どこかから複製でもした?」

また三枚のカードを拾っていたらしく尋ねている。

「知らないわ。妖夢、貴方は?」

「いえ、私も知りません」

二人の物ではなかったようだ。

「そっかー……そうだよな、三幻神を所有してる分けないよなー」
その手にはオシリスの天空竜、オベリスクの巨神兵、ラーの翼神竜が納まつていた。

三邪神に三幻神が集まり、なんとも言えない心境。
そつと胸ポケットにしまった。

「それより早くお話ししましょう?」

ゆゆ様は恭司のする様々なデュエルや旅の話に興味津々だった。

「わかったよ。次は……」

どうせ迎えが来ないと帰れないので話始めた。

数十分後

「……それでな、扉を開けると黒く長い髪の女が俯いて立ってたんだ。で、顔を上げて俺を見て……あはははは！って笑って消えていったんだ」

ゆゆ様は平然と聞いているが、立ち去るに立ち去れず一緒に様々な話を聞いていた妖夢はがたがた震えていた。

「まあ、それつきり出なかつただけだな
思い出して冷や汗を垂らしている。」

「きつと恭司が素敵だからつい出ちゃったのよ。きつと悪気はなかつたと思っわ」
にっこり笑って言われると信じたくなくなってしまふ。

「そうだったらいい……いや、あまりよくないぞ。もしかしたらこの話を聞いた妖夢のところに今晚来るかもしれないな。いひひひひ」
ニマニマ笑って意地悪な事を言っていた。

「みよん!？」

妖夢はいきなりそんな事を言われて物凄くびっくりしている。

「あらー、妖夢大変ねー」

ゆゆ様はそんな妖夢を見てくすくす笑っていた。

夜

ゆゆ様に気に入られ、誰かが探しに来るまで泊まっていたと言われ
て部屋を借りている。

「幽々子さんの食欲は見てて気持ち良かったな」

風呂上がりで髪を乾かし、三幻神を丁寧にカバンに入れながら夕食
の光景を思い出して呟いていた。

しばらくすると部屋の前を行ったり来たりする気配を感じ、そっと
見てみると妖夢がうろうろしている。

「……でも……様が……」

ぶつぶつ言いながらうろうろしている。

「わっ！ー！」

通り過ぎるタイミングでびっくりさせようと声を出した。

「ぎゃああああっ！ー！」

するとびっくりして転び、涙目で這いずりながら逃げよとしてい
る。

「あー、その妖夢？」

昔の自分を見ているようで可哀想になり、声を掛けた。

……

……

……

…

「酷いです！ 私、もう今日は一人じゃ寝られません！」

腰の抜けた妖夢を部屋に入れ、冷静になるまで待つてみたらめっちゃ怒っていた。

「いや、マジですまんかった。あんなにびっくりすると思わなくて何だか親近感が湧いている。」

「だ、だから私もこの部屋で寝ます」
俯いてもじもじしながら言い切った。

本来の目的がこれ。

怖い話をたくさん聞かされて一人じゃ眠れなくなり、背に腹は変えられなくなっていた。

ゆゆ様は面白そうに妖夢の要求を拒否、だから仕方なくこちらに来たようだ。

「それなら布団をもう一組敷かないと」

少し離れた位置に敷き始めた。

順応性の高さは群を抜いており、布団も勝手に敷いている。

年上の妖夢を妹のように見ているから優しいが、同時に悪戯もしたくなる。

「迷惑をかけてしまつてごめんなさい」

しょんぼりしているが、一人じゃないからホッとしていた。

「困った時はお互い様だろ。よし、寝ようか」

妖夢の布団を敷き終わり、自分の布団に入った。

「はい」

いそいそと布団に入った。

ちよつとした話や、宴会で何度か見かけていた事等を話ながら眠りに就いた。

翌朝

「妖夢とデュエルを？」

朝食の時間も終わり、お茶を飲んでいるとゆゆ様が話し掛けてきていた。

「ええ。紫から聞いてたのを忘れてたけど、恭司ってデュエルが強いんでしょう？」

「まあ、それは自負してるけど」

湯呑みを置き、しっかりと目を見て話を聞いている。

「だから貴方のデュエルを見てみたいの。ダメ？」
可愛く小首を傾げる姿にNOと言えるはずがない。

「うん、いいよ。何故か誰も探しに来てくれないし忘れられてるのかな、と少し落ち込んでいる。

藍様は少し休みを与えようと探していなかったりする。

庭

「二刀流って格好良いなあ。大神隊長に憧れている俺は妖夢がめっちゃ格好良く見える」

そう言いながらデツキをデュエルディスクにセット。

「恭司さんの間接を外す戦い方も凄かったですよ。百花繚乱、でしたよね？」

妖夢もデツキをセットしている。

「二人とも早くー」

ゆゆ様が腰掛けて催促している。

その手には恭司におねだりして手に入れたプリンがある。

「幽々子さんもああ言ってるし、やるか」

「はい！」

「デュエル！」

「俺のターン、ドロー！ 速攻魔法、手札断殺を発動。互いに手札を二枚捨て、二枚ドローする。……あつ、おつ、久しぶり。モンスターをセットしてターンエンドだ」

引いたカードを見て動揺し、モンスターをセットしてそのまま終わらせている。

「私のターン、ドロー！ 一刀両断侍を召喚します。そしてセット

モンスターを攻撃！ このカードは裏側守備モンスターを攻撃した時、ダメージ計算を行わずに破壊します！ 切捨御免！」
妖夢の宣言と共に駆け寄り、恭司の場のモンスターを切り捨てた。

ATK500

「妖夢のデッキが読めない」
六武衆を予想していたらしく、予想外のモンスターが出てきた事では分からなくなっていた。

「カードを二枚伏せてターンエンドです」

「俺のターン、ドロ！。スピード・ウォリアーを召喚し、一刀両断侍を攻撃！」
単純な攻撃を繰り返していく。

ATK900 ATK1800

「永続罨発動、旅人の試練。恭司さんは私の手札をランダムに1枚選択して、そのカードの種類を当ててください。ハズレの場合、その攻撃したモンスターは恭司さんの手札に戻ります」
さあ、どうぞ。と三枚の手札から選ぶように言っている。

「真ん中のカードで種類は魔法カードだ」

「モンスターカードです」
真ん中のカードを表にして恭司に見せた。

「うわっ、これはまずい。カードを一枚セットしてターンエンドだ」
外した事でスピード・ウォリアーが手札に戻ってしまい、カードを一枚セットして終わらせた。

「私のターン、ドロー！ 一撃必殺侍を召喚し、明鏡止水の心を装備させます！」

ギリギリ明鏡止水の心を装備させられ、厄介な能力を持ったモンスターを出されてしまった。

ATK1200

「嫌な予感が……」
スピリットバリアを引いたんじゃないかと疑っている。

「一刀両断侍で攻撃します！」

「うっ！」

LP4000 LP3500

「さらに一撃必殺侍で攻撃！」

「うあつ！」

普通に削られる地味なデュエルだった。

LP3500 LP2300

「伏せていた永続罫スピリットバリアを発動させてターンエンドです」

実は最初から伏せていたらしく守りは完璧だった。

「俺のターン、ドロー！ こうなったら一気に畳み掛けるしかないな。手札のダンディライオンを墓地に送り、クイックシンクロンを特殊召喚！ ダンディライオンが墓地に送られた時、綿毛トークンを2つ場に出す」

久々の出番だったダンディライオンが墓地に送られ、綿毛トークンが二つ現われた。

クイック・シンクロン

DEF1400

綿毛トークン×2

DEF0

「そして手札からデブリ・ドラゴンを召喚。効果で墓地に存在する攻撃力500以下のモンスター、ダンディライオンを特殊召喚する」
準備は整った。

デブリ・ドラゴン

ATK1000

ダンディライオン

DEF300

「レベル1綿毛トークン2体とレベル3ダンディライオンにレベル4デブリ・ドラゴンをチューニング！」
五つの星を四つの輪が包んでいく。

「破壊神より放たれし聖なる槍よ、今こそ魔の都を貫け！ シンク口召喚！ 氷結界の龍 トリシューラ！」

二人の周囲が凍りつき、三本首の龍が凄まじい咆哮と共に現われた。知る人ぞ知るシンク口口上に満足するしかねえ！

氷結界の龍トリシューラ

ATK2700

綿毛トークンx2

DEF0

「トリシューラがシンク口召喚に成功した時、相手の場・手札・墓地のカードを一枚ずつ除外する。場の一撃必殺侍、墓地の大盤振舞侍、一番右の手札を除外させてもらう」

トリシューラの三つ首が一齐に口を開き、三枚のカードを凍りつく程のプレスで吹き飛ばした。

「あ……」
ソリッドヴィジョンだと分かっているにも、迫力がありすぎて少しの間動けなかったらしい。

「レベル1綿毛トークン2体にレベル5クイック・シンクロンをチユーニング！」
まだまだ行くつもりのようにだった。

「集いし叫びが木霊の矢となり空を裂く！ 光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 出でよ、ジャンク・アーチャー！」

ATK2300

「あれは……弓兵？」
効果を知らないから、きよとんとした顔で見ている可愛い。

「ジャンク・アーチャーの効果を発動、一刀両断侍をこのターンの終了時まで除外する。デイメンジョン・アロー！」
放たれた矢が一刀両断侍を消し去った。

「えっ？」

「サイクロンで旅人の試練を破壊し、トリシューラでダイレクトア

タック！」

先程のように口が開かれ、それがすべて妖夢を向いている。

一斉に吹雪のようなブレスを吐き出し、妖夢に襲い掛かっていく。

「リバースカードオープン、シンクロ・ストライク。シンクロ召喚したモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで、シンクロ召喚に使用したモンスターの数×500ポイントアップする。よってトリシューラの攻撃力は2000ポイントアップする」

吐き出していた吹雪のようなブレスの勢いが上がり、妖夢を軽く吹き飛ばした。

ATK2700 ATK4700

「きゃあああっ!!！」

手加減、容赦が一切ない相手に、為す術もなく倒されてしまった。

LP4000 LPO

「妖夢、大丈夫？ あんな吹っ飛ぶと思わなかったんだがソリッドヴィジョンが消え妖夢の元に向かった。」

「うう、凄くびっくりしましたよ。あの三つ首の龍、何かよく分からない怖さがありましたし」

妖夢は何故か座り込んだまま話している。

「ねえ、今度は私とデュエルしない？」

妖夢と話していると、そわそわしたゆゆ様が話し掛けてきた。

「腰が抜けたのなら俺の手に……え？ ああ、いいよ」

妖夢を立たせながら了承している。

「それじゃあ、すぐに始めましょう?」

ゆゆ様はうきうきとデュエルディスクを付けていた。

「色々言いたいが……。まあ、いいや」

デッキを入れ替え、気持ちを切り替えている。

「デュエル!」

「私のターン、ドロー。終焉のカウントダウンを発動、LP2000を支払うわね? これで20ターン後に私が勝つの。モンスターをセツトして、カードを四枚伏せてターンエンド」
一気に手札を使い切っていた。

LP4000 LP2000

空が薄暗くなり、恭司の頭上に炎が一つ灯っている。
残り19ターン。

終焉1

「俺のターン、ドロー! 手札からサイバー・ドラゴンを特殊召喚し、裏守備モンスターを攻撃する! エヴォリユーション・バースト!」

機械竜が現われ、相手の場のモンスターを攻撃。
ただゆゆ様がにこにこしているのが気に掛かる。

ATK2100

「リバースしたメタモルポッドの効果発動。手札を捨てて、お互いカードを五枚ドロウしましょう?」

手札のないゆゆ様は五枚補充、恭司は嫌そうな顔で五枚捨てて五枚ドロウした。

「う……ターンエンド」

仮面竜、サイバー・ダーク・エッジ、サイバー・ダーク・キール、パワーボンド、サイクロンを捨てられたのが少し効いている。

残り18ターン。

終焉2

「私のターン、ドロウ。モンスターをセットしてターンエンド」

攻めず、守りを固めて終焉のカウントダウンで勝ちを狙っている。

残り17ターン。

終焉3

「俺のターン、ドロウ！ サイバー・ダーク・ホーンを召喚、墓地に存在する仮面竜を装備する」

ATK800 ATK2200

「そしてセットモンスターに攻撃、ダークスピア！」

「永続罨発動、グラビティ・バインド・超重力の網……。これでレベル4以上のモンスターは攻撃できないわ」
サイバー・ダーク・ホーンが見えない重力の網に囚われ、地に落ちて動けなくなった。

「うっ、カードを一枚セットしてターンエンド」
ロックされてどうしようもなくなっている。
しかもまだ三枚も伏せが残っている。

残り16ターン。

終焉4

「私のターン、ドロ。モンスターをセットして、罨発動、運命の火時計。さらにチェインして運命の火時計を発動。ターンカウントを1ターン進める効果を二枚分発動するわね。そしてレベル制限B地区を発動させて、反転召喚。闇の仮面の効果で運命の火時計を手札に加えるわ」

ターンカウントが二つ進んでしまい、B地区の効果でサイバー・ダーク・ホーンとサイバー・ドラゴンが守備表示に変わってしまった。

残り14ターン。

終焉6

闇の仮面

ATK900

サイバー・ダーク・ホーン
DEF800

サイバー・ドラゴン
DEF1600

「カードを二枚セットしてターンエンドね」

残り13ターン。

終焉7

「俺のターン、ドロー。モンスターをセットし、ターンエンド」
除去が出来ず、今はただセットするしかなかった。

残り12ターン。

終焉8

「私のターン、ドロー。闇の仮面に月の書を発動、そして運命の火時計を二枚発動」
三枚揃っていたらしく、再び二枚発動させられてしまった。

残り10ターン。

終焉10

「そして闇の仮面を反転召喚して運命の火時計を手札に加え、カードを二枚セットしてターンエンド」

残り9ターン。

終焉11

「ドロー！……ダメだ。ターンエンド」

あのモンスターさえ引ければ勝てるのに、と思いながら終わらせている。

残り8ターン。

終焉12

「私のターン、ドロー。運命の火時計を発動、闇の仮面を守備表示に変更してターンエンド」

嬉しそうにニコニコしている。

残り6ターン。

終焉14

「ドロー……カードをセットしてターンエンド」

突破の糸口が掴めず、かなり焦り始めている。

残り5ターン。

終焉15

「私のターン、ドロー。カードを一枚セットしてターンエンドね」
勝ちが近く、若干油断している。

残り4ターン。

終焉16

「ドロー。まだ足りない、未来融合・フューチャー・フュージョン
-を発動。キメラテック・オーバー・ドラゴンを指定し、サイバー・
ドラゴンを含む機械族モンスターを墓地に送る」
ようやく一枚のキーカードを引いている。

サイバー・ドラゴン2

エッジ2

キール2

ホーン2

「……ターンエンドだ」

次の自分のターンにどうにか出来なければ負ける。

残り3ターン。

終焉17

「私のターン、ドロー。ふふっ、私の勝ちかもしれないわね。頭上
に十七の炎、後三つよ。ターンエンド」

勝ちを確信したらしく、美しい笑顔を見せている。

残り2ターン。

終焉18

「これが、ラストドロ！ ……リバースカードオープン、魔のデ
ッキ破壊ウイルス！ 攻撃力2000以上の閻属性であるサイバー・
ダーク・ホーンをリリースし、相手のフィールド上モンスターと手
札・発動後3ターンの間に相手がドロしたカードを全て確認し、
攻撃力1500以下のモンスターを破壊する」
切り札を引いたらしく、一気に叩き潰すつもりのようなのだ。

「ええっ!?!」

手札のバトル・フェーダーと速攻のかかしが破壊され、さらに場の
閻の仮面と魂を削る死霊も破壊。

「手札からチューナーモンスター、ブラック・ボンバーを召喚。効
果により墓地のレベル4・閻属性・機械族のサイバー・ダーク・ホ
ーンを守備表示で特殊召喚する。そしてレベル4サイバー・ダーク・
ホーンにレベル3ブラック・ボンバーをチューニング！」
皆さん、もうお分りですね。

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け！ シンク
口召喚！ 咲き乱れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」
薔薇の姿をしたドラゴンが冥界に姿を現わした。

「このカードがシンク口召喚に成功した時、フィールド上に存在す
るカードを全て破壊する事が出来る。ブラック・ローズ・ガイル！
その宣言と共に輝きを放ち、ブラック・ローズ・ドラゴンが全ての
カードを破壊した。」

「……ああ、だからなのね」

こんな窮地から逆転をしようとする目の前の存在。

何故紫がこの人間に拘るのか、それを見極めようと妖夢とデュエルをさせてみたが分からなかった。

そして今、自分が直接デュエルをしてみてもその理由がはつきり分かつたらしい。

「サイバードーク・インパクト！を発動。墓地のサイバー・ダーク・エッジ、キール、ホーンをデッキに戻し、鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンを特殊召喚する！」

エッジ、キール、ホーンが連結し、奇妙な機械竜が姿を現わした。

「このカードの特殊召喚に成功した時、墓地に存在するドラゴン族モンスター1体を装備し、装備したモンスターの攻撃力をサイバー・ダーク・ドラゴンに加える。俺は墓地に存在するブラック・ローズ・ドラゴンを装備する！」

墓地で眠っていたブラック・ローズ・ドラゴンが、サイバー・ダーク・ドラゴンに掴まれ再び場にその身を現わした。

ATK1000 ATK3400

「さらに墓地に存在するモンスター1体につき、攻撃力を100ポイントアップする」

ATK3400 ATK4500

「本当に綺麗ね」

もう負けてしまうのに笑顔で見ている。

魂の輝きが本当に綺麗で欲しくなる。

紫が執着した理由を理解して、自分も惹かれていのに気がついていた。

「ダイレクトアタック！ フル・ダークネス・バースト！」

「きゃあああっ！！」

予想以上の衝撃に耐え切れず、悲鳴を上げて座り込んでしまった。

LP2000 LP0

「大丈夫？」

ゆゆ様に手を差し出した。

「ありがとう。あ……ぎゅーっ」

紫と比べて出足が遅いからか、手を掴み立ち上がっていきなり抱きついている。

「はっ？ あっ？ えっ？」

亡霊だからちょっと冷たくて心地いいなと思いつつ、混乱の極み。

「ゆ、幽々子様！ 何をしてるんですか！」

突然の行動に妖夢がゆゆ様を叱っている。

自分の主がいきなり目の前で男に抱きつけば普通に怒る。
知り合ってまだ一日だから余計に。

「抱きついてるのよ?」

「今日は美人に抱きつかれるとかリア充街道まっしぐらすぎる」
死ぬ時は牡丹灯笼のようになるんですねわかります。

「恭司さんもデレデレしてないで何か言ってください!」

「えっと、柔らかくて桜のいい匂いです」
えへへー、とデレデレしている。

「ほら、恭司もいいつて言ってるんだからいいでしょ?」
さらに抱きついて当ててくる。

「ダメです! 幽々子様、もう少し恥じらいを持ってですね」

「あ、そうだ。妖夢にはこれを渡すよ」
お説教を始めようとする妖夢にカットインして、六武衆と真六武衆にシンクロモンスターのシエンを手渡した。

「えっ……。いいんですか?」
まさかいきなり渡されるとは思っていなかったらしく、かなりびっくりにしている。

「刀を持つてる妖夢に似合うと思ったから」
さとの件でシンクロ提供の迷いは吹っ切れたらしい。

「ありがとうございます。このご恩はいつか必ず」
嬉しそうにカードを手に行っている。

「恭司、私にはないの？」

「幽々子さんは今のままで十分だと思う。正直負けるかと思ったよ。あの時頭上に点灯した18の炎にかなり焦っていた。」

「うーん、残念」

「代わりに色々なデッキが組めるようにカードは置いていくからさ。恭司は積極的なゆゆ様はかなり弱かった。」

もうすぐ春が来る。

地底に冥界、色々なフラグも乱立した。

紫が目覚め、里に帰る日も近い。

続く。

またスキマに踏み入れた男（後書き）

妖夢はこれで六武使い。

ゆゆ様は遅延ロックカウントダウンと死へ誘う感じを出したかった。

最近モンスターファーム2を楽しんで色々疎かになってる。
ウンディーネが早く使いたい。

DT、ノーレアがアビスと幻銃って酷い。
アビスはスーパァがよかった。

死後の就職先も安心でした（前書き）

余計な事を言うからこうなる。

半霊って何かおいしそうだよね。

ゆゆ様可愛い。

死後の就職先も安心でした

あれから数日。

迎えが来ておらず、まだ白玉楼にお世話になっていた。

「ちよっ！ 俺は刀剣は使った事ないんだってば！ うひゃあっ！
竹刀を手に逃げ惑っている。

「真剣ではないんですから逃げないでください！ 貴方が私に習いたいと言ったんですよ！ ほら、いい加減覚悟を決めてください！」
妖夢は稽古をつけようと追い回していた。

「平和ねー」

一時間後

「いててて……」
観念して稽古をつけてもらっていたようだ。

「真剣だったら何十回も死んでますよ。明日から毎日鍛えてあげます」

すぐに吸収するから教えるのが楽しくて仕方がないらしい。

「い、いいよ別に。妖夢が大変になるし」

「平気です。その代わりに徒手空拳になってしまった時の戦い方を教えてください」
逃げ道を塞いでいる。

「恭司も男の子だから刀とかに憧れるんじゃない？ ほら、護身用とかに習うとか」
ゆゆ様まで逃げ道を塞ぎ始めた。

「もう、わかったよ。明日からがんばります……」
妖夢にぼっこぼこにされていたのもあり、元気なく返事をした。

さらに数日後

「いやいやいやいや、真剣なんて怖くて持てないから」

「でもこれ、貴方の為に倉から見つけてきたのよ？」ゆゆ様がずいっと鞘に収められた刀を差し出し、それを恭司が嫌だと拒否していた。

「無理無理。半人前以下だし、何より刃物って怖いし。おばあちゃんと言っていた、刃物を握る手で人を幸せに出来るのは料理人だけだって」
だからいらない、と必死に拒否している。

「確かに恭司の料理はおいしくて幸せになれるわ。でも、これは受け取ってもらえない？ 素手でダメな時だってあるでしょう？」
好感度稼ぎもあるが、本当に心配してくれている。

「う……。わかったよ、幽々子さんの好意を無駄にしたいくないしほわほわしてるのにしっかりしている所が姉に似ていて弱い。」

刀を受け取りカードに封じた。

使う日は来ないだろうけど。

「刀の名前は私が考えたのよ。地獄蝶々って」
にこにこしながら名前を発表している。

「いや、それは既に外の世界に存在してるんですが」
乙女さん元氣かな、と考えながら既存だと答えていた。

「いいじゃない。こつちにはないでしょ？」

「いや、確かにないけどさ……」

「それなら決まり。それは地獄蝶々ね？」
有無を言わせぬ迫力があつた。

「わ、わかつたよ……」

もし死んでしまってもこれで冥界に就職できるかもしれない。

さらに数日後

「寂しさMAX。誰も探しに来てくれないとか」
素振りをしながら呟いている。

「明日には誰か来ますよ。一週間経ちますし」
監督をしながら答える妖夢。

妖夢は何度か里に行き、藍様に会っていたからいつ迎えが来るか知っていたりする。

「だといけど……」
喋りながらも素振りを続けていた。

夜

「痛たたた。妖夢、絶対俺を扱いてストレス解消してるだろ……」
風呂にも入り、借りている部屋で痛む身体を横たわらせている。

余計な事を言った結果がこれ。
基礎体力は半端ないから毎日素振りと帰ってから一人でも出来るように妖夢に指導されていた。

「急遽組まれたトレーニングメニューのせいで、俺の身体はポロポロだ！」
手合せをさせられて、妖夢の竹刀でバシバシ叩かれたのが効いている。

妖怪並の丈夫な身体を持っているはずだから、ポロポロと言うのは弱い心が生んだ思い込み。

「何を言ってるんですか。短期集中で一人でも出来るように教えるんです」
妖夢が部屋に入ってきた。

「わかってるってばよ。俺はあらゆるトレーニングにおいても頂点

に立つ男だからな」

「はいはい。さっき背中を強く打ってしまったから湿布貼りましょ
うね」

はい、うつ伏せになってーっと少し碎けた感じになっている。

「はい」

シャツを脱ぎうつ伏せになった。

「……はっ」

目の前で普通に脱がれ、つい見惚れてしまっていた。

無駄な筋肉を付けず、いい感じに鍛えられた身体。

その背中をそっと触ってみている。

「おー、ひやっとする」

「……」

何故か半霊まで一緒に触っていたが、気を取り直してゆっくりと湿布を貼っていく。

「はい、貼り終わりましたよ」

「サンキュー」

シャツを着て礼を言ってから妖夢と向き合った。

何故か頬を赤らめて目が泳いでおり、そしてまとわりついてくる半霊も気になる所。

「……あの、今日も一緒に寝てもらってもいいですか？」

「ん？ ああ、いいよ」

あの日から毎日一緒の部屋で寝ている。

怖い話が忘れられず、毎日見回りが終わると当然のように部屋に訪れて布団を敷いていた。

夜中にトイレに行きたい時も恭司を起こすくらい怖い話がトラウマになっている。

自分も半分くらいそっち側なのに。

「あんな話を聞かされて一人で寝るなんて無理ですよ……」
思い出してガクブルしている姿が可愛らしい。

「おー、怖がりな妖夢は可愛いなー」

ニヤニヤしながらよしよしと頭を撫で、妖夢をからかっていた。

「こ、子供扱いはやめてください！」

そう言いながらも撫でる手を止めようとはしなかった。

「はいはい。ほら、寝るぞー」

恭司の布団は敷き終わっており、後は寝るだけ。

間違いが起こる事などなく、妖夢はすぐ隣に敷いている。
毎晩寝る前のおしゃべりタイムが楽しい。

「鬼の一撃ってどうでした？」

「萃香の時は死ぬかと思った。勇儀さんの時は加減されてたから平気だったな」

「幽々子さんって綺麗で胸大きくてほわほわしてて姉さんみたいで癒される」

「やっぱり大きな胸がいいんですね」
交友関係的な意味でも。

「妖夢、寝た？」

「……」
「すやすやと眠っており、反応がない。」

「……よし、寝てるな」
寝ているのを確認し、布団から出て妖夢の傍らにいる半霊に近づいた。

「……おおっ、なるほどなるほど」
半霊を触りまくって何か納得している。

「んんっ……」

「そんなに冷たくないな。味もみておこっ」
ぺろっとなめてる。

「ひゃっ……」

何故か妖夢が声をあげていた。

「感覚がリンクでもしてるのかな。そうだとしたらバレたら死ぬる……いや、死んだ後にさらに痛い目にあわされる」
慌てて布団に潜り込んだ。

翌朝

「毎日思ってたけど妖夢って寝相悪いよね……」
布団から追い出され、掛け布団も取られて丸まっていた。

「くう……」

布団を二つも使って眠っている。

「つくしゅー！」

膝を抱えて丸まっていた。

数十分後

「幽々子さん、朝です朝です朝ですよ」
あまりに寒かったのでゆゆ様を起こしに来ていた。

「んー、起こしてー」

中から眠そうな声が聞こえてくる。

「失礼します」

躊躇いなく中に入った。

ゆゆ様の部屋

「腕を掴んで引っ張……うおっ！」
腕を掴んで起こそうとしたら逆に引きずり込まれた。

「恭司、おはよう」
布団の中でゆゆ様がにこにこしながら待っていた。

「近い近い」
平静を装っているが目が泳いでいる。

ぎゅっと抱きつかれ、顔が物凄く近い。
積極的なゆゆ様にドキドキ、美人にこんな事をされてデレデレ。
大人の女性には弱かった。

「ふふふ。……あ、そうだ。恭司が死んだら料理人として雇うから勝手に成仏しちゃダメよ？ 死体もちゃんとここまで運ぶから安心してね？」
死後はゆゆ様のように亡霊として過ごせて、就職先も確定したらしい。

やったねきょうちゃん、しごとができるよ！

「それはいいんだけどさ、この布団の中で抱き締められてる姿を妖夢に見られたら間違いない怒られる」
竹刀でビシバシ叩かれまくる未来が見える。

「今は私と話しているんだから、違う女の人の話をしちゃダメ」

「いや、俺は妖夢に叩かれるのが嫌なだけで……痛い痛い」

「ほら、また妖夢って言った」

ぷくーっと頬を膨らませ、恭司の頬を引っ張っている。

「むっ」

恐れを知らぬ調律者、なんとゆゆ様の頬を同じように優しく引っ張り始めた。

「むむっ」

引っ張られても怒らず、楽しそうに引っ張っていた。

数時間後

「いつもそうやって……やれると思うなアアア!!」

激情に身を任せ、妖夢に一太刀入れようと襲い掛かった。

「私に一太刀浴びせるには貴方はまだ……未熟!」

始めて数日の恭司の攻撃が妖夢に通るわけがなく、軽くいなされて痛烈な一撃を与えられた。

「げほっ、ごほっ!」

ボディががら空きだったようだ。

「明日からも素振りや教えた事は忘れないで続けてください」

「……精進します」
今までは妖夢が見張っていたからやっていたが、明日からはサボる気満々。

「次までに私が驚くくらいになっていたら、私が出来る範囲で一つだけ何でもしてあげます」

サボるのが目に見えていたからご褒美をぶら下げる事にしたらしい。

「何でもしてもらえとか夢が広がる……あつ、藍！ やつと来てくれたんだな！」

ちょうど藍様がこちらに来る姿が見えたらしく、嬉しそうに走り寄っていた。

「犬の尻尾があつたらぶんぶん振ってそう」

そんな恭司を見て妖夢は呟いていた。

「放置していたわけじゃないんだぞ？ 人間なのにずっと働き続けていたから休みをだな」

「見捨てられたのかと思って怖かったわ。幽々子さんが優しい方で助かったけど」

久々の藍様にきゅんきゅんしている。

もふもふな尻尾なしでは生きられない身体になってしまったのかもしれない。

「おかしいな、ちゃんと伝えてもらったはずなんだが……まあ、い

いだろう。橙も寂しがっているからお礼を言って帰ろう」

「恭司、また来てね」

いつのまにかゆゆ様が抱きついていていた。

「い、いつのまに……。自力で飛べるようになったらくるよ。それと今日までありがとう、紫が起きたら菓子折りか何か持たせるから嫌じゃないので抱きつかれたままお礼を言っている。

若干藍様の視線が痛い。

「またデュエルしましょうね」

藍様の鋭い視線に気づき、名残惜しそうに離れた。

「さあ、恭司帰ろう。ありがとうございました」

深々と礼をし、恭司を抱き寄せて飛んでいった。

「ら、藍？ 幽々子さんに妖夢、またねー！ ちょっと、くすぐった
いって……」

首筋に顔を擦りつけてくる藍様に戸惑いながらも、ちゃんと二人に別れの挨拶をして去っていった。

「幽々子様、短いようで濃い一週間でしたね」

「妖夢、紫が起きたらみんな空の飛び方を教えてあげましょうね」
見送りながら話し合っていた。

冥界に滞在する事一週間。

色々なフラグがまた乱立。

そろそろ冬眠から目覚める時が。

続く。

死後の就職先も安心でした（後書き）

魂二個分の恭司。

魂半分だけ殺したら普通とは違った半人半霊になるのかな。

DTのエクシーズ、本作でどう扱うべきだろう。

ずっと悩んでるけど答えが出ない。

目覚めた事で里に帰れる(前書き)

スキマ妖怪の目覚め。

新たな召喚技術。

鍛えられた心。

目覚めた事で里に帰れる

「おっはよー！」

起きてきた紫は元気いっぱいハイテンションだった。

「藍」

「ああ、これだろう？」

そんな紫を無視して仲良く昼ご飯を食べる二人。

橙はお弁当を持って遊びに行っており、二人きり。

藍は恭司が帰っても足繁く慧音宅へ通う気満々だった。

「お、おはよー！」

無視され、しつこく挨拶を繰り返す紫。

「藍」

「以心伝心、だな」

また何かを言う前に塩を手渡し、藍様は頬を朱に染めて照れている。

「やーん、恭司無視しないでー」

後ろから抱きついて顔をぐりぐりと押しつけてきた。

テンションが高くていけないので放置していたのに無視できなくなってしまうた。

「ああ、もう。おはよう」
嫌々挨拶を返している。

寝呆けていたとはいえ、スキマで二回も妙な場所に送られたらこんな対応になっても仕方ない。

「紫様、おはようございます」

「ねえ、私の分は？」

お昼ご飯を食べる気満々で、抱きつきながら指を加えて見ている。

「俺の分食っていいぞ。紫が起きたんだから帰りの支度しないと…
…うおおあぁっ！」

よいしょと立ち上がり部屋に向かおうとしたら、隣に座った紫に足首を掴まれて前方に勢い良く倒れていく。

しかし床にぶつかる瞬間にスキマが開き、気がつくと紫の隣に座っていた。

「非力な人間って不利すぎる。お兄さん、この世界にはチートな能力持ちが多すぎると思うの」

抵抗しても無駄だと悟り、腰をそのまま落ち着けた。

チートな能力持ちの一人が何を言っているのか。

日常的に使える能力で買物も楽に出来るんだから優遇されている。

「まあまあ、明日までは一緒に居ましょっぴ」

ぱくぱくとご飯を食べながら喋っていて、頬にご飯粒がついていた。

「何でだろうな、幽々子さんみたいに癒されないのは。ほら、ご飯つぶ」

頬に付いていたのを取り、ごく自然に食べている。

橙によくやっついていて見慣れた行動だからか藍様もスルー。

「ありがとう。それで幽々子に会ったの？」

食べるのを止め、会ったのかと聞き返していた。

「ああ、お陰様でな」

額に青筋が浮かんでいる。

「あ、あははは……。私が寝呆けてやっちゃったかしら？」

さらにジト目な恭司を見て何かを悟ったようだった。

「……まあ、いい出会いがあつてよかったけどな。地底は正直詰んだかと思っただけ」

空かお隣に土下座でもして運んでもらえばよかった事に今も気がついていない。

午後

「風が気持ちいいわね。私、春をこんな風に体験するの初めてよ。でもこの季節も、やがて過ぎて行ってしまふのよね……。今日までありがとう。本当に疲れたでしょ？ 今はゆっくり休んでいいわ。私はずっとここにいますから」

縁側で紫に膝枕をされ、うとうとしている。

「……」

春の暖かな日差しの下、ゆっくりと目を閉じた。

何故だか分からないが物凄い死亡フラグな気がする。

儂くたゆたう世界を守った彼のように、世界の果てでアイアンクロ
ーをくらい続けられいいのに。

夕方

「え？」

「だーからー、シンクロモンスターがどうしても作れないから似
て非なるカードが作られたみたいなの」

外の世界を見てきたらしく、いきなりスキマで部屋に侵入してきて
いた。

「あー……でも仕方ないか。俺がここにいる以上、シンクロの完成
はかなり先延ばしになってるだろうし」
しみじみと呟いている。

「エクシーズ召喚って言ってたわ。既存のデュエルディスクで使う
にはアップデートが必要みたいなの」
現在様々な店でやってもらえるらしく、PCを勝手に使ってコピー
してきたのかそのディスクを手に入っていた。

「へえ、それはちょっと見てみたい。どれ、そのディスク貸してみ
な」

紫からディスクを受け取り、ノートPCにデータをインストールし始めた。

デュエルディスクのシステムを更新できるようになり、以後エクシース召喚の使用が可能になった。

ただ劣化シンクロのような感じもするから現段階だと恭司には不要。

「やっぱり俺も知らない召喚方法だ。オーバーレイ・ネットワークを構築して何が何だか……まあ、いいか」

テキストを読んでいるがあまり理解していない。

「歴史は常が変わっていくのよ」

紫はナチュラルに後ろから抱きついたり、冬眠から目覚めてやりたい放題である。

「変えてしまったって感じがするけどな。まあ、その責任くらいは取るさ」

呟きながら仕様を読んでいく。

「あー、癒されるー。抱きついてるだけで普段の三割くらい強くなつた気分だわ。心地いいのよね」

首筋に顔を埋め、会えなかった三ヶ月近くの恭司分を補充していた。

「そういえばさ」

エクシース召喚について詳しく読みながら、何気なく紫に話し掛けている。

「うん？」

「性欲を持って余す、ってスネークの真似を藍の前でやったんだよ。どうしても真似がしなくなったから」
スクロールしながらアホな告白をしている。

「……………」
ぎゅっと身体をさらに密着させた。

「そうしたらさ、ギラギラした目の藍に部屋に連れて行かれかけたんだよ」

「まさかそのまま……………」

「いや、無効のカードでなかった事にした。何か色々終わりそうだったし、何よりあの時の藍は怖かった」
据え膳を食わなかったチキンハートの持ち主。

紫の追求は夕食の時間まで続いたが、新たな召喚方法の詳細に夢中な恭司は適当に答えていた。

夜

「早速カバンに追加されてるのが怖いわ。ガンバラナイトとかネーミングが…………ガガマジシャンは面白い事に使えそうだ。ズババナイトがいるんだから、その内にポポポーンとかチエスのモンスターが出てきたりしそうだな」それは魔法の言葉だから。

「モンスターエクシーズはあまり気にしなくてもよさそうかな。黒いカードってのがモヤモヤするけど……………」
カードをしまい、部屋を片付けていく。

二カ月くらい過ごした部屋を綺麗にして、明日は朝から里に帰るつもりだった。

「よし、これでゆっくり眠れる」

里から持ってきた私物と紫に貰った大量のルマンドを封じたカードをカバンに収め、安心して布団に入った。

早朝

「誰かにリフボードを壊されちゃってからずっとこうやって運んでもらってるよな。藍も重いだろうに」

壊した犯人は今貴方を抱えている妖狐の方なんですけどね。

「そんな事は気にしなくていいぞ。私は人間より力もあるんだから藍様に抱えられ、二人で里に向かっていた。

ちなみに持て余す発言をしてから風呂に背中を流しに入ってきたり、夜中に寒いだろうからと布団に入り込んできたりと藍様は積極的だった。

だが毎回シャンプーが目に入って悶えたり、布団には橙も入ってきたりして特に何も間違いは起きていない。
羨ましいから爆発してほしい。

ゆっくりと会話を楽しみながら里に向かい、遂に帰ってきた。

しかし里に入ってから藍様が腕を組んで離れようとせず、ニヤニヤしながらすれ違っていく知り合いの里の人達がいて居心地が悪い。

慧音宅

「ただいまー」

玄関を開けて声をかけた。

「恭司、私はそろそろ行くよ。上白沢さんにはお前からよろしく伝えておいてくれ」

最後にぎゅーっと抱き締め、名残惜しそうに離れて藍様は飛んでいってしまった。

「流石九尾、抱き締められるといい匂いするし柔らかいしでくらくらする。絶世の美女とは言ったもんだなあ」

そんな彼女の誘惑を耐え切れるようになった精神力、これは新たな境地に到達できるフラグかもしれない。

「本当恭司は相変わらずだよな」

ぼんやりと見送っていると誰かが背中に飛び付いてきた。

「この声は妹紅か。二カ月くらいで変わってたまるかよ。でもこうして話すの懐かしい」

靴を脱ぎ、妹紅をおんぶして部屋に向かっている。

「変な所触らないでよね」

「はいはい。慧音だったら役得だったのに……いたたた！ 髪の毛を引っ張るなよー！」
胸的な意味で。

「うっさい、このスケベ！」

「何だろう、久々に妹紅に罵倒されるとちょっとドキドキする。これが恋？」

これが新たな境地……？

「ばーか。……恭司、髪切ろうよ。伸び放題で鬱陶しいし」
ちよつと照れた妹紅が髪をさわさわしている。

「頼むなら手先が器用なアリスかな。菓子折りとか持って行って頼んでみるか。出来ればシン・アス力みたいな感じにしてみらおう」
恭司はやはり彼が大好きらしい。

そんな会話をしながら二人は部屋に行ってしまった。

「めっちゃ痛い……」

「うう、何で私まで……」
部屋でイチヤイチャしていたのを慧音に目撃され、強烈な頭突きをくらって頭を押さえ蹲っていた。

「当然の報いだ」
部屋でそわそわしながら待っていたのに来なかったから少し怒っている。

「妹紅がくすぐってきたのがいけないんだからな」

「恭司がぺったんぺったん言うからいけないんですよ」
蹲りながらひそひそと罪を擦り付けあっていた。

部屋に入り、妹紅がなかなか離れないのでくすぐりあっている内に見つかったらしい。

敗因は久々のスキンシップで妹紅が止め時を見誤った事。

「ごほん……恭司、私に何か言う事があるんじゃないか？」
ひそひそ話し合う二人に咳払いをし、恭司に声を掛けた。

「た、ただいま帰りました。毎週里で買い物する時に会って以来です
すね」
びしっと起立し、帰ってきた事に関する挨拶をした。

「ああ、おかえり。ようやく帰ってきたか……」
このまま帰ってこないんじゃないかと少し不安だったらしい。

「そりゃ春までの契約だったから帰ってくるよ」
許されたと思い、荷解きを始めた。

BMGフィギュアを机の上に乗せ、筆記用具や抱き枕等も部屋に置いていく。
こっそり拝借したコミック版のジョジョも全巻本棚に並べている。
文庫版は妹紅に持っていかれてしまい、SBRしか残っていない。

「さて、この二カ月何があったのか聞かせてもらおう」
並べている間にクッションに座った慧音と妹紅がこちらを見ていた。

「いや、特に普通だったけど。……そうだな、あれは普通じゃなかったか」

そう前置きをして二人に語り始めた。

春が来て遂に目覚めたスキマ妖怪。

そして里に帰ってこれた決闘者。

再び里を拠点にまったりとしたスロークライフが始まる。

続く。

目覚めた事で里に帰れる（後書き）

今回はエクシーズと新たな境地のフラグ回。

GENFを4パック買ってみたら、エアロシャークがこんにちはわ。
効果がアニメや漫画のままだったらよかったのに。

30万PV特別編 新たなF/穩やかな日常？ (前書き)

特別編と言つ名のその場しのぎ。

30万PV特別編 新たなるF/穏やかな日常？

皆の家

「慧音、新しい家族が出来たよ」

恭司の影に隠れるようにして女の子が慧音を見ている。

「恭司、その子が前に言っていたリインフォース？か？」

「うん。ほら、リインも挨拶しような」

服の裾を握るツヴァイの頭を撫でながら促した。

河童やら魔法使い、恭司の技術にリインフォースのプログラムの一部から誕生したハイスペックなユニゾンデバイス。

魔力を媒体にしたモーメントを河童の技術で完成させた事により、どの守護騎士よりも突き抜けている。

オリジナルのリインフォース？と違うのは赤い瞳と常時子供状態でも平気な所。

「は、初めまして。リインはリインフォース？です」

もじもじしながらも慧音の前に出て自己紹介をした。

アリスが作ってくれたのかお揃いの服を着ている。

「私は上白沢慧音。その、なんだ恭司の奥さんになる予定なんだ。

リイン、お前も家族の一員だから遠慮はしないでいい」

照れながらも遠回しにその内に結婚すると告げていた。

正妻が確定しているからこそその余裕。

だが諦めない人妖神が多すぎてどうしようもないままだったりする。

「はい！ あ、でもマイスターは渡しません。ラインの旦那様になるんです」

嬉しそうな笑顔を見せていたが、慧音の奥さん発言は容認できなかつたらしい。

ぎゅっと恭司に抱きつき渡さないと宣言していたが、こんなロリっ娘の旦那様とか物凄い犯罪の匂いしかない。
ラインフォースのプログラムを使ったからこうなつたに違いない。

「慧音、子供特有のあれだろうし気にしなくていいから」
撫で撫でしながら慧音に気にするなと伝えている。

「大丈夫だ。三人で歩けば間違いなく娘に見えるだろうしな」
ふふふ、とご機嫌な慧音だった。

数日後

「恭ちゃん、あーんしてください」

手を添えてスプーンを差し出してきていた。

「あーん」

ツヴァイの為に作ったおやつプリンを一口もらっている。

「マイシスター、そのマスターの唾液がついたと思われるスプーンで次は私にも一口」

リンフォースも傍に待機しており、変態的な要求をしている。

「お前は変態か」

香霖堂で購入したハリセンでリンフォースの頭を叩いた。

スパーン！と気持ちいい音が部屋に響く。

「あむ」

ツヴァイは慌ててプリンを食べている。

ちよつと頬が赤いのはリンフォースの唾液云々を聞いていたからだと思う。

夕方

「ありがとう、リン。気持ちいいよ」
背中をごしごしと洗ってもらっている。

「恭ちゃんの背中、おつきいです」
タオルでごしごしと洗っている。

「私が身体に石鹸をつけて洗おうとすると拒否するのに、何故ですか主」

シグナムはツヴァイが洗っているのが気に入らないらしく、湯槽の中から文句を言っている。

「子供だから。それとナチュラルに入ってくるシグナムが危険だから」
もう慣れたものでシグナムが入っていても平気だった。

深夜

「ぐー」

「くー」

ツヴァイを抱き枕のようにしっかりと抱き締めて眠っており、ツヴァイも抱きついて眠っている。

「そ、そうよ。恭司君はお姉さんが好きなんだもの、負けちゃダメ」
しがみつくツヴァイを見て怯んでいたシャマルが潜り込んでいた。

平凡な日が数週間続いた、そんなある日。

「リインとユニゾンしてみているが……最高にハイ！ってやつだ！」
ツヴァイとユニゾンしてテンションが上がっていた。

やはり見た目がツヴァイに引っ張られており、髪は青に近い銀色で瞳は赤い。

恭司の魔力を完全に制御し、さらにツヴァイ自身の魔力でサポートすれば中距離までの砲撃なら撃てるようになっていた。

近距離は恭司が得意なレンジ、中距離がツヴァイ、遠距離がリインフォースとバランスだけはいい。

何となくソードシルエット、フォースシルエット、ブラストシルエ

ツトと言いたくなる。

「今なら幽香にも負ける気がしない」
力を持つと調子に乗りたくなるのが人間。

「へえ、試してみる？」

そしてその発言を聞き、いつにも増してニコニコした幽香さんが部屋に入ってきた。

「いや、その」

「さっ、里から出て存分に闘いましょう？ 楽しみだわ」

対等でいたいから強くなつてほしかったらしく、嬉々として引きずつていった。

里からそれなりに離れた場所で幽香が止まり、掴んでいた手を放して振り返った。

「ここならいいわね……じゃあ、始めましょう。降参をするかどちらかが気絶するまでね」

日傘を畳み、それをこちらに向けてくる。

「すげえ怖い。何で俺は調子に乗ったんだろう……うわあっ！ 地面が抉れたあっ！」

咄嗟に避けたが、幽香の振り下ろした日傘は軽く地面を抉った。

「相変わらず逃げ足だけは速いわね。狙い撃つわ」

逃げて距離を取ろうと背を向けた恭司に傘を向け、魔理沙のマスク

ースパークに似たレーザーのような砲撃を放った。

狙い撃つも何も……

「死ぬ！ 死んじゃうつてええ……………！」

嫌な予感に振り向いたが、逃げる間も避ける間もなく涙目のまま飲み込まれていった。

「…………死んだりしてないわよね」

「リイン、マジ愛してる。お前じゃなかったら大怪我してた」
傷一つなく立っていた。

砲撃に飲み込まれそうになった瞬間、リインは恭司の魔力を使ってシールドを幾重にも張り全て弾いてくれたらしい。

「無傷なのは予想外だわ」

日傘を構えて再び近接戦に移ろうとしている。

「もう降参する。無理無理、ユニゾン解除」

両手を上げ、ユニゾンを解除した。

帰り道

「恭ちゃん、今度はアリスちゃんのお家に行きたいです」

「そうだな。ラインのお洋服はアリスが作ってくれてるからな」
肩車をしながら帰っている。

幽香とお茶と会話を楽しみ、今は帰る途中。

乙女具合が上がっているのか手と手が触れ合うだけで顔を赤くし、
デレデレな状態になったりしていた。

最強レベルの妖怪とは思えない可愛らしさだった。

「はい！」

「他にも色々な奴らがいるんだぞー。冥界にはな……」

そういつた会話をしながらしばらく歩いていると、空から誰かが降りてきた。

「おー、幽々子か。ちょうど君の話をしてたんだ」
降りてきたのはゆゆ様だった。

「うふふ、呼び捨てにしてって頼んでよかったわー。紫と妖夢は呼び捨てなのに私だけ名前にさんって付けるんだもの」
最初は美しい笑顔だったが、さん付けだったのを思い出してぶくぶくと頬を膨らませていた。

「今は名前で呼んでるんだからいいじゃないか。よっと、ラインも挨拶しなさい」

肩車をしていたが降ろし、挨拶をしなさいと促した。

「あら、可愛い子ねー。私は西行寺幽々子って言うの。よろしくね」？

「リインはリインフォース？です。よろしくお願ひします」
ぺこりと礼儀正しく自己紹介をしていた。

「リインちゃんね。恭司、あのリインフォースの妹さんかしら？」
リインフォース？と聞き、いつもべったりで変態的な方を思い出してひそひそと尋ねている。

「ああ、あいつだけ今は永遠亭に派遣してる。ところで何用だったんだ？」

輝夜の遊び相手としてゲーム三昧です。

「久しぶりに恭司の手料理が食べたくなって探していたのよ。早く行きましょう？ 妖夢がシグナムと闘い始めちゃったの」

最初は楽しく見ていたが、だんだん飽きて暇になり捜し回っていたらしい。

「普通は逆だよ。まあ、いいけどさ」
ツヴァイと手を繋いで歩き始めた。

「ふふ」
ゆゆ様がそつとツヴァイのもう片方の手を取り、三人仲良く帰っていく。

ツヴァイが話をし、恭司が教え、ゆゆ様がニコニコと二人の話を聞いている。

種族はバラバラだが親子のような三人だった。

新たな家族としてに加わったリインフォース？。
色々と調子に乗る調律者。
着々とロリコンへの道を歩んでいる。

30万PV特別編 新たなF/穏やかな日常？（後書き）

とつくに30万PVを過ぎて40万PVが近かったから焦って書いた。

次の特別編は誰かに三つくらいキーワードを決めてもらって書くことにしようと思いました。

岸辺露伴ルールに行く高い。

今月の大きな出費はこれと同時発売のSBRくらいかな。

約束したデュエルを行う者達（前書き）

原作のあれは最強のドローカードだった。

試験も兼ねての召喚。

きつとロリコン。

約束したデュエルを行う者達

「あたいはハイドロゲドンを攻撃表示で召喚して、えっと、フィールド魔法ウォーターワールドを発動！そして二枚伏せてターンエンド！」

ATK1600 ATK2100

周囲が海のように水だけとなり、イルカが泳いでいる。

いきなりだがチルノと恭司はデュエルをしていた。春になったらデュエルをする約束をしていたから唐突に湖で約束を果たしている。

「俺のターン、ドロー。モンスターをセットしてターンエンドだ」

「あたいのターン、ドロー！……えっと、オキシゲドンを召喚！」

ATK1800

隣で大妖精がにこにこしながらアドバイスをしているのが目に入る。二人でデッキを組んだのか一緒に楽しんでいた。

「む、もしや」

嫌な予感しかない。

「ハイドロゲドンで攻撃！」
そんな恭司の反応など気にせず、生き生きと攻撃している。

「シールド・ウィングは一ターンに二度まで戦闘では破壊されない！」
こいつを伏せておいてよかったと思いつつながら宣言した。

DEF900

「うっ、大ちゃんどうしよう……わかった、ターンエンド」
大妖精と相談し、そのまま終わらせる事にしたようだ。

「俺のターン、ドロ……。……手札からポルト・ヘッジホッグを墓地に送り、クイック・シンクロンを特殊召喚！」
使い勝手のいいクイックでシンクロンをして攻めて行く事に決め、早速実行していた。

「……チルノちゃん、恭司さんがかかったよ」

「うん」

どうやら大妖精はあれを呼び出すのを待っていたらしく、まさに計画通り。

「レベル2シールド・ウイングにレベル5クイック・シンクロンを
チューニング！」
大妖精の掌の上で踊らされているとは知らず、シンクロ召喚を行い
始めている。

「集いし思いがここに新たな力となる。光差す道となれ！ シンク
ロ召喚！ 燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー！」
そしてお馴染みのニトロ・ウォリアーを呼び出してしまった。

ATK2800

「チルノちゃん、やっぱりあれだったでしょ？」

「大ちゃんすごい！」
大妖精はあれを呼びだすのが分かっていたらしく、チルノが凄く凄
いと興奮していた。

「ニトロ・ウォリアーでハイドロゲドンを攻撃！ ダイナマイト・
ナックル！」
伏せを気にせず、アレを呼ばれる前に一気に叩き潰すつもりで攻撃
を仕掛けた。

「罠カードオープン、攻撃の無力化！」
そううまくは行かず、チルノが腕を上げるとニトロ・ウォリアーの
攻撃が無効化されてしまった。

「ぐっ……。モンスターをセットしてカードを二枚伏せてターンエンドだ」

「あたいのターン、ドロー！ 闇の誘惑を発動、それで伏せてた精霊の鏡を発動して対象はきょーじに！」

「んなつ！？」

予想外の出来事にかなり動揺している。

「恭司さん、早く二枚引いてください」

大妖精が促してくる。

どうやら彼女がチルノに発案したコンボのようだ。

「……デッキから二枚ドローする」

「闇属性モンスターはありましたか？」

可愛らしく微笑みながら聞いている。

「……ない。よって全ての手札を墓地に送る」

ジャンク・ブリーダー、ジャンク・サーバント、ボルト・ヘッジホッグの三枚が墓地に送られた。

「あたいはハイドロゲドンを召喚、それでボンディング・H2Oを

発動！ 場のハイドロゲドン二体とオキシゲドン一体を生け贄に捧げて、デッキからウォーター・ドラゴンを特殊召喚！」
三体のモンスターが化学変化を起こし、一体の水の竜が姿を現わした。

ATK2800 ATK3300

「やばいやばい」
互いに手札がなく、しかもニトロ・ウォリアーは炎属性。

「ウォーター・ドラゴンが場に存在するかぎり、炎属性と炎族モンスターの攻撃力は0になります」
大妖精の宣言で周囲に水が吐き出され、ニトロ・ウォリアーが弱っていく。

ニトロ・ウォリアー
ATK2800 ATK0

「それでニトロ・ウォリアーに攻撃！ アクア・パニッシャー！」
チルノもノリノリで攻撃していた。

「くっ……っわあああっ！！」
ウォーター・ドラゴンが吐き出した水流に飲み込まれ、あっさりと倒されてしまった。

LP4000 LP700

「初めてデュエルをするのにこんなに恭司を追い詰めるなんて、あたいた達ったらさいきよーね！ ターンエンド！」

「あー、効いた。俺のターン、ドロー！ ……清々しいくらいに最強の手札増強カード。魔法カード、天よりの宝札を発動！ 互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにカードをドローする」
手札を一気に六枚補充していた。

「嘘、何でこのタイミングで……」
大妖精もびっくりするくらいのだロー運。

「よし、セットしたモンスターを反転召喚。そして死者蘇生でクイツク・シンクロンを蘇生」
反転したモンスターはマツシブ・ウォリアーだった。

マツシブ・ウォリアー

ATK600

クイツク・シンクロン

ATK700

「む、無駄ですよ！ またニトロ・ウォリアーをシンクロ召喚したとしても、こっちはウォーター・ドラゴンがいます！」

「大ちゃんの言う通り！」

「甘いなアツ！ 俺の場にチューナーモンスターが存在するから、墓地の二体のボルト・ヘッジホッグを特殊召喚させてもらう！」
恭司は既に勝利への道筋が見えていた。

ボルト・ヘッジホッグ×2

ATK800

「レベル2マツシブ・ウォリアーにレベル5クイック・シンクロンをチューニング！」
レベル7、しかし呼び出すのは二トロ・ウォリアーではない。

「集いし怒りが忘我の戦士に鬼神を宿す。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 咆える、ジャンク・バーサーカー！」
巨大な戦斧を持った狂戦士が満を持して降臨。

ATK2700

「ジャンク……」

大妖精はぼかんとした顔でジャンク・バーサーカーを見ている。

「バーサーカー？」

チルノは不思議そうな顔で見ている。

「よし、ちゃんと使えるか試してみよう。同じレベルのモンスター

が二体以上フィールドに揃った時、そのモンスターを素材としてモンスターエクシーズを特殊召喚する。俺はレベル2のボルト・ヘッジホッグ二体をオーバーレイ！ 二体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ 来い、ダイガスタ・フエニクス！」

初のエクシーズ召喚、試験も兼ねていたが大成功。

蒼い炎を発し、溶岩のような肌を持った巨大な鳥が姿を現わした。その身の回りを二つの光の球体が回っている。

DEF1100

「エクシーズ召喚……？ シンクロ召喚じゃない」

大妖精はチルノ以上に興味津々だった。

「風属性であるジャンク・バーサーカーを指定し、ダイガスタ・フエニクスのオーバーレイ・ユニットを一つ取り除く。それによりジャンク・バーサーカーはこのターンのみ二回攻撃をする事が出来る！」

フエニクスとは相性がよく、今後バーサーカーのさらなる活躍が見込める。

「さらにジャンク・バーサーカーの効果発動。墓地に存在するジャンクと名の付いたモンスターを一枚除外して、相手モンスター一体を指定する。指定したモンスターの攻撃力は除外したモンスターの攻撃力分ダウンする。俺は墓地のジャンク・ブリーダーとジャンク・サーバントを除外し、ウォーター・ドラゴンの攻撃力を除外した二体のモンスターの攻撃力分下げる」

狂戦士が咆哮を上げると、その恐ろしい声がウォーター・ドラゴンを竦み上がらせた。

「あつ！」

「え？」

ATK3300 ATK1500 ATK0

「ジャンク・バーサーカーでウォーター・ドラゴンを攻撃！」
戦斧をブーメランのように投げつけ、竦み上がって身動きの取れないウォーター・ドラゴンを切り裂いた。

戻ってきた戦斧を掴む姿はやたらノリノリである。

「きゃあああつ！……きよーじはやっぱり凄いね。でもウォーター・ドラゴンが破壊された時、墓地のハイドロゲドン二体とオキシゲドン一体を特殊召喚できる！」
三体のモンスターが場に現われた。

LP4000 LP1300

ハイドロゲドン×2

DEF1000

オキシゲドン

DEF800

「二回目の戦闘でハイドロゲドンを攻撃し、効果により破壊してターンエンドだ」

「あたいのターン、ドロー！ 二体のモンスターをリリースしてブリザード・プリンセスをアドバンス召喚！」
シンプルにアドバンス召喚してきた。

蔑むような瞳でこちらを見て、鎖で繋がれた巨大な氷の球を持った女の子が立っている。

ATK2800 ATK3300

「しまった！」
セットした魔法・罫が凍り付き、このターン発動できなくなり焦っている。

「ジャンク・バーサーカーを攻撃！」
戦斧を構え迎え撃とうとしたが、お構いなしにバーサーカーを叩き潰した。

「可愛いになんつー……うあああつー！」

LP700 LP100

「ターンエンド!」

「ドロー。……締めはこいつだな。スピード・ウォリアーを召喚!」
まさかの選択に召喚されたスピード・ウォリアーも戸惑っているように見える。

ATK900

「えっ」

大妖精がまさかの低攻撃力モンスターに驚いている。

「スピード・ウォリアーに装備魔法、進化する人類を装備させる。自分のLPが相手より低い場合、このカードを装備したモンスターの元々の攻撃力は2400になる」

ATK900 ATK2400

「きょーじ、それでもブリザード・プリンセスには届かないよ?」

「スピード・ウォリアーでブリザード・プリンセスを攻撃!」
チルノの疑問を無視してスピード・ウォリアーを突っ込ませた。

ブリザード・プリンセスが振り回す氷球を避けながら突っ込んでい

く。

「自滅を選ぶなんて……」

恭司らしくないと考え、避けながら接近してくるスピード・ウォリアーを見ていた。

「えっ、嘘！」

何故か攻撃が当たらずチルノは驚いていた。

「スピード・ウォリアーの効果は召喚したターンのバトルフェイズ時のみ発動できる。このカードの元々の攻撃力はバトルフェイズ終了時まで倍になる」

淡々と二人に説明して聞かせていた。

「元々の攻撃力……元々!？」

「だ、大ちゃん……」

二人ともようやく無駄に突っ込んで来たわけじゃないのに気がついたようだ。

「進化する人類の効果でスピード・ウォリアーの元々の攻撃力は2400。よって倍の4800になる。行け、ソニック・エッジ!」
直撃しそうになった氷球を蹴り碎き、その勢いのままブリザード・プリンセスにも鋭い蹴りをたたき込んだ。

ATK2400 ATK4800

「きゃあああつ!!」

ブリザード・プリンセスがチルノにぶつかり一緒に吹き飛んでいた。

LP1300 LPO

「シンクロしないと戦えないって思われてたら困るな」

風景が元に戻り、デュエルディスクが待機状態に戻っている。

吹っ飛んだチルノの様子を見ていた大妖精がチルノと一緒に戻ってきた。

「チルノちゃん、負けちゃったね」

「大ちゃん、でも楽しかったね!」

きゃっきゃっ騒いでいて微笑ましい。

「そうだな、よし。大ちゃんにもデュエルディスクとカードをプレゼントしよう」

デュエルディスクは型落ちしたり壊れたりしたのがよく香霖堂にあり、壊れているのをいい事に二束三文で大量に仕入れているから配つてもなくならない。

「やったね大ちゃん、デュエルができるよ!」

「うん!」

二人は嬉しそうに手を繋いでぴよんぴよん跳ねていた。

「俺のトラウマをナチュラルに刺激するとか。チルノ、恐ろしい子

……！」

あれはトラウマになる。

数十分後

「恭司さん、この真っ白なカードは何ですか？」

恭司のシンクロモンスターを見ていた大妖精が不思議そうに尋ねてきた。

「チルノも膝の上が好きだよな。ん？ ああ、それか。遊星……未
来の俺の友人なんだけど、そいつと会ったらいつのまにか入ってた
んだよ。もしかしたら……」
あれかもしれないと予測は出来ている。

「粹だけで真っ白ですね」

何も書いてない、と呟きながら眺めていた。

「そうなんだよね。ほら、大ちゃんもお菓子食べな。チルノに全部
食べられちゃうよ」

チルノは静かに膝の上でクッキーをぱくぱく食べていた。

「あつ、いただきます」

ぱりぱりと食べ始めた。

「余ったら友達に分けてあげてね」

いい位置にあったので大妖精の頭を撫で撫でしている。

撫でられるのが恥ずかしいのか頬を赤らめて俯きながら食べていた。

お菓子を食べて満足したらしく、春の日差しの下で三人は寝転がっている。

紅魔館の門からこちらが見える位置だからか、美鈴がじーっと楽しそうに三人の様子を見ていたりもする。

「恭司さん」

「大ちゃんどうかした？」

ぼんやりと空を眺めていると唐突に声をかけられていた。

「眠くなっちゃいました……」

「ああ、少ししたら起こすから寝てもいいよ。チルノはもう寝てるし」

いつのまにか恭司にくっついてチルノは寝ている。

ちよっと冷気で肌寒いが我慢する紳士。

大妖精もいそいそと恭司の傍らに来て、服を掴んで眠り始めた。

「外の世界だったら間違いなく職質されてるだろうな、俺」
ぼんやりと空を見上げて呟いていた。

約束したデュエルをして親交を深めた三人。
そしてまったりとした春の日差しの下で昼寝。
そろそろステップアップの季節。

続く。

約束したデュエルを行う者達（後書き）

スピード・ウォリアーはお気に入り。

美鈴はただ見ていただけ。

オメガの裁きに百円をインしたら一発でギアが出てきて俺歓喜。
一番近い店はいつになったらエクシード始動が再入荷されるのか。

新BEを一箱買った友人の引きの良さは異常だった。

シクは代償、ウルスーは全部禁止避けるとか信じられない。

エアロシャークを引きすぎな意味でシャークさん呼ばわりされてる
俺にあの運を分けて欲しい。

ENDING No3 永遠の人(前書き)

こんな感じの世界もあるかもしれない。

ENDING No3 永遠の人

綺麗な月の出ている夜、最近里に来なくなった妹紅に呼び出されていた。

翌日に控えた慧音との式に出席してもらえないか、その確認も兼ねて呼び出された場所に向かっている。

「恭司っ！」

到着すると嬉しそうな声と共に妹紅がきつく抱きついてきた。

「妹紅、離れてくれないか。過度なスキンシップは慧音に悪い」
どうにか妹紅を離れさせようとするが全く離れない。

「嫌ッ！ 私、恭司が慧音と結婚するって聞いてからずっと考えてて……あのね、私も」

「……すまない。俺はもう慧音しか見えないんだ」
何かを伝えようとする妹紅を遮り、身体を引き離れた。

「わかってる、わかってるよ……。でも私だって慧音に負けないくらい恭司が好きなの……ううん、愛してる」
気づくのが遅かったと後悔し、苦しそうに胸の内を吐き出している。

「妹紅にそう思ってもらえて凄く嬉しいよ。でも、ごめん。妹紅の想いは受け止められない。……もう里に戻るよ」
流石に出席してくれとは言えず、妹紅に背を向けて歩き去っていく。

「……待って、最後にお願ひがあるの」

何かを決意したらしく、去って行く恭司を呼び止めた。

「お願い？」

足を止め、真剣な声に振り向いた。

「ちょっとの間だけ目を閉じて。そしていいて言うまで開けないで」

「……ああ、わかった。それくらいなら
言われた通りに目を閉じた。

しばらく目を閉じていると妙な血生臭さが漂って来たが、言われた通りに目は開かない。

「口を開けて」

「何を……ッ！」

言われた通りに口を開けると何かを押し込まれ、口いっぱい血生臭さと不快な味が広がった。

「ごめん、ごめんね。でもこうすれば……」

恭司が吐き出そうと暴れるのを見越し、頭を掴み強引に唇を重ねた。

一噛みする度に血の味が広がり、吐き気を催すが妹紅が唇を塞いでいて吐き出せない。

無理矢理振りほどこうにも身体強化でもしているのか振りほどけない程の力強さ。

「うぶ……ぐ……」

この状態を脱する為に少しずつ噛み砕き、嚥下していく。

「んんっ」

口を血で濡らしながらも飲み下すまで接吻を続けている。

数分後

「げほっ、げほっ！ うええっ」

吐き出そうとするがうまく吐き出せない。

「こうするしかないよね。恭司、またね」

そう嬉しそうに言い、妹紅は迷いの竹林に消えていった。

「ま、待て！ 俺に何を……うっ」

追いかける事は出来ず、ただ去っていく背を見送ることしか出来なかった。

数年後

「……妹紅が姿を見せなくなつて結構経つたな」

縁側に腰掛け、慧音と一緒にお茶を飲んでいる。

「ああ。迷いの竹林でも見かけなくなつたらしい」

仲良く寄り添っており、互いの左手の薬指にはシルバーのリングが光っていた。

香霖堂で購入したリングを加工して作った特別な品だったりする。

「もう気にしてないから出てきてもらいたいんだがな。蓬莱人でも子供が作れるって証明して、永琳をびっくりさせたし。俺の頬が大変な事になったけど」

蓬莱人になってしまったと聞いて真つ青になった慧音に対し、なっちまったもんは仕方ないと開き直ったくらいにポジティブな男。

永琳は蓬莱人である恭司の子を慧音が孕んだ事が信じられず、何度も診察をして少しパニックになっていた。

夢じゃないわよね、と恭司の頬を何度も全力でつねったり。

「ふふ、もう少しでお前も父親だな。寺子屋は一人でも平気か？皆、たまに私の事を見に来てくれるが」

「おう、恭司先生はやる事をきっちりやってるぞ」
産休に入った慧音の代わりに全教科を教えている。

数十年後

「その年でファザコンとかマジ笑えない。もう完全に行かず後家じゃないか」
頭を抱えている。

「だって、私には父上以外の男性等考えられません！」
娘を溺愛し、強く、優しく、正しく育てたはずなのにこうなってしまう。

「琴音、恭司が困っているからやめなさい。それに恭司は私のもので、お前はその娘。諦めなさい」

「母上、父上を私にください。たまに寺子屋に来る守矢の現人神に盗られる前に！」

今でも早苗は来ているらしい。

「はい、いいですよってなるわけがないだろ。早苗は次代の風祝の為にせめて子供だけでもって慧音に土下座してたな。目を覚ましたら神社にいた時は売られたのかと思って泣きそうだった」

縛られたまま色々されて新たな扉を開きかけた嫌な思い出である。

蓬萊人になつて百年後

「……」

何度も繕い直したカバンを肩に掛け、幻想郷中をふらふらと何日も歩き回っている。

後天的に半人半獣になった慧音は人より少し長く生きるが、やはりそう長くはなかった。

その最期を看取り、命蓮寺の墓地に埋葬されたのを見届けて恭司はこっそりと里を去った。

里に関する事は全て孫達やそれを支える者に任してあるようだ。

「霊夢や魔理沙、咲夜にあつきゅんの時よりきついなあ。何日経っても辛い」

今までの事を思い出して目頭が熱くなり、目を閉じて静かに涙を流していた。

「恭司」

しばらく立ち止まっていると、背後からとても懐かしい声が聞こえてくる。

「すまない、どちら様で」

袖で顔を拭い、何もなかったように笑顔で振り返った。

「私……」

そこには百年前と何ら変わらぬ妹紅が立っていた。

「応、約百年ぶりだな。元気だったか？ って蓬莱人に聞くのもあれだな」

あはは、と百年前と変わらず接している。

懐かしさと三人での楽しかった日々を思い出して少し泣きそうだった。

「ごめん、ごめんね。慧音と一緒に逝けなくさせてごめんね」
ぼろぼろと涙を溢しながら謝っていた。

同じ蓬莱人にしてしまい、二人の友人を不幸にしてしまった事をこの百年間悔い続けていたらしい。
会いには行かなかったが幸せそうな二人の様子は人伝に聞いていたようだ。

「別にいいよ、俺達はいつかこうなるって互いに納得してたから。ほら、もう泣くな。折角の可愛い顔が台無しだぞ」
妹紅に近づき、涙を指で拭いている。

「でも」

「うーん……それならしばらく妹紅の家に泊めてもらえない？ 里から出てきて行き場がないんだよね。それでこの件は終わりって事にしよう」

ナチュラルに嘘を吐きながら、妹紅の顔をハンカチで軽く拭いている。

実際は各勢力から誘いが来ていて、後妻狙いも多数いるから行き場はたくさんあつたりする。

「う、うん」

顔を拭かれながら答えていた。

「決まりだな。ほら、行こうぜ」

自然に妹紅の手を取り歩いていく。

「あつ、私の家はこつちだよ」

ぎゅっとその手を握り返して違う方に行こうとした恭司を誘導し、仲良く歩いていく。

「そついやさ、百年くらい前に俺に食べさせたのってやっぱり妹紅のアレ？」

「えつと、その……うん。すつごく痛かったけど、これを食べさせればって考えてたから幸せな痛みだった」

俯いて頬を朱に染めてもじもじする姿は乙女。

「……何だろう、言ってる事は怖いのにその仕草にグツと来た。俺が立ち直ったら妹紅の事を性的な意味で食べちゃおうかなー」
あはは、とあえて怒らせて元気にさせる為に冗談を言ってみたりしている。

慧音との思い出をきちんと過去の物として受け入れ、それを胸に歩いていこうと決意をした時が立ち直った時だろうから相当時間がかかる。

「えっと、私でいいなら」
想いは捨てられず、燃え続けていたらしい。

「おいおい、もっと自分を大切にしないとダメだぞ。そうだな……よし、今度一緒に慧音の墓参りに行こう。あいつはずっとお前に会いたがってたんだからな」
三人でまたくだらない事や、楽しかった事等を話す日を願っていたらしい。

ちなみに年老いない恭司を不気味がるのはたまに迷い込んで定住する外来人だけで、里の者達には受け入れられていた。
小さい頃は子守りをし、大きくなったら遊んで勉強を教え、成人したら酒を飲む。
これのサイクルで馴染んでいったらしい。

「うん、恭司の世話は私が見るから安心してって報告しに行かないとね」

妹紅は次第に昔のような元気を取り戻し、色々とその百年の事を語

り合いながら二人は去っていった。

慧音は妹紅の気持ちを知っていた。

自分の死後、妹紅に恭司を任せる旨を書いた手紙を白蓮に渡していたりする。

それを読んでこの先どうなるかは二人だけの秘密。

おしまい。

ENDING No3 永遠の人(後書き)

不老不死って辛い。

ジャックデッキでスカノヴァ出して、攻撃力7000とかHERO相手にやってたら超融合で食べられたでござる。ドラゴエクイテスって地味に攻撃力高いよね……。

Leave all Behind (前書き)

さあ、振り切るぜ！

Leave all Behind

里に帰ってきて一週間

「文、ちょうどよかった！ 説明は後でするから俺を抱えてあいつを追ってくれ！」

恭司がデュエルディスクを付け、慌てて家から飛び出してきた。

最悪叩き落とすつもりだったが、ちょうど文が居たので抱えて追ってもらえないか頼んでいる。

「え、あ、はい！」

飛び去っていくのが天狗仲間でも評判の良くない烏天狗の男なのに気づき、恭司を抱えてその後を追った。

途中で名前を呼び捨てにされたのに気がついた。

幻想郷・空

「へへっ、マヌケな人間から盗ってやった。何が絆だ」

デッキが付けられたままのデュエルディスクを付け、その手にはブラック・フェザー・ドラゴンと咄嗟に奪った何体かのシンクロモンスターがあつた。

「地味に格好悪いが……この距離なら強制的にデュエルモードに切

り替えられるな。絶対に逃がさない、いや逃がす訳にはいかない」
文に抱えられたままデュエルディスクを起動させ、相手のデュエル
ディスクを強制起動させた。

セキュリティの技術を応用して作った無駄なシステムだったが、今
回はちよつと意味があった。

「ちっ！ 射命丸を使って追ってきやがったか！」

デュエルディスクが強制起動したのに気づき、舌打ちして逃げよう
としている。

「逃げるなよ、逃げたら起動状態のそのデュエルディスクは爆発す
るぞ。解除する方法はデュエルを終わらせる事だ」

逃げようとしている天狗と横並びになり、そう告げた。

文が何も言わないのは全てが終わったら徹底的に聞き出すつもりだ
からかもしれない。

赤き竜の力で高速で飛ばれても恭司には風の影響が出なくなってい
る。都合主義。

「フライングデュエル、アクセラレーション！つてな」

何か格好つけてるが文に抱えられているので物凄く格好悪かった。

そんな格好をつけている恭司を無視し、先行を取っていた。

「俺のターン、ドロー！ 手札からBF - 蒼炎のシユラを召喚、B

F - 疾風のゲイルとBF - 黒槍のプラストを特殊召喚！」

セットしていたデッキはBFだったらしく、かなり展開されている。

蒼炎のシユラ

ATK1800

疾風のゲイル

ATK1300

黒槍のブラスト

ATK1700

「レベル7のシンクロモンスター……は奪われてないな。危ない、他のシンクロを見せなくてよかった」
奪われたのがゴヨウ、ガイアナイト、BFD、ギガンテックファイターの6と8のシンクロモンスターだけだったのが救い。

「……二枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！……文がいるから、もしかしたら行けるかもしれない」
引いたカードを確認し、抱えて飛んでくれている文を見て呟いた。

博麗神社

「はいはい、一度手を止めて注目。恭司が何かをするみたいよ」
紫がスキマを使ってその様子を中継している。

博麗神社には様々な人妖神が集まっていた。
宴会の準備途中だったようだが、皆集まり興味津々で見ている。

空

「相手の場にモンスターが存在する時、手札からサイバー・ドラゴンを特殊召喚出来る。そして魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動。手札から一枚モンスターを墓地に送り、デッキからレベル1のターボ・シンクロンを特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン

ATK2100

ターボ・シンクロン

ATK100

「……」

天狗は静かに様子を伺っている。

「ジャンク・シンクロンを通常召喚し、墓地にいるレベル1のチューニング・サポーターを守備表示で特殊召喚！そしてレベル5サイバー・ドラゴンにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」

さつきチューニング・サポーターを捨てていたらしく、ジャンク・シンクロンで引っ張り上げた。

四体のモンスターが場に揃い全ての準備は完了した。

「大いなる風に導かれた翼を見よ！ シンクロ召喚！ 響け、スターダスト・ドラゴン！」

白銀の竜が大きな翼を広げ、文と恭司の頭上に現われた。

ATK2500

「さらにレベル1のチューニング・サポーターにレベル1のターボ・シンクロンをチューニング！」
とうとう通過地点に到る為の一步を踏み出す時が来た。

「あの人間ばかり……使えねーのばかり持つてきちゃったのかよ」
レベルが合わずシンクロ召喚が出来なかったのをカードのせいになっている。

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 希望の力、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロン！」
F1のレーシングカーのようなモンスターが現われ、スターダストと同じように並走し始めた。

DEF1500

「希望の力、シンクロチューナー……」
誰かが呟いている。

「恭司、やはりお前は揺るぎなき境地とやらの到達するのを諦めていないのか……」

唯一何をしようとしているのか分かっている藍様は心配そうに見ていた。

皆、これから何が起こるのか固唾を飲んで見守っている。

空

「チューニング・サポーターの効果で1枚カードをドロウする。そしてフォーミュラ・シンクロンの効果でさらに1枚ドロウ。……文、頼む加速し続けてくれ」

カードを二枚引き、文に加速を要求した。

「訳は後で聞かせてもらいますからね。行きますよ！」
隣の天狗を振り切り、文が少しずつ加速していく。

「あいつは速すぎるんだよ！」
置いていかれ始め、焦って速度を上げて追いかけている。

しかし文はまだまだ加速している。

「　　そうか、これが遊星の言っていた……クリア・マインド！」
かつて何度も感じた加速した世界への恐怖も今は感じていない。
そして心が澄み渡り、その背に赤き竜が浮かび上がっていく。

文の協力もあり、スピードの世界で遂に遊星が通過した地点に辿り着く事が出来た。

「……さあ、振り切るぜ！　レベル8シンクロモンスター『スターダスト・ドラゴン』にレベル2シンクロチューナー『フォーミュラ・シンクロン』をチューニング！」
文は周囲が特殊な空間に変化していても平然としており、お構いなしに加速していく。

「集いし夢の結晶が、新たな進化の扉を開く。光差す道となれ！」

アクセルシンクロオオオオツ！！」
いつのまにか手に持っていた枠だけの真っ白なカードにモンスターとテキストが浮かび上がっていく。

その叫びに答えるように文がさらに加速し、直後天狗の前から二人の姿が消えた。

「消えた！？」

追い付けなくなっていたとはいえ、前に見えていた二人が忽然と消えた事に驚いている。

「　　生来せよ！　シューティング・スター・ドラゴン！！」

そして天狗の背後からシューティング・スター・ドラゴンと共に飛び出してきた。

シューティング・スター・ドラゴンが幻想郷の空高く舞い上がり、天から降り注ぐ光に照らされその神々しい姿を全ての者に見せつけている。

ATK3300

「ただの人間である貴方があの加速した世界で自我をしっかりと保っていた……。私は貴方をりすべくと？します」
スピードをやや落とし、耳元で囁いてくる。

やはり人より優れた種族である天狗である以上、文は無意識に恭司を下に見ていたようだ。た。

そして習った英語をここぞとばかりに使っている。

「……そんな虚仮威しが効くか！ 地を這う人間如きがあ！」
とにかく吠えていた。

人間を下等な劣悪種として見ており、天狗の中でも自分だけは他の奴らとは違うと中二的な事を考えているこの男。

空高く舞い上がったシューティング・スター・ドラゴンに見惚れてしまい、悔しかったのかも知れない。

「これは遊星との絆、虚仮威しなんかじゃない。シューティング・

スター・ドラゴンの効果を発動！ シューティング・スターはターンに一度デッキの上からカードを五枚確認し、その中のチューナー・モンスターの数だけ相手に攻撃できる！」
一気に決めるつもりで効果を宣言した。

「複数回の攻撃だ！？」
ちよつとノリがよく、本気で驚いている。

「一枚目……チューナーモンスター、ジャンク・シンクロン！ 二枚目……チューナーモンスター、ニトロ・シンクロン！ 三枚目……チューナーモンスター、デブリ・ドラゴン！ 四枚目……チューナーモンスター、エフェクト・ヴェーラー！」
一枚一枚を宣言しながら引いている。

引きながら少し青冷めているのは、このまま続けていたら事故確定だったからに違いない。

「何だと!？」
四枚もチューナーモンスターを引いている事が信じられず、こちらも少し顔が青冷めている。

「そして……最後のドロー！ チューナーモンスター、ハイパー・シンクロン！」
外面には出していないが、危ねー！と内心思いながら宣言していた。

「馬鹿な！！ 合計五回の攻撃だと！？」
驚愕の表情を浮かべている。

「疾風のゲイルを攻撃！ 行け、シューティング・スター・ドラゴン！ スターダスト・ミラーージュ！」
恭司達の頭上を飛行していたシューティング・スター・ドラゴンが赤・青・黄・橙・緑に分身した。

「リバーズカードオープン、くず鉄のかかし！ 一回目の攻撃は無効だ！」

かかしが突撃してきた赤いシューティング・スターを防いだ。

「疾風のゲイルと二回目のバトル！」

「二枚目のくず鉄のかかしを発動！ 二回目の攻撃も無効！」
橙のシューティング・スターを二つ目のかかしが受け切った。

B Fを色々と調整している途中だったようで、くず鉄のかかしが入っているのも試しに入れた物のようだった。

「だが三回目のバトルは防げない！ 疾風のゲイルを攻撃！」
緑のシューティング・スターが疾風のゲイルに突撃していく。

「うっ！」

防ぐ手立てはないらしく、そのまま戦闘破壊された。

LP4000 LP2000

「四回目の攻撃！ 黒槍のブラストとバトル！」

黄のシューティング・スターが黒槍のブラストに突撃していく。

「うあああっ！！！」

LP2000 LP4000

「そしてこれが最後のバトル！ シューティング・スター・ドラゴン、蒼炎のシュラを攻撃！」

最後に残った青のシューティング・スターが蒼炎のシュラに突撃。

「この俺がただの人間如きに、こんな札であつても負けるなんて！
うあああああっ！！！」

人間にカードとはいえやられた事が信じられず、パニックになり弾幕を張ろうと身構えた。

しかしシュラを貫いたシューティング・スター・ドラゴンの攻撃が天狗に直撃し、その衝撃で気を失い頭から落下していった。

LP4000 LPO

「後攻一ターン……それがお前の絶望までのタイムだ！」
気持ちよく照井さんの真似をしている。

「うげ、やっぱり壊れちまったか。仮想立体触感もプログラミングして搭載したのに。俺のファイルをくらったからかな」

あの後すぐに落下して気絶した天狗から盗まれた物を全て回収したが、デュエルディスクだけは衝撃で壊れてしまっていた。

仮想立体触感なんて危ない物を搭載していたからシューティング・スターの一撃で気絶して落下したらしい。

「おばあちゃんが言っていた……人の物を盗む奴はもっと大事な物をなくす、ってな。こいつの場合は見下していた人間にプライドを粉碎された事かね」

絶望がこの天狗のゴールだった。

「おばあちゃんが言っていた……と。さあ、話を聞かせてもらいますよ！」

今の台詞をメモして、逃がさないと腕を掴んでいた。

博麗神社

「凄……」

静まり返る中、誰かが呟いた。

クリア・マインド、アクセルシンクロ、シューティング・スター・ドラゴン、そしてシンクロモンスターによるジオレンダア。

格好良かったのに素直に格好良かったと言えないのは、間違いなく文に抱えられていたから。

何とも言えない微妙な空気が漂っている。

ここ一番で格好のつかない微妙すぎる男だった。

少し歩いた場所にあった切り株に腰掛け、どうしてこうなったのかを文に語り始めた。

「事の発端は射命丸の知り合いだってさっきの天狗が尋ねてきたんだ」

気絶した天狗は放置してきている。

「私の知り合い？ ……あれ、さっきまで私の事、文って呼んでませんでした？」

いきなり名字呼びに変わったのに気がついた。

「今まで名前で呼んでなかったのに名前で呼んで、今になって恥ずかしくなったんだよ」

言わせんな恥ずかしい、と照れている。

いきなり名前で呼ぶと照れちゃうのは仕方ない。

「あ、じゃあさっき抱えて飛んだ事に対する報酬は名前を呼び捨てにしてもらう事にします」

名案だと頷き、期待を込めた瞳を向けてくる。

「まあ、それくらいなら……でも、いきなり名前で呼ぶのは凄く照

れる」

男がもじもじしても可愛くないでござる。

「私以外は大体名前で呼んでるじゃないですか」

普段から文以外は大体名前で呼んでいるから不満だったようだ。

「仕方ない……あ、文。話に戻るが、とにかくあいつが尋ねてきたんだよ。で、俺はこの前の権みたいに本当に文の知り合いだと思つて」

照れながらも名前で呼び、権の件で油断していた事を話している。

「権も恭司さんに会いに来たんですか？」

「来たよ。何ていうかその、失礼かもしれないけどわんこみたいだった」

撫でるのをやめると頭を押しつけて撫でてくれと言ったり、白狼天狗には見えなかった。

「あー……気を緩めると甘えたくなりますから仕方ないですね」

天狗のプライドで堪えているが、文も気を抜いたら権みたいになつてしまうかもしれない。

ちよつとその光景を見てみたい。

「権の事は置いておくとして、最初は普通に会話してたんだ。けど予想通り席を外した途端に強奪されたんだよ。笑いながら話していたのに、目だけは蔑むような好意的ではない感じだったから警戒はしてたんだけどな」

もしかしたら気のせいかもしれないと少しだけ信じたのが間違いだ

った。

「なるほど、それと逃げたら爆発するって言うのは本当だったんですか？」

「まさか。あれはハツタリ。そんな危ない事出来ないし」
爆発以上にやばい危険なシステムは搭載されていたが。

最後の一撃は高めたフィールでリアルにダメージを与えたと言っても間違いではない。

「恭司さんなら本当に仕掛けていてもおかしくないと思ってましたから意外です」

本当に爆発すると思っていたらしく、本当に意外そうな顔をしている。

「お前が俺をどんな目で見てるのがよくわかった」
ちよつとシヨックを受けた目で文を見ていた。

「それとあの、クリア・マインドとアクセルシンクローって言うていた事に関する説明をお願いします」

そんな視線をものともせず、メモを取りながら催促してくる。

「遊星……友人から聞いた事をまんま言うけど。加速する世界で見出せない、良い心、悪しき心を超越した揺るがなき境地。それがクリア・マインドらしい。あいつも誰かに聞いたらしいけど」
今なら言いたかった事が理解できると考えながら話した。

過去のカスカーレッド・デビル。

未来のカシューティング・スター。
過去と未来の力を手にしたのは必然だったのかもしれない。

「だから私に頼んだんですか。最速の私に頼むなんて、やっぱり恭司さんは目の付け所が違うわね」
何だか嬉しくなり、いつもの記者口調ではなく少し砕けた口調になっていた。

「あ、う、うん……。それとアクセルシンクロはクリア・マインドの境地に辿りついた時に出来るシンクロ召喚。もうアクセルシンクロをする機会はないだろうけど」
文を選んだのはたまたま居たからだ、なんて口が裂けても言えるわけがない。

アクセルシンクロをする為のD・ホイールはないし、文に抱えられてするのも今回だけにしてもらいたい。
遊星が聞いたなら間違いなく苦笑しそうだ。

ちなみにクリア・マインドとアクセルシンクロがあっさり成功したように見えるが、実際は過去に何度も失敗していて今回が唯一の成功だったりする。

マヨヒガでリフボードを使って試していた時は、速度が足りても恐怖心でクリア・マインドにすら到達できなかった。
アクセルシンクロに到ってはぶっつけ本番で成功と本当に運が良かった。

何度も振り落とされ叩きつけられても諦めない恭司を見て、危険な事はしてほしくないと思った藍様がこっそりリフボードを破壊していたりする。

その後もシューティング・スター・ドラゴン等についても根掘り葉掘り聞かれ続けた。

たまに天狗について聞いてみたが、人間を見下している天狗が多いのは確かだと教えられている。

ただあの天狗は特殊なだけで、あそこまで露骨な奴は居ないとも言われたのが救い。

「ありがとうございます！　今回もたくさん売れそうな記事が書けますよ！」
満足そうな笑顔を見せている。

「よかったな。あー、疲れたあ。そろそろ帰らないと暗くなるし…
…だけど帰る前にやっておかないと」

普段のようなふざけた感じではなく、真剣な目で文を見始めた。

「な、なんですか？」

文はこんな真面目な恭司を見た事がなかったのか、見つめられて動揺していた。

「おめでとぅッ！　お前になら渡してもいい。六竜は渡せないけどな」

文に木で作ったデッキケースを渡し、受け取った文がおろおろしている間に満足そうに頷き里に向かって歩き始めた。

「あつ、これって」

開けてみると中にはBFとBFのシンクロモンスターが納められていた。

文が取材に来る度に見ていたBF。
欲しいんだろうなと思って何度も渡そうとしたが、照れ臭くて面と向かって渡せなかった。
いい機会が巡ってきて、ついでにシンク口を渡すかどうかを見極めた事でようやく渡す事が出来た。

「あ……本当は何をしに恭司さんの元に向かったのか思い出しました。うん、事後承諾でもいいですよね」
デッキケースをしまってから、ふわりと浮かび上がった。

そのまま加速して、去って行くこととする恭司を強引にキャッチして飛んでいく。

「な、何をする貴様ー！」
いきなり背後から掴まれ、空高く舞い上がられてびびっている。

「実はあの時私が居たのは恭司さんを宴会に招待する為だったんですよ。今まですっかり忘れてました」
あははー、と笑いながらも加速して博麗神社に向かっている。

「ちよっ……い、息が……」
さっきとは違い加護もなく、呼吸が出来ない。

「さあ、今日は吞みますよー！」

遂に到達した揺るぎなき境地。

抱えられて到達という今後誰も為しえない奇跡。
またいつかアクセルシンク口をする日が来るかも。

続く。

Leave all Behind (後書き)

つてわけで通過地点に到達。

文もクリア・マインドの境地に到達してる気がする。

こんなクリア・マインドへの到達の仕方は恭司くらいしか居ないんじゃないか。

墓地のチューナーで攻撃力を上げるスカーレット・ノヴァは過去の力。

デッキトップから五枚見てチューナーの数だけ攻撃回数を増やせるシューティング・スターは未来の力。

アクセルのメダルが欲しくてガチャを六回。

サソリ、エビ、カニ、新一号、超クライマックス、リュウタ。

前回はファイズアクセル狙ってたのにプトティラしか出ないし、これは酷い。

新たなフレンド(前書き)

ふらふらと自由に。

この出会いは大きい。

わんわんお！

新たなフレンド

「あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！俺は『川の前でカツパ卷きを食べようと取り出したと思っただけ』のまにか目の前に現れた少女に食べられていた』。な……何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった……頭がどうにかなりそうだった……催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……」

ピクニック感覚で妖怪の山近くの川まで来ていたが、何故かいきなりポルポル状態。

「ごめんごめん。声をかけようと思ったんだけどね」
謝っているが食べる手を止めない。

帽子にツインテールな青い髪、ポケットがたくさんある妙な服を着た少女。背負ったりリュックが親近感を沸かせる。

「ちくしょう、可愛い女の子には強く出れない自分が憎い！でもそんな紳士な自分が大好きだ！お味はいかがですか？」
春だからか頭がお花畑なのかもしれない。

「ごちそうさま、凄くおいしかったよ。梅ときゅうりっておいしいんだね。……えっと、ようこそ鉄恭司」
貴重な海苔を使って作ったカツパ卷きを綺麗に平らげて満足そうだった。

会いたかったんだ、とにこにこしながら手を掴んでいる。

「文の新聞って影響力それなりにあるんだな」

あの天狗の一件以来、妖怪の山の天狗達にも一目置かれていたりも。

「うん、それに盟友については色々聞いてるよ。ああ、そうそう。」

私は河城にとり、よろしくね」

自己紹介をして掴んだままの手を上下に振っている。

人見知りをする彼女が恭司を普通に受け入れているのは、椀や文に飽きる程に話を聞かされていたから。

楽しそうにタイピングをしている写真を見せられたり、手先が器用でデュエルディスクを直していると聞かされて興味を持ったのも関係している。

「さいですか」

「それより色々聞きたい事があるんだ。だから私の家に行こう」
早く早く、と手を掴んだまま引つ張り始めた。

「えっ、でも友達に噂されたら恥ずかしいし……」

何故照れているのかわからないが、もじもじしている。

「いいからいいから」

にとりらしからぬ積極的な態度で引つ張っていく。

にとりの家

「今日からにとりはフレンドだ」

互いに座ったまま肩を組んでご機嫌。

「あはは、ちょっと照れるよ」
嬉しそうに肩を組んでいた。

あの後にとりの家に連れていかれ、技術の知識を交換したらしい。
恭司は河童の科学力に驚き、にとりも外の技術と恭司のモーメント
に関する技術に驚いていた。
今ではすっかり意気投合し、肩を組んで二人してニマニマするよう
になっている。

「これでD・ホイールも作れたらいいんだけどなあ」

「D・ホイール？」

「そうだな……よし、にとりはフレンドだし教えてあげよう。D・
ホイールってのはな」
詳しく説明し始めた。

……

……

……

……

「ってわけなんだ。ただこの世界じゃフレームやらを組み立てるの
に使うパーツがないから……聞いてる？」

恭司の説明を聞いて、にとりは目をキラキラさせている。

「聞いてるよ盟友！ それなら私が手伝うから一緒に作ろう！」
最後の方は聞いてなかった。

「いや、だから素材がないから無理なんだってだよ」
エンジン等は何とか出来ても、幻想郷では部品が集まらない。

この時代で高所から飛び降りても壊れないパーツは外にもないような気がする。

「大丈夫。探せばもしかしたらあるかもしれないよ！ なかったら作ればいいんだよ！」
早く作ってみたいのか凄く興奮している。

「いや、バイクのタイヤとかがまず手に入らない……あれ、にとりもデュエリストだったのか？」
何とか冷静にさせようと宥めていると、部屋の片隅に置かれたデッキとデュエルディスクが目に入った。

「え？ そうだよ」
最近始めたんだ、と見せられたデュエルディスクはしっかりとカスタマイズされていた。

「それじゃあ、デュエルしよう。俺が勝ったら今日の素材集めは諦める事」
カバンからデュエルディスクを取り出して装着し、デッキをセットした。

「それなら私が勝ったら今日素材集めしようね」
にとりもデュエルディスクを付け、デッキをセットした。

そして家から出て、互いに対峙している。

「楽しいデュエルにしようぜ」

何かに見られているような気がして、きよるきよるしながら言っている。

「うん、よろしく。いくよ！」

「デュエル！」

「俺のターン、ドロー！ プロト・サイバー・ドラゴンを召喚し、カードを一枚セットしてターンエンドだ」

様子を見るために先行を選択し、プロト・サイバーで様子を見る事にしたらしい。

ATK1100

「私のターン、ドロー！ 未来融合 - フューチャー・フュージョンを発動！ 極戦機王ヴァルバロイドを指定してデッキからドリルロイド、サブマリンドロイド、ステルスロイド、トラックロイド、シヤトルロイドを墓地に送るよ。そしてエクस्प्रेसロイドを守備表示で召喚！ 召喚に成功したから墓地に存在するドリルロイドとサブマリンドロイドを手札に加えさせてもらっね」

にとりはロイドデッキのよう順調に揃えていく。

DEF1600

「何だか懐かしいな」
翔の事を思い出したはずなのに、何故か途中からBMGを思い出してニヤニヤしている。

「魔法カード、ビークロイド・コネクション・ゾーンを発動！ 手札のスチームロイド、サブマリノロイド、ドリルロイドを融合！ 来て、スーパービークロイド・ジャンボドリル！」
ニヤニヤしている恭司を尻目に、巨大なドリルをつけた土竜のような機械のモンスターが融合召喚された。

ATK3000

「あ……しまった」

「プロト・サイバー・ドラゴンを攻撃！」
ドリルを回転させながらプロト・サイバーに迫っていく。

「リバーズカードオープン、アタック・リフレクター・ユニットを発動。俺は自分の場のサイバー・ドラゴンをリリースし、手札がデッキからサイバー・バリア・ドラゴンを特殊召喚する」
宣言と共にプロト・サイバーが消えていく。

「でもそれはプロト・サイバー・ドラゴンだよな？」
サイバー・ドラゴンじゃないし発動できないんじゃないか、と不思議そう

に見ていた。

「プロト・サイバー・ドラゴンは表側表示で場に存在する限りサイバー・ドラゴンとして扱うんだ。現れる、サイバー・バリア・ドラゴン！」

サイバー・バリア・ドラゴンがジャンボドリルの前に立ちはだかった。

ATK800

「えっ……あ、攻撃続行！」

一瞬攻撃表示で出した意図が読めず驚いてしまったが、そのまま攻撃を続行。

「バリアー」

しかしやる気の抜ける恭司の宣言で何故か攻撃が防がれてしまった。

「あれ？ どうして？」

戻ってきたジャンボドリルを見て不思議そうにしている。

「サイバー・バリア・ドラゴンはこのカードが攻撃表示の場合、1ターンに一度だけ相手モンスター一体の攻撃を無効にする事ができるんだ。よってジャンボドリルの攻撃は無効！」
とりあえず大ダメージをうまく回避した。

「うっ、先制攻撃できると思ったのになあ。それじゃあ、カードを二枚伏せてターンエンド」
手札を全て使いきってターンを終了させた。

「俺のターン、ドロー。サイバー・ラーバアを召喚し、カードを一枚伏せてターンエンド」
地味に融合が出来ず、時間稼ぎをしている。

ATK400

「私のターン、ドロー！ サイバー・ラーバアを攻撃！」
シンプルに攻めてきたが

「またサイバー・バリアで攻撃は無効だ」
これまたシンプルに防がれていた。

「やっぱりダメかー。ターンエンド」
通してくれないかと思って攻撃してみたようだ。

「俺のターン、ドロー。うーん……サイバー・ドラゴン・ツヴァイを召喚してエクस्प्रेसロイドを攻撃。相手モンスターに攻撃する時、ダメージステップの間攻撃力が300ポイントアップする」
ちまちまと攻撃をしてエクस्प्रेसロイドを破壊した。

ATK1500 ATK1800 ATK1500

「くっ」

にとりに衝撃が襲いかかっている。

「うん、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！ 未来融合が発動したニターン目のスタンバイフェイズ、極戦機王ヴァルバロイドを融合召喚！」

強大なプレッシャーを放ちながらヴァルバロイドがキングジョーのように登場した。

ATK4000

「それが場に出るのを初めて見た……」

恭司は呼び出したのを見た事がないらしく、感動している。

「ヴァルバロイドでサイバー・ドラゴン・ツヴァイを攻撃！」

特に効果はないバニラ融合体だが攻撃力は半端ない。

ちょっと不遇なモンスターでもあった。

「サイバー・バリアの効果で攻撃を無効にする！」

「ジャンボドリルでサイバー・バリア・ドラゴンを攻撃！」
にとりはもう止められないのを知っているから厄介なバリアを倒しにかかった。

「ドリルは男のロマ……うああっ!!」
低攻撃力のバリアを軽くドリルで貫き、大ダメージを受けた。

LP4000 LP1800

「ターンエンド！ どうだ盟友！」
思ったように運べて嬉しそうにこちらを見ている。

「ち、ちくしょう……ドロー！ 未来融合・フューチャー・フュー
ジョン - を発動。キメラテック・オーバー・ドラゴンを指定し、サ
イバー・ドラゴンを含む任意の枚数の機械族を墓地に送る」
機械族を選び墓地に送り始めた。

サイバー・ドラゴン x3
プロト・サイバー x2
サイバー・ドラゴン・ツヴァイ x2
リフレクトバウンダー x3
サイバー・ラーバ x2

「そしてハリケーンを発動。場の魔法・罫を手札に戻す。よってヴ
アルバロイドは破壊される！」

サイバー流は守つたら負ける、攻める。

「あつ！」

未来融合が戻されヴァルバロイドが破壊されてしまった。

「さらに俺は場と墓地の光属性・機械族のモンスターを全て除外する事で、手札からサイバー・エルタニンを特殊召喚する」
「凄手数にモンスターが墓地から除外されていく。」

サイバー・ドラゴン×3

プロト・サイバー×3

ツヴァイ×3

サイバー・バリア・ドラゴン×1

リフレクトバウンダー×3

サイバー・ラーバア×3

計16体

「来い、サイバー・エルタニン！」

空に星が輝き、爆音と共に巨大な機械竜の顔が現れた。

ATK?

「攻撃力が……」

何故？なのかわからないから不思議そうにしていた。

「サイバー・エルタニンの攻撃力と守備力は特殊召喚時に除外したモンスターの数×500ポイントになる。そしてサイバー・エルタニンが特殊召喚された時、場のモンスターを全て墓地に送る。コンステレイション・シージュ！」

巨大な顔の回りに浮かんでいるビットのような小さな機械竜の放ったビームでジャンボドリルが墓地に吹き飛ばされていく。

ATK？ ATK8000

「攻撃力8000……はっ」

文に聞かされていた恭司のワンショット率を今更思いだしていた。

しかし思い出しても既に手遅れ、サイバー流チートを相手にここまでするだけでも称賛できる。

「サイバー・エルタニンでダイレクトアタック！ ドラコニス・アセンション！」

僅かだが絶対王者のフィールを感じる……気がする。

回りに浮かんでいたビットのような小さな機械竜が本体の巨大な顔に接続されていく。

そして本体が口を開くと巨大なキャノンが存在しており、フルチャージしたエネルギーをビームに変えてにとりに向かって容赦なく撃ち出した。

「っ！……きゃああああっ！……」

迫り来るビームに怯み、あまりの恐怖に逃げようとしたがそのまま飲み込まれていった。

LP4000 LPO

「盟友のサイバー流について教えてもらってたのすっかり忘れてたよ……」

その場で仰向けに倒れて咳いている。

「効果破壊されないジャンボドリル、さらにヴァルバロイドを呼び出すにとりは凄いのよ。リミッター解除を引かれなくてよかった……」
「ボンドエンドよりはマシだが、低レベルモンスターで攻撃力6000の貫通をくらったらほぼ即死。」

「でも残念だなー。今日は探しに行けないんだよね」
にとりの家に戻りながら話している。

「探すのは違う日な。……しかし、さつきから誰かに見られてる気がして落ち着かない」
周囲を見回しても川とか山しかないのに、誰かに見られている気がして仕方がない。

「盟友は地味に鋭いよね。私の仲間がこっそり見てるのに気がつくんだもん」

「マジかよ」

光学迷彩の話は聞いていたが、ここまで凄いと信じられなかった。にとりの家に入ると感じていた視線がなくなり、納得せざるをえないが。

「だから俺はそう言ってやったんだ。……あ、そうだ。にとり、お前のデュエルディスクを貸してくれ。アップデートしてやるよ」
お茶を飲みながら楽しく会話をしているふと思い出し、ノートPCを取り出した。

「はい」

デュエルディスクを手渡し、興味津々に隣から覗き込んでいる。

デュエルディスクを接続して更新していると、にとりが隣に座ってくる。

ノートPCをちらちらと見ているがあげるわけにはいかないのですル。

数十分後

「さ、流石相棒！ 最近無下に扱っていたがやっぱり頼りに……相棒おー！」

相棒である恭司を守るうと、自ら実体化したダンディライオンが尻尾で弾き飛ばされて壁に激突していた。

にとりと色々楽しく話していたら唐突に訪ねてきた非番の椀。

ここにいるのは能力で知ったらしく、にとりの視線を気にせず抱きつき押し倒し胸元に顔を擦り付けていた。

そのあまりに可愛い行動で理性が限界に達しようとした時に現れたダンディライオン。

椀を引き離そうと四苦八苦したがどうにも出来ず、拳げ匂に尻尾で

ぺしんとやられてしまった。

「はいはい、離れた離れた。誇り高い白狼天狗のこんな姿を見られたら大変でしょ」

にとりが無理矢理引き離してくれた。

「久々に出てきたのに大した活躍もなしに気絶するとかカワイソス」
実体化したダンディライオンを抱えて憐れみの目を向けている。

「ま、まだ頬を舐めてないの！ 猫の匂いも消してないんだから放して！」

じたばたしながらおかしな事を口走っている。

「何言ってるの!？」

暴れる椀を必死に抑えながらにとりは驚いていた。

「何と言うカオス空間。さっきまでの語り合いが嘘みたいだ」
何かもう色々諦めていた。

河童の少女との出会いはきつといつかD・ホイールが作られるフラグ。

そして早苗並に振り切り始めた椀。
ちよっと爆発してもらえないかな。

続く。

新たなフレンド（後書き）

向こうで色々やればこっちでも色々出来るのに気がついた。
特に最終巻のあのありえない融合体を出せたりも。

きゃっとピングが耳から離れない。

銀河眼の光子竜、スターダストの進化系と言われても不思議じゃない見た目してたなあ。

BD・DVD発売特別編 大暴れのK/色々やったようです(前書き)

分かる人にだけ分かる発売日記念。

アニメに近いが平行世界。

やりたい放題やったらしい。

BD・DVD発売特別編 大暴れのK/色々やったようです

恭司の部屋

「あー、疲れたあ……」

溜め息を吐きながらスキマから出てきた。

「流石私のマスターでしたね。絶対に離れません」

「恭ちゃん格好良かったです！」

ラインフォース姉妹も続いて出てくる。

「ふっ、向こうの私はこの私より遥かに弱かったな」

「向こうの私は胸が小さかったわね」

シグナムとシャマルが優越感に浸りながら出てきた。

「ザフィーラ、恭司は凄かったな。無駄にある馬鹿魔力を解放するとあんな事が出来るなんて開いた口が塞がらなかったぜ」

「確かにかつての怒りを思い出して魔力をあんなに増幅させる事が出来るなんて思わなかったな」

ヴィータとザフィーラも出てきてようやくスキマが閉じられた。

「変なスキマに足を踏み入れなければこんな疲れなかったのになあ
慣れない事をたくさんしてきたから疲れている。」

慧音を除いた全員でピクニックに行き、楽しんでいる時にスキマを

発見。

無視しようとしたら躓いてスキマに落下。

慌てたリインフォースが腕を掴むも引き込まれ、後は芋蔓式に皆引きずり込まれていた。

「まさかスキマの先が異世界で、その世界の私達がいるなんて予想できませんでしたね」

「でもリインだけ居ませんでした……」

どうやら異世界に通じたスキマだったらしく、リリカルな世界に行っていたらしい。

対面した時は互いに物凄く驚いた事だろう。

「あのリンディって人は頭が切れる。敵対する意思がないって分かったら、唐突に現れた俺達も使うんだもん」
美人だったし、と思い出して頷いている。

「メガトン魔導キャノンを笑顔で連発して防衛プログラムを軽々吹き飛ばした主を見て固まってましたよ」
リインボーヴェールを身に纏ってずっと恭司のターン。

「あー……沸々と込み上げてきた怒りで我を忘れて連発してた時か。リインフォースとリインが魔力を回してくれたからな」
一発一発が凄まじい威力なのに連射して単独で防衛プログラムを破壊した超チートマン。

百式が使用していた連発不可能なメガ・バズーカ・ランチャー、あ

れが連発できるようになったと想像してもらえたら分かりやすいかもしれない。
ちなみに怒りの理由は世界は違えどかつて自分を侵食した奴が目の前にいたから。

「恭司君の魔力はあの八神さんと同じくらいだったわね」

「俺には基準が分からないから何とも言えないわ。リンカーコア？
つてシャマルが前に言ってたやつがあの世界に合わせて出来ちゃったんだっけ。超チートマンだ、俺ー！」
デバイスの使用が可能になって歓喜、河童と一緒に開発する気満々だった。

間違いなく河童達の魔改造で予想外の物が完成すると思う。

数十分後

お茶を飲んだり、お菓子を食べたりしてだらだら過ごしている。

「そっぴい、なのはちゃんとフェイトのキラキラした目が物凄く心に痛かったなあ。俺はそんな立派な人間じゃないのに」
確かに。

アニメによく似た世界だった事に気がついていたが、早く幻想郷に
帰りたくてそれどころじゃなかった。

うわ、よう、よっぴい。

が恭司のあの世界での感想。

伝説レベルになるとちよつとした行動で幼女が勝手に好意を持つようになるらしい。

異世界でも変わらなかったようで安心したが、いつも貴方をベアド様が見てますよ。

「あの世界の私が消滅を選択しようとした時の台詞が原因でしょうね。私も言われたかったです」

素敵でした、と頬に手を当てて照れている。

「『逃げるなあっ!!! 生きる事から、逃げるな! これは……命令だ!』です。リンもあのキリツとした顔で叫ぶ恭ちゃんにメロメロです!」
膝の上できゃーきゃー言って抱きついている。

「何であの世界のリインフォースが俺の言葉で踏みとどまったのか不思議でしかたない」
軽く防衛プログラムを倒した人間で異世界の書の主だし、何か策があるのかもと思われていたのかもしれない。

「でもあの私はダメです、壊れています。マスターに色目を使いましたし」

自分を柵に上げ、異世界の自分は壊れているとか言っている。

「八神さんが困ってて俺はかなり申し訳ない気持ちでいっぱいだったよ。お前の直ったプログラムを基盤に修正プログラムを作ったのが間違いだっ」

クールで美しかった彼女がこっちのリインフォースのようにネジが二、三本外れてしまっていた。

その事に関して恭司が皆にしたジャンピング土下座は半端なく神々しかった。
焼き土下座もしなければいけないかと覚悟を決めたが、消滅するよりはいいと笑って許してくれている。

「何故あの八神はやてに執着せずに私のマスターに執着したのか不思議です」

私のマスターなのに、と怒っていた。

「お前のプログラムが基盤だからだろうが。二人で足の引つ張りあいをしていたのは何か面白かったけどな。……しかし他にも色々ありすぎて疲れたわ」
たまたま治していなかった吸血痕でひと悶着があったり、迎えが来るまでどう生活するか等。

数日間毎日矢面に立たされ続け、恭司は疲れきっていた。
泊まる場所を提供していただいた方々に感謝を。

「そういえばマスター、何回か男性陣だけで集まっていましたけど何やってたんですか？」

「それは秘密。何故ならその方がカッコイイからだ！」
ビシッと決めていた。

クロノ、ユーノ、恭司、ザッフィー一号・二号＋ で楽しい時間を過ごしていたらしい。

主に身の回りの強い女性陣に対する愚痴だったり、魔法について教

わったり。

恭司はバインドが得意だったらしく、それを見出だしてくれたユーノとかなり仲良くなっていた。

仲良くなりすぎて一部の乙女な方々にユーノ×恭司とか恭司×ユーノとか邪推されていたの知らない幸せ。

「男の付き合いってやつですね。ザフィーラを締め上げて確認します」

ザフィーラがびくっ！としたのが視界に入った。

「シグナム一号が俺と腕を組んでいると向こうのシグナム二号が怒って喧嘩になって困ったよな。こいつ自重しないし」

ザフィーラを締め上げに行ったリインフォースと見学に付いていたツヴァイを見送り、シグナムの脇腹をつつきながらシャマル達に話しかけた。

ヴィータが間に入って仲裁しているが、どうやらヴィータも何をしていたのか気になっていたらしく段々ザフィーラの味方ではなくなっていくのが面白い。

「うひゃあっ！ な、何するんですか主！」

油断していたからか凄いい声を出して驚いている。

「自分と同じ姿をした者が愛戦士とか言ってたのが気に入らなかつたのよ」

「何かそれだとこのシグナムと正反対じゃないか。そんなのシグナ

ムじゃないよ！」

脇腹を隠しながら少し距離を取ったシグナムを見て言い切った。

「このシグナムだって最初の数週間は向こうのシグナムみたいだったでしょう？」

シヤマルに言われてハツとした。

「た、確かにそうだった。まあ、今のシグナムのが俺は好きだからいいんだけどさ」

「ほ、本当ですか！」

少し真面目にならないといけないうか、と悩んでいたから恭司の言葉がとても嬉しかったらしい。

「うん、好き好き大好き超愛してる。さて、思い出話はここまでにして俺はちよつと出掛けてくる」

そう言って部屋から出ていった。

異世界で出会ったのは強い女の子達。

それすら上回るチートマン。

知らず知らずに改変してしまったがきつと平行だから大丈夫。

おしまい。

BD・DVD発売特別編 大暴れのK/色々やったようです(後書き)

本人達を出さずに書くところになった。

彼はロリコン エリートロリコン レジェンドロリコンと進化し続けてる。

BD・DVDにはパックにも配布パックにもなかったトウルースを付けてほしかったなあ。

何でまたSin紅眼なんだよ……。

だらだらする者達(前書き)

ごろごろして。

がぶがぶされて。

セクハラしようとする。

だらだらする者達

「最近俺の部屋にみんなの私物が転がりすぎだと思っの寝転がりながら漫画を読んでいる妹紅に呟いている。」

「赤い荒縄練習してみようかな……え？ 何か言った？ もはや自分の部屋とでも言えるくらいにくつろいでいる。」

「何でお前もリボンとか置いていくんだよ」
妹紅のリボンもいくつか部屋にあり、棚に置かれていた。

「別に置いていってもいいですよ。……あ、だからって変な事に使わないでよね」

「俺はどれだけ上級者なんだよ……。一番意味が分からないのが慧音の予備の筆がここにある事なだけだな」
恭司は外で使っていた筆記用具があるから筆は使わないのに何故かある。

「じゃあ、これは誰の？ カエルの髪留めみたいだけど」
妹紅も部屋に置いてある物を手に取って見ている。

「早苗しかいないだろうよ。油断すると早苗は私服を置いていくから油断できない。アリスなんて人形忘れていくし」
可愛らしい人形を無下に出来ず、仕方なく棚に飾ってある。

「これってあのメイドのナイフ？」
壁に掛けてある上着からはみ出た柄を見ている。

「ああ、咲夜のだな」
転がしておくと危ないから自分の上着のポケットに入れているよう
だった。

「このネクタイは？」
拾い上げている。

「小悪魔さんからお揃いですってプレゼントされたんだよ。言わせ
んな恥ずかしい」
何か凄く照れていてイラツとする。

……

……

…

「今度来たらみんなに返さないとな」

他にも訪ねてきた者達の忘れ物がたくさんあった。

みんなワザと忘れてきている事に気がついていない。

それを口実に遊びに来れるから毎回何かしら忘れていつている。

「あ、そうだ。早苗の服は返す前に妹紅が洗ってくれ。ちょっと最
近変態ロードに入ってたあいつ怖いんだよ」
類友ですね、わかります。

「えー、やだー。変態ロードってあの娘何したのよ」

「服を何着か置いていつてるからこの前持って帰るように言ったん

だ。そうしたらその服に顔を埋めて俺の匂いがするって
早苗だけはそれが目的で服を置いていつているらしい。

たまに神奈子様の服や諏訪子様も一緒に持ってきているのを知
らない。

奇跡の力の無駄遣いすぎる。

「いいじゃないそれくらい」

害はないし、とか無責任な事を言っている。

「他人事だと思って……。まあ、あの暴走具合に目を瞑れば美人だ
し、スタイルいいし悪い気はしないけどさ」

「ふん、あんな脂肪の塊を二つもぶらさげてるのどこがいいんだ
か……」

持たざる者の妬みだった。

「妹紅、何か輝夜と同じ事言ってるぞ」

先日思わず永琳の胸を凝視していた時に輝夜が頬を引っ張りながら
言っていた。

「げっ、あいつと同じとか絶対に嫌だよ」

本当に嫌そうな顔をしている。

「だからって死合うような喧嘩はするなよな。最近はお喧嘩だけで
微笑ましいって永琳が言ってたが」

改めて殺し合いについて聞いた時はかなり驚いたが、特に二人を避
けようとは思わなかったようだ。

「あいつにだけは恭司を渡さないからね」

そう言うつと極自然に腕を絡め、ぎゅーつと顔を腕に押し付け始めた。

「輝夜もそれと同じ事言ってたし、そうやって腕を絡めてくるのも同じだぞ。実は仲良しだったりしない？」

ただし妹紅は右腕、輝夜は左腕と細かい違いもある。

「私の物ってマーキングしておかないと。あー……がぶっ」
袖を捲り、がぶつと腕に噛みついた。

「ちよつ、やめて！ ぼくはわるいデュエリストじゃないよ！」
ぶんぶん振っているが離れず、歯形がしっかりとついてしまった。

人里

あれからさらに妹紅に腕をがじがじと噛まれて痕をつけられたり、恭司の怒りが有頂天で妹紅をくすぐったり、二人がイチャイチャしてるように見えた慧音に本気で頭突きをされたりと色々あった。そしてそのほとぼりが冷めるまで里をぶらぶらする事にしたらしい。そして……

「何かお菓子とか与えていたら妙な妖精の女の子に懐かれました。里の人達のまたかって目が痛いです」

クールに去ろうと背を向けたら、その背に抱きついて離れようとしてない。

「お兄さん、春ですよー」

おんぶ状態で嬉しそうに背中にへばりついている。

「この子はリリーホワイトって春告精か。うーむ、既に妖怪の山の方に行ったってあっきゅんに聞いてただけだな」
何度言っても離れてくれないので仕方なく、仕方なく家に連れ帰っていた。

牛尾さん、こいつです！

慧音宅。

「なるほど、俺が一番春っぱいから戻ってきたと意味が分からないが頷いて話を聞いている。」

「はい。年中春みたいで一緒に居たいなって思って戻ってきたんです」

頭が春でおめでたいって事ですねわかります。

「会ってないのに？」

その時期はマヨヒガにいたからリリーに遭遇していなかった。

「私は春の場所が分かるんです！」

「そっか」

お菓子を食べるリリーを観察している。

数十分後

「俺の巧みな話術で春告精を仲魔にした。タイトルをデビルサマナ

「鉄恭司に変えてもいいんじゃないか？」
幼女を巧みな話術で口説くとかマジロリコン。

「えへへ、今後ともよろしくお願いします」
そう言い、膝に座って胸元に顔を擦り付けている。

「……しまった、また誤解から酷いレッテルを張られてしまう。でもこれは妹的な意味だからセフセフ」
第三者から見たらアウアウ。

「恭司さんは春の匂いがいいです」
顔を押し付けている姿は可愛らしいが、誰かに見られたら非常に危険。

「太陽とか春とかよく分からない匂いがするって言われてもなあ。
ルーミアに至ってはおいしそうな匂いって言うしなあ」
それがいいのかが分からないが、ルーミアはまだ少しだけ恭司が食べたいらしい。

「春ですよー」
ダンディライオンにも春を届けてくれたらしく、元氣百倍で部屋の中を精霊状態で走り回っていた。

「膝で楽しそうにしているリリーが可愛くて仕方がない。ところで君は春以外って何をしているのかな？」
ほとんど春にしか見かけないと聞いていて、気になったので尋ねている。

「えっと、主に家にいます。別に春しか出てこないわけじゃないですよっ？」

とりあえず年中会えるらしい。

「え、マジで？ 春オンリーだと思ってたわ。それならたまには遊びにおいで、お菓子くらいなら出してあげるから。相棒も待ってるって」

実体化したダンディライオンも頷いている。

「はい！ 恭司さんは春っばいですから遊びに来ます！」
それはもう素敵なお顔で答えていた。

「妖精の友達はこれで六人目かな。スプリングマンってロックマンにいたよね、バネの方だけど」
リリーの帽子を取り、スプリングマンが頭を撫で撫でしながら呟いた。

夜

「……って事があつたんだ」
夕方頃にリリーが帰り、三人で晩御飯を食べながら話している。

「恭司がよく妖精を餌付けするからか、お菓子を持っていけば妖精の悪戯を回避できると噂になっていたな」
年中八口ウインみたいで楽しそうだった。

「だから何人かに拝まれたのかな。いきなりでびっくりしたけどもお菓子を与えて被害をうまく逃れられた人に拝まれていたらしい。

「小さい女の子を見守る会とか言う危ない連中からは神様みたいな扱いされてるみたいだけどね」

妹紅がぼそりと呟いていた。

「何か言ったか？」

「ううん、何も。今日のこれ、甘くておいしいね」
大学芋を食べて誤魔化している。

「大学芋って言うんだ。一時期ハマって死ぬほど素材があるから、
また作るよ」

ロリコン扱いされていたのに気がつかず、嬉しそうに大学芋をプッシュ。

恭司の部屋

「お客さん凝ってますねー」

布団にうつ伏せになった慧音をマッサージ中。

「ああ……」

心地良さそうにマッサージされている。

「おっと手が滑つ……たりはしてないです、はい」

ちよっと手が滑りそうになったが、妹紅の手の平が目の前に来て滑らなかった。

「私も手が滑って燃やしそうだったよー、あははー」

とか言いながら恭司が余計な事をしないように見張っている。

「あ、あははー」

冷や汗を流しながら一生懸命マッサージを続行。

「触れられているだけで心地良いのにマッサージまでしてもらえて最高だな……」

慧音はまさにへヴン状態、ふにゃんふにゃんだった。

「慧音が終わったら私もやってもらおうと腕をぐるぐる回して凝ってますアピール。」

「ひゃっほう、妹紅にはセクハラし放題じゃないか。性欲を持て余す」

普通に変態だった。

「もしやったら燃やすからね」

……

……

…

「明日はにとりと素材集めをする日だったな。この前はまさか壊れたD・ホイールが見つかるなんて思わなかった」

某キングが盗んで壊したあれが何故か無縁塚にあっただらしい。

「結局分解して一から作り直しなんだけど」

独り言を呟きながら準備を済ませて布団に入って寝てしまった

帰ってきてからこんな日常を繰り返している。

続く。

だらだらする者達（後書き）

さり気なくリリーを懐柔。

安かったから買ったけど使い道がないカードってあるよね。
この前スキエルが一枚三百円だったからつい三枚買ったけど使い道がない。

空を駆ける？（前書き）

訓練。

ガンダム。

もふもふ。

空を駆ける？

「キラッ」

爽やかで一部の女子がちょっとドキッとしそうな笑顔を決めている。

開始早々全国のランカファンに怒られそうな事を平気でやるのが我らが主人公。

現実逃避をしているだけだから許してあげてほしい。

こんな事になったのにもちゃんと理由がある。

それはある晴れた春の日の事……

「今日から空を飛べるように特訓をしましょうね」

ほわほわした笑顔で無理難題を押しつけてくる亡霊のお姫様。

「私達がいれば心配無用よ」

素敵な微笑みで逃がさないように逃げ道を塞ぐスキマ妖怪。

「恭司さん、しっかり剣術の訓練もしてましたか？ 飛ぶ為の特訓が終わったらそっちの方も見ますからね」

意外と厳しい半人半霊の従者。

「すまない、紫様達を私だけでは止められなかった」

ふさふさした尻尾のスキマ妖怪の式。

慧音達との楽しい朝食を終え、休みだからと部屋でデッキを組んでいる所にスキマから四人が現れていた。

とりあえず四人の発言を無視してデッキを組んでいたが、ゆゆ様と

紫がべつたべたと若い恭司の身体をまさぐり始めてようやく反応を返した次第。

「真っ赤になるくらい恥ずかしいならやるなつてば。てか妖夢と藍は止めるべきだろ。君達の主のご乱心ですよ?」

二人の手を掴んで止めながら口を開いた。

「ま、まあ、私はやめた方がいいわつて紫に言ったのよ?」

「わ、私だつて幽々子が見てみたいつて言ったからなのよ?」

二人共いきなり握られた手に慌てている。

「あ、いえ、その……」

ドキドキしながらも妖夢はガン見していた。

「私は気にしないさ」

藍様はまさぐられている様子を楽しそうに見ていたらしい。

「で、何しに来たんだよ」

ぶつぶつ文句を言いながらカードを片付けて四人と向き合った。

「ねえ、何も使わないで空を飛べるようになりたくない?」

「リフボードなしでつて事? そりゃ飛べたら便利だけどさ」

部屋に置かれたテーブルにお茶菓子と五人分の麦茶を出しながら聞き返した。

「ええ、そうよ。だから特訓しましょう?」

紫が交渉を担当している間、ゆゆ様はお茶菓子の羊羹を嬉しそうに頬張っていた。

妖夢と藍も甘い物は嫌いじゃないらしくニコニコしながら食していた。

「内容によるけど、ビギナーコースでお願いします」

「決まりね。それじゃあ、まずは……」

四人による説明が始まった。

……

……

…

「キラッ じゃなくて、ほらがんばって！」

紫が手でキラッ とやりながら応援している。

たくさん練習したのか普通に可愛いのが腹立たしい。

慧音に許可をもらい、庭で必死に特訓させられている。

「うっさいわ！ コントロール出来ずに地面に埋まる恐怖がお前に分かるか！」

鼻血を出しながら現実逃避をしていた恭司がこちら側に戻ってきた。

ある程度の高さまででは行けるが途中でパニックになり制御できずに落下、そして地面に漫画みたいな穴を開けている。

それを繰り返して嫌になってきたらしい。

魔導師の力で身体の丈夫さを上げているから鼻血程度で済んでいるが、何もなかったらきつと死んでる。

「恭司、怖がつちゃダメだ。逆に考えるんだ『落ちちゃってもいいさ』と考えるんだ」

藍様が一生懸命教えている。

「そんなの嫌に決まってるだろう!？」

何度も激突して恐怖心MAXで流石にキレていた。

「仕方ないな……。もしちゃんと飛べるようになったら私とお風呂に入る権利をあげよう」

どうだ?と様子を見ている。

見かねた藍様が恭司にご褒美をちらつかせ始めた。

その場にいる恭司を除いた三人が藍の提案にびっくりしている。

「でも藍は俺と橙が入っていると勝手に入ってくるじゃん」

水を嫌がる橙も恭司となら楽しそうに入るから、滞在中のお風呂係になっていた。

「いや、それは……。な、なら添い寝を！」

「それも布団に勝手に入ってきてたよな」

あの生活を思いだし、藍様を封殺していた。

「くっ……無念」

Orz ころなっていた。

「どうせならまた思いつき甘えさせてもらいたかったなあ」
最近甘えられる事はあっても、自分からは甘えていないから甘えなかった。

二人の会話に聞き耳をたてていた三人が、頭の中で甘えられている自分を想像して悶えている。

藍様は一度思いつき甘えられているからか思い出してデレデレしていた。

「アアアアイ……」

そんな四人を放っておいて再び浮かび始める。

「だ、ダメよ？ まだ妖夢が起きて……」
どんな甘え方をされているんだろう。

「キャアアアン……」

浮かぶスピードを上げていく。

「し、仕方ないわね。また私の膝でゆっくり……」

「フラアアアアイ！」

無駄なクリア・マインドでかなりの高さまで飛んでいても平静を保っている。

「ふふふ、妖夢お姉ちゃんって呼んでもいいんですよ」

「まさか初日からあんなに飛べるようになるとは思ってもみなかったな。……あの調子なら一ヶ月くらいあれば自由自在に飛べるようになりそう」

妄想している三人を放置し、藍様は空を見上げながら呟いている。

上空

「フウウー……初めて………空を飛んじまったア~~~~」

でも想像してたより、なんて事はないな」

腕を組んで余裕そうに浮かんでいる。

「恭司、私の手をしっかりと握って飛ぶ感覚を掴むんだ」

いきなり藍様が上がってきて手を握ってきた。

「キヤー、藍様素敵ー！　ところであの三人は？」

実は浮かんだはいいが身動きが取れなかったので藍様の登場に喜び、残りの三人を考える余裕ができた。

「下で妄想しているから置いてきた。さあ、まずは……」

……
……
……

「俺が空を飛べるのはティンカーベル的な妖精と子供の心を忘れていないからだ」

藍様に手を引かれながら一生懸命空を飛ぶ感覚を掴もうとしている。

「補助する物なしで飛ぶのも怖くないだろう?」

「藍がいれば全然怖くない」

数カ月間の同棲生活を通して藍様に絶対の信頼を寄せている。

「嬉しい事を言ってくれるじゃないか」

その言葉が本当に嬉しかったようで優しく微笑んでいる。

「あれだ、今の俺はIGLOOで宇宙に上がった地上仕様のザクミ
たいだ。藍達は万能型」

訳の分からない例えを始めるくらい余裕が出来ているようだ。

「よし、今日はこれくらいにしようか」

二人でゆっくりと降りていった。

……

……

…

恭司の部屋

「妖夢が通常の三倍厳しかった……」

飛行訓練で疲れた恭司をびしと叩いてさらにしごいていた。

「空では大変楽しそうでしたね」

妖夢はまだ額に青筋を浮かべている。

初めて出来た弟子のような存在が盗られた気がして嫉妬していた。

少しだけ気になっている異性が違う女性と触れ合ってデレデレしている姿を見て嫉妬したのもあるが。

「いや、特訓だから楽しいとかないし……」

そんな大変な目にあっている恭司を見てクスクスと藍様は笑っていた。

「あんな手まで握られてまだ言いますか？ 拳げ句の果てには抱き締められてたじゃないですか」

藍様に抱き締められて降りて来たのを思い出してビキビキしている。

「別にハグくらいスキンシップ……」

何だか浮気の弁解をしているようにも見える。

紫とゆゆ様は勝手に恭司の布団を敷いてごろごろしている。

勝手知ったる他人の部屋。

「……でもサボってなかった事は評価します。今後も精進してください」

毎日しっかりと妖夢に渡されたトレーニングメニューをこなしていた。

「はい。みよん様……い、痛い！ 殴ったね！」

みよん様と呼ばれて恥ずかしかつたのか頭をぽかっと叩かれていた。

「殴って何が悪いんですか。貴方はいい、そうやって私をからかう事が出来るんですから」

白玉楼に滞在している時から、からかわれ続けて悔しかったらしい。

しかも怖い話が苦手という弱点まで知られてしまっているから余計に。

「そんなただみよん様って呼んだだけ……二度もぶった！ 姉にもぶたれた事ないのに！」

今度は軽く頬をぱちんと叩かれ、声を真似ていた。

「姉に殴られずに一人前になった奴がどこにいるんですか。仕方ないから私が姉代わりになります」

妖夢はちゃっかりと姉ポジションをキープ。

「どつちかと言うと妖夢の見た目的には妹だよね」

「それでも私のが年上ですから姉なんです」

どうしてもお姉さんになりたいらしい。

「それならエロくて優しくてエロい姉って設定がいい……い、痛い」
余計な事を言っただけ頬が赤かった。

「厳しく時に甘い姉にします。えっちなのはいけないんです」
ちよっただけ頬が赤かった。

数十分後

「もふもふ、もふもふもふもふ」

妖夢に散々小言を言われてから藍様の尻尾をブラッシングしている。

「ふふ、恭司は本当に私の尻尾が好きだな」
そう言いながらブラッシングの終わった尻尾で恭司を包んでいる。

「あー、もう幸せー」
もう死んでもいいって顔をしていた。

一時間後

「美女二人が俺の布団で眠っている。しかも亡霊のお姫様と妖怪の賢者という大変危険なお二方」
そう言いながら二人の寝顔を覗き込んだ。

藍様と妖夢はお茶を飲みながら世間話をしていた。

「柔らかいな。うりうり」
紫は嫌がって寝返りを打って逃れた。

「あむ」
しかしゆゆ様には指をくわえられてしまった。

「こ、これはちょっと映像的にやば」

しばらくお待ちください

「くっ、恐るべし冥界の主」

唾液まみれの人指し指をハンカチで拭いている。

「おかしい、絶対指を舐めると思っていたんだが」

「恭司さんはそんな事しませんよ」
藍様と妖夢に観察されていた。

しかも藍様もなかなか恭司の内心をわかっていらっしやる。

そして夕方になり四人が帰っていくのを見送った。
これからほぼ毎日来ると聞いてげんなりしていたが、気を取り直して寺子屋で使う資料をまとめ始めた。

空を飛ぶ特訓をした恭司、自在に飛ぶにはまだまだまだ時間がかかる。
そして自称姉ポジションについた妖夢。
どんどん広がる絆。

続く

空を駆ける？（後書き）

空を飛べるようになったら人間やめたも同然だと思うの。
恭司が何もしてない時の丈夫さはそんなに高くないです。
カードやら気やらで堅くなってるだけで。

今から新弾が楽しみ。
ゼンマイにスーパ一の枠が来ませんように。

妖怪娘達と一緒に！(前書き)

まったり。

敗北。

くすぐり。

妖怪娘達と一緒に！

湖の近く

「ちんちん」

ミスティアが嬉しそうにお菓子を摘まんでいる。

「俺、ミスティアのそれを聞く度にドキツとするんだ」
ピクニックシートに座ったまま呟いた。

「僕はルーミアに友達だって人間の恭司を紹介された時は驚いたなあ。頭をかじられてたし」

リグルが隣で砂糖水をストローで飲みながら恭司の呟きに反応した。

それがルーミアなりのスキンシップなようで、よく甘噛みされている。

とあるなんちゃらのインなんとかさんみたいだった。

「デビルサマナーとしてトークで仲良くなるなんて朝飯前なんだぜでもルーミアの能力は怖いと思う時があるな」

膝に頭を乗せてすやすや眠っているルーミアを見ている。

ルーミアの闇を操る程度の能力、一度精神的な闇も操れないか試してもらった時に恐ろしい事になっていた。

恭司の心の闇が一気に膨れ上がり、危うくその闇に飲み込まれかけたらしい。

赤き竜が抑えた事で霸王十代のような人格が生まれなくてセーフ。

「あの時の恭司は凄く怖かったよ……」
その時の事を思い出し、リグルがぶるつと身を震わせている。

「あの時はマジで闇に飲まれるかと思った。……リグル、デュエルしようぜ！」

暗い表情から一転、爽やかな笑顔をリグルに向けた。

「あつ、それなら私がやりたい！」

ミスティアがはいはい！と手を挙げてアピールしている。

「じゃあ、ミスティアとやるか」

すやすやと眠るルーミアをそつと膝からおろし、ミスティアと向き合ってピクニックシートにデッキを置いた。

「私に負けたら前みたいに屋台のお手伝いしてもらおうからね」

どうやらミスティアに一度負けた事があるらしく、お手伝いをさせられていたようだ。

「俺が勝ったら八つ目うなぎを一皿サービスしてもらおうか」

「デュエル！」

「俺のターン、ドロー。手札からモンスターをセットして、二枚伏せてターンエンド」

デュエルディスクを使わないシンプルなデュエルだった。

「私のターン、ドロー。フィールド魔法、ハーピィの狩り場を発動」

この効果で風属性モンスターの攻撃力と守備力は200ポイントアップするわ。そしてハーピー・クイーンを召喚して、その右のセックカード破壊させてもらうからね」

ATK1900 ATK2100

「くず鉄のかかしを狙って破壊するとか困ります」
「くず鉄だったらしく嫌そうな顔をしている。」

「それじゃあ攻撃」

「でもシールド・ウイングは一ターンに二回まで戦闘で破壊されない。今回は勝ちに行かせてもらおうぞ」
「屋台の手伝いが大変だったのを思い出して顔がひきつっている。」

「ミステアが文に宣伝を頼んだから恭司目当ての客や知人が押し寄せて大変な事になっていたらしい。」
「最後は何故かミステアまでお客さん側に居たりもしていた。」

シールド・ウイング

DEF900 DEF1100

「今回は八つ目うなぎの仕入れも手伝ってもらおうかな。カードを二枚伏せてターンエンド！」
「ミステアは既に勝った気である。」

「恭司が手伝うなら僕もまた行ってみようかなあ」
リグルが離反していた。

「何と言う謀反。第一にリグルに裏切られる絶望。ドロー……ジャ
ンク・シンクロンを召喚。そして」
カストルでもシンクロして無双しよう、そう考えていたようだが
甘かった。

「畏発動ー、ゴッド・バード・アタック！ 対象はジャンク・シン
クロンとシールド・ウイングね」
ハッピー・クイーンをリリースし、二体のモンスターを破壊した。

「ちよっ！」

「残念でしたー シンクロ召喚なんてさせないよ」
べーっと舌を出して挑発している。

「くっ……ターンエンド」
ミステリアにやり込められ、何も伏せずには終わらせた。

「ドロー ハッピー・レディーを召喚して狩り場の効果でもうひ
とつのセットカードも破壊させてもらうねー 後は場の風属性モ
ンスターの攻撃力が300ポイントアップー」

歌うように言いながら、セットカードを破壊してくる。

ATK1300 ATK1600 ATK1800

「もっと並んだら使おう、そう欲張った罰とか困ります」
ミラーフォースが破壊されてしまった。

「じゃあ、今度こそモンスターでダイレクトアタック！ 爪牙碎断
！」
デュエルディスクを使っていないのにノリノリである。

「だが俺は諦めない。手札から速攻のかかしを墓地に捨ててバトル
フェイズを終了させる」
ポーカーフェイスで誤魔化しているが内心焦っている。

「もう勝ちが決まったも同然かもね。カードを一枚伏せてターンエ
ンド！」
一緒に材料集めと屋台をやる未来を想像しており、。

「ドロー！ 手札から」
と魔法を発動させようとしたが。

「待つて、ドローした時に魔封じの芳香を発動！ これで魔法はセ
ットして次の自分のターンまで発動できないよ」

厄介な永續罫を発動させてしまった。

「＼(＾o＾)／」

手札が全て魔法カードだった。

「魔法カード対策もしっかりしてるのよ」
「何回も負けて研究した結果がこれ。」

うまい事コントロールして恭司の動きを封じている。

「……カードを二枚伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロー。永續罫、ヒステリック・パーティーを手札を一枚捨てて発動。墓地のハーピー・レディを可能な限り特殊召喚するね。ハーピー・クイーン二体を特殊召喚！」
捨てたカードがハーピー・クイーンだったらしく、二枚のクイーンを場に戻している。

ATK1900 ATK2100 ATK2400

「まるでミステリアの為のカードみたい」
打点が低いのに上手く回せているのが不思議だった。

「でも狩り場の効果は一回しか使えなくて残念。右のセットカード

を破壊してね」

ニコニコしながら宣言している。

「さっき引いた調律が……」

「そしてハンター・アウルを通常召喚ね。自分の風属性モンスター1体につき攻撃力が500ポイントアップ」

だめ押しと言っやつをするらしく、さらにモンスターを召喚してきた。

ATK1000 ATK3000 ATK3200 ATK3500

「全モンスターでダイレクトアタックするね」
いい笑顔でのフィニッシュ宣言だった。

「ここ一番の勝負で手札事故とか洒落にならない事が起きるのはやめてほしかった」

LP4000 LPO

「……み、みすちー？ やっぱりさっきの賭けはなかった事に」

「嫌だよー たくさん用意するんだから手伝ってもらっからね」
ぎゅーっと抱きついてくる。

「おうふ、ミスティアは発育がよろしくて困ったでござる。色々とやーらかいです」

抱きつかれてニヤニヤが止まらなかった。

「恭司ってたまにえっちな事普通に言うよね……」
もじもじしながらリグルが呟いていた。

「リグルは何を想像したんだろう。妄想力たくましすぎる」

数十分後

「ひいひい……お腹痛いよー」

目に涙を浮かべ、お腹を押さえて恭司が転がり回っている。

「笑いすぎだよ！ みすちーが僕を男の子だと勘違いしてたからって笑いすぎだよ！」

リグルがぶんすか怒っていた。

「ご、ごめんね？ 格好とか僕とか言ってるから男の子だと思ってて」

「ううん、もういいよ。……恭司は笑いすぎだっば！ くすぐってやるー！」

恭司に馬乗りになり、脇腹から腋を執拗にくすぐり始めた。

「や、やめて！ くすぐられるのは弱……あははははっ！ 死ぬう！ あははははっ！」

「うるさいよー、お昼寝してたのにー」
ぎゃあぎゃあ騒いでいたので、すやすや寝ていたルーミアが起きてしまった。

「あはははっ！ ひあっ！ あはははっ！」

「あ、ルーミアもやる？」

起きた事に気がついたリグルがルーミアに尋ねている。

ミスティアは楽しそうだと足の裏をくすぐっていた。

「うん！」

元気一杯に頷いてリグルと一緒にくすぐり始めた。

「お、おのおおれええ！ あははははっ！ もうやめてくれええ！」
もう普通に拷問だった。

……

……

…

「正義は勝つんだ！」

「そーなのかー」

「だ、大丈夫？」

「死ぬう……」

三人にくすぐられすぎてびくびくしていた。

「えーっ！ リグル、女の子だったのかー!？」

何でこうなったのか聞いていたルーミアが驚愕の表情を浮かべている。

「る、ルーミアまで……女の子だって分かってたの恭司だけなの？」
orz、なりながらシヨックを受けていた。

「あー、苦しかった。ほら、リグルもそんな落ち込むなって。ぎゅー」
苦しみから立ち直り、いつもルーミアにせがまれる抱擁をリグルにもしている。

「あ……甘い匂いがする」
最近毎日のようにお菓子を作っているから上着に甘い匂いが染み付いているようだ。

「毎日お菓子作ってるからな。ああ、そうそう。リグル、やったらやられるんだぜ？」

「え？ それはどういう……あははははっ！ は、離してえ！ くすぐりたいよおっ！ あははははっ！！」
ガツチリと片腕でホルドしてリグルの脇腹をくすぐり始めた。

「ルーミア、ミスティア……トウギャザーしようぜ！」
爽やかな笑顔で二人を手招いている。

「うん！ こちよこちよこちよー！！」
嬉しそうに頷くと二人はリグルの足の裏をくすぐり始めた。

「だ、だめえ！ おかしくなっちゃうううっ！ ひゃんっ！」

「ふーっ……何か悪い事をしているような気がする。まあ、いいか。ふーっ」

リグルの耳に息を吹き掛けるセクハラ行為をしている。

三人娘との楽しい春の一日。

ミステリアのデッキとは相性が悪かった。

屋台のお手伝いの日も近い。

続く。

妖怪娘達と一緒に！（後書き）

魔封じに狩り場、GBAはリアルにトラウマ。

ハーピー・レディをなめると痛い目を見ると心に刻んだあの日。

次とその次の二回に分けて、アイツやらコイツやらワイトキングやらを使う予定。

自重していたけど衣玖さんや天子はそろそろ出してもいいものなのかどうか。

最近ポケモンがマイブーム。

ひでりロコン をどうにかGTSで手に入れられないか四苦八苦しております。

お気に入りにはルンパッパ。

40万PV特別編 爆現したI/幼女な養女(前書き)

平行世界って便利。

デュエル構成がうまく考えられない時間稼ぎじゃないよ？

40万PV特別編 爆現したI/幼女な養女

「この短期間で二度も異世界に送られるとかないわ。……今回は長期だったし、何か娘まで出来てるし」

スキマから本気で疲れた顔の恭司が現れた。

「マイスター、今回はリインがいましたね！ お友だちになれましてけど、マイスターについて根掘り葉掘り聞かれました」

「私の事をママと呼んでもいいんだぞ？ マスターがパパなら当然私がママになるべき」

ツヴァイとリインフォースもスキマから現れ、そのリインフォースと手を繋いで金色の髪に緑と赤のオッドアイの幼女も現れた。

「パパー！」

荷物を置き、座った恭司にぎゅっと抱きついて甘えている。

「まったく、ヴィヴィオは甘えん坊だな」

そのまま胡座の上に乗っかって嬉しそうにニコニコしている。

夜天の騎士達もスキマから現れ、満足そうにしていた。

自分達が仕えている主の為に騎士らしい行動が取れたからかもしれない。

「えへへ」

「あはは」

二人はとても仲良しだった。

ヴィヴィオが保護される前になのは達に保護されたのが恭司達。保護してくれたのは過去に出会った少女達なのだと気づき、悪いようにはしないだろうと成長した彼女達に全て任せる暴挙に出ていた。そうしたら預かり知らぬ所で機動六課とやりに協力する事になり、恭司だけは過去の経験から何をしでかすか分からない危険人物で、デバイスもないから六課預かりでニート状態。

そんな恭司に転機が訪れたのはこのヴィヴィオと呼ばれた少女が保護されて来た事だった。

当初怯える少女が懐いたのがなのはと何故かトランプタワーを作っていた恭司。

特に恭司はニー……自宅警備員なので毎日一緒に居ておやつを作っであげたりして順調に仲良くなっていた。

これがなのはママ、フェイトママに続くパパさんの誕生である。ヴィヴィオを肩車をしたり、手を繋いで歩いている姿がよく目撃されていた。

「さて……デバイスを隠し持っていて私達だけに働かせていた主の処遇について。私は欲しい剣術指南書がある」

「私も欲しい着物があるのよね」

「骨付き肉を二つ……いや、ここは三つ所望しても罰は当たるまい」

「魔理沙が研究に使って言った恭司の私物かな」
上からシグナム、シャマル、ザッフィー、ヴィータ。

隠していたと言うよりただ忘れていただけだったりする。

デバイスをカードにして持ち運んでいたのを思い出したのも、ヴィ
ヴィオを守りきれずに拉致されて自分自身に対する怒りに身を奮わ
せていた時。

守護騎士達のデバイスを参考に河童独自の科学力と現役魔法使い達
の力で作られたデバイス。

バリアジャケットの見た目がまんまイクサで変更できないのは河童
の仕業。

素晴らしき753の会なんて作り、河童達に753がいかに素晴ら
しいのかを熱弁した恭司の自業自得。

当時は何故俺は照井さんを推さなかったんだ、と見当違いな後悔を
していた。

「ヴィヴィオを助けに来てくれたパパ、凄く強くて格好良かったよ
！」

「そう言われると照れるなー」

ヴィヴィオは頬を赤らめて助け出された時の事を思い出している。

阻む者を全て六竜で蹴散らし、誰の制止も聞かずに聖王のゆりかご
にセツトアップせず無理矢理乗り込んだ恭司。

そしてなのはに追いつき、色々あって戦闘モードに移行した聖王と
交戦。

なのはがクアットロの居場所を突き止めて倒すまで一人で聖王と激
闘を繰り広げ、制御が効かないヴィヴィオを止める為になのはと二
人がかりで戦う事になっていた。

なのはが気を引いている間にデモンズチェーンでヴィヴィオの動き
と聖王の鎧を無効化し、移り気な仕立て屋で身体に埋め込まれたレ
リックをゆりかごに移して即座に破壊するという荒技を披露してい
た。

それを見たなのは呆気に取られた顔、それをこつそり携帯で撮影していたのが後日バレて大変な事になったのもいい想いで。

「クアットロは今頃地獄を見続けているだろうよ。出来るならあの命、神に返したかった」

ボソツと誰にも聞こえないくらいの声でとんでもない事を呟いている。

何故か悪夢の塵気楼が一枚だけ鞆から消えていたりするのが関係あるかもしれない。

悪夢再びも一枚なくなっていたりするが、これは保険らしい。

そうしてしばらくわいわい騒いでいると、騒ぎに気がついたのか慧音が部屋に入ってきた。

「お帰り、スキマ妖怪のせいで毎回大変だな。……恭司、その子は誰だ？」

入ってきてすぐにヴィヴィオに気がつき尋ねている。

「鉄ヴィヴィオです！」

立ち上がり元気に自己紹介をしている。

「鉄？」

「はい！ パパと同じです！」

ちゃんと見知らぬ人に敬語も使える良い子。

「パパ？」

その単語の意味を知っているらしく、ギリリと恭司を睨み付けた。

「ぎ、義理の娘だってばよ。ヴィヴィオ、あれが慧音ママだよ」
危うく誤解から大変な事になる所だった。

「慧音ママ？」
キョトンとした顔が愛らしい。

ヴィヴィオをこの世界に来るか誘ったのも、聖王だろうが何だろうがこの世界じゃ全く関係がないから。
そしてヴィヴィオが恭司に付いてきたのはダントツな好感度によるもの。

故にママ二人がいるあの世界よりも、パパを取ってこの世界に来ていた。

以後あの世界がどうなるかは全く持って不明。

「……ッ！ ああ、慧音ママだよ。おいで」
ヴィヴィオにママと呼ばれて何か衝撃が走ったらしく、手招きをしている。

この時の美しい笑みを浮かべた慧音は正に女神、と恭司談。

「ママー！」
走り寄って実質三人目のママである慧音にぎゅっと抱きついた。

「うんうん、子供はこうじゃないとな。女神のような慧音もふつくし」

デジカメでそんな二人を撮影している。

……

……

…

「しかし聖王状態のヴィヴィオは強かったなあ……改めて俺は魔力だけなんだと悟った」

慧音に甘やかされているヴィヴィオを見ながら呟いている。

「ヴィヴィオに向かって言った言葉が世界中に響いてましたよ。管理局のエースが潰れる様を放映する為の電波ジャックも行われてましたし」

大暴れして満足なシグナムは見えていたらしい。

「え……あんな恥ずかしい事を言ったの知られちゃってるの？ だから皆にニヤニヤされてたの？」

だんだん顔が赤くなってきた。

「『この世に一箇所だけ、たとえ世界全てを敵に回してもヴィヴィオの帰りを待っている場所がある。そしてこの世に一人だけ、たとえ世界の全てを敵に回してもヴィヴィオの為に戦う者がいる。だからこの世界に居ちゃいけないとか言うんじゃない。お前は俺が救ってやる！』とか言っていましたよね」

シグナムはニヤニヤしながら言っている。

そんなシリアスな台詞の直後、なのはが私も戦ってるし待ってるから一人じゃないよ！？とショックを受けた顔をしていたのが想像できる。

「やめて！」

耳まで赤くしてじたばたして、今になってかなり恥ずかしいと思っただらう。

「後は『魑魅魍魎跋扈するこの地獄変……鉄恭司がここに居る！

イクサ、爆現ッ！』でしたっけ？」

セットアップしたのが戦闘直前だったから、そのシーンまで見られていた。

「もうやめてえっ！」

真っ赤になって悶えている。

しかもちゃんとあのイクサのようにしないとセットアップが出来ない仕様。

ちゃんと変身を待っていたヴィヴィオはお約束がわかっている。

「全て終わった後はヒーローだったじゃないですか。サインください！ 握手してください！ 抱いて！ ウホッ！ いい男！ とか一部変なのが混じってましたが。変身ヒーローに飢えていた者達がイクサのフィギュアまで作ってましたし」
ずっとシグナムのターン！

流された映像を見ていた子供から大人まで特撮のヒーローみたくだった恭司に夢中だった。

あの世界の人達はキバを知らないから、小さな子供達が恭司の変身を真似たり口上を真似て遊ぶ姿もよく見られている。

やったね恭ちゃん、念願のライダーになれたよ！

「そつえば、何で私じゃなくて向こうの私を口説いてたんですか？」
思い出したシャルがニコニコしながら額に青筋を浮かべ、恭司の耳をぎゅーっと引っ張り始めた。

「そりゃ初々しいから。特訓の成果を試してみたかったってのもある……痛い痛い痛い！」

「『あの、お元気で……』 『ああ、シャルもな』とかやってたのが許せないわ！ しかも抱き締めて額にキスマまでしてー！」
別れ際、自分にはしてくれない事を平行世界のシャルにやっていたのが気に入らない。

あの世界でいつか帰ってしまうからと、恭司に対して秘めた想いを持っていた四人程の女性が物凄く怖い顔をしていたのは言うまでもない。
秘めたと言ったが、その中の一名はアプローチし放題で全く秘めていなかったけど。

「痛いってば！ だって向こうのシャルは恥ずかしがり屋さんで手を繋ぐだけで真っ赤になって可愛い……や、やめてね！ おみみさんゆっくりはなしてね！」
耳が限界まで引っ張られておー、凄い凄い。

「私のがスタイルもいいのにー！」
しかし嫉妬したシャマルは止まらない。

「どぼちでこんなごどずるのおおおおーっ!？」

……
……
……

「しかし恭司、いつあたしのアイゼンのサブマスターに登録したんだよ」

ザフィーラにシャマルが連れていかれ、入れ替わるようにヴィータが不思議そうに尋ねてくる。

「一瞬自分が喋る首だけナマモノになっていたような……河童に預けた時らしいよ。レヴァンティンフェイク、グラーフアイゼンフェイクのフェッスルで強制的に手元に来るのは楽しい。何か面白そうだってデバイス達も快諾してくれたらしいけど。他にもモミジセイバー、ニトリマグナムという疑似武装があったりなかったり」
ちゃんとフェッスルも作られていたようだ。

「変な魔法登録するんじゃないんだぜ！ しかもアイゼンがそれをノリノリで使わせようとするんだから！」

「ゴルディオンクラツシャーはロマン」
恭司の魔力を吸い上げてカートリッジなしで行うド派手な一撃。

「あたしにはリンカーコアしかないんだよ！ 体内流れる馬鹿魔力

＋リンカーコアの馬鹿魔力がなきゃあんなの出来る訳がない！」

「ヴィータは後三回出来るわけがないと言ってもいい。LESSON4、敬意を払え。まあ、体を通れるのは魔理沙の茸を食べ……あ、変な意味じゃないからな？ 食べてたらいつのまにか血液みたいに流れるようになってたんだよな」

ツヴァイとユニゾンすれば三段構えの魔力タンクだった。

「貴様等まとめて光になあれええええ！！ は凄かったけど……」
守護騎士で唯一常識があるヴィータは溜め息を吐いていた。

……
……
……

「マスターは本当に女こましですね」

「いきなりなんだよ」

ヴィータが去ると同時にリインフォースが来て隣に座り、肩に頭を乗せてくる。

「ランスターが高町なのはに撃墜されそうな時に割って入ってたじやないですか。あの後ランスターのアドバイスやケアをしましたよね」

「割って入ったんじゃない。シグナムとヴィータにぶん投げられたんだよ」

思い出して額に青筋を浮かべている。

たまたま見に行った時に嫌がる恭司をシリアスな二人の間にぶん投

げる暴拳に出ていたようだ。

冷静に話をしようと顔面から着地した恭司が提案するも、何故か魔法を使われそうだったので絶対魔法禁止区域でバリアジャケットを強制解除させてからお話をしたらしい。

しかしそのせいで色々と擦れが起きていたりもする。

その場で二人をとことん話し合わせたからか、和解して色々と仲良くなっていた気がしなくもない。

「そんな事はどうでもいいんです。その後のランスターに関して様々な事をしたのが問題なんです」

「お前が言い出したんだろ。別にアドバイスしたりメンタル面のケアを独自にしたらだけだろ」

イクサにもイクサカリバー、イクサライザーとガンモードがあるからアドバイスが出来たらしい。

「ランスターのあの目、間違いなくマスターに好意がありましたよ」

「お兄さん亡くしてるらしいし、兄のような存在って意味での好意だろ」

好意を持たれているのは分かっていたらしい。

「いいえ、あれは絶対異性に対する好意です。恋愛の達人の私が言うんだから間違いありません」

恋愛の達人（笑）が胸を張って言い切っていた。

「はいはい。だんだん俺はお前が分からなくなってきたよ」

.....

…
…

「あーあ、みんなで恭ちゃんもユニゾンしたかったです」
リインフォースが妄想の世界に旅だってから、ツヴァイが膝にちょこんと座ってきた。

「それは四人で、って事？」

「はい！ リインのお姉様に異世界のお姉様、リインと異世界のリインでユニゾンしてみたかったです」
無邪気な顔で言っている。

「なにそれ可愛い」
何だかクライマックスな感じになりそうだった。

「でもその話をお姉様にしたら絶対にダメだって言われました……」

「あー、向こうのリインフォースとは仲悪いからな。同族嫌悪って奴だ」
毎日二倍大変だったのを思い出している。

…
…
…

「パパー！」
ツヴァイがザフィーラの元に行くと、慧音とお話していたヴィヴィオが戻ってきた。

「おかえり。よっと……慧音、俺はヴィヴィオを連れて色々な所で挨拶してくるから」
ヴィヴィオを抱っこして立ち上がった。

「ああ、娘と紹介して皆の心臓を止めてこい。どんな反応をしたか聞くのが楽しみだ」
悪戯っぽく慧音が笑っている。

「慧音ママ、行ってきます！」

「ああ、行ってらっしゃい」
そのまま恭司とヴィヴィオは家から出ていった。

今回も色々やってきたらしい。
しかも幼女な養女までゲット。
いつか捕まるんじゃないか心配。

おしまい。

40万PV特別編 爆現したI/幼女な養女(後書き)

河童に作られたイクサ、あれはバリアジャケット自体がデバイスなのかもしれない。

アームドデバイスじゃなくてアーマードデバイスになるのかな。質量兵器的に考えると限りなく黒に近くなりそうだけど。

新弾のゼンマイ、必須じゃない奴がまたスパーで助かった。

今回はウルスー枠がほぼハズレで酷い。

一時休戦はバトルした後は使用できない裁定が出るだろうな。

にゃんこ×2 (前書き)

猫。

猫？

動物大好き。

にゃんこ×2

「お兄ちゃん、遊びに来たよー」
橙が普通に入ってきた。

「うん？ 橙？」

寝転がりながら紫に頼んで持ってきてもらったSBR23、24巻
を読んでいた。

「ね、あれまたやって？」

にゃんにゃん言いながら擦り寄ってくる。

「わかったわかった。ほれ、にゃんこになりなさいな」
起き上がり、ブラシを手にして膝をポンポン叩いている。

……

……

…

「橙をブラッシングして可愛がっていたら、後から来たお隣ちゃん
と喧嘩を始めてしまったでござるの巻」

恭司の膝の上を狙い、フーツー！と猫状態で毛を逆立てて威嚇しあっ
ている。

「にゃー！」

「にゃー！」

ばちばちと火花すら見えそうだった。

「喧嘩するならデュエルで決着をつけなさい」
不毛な争いを終わらせる為、二人にそう言い放った。

「わかったよお兄ちゃん！ この雌猫やつつけたら一緒にごろごろしようね？」

人型になった橙が胸元に顔を擦り付け、マーキングしながら甘えている。

どこに持っていたのかデュエルディスクにデッキをセットして装着済みだった。

「わかったよ、お兄さん！ この雌猫やつつけたらあたいと一緒にお昼寝しようね！ あとブラッシングもしてね！」

橙の匂いを消すように抱きついて体を擦り付けている。

「わかったわかった」

二人の頭を撫でながら立ち上がり、庭に向かった。

庭

「負けて後悔しても知らないんだから！」

「そっちこそ後悔したって知らないよ！」

「デュエル！」

「あたいのターン、ドロ！ 手札断殺を発動！ 互いに手札を二枚捨てて二枚ドロ！ …… モンスターをセットしてターンエンド！」

お燐はすぐに手札を捨てる為のカードを使い、すぐに終わらせた。

「私のターン、ドロー！ 魔法カード、猫招きを発動！ デッキから猫かキヤットと付くカードを手札に加えるよ！ 私は捨て猫を手札に加えて、永続魔法の猫集会を発動！ 猫かキヤットと付くカードが通常召喚された時、手札からレベル3以下の猫かキヤットと付くモンスターを特殊召喚できる！」

キリツとした顔で橙ががんばっている。

恭司はそんな橙をパシヤパシヤと撮影するのに忙しく、お燐はムツとした顔で恭司を見ていた。

「私は捨て猫を召喚して、猫集会の効果で手札からさらに捨て猫を特殊召喚！ にゃーん！」

攻撃表示で二体の捨て猫が召喚され、橙も鳴いていた。

二体の捨て猫はお燐に背を向けて尻尾をふりふりしている。

ATK100 x2

「カードを一枚伏せてターンエンド！ ……お兄ちゃん、にゃーん！」

キリツとして終わらせ、恭司の方を向いて笑顔でにゃーんと両手をあげて可愛さアピール。

「き、効いたぜ……」

そのあまりの可愛さに鼻血が出そうになっている。

「お兄さん！ 次はあたいのターンだよ！ ドロー！」
橙にばかりかまっていたせいで、お隣が嫉妬してイライラしていた。

「あたいはゾンビ・マスターを召喚、そして効果で手札のモンスターを捨てて墓地のワイトキングを蘇生！ワイトキングの攻撃力は墓地のワイトとワイトキング×1000ポイントになる。あたいの墓地にはワイトとワイト夫人がいるから2000だね」

ゾンビ・マスター

ATK1800

ワイトキング

ATK？ ATK2000

「でもね、捨て猫が表側攻撃表示でいる時は捨て猫しか攻撃できないの」

「えーっ！ ……うう、ターンエンド」

打開策がないらしく、シヨボンとしながら終わらせた。

「私のターン、ドロー！ 手札から三体目の捨て猫を召喚！ レベル1の捨て猫三体をオーバレイ！ エクシーズ召喚！ 来て、ツインテール・キャットレディ！」

橙がにゃーん！と鳴くと赤いスーツにバイザー、二本の尻尾を持つ

た人型のモンスターが現れた。

ATK1000

「オーバーレイユニットを取り除いて攻撃力を800ポイントアップ！ さらにフィールド魔法キャット・ワールドを発動！ 猫、キャットと付くモンスターの攻撃力に元々の攻撃力を加えるよ！」
橙は絶好調である。

ATK1000 ATK1800 ATK2800

「後一枚ホワイトが墓地にあれば……」
今のお燐には打開策がない。

「このままホワイトキングを攻撃！」
ゾンビ・マスターではなくホワイトキングに攻撃を仕掛けたのはちよつとしたプレイミス。

お燐に飛びかかり、両手の爪で切り裂いた。

「くっくっ！」

LP4000 LP3200

「カードを一枚伏せてターンエンド！」

「あたいのターン、ドロ！ ……手札から闇の誘惑を発動して二枚ドロ、そして手札のワイトを除外するよ。手札のワイトメアを捨てて除外されてるワイトを墓地に戻すよ！ そしてゾンビ・マスターの効果で手札のマスターを墓地に捨て、ワイトキングを蘇生だよ！ 攻撃力は4000！」

一気に攻撃力が強化されたワイトキングが復活。

ATK？ ATK4000

「ううっ、あっち倒しておけばよかった」

橙は後悔しているが、どのみちワイトキングは残るから変わらなかつたりする。

「ワイトキングでツインテール・キャットレディを攻撃！」

ワイトキングが走って行く。

「畏カード発動、くず鉄のかかし！ 無効だよ！」

かかしにタックルをくらわせて満足そうに帰っていった。

なんとかこのターンは防ぐ事が出来たが、次に何か引けなければ負けるかもしれない。

「……ゾンビ・マスターを守備表示に変えてターンエンド」

DEFO

「私のターン、ドロー！……オーバーレイユニットを一つ取り除いて攻撃力を800ポイントアップ、さらに装備魔法団結の力を発動！」

ワイトキングを越える攻撃力を得て一気に畳み掛けるつもりなのだ。

ATK2800 ATK3600 ATK4400

「また上回って……」
苦々しい顔で見ている。

「今回はその伏せたモンスターを攻撃！」
ワイトキングを越えた事で安心し、違うモンスターを狙い始めた。

「伏せていたのはピラミッドタートル。破壊されて墓地に送られたから、あたいはデッキからピラミッドタートルを特殊召喚する」
効果で破壊されたモンスターと全く同じモンスターを特殊召喚している。

DEF1400

「ターンエンド！ 次のターンで勝てるかなー」
圧倒的とは言えないが勝ち筋が見え始め、勝ち誇った顔でお隣を見ている。

「あたいのターン、ドロー！ ……ふ、ふふふっ！ あたいの勝ちだよ！ サイクロンでくず鉄のかかしを破壊。ゾンビ・マスターの効果で手札のモンスターを捨てて墓地のピラミッドタートルを蘇生！」

お燐は切り札を引き、もう負ける気がしないようだ。

DEF1400

場に四体のアンデットモンスターが並んでいるが、どのモンスターも橙のモンスターを越える事は出来ない。

「それじゃあ私のモンスターには勝てないよ！」

「あたいの切り札、火車を特殊召喚する！ このカードは自分フィールド上にアンデット族モンスターが表側表示で2体以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる！ このカードが特殊召喚に成功した時、フィールド上に存在するこのカード以外のモンスターを全てデッキに戻す！ そしてこのカードの攻撃力は、この効果でデッキに戻したアンデット族モンスターの数×1000ポイントになるんだよ！ 冥界入口！」

互いの場の全てのモンスターが火車の中に吸い込まれて消えていった。

燃え盛る炎を纏った車、鬼のようなものが車の下部にいる。効果もかなり強力。

ATK? ATK4000

「あ……」

橙は敗けを悟り、ダイレクトアタックの衝撃を想像して青褪めている。

「お兄さんはあたいのお兄さんだよ！ 火車でダイレクトアタック

！ 火車車！」

火車の車輪が二つ橙に襲いかかり軽く吹き飛ばした。

「う………にゃああああっ！！」

LP4000 LPO

「お兄さん」

満面の笑みで抱きついて身体を擦り付けてくる。

「お兄ちゃん、負けちゃったよー」

橙も負けずに抱きついて擦り付けてくる。

「二人共いいデュエルだったよ。だから三人でごろごろして、ブラッシングしてからお昼寝しよう」

睨み合う二人の頭を撫でて妥協案を出した。

恭司の部屋

「空も烏形態があるのかしら」

そんな事を呟きながら猫状態のお燐と橙を撫でている。

「しかし火車とはまたお燐ちゃんその物なカードをよく探したもんだ」

そつとお燐の背を撫でている。

「橙もまだ始めたばかりなのにあんなカード見つけて納得の行くコンボを探し出したみたいだし」
「橙の背も撫でている。」

数時間後

「はあはあ、この肉球がたまらん」

お燐の肉球をぷにぷににはあはあしている。

「お兄さん、もつとー」

お燐は肉球をぷにぷにされても嫌がらず、逆に催促していた。

「あーっ！ 違う獣の匂いがする！」

掛けてあった上着をくんくんしていた橙が騒いでいる。

赤いジャケットに白い毛がくっついていてのを目敏く見つけ、顔をつけて匂いを嗅いでいたようだ。

「あー、椀のかもしれん。対価に尻尾をもふらせて貰ってるけど」
最近休みの日を見計らったかのように遊びに来ている。

毎回少し薄着で来て、寒いと言っているのでジャケットを貸している。実害はないから特に気にせず貸しているが、鈴仙や藍様等は少し不満だったりする。

「うー、ずるい」

橙はその話を聞いて服に付いた毛をころころで取っている。

「橙も着たいなら着てもいいぞ。暖かくなってから俺はあまり着てないし」

春になってからは基本ジーンズとワイシャツだけ。

「いいもん、お兄ちゃんに抱きつけば同じだもん」

ごろごろ喉を鳴らしながら、猫状態のお燐を押し退けて抱きついた。

「ちょっと何するのさー！」

「べーっ」

「だから喧嘩するなっつば」

二人の頭をぽんぽんしながら宥めている。

割と仲が悪い二人。

その間に入って仲裁をする恭司。

猫ハーレムとは羨ましい。

続く。

じゃんじ×2(後書き)

今日で一年。

ゼンマイスター缶欲しかったなあ……。
予約分のみしか入らないだろうし、予約は出来ないしで詰んだ。

厄介な二人が出会いました(前書き)

有頂天な彼女。

物真似する彼。

空気を読むお姉さん。

厄介な二人が出会いました

人里

「何で早苗のドサイドンのつのドリルが一回連続で当たるんだよ…」
「…」
厳選して育てたモンスターが二体も軽く葬り去られてへこみながら歩いている。

「あ、ちょうどいいのがいるわね。その貴方！」
帽子に桃を付けた青い髪の少女が恭司に声をかけていた。

「輝夜は変態型ばかりで読めないし……」
連敗中のネガティブモードで俯いており聞こえていない。

「ねえ、聞いてるの？」
恭司の前に回り込み、覗き込んでいる。

「ああ、お嬢さん。素敵なくらいぺったん娘ですね、そういうのも嫌いじゃないわ！ ……痛い！ ごめんなさい！ 嘘です！」
思わず胸を見て心の声を漏らし、右足の脛を蹴られていた。

最悪のファーストコンタクトである。

数分後

「へー、こいつが霊夢の言ってた奴か。幻想郷は可愛い女の子ばかり

りだな」

全身を眺めていると何故か虐めたくてうずうずしてくる。

「ふふん」

ない胸を反らし、褒められて満足そうだった。

「えっと、霊夢に聞いてたんだが名前はなんだったかな。死なない天使だっけ？」

こんな感じだったか？と名前を呼んでみた。

「比那名居天子よ。私の事を美しく高貴で素敵な女性と見抜いた貴方、なかなか見所があるわね。私の案内役にしてあげるから感謝しなさい」

都合良く改竄されているようないような。

「比那名居天子ね。俺は鉄恭司、ポケモンにおいても頂点に立ちたい男だ。残念だけど俺は今から夢ヤドンを厳選しないとイケないから無理。じゃ」

片手を上げ、爽やかな笑顔で颯爽と去っていった。

………

………

…

「離せ！ 離さんかあ！ 俺のスナイパーオニドリルがあ！」
服の首の部分を掴まれてズルズルと引き摺られている。

あの後すぐに捕まりこの有り様である。

予想外の力で引き摺られているらしく、靴の踵を滑り止めにしようとしているが地面が抉られるだけで止まる気配がない。

「くっ！ 抵抗すると無駄死にするだけよ！」
こっちはこっちで踏ん張ろうとする恭司を必死に引っ張っている。

「米屋のおっさん助け…… 『また可愛い子に引っ張り回されてる……
死ねばいいのに！ バーカ！ バーカ！』 じゃねーよ！ 奥さん、
おっさんこの前カフェでメイド服を着た店員口説いてましたよー！」
思わぬ暴露に、米屋のおっさんが奥さんに掴まれて店の奥に引きずり込まれていった。

一応里には残る事にした外来人達がかんばって開いたカフェがあり、
紅魔館仕様のメイド服が制服だったりする。

たまにケーキを作って材料費＋ の値段で買い取ってもらう事もあるようだ。

妹紅はあんみつとかのが好きらしく、あまり一緒にカフェに行かない。

「そのカフェって所に行きましょう」
しっかりと聞いていたらしく、手をパツと離れた。

「アウチツ！ …… デュエルだ、デュエルで決めよう。お前がカード持つてるのは今チラツと見えたから分かってるんだぜ」
地面に頭を打ちつけ、擦りながら立ち上がって宣言。

「いいわよ。ただし私が勝ったら飽きるまで恭司を私のペットにするから」

いい暇潰し相手が出来ると嬉々としてカードを取り出した。

「俺が勝つたらお前をペットに出来るんですね、わかります。胸が熱くなるな」

デュエルディスクを天子に一つ投げ渡した。

「私が負ける？ ふふん、ないわね。でもちよっとペットになるのは心惹かれるような……」

この世界では普通だった天子が少しずつ変化し始めている。

「さつさと始めようぜ。よびみずユレイドル育てたいんだよ」
デッキをセットしてデュエルディスクを起動させた。

「そ、そうね」

ハッとして慌ててデッキをセットしている。

「デュエル！」

「私のターン、ドロー！ モンスターをセット、手札を一枚伏せてターンエンド！」

何故かニヤニヤと自信満々だった。

「俺のターン、ドロー！ 手札からE・HEROヘル・ブラッドを特殊召喚。そしてヘル・ブラッドをリリースし、E・HEROマリシヤス・エッジをアドバンス召喚！ 聞かれる前に答えてやるう。マリシヤス・エッジはレベル7だが、相手フィールド上にモンスターがいるとき、リリースするモンスターを1体減らすことが出来る」
両手に鋭い爪を持つ悪魔のHEROを召喚。

ATK2600

ただの人間のはずなのに凄い威圧感を放ち、天子を見下すような目付きをしている。

「（何この感じ……ゾクゾクするわ）」
頬を朱に染めてブルツと身体を震わせている。

「カードを三枚伏せてセットモンスターに攻撃。ニードル・バースト！」
放たれた針が伏せていたモンスターに突き刺さっていく。

「伏せていたのはメタモルポットよ！ 互いに手札を全て捨てて五枚ドロー！」
天子は手札を墓地に捨てて五枚補充している。

「だがマリシヤス・エッジは守備モンスターを貫通してダメージを与える」
手札を一枚墓地に捨て、五枚ドローしながら宣言した。

「くっ！ きゃああああっ！」
針が刺さったメタモルポットが砕け、目標を失った無数の針が天子に突き刺さっていく。

LP4000 LP2000

「ヘル・ブラッドをリリースしてHEROを召喚したから一枚ドロ
ーしてターンエンドだ」
手札を完全にリカバリーしている。

「や、やってくれるわね。私のターン、ドロー！ 墓地の岩石族二
体を除外する。そして、灼熱の地中より現われなさい！ 地球巨人
ガイアプレート！」
大地を割き、地中から巨大なゴーレムが姿を現わした。

ATK2800

「むっ」
脳裏にジムの姿が過っている。

「マリシヤス・エッジを攻撃！ プレート・テンペスト！」
天子の宣言と共にマリシヤス・エッジに向かって巨大な拳を振り下
ろした。

「ちっ」
針を射出して巨人の拳を防いでいたが次第に押し潰されていく。

「ガイアプレートと戦闘するモンスターの攻撃力守備力は半分にな
る。スーパージューム！」
天子がそう宣言すると、攻撃力が半分になったマリシヤス・エッジ
が一気に押し潰された。

「うあっ！」
その衝撃でマリシャス・エッジが射出していた針が恭司に突き刺さる。

ATK2600 ATK1300

LP4000 LP2500

「カードを一枚伏せてターンエンドよ」
満足気な笑顔を向けてきた。

「俺のターン、ドロー！ 魔法カード、ダークフュージョンを発動！ 手札のE・HEROクレイマンとE・HEROスパークマンを融合させる。来い、E・HEROライトニング・ゴーレム！」
地球巨人の前に悪魔のHEROが再び立ちはだかった。

ATK2400

「ふふつ、そんな攻撃力じゃ勝てないわよ？」
嘲笑とも言えそうな笑みを浮かべている。

「ライトニング・ゴーレムは1ターンに一度、相手モンスター1体を破壊する事が出来る。ボルテック・ボム！」
恭司の想いが反映されているのか真・ゲッター1のストナーサンシ

ヤインのように雷球を作り出し、そのままガイアプレートに放った。

「なっ!?!」

そのまま直撃してガイアプレートは粉々に砕け散っていく。

「俺は支配さえ支配する、ライトニング・ゴーレムでダイレクトアタック！ ヘル・ライトニング！」

「くっ、リビングデッドの呼び声を発動！ ガイアプレートを蘇生させるわ！」

破壊されて墓地に送られたガイアプレートが復活した。

「ならば戦闘を行わずターンエンドだ」
無駄な抵抗をする天子を見て嘲笑している。

「私のターン、ドロー！ ガイアプレートの維持コストとして墓地のメタモルポットを除外。そして手札の磁石の戦士、を墓地に送って手札から磁石の戦士マグネット・バルキリオンを特殊召喚！」
維持コストの補充も兼ねて四枚もの手札を使ってバルキリオンを特殊召喚している。

ATK3500

「ダメ押しつてやつよ、死者蘇生を発動！ 貴方の墓地のマリシャス・エッジを戴くわ……今のどうやったの？」
ブレイドの封印のようにマリシャス・エッジのカードを天子に投げ渡した事でびっくりしていた。

「気にするな。紳士なら誰でも出来る事だ」

「紳士つて凄いのね……でも引導を渡してあげる。ガイアプレートでライトニング・ゴーレムを攻撃！」
ガイアプレートはその拳を振り上げ、狙いを定めた。

しかしその宣言と共に恭司の場に伏せられていたカードがスツとオーブン。

「手札を一枚、墓地に送り 見せてやろう。ある男の心の闇が作り出した、最強の力の象徴！ 絶対無敵、究極の力を解き放て！ 発動せよ、超融合！！」
天子を圧倒する究極の力を発動させた。

「超融合……？ 何で攻撃出来ないの！？」
天子は拳を振り上げたまま動かないガイアプレートを見て焦っている。

「超融合を用いれば、フィールドのあらゆるカードを融合することが出来る。貴様の場のマリシャス・エッジとガイアプレートを融合

させてもらっ」

一流は相手の場のモンスターだけで融合させる。

「カウンター罠が発動できない……」

何故発動できないのかと忌々しそうに見ている。

「超融合をカウンターすることは出来ない。完全なる勝利を導く絶対的な力。その力の前には、あらゆるものは無力！ 出でよ、E・HEROダーク・ガイア！」

天子の場の二体のモンスターが混ざり合い、恭司の場に二体目の融合モンスターが現われた。

「ダーク・ガイアの攻撃力は融合素材とした悪魔族、岩石族モンスターの攻撃力の合計！ よって5400！」

圧倒的な力で力を押さえつけている。

ATK？ ATK5400

「してやられたわけね……でもバルキリオンでライティング・ゴレムを攻撃！ 電磁剣！」

仕方がないとバルキリオンでライティングゴレムに攻撃を仕掛けている。

「くっ！」

どうやら防ぐ手立てはないようで、そのまま戦闘破壊された。

LP2500 LP1400

「……ターンエンド」

「ドロ……。……ダメ押しとはこういう事だ。E・HEROヘル・ゲイナーを召喚、そして悪魔族であるダーク・ガイアを指定。二ターン後の未来にヘル・ゲイナーを送る事でダーク・ガイアは二回攻撃を行う事が出来る」
闇のオーラを纏ったダーク・ガイアが天子の前に立ちはだかり、恭司は蔑むような目で天子を見ている。

「（何なのこの胸の高鳴りっ！ もつとその目で私を見て！）
ハアハア言いながら睨みつけるように見返している。」

「バルキリオンを攻撃！ ダーク・カタストロフ！」
なにかゾクツとしたが無視して攻撃宣言をした。

「ああっ！」
バルキリオンがバラバラに碎け破片が天子に直撃しているが、何か少し嬉しそうだった。

LP2000 LP100

フィールが高まっており、天子にも僅かながらのダメージが通っている。

実験段階の仮想立体触感について説明をしていない。

「……二度目の攻撃。消え去れ！ ダーク・カラストロフ！！」
暴力的なエネルギーが天子に襲いかかった。

天子が落ち着くまでの間にフィールを最大まで高め、そのフィールを手加減なしで叩きつけた。

何かになりきっているからか、仮想立体触感の事を忘れているのかもしれない。

「……………ッ！！」

そのフィールを受けて天子が軽く吹っ飛び、里の通りには大きなクレーターを作ってしまった。

LP100 LPO

「あー、やっぱり疲れる。俺には支配する者の真似は向いてないな。……やばい！ ゴブリン穴埋め部隊、手伝うから早くやるんだ！」
作ってしまったクレーターを目にし、ゴブリン穴埋め部隊と共に慌てて埋めている。

数分後

「仕方ないわ……うん、負けちゃったんだもの。恭司のペットになるしかないのよね」

結構なダメージを受けたはずなのに、天子は普通に立って戻ってきていた。

本人は悔しそうな顔で言っているつもりのようにだが、実際は凄く嬉しそうな顔で言っている。

「え？ いや、あれは冗談だから帰っていいよ？ 僕ん家の家主さん怖いし」
ペットになると聞いてかなり引いている。

「嫌。私は貴方のペットなんだから。ほら、しっかり私を躡なさいよ」
ハアハア言いながら頬を朱に染めて近づいてくる姿は少し怖い。
普通だった彼女はデュエルを通して変質してしまったようだ。

「なにこれこわい……でも何故だか分からないが物凄く虐めたくない。うりうり」

穴埋めの手を止め、両手で頬を掴みうにょーんと伸ばし始めた。

「うー」
もっと力を強くして欲しそうにこちらを見ている。

強くしてあげますか？

はい

いいえ

「ここは強くするべきです」
いい香りがしたと思ったら、耳元でいきなり誰かに囁かれた。

「うわおっ！」
びっくりして天子の頬をギューツ！と強く引つ張り、離してしまっ
た。

「ぎゃんっ！」

丈夫な身体をしているらしいが、予想よりも痛かったらしく喜びな
がら転がり回っている。

「驚かせてしまいましたね。初めまして、永江衣玖と申します」
そんな天子を尻目に黒い帽子・羽衣・ロングスカートで、どこかと
は言わないがぱっつんぱっつんな女性に自己紹介をされている。

「これはどうもご丁寧に……。鉄恭司と申します」
目が行きそうなのを堪えて自己紹介を返し、頭を下げて礼をした。

「鉄さん、総領娘様の相手をしていただきありがとうございます。
これを……」
そう言つとそつと布で包まれた何かを手渡しくる。

「何ですかこれ」
嫌な予感しかしないが、衣玖さんに聞き返した。

「見ていいですよ」

「……いやいや、こんなのどこで手に入れてきたんですか」
首輪やら猫耳やらリードやらと危ないアイテムが色々入っている。

「空気を読んでいただいてきました。あの店主さんが貴方によるし

く伝えておいてくれと言っていましたよ」「
霖乃助の所で仕入れてきた事を考えると、デュエルをする前から見
られていた事に。

「やばい、俺が里で築き上げたクールでニヒルなイメージが崩壊し
てしまう」

頭を抱えているが、陽気で変なイメージしかないから大丈夫。

「あ、それとふんどしとブーメランどっちがいいか今度までに考え
ておいてくれ、とも言っていましたよ」

「女性に向かってあの馬鹿は何を言ってるんだ。どう考えてもブー
メランだろ、パピヨンの考えて。そうだ、明日にでも霖乃助の所
に行かないと……じゃ」

期待した目をしている天子をスルーし、穴埋めも終わったので二人
に別れを告げて走り去っていった。

……

……

…

空

「飛んでるっ！ 飛んでるぜえっ！」

まだ自由に飛べないからじたばたも出来ない。

「あっさり捕まりましたね」

あの後すぐに天子の命令で空を飛んで来た衣玖さんに捕獲されてい
た。

ちょっと抵抗したらビリビリされたらしく、口以外は大人しい。

「衣玖、逃がしちゃダメよ。ご主人様の家まで案内させて居場所を突き止めるんだから」

何かもうノリノリで止まらないし、止められない。

「はい、総領嬢様」

「衣玖さん、当たってます。嫌でしょう？ だから降ろしてください、歩いて案内しますから」

ずっと当たっててニヤニヤが止まらなく、鼻の下を伸ばし放題だった。

「空気を読んで当ててるんです」

からかうように密着し、何がとは言わないがむぎゅっとなっている。

「何と言つ幸運、これで勝つる！ 天子の絶壁とは比べ物にならない……ちよっ、お腹はやめてっ！ ぐふっ！ この馬鹿力！ ごごうっ！」

ビキビキした天子が抱えられて無防備な腹をぼこぼこ殴っていた。

慧音宅

恭司の部屋

「ペットになるとか言ってた癖に……」
お腹が痛くて蹲っている。

「イラツと来たのよ」

「天国と地獄ですね」

二人はクツシヨンに座って部屋を見回している。

「うう、ぼんぼんが痛い痛い」

腹筋に力を入れて耐えてはいたが響く痛みはどうにもならないようだった。

十数分後

「あー、衣玖さんも大変ですね。お察しします」

腹の痛みも治まり、天子の両腕・両脚の間接を外して敷いた布団に転がしてから衣玖さんと話している。

「いえいえ。でも鉄さんも人間なのに苦労なさってますね」

お茶を飲みながら話し合い、すっかり意気投合して仲良くなっていた。

「あはは……はあ。腕を持って行かれかけたり、冥界に生きたまま行ったり、神様と風呂に入ったりと外じゃ間違ひなく経験できない事をされてますからねえ。……女の子な俺に霖乃助が惚れるという謎のハプニングも痛すぎる。それを知った魔理沙を励ます俺とアリスとかなんなの」

後半はぶつぶつと呟いていて聞き取れない。

失恋した魔理沙を励ます会は既に八回くらい開かれているが、既に魔理沙は元気に紅魔館に侵入して死ぬまで本を借りたりしている。代わりにパチュリーの機嫌が悪くなっているという。

「そういえば知ってますか？ 最近妙な飾りを頭に付けた熊が出たらしいですよ」

怖いですね、とにこやかに言われてしまった

「それアナログマですよ。特に害はないんで、そつとしておいてあげてくださいな。さてそろそろ……合体！」

放置プレイでも何か言いながらハアハアしてて怖かったから、手足の間接をワザと痛くしながら時間をかけて戻した。

「ッ！」

間接を戻される度にビクンッ！と痛みで身体を跳ねさせている。

「おお、卑猥卑猥。衣玖さん、連れ帰るのはお任せします」
痛みに悶えているのを見て、ちょっとだけすつきりー！していた。

ちなみにうつ伏せでへヴン状態！なのには気がついていない。

「お任せください。それとこれからも総領娘様の事をよろしく願いますね」

何だか体よく世話役にされた感じもする。

「衣玖さんの頼みなら喜んで」

恭司はそんな言葉の裏を読まずに即答するくらい綺麗なお姉さんが大好き。

「ふふふふ……」

うつ伏せで笑う天子は不気味だった。

厄介な奴は厄介な奴を引き寄せ。
そして新たなお姉さんとの出会い。
色んな知り合いが出来、毎日が楽しそうだった。

続く。

厄介な二人が出会いました（後書き）

色々とドMな天子のが扱いやすくていい。

超融合はあらゆる融合に対応してほしかったなあ。

今回やアニメみたいにダークガイアを作りたいかった。

デビサバ2、一週目終了。

主人公の初ターミナル使用時の事故はうらやまけしからん。

超番外編 例えはこんな世界でも（前書き）

本編ほったらかしにして積んでたゲームを消化してハマったから書いた。

何のゲームかは秘密。

七海が可愛くて生きてるのが辛い。

超番外編 例えばこんな世界でも

「……………待て待て待て」
朝起きたら窓のない部屋にいた。

頭に流れ込むこの人物の幼い時から今までの記憶、そしてモニターに映る見知らぬ自分の顔に混乱している。
周囲を見回すとフィギュアやエロゲ、同人誌等が大量にある。

「どう見てもオタクです、本当にありがとございました。……………とにかく状況整理だ。俺は西條拓巳って名前で、引きこもり気味で今日から二年生と……………」
汚い部屋の掃除をしながら自分について考えている。

こうなった原因はまったくもって不明。
憑依というよりも完全融合のが正しく、メンタルが強かった恭司が意識を吸収する形で軍配が上がっていた。
試してみても何の能力もなく、メンタル面以外は本当にひ弱な一般人。

「弱くてニューゲームとか洒落にならん。……………とりあえずエンターに逃避しよう」
ある意味融合した人物の意思に引き摺られていた。

一年後

渋谷はある程度復興しており、新たなアパートに引っ越している。

「何か後六ヶ月くらいしたら、また何か起きる気がする」
そう呟き、大分引き締まった身体でさらに鍛えている。

毎日ランニングに筋トレをした結果がこれ。
キモヲタのレツテルはまだ取れていないが、服のセンスや身なりがかなりまともになっていた。

完全に西條拓巳である事を受け入れて生活している。
半年ほど前は精神的にかなり不安定になっていたが、今はより強い心を持ったニンゲンとして復活していた。

「俺は西條拓巳で、西條拓巳はオリジナルのニシジヨウタクミの妄想から産み出された存在で……意味わからなくなってきた」
既に自分が西條拓巳と認識しており、混ざる前の鉄恭司という名前はニンゲンとしての形を取り戻す時に完全に忘れ去っている。

さらに鉄恭司だった頃に得た殆どの能力が失われており、料理の腕とあまり役に立たない記憶等しか残っていない。
他にも色々あったようだが詳しくはゲームをプレイしてね！

……
……
……

「ふう……やはり格好良いな、ギャレン。ジャックフォームを弱フ

オームとか言う奴は俺がゆるぎさん。ギャレンに守られる星来とか燃える」

既に女の子のフィギュアやエロゲは撤去され、棚にはライダーやガンダム等のフィギュアやプラモが並んでいる。

すっかり趣味も変わってしまい、主に特撮のオタクになっていた。ただ星来フィギュアだけは増えており、棚に何体も置かれていたりする。

エリンフィギュアも少しだけ並んでいたりも。

「おにい、本当に変わったよね。服のセンスもよくなったし、運動も得意だったなんて」

「俺が本気を出せば出来ない事などない……七海、何で休日なのにお前がいるんだよ。てか鍵閉めてあったはずなんだけど」

ギャレンに守られる星来の構図をうつとりしながら眺めていると、可愛らしい声が背後から聞こえてきた。

元々悪くない容姿を引き立たせる為の服に以前はなかった自信に満ちた態度、色々開き直った拓巳にはそれなりに友人も増えている。

「ナナ、チャイム鳴らしてずっとおにいの事呼んでたんだよ。返事はないし、鍵もかかったから凄く心配したんだから！」
「ぶんすか怒っていてスーパー可愛い。」

その手に輝く銀色の鍵で入ってきたのは確定的に明らか。

「それは本当にすまないと思っている。でも俺は誰にも合鍵を渡した覚えはないんだけど……」

チャリチャリと鍵を手で弄んでいる七海にそう告げた。

「ここの管理人さんに借りてリアルブーツしたやつだもん。欲しいって言ってるのに、おにいがくれないからいけないんだよ」

口を尖らせて文句を言ってくる。

「汚い、流石ギガロマニアックス汚い……で、こんな早朝からご用件は？」

既に自分は失った能力故に若干の嫉妬も含まれている。

「用事なんてないよ。ナナはおにいに会いたかったただけだもん」

頬を朱に染めながら言っており、チラッチラツとこちらの反応を確かめている。

「オウフツ！……そんな可愛い事を言っても、出せるのはフレンチトーストくらいだぞ」

「やった！」

一時間後

「七海、俺は優愛が怖い」

コーヒーを飲みながら唐突に呟いた。

「うん、知ってるよ。あの時も首輪付けられてたし」

フレンチトーストを食べ終え、ミルクティーを飲みながら返している。

「あれは人として大切な物を失うところだった……ひいっ！」
青い顔で思い出している、チャイムが鳴らされてかなりびびっていた。

「はい」

勝手知ったる兄の家、玄関に向かっていった。

……

……

…

「おにい、優愛さん」

「全力でごめんなさいい！」
条件反射でフライング土下座をかましている。

「じゃなくて梨深さんだよ」

「タク、やっぱり怖かったんだね……」
二人して可哀想なものを見る目で見ってくる。

「当たり前だろ、何度あの冷たい瞳に俺が……」
思い出すだけでガタガタ震えていた。

「あ、これ食べてもいいの？」

「はあ、ふう……いいよ。多く作りすぎちゃったから」
梨深が皿に無造作に盛られたフレンチトーストをチラチラと見なが

ら聞いてきたので、食べていいと許可を出した。

梨深は拓巳に順調に餌付けされている。

殺したくない理由の四割くらいは料理が当てはまっていたからかもしれない。

「わーい！」

「おにい、本当いつのまにこんな料理上手くなったの？」
前は何も作れなかったのに、と咳かれている。

「実は最初から。そして関係ないけど、俺が超シスコン西條として有名になりつつあるのは何で？ エスパーとか言われるよりはいいけど」

かなり嫌な出来事で思い出したくもない人生最悪の記憶。

「えっと、それは、その」

七海がもじもじしながら自分専用のカップを弄んでいる。

「ナナちゃんがタクの事ばかり話してるから、とか？」
もくもくと食べながら口を挟んでいた。

「それなら七海がブラコンって呼ばれないとおかしいじゃないか。
俺がシスコンと呼ばれる理由が分からない」

「ナナちゃんならもう超ブラコンで有名みたいだよ。タクの事とか、吹っ切れてからの事とか色々話してるみたい」
しあわせーとフレンチトーストを食べながら梨深が口を挟んできた。

「なん……だと……？ てか梨深は何しに来たんだよ」
混ぜたばかりの頃に距離感が分からず、他に何も思い付かなかったので何よりも七海を大切にしてみた結果がこれだよ。

根暗オタクから立派なシスコン、ブラコン兄妹にランクアップしていた。

それとBCさんは結局ただ普通に遊びに来ただけで、夕飯まで食べて帰っていきました。

数日後

「ドローする運命力だけは衰えていないんですね、わかります。ガルガリくん、また当たりだわ」
登校しながらアイスを食べていると当たりを引いていた。

「西條、お前は毎回当たりを引いていないか？ ガルガリくんの神に愛されているとしか思えん」
食べ終えたガルガリくんのハズレを見て舌打ちをしてから呟いた。

「そんな神に愛されたくない、ただ俺のラック値がずば抜けてるんだろうな。これはセナにやるよ」
ティッシュで軽く拭いてから手渡した。

「あ、ありがとう……」
素直に受け取り大切そうにポケットにしまっている。

「セナしゃんばっかりずーるーいー！」

「こずびいには帰りにフライドチキンを奢ってあげるから、今は勘

弁してくださいえ」
登校中故に大勢の人が凸凹三人組を目で追っていて、居心地が悪かった。

放課後

「こずぴいは肉好きだねー」
買ってあげたフライドチキンを食べる姿を見て呟いていた。

「拓巳ちゃんも食べるのらー！」
そう言い、口許を油で汚しながらかじっていたチキンを差し出している。

「ありがとう。その前に」
付属していたペーパーで軽く口許を拭い、少しだけチキンを食べた。

「拓巳、私にも」

「あやせは自分で出来るでしょうが」
そう言いながらも拭っている。

「私の邪心が貴方にもしてもらいたがっていたのよ」

「こずぴいも、こずぴいもー！」

「この二人の押しの強さマジパネエ」

.....

.....

…
そんな二人と途中で別れ、松濤公園を歩いているとこちらに気づき
嬉しそうに近づいてくる人物がいた。

「西條くん、お久しぶりです」

「ああ、優愛か」
苦手な人物ではあるが嫌いではないようだった。

約半年前に起きたある事件の真犯人だと決めつけ、精神的に拓巳を
追い詰めた人物の一人。
その眼鏡の奥の瞳が少し怖いです。

「少し座って話ませんか？」
優愛はそう言ってベンチを指差していた。

「え……い、いや今日は急いでるから……」
彼女に対するトラウマを持つ切っ掛けとなった場所、故に座りたく
なかった。

そう答えると眼鏡越しに彼女の瞳が冷たくなるのを感じた。
その目を向けられると身体が動かなくなる。

「どうして、座ってくれないの？」
いきなりディソードを出し、ゆっくり迫ってくる。

「座ってよ。座らないの？ 座るよね？ 座ってって言ったよね？

妄想癖だけはなくなっていないらしい。

「いかにいかに、妄想も大概にしておかないと。……夕飯は材料から考えて麻婆豆腐かな」

冷蔵庫をチエツクして夕飯の献立を考えていた。

「ナナはおにいの麻婆豆腐好きだよ」

「あ、私もだよナナちゃん！」

一緒だねーつとキヤツキヤツ言つてて微笑ましい二人。

二人ともチャイムを鳴らさずに当然のように入ってきていた。

「君達は本当に毎日来るよね。七海があまりに絶賛するからって、この前父さんと母さんが食べに来たんだからな」

自炊を本当にしているのかの確認も兼ねての来訪だったらしい。

「あの日のお父さん、物凄くご機嫌だったよ。お母さんは息子に負けたって落ち込んでたけど」

「『嫁を貰うことは出来ないかもしれないが、嫁に行く事は出来るかもな。はははっ！』って豪快に笑った父さんは許さない、絶対だ！」

どうせ俺はキモオタだよ！と自棄になっている。

「おにい、大丈夫だよ。ナナがずーつと一緒に居てあげるから！」

「それなら私がタクのお嫁さんになってあげる！」
互いの発言にハツとして目を向けている。

「えっ、何この空気」

梨深と七海が睨み合いだし、空気が重苦しくなった。

「梨深さん、無理しなくていいですよ。おにいみみたいなオタクさん嫌ですよね？」

「でもナナちゃん、貴女じゃ結婚できないよ。兄妹はずっと一緒に居られないんだよ？」

露骨に牽制しあっている。

「俺が権力者だったら二人まとめて嫁に出来るのにな」
そんな権力はないし一人は実妹です。

そしてこれから約半年後、世界は再び危機に陥る事になる。

超番外編 例えはこんな世界でも（後書き）

約半年後には世界崩壊、セプテントリオンとの戦いに巻き込まれていく事になるデビサバ2クロス。
を妄想した。

新BE2で弾圧を当てたのに禁止……こんなってないよ！
天使は何でノータッチなのか。

ツイスターと罰ゲームと寝顔観察（前書き）

相変わらずやりたい放題やった。
後悔はしていない。

ツイスターと罰ゲームと寝顔観察

永遠亭

深夜

「痛たたたた！　ちよっ、妹紅暴れるんじゃない！」

「くっ！　そんな事言ったって……輝夜はもたもたしないで早く動け！　恭司は変な所触らないでよね！」

「罰ゲームは誰が受ける事になるのかしらねー」

妹紅、輝夜、恭司の三人でツイスターを使って遊んでいるが三人共
凄い体勢になっている。

永琳は凄く楽しそうにルーレットを回しているだけで参加していな
い。

「妹紅耐える！　お前が潰れると連鎖して俺が潰れて一人負けにな
る！」

「うぐぐ……早く次のルーレット回してっばー！」

「はいはい、次は赤の……」

……

……

……

「妹紅のお馬鹿！ 羞恥心を捨てないとダメだろ！」

「それは人として一番捨てちゃ駄目な物だよ馬鹿恭司！」
真っ赤になりながら反論してきた。

「うん、まあ、あれは仕方ないわね。直に見られていなくても、恭司の顔を跨ぐのは乙女には絶対出来ないもの」
ギャーギャー騒ぐ二人を尻目に輝夜はうんうん頷いている。

「それなら堂々と跨いでいた姫は乙女じゃないと」
永琳は苦しそうにしていた三人を見て満足しているようだ。

「永琳、逆に考えるのよ。見られちゃってもいいさって考えるの。
恭司は普通にスケベだけど迫られるとしどろもどろになるみたいなのよ」
実際輝夜が跨いだ瞬間顔を背け、妹紅を挑発して見ないようにしていた。

早苗で慣れつつあるのでそれもその内無くなるだろうけど。

「さて、妹紅に潰された恭司の罰ゲームタイム！ ルールだから従ってねー！」
最初にシートの上に潰れた者が罰ゲームをするルールだった。

「イエイイ！」
年甲斐もなくめっちゃノリノリな永琳を見て、恭司と妹紅は気まずそうに視線をそらした。

「さあさあ、この罰ゲームボックスから一枚引いてもらいましょうか！」

何かに影響された輝夜がずいっ！と穴の空いた箱を差し出してくる。

「一番軽いのがですように……無理無理。誰だよこんな入れたの」

引いた紙を見て少し青冷め、すぐに拒否。

「『今から竹林を二十分くらい一人で歩いてくる』？」
気になったようで妹紅が覗き込んでいた。

「はい、ビデオカメラにマイク。恭司経由でスキマ妖怪に頼んでおいてよかったわ」

永琳がニコニコしながら渡してくる。

「永琳、セット出来たわよ。これで恭司の動向が監視できるわね」
姫様と従者はもうノリノリでディスプレイを準備していた。

「ホラーゲームをやった日にこれは不味い。妹紅、俺と深夜の竹林デートに行かないか？ 出るか出ないかの恐ろしい場所でイチャイチャしようぜ」

朝からずーっとホラーゲームをプレイしているのを見させられていて怯んでいる。

「絶対嫌」

ぷいっつと顔を背けて拒否されてしまった。

「妹紅ルートは空気を読むスキルがないとダメなんですわね、わかります。……お願ひします一緒に来てください」

男としてのプライドも捨て、土下座をして頼み込み始めた。

深夜の竹林

「勇気が漢だとしても怖いものは怖いんだ……」
結局妹紅は折れず一人で行かされる事になり、怖さを紛らわす為に
独り言を呟きながら歩いている。

てゐの畏を避け、たまに見える人影のような物を見なかった事にし
たりしながら歩いていく。
過敏になっており、風で揺れる竹にもビクッ！と反応していて見て
いる分には面白い。
手に持った持参の懐中電灯の明かりも頼りなく見える。

「……貴様、見ているなッ！！」
最悪な想像を消す為に片手で顔を隠し、やや後ろを振り返って宙を
指差して叫んだ。

「何でバレちゃったの!？」
すると驚かせようとしていたのか、小傘がいい角度で浮いていた。

「あ、黒とは何とまあ背伸びして……な、舐めないで！ 傘の舌は
ゆっくり出来ないいいい！ ……いやあっ！ 喋ってたから舌が
口に入ってきたあああ！！」
自業自得で大惨事になっている。

小傘は恭司の余計な一言でまた見られた事に気づき、バツ！と勢い
よく着地してから傘の舌で顔をべろべろ舐めさせていた。
舌が恭司の口に入った事で互におえええっ！と苦しんでいる。

「毎回言うけど、覗いちゃ駄目なんだよ！」
ぐったりした傘を振り回しながら、見られた事に真っ赤になってぶんすか怒っている。

「うう、舌の感触が生々しい……でも勝手に見せてくる小傘ちゃんも悪いんだぜ」
舌の感触に悶絶していたが、開き直るといふ行為に出ていた。

「それでも見ちゃ駄目！」
顔色？の悪い傘を振り回してぶんすかしている。

「分かった分かった。今度からは見ても黙っておくから。ほら深夜の竹林で僕とデート！」
いい道連れが出来た、と手を握り無理矢理同行させ始めた。

……
……
……

「ぎゃあああつ！！ こつち来んなあああ！！」

「きゃあああつ！！ こつち来ないでえええええ！！」
この日の為に仕掛けられた恐怖のアトラクションを二人で体験している。

どこかでアリスも協力しているらしく、外の世界から入ってきたマネキンを動かして所々で二人を追いかけて回っていた。
そして現在二人は上半身だけのマネキンに追いかけられている。

腕だけで追いかけてくるマネキンのあまりの怖さに、二人は絶叫しながら逃げている。

「なにあいつ超速えええつ!!」
「しゃかしゃかしながら二人に付いてきている。」

「あつちからも来たああああつ!?!」
阿鼻叫喚の地獄絵図だった。

……

……

…

永遠亭

「もう嫌だ、お家帰る……」
ぐったりして全身汗びっしょりのまま呟いている。

小傘とは途中ではぐれ、何故か恭司だけ何体ものマネキンに追いかけられながら永遠亭にようやく逃げ帰ってきていた。

「みんなで見てたけどあれは怖いね。私だったら即燃やして飛んで逃げてるよ」

「えーりんおなかないー」
輝夜は笑いすぎて目に涙を浮かべていた。

「ゆ、夢に出てきませんように……」
上半身だけでしゃしゃか動くマネキンのダメージは永琳にもあつたらしい。

「もう風呂入って寝ようぜ……」
ノロノロと輝夜の部屋から出ていった。

数十分後

「ふんふんふーん」
割り当てられた部屋の布団に入り携帯ゲーム機で何かプレイしている。

風呂に入った事でさっきの恐怖体験を記憶の彼方に追いやつたらしく、ご機嫌に鼻唄まで。

「ウラガンキンって嫌いだわー」
炭鉱夫が呟いている。

しばらくすると背後の襖が静かに開き、静かに閉じた。
集中しているからか全く気がついていない。

「ちっ、使えないお守りばか……っ！」
ふと目を横に向けたら髪を下ろしてパジャマ姿の永琳が覗き込んでいた。

恐怖に叫びそうになったが口を塞がれ、そのまま布団に入ってくる。

風呂上がりらしく、髪からシャンプーのいい香りが漂ってきてくらくらする。

「しつ。き、今日は怖い思いをしたみたいだし、怖くないように私と一緒に寝てあげるわ」

手を離し、動く上半身マネキンを思い出して震えながら密着している。

「……いや、別にもう怖くないからお帰りください。そんなやーらかいの押しつけられたり、美人さんに密着されたら俺の理性のリミッターがマツハ」
もじもじそわそわが止まらない。

「あ、もし手を出してきたら鈴仙に言うから」

「絶対手を出しません。あの鈴仙に軽蔑されたら俺は生きていけない」

「まあ、私ルートに入るって言うなら手を出してもいいけどね」
少しもじもじしながら呟いていて可愛い。

永琳や輝夜と一緒にギャルゲをプレイしている影響がここに出ている。

「可愛さと癒やし重視の鈴仙ルートか面白さと感動重視の輝夜ルートのが楽しそう。……いや、拗ねるなよ」
そう告げるとぷいっと顔を背けてしまった。

「ふんっ！ どうせ私ルートは楽しくないですよー」
ぷくーっ と頬を膨らませて拗ねている。

「えっ、攻略してほしいの？ ちょっと攻略法ググってくるべきか……」

「そんな事ありませんー。大体恭司は今日までにいったい何人の女の子とフラグを立ててるのよ。髪も黒いし、いっそのことツンツンへアーにしたらどう？」

とあるなんちゃらの幻想なんたら青年のようにしたら？と遠回しに言っている。

「フラグって……早苗と慧音と鈴仙くらいじゃないの？ 後はからかわれてるだけの駄フラグな気がするし」

ほぼ毎日遭遇する身近な三人にはフラグを立てている事が分かっているらしい。

「……恭司は攻略する側から見たら物凄い難易度ね。出会ってから綿密な調整をしないとルートに入れないタイプ」
そして以外な選択がフラグだったりするタイプ。

「うーん、俺なんてすぐ攻略できると思うけど。可愛いヒロインに優しくされたりしたら開始二分で惚れる自信がある」
ノーマル、グッドは楽に行けるがトゥルーは某メモリアルの幼馴染み並に難しい。

「まあ、とにかくもう寝るわよ」

「はいはい。おやすみー」

永琳に背を向けて目を閉じた。

背中にくっついてそわそわする永琳を放置して夢の世界に羽ばたいていった。

翌朝

「夏が近いからって寒いんですけど」
肌寒さから目を覚ますと布団から追い出されており、永琳に布団を占領されていた。

「くー」
幸せそうにすやすや眠っており、服が少しはだけている。

仕返しとばかりに立ち位置を変えたり、色んな角度から眺めていた。朝から眼福と手を合わせて祈っている。

「げっ、まだ五時かよ……」
それからしばらくして携帯を開き、時間を確認したがまだ寝て四時間くらいしか経っていなかった。

「仕方ない。……寝起きドッキリをやるしかないな、うん。フヒヒ」
意気揚々と部屋を出ていった。

鈴仙の部屋

「……もうこのままずっと眺めてようかな」
気持ち良さそうに眠る鈴仙の寝顔を見て幸せな気分になっている。

脱ぎ散らかされた服等を丁寧に片付け、隠し撮られた自分の写真ばかりのアルバムを見なかった事にしてから正座で見ている。

「え、えへへ……」

いい夢でも見ているのかニヤニヤしている。

「何これ可愛い」

デジカメを取り出して寝顔をたくさんパシャしている。

数十分後

「フヒヒ、サーセン。ディスプレイの向こうのお友達には悪いが……折角だから、俺はこの鈴仙の布団を選ばぜ」

小声で宣言すると、いそいそと布団に潜り込み始めた。

「う……ん……」

「下手なアイドルなんて勝てないくらいスーパー可愛い。ふふふ、俺が……俺がリア充だ」

鈴仙の寝息に誘われうとうとし始めて……

二時間後

「んー……！ いつのまにか寝ちゃってたぜ。やばいやばい、早いとこ帰らないと」

鈴仙の部屋に潜入していたのをすぐに思い出したらしく、布団から抜け出そうとしている。

「く、く……」
すると寝ているはずなのに、やたら素早い動きで鈴仙がぎゅっと抱きついてホールドしてきた。

「……鈴仙の髪ってさらさらで気持ちいいな。いい匂いもするし」
布団から出るのを止め、手で髪を梳いてさらさらな感触を楽しんでいる。

「んう……」
胸元に顔を寄せ、デレデレでふにゃふにゃな顔を見えないようにしている。

「こんな幸せな一時。しかし誰かが起こしに来たら地獄のような苦しさに変わるんですね、わかります」
相変わらず立場は一番弱かった。

春もそろそろ終わる頃。
夏が近づき新たな出会いの季節。
旗男の活躍にこうご期待。

続く。

ツイスターと罰ゲームと寝顔観察（後書き）

普通にシユタインズゲートやってました。
箱持っていないんで比翼恋理は移植待ち。
助手とオカリンはいいね。

次のパックにCN39が来るらしいけど、顔の形が仮面ライダー剣に見えるのは俺だけなのかな。
TFにみんな大好きブルーノちゃんが参戦するけどやっぱり使うのはTGなのかな。

50万PV特別編 Kのハーレム/最早ブレイクってレベルじゃない(前書き)

特別編だしやりたい放題。

時間稼ぎではない。

50万PV特別編 Kのハーレム/最早ブレイクってレベルじゃない

「うーん、暇だ。慧音は妹紅と永遠亭にお泊まり、守護騎士達は結界のメンテナンスでお泊まり、ヴィヴィオは早苗達のところにお泊まり……朝からひとりぼっちは寂しい」

イクサベルト型のデバイスも河童が修理するからと持っていてしまいやる事がない。

暇な時はよくイクサに変身して遊んでいるらしい。

回収された理由はヴィヴィオとの戦闘で破損したイクサカリバーとイクサライザーの修復の為。

現在はリンカーコアさえあれば誰でも変身できるイクサとは別に、格闘戦に適応した恭司専用のデバイスとして雷鳳が河童達独自の技術で密かに作られていたりする。

「恭司、紫様から休みが貰えたんだ。今日は一緒に過ごそう」

「……一瞬マジで心臓が止まるかと思ったんだが」

ふと横を見たらスキマから顔だけを出した藍様が目の前にいた。

「ちよつとしたサプライズだ」

よいしょ、と着替えが入っているだろう袋と一緒にスキマから出てきた。

「あれ？ 紫は来ないんだな。大体藍と一緒に泊まりに来るのに珍しい」

藍様が出るのと同時にスキマが消えたので不思議そうにしている。

「何かニヤニヤして呟いていたよ。恭司がどうこう、ハーレム云々、異世界からのむにゃむにゃ。」と」

「嫌な予感しかしねえ……………」

紫の胡散臭い笑顔を思い出し、苦々しい顔をしている。

数十分後

「ちよつ、ちゅーはもつといい雰囲気を作ってからするも…………つて誰か来たな」

藍様からの執拗なキスを受け入れつつも反論していると玄関の方が声が届いてきた。

「まったく無粋な訪問者だな…………これからがいい所だったのに」
不満たらたらで不機嫌な藍様もお美しゅうございます。

「慧音公認になってから皆が積極的すぎて凄く怖いです。はい、今出ます」
主に性的な意味で。

藍様を軽く宥め、パタパタと玄関に走っていった。

玄関

「…………このシルエットは開けたくないなあ」
曇りガラス越しに見える金色の髪と栗色の髪を見て呟いた。

金色の長い髪をストレートにしている者と栗色の髪をサイドポニー

にしている者が居るのがわかる。
向こうはそわそわしているようでガラス越しに映る恭司には気づいていないらしい。

『なのは、本当にこの家なの？』

『うん。八雲さんが連れてきてくれたから間違いないよ』

「俺だ。ああ、機関による襲撃を受けている。至急援護を頼む……何っ、一人で切り抜けるだど！ くっ、これも運命石の扉の選択か。エル・プサイ・コングルウ」
もう二度と会う事もないと思っていた二人の声を聞き若干パニックになり、携帯で何かをしている。

『あ、今声聞こえたね』

『エル・プサイ・コンガリイ？』

「コングルウだ！ ……きつとヴィヴィオに会ったら帰る日帰りスキマツアーだろ。永住とかなない」
嫌な予感的中しないように祈りながら玄関を開けた。

「よお、二人共久しぶり……ぐびがじまるうう！」

「会いたかったよ恭司！」

「私もずっと会いたかったの！」
秘めた想いを持っていたらしい一号・二号が、目を輝かせながら勢いよく抱きついてきて首が絞まっている。

苦しそうにしながらも柔らかい二人の肢体といい香りにニヤニヤが止まらず、二人の腰に然り気無く手を当てる抱き寄せる形になっている。

背後からメラメラ燃え上がる嫉妬の視線を感じてチラッと見てみると、尻尾をわざわざ動かしながら凄惨な形相の藍様が近づいてきていた。

「とりあえず、中にどうぞ」

そうにこやかに言い、二人を強引に引き離して尻尾で恭司を隠した。

「藍の尻尾いいなあ。俺も生まれ変わるなら妖狐がいいなあ」

渦中の男はもっふもふに包まれて幸せになっている。

恭司の部屋

「お前達の愛情に全俺が泣いた。ヴィヴィオの為だけに地位も何もかも捨てて来たとか……感動した！」

詳しく話を聞いて感動したらしく、昔の総理大臣みたいになっていた。

恭司の介入で強引に歴史をねじ曲げたからか、あれから世界を揺るがすような大きな事件も起きなくなって皆以前の生活に戻っていたらしい。

そんな毎日を過ごしつつ、ヴィヴィオが居た楽しい日々を思い出して二人はぼんやり。日に日にヴィヴィオに対して募る想い、そしてそんな二人の前に現れたのが紫だった。

それからも幾度か紫が現れ、聞かされるヴィヴィオの現状。とうとう二人共我慢できなくなり、紫の甘言に乗って周囲が止めるのも聞かずに辞表を提出。

それを処理するしないと揉めている中、家族・友人達に最後のお別れをして荷物を持ってこの世界に来た。

それが彼女達が語ったここに来る経緯。

キヤロとエリオはちゃんと独り立ちしているし、優秀な魔導師も増えたから穴埋めも出来ると言っていたが本当かどうか。

「お前達の愛情に全俺が泣いた。……って事はこっちに住むの？」
大事な事なので二回言いました。

ただ何となくだけどヴィヴィオの部分を恭司に代えても違和感がない気がする。

「うん、だからこれから毎日家を……じゃなくて、毎日ヴィヴィオと一緒に居てあげられるよ」「
なのはは晴れやかな笑顔で言っている。

「うんうん。恭司とも一緒に居られるよ」「
フェイトはナチュラルに本音を漏らしていた。

二人してチラツチラツと恭司を見ていたが藍様の尻尾で再び隠されてしまった。

「まあ、喜ぶんじゃないかな。ヴィヴィオにはママやら姉やらがたくさん出来たから寂しがる事はなかったよ。早苗はママと呼ばれて以来超溺愛してるし、奇跡の加護を受けているのは間違いない」
恭司の娘で、さらに純粹だからか人妖神問わず皆にかなり可愛がられている。

そして藍様を交え、恭司に関するトークタイムという名の拷問が始まった。

「よかった。私なら恭司も満足できるよね？」

「フェイトさんと言ったかな、君なら間違いなく合格ラインだ。恭司は基本的に大きい胸が大好きなんだ」
たゆんたゆんな二人は少し意気投合し、にこやかに話していた。

「うう、私だつて小さいわけじゃ……」

二人のご立派な双子山と自分のを見比べて怯んでいる。

「人の性癖を捏造して勝手に暴露するとかやめてくれ。俺は大きいとか小さいとか関係なくおっぱいが好きなんだ」
どの道 H E N T A I である事に変わりはない。

……
……
……

「ほう、模擬戦で恭司のライジングを引き出したのか。人間相手に使うなんて余程追い詰められたんだな」

藍様は目を丸くして驚いている。

「二人掛かりでしたけど」

「武器壊れてたのに反則レベルに強かったよ……」

「イクサの全力だからな。バインドでがんじ絡めにされた挙げ句、二人に集中砲火されて負けたけど」

その時の事を思い出して顔を青くし、二人から距離を取っている。

セーブモードは恭司の魔力を30%程使用し、イクサエンジンを起動させる基本状態で安定した戦いが可能。

バーストは50〜70%の魔力を使用して戦う本格的な戦闘形態で、イクサカリバー等もこの状態で使う事が多い。

ライジングは100%の魔力を使用し、イクサライザーで形態変化をさせる最後の切り札。

だが制御もかなり難しく、未だ完全には扱いきれていない。

……

……

…

「なん……だと……？ ユーノが女の子になっただって!？」

衝撃の事実、藍様の尻尾から出てきた。

「誰か好きな人が居たらしくて。それが男の人で、どうしても諦められないから性別を反転する儀式？をやったらしいの。これがユーノく……ちゃんの写真」

そうやってなのはが携帯で撮影した画像を見せてくる。

「なのは、興味津々で聞いてたよね。リアルBLとか言って興奮してたけど」

フェイトの発言でなのはが腐っているのが判明した。

「うわあ、何これ超美人でスタイル良すぎるじゃないか。頼んだらおっぱい触らせて貰えたりしない……んんっ！ 実はクロノが好きだった、とか言ったら凄い三角関係になるよね」

でもあのユーノがねー、とよく差し入れを持って遊びに行った日々を思い出している。

「えっと、ナチュラルにスケベでやる時はやるけどロリコン、でも一緒にいると癒されてピンチな時程ふてぶてしく笑う人なんだって言ってたよ」

「なん……だと……？ ヴィヴィオを連れて帰って来てよかった。そんなスケベでロリコンな変態野郎が居る場所にヴィヴィオを残して来なくて本当によかった」

俺GJ！と自分の取った行動を賞賛しているが、地味にナイスなブーメランを投げた気がする。

「だが恭司、それがお前である可能性を考慮していないんじゃないか？」

話を聞いていた藍様の鋭い言葉が刺さる。

「藍、どう考えても俺とは正反対だから違うだろ？」

やれやれって顔で言い切っているが内心嫌な予感でドキドキ。

「まずナチュラルにスケベ、これは当たっているはずだ。飛び立つ天狗のスカートを堂々と見上げているだろっ？」

そう、藍様は何でも知っている。

天狗を知らない二人だけど、何か思い当たる事があったのかうん
ん頷いていた。

「あれは文とはたてなりのサービスだと思ってる。一度バレて二人
にむところされかけたけど」

風に遊ばれ空を木の葉のように何時間も舞わされたのもいい思い出。

「次に恭司はやる時はやるのを私は知っているし、誰にも分け隔て
なく接してくる所は本当に癒される。ロリコンは違う……とは言
切れないな。それとよくピンチの時にふてぶてしく笑っているじゃ
ないか」

最近もデュエルでピンチになった時に笑っていたのを見ている。

「じゃあユーノと一緒に公衆浴場に行った時、いい感じについた筋
肉が素晴らしいって俺の背中を洗いながら褒めてくれたのは……」
アッー！

「恭司さん×ユーノ君より、ユーノ君×恭司さんのが……」

「男にまでモテるとは流石の私も引いた」

藍様はニヤニヤとからかうように恭司から距離を取っていた。

「はやての方のザフィーラも筋肉談義が出来る相手が居なくなっ
たって悲しんでたよ」

「女になったルカ子に告白されてタイムリープしたオカリンの気持
ちが今わかった」

……

……

……

…

「ヴィヴィオを嫁にしたいなら俺を倒してからにしろ！つて将来俺は言うんだ」

一度は言ってみたい台詞らしく、目がキラキラしている。

「あんな事言ってるけど全力で潰しにかかりそうだし、絶対突破できないよね」

「でもなのは、きつと愛の力で突破するんじゃないかな？」

「いや、それ以前にまずヴィヴィオを突破できないだろうな」
超がつく程のファザコンになっているヴィヴィオを手に入れる事から始めなければならぬ。

「でもそんな事をして、もしヴィヴィオにパパなんて大嫌い！つて言われたら俺は死んでしまうかもしれない」
超溺愛している娘に嫌いと言われる事を本気で恐れていた。

「恭司さん、豆腐メンタルすぎるよ……。あのヴィヴィオにお前はパパじゃない！つて言われた時も泣きそうになってたよね」
なのははそんな涙目になっていた恭司を見てキュンキュンしていたらしい。

「あれは今までの人生で三本の指に入るくらいにショックだった」
心許した相手からの拒絶には打たれ弱かった。

「以前フランドール・スカーレットと喧嘩した時も大嫌いと言われて一週間程再起不能になっていたな」
結局互いに謝りあうまでネガティブ具合に拍車がかかり、一時的に中二病が悪化して大変だった。

「私も駆け引きでちょっと恭司に冷たくしてみたら、かなり落ち込んでたの覚えてる」

普通に接していた人物がいきなりツンツンした態度になれば誰だつて落ち込むと思うが。

「あれワザとだったのかよ……。エリオとキャロにマジで相談したんだぞ。二人とも一緒に考えてくれたあれで機嫌が良くなったと思つたのに」

フェイトが好きなお菓子や料理を作るといふ結果になり、実際凄く喜ばれたので成功したと今まで思っていた。

「はやてがそうすれば恭司が私だけを見てくれるって言ってたから。『名付けて、ならば君の視線を釘付けにする作戦や！』って」

「グラハムかよ。しかもうまいこと釘付けにされたのが余計に悔しい」

あの時はフェイトの事しか考えていなかったから悔しさMAX。

「それなら私もはやてちゃんに言われた通りにやればよかったなあ
……」

「なのは、君はどんな事を言われたんだい？ お兄さんに言ってみ
？」

ちよっと不安になって尋ねている。

「えっと『名付けて……抱き締めたいな、恭司！まさに眠り姫だ！作戦や！』って」

「何だろう、まったく意味が分からないし分かりたくないしまたグラハムだし」

皆と仲良くなる為の足掛かりとして二人とよく会話をしている時に、やたらニヤニヤしていたのを思い出していた。

……

……

…

「とりあえず明日にでも里長の所に行つて二人が住む家を借りないとな。確かこの家の両隣が空き家だったはず」

毎日毎日ラブコメしてる家の隣に住むのは精神的に嫌だったらしく、離れた場所に引っ越されている。

「よろしくお願いします」

「藍、二人の仕事は結界の管理の手伝いがいいと思う。それと今日はリインフォースの部屋に泊まっていつてくれ」

結界の管理をするお仕事の人数が増えて藍様も楽になる。

藍様監修でお金もそれなりに稼げるから不自由しない。

自分の身を守れて、空を自由に飛べるのが最低条件。

「紫様が連れてきた以上、私も二人の世話をするべきか。恭司の守護騎士達だけじゃ回りきれない場所も二人が加われば行けそうだ」

「ありがとうございます！」
二人共働き先が見つかってホッとした顔をしている。

「レイジングハートとバルディッシュをしっかりと持って来たみたいだし行けるだろうよ。俺のデバイスも空を飛んで違和感のないサキガケがよかったなあ」

そしてマスラオにスサノオと強化されていくんですね、わかります。

「恭司、リインフォースの部屋ってどこ？ 荷物だけでも先に置きたいから」

サキガケで暴れまわる妄想をしている恭司の頬をつつき、フェイトが催促してくる。

「……ああ、こつちだよ。だけど不思議だわ。二週間ちよいである小さかった子達が同年代になってるなんてなー」
フェイトの頭をポムポムしてから立ち上がり案内している。

廊下

「私達からしたら何年も経っているのに、全く変わってなかった恭司さんのが不思議だったよ」

「俺のシャマルが八神のシャマルを見て勝ち誇っていた事しか覚えてないや」

今までは八神さんだったが、名字で呼び捨てにする事にしたらしい。

そんな雑談をしながら三人で部屋に向かっていった。

異世界からの移民が二人。

あの世界の主人公である少女の役割は既に終わっていたらしい。

新たなハーレム要員が加わり、戦力的に世界征服も出来る気がする。

おしまい。

50万PV特別編 Kのハーレム/最早ブレイクってレベルじゃない(後書き)

お二人にはこちら側に来てもらいました。

ハーレムって個々に対する時間の割合を誤ると刺されるよね絶対。

開闢のウルトラが一枚3000で売れるとかメシウマ状態。

無駄に集めてたから必要枚数以外売ってバトスピでも始めてみようか。

ルール全くわからないけど。

イチャイチャ風祝（前書き）

大体二人は毎回こんな感じ。

神様達による婿フラグは強固。

恭司は今回のフィニッシャーがお気に入りに入り。

イチヤイチャ風祝

守矢神社

「今度こそ……大吉ー!!」
気合いを入れておみくじを引いている。

早苗はにこにこしながら恭司が引いたおみくじを幾つも持っている。
白紙、白紙、白紙、白紙、凶と運が悪い。
白紙が出る度に早苗が嬉しそうに抱きついていたら運はいいのかもしれないが。

「てか何であるの白紙を入れたままにしてるんだよ。それを四枚も引くとか」

「神奈子様と諏訪子様が他にも引く人が居るかもしれないから、と結局全部恭司さんが引いちゃいましたね!」
「パーっと知らない人が見れば惚れてしまっただろう笑顔を向けている。」

「嬉しそうで何よりです。早苗にセクハラ発言すると本気にしてくるから困る」
「ちょっとした一言で何度も貞操がピンチになっているからか、迂闊にセクハラ発言が出来ない。」

「もう……裸の付き合いをした仲じゃないですか」

「いや、そっちが無理矢理風呂に入ってきただけだね。正直あの

時は貞操の危機を感じた。まあ、諏訪子さんとは裸の付き合いしてるけどさ」

眼福だったけど、と考えながら片手でおみくじを選んでいる。

「……私、恭司さんに会ってから毎日幸せです」

話の腰を折り、唐突に青空を見上げながらそんな事を呟きだした。

「いや、まあ、その……そうまで言われると照れる。逆にこんな俺に好意を持ってくれて嬉しいよ」

ぷいっと顔を背けながら早苗にそう告げる、恥ずかしがりやな恭司だった。

「ふふふ、どういたしまして」

何かいい雰囲気な二人だった。

……

……

…

「そういえばここに来る途中、天狗達に何か言われませんでしたか？ 徒歩で来たみたいですけど」

不思議そうに早苗が聞いてくる。

いつもなら早苗に拉致されるか、ダイガスタのどれかに乗ってくるから徒歩で来たのが不思議なようだ。

「最近もふらせて貰ってるわんわんおが案内してくれたから平気だった。天狗達には物珍しそうにジロジロ見られたのが居心地悪かつ

「ただ」

色んな事をして騒ぎを起こし、トップ記事になるような存在だからお近づきになりたい天狗も多い。

ただ手段がデュエルであつても一度天狗を倒しているから警戒もされている。

最近は各勢力のトップと仲が良いのも問題視されており、前々から親交のある文、椛、はたて以外の天狗は出来るだけ接触しないように言われていたりする。

何度か恭司を良く思っていない天狗や妖怪達に襲撃されているが、毎回必死に逃げている。

「今度からはちゃんと言ってくださいね？　すぐに迎えに行きますから！」

「ああ、うん」

「どうやって？　と思ったが面倒な事になりそうだったのでスルーしていた。」

「ちゃんと部屋で私の名前を呼んでくださいね。そうじゃないと聞こえませんから」

「だが断る。帰ったら速攻で部屋掃除するしかない」
盗聴されてるんじゃないかと怖くなっていた。

「それなら私が掃除しますから。将来の奥さんとして当然の事です」
「キリッ！」という擬音が聞こえてきそうなくらい凜々しかった。

「いつか貴女が超誇大妄想能力者になるんじゃないかと思うと夜も

眠れません」

貴方もいつか追い詰められて覚醒しそうで恐ろしいです。

早苗の部屋

「よし、まずはダンスを漁ろう」

部屋に招き入れられてキョロキョロと周囲を見回し、ふひひといやらしい笑みを浮かべている。

「いいですよ。逆にどんどん見て私に対する劣情を高めてもらえと嬉しいです。何なら持ち帰ってもらっても私は一向に構いません」

しかし、早苗は何をしても喜んでしまつから結局意味がなかった。

「そう言われると逆にどうでもよくなるから不思議……いやいや、マジで出してこなくていいから。さっきのは冗談だから！」

許可は出たがやる気がなくなり、早苗自ら取り出し始めて焦っている。

「これなんてどうですか？」

そんな恭司に下着を堂々と持ってきて見せている。

「い、いいんじゃない？」

かなり目が泳ぎまくっており、早苗の方を直視できない。

「ふふふ、押しには本当に弱いですねー」

「ううう」

自分から色々なセクハラをする事は出来ても、相手側から言い寄ら

れたりするとしどろもどろになってしまう。

「私、小さい頃の恭司さん見てみたいなー。それでこう色々私を好きになるように誘導したいです」

「永琳ならそんな薬が作れそうで怖いわ。それといい加減下着を片付けてくれないかな」

チラッチラッと目が行ってしまう。

「それで将来は私と結婚すると小さな恭司さんに言わせて、それを録音して突きつけます。身も心も手に入れる最高の手段だと思いませんかっ！」

何か想像して興奮したのかズズイッと迫ってくる。

「こっちのままの俺だったら間違いなくそうなるだろうけど、未来の俺の小さい頃は荒んでたから間違いなく無理」

家族を亡くし、信じていた正義に裏切られ、誰も頼れずに一人で生きていかななくてはならず、生きる為に勝ち続けなければならなかった故に。

「ふふ、そんな荒んだ子を私色に染める……胸が熱くなりますね！」

「なん……だと……？」

予想外の反応で正直困っている。

「まず四六時中一緒に居て、甘えさせて私に依存させる事から始めます」

「何か簡単に早苗に依存する自分が想像できて困る」

当時は家族や愛に飢えていたのを覚えており、そんな事をされたら

間違いなく依存してしまう。

「ああ、妄想するだけでたまらないです」

「……妄想中に悪いんだが、デュエルしようぜ。俺、早苗のデッキはあまり見た事ないんだよ」

以前1k111で葬ってから見えておらず、たまにはデュエルもしたかったからちようどよかった。

「いいですよ。じゃあ、また外に出ましょう」

デュエルディスクとデッキを手にして外に向かっていった。

……

……

…

境内

「こんだけ高い場所だと風が気持ちいいな。太陽も近いから暑いけど」

「真剣勝負ですから、手加減しないでくださいね！」

デュエルディスクを装着し、デッキをセットしている。

「わかってるよ。それじゃあ……」

「デュエル！」

「私のターン、ドロー！ アームド・ドラゴンLv3を召喚して、カードを二枚伏せてターンエンドです」

ATK1200

「俺のターン、ドロー！ 手札からE・HEROエアーマンを召喚し、モンスター効果を発動。デッキからE・HEROアイスエッジを手札に加え、エアーマンでアームド・ドラゴンLV3を攻撃！」
エアーマンの両肩に装備されたファンから強風が巻き起こり、アームド・ドラゴンに向かっていく。

ATK1800

「ダメです！ リバースカードオープン、収縮を発動！ エアーマンの攻撃力を半分にします！ 迎え撃って、アームド・スマッシュ！」

「それは予想外……うっ！」

収縮によって縮んだエアーマンがあっさりとアームド・ドラゴンに破壊されてしまった。

LP4000 LP3700

「……俺はカードを二枚伏せてターンエンドだ」

「私のターン、ドロー。アームド・ドラゴンLV3を墓地に送って、デッキからアームド・ドラゴンLV5を特殊召喚します！ さらにレベルアップ！を発動！ アームド・ドラゴンをLV7に進化させ

ます！」

レベルを一気に7にまで上げられてしまった。

ATK2800

「ちょっと不味い……」

「ダイレクトアタックです！ アームド・ヴァニッシャー！」
早苗の宣言と共にその腕を振り下ろした。

「うおおっ！！」

その一撃を受けて軽く吹き飛び、石畳に叩きつけられている。

LP3700 LP900

「ふふふ、ターンエンドです」

前回は何もさせてもらえず、今回ようやく与えられた一撃に凄く満足そうに笑っている。

「俺のターン、ドロー！ ……手札から永続魔法、未来融合・フューチャー・フュージョンを発動！ 俺はE・HEROエスクリダオを指定し、デッキからE・HEROフォレストマンとBF・精鋭のゼピュロスを墓地に送る。さらに未来融合を手札に戻し、墓地のゼピュロスを特殊召喚。そして俺はLPに400のダメージを受ける」

場に黒い羽のモンスターが現れ、HEROデッキだと思っていた早苗は驚いていた。

ATK1600

LP900 LP500

「そして再び未来融合を発動。E・HEROガイアを指定し、E・HEROボルテックとグローアップ・バルブを墓地に送る。そしてデッキの上から一枚を墓地に送り、グローアップ・バルブを特殊召喚する」
着々と墓地を肥やしている。

ATK100

「いったい何を……」

何がしたいのか早苗は理解できないらしく、困惑しながら見ている。

「魔法カード、戦士の生還を発動。墓地のE・HEROエアーマンを回収し、エアーマンを通常召喚して効果発動。デッキからE・HEROオーシャンを手札に加える」
着々とデッキを圧縮して墓地を肥やしている。

ATK1800

「それでも私のモンスターには勝てないですよ」

次のターンで軽く全滅させられるのに何で展開したのかと不思議そうだった。

「だから勝つためにやるんだよ、シンクロ召喚を」

「えっ……?」

HEROなのに?とわけが分からない事態に狼狽えている。

「レベル4 E・HEROエアーマンとレベル4 B F - 精鋭のゼピュロスに、レベル1 グローアップ・バルブをチューニング!」
空に浮かぶ二体のモンスターが一つの輪に包まれて八つの星に変わっていく。

「レベル9のシンクロモンスター……」
ぽかーんとした顔で空を見上げている。

「破壊神より放たれし聖なる槍よ、今こそ魔の都を貫け! シンクロ召喚! 氷結界の龍 トリシューラー!」
恐ろしい程の威圧感を放ちながら氷結界最古の龍が早苗の前に姿を現した。

ATK2700

「っっ……」

攻撃力が100低いと分かっているにもかかわらず後ずさってしまふ。

「トリシューラの効果発動。このカードのシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・場・墓地のカードをそれぞれ一枚まで除外する事が出来る。俺は早苗の手札にある真ん中のカードと場のアームド・ドラゴンレベル7と墓地のアームド・ドラゴンレベル5を除外させてもらふ」

トリシューラの三つの首が指定したカードにブレスを吐き出し、軽く吹き飛ばした。

「きゃっー！」

「トリシューラでダイレクトアタック！」

三つの首が早苗を向き、一斉にブレスを吐き出した。

「きゃあああっー！！！」

目を瞑り、腕で衝撃を防ごうとしたが吹き飛ばされている。

LP4000 LP1300

「これでターンエンドだ」

「ふう、エンド前にリビングデッドの呼び声を発動してアームド・ドラゴンレベル3を特殊召喚します。そして私のターン、ドロー。…

∴ L V 3を墓地に送ってデッキからL V 5を特殊召喚します」
なんとか持ち直そうとしたのが成功したのか、引いたカードを見て嬉しそうにしている。

ATK 2400

「嫌な予感が……」

「フィールド魔法、デザートストームを発動！ 全ての風属性モンスターは500ポイントアップして、守備力は400ポイントダウンします」

どうやら全体強化のフィールド魔法を引いたらしい。

ATK 2400 ATK 2900

DEF 1700 DEF 1300

「……」

「これでトリシューラを攻撃します！ アームド・バスター！」
早苗の宣言と共にアームド・ドラゴンがトリシューラに向かって走り出した。

「速攻魔法発動、禁じられた聖杯。トリシューラの効果を無効にし、攻撃力を400ポイントアップする。迎え撃て、トリシューラ！」
聖杯の中身を飲み干し、走り寄るアームド・ドラゴンに三つ首から

強力なブレスを吐き出して消し飛ばした。

ATK2700 ATK3100

「そんなっ！」

LP1300 LP1100

「危ねえ……」

またLV7を出されていたら現状では打開出来なかった。

「……ターンエンドです」

まだ諦めておらず、いい目をしている。

「俺のターン、ドロー！ 魔法カード、融合を発動！ 手札のE・HEROオーシャンと場の氷結界の龍トリシューラを融合！」
二体のモンスターが混ざり合っていく。

「……」

真剣に見ている

「融合召喚！ 来い、波動竜騎士ドラゴエクイテス！」

青い鎧を身に纏い、ジャベリンを構えた竜騎士が空から舞い降りた。

ATK3200 ATK3700

「風属性だから攻撃力が500ポイントアップするんですね……」
「フィールド魔法は相手にも影響を与えてしまいが故に諸刃の剣にもなりえる。」

「これで終わりだ！ スパイラル・ジャベリン！」
空高く飛び上がり、早苗に向かって構えたジャベリンを勢い良く投げつけた。

「リバーズカードオープン、魔法の筒！ 自分の攻撃でやられてください！」
相手の効果さえ分かっていたら詰んでいた事に気づけたのに。

ジャベリンが筒に吸い込まれ、魔力の砲撃としてドラゴエクイテスに跳ね返っていく。

「いい罠だ。感動的だな。だが無意味だ。ドラゴエクイテスの効果発動。このカードが表側攻撃表示で場に存在する限り、相手から受ける効果ダメージは全て相手が受ける事になる。ウェーブ・フォース！」

目前に迫った魔力の砲撃がドラゴエクイテスの起こした波動により跳ね返され、早苗に向かって逆流し始めた。

「えっ……きゃああああっ！！！」

予想外の効果に呆然としてしまい、一気に飲み込まれていった。

LP1100 LPO

「格好つけたけど危なかった……。あのままトリシューラで攻撃してたら負けてたわ」

格好良く決めたくて融合したのがプラスになっていた。

「あんな効果を持った融合モンスターを使うなんて聞いてないですよ……」

勝てると確信していたのに跳ね返されて負けたのが相当ショックだったらしく、俯いている。

「でもよくレベルモンスターを手に入れたな。しかも扱い方が上手いし。……そんな早苗に俺はご褒美を与える」

「そのご褒美はキスですか？」
バツ！と顔を上げて迫ってきた。

「いや、その発想はおかしい。シンクロモンスターとチューナーモンスターを早苗にも渡すから」

カバンの中をこそごとと漁り、デッキケースを差し出している。

「あの、でも本当にいいんですか？」

デッキケースを受け取りながら上目遣いで尋ねている。

「ああ。べ、別に改めて渡すのが恥ずかしくてデュエルに頼ったとかそんなんじゃないんだからな！勘違いするなよな！」

照れたのか、ぷいっと顔を背けてナチュラルにツンデレっておられる。

「ありがとうございます。……ドラグニティ、大切にに使わせてもらいます」

デッキケースの中身を確認し、ぎゅっと愛おしそうに抱えている。

「そ、そろそろ母屋に戻ろうぜ。天狗に見られたら洒落にならないし」

まだ恥ずかしいのか、そう言つと一人で歩き始めた。

「そうですね。私の部屋でお話とかしましょう」

後を追つて駆け寄り、空いている手で恭司の手を握り歩いていく。

「惚れてまうやろーって言う芸人いたよね」

一瞬恥ずかしそうにしたが、早苗の手を握り返して一緒に歩いていく。

「恭司さんも性格が丸くなってますね。会った当初だったら握り返してくれませんでしたよ」

「早苗は会つた時よりもさらに激しくなってるよね」

「これでも手加減してます」

「ちよっ」

二人とも仲良く母屋の方に歩いていった。

早苗と一緒のある一日。

照れ隠しにデュエルをしてからシンクロモンスターを譲渡。

遂に夏も到来。

続く。

イチヤイチヤ風祝（後書き）

渡したのはガスタではなくドラグニティ。

ガスタではない事に特に理由はない。

あと一週間でカードゲームが出来るギャルゲーことTF6が発売する。

ツアンディレの名前には小さな愛が入ってるよね。

聞いた話だとプラシド合体verが出るらしいけど、負けたら上半身だけになるのかな。

夏と向日葵と新たな友達（前書き）

実は知り合い。

デュエリスト仲間が増える。

意外とドジっ娘。

夏と向日葵と新たな友達

季節は夏、こそこそ変装して遊びに来るリリーが見れる時期。そんな中、暑さに弱い男は黙々と歩いていった。

「うわぁ……見るよ相棒、見事な向日葵畑だぜ」
視界いっぱい向日葵がまるで絨毯のような場所に到着している。

「……！」
実体化して頭に乗っていたダンディライオンが興奮しながら見回していた。

「よいしょっと。ちゃんと帰ってこいよー！　しかし向日葵が凄いなこれ」

頭から降ろし、駆けていったダンディライオンを見ながら呟いた。

視界いっぱい向日葵、少しだけ不気味だなと思いつつも眺めている。

花と喋れるのかダンディライオンが嬉しそうに向日葵達と交信しているのが見える。

「……そしてさっきから隠れてこっちをチラチラ見ている日傘の持ち主。風見さん、何やってるんすか」
何かもう全て丸見えな隠れ方である。

「……バレているなら仕方ないわね。ようこそ私の向日葵畑へ」
見つかったのが恥ずかしいのか、照れながら立ち上がってこちらにきた。

「いや、貴女が『一週間後にあつちの方角にある草原に来なさい。……来るわよね？ 絶対に来てね？』って言うから来たんだが」
タオルで汗を拭いながら幽香をジト目で見ている。

幽香とはリグルやチルノといった、見た目お子様軍団と遊んでいる時に知り合っていた。

幽香が輪の中に入りたそうにしながら隠れて見ており、その姿に気がついて何となく見ていると目があつてしまったらしい。

気まずい二人だったが恭司が手招きをし、幽香を呼び出して話を聞くことになった。

そして最強に近い妖怪の突然の登場に、遊んでいた皆が一斉に恭司を盾にした事は言うまでもない。

「今日は子供達と楽しく遊ぶ方法を教示してもらつね。恭司だけにね」

ドヤアつと言いたかった事が決まり嬉しそうにニコニコしている。

「何この……何？」

幽香のドヤ顔を見て思わず反応に困ってしまった。

……

……

…

「……だから風見さんもデュエルをしようよ。デュエルをすれば仲良くなれるし分かりあえるし、何よりも楽しいしで一石二鳥どころじゃない」

「でも私はカード持ってないし……」
何だかんだで二人とも子供好きだからか、いい友人関係を築いている。

「カード一式は俺がプレゼントするから」
カバンから大量のカードとデュエルディスクを取り出した。

「……でも、私やり方わからないもの」

「俺が手取り足取り教えるよ。そうすれば風見さんも一緒に遊べるようになるしね」
最近サボっていた布教活動をしている。

「わかったわ。ちゃんと教えてもらうからね」
そう言うのとカードを手に取って見始めた。

「まずはカードの種類の説明から……」

数時間後

「ダンディライオンはタンポポのはずなのに向日葵と一緒に日光浴とかシユール」
一生懸命デッキを組んでいる幽香の隣に腰をおろし、向日葵畑で日光に当たるダンディライオンを眺めている。

「でもいいの？ これ、私が使っても」
幽香はヘルブランブルやナチュル等のシンクロモンスターを手にしていた。

「うん。ブラックローズはちょっと無理だけど、風見さんになら渡してもいいと思うから」

特に何も考えずに渡したとは口が裂けても言えない。

「ありがとう」

「いえいえ。それより早速デュエルをしてみよう」

組み終わったのが分かったらしく、デュエルディスクを手渡した。

「へえ、これで遊べるの？」

受け取ってまじまじと見ている。

「そつだよ。こう付けて、こうする」

唐突にデュエルディスクを宙に放り投げ、格好良く左腕に装着してデッキをセットした。

「えっ、今のどうやったの？ ちょっとそれ私もやりたいから教えてなさい」

予想外の恭司の動きを見て、目が少しキラキラしている。

「風見さんは初心者だし、危ないからダメ。慣れてきたら教えてあげるから今は我慢してくれ」

「……仕方ないわね」

しょんぼりしながら普通に装着していた。

向日葵畑を背景に少し距離を取って向き合った。

妖精達も興味津々なように向日葵の影から二人を見ている。

「デュエル！」

「私の先行、ドロー。永続魔法、種子弾丸を発動。そしてイービル・ソーンを守備表示で通常召喚するわ。これで種子弾丸にプラントカウンスターが一つ」

手本を見せようと思ったが先行を持っていかれてしまっていた。

DEF300

プラントカウンスター1

「これってもしかして……」

何を想像したのか分からないが、少し顔色が悪い。

「イービル・ソーンの効果を発動。このカードをリリースして恭司のLPに300ポイントのダメージを与え、デッキからイービル・ソーン二体を攻撃表示で特殊召喚させてもらうわ。イービル・バースト！ さらに種子弾丸にプラントカウンスターが一つね」

恐ろしさすら感じる美しい笑顔で淡々と進んでいた。

ATK100×2

プラントカウンスター2

「うあつ！ なにこれ怖いっ！」

破裂したイービル・ソーンの棘が突き刺さり、精神的に大ダメージ

を受けていた。

LP4000 LP3700

「さらに手札から永續魔法、超栄養太陽を発動。レベル1のイービル・ソーンをリリースして、デッキからローンファイア・ブロッサムを特殊召喚。これでプラントカウンターが三つよ」「うまく行っているのが嬉しいのかニコニコしている。

DEF1400

プラントカウンター3

「嘘だろ……」

バーンデッキに先手を取られ、どうしようもなくなっていた。

「ローンファイア・ブロッサムの効果でイービル・ソーンをリリースして、デッキからコピー・プラントを特殊召喚。そして種子弾丸に四つ目のプラントカウンターが乗ったわ」「もう惚れてしまいそうなくらいの満面の笑みを浮かべている。

ATK0

プラントカウンター4

「何であんなに嬉しそうなんだろっ……」

「コピー・プラントの効果発動。植物族であるローンファイア・ブロッサムと同じレベル3にするわ。そしてレベル3のローンファイア・ブロッサムにレベル3のコピー・プラントをチューニング」
初心者なのに順調にデッキを回し、シンクロ召喚まで行っていた。

「まだ何もやってないのに、俺の体はボロボロだよ……」
実際はさっきの小さな効果ダメージだけだが、精神的に大ダメージを受けている。

「私の前に現れた事を後悔して散りなさい。シンクロ召喚！ 野薺
薇の女王、ヘル・プランブル！」
即興らしい召喚台詞まで披露してくれている。

ATK2200

プラントカウンター5

「……」

現れたモンスターを見て凄い嫌そうな顔で観察。

「このカードがある限り、植物族以外のモンスターを召喚・特殊召喚するのにLPを1000支払ってもらわね。そして私はプラントカウンターが五つになった種子弾丸を墓地に送って、このカードに乗っているプラントカウンターの数×500ポイントのダメージ

を貴方に与えるから。ふふふ」
カードを墓地に送ると棘だらけの植物が現れ、恭司の方に向けて口のようなものを向けていた。

そしてそこから勢い良く射出された五つの種子弾が直撃している。

「うっ！……種エ」

予想以上のダメージで逆に冷静になっていた。

LP3700 LP1200

「カードを一枚伏せてターンエンド」
満足そうにターンを終了させていた。

「俺のターン、ドロ。……モンスターをセット、カードを二枚伏せてターンエンド」
起死回生を狙うにはシンクロ召喚を行わないといけないが、その為にはヘル・ブランブルをどうにかしなければいけない。

「私のターン、ドロ。……手札からフェニキシアン・シードを召喚。そしてフェニキシアン・シードを墓地に送り、手札からフェニキシアン・クラストー・アマリリスを特殊召喚」
目玉のついた種のようなモンスターが一気に開花し、綺麗な花のモンスターが特殊召喚された。

ATK2200

「あ、これは詰んだ」
除外系罫を積んでおらず、アマリリスを出された時点で詰んでしまった。

「アマリリスで伏せモンスターを攻撃！ フレイム・ペタル！」

「だがシールド・ウイングは二度戦闘によって破壊されない」
しかしアマリリスの効果の発動は許してしまうので苦々しい顔をしている。

「アマリリスは攻撃をした時、ダメージ計算後に破壊されるわ。そしてこのカードが破壊されて墓地に送られた時、相手LPに800ポイントのダメージを与えるの。スキャッター・フレイム」
効果によりアマリリスが爆散し、衝撃が恭司に襲いかかる。

「っっ」

少ないLPがさらに削られていく。

LP 1200 LP 400

「私のターンはこれで終わりよ。エンドフェイスに墓地の植物族であるイービル・ゾーンを除外してフェニキシアン・クラスター・アマリリスを守備表示で特殊召喚するわね」

再び墓地からアマリリスが現れ、幽香を守る壁になっていた。

DEF0

「俺のターン、ドロー！ ……モンスターをセットしてターンエンド」
諦めがついたらしく、爽やかな笑顔でターンを終了させている。

「私のターン、ドロー。アマリリスを攻撃表示に変更して、シールド・ウイングを攻撃！ フレイム・ペタル！」
勝ちが確定し、ホツとした顔で攻撃を仕掛けていた。

「効果ダメージで俺のライフは0、と」
シールド・ウイングは攻撃を耐え切っているが効果ダメージはどうしようもなかった。

「そうね。スキャッター・フレイム！」
再びアマリリスが爆散し、その衝撃が恭司に襲いかかった。

「うっ！」
地味に削られ負けていた。

LP400 LP0

「……風見さん、出来るだけ子供相手にはバーンデッキはやめてあげてね？」

自分はいいがチルノ達にはやめてね、と座り込みながら言っている。

「……そうね、私も嫌われたくないから」

満面の笑みを浮かべていたが、戦い方があれすぎて自分でも子供に嫌われると理解したらしい。

「うんうん。……ダンディライオン空戦仕様だな」

ちらつと向日葵畑を見ると、ダンディライオンが妖精に掴まれて空を飛んでいた。

「ねえ、私の家に来ない？ 今日のお礼にお茶をご馳走するからデュエルディスクはそのまま、畳んでいた日傘をさしている。」

「あー……それならご馳走になろうかな。風見さんとはゆっくり話をしてみたかったし」

最高に危険な妖怪だから絶対に近づくなと慧音や阿求に言われているが、実は子供が好きという事を知って仲良くなりたかったらしい。

幽香の家の一室

「お、お邪魔します」

幽香に連れられて中に入っているが、ちよつとだけ緊張していた。

「そんな緊張しないでいいわ。私は貴方を食べたりしないから少し傷ついたような顔で緊張している恭司を見ていた。」

「いや、緊張してるのは女の子の家に招待されたからなんだけど。」

あー、何回お呼ばれしても緊張する。ついつい部屋を見回したりしている。

「お、女の子……」
怖がっている訳ではなかったのでホッとして、さらに女の子扱いを
してもらってドキドキしていた。

幽香に関する話は大体尾鱈が付いて人妖問わず怖がられている。
先入観から恐ろしい存在だと思われて誰も近づこうとせず、少し寂
しかったらしい。
そんな幽香を妖怪として恐れる所か女の子として扱い、気にせず
子供達との遊びに誘ってくれた恭司は救いのような存在だった。

「風見さんだけじゃなくて、女の子の生活空間に足を踏み入れてい
ると考えると緊張するんだよね」
想像力が逞しく、普通にエロい人だから仕方がない。

「貴方は紳士なのかHENTAIなのかよくわからないわね。まあ、
別にいいけど。ちょっと待ってて」
お茶とお茶菓子の準備をしに行ってしまった。

十数分後

「どうしてこうなった」
何故か腰にタオルを巻いて風呂に入っている。

『急いで洗濯してるから！』
幽香のそんな声が聞こえ、仕方なく風呂を楽しみ始めた。

お約束の中のお約束、お茶を持ってきた幽香がつかまらずいてぶちまけ

られていた。
冷たいお茶だったのが唯一の救い。

「まあ、いつか。日焼けが凄いな……今度上半身裸になって庭で水遊びでもするか」
ギャルゲーの主人公みたい！と内心テンションが上がっており、暖まりながら洗濯が終わるのを待っていた。

「……………」
水の入った桶にダンディライオンが居り、幸せそうにくつろいでいた。

一時間後

「おー、ありが……あれ？俺ってパンツは渡さなかったよね？」
乾いた服一式を見て喜んでいる時にある事に気がついていていた。

『っ、ついでよ』
すぐに声が聞こえる事から、脱衣場の外で待っているらしい。

どうやら気が動転していたようで、上から下まで全部洗濯したらしい。
折角出来た友達に嫌われたくない慌てた所を想像すると、少し可愛らしい。

「まあ、風見さんが嫌じゃなかったならいいんだけどさ」
いそいそと着替えていた。

「花の香りがして物凄く爽やかだ。これが俺のフラワーフォームか」
服から香る花の匂いに超ご機嫌だった。

「今度はちゃんと準備してあるから」
そう幽香に言われて見てみると、テーブルにお茶とお茶菓子が並んでいた。

「それじゃあ、風見さんお互いについて色々話そうか」
椅子に座り、ニツと笑っている。

「ええ、色々話しましょう。……それと私の事は幽香でいいわ。私は貴方の事を恭司って呼んでいるんだから」

「幽香さん」
一応まだ呼び捨てにはしないらしい。

「さんも付けなくていいわよ。私達はもう友達なんですよ？ ほら、あの日に一度会ったら友達って」
ちよつと照れていた。

「そうだな、それでは幽香と。……ああ、この響きは実に君に似合っている」
キリッとした顔で決めたのは、ここでしか言うチャンスがないと思っただから。

「うわー、キザな台詞ね。でも、嫌いじゃないわ」

「応。ちなみにさ」

そんな二人のティータイムは続いていった。

実は既に知り合っていた妖怪。

色々と運良く仲良くなっていた。

そんな彼女と友達になり、ますます手をつけられなくなっている。

続く。

夏と向日葵と新たな友達（後書き）

うちの幽香はこんな感じ。

孤高で危険な妖怪のイメージが先行しているが、実際は子供好きの寂しがりや。

TF、アポリアシナリオのハート3が予想外で面白かったな。

シエリーシナリオのラストを見て、主人公はシュタゲのオカリンみたいに無限ループするんじゃないかと思えた。

というかそう思わないとやってられん。

夏と水着と種合戦（前書き）

ずっとTFやってました。

夏と水着と種合戦

庭

「大きな子供用プールが霖乃助の所にあつてよかつた」
サングラスにトランクスタイプの水着を着用してプールに入っている。

「何か涼しそうでいいなあ」

妹紅はそんな恭司を指をくわえて羨ましそうに見ている。

「そう言うだろうと思つて水着を用意してある。さあ、どうぞもこたん」

そう言つてサイズがぴったりのスクール水着を差し出した。

もちろん未使用品を紫に用意して貰っているみたいだが、何故妹紅のサイズを知っているのかは分からない。

「ちよ、ちよつと着替えてくる！」

涼しげで楽しそうにしている恭司を見ていて限界だったらしく、嬉しそうに走り去つて行った。

「ふっ……女の子とプールとか俺もすっかりリア充具合が板についたぜ」

水鉄砲で遊びながらクールに決めている。

……

……

…

「その水着姿、イエスだね！ 普段隠してる脚とかふつくしい」
じろじろと水着姿の妹紅を舐め回すように見ており、サングラスで
分からないが少しいやらしい目付きになっている。

「やっぱり恥ずかしいよ……」
肌の露出が恥ずかしいようで、もじもじしながら腕で身体を隠して
いる。

「うーん、妹紅萌え。リボン外した姿も可愛い」
プールに入ってテンションが上がっており、グツ！とサムズアップ
している。

「うう、恥ずかしい……あ、でも冷たくて気持ちいい」
寝められた事と肌の露出で恥ずかしそうにしながらもプールに入っ
てきた。

「西瓜も買って冷やしてあるし、プールから出たら食べようぜ」

「それいいねー。……あ、何これ？」
水鉄砲を見つけたらしく、手に取って聞いてきた。

「それはこう使うんだよ。ほれ」
もう一つの水鉄砲で妹紅の顔を撃ち、首やら頭やらを立て続けに狙
っている。

「きゃっ！ や、やったね！」
びっくりした妹紅が仕返しに撃ち返し始めた。

数十分後

「二人とも涼しそうで何よりだ」
キヤツキヤツと騒ぎながら楽しそうにしている二人を、慧音が縁側からジト目で見下ろしている。

「いや、その……」

「あの、ごめん……」

二人共気まずそうに目をそらしながら謝っていた。

流石にスタイルのいい慧音の分まで水着を用意していない。
理性のリミッターがマツハになってしまつと分かっているし、あくまで友人として仲の良い妹紅の分だけ用意してあった。
水遊びに付き合ってくれそうなのが妹紅だけという可能性も考慮した結果でもある。

「いや、いいんだ。だが今度は私も混ぜてもらつ」

「まあ、まだまだ人が入る余裕はあるけど……でも慧音の水着がないよ」

かなり大きい子供用プールのようにまだまだ余裕があり、後数人は入れそうだった。

「なに大丈夫だ。あのスキマ妖怪に私も頼めばいい」
艶やかな笑みを恭司に向けており、この夏二人の関係のステップアップを狙っているのは確定的に明らか。

「ゴクリ……」

慧音の水着姿を妄想するだけで表情が緩み、唾を飲み込んでいる。

「むっ」

そんなだらしのない表情の恭司を水鉄砲で撃っている。

「ふふふ」

……

……

…

「あっつー……」

「ここから出たくない……」

「足だけでも涼しいな」

慧音は椅子を持ってきて足だけ浸かっている。

「慧音のあんよが目の前に。その美脚で顔を踏んでください」

こっちは暑さで頭が湯だっており、サングラスをかけて仰向けになっていた。

「今年は暑くて仕方ないね……」

気に入ったのか、妹紅は水鉄砲で遊びながら呟いている。

「恭司、お前は後で永遠亭で診てもらった方がいい」

そう言いながらも足で仰向けになっている恭司のお腹の辺りを触っていた。

一時間後

「よし、西瓜を食べよう」

嫌々プールから出て着替え、ダルくて眠いのを堪えながら西瓜を切っている。

「くかー」

妹紅は遊び疲れたらしく既に寝ていた。

「…………妹紅って最近やりたい放題だよな」

香霖堂で買ってきたテーブルにスイカを乗せた皿を置いている。

「妹紅がこうなったのも恭司が来てからだな。それまでは妹紅がここまで自由に振る舞う事はなかった」

「それは良い意味で？」

食塩を置き、座布団に座った。

「ああ、良い意味でだ。輝夜とも殺し合いしかしていなかったのに、最近じゃ恭司を挟んで一緒に遊んでるらしいじゃないか」

「あー、うん。でもスマブラとかやると二人は潰し合ってるけど。

最近ツイスターで俺が酷い目に…………。ほら、妹紅起きろ」

小皿を三つテーブルに置き、妹紅を揺すって起こしている。

「んう…………」

振動で目覚めたらしく、目を擦りながら身体を起こした。

十数分後

「ぷっ！」

「ぷっ！」

「二人ともはしたないぞ」

妹紅と恭司は縁側に腰掛け、庭を見ながらスイカを食べて種を吐いていた。

「だって……ぷっ！ 種がたくさん……ぷっ！」

「いちいちお皿に……ぷっ！ 出してられないよ……ぷっ！」
仲良く並んで座り、種を吐いている。

「なら私も」

慧音も恭司の隣に座り、スイカを食べ始めた。

「よし、バッチコーイ！」

さっと慧音の前に陣取り両手を広げて種を受け止めようとしている。

「そんな馬鹿な事やってないでスイカ食べなよ」

そんな恭司を妹紅が引つ張って無理矢理隣に座らせていた。

「ちえー」

心底残念そうにスイカをかじっている。

「なんなら私がやってあげようか？ ぷっ！て」

「私は恭司がいいなら幾らでも……」

慧音は頬を赤らめ、二人に聞こえないくらいの声でもじもじしながら呟いていた。

間違った方向に乙女具合が暴走している慧音だった。

「いや、いい。妹紅と違って俺は変態じゃないんで……」
急に素に戻ったらしく、妹紅の発言に逆に引いていた。

「えっ、何この流れ」

「それに、この前永遠亭で輝夜と同じように種で戦ってたべたになっただんだよ。最終的に永琳のゲンコツが俺達に繰り出されて終戦したけども」

どうやら輝夜と第一次種合戦があったらしい。

月のお姫様と何やってんだこいつって感じが凄い。
他にも

「……ぷっ!」

「ちよっ! やーめーろーよー!」

妹紅が輝夜の名前を耳にした途端に種を吹き出してきた。

「輝夜とは出来て私とは出来ないって言うの!?!」
何か凄い誤解を招きそうな発言をしている。

「やめて! 何かそこだけ聞かれたら色々ヤバイから! ……げほっ!
妹紅の吐き出した種飲んじゃったー!?!」

反論してる間にも種を吹き出してくるから飲み込んで当然だった。

「……………ぷっ！」

じーっと見て、話を聞いていた慧音もさりげなく参加し始めている。

「慧音まで……………。また戦争がしたいのか、アンタ達は！」

スイカを手にして二人から距離を取ったが、既に顔やら服やらに種が付着している。

「二対一で勝てると思ってるの？」

「それは蛮勇と言うものだぞ？」

ストレス解消の為か、慧音も既にノリノリだった。

「ちよつとノツてみただけなのに、何この空気」

二人の目がキラキラ光っているように見えて萎縮している。

……………

……………

……………

「種とスイカの果汁でべつたべたなんですが」

気持ち悪さに顔をしかめている。

「慧音凄かったよ！」

「妹紅も凄かったじゃないか」

互いに健闘を称えあっていて、恭司の声が聞こえていないようだ。

「妹紅の種と一緒に飛んできたスイカの果汁、略して妹紅汁だな。

慧音のも略すと慧音汁……なにそれ卑猥。一部の方々が歓喜の声をあげそう」
相変わらずのHENTAI具合だが、あながち間違っていないから困る。

「風呂を沸かしてやるから恭司は先に入ってくるんだ。服は私が洗濯しておく」

こちらを振り向き慧音がそう言った。

「うん……」

種を出来るだけ払い落とし、一人で風呂場に向かっていった。

……

……

…

風呂に入り、再び庭に戻ってくると慧音と妹紅がデュエルディスクをつけてデュエルをしていた。

よく見てみると妹紅の場には既に何もなく、慧音の場には妥協召喚されたらしいバルバロスとガンナードラゴンに発動されたスキルドレインがあった。

青冷めた顔の妹紅が少し可哀想に見える。

「ガンナードラゴンで妹紅にダイレクトアタックだ」

その巨体を活かし、そのまま妹紅に向けて突撃していった。

「わあああああー!!」

あっさり吹っ飛ばされ、LPも0になっている。

「うわあ、慧音すげえ……」

「恭司、見てたのか。私のデッキもようやく完成したぞ」
嬉しそうにデュエルディスクを付けた腕を持ち上げて見せている。

調整役として相手をしていた妹紅はあっさり負けてしまった事にい
じけていた。

無意識にイチヤイチャし始めた二人をチラツチラツと見て心配して
くれないか確認している。

「いいよいよよ、どうせ私なんて……」
結局心配してくれない二人に体育座りでぶつぶつ呟いていた。

「それじゃあ、今度は俺とデュエルしよう。今日は眠くて無理だか
ら」

風呂に入ってさらに眠たくなり、今は何も集中できなかった。

「ああ。敗者には罰ゲームもありにしよう」

「……」
妹紅は体育座りのままチラツと二人の様子を伺っている。

「……まさか妹紅にキュンキュンさせられる日が来るなんて」
目が合い、真っ赤になって膝に顔を埋めた妹紅を見て恭司はキュン
キュンしていた。

こんな夏の日。

続く。

夏と水着と種合戦（後書き）

慧音とはその内デュエル。

皆さんの周りの店で、まだセイクリッドは稼働していますか？

自分の近所の店では全滅しています。

まだチェインが一枚しかないのに本当に困る。

5kでウルトラがエメラル2、プレアデス2、チェイン1と欲しかったチェインだけ一枚しか当たらないとか勘弁。

見た目小さい子ばかり（前書き）

弦魔人ムズムズリズムって何か口に出して言いたくなる。
太鼓魔人テンテンテンポはそんなに言いたくならないのに。

見た目小さい子ばかり

「はい、チルノくん。ここの答えは何？」

この暑さの中スーツ姿で眼鏡をかけ、アリスに作って貰ったキヨちやん人形を左肩に乗せた恭司がチルノに尋ねている。

青空の下、本日は何度目かの恭司先生による授業が開催されていた。今日の生徒はチルノと大妖精しかいないが、たまにミスティアにリグル、ルーミアに三月精やらも来たりしている。

「えっと、ダンディライオンが3でサイバードラゴンが5だから…
…8!」
手を使って数え正解を導き出した。

「正解だ、ご褒美に後で頭を撫で撫でしてあげよう」

「やったー!」

正解したのと撫で撫でしてもらえるので二倍喜んでいる。

「じゃあ、次は大ちゃんだな。パワーボンドで融合召喚されたサイバー・ツイン・ドラゴンにリミッター解除を使いました。そして相手の場に一体だけ存在するブラック・マジシャンに攻撃をしてオネストを手札から使用しました。相手はこのターン合計で幾らのダメージを受けるでしょう?」

算数の授業のようなデュエルの授業のような事をしている。

「えっと、まずサイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃力は2800です。パワー・ボンドは機械族の融合モンスターの攻撃力を二倍にし

ますから5600になります。リミッター解除も機械族モンスターの攻撃力を二倍にしますから……えっと、攻撃力は11200です。それで攻撃するときにはオネストを使うことでブラック・マジシャンの攻撃力2500を加えて13700。サイバー・ツインは二回の攻撃が出来ますから最初の攻撃で11200、二回目の攻撃で13700。合計で24900のダメージです」

すらすらと計算して答えを導き出していた。

「正解、ってか過程まで説明してくれたから文句なし」
うんうん頷いて満足そうにしている。

「あ、あの、私にも後でご褒美を……」
もじもじしながらリクエストしていた。

「ここまでの計算が出来るようになった大ちゃんには、特別に俺が出来る範囲で何でも一つだけ言う事を聞いてあげよう」
死ねとかはやめてね、と言いながら大盤振る舞い。

最初は妖精故にチルノ程ではないが苦手だった勉強も今では楽しく学べるまでになっていた。

その成長が嬉しくての大サービスである。

「えっと、その……」

頬を赤らめ、指を合わせてもじもじしていてかわいい。

「……はっ」

そんな大妖精を見て持ち帰りたいと考えていると、紅魔館のやや上に夥しい量の触手が生えた黒い巨大な球体に一つ目の妖怪が現れていた。

『たまにはロリコンもいいよね!』
それは威厳のある声でそう言って消えていった。

「べ、ベアード様だ……あのロリコン云々については二次設定じゃなかったんだ……」

しかしその声は恭司にしか聞こえていなかったのか、目の前の二人はきよとんとした顔で恭司を見ていた。

あれはただ恭司が見た幻の可能性が高い。

「と、とにかく授業を続けよう」

……

……

…

「それでは良き週末を」

終末ではなく週末だったのでドクター真木イを真似、お昼頃にチルノと大妖精を見送った。

チルノは存分に頭を撫でられて満足し、大妖精は次までに願い事を考えてくると言って去っていった。

「……さてと、俺も帰る。キヨちゃん人形が皆に不評で俺は悲しい」
嘆きながら勉強に使った資料を片付け、里に向かって歩き始めた。

紅魔館

「……咲夜って凄い。咲夜ー、俺だー結婚してくれー」
気がついたら紅魔館の中に居て椅子に座らされており、思わず棒読みで求婚していた。

遠くの方でガチャン！と何かが割れる音と騒ぐ声が聞こえてくる。

「咲夜は私の従者だからダメ。恭司がなかなか来ないから迎えに出させたのよ。ちょうど近くにいてよかったわ」
目の前でレミリアが優雅に紅茶を飲んでいる。

「なるほど、目の前の合法ロリが今回の拉致の犯人か。相変わらず素晴らしいフォルムですね」
肩のキヨちゃんと一緒にちよつと小馬鹿にしていた。

「ロリって言うな！」
カップをソーサーに置き、がおーっと怒っている。

「でも需要はあるんだからロリでもいいじゃないか」
そう言って目の前に置かれている紅茶を飲んだ。

「ふふん、それは恭司にも需要があるって事？」
いそいそと恭司の隣に椅子を運んでいる光景はシニール。

「まあ、癒されはするよね。その癒される存在のフランに守ってあげらって言われたのが辛い。逆に守ってあげたいけど俺はこじじや

弱いからなあ」
男のプライド粉碎だった。

「いいじゃない弱くても。フランだけじゃなくて私も恭司を守ってあげるわ。か、勘違いしないでよね！ 恭司が居なくなったらフランが悲しむから、仕方なく守ってあげるってだけなんだからね！」
何故か頬を赤らめて勝手にツンデレっておられる。

「ツンデレミリア」
何となく言ってみたら予想よりも語呂がよかった。

「よく分からないけど馬鹿にされた気がする……」

「いい呼称じゃないか。しかしレミィ、今日は珍しく甘えてこないんだな」
いきなり親しげに名前を呼び、カップを置いて不思議そうに尋ねている。

「だってまだ紅茶飲んでるんだもん」
既に二人きりで甘えん坊モードに突入していた。

「飲み終わったら甘えるんですねわかります」

「御馳走様。ちょっと待っててね、絶対待っててね！」
いそいそと扉に鍵を掛けに行った。

鍵を掛けると吸血鬼の身体能力を活かし、両腕を広げて飛んできて抱きついてくる。

「骨がミシミシいつてる……」かなりの力で抱き締められているからか、骨が軋む音が聞こえてくる。

「いただきます」

食べる前の挨拶をして、がぶつと勢いよく首筋に噛みついてきた。

「うっ！ ……見た目幼女に血を吸われる俺のこんな姿、十代達には絶対見られたくない。首に力を入れたら牙抜けなくなったりして蚊じゃないんだから流石にないと思われる。」

「じゅる……ず……じゅ……」

久々の恭司の血だが、以前より格段に美味しくなっていて吸血が止められない。

クリア・マインドの境地に辿り着き、デュエリストとして成長したから血もさらにおいしくなっている。

吸血鬼からしたら、トニオの料理くらいおいしいのかもしれない。

「吸血されて快感に感じるのは普通よ、ってパチュリーに教えてもらってよかった。俺には特殊な性癖なんてないし」
腕でレミリアを抱え、吸血しやすいように支えている。

……
……
……

「お腹いっぱいになったら寝るとか子供すぎるだろ」K。 お腹もぽんぽんぽんぽん」

ベッドで眠るレミリアのお腹を撫で撫でしている。

「う……」
寝ながらもお腹いっぱいまで苦しそうにしている。

「うわー、カリスマ全開の時間が嘘みたい。おやすみ、レミィ」
ベッドに寝かせ、毎回フランにするように額にキスをして部屋から出ていった。

紅魔館内廊下

「手持ちに戦えるポケモンがない……」
目の前が一瞬真っ暗になり、壁に手をつけて耐えている。

レミリアが一人でいつもの二人分以上吸っていたから顔色も悪い。
永琳特製の増血剤を探してスーツのポケットを探っていると、ふわつと誰かに抱き締められた。
そうして気がつくといつのまにか紅魔館にある恭司の部屋のベッドに寝かされていた。

「咲夜が連れてきてくれたみたいだな……。今回はロリ回なのか、あの素敵なメイド服姿を全く見せてくれないから困る」
枕元にある水差しと、置かれている増血剤を身を起こして飲んでいく。

肩に座っていたはずのキヨちゃんは枕元に座らされていた。
妹紅に着せてみたいしメイド服貰えないかな、と考えてながら少し寝よつと目を閉じて意識を手放した。

数時間後

「おはよー」

目を開くとニコーツと満面の笑みを浮かべたフランのアップ。

「おー、フラン。相変わらず可愛いなー」

トトロのお腹に乗るメイちゃんみたいな感じでフランが乗っている。

「サマナーの匂いがしたから探してたんだよ？」

頬をふにふにと押しながら話している。

「で、見つけたと」

「うん。あのね、私ちょっとだけ力の制御が出来るようになったんだ」

それを教えたくて探し回っていたらしい。

寝めて寝めてという目で見てくるフランちゃんマジ天使。

「おー、偉いぞフラン。ぎゅー」

そんなフランの背に腕を回して抱き締めた。

「えへへ」

「だけど、そろそろ夜になるから帰らないといけないんだ。また今度遊びに来るから」

日も暮れ始めているので早く帰らないといけなかった。

「えーっ、久々に来たのにもう帰っちゃうの？」
やはりちよつとだけ不満らしく頬を膨らませている。

「またすぐ遊びに来るよ。だから頬を膨らませないの」
そのぷくーっとならませた頬をつついた。

「もう、約束よ？ ずっと、ずっと、ずーっと待ってたんだから」
今までなら数ヶ月程度はあつという間だったが、恭司が来なかったこの数ヶ月は相当長く感じていたようだった。

「ごめんごめん、ちよつと色々と仕事があつてさ。今度は新しいぬいぐるみも持つてくるから」

フランの部屋には今まで恭司が知り合つた者達のSDぬいぐるみがたくさん置いてある。

「分かればいいの。ね、帰る前に久々にあれやって？ おでこにチユツとするやつ」

こちらを期待した目で見ている。

パチュリー辺りに教わつたらしく、ある日を境に額にキスを要求してくるようになっていた。

最初は恥ずかしさからやんわりと断っていたが、目に涙が溜まり始めたフランを見て躊躇なく額にキスをした事が始まり。

それから可愛い妹分のお願いとして、毎回やっている。身内にはとことん甘い男だった。

「わかったよ。ほら、まずは上から退いてくれ」
フランを身体の上から退かし、ベッドに腰かけた。

「早く早く」

フランは目を閉じ、わくわくしながら待っている。

「……いかにいかに」

ちょっと悪戯で唇に直接してみようかという思いが過っていた。

フランの前髪をそっと上げ、額に口づけをした。

そして、もじもじするフランに別れを告げてゆっくりと紅魔館から出ていった。

帰り道

「タイミング的に美鈴じゃなくて違う妖精達が門番やってるとかないわー。咲夜もやっぱり出てこないし、出口まで案内してくれたのも小さい妖精メイドだったし」

朝起きて会った慧音と妹紅以外、幼い容姿の者にしか会っていない。

「あ、恭司ー」

暗くなり闇を纏わずに飛んでいたルーミアが突っ込んできた。

「まただ、もしかこれがベアード様のお力なのか」

またベアード様がどこかに居るんじゃないかと辺りを見回している。

「どうしたのー？」

独り言を呟いてキョロキョロしているから、心配そうに見ている。

「何でもないよ。ルーミアは散歩？」

隣に降りて付いてくるルーミアに尋ねていた。

「うん。最近は人間達がお菓子とかごはんもくれるから幸せ。恭司に言われた通りに人間に頼んでみてよかったー」
食べ物をくれないと貴方を食べる、頼むというよりも二択だった。

「あー……宵闇の妖怪は食べ物を渡せば見逃してくれるって噂はこれか」

「ねえ、途中まで一緒に行ってもいい？」
恭司の周りをくるくる回っている。

「いいよ。一人じゃ不安だったし、話し相手が欲しかったんだ」
そう言って二人で歩き始めた。

そんな二人を微笑ましいものを見る目でどこかから見守るベアード様だった。

午前、チルノと大妖精。

午後、レミリアにフラン。

夕方、ルーミア。

続く。

見た目小さい子ばかり（後書き）

ベアード様はみんなの事を見守っています。

ヴォルカザウルス強いわー。

二箱買って、一箱目からフリーザードン（笑）が出てきた時はかなり焦ったけど。

しかしスターターにウルトラでいるのにホープをスーパー枠にするとか本当に誰得すぎる。

他のまともなスーパーがドドドウォリアーしかないし。

訪ねてくる者達（前書き）

割と紳士。

いつか所有者に。

美人にはデレデレ。

訪ねてくる者達

人里

「大丈夫ですよ。話を聞く限りその青年は分け隔てな……きゃっ！
綺麗なグラデーシヨンの髪をした女性が鼠の耳を持った少女を連れ
て歩いていたが、話をしている足元の石に気がつかなかつたらしく
躓いて転びそうになっていた。

「聖！」

話をしていた鼠の耳を持った少女が慌てて止めようとするが間に合
わず。

「おっと、足元はちゃんと見ないと危ないですよ」
そこに偶々通りかかった我らの主人公が、その倒れかかった女性を
抱き止めて忠告をしていた。

十代と二人で背伸びをして買った、ちよっとお高いサングラスを装
備していて少し怪しい人にも見える。

「……え？ あ、はい。助けをいただいております」
ぎゅっと目を瞑っていた女性が目を開き、慌てて離れて礼をしてい
る。

「いえ、今後はお気をつけて」
好青年の皮を被ってそう言い、歩き去っていった。

「ナズーリン、良い人でしたね」

「確かになかなかの好青年だったね」

去っていく背を見送りながら二人はしみじみと呟いていた。

その背が見えなくなり二人は本来の目的地に向かい始めた。

慧音宅

「わざわざ来てもらったのにすまない。恭司はついさっき出掛けてしまったんだ。白いワイシャツにジーンズ、サングラスをかけた今日は少し怪しい出で立ちの男なんだが」

極自然に居間ではなく恭司の部屋に案内し、慧音が応対している。

「あ

「さっきの青年がお目当ての人物だ」

出されたお茶とお茶菓子を戴きながら二人は出会っていた事に気がついた。

「まあ、すぐに戻ると思うから待っていてくれ。何でも友人を連れてくると朝から騒いでいたからな」

慧音も一緒になってお茶を飲みながら会話を続けている。

……

……

…

「不思議な男だよ。スキマ妖怪に月のお姫様、赤い悪魔に冥界の亡

霊、天界の不良天人に山の神々、地霊殿の主と各勢力のトップと言
える者達といつのまにか親しくなっているんだ」

ある意味バランスを保つ存在としてはちょうどいいのかもしれない。

「是非話をしてみたいですね」

妖怪だろうが何だろうが分け隔てなく接する男に興味津々だった。

「ところであの壁に飾られている六枚の札はいつたい」

部屋を見回していた少女が気になった事を聞いている。

「ん？ あれは彼曰く、神と邪神らしい。だからなのか邪神の方は
別のケースに入れて博麗の巫女と守矢の現人神から貰った札を張り
付けてあるんだ」

どれだけビビっているのか知らないが嚴重に封印されており、慧音
達にも触らないようにと忠告してある。

「……ダメだどちらも読めない言語で書かれてる」

鼠耳の少女が立ち上がり、近くで見ているが日本語ではないので読
めなかった。

「三幻神は左からオシリスの天空竜、ラーの翼神竜、オベリスクの
巨神兵。邪神は左からレイザー、アバター、ドレッド・ルート。
三幻神は所有者と認められていなかったら恐ろしい事になるし、邪
神は強大な力に飲まれてしまう可能性があるから使えないんだよ。
ラーは古代神官文字が読めないからどうしようもないんだけどね。
そしてただいま、慧音」

サングラスの代わりにブシドーのような仮面を付けた恭司が、説明
しながら入ってきた。

「おかえり。まずその仮面が何なのか聞きたいんだが」

奇行には慣れたはずの慧音だが、お客さんを前にして思わず頭を抱えている。

「あっ、先程はありがとう……ございました……？」
仮面で誰だか分からず困惑しながらも改めて礼を言っている。

「この仮面はやっぱり今日はダメってドタキャンしてきた霖乃助から貰ってきたんだ。貴女は先程の……慧音のお友達の方でしたか」
そう言いながら仮面を外し、慧音の隣にクッションを置いて座った。

「今日、私達は貴方に会いに来たんです」
そう言い、真っ直ぐ目を見つめている。

「俺って単純だからそうストレートに言われたり、見つめられると簡単に好きになっ……い、痛いっ！」
見つめられて頬を赤くして照れる、物凄く単純で扱いやすい男だった。

慧音がニコニコしながら脇腹をツネっているらしく、その痛さに身悶えしている。

そんな二人の様子を見て目の前の二人はクスクスと笑っていた。

「ふふふ、面白い方ですね」

「確かに。ただ能力は油断できない物だったはず」

「一応自己紹介を……俺は鉄恭司、見ての通りただの人間です」
慧音が手を離してからようやく自己紹介を始めた。

「私は聖白蓮といいます」

「私はナズーリン」

「恭司は女こましという妖怪なんじゃないかと常々思っている」
慧音がからかうように呟いた。

「聖さんにナズーリンさん。ナズーリンさん、ちょっと試しにハハッ！て笑ってみ……やっぱり何でもないです」

次元を越えた何かの圧力を感じたらしく、ビクッと身体を震わせて少し青冷めた顔で周囲を見回している。

「それでまず鉄さんにお聞きしたいのは……」

一時間後

後は若い一人と聖で、と言い残してナズーリンと慧音は部屋から去っていた。

別室で話し合っているのか時折り笑い声が聞こえてきたりする。

「聖さんも苦労されてきたんですね。若輩者がこんな事を言うのはあれですが、何かあれば俺の力もお貸ししますよ」

互いについて話をしたりと、こちらも仲良くなっていた。

「ありがとうございます。鉄さんは思っていたよりもずっといい人ですね」

どう思われていたのか分からないが、ニコニコしながら言われてしまった。

さらに二時間後

「いや、あの、聖さん流石にこれは……」

「私にも誰かに甘えたい時があると気づかせた責任を取ってくださいね。鉄さんがそう言ったんですから」

何があつたのかは分からないが白蓮が隣に座っており、ニコニコしながら手をぎゅっと握っている。

「精霊界であいつと戦った時の数倍緊張する……」
出会ってまだ数時間の女性に手をぎゅっと握られ、緊張して身体がガチガチになっている。

皆に頼られて普段から気を張っているだろう白蓮に対し、それなら今日くらい俺に甘えてみますか？と冗談半分に言ってみた結果がこれ。

最初は白蓮も遠慮して違う話をしていたが、途中で何かを考え始めて納得した笑顔になり今に到る。

精神的に甘えられるのかと思ったら肉体的に甘えられていたでござるの巻。

「惚れてまうやろー」

顔を背け、聞こえないくらいの声で呟いている。

「？」

そんな恭司の様子を白蓮は不思議そうに見ていた。

……
……
……

慧音の部屋

「聖はいつも誰かに頼られているから、たまには誰かに頼ってもらいたくてね」

「ほう、だから恭司の元に連れてきたと」

慧音とナズーリンはお茶を飲みながら話している。

「前々から彼については探っていたから人柄も分かっていたし、何よりも私達を怖がらない」

ただの美人に弱い女好きな可能性が高いです。

「アイツは基本的に女性と子供には優しい男だ」

その優しさでいつか身を滅ぼす可能性もあり、慧音はそれが心配だった。

「それを聞いて安心した。絆が大好きな彼なら私達と仲良くしても
らえそうだよ」

ははっと笑い、羊羹を食べている。

……
……
……

恭司の部屋

「話を聞いてると聖さんの仲間の方々は面白そうですねー。一度会ってみたいですよ」

「是非一度来てください。きっとみんな歓迎してくれますから」
手をぎゅっと握ったまま嬉しそうに微笑んでいる。

一応今回の二人以外の命蓮寺の皆はそれぞれ恭司と知り合っている。それぞれ困っている所を助けたり、無くした大切な物を見つけて感謝されたりと、何故か命蓮寺の人達相手にはギャルゲーの主人公的行動を取っていた。

「それじゃあ、今度都合のいい日に伺いますよ。今からドキドキします」

話を聞いてもその人達の姿は分からないから色々緊張している。

「緊張しなくても大丈夫ですよ」

「いや、でも多分そのお寺の前を三十分くらいはつろつろすると思います。初めて行く場所ってどうしても……」

大体重要な場所は女の子だらけで、毎回何かしらのハプニングに巻き込まれるから少し弱気。

「それなら私が迎えに来ます。一緒に行けば平気ですよね？」

「え？ あ、はい」

有無を言わせぬ白蓮の空気に思わず頷いていた。

約一年経ってからの出会い。

甘え甘えられる関係になりそうな二人。

神と邪神は所有者と認めてくれているのかどうか。

続く。

訪ねてくる者達（後書き）

デュエル？

なにそれおいしいの？

ばらばらな店で四箱買った友人が全部フリーザードン出して俺の腹筋がやばい。

ヴォルカはシングルで買えばよかったのに。

気分はゲームの主人公（前書き）

涎。

濃い面々。

カオス。

気分はゲームの主人公

朝

「……どうせなら衣玖さんが潜り込んで来てくれたらいいのに。体温が暑いし、寝巻きに涎とか勘弁してくれ」
身体の重みと暑さと胸元の冷たさに目を覚ました。

「くかー……」

そつと捲ると天子がだらしない寝顔をこれでもかと披露している。

「む、絶壁かと思ったが少しはあるな。でもちっばいである事に変わりありませんからー、残念」

大は小を兼ねる派の人間であるらしいが、少しにやけている。

「ぐー……」

「桃食つて丈夫な身体なのに柔らかい柔らかい」
垂れ流し状態の涎を避けながら頬をぶにぶにしている。

「んう……」

つんつんされて嫌そうに顔を背けた。

「……涎が冷えて気持ち悪いけど、やっぱりまだ眠い」
天子いじりに飽きたのか、目を閉じて夢の世界に羽ばたいていった。

数時間後

「空気を読んで起こしにきましたよ。総領娘様、鉄さん」
衣玖さんは潜り込んでいるのを知っているらしく、二人を起こしに
来ていた。

「うーん……後3600秒……」

「ぐう……」

抱き枕代わりに天子を抱き締めて眠っており、天子も抱き締め返し
ている。

「本当にお二人は仲良しですね。でも鉄さん、私以外に見つかる
大変な事になりますよ」

「！……あれ、衣玖さん？」

耳元で囁かれて一気に意識が覚醒して立ち上がっている。

「昨日私達が泊まったの忘れてます？」

「あ……で、このセミはいつ離れるんだろう。この体勢は俗に言
うだいしゆきホールドってやつなんじゃないか。これ完全に……何
でもない」

天子が両手両足でがっしりと抱きついて離れようとせず、そのまま
だと重いからと太股の辺りに手を添えて持ち上げている。

「だいしゆきホールド？」

聞きなれない単語に衣玖さんが小首を傾げている。

「ええ。衣玖さん、貴女からなら大歓迎です」

思わず本音が出てしまった。

その後試行錯誤したがどうやっても離れないので、パジャマ姿で天子を装備したまま部屋から出ていった。

居間

「……………」

「……………」

慧音と遭遇した。

互いに真意を探ろうと見つめ続けている。

この状態をどう誤魔化そうかと真剣に見つめていると、慧音の頬が僅かに赤くなり目をそらされた。

「そ、そんなに見つめないでくれ……………」

久々に長時間見つめられて照れ、もじもじしている。

「やばい慧音がスーパー可愛い。抱き締めたいなあ」

これさえなければ…………と天子を剥がそうとするがガツチリと抱きついていて剥がれない。

「その天人、朝いないと思ったら恭司の所に行っていたのか……………」
天子がくっついていているのによやく気づき、その身体を掴んで引っ張り始めた。

「いててててて！」

慧音が引っ張れば引っ張るほど身体に力を入れて離れようとしなない。

「くっ、厄介な奴だ。そこは私の指定席に……」
ぶつぶつ言いながら引つ張り続けている。

「ほ、骨がミシミシって……ぐへえっ！」
天子のホールドも強くなり呼吸も苦しくなっていた。

……

……

…

「衣玖さんが居なかつたらマジで死んでたかもしれん」
まだ天子はくつついたままだが、慧音を諫めてくれたらしい。

「いえいえ」

「とにかくそいつを起こさないと恭司も着替えられないだろう」
落ち着いた慧音が腕を組んで悩み始めた。

「今日は休みだし、別にこのままでいいんじゃない？ 昨日たくさん桃貰ったし、そのお礼的な意味で」
昨日はお泊まりするからと桃を頂いており、その桃でピーチパイを作って妹紅を含めた五人で堪能していた。

「……まあ、恭司が許すなら私はいいいい」
物凄く嫌々ながらも納得している。

「ご主人様あ……」
むにゃむにゃ言っていたのに、突然にへらと笑って慧音には秘密な言葉を紡いでいた。

「ちよっ！」

「ほっ……？」

慧音がその言葉に反応してガシッと肩を掴み、強制的に着席させた。

……

……

…

「……誤解が解けてよかったです」

正座をしてくつついたままの天子を抱き締めて震えている。

慧音はまだ少し怒りながら台所で朝食を作っており、時折恭司をジロツと睨んでいた。

天子を抱き締めているのを見る度に視線がキツくなっているのには気がついていない。

「ふふふ、鉄さんも大変ですね」

衣玖さんがスツと近づいてきて隣に着席した。

「衣玖さんも見てないで助けてくださいよ……」

助けてもらえず、ニコニコしながら見ていた事に文句を言っている。

「空気を読んでお二人だけに話し合ってもらいました。しかし凄惨な修羅場でしたね」

「お陰様で朝食後に庭でデュエルです。それともう起きてるの分かっているんだぞ、てんこちゃん」

そう言くと天子の脇腹をくすぐり始めた。

「……くふふふっ！ あはははっ！ 脇腹はらめええっ！」
くすぐりに弱いらしく、耐えられずに恭司の身体からキャストオフしている。

「やつと離れたな。……よし、着替えてくる」
いつもの癖でパジャマの上だけその場で脱ぎ、洗濯物置き場に放り投げて部屋に戻っていった。

慧音は自然に振り返り、鍛えられた肉体を見て頬を朱に染めていた。衣玖さんは少し固まり、何を見たのか理解した瞬間にボツ！と顔を真っ赤にしていた。
天子はあれが私のご主人様……、と呟きながら昨日のプロレスごっこで掛けられた四の字固めを思い出していた。

……

……

…

「最近俺ばっかり作ってたから慧音の手料理は久々だね。胸が熱くなるな」

着替え終わって戻って来ると、いつものように慧音の隣に着席している。

女性の手料理なら何でも喜ぶが、料理に関してはどうすればよくなるかをちゃんと指摘もする。

どんなに不味い食い物も、やがて血となり肉となる。

と、呟いてどんな仕上がりでもしっかり全部食べる漢。

輝夜が作った焦げ放題でしょっぱい卵焼きも、勘違いから砂糖で握られたおにぎりも平らげている。

「私より恭司が作る方がおいしい物が出来ると思うんだが」
今日は妹紅が来ないので、四人分のおかずと味噌汁を並べている。

「愛情たくさん入れてるからおいしいんだろ。それと何で衣玖さんは俺を見て赤くなってんの？ ……そうか、モテる男は辛いぜ」
不思議そうに顔を赤くしている衣玖さんを見ていたが、ハッ！として勘違いしていた。

いきなり身近な男が上半身裸になったからドキドキしているだけで別に惚れたり好きになったりした訳ではない。

衣玖さんフラグは空気を読まずに畳み掛けるように口説かないとま
ず立たない。

天子はもういつ専用ルートに突入してもおかしくないのでフラ
グが立っており、ここまで来ると逆に恭司が攻略される側になっ
てる気もするが。

「ほら、馬鹿な事を言っ
てないで茶碗を渡すんだ」
慧音は呆れながらもご飯をよそっている。

…
…
…

庭

「さて、デュエルの時間だな」
慧音が嬉しそうにデュエルディスクをつけている。

「あつ、しまった」
デッキをセットしながら慧音のデッキを思い出している。

デュエルディスクにセットしたデッキじゃ相性が悪く、下手したら何も出来ない。

「恭司が負けたら明日は一日私に付き合ってもらおう約束だったな」

「そんな約束したっけ……？」
最近スキンシップ過多でいつか理性を振り切ってしまうんじゃないかと不安になっている。

「あれが赤き竜の力を手にした者よ」
天子が腕を組んで二人のデュエルを観戦しようとしている。

「鉄さんの傍は凄く居心地が良いですね」
のほほんと眺めていた。

「デュエル！」
「俺の先行、ドロー！ ……手札からスクラップ・ビーストを召喚！
そしてカードを二枚伏せてターンエンド！」
初手を見て安心し、ささつと終わらせている。

ATK1600

「私のターン、ドロー。手札から神獣王バルバロスを生け贄なしで召喚。ただし生け贄なしで召喚した事により、バルバロスの攻撃力は1900になる。スクラップ・ビーストを攻撃だ、トルネード・シエイパー！」
盾と槍を持った従属神の王バルバロスが召喚され、ビーストに襲いかかっている。

ATK1900

「まだだ」

まだ伏せを使うには早いと考え、少しのダメージを受けてビーストを破壊させるつもりだった。

「手札から速攻魔法、禁じられた聖杯を発動。エンドフェイズ時までバルバロスの効果を無効にし、攻撃力を400ポイントアップ」
しかし、無慈悲にも慧音は最初からクライマックス。

ATK1900 ATK3400

「ちよっ……うあああっ!!」

いきなり攻撃力が増大し、ビーストを貫いた槍が恭司にまで突き刺さっている。

LP4000 LP2200

「カードを二枚伏せてターンエンドだ。ふふふ、強力なシンクロモ

ンスターも今回は私の掌の上で踊る事になりそうだな」

「慌てるな俺、打開策はある。俺のターン、ドロー！ よし、手札からスクラップ・キマイラを召喚！」

お得意のスクラップ・ドラゴンに繋げようとキマイラを通常召喚しているが、そう簡単に行く相手ではない。

ATK1700

「永續罨発動、スキルドレイン。LPを1000支払い、場に存在する全てのモンスターの効果が無効にさせてもらう」
バルバロスを使った時点で警戒すべきカードの存在を慧音が使用している。

LP4000 LP3000

「うえっ、マジかよ！ …… ターンエンド」
伏せているのが今の状態じゃ微妙なカード故に終わらせる事しか出来なかった。

「私のターン、ドロー。可変機獣ガンナードラゴンを生け贄なしで召喚。本来なら攻守が半分になるが、スキルドレインの効果でその効果も無効になる」
一気に最上級モンスターを二体も楽に揃えられてしまった。

ATK1400 ATK2800

「スキドレとか地味にシンクロ対策にもなってる……」
スキドレを使われ、どうしようもなくなっている。

「ずっと傍で見ていたんだ、恭司が墓地を使用してシンクロモンスターへ呼ぶのは分かっている。墓地を封じるか、効果自体を無効にしてみればいい。ガンナードラゴンでスクラップ・キマイラを攻撃！」

四つの砲塔がキマイラに向き、一斉射撃で軽く消し飛ばした。

「うっ！！」

吹き飛んだキマイラの破片が直撃している。

LP2200 LP1100

「恭司、これで最後だ。行け、神獣王バルバロス！ トルネード・シエイパー！」
前方に向かって跳ね上がり、急降下して手にした槍を突き刺した。

「うわああああっ！……！」
思った以上の衝撃に吹き飛ばされている。

LP1100 LP0

「うぐぐ……」

予想通り何も出来ずに瞬殺され、悔しそうに座り込んでいた。

「ふふふ、私の勝ちだな」
ぱたぱたと嬉しそうに駆け寄って手を差し出し、立たせている。

「あれは私でも勝てないかもしれないわね……。スキルドレインを
どうにか除去出来ないと何も出来なくなるデッキが多いわ」

「あんな戦い方もあるんですね。鉄さん、お疲れ様です」
歩いてきた恭司に労いの言葉をかけている。

「いや、疲れる前に終わっちゃったんで……」
一方的な展開で何も出来ず、しょんぼりしていた。

「それじゃあ、早く行きましょ！今日は私に一日付き合っ予定だ
ったわよね！」

頂垂れた恭司の腕を掴み、天子がぐいぐい引っ張っていた。

「なら衣玖さんも」
天子と二人きりになると色々大変だからか、逃がすまいと衣玖さん
の腕を掴んで一緒に家から出ていった。

慧音はそんな三人を笑顔で見送り、明日の準備と部屋に戻って
いた。

……

…

里

「こんな濃い連中の輪の中にいられるか！俺は家に帰らせてもらう！……あばばばば！」

パニックになった恭司を衣玖さんが軽く痺れさせていた。

「恭司さんはツンデレがデフォ装備なんですよ」

早苗はそんな事を言いながらニコニコして痺れた姿を見ている。

「恭司は紫様と一緒にいると四倍くらい厄介になるのが困りものだ」
藍様はやれやれって空気を出しながらも、会えた事に嬉しそうな顔をしていた。

「恭司が一番濃いのによく言うよね」

既に慣れた妹紅は当然のように紛れ込んでいる。

「恭司さん！恭司さん！」

椀は尻尾をぶんぶん振りながら、痺れたショックから抜け出せない恭司に抱きついて頬をぺろぺろしていた。

「うわぁ……。恭司の知り合いつてみんな濃いわ」

「そう考えると総領嬢様もその中に入ってますよね」
その中には衣玖さんも入ってます。

カフェ

「俺はアイスコーヒー、ブラックで。彼女達のは少ししてからでいいんで……」

コーヒーに関しては砂糖もミルクもいらなく、オーダーを取

りに来たウェイターに伝えている。

七人で入れる店を探した結果、最近里の外れに出来た、外来人が開いたカフェになったようだ。

そして物珍しそうにメニューを見ている六人を尻目に自分だけ先に注文していた。

……

……

…

「ああ、やっぱりいいな。こういうのんびりとした時間って
アイスコーヒーを片手にぼんやりと外を眺めている。」

皆それぞれ注文した物を食べたり飲んだりしている。
香霖堂で購入してきたのか、蓄音機から流れるクラシックが恭司の心を落ち着かせていた。

ただ六人も女性が集まれば話の花も咲くようで……

「そこで私は恭司にこう言ってやったんだ。それは私のおいなりさんだ！と」

衣玖さんと早苗に力説する藍様はとても可愛らしい。

以前作ったおいなりさんが相当好みだったらしく、最後の一個を食べようとした恭司に言ったようだ。

「おいなりさん？ ……それは私のおいなりさんです！」

しかし早苗は何を勘違いしたのか手をにぎにぎしながらエキサイト

していた。

「早苗が何を想像したのか分かる俺が嫌だ……」

「ふふつ、以心伝心ですね！」

きゃっ！と可愛らしく振る舞っている。

「でも、顔をぺろぺろすると嫌がるんです……」

「内心かなり喜んでると思うから落ち込まなくていいって。基本的に恭司はHENTAIだから」

妹紅は椀の悩み相談を受け、的確にアドバイスをしていた。

「みんなが仲良くしてくれて助かった」

アイスコーヒーを飲みながら楽しそうな六人を見て呟いた。

早苗、藍様、衣玖さんと椀、妹紅、天子のグループみたいになっている。

話題の中心にいるのにハブられたような気持ちになっていた。

「はい、恭司さん。あーん」

そんな恭司に気がついたのが、早苗が自分のケーキで大胆な行動に出ている。

「あーん……しまった」

守矢神社に遊びに行くとしつこいくらいやられて慣れており、公衆の面前でも普通に受け入れてしまっていた。

みんながじーっと見ているのに気がつき、目線を外にそらした。早苗は勝ち誇った顔で藍様と椀を見ている。

「くっ……」

「うぐっ……」

忌々しいとばかりに二人は早苗を睨み付けていた。

「ふっ、私が勝ち組ですね。お二人には出来ないでしょうし」
そう言い切ってケーキを食べ始めた。

「……でも私は毎回ぺろぺろしてます」

「……まあ、私も三ヶ月近く一緒に生活していたからな」

「アーアーキコエナイ」

恭司は耳を塞いで三人の会話を聞かないようにしている。

……

……

…

里

「……やっぱり濃い面子だよなあ」

支払いを終え喫茶店から出て、楽しくおしゃべりをしながら待っている六人を見て呟いた。

皆がその集団を不思議そうな顔で避けて通り、恭司を見て納得する

くらいに濃かった。

最近里では何が起きててもその中心が恭司なら仕方ないという認識がなされていたりする。

二日に一度は早苗にさらわれていたり、いきなりスキマに飲み込まれたり、文に面白おかしく記事にされていたりすれば当然なのかもしれない。

「あ、来た来た。これからみんなどこに行こうか話してたのよ。で、暑いから湖にでも行つて涼まないかって」

天子がそう言つて手をぐいぐい引っ張ってくる。

「それはいいなあ。だが俺はまだ完全に飛べないから」

あれから何カ月も経っているのに未だ一人では飛べず、その劣等感から暗くなつてしまった。

「任せなさい！ ごしゅ……恭司一人運ぶくらい楽勝よ！」

そう言つて恭司の両手を掴んで浮き上がり始めた。

「いやいや、待って！ 俺は安定感のある藍か衣玖さんが……いやああああ……！」

天子に腕だけ掴まれ、宙ぶらりんのままかなりの高度まで浮かび上がられてタマヒュンしていた。

こんな夏の楽しい一日。

続く。

気分はゲームの主人公（後書き）

スキドレバルバとかマジやめてほしい。

愚鈍の斧つけたバルバも怖い。

あれからORCS16パックを二店舗で買い足したら、ゼンマイテ
イが二枚当たって俺歡喜。

そのままシングル扱ってる店行ってマイティの三枚目を購入。

土曜のDBに入ってるゼンマイオーもイラストが楽しみ。

60万PV特別編 Fの恋人／十年分の想い（前書き）

とりあえず特別編。

デルタプラス格好いいなあ。

60万PV特別編 Fの恋人／十年分の想い

部屋

「ふ、二人共俺の腕が痛いよ？ 喧嘩はダメだつて……」

「リンちゃんは昨日ずっと一緒だったんだからパパから離れて！」

「ヴィヴィオちゃんこそ恭ちゃんから離れてください！」

恭司はお子様二人に腕を引っ張られていた。

バチバチと火花でも飛び散っているんじゃないかというくらい、二人は睨みあっている。

「ヴィヴィオがすっかりファザコンになってるね。大きくなったらパパのお嫁さんになるって本気かも」

「なのは、でもそれは仕方ないよ。ヴィヴィオを助けた王子様なんだから」

のほほんとお茶を飲みながら三人を観察している。

聖王化したヴィヴィオと互角に闘い、かなりの荒業でヴィヴィオを救いだした恭司。

黒髪の王子様やらと世間を賑わせたのもいい思い出。

ただの自宅警備員だと思つて疎ましがっていた者達が掌を返したりと色々と大変だったようだが。

「今日はヴィヴィオとパパと慧音ママでお出掛けするの！」

「ダメです！ 恭ちゃんは私と遊んでくれるんです！」

普段は仲良しな二人だが、最近はよく喧嘩するようになっていた。

仲が悪い訳ではなく、ただ恭司を取り合っているだけで微笑ましい。渦中の恭司はどちらも大切だから結局は三人で一緒に何かをする事になる訳だが。

「ふふふ、ヴィヴィオは親子三人で出掛けたいと言っているのか」
正妻な慧音はもう嬉しくて仕方がないようで、美しさ三割増しで微笑んでいた。

「うー、勝者の余裕なの」
なのはには慧音が眩しく見えている。

「でも私達だって恭司との絆については負けてないはずだよ」
身も心も、と呟いて恥ずかしくなったのかフェイトは赤くなっていた。

それを聞いていたなのはも赤くなってモジモジしており、その様子を見た慧音は初々しいなとニヤニヤしていた。

「パパ！」

「恭ちゃん！」

二人共抱きついて恭司を見上げている。

「ま、まあまあ」
幼女で修羅場を絶賛体験中。

「やっぱり小さくても女の子なんだね」
騒がしい三人を見ながら呟いている。

「最初に会った時に一目惚れをした私が一番恭司の事を好きな期間が長いと思う」

闇の書介入事件の時だからだから十年近くも忘れずにいたらしい。

防衛プログラムを前にして、穏やかな心を持ちながら激しい怒りでメガトン魔導キャノンをぶっ放す姿に一目惚れ。
将来をとて心配されそうな一目惚れだった。

「フェイト、それは聞き捨てならないな。私だってこの二年思い続けてようやく成就したんだ」
慧音は私が一番だと主張していた。

「パパは大きくなったらヴィヴィオをお嫁さんにしてくれるって言ったもん！」

「恭ちゃんはラインの旦那様になるんです！」

「何このロリコンのレッテルを張られそうな修羅場」
バチバチと火花が飛び散り、抱きつく力も強くなっている。

「私はこの前の事件の時に色々と話していく内に少しずつ徐々にだつたけど、フェイトちゃんは闇の書事件の時からだよ」

「うん。あれが恋なんだって気づいたのは恭司が帰っていく直前だったから、大体十年くらいかな。慧音には負ける気がしないよ」
数週間だけ一緒に居た存在を忘れる事が出来ず、誰にも言えないま心に秘めていたらしい。

「もう二度と会えないだろう存在を思い続けたフェイトに私は敬意を表する」
十年間も思い続けたと聞かされれば慧音も敗けを認めざるをえなかった。

「べーっ！」

「いーっ！」

「子供か！……子供だった」
可愛い争いをする二人を抱き締めつつ言っている。

「それを初めて聞いた時は私もはやてちゃんもびっくりしたよ。『あんな一人サーカスみたいな兄ちゃんが好きなん！？ 確かにリンフォースを救ってくれた恩人やけど……。リンフォースもいい青年ですって褒める事しかせえへんし』ってはやてちゃん言ったね。それに、それまで色恋沙汰に興味を示さなかったフェイトちゃんがいきなりそんな事言うんだもん。私も最初はすっかり話とかしてなかったから、どこがいいのか分からなかったけどね」
過去の知り合い程度で付き合いが浅い段階じゃ仕方がない。

「私は逆に二人に驚かれた事に驚いたよ。母さん達に相談したらやっぱりって言われたから、なのは達も気づいてるんだと思ってた」
身内にはバレバレだったようで、根掘り葉掘り聞かれて散々からかわれたらしい。

慧音は昼御飯の仕込みに行っていないなくなっている。

「ヴィヴィオはパパからチューしてもらった事あるもんねー」

「リインは恭ちゃんが寝ている間に何回も唇にチューしてますよー」
ぎゅっとされてふにゃふにゃになりながらも張り合っている。

「ほっぺなほっぺ。リイン、今日からお前はリインフォースと寝てもらう」

リインフォース？とヴィヴィオと一緒に寝ているらしい。

「でもフェイトちゃんのアプローチの仕方は凄かったよね。恭司さんのベッドに潜り込んだり、あーんってやったり」

「恭司が闇討ちにあっただって怒気を纏って帰ってきた時はびっくりした。洋服をボロボロにして帰ってきたから、一緒に服を買いに行けて嬉しかったけど」

コーディネートを任せただからか、向こうに居る間は黒を中心とした服装になっていた。

一張羅はボロボロになっていたが本人に怪我はなく、代わりに何人かの男性局員の顔面がじゃがいもみたいになっていた。

正々堂々と立ち向かって来るならあそこまではやらなかったと本人は言っている。

「恭司さんの髪をカットしてもらって帰って来たのを今でも覚えてるよ。髪型と服装が似合いすぎて、私含めてみんなで呆然とした顔で見ちゃったし」

何よりフェイトと腕を組んで帰ってきたのが一番のびっくりポイント。

お金を出してもらったから拒否なんて出来るわけがなく、ただ流るままに腕を組んでいた。

その場に偶々居たWシヤマルにWリインフォースの頬が引きつったのは言うまでもない。

「面白そうな話をしているじゃないか。二人共仲直りして遊びに行つたし、俺も混ぜてもらおうか」

……

……

…

「……えっ、マジで？ それは初耳だ。こいつ何でこんなにベタベタしてくるんだろう、って当時は思ってたけど。特に朝起きたら隣で寝てた時は心臓が止まるかと思つたし」

寝起きドツキリと称し、凸ってきたシグナムやリインフォースが修羅となった日である。

「私はあの闇討ちの真相教えてほしいな」

「私もそれ気になるよ。恭司さんの服だけボロボロだったし」
何で傷ひとつなかったのかが不思議で仕方ないらしい。

「ああ、あれか。あの日はちょっと遠くまで散歩してたら、いきなり背後からバインドくらったんだよ。その後何人かに囲まれてデバイスを向けられたんだ。仮面つけてたし、人通りも少なかったから誰にもバレないと思ったんだろうな」

フェイトやなのはに好意を寄せる者達がちょっと脅してやろうと仕掛けた事。

「えっ……それって絶対何かの犯罪集団だよ！ 何で言わなかったの！」

そんな奴等逮捕してやったのに、とフェイトの顔が般若のような恐ろしい表情になっていた。

「フェイトちゃん、本当に変わったよね。恋は人を変えるんだって今なら分かる気がする」

「いや、だって俺がフルボッコにしちゃったし……。過剰防衛で逮捕されなくなかったんだ」

ふいっと顔を背けて呟いている。

バインドをブレイクしてから襲撃者の手足の間接を外し、身動きをとれない状態から仮面ごと顔面をボコボコにして元の顔が分からなくなっていくらしいにしていた。

動けないのにさらに絶対魔法禁止区域で魔法が一切使えない状況にした鬼畜。

美しい魔闘家鈴木をボッコボコにした幻海をイメージしてもらえると分かりやすいかもしれない。

「……あ」
顔面ボツコボコな男性局員達を思い出したらしい。

「もうこの話はやめよう、過ぎた事だしさ。それよりも俺はなのとはティアナがどんな話をしていたのかが気になるんだが」
仲良くなった二人に近づくと慌てて会話を中断したりするから気になつて仕方がなかつた模様。

「えっと、ひ・み・つ」
人差し指を唇にあてながらウインクしている。

「なのはが私の目の前で恭司を誘惑している件について」

「いや、これは誘惑じゃないだろ。ティアナに聞いても、プイってそっぽ向いて教えてくれなかつたんだよなあ。詳しく聞くこうとするとすぐにスバルに絡まれて、お菓子やらアイスやらを催促されてうやむやにされるし」
なのはに秘密と言われ、さらに気になつて仕方なくなっている。

エリオとスバルは自作のお菓子や料理をしつかりと食べてくれるから最初から仲良くなつていた。

キヤロとはドラゴン繋がりですぐに仲良くなれたのが幸い。
ティアナは最初ツンツンしていて接しにくかつたが、撃墜未遂事件後に一気にデレ期が来て仲良くなっている。

……

……

…

「で、結局フェイトが俺に一目惚れだったとか信じられないわけだが。そんな二度と起きない奇跡みたいな事」
杖を含めると既に二度奇跡が起こった事になる。

「あの虹のヴェールを纏ってメガトン魔導キャノンを乱射してる姿に一目惚れしちゃってたみたいなんだ。『無駄な事を……今楽にしてやる。ハーツハツハツハツ！』って防衛プログラムを一方的に攻撃して高笑いしてる所が素敵だった……」
頬に手をあて、うつとりしながら語っている。

「マジかよ。リンディさんがドン引きしてたって聞いて凹んでたんだがテンション上がったよ」

「フェイトちゃん……」
ちよっと予想外な所で一目惚れをしていた事になのは少し引いていた。

「でもその後が大変だったよね。闇の書を直す為のプログラムを組んだり、直したらはやてのラインフォースも恭司のラインフォースみたいになっちゃったりして」

「どつちがどつちのラインフォースか分からなくなったりもしたよな。左右から手を引っ張られて泣きそうになったのを嫌でも覚えてる」
消滅や暴走がなくなって楽しい毎日だったらしく、向こうのラインフォースも自重しなかったらしい。

「えっ。恭司さん、涙目じゃなくて普通に泣いてたよ？」

「うん。『痛い痛い痛い痛い！ 謝るからもうやめてー！』って見てるこっちが痛くなるくらい引つ張られて泣いてた」
二人はすっかり覚えていたようだ。

大人の男が泣くというインパクトのある光景は忘れられなかったらしい。

それを見てハアハアしてた恭司サイドのシグナムとかシャマルとかもいたり。

「泣いてない、泣いてなかったもんね」
恥ずかしくなり顔が赤くなっていた。

二人が来てからこんな感じの楽しい日々が続いている。

おしまい。

60万PV特別編 Fの恋人／十年分の想い（後書き）

向こうの世界に居た時から結構はっちゃけてたフェイトさん。
恭司は闇討ちされても仕方ない。

DL版買ってずっとGEBやってました。

カリギュラって破滅の魔王ガーランドルフに色が似てる気がする。

今回のストラクはパーツ取り用って感じだし、三箱買ってまともなデッキは組めないな。

天使、暗黒界がおかしかったのかもしれないけど。

DTはジェムナイトマスター・ダイヤが早く欲しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7266m/>

鉄の調律者

2011年12月16日00時51分発行